マニア必読!／あんな人、こんな人が語る日本総合格闘技史&活字論

ガチ! MAGAZINE

INFOREST MOOK Vol.2



トップアスリート達の選択

吉田秀彦
秋山成勲
滝本誠

カラム・イブラヒム
宮田和幸／中尾芳広
ルーロン・ガードナー

懐刀ファブリシオ・ベウドゥムが語る
「ミルコ・クロコップ論」

【あの人はいま】
ジェイソン・デルーシア／パトリック・スミス
オレッグ・タクタロフ／ウゴ・デュアルチ／ジョエル・ギャルソン

下からのパウンド
ヨアキム・ハンセン

すばらしき極め技の世界
所 英男

俺のパンクラス的人生
伊藤崇文

新興総合格闘技国家
韓国、スウェーデン、カナダ

ひょっとして世界最強アカデミー
ノヴァウニオンの歴史

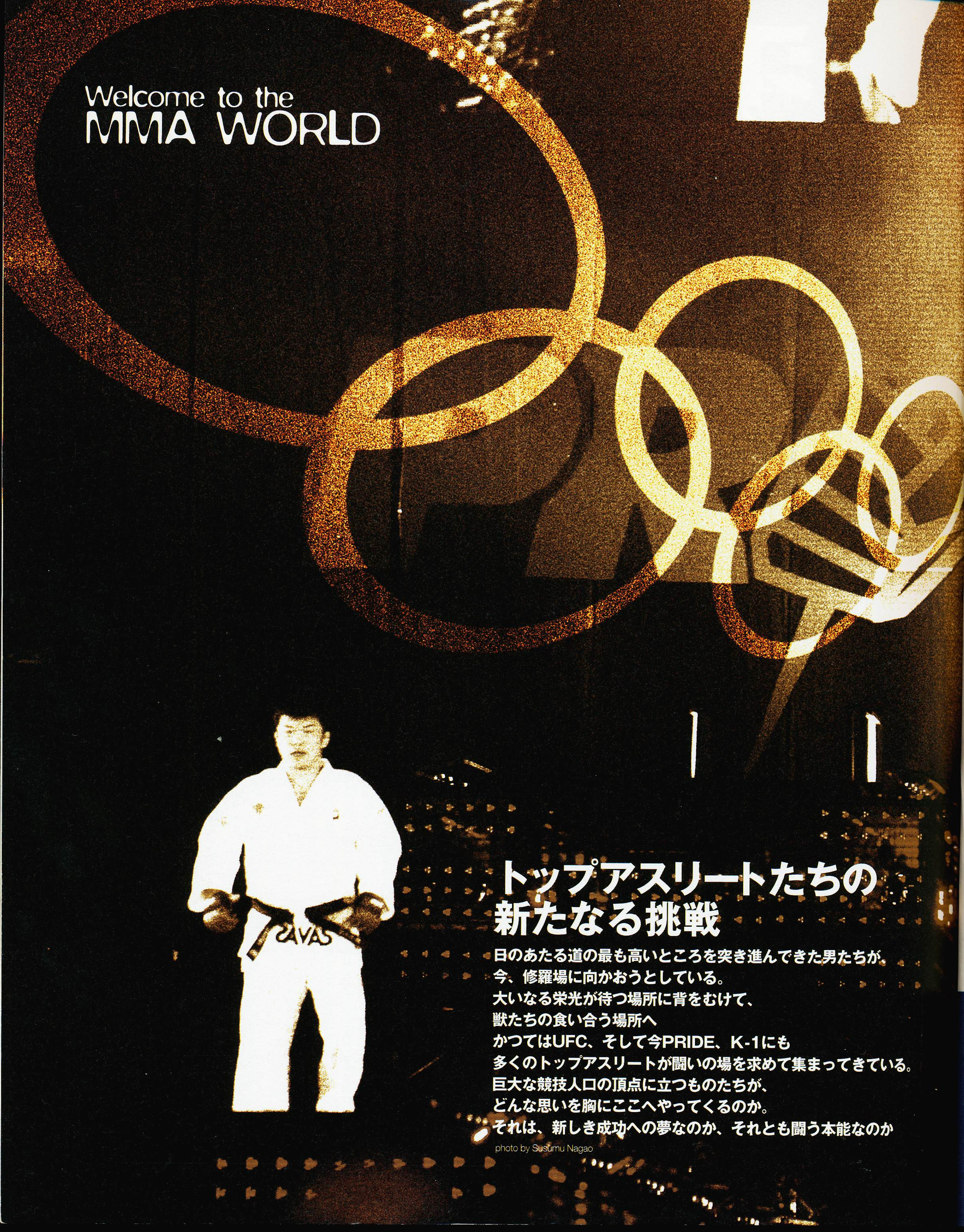
最後のリアル・バーリトゥード
柔術vsルタリーブリ

波紋を呼ぶマニアックインタビュー
谷川貞治／若林太郎

Welcome to the
MMA World!



格闘技専門店
プロ格闘家ご指名のプロショップ
人気ブランド入荷しました
ATAMA ムンジアル!!新登場!!
ほか新商品多数
詳しくはお店で。
☆☆☆有名選手にあえるかも!?☆☆☆
多くの格闘技選手もイサミショップを利用してます。
ATAMA
DRAGÃO
reversal
HOTBLOOD
KORAL
Red Nose
BERZEK
店内オドロキの品数!!
種類・サイズ・在庫豊富!!!
スパッツ
グローブ
サポーター
ビデオ
トレーニング用品
格闘技ProShop
大阪イサミ
OSAKA ISAMI
〒542-0071
大阪府大阪市中央区道頓堀2丁目1-1
フルーツタワービル9F
TEL.06-6212-1332
FAX.06-6212-1382
地下鉄25番出口から徒歩5分以内
近鉄難波駅下車徒歩5分
南海、 下車徒歩5分
御堂筋線 下車徒歩3分
千日前線 下車徒歩3分
四ツ橋線 下車徒歩3分
是非、お気軽にご来店ください。
通信販売受付中
格闘技ProShop
東京イサミ
TOKYO ISAMI
〒160-0022
東京都新宿区新宿4-2-21
相模ビル4F
TEL.03-3352-4083
FAX.03-3352-4084
http://www.isami.co.jp/
e-mail:tokyo@isami.co.jp
JR新宿駅南口及び新南口より徒歩3分。是非、お気軽にご来店ください。
ご不明な点などございましたら、お気軽にお問合せください。
JR横浜駅西口から(南2出入口)徒歩6分是非お気軽に御来店下さい。
通信販売受付中
格闘技ProShop
横浜イサミ
YOKOHAMA ISAMI
〒220-0005
神奈川県横浜市西区南幸2-9-15
第8浅川ビル4F
TEL.045-324-3682
FAX.045-324-3683
http://www.isami.co.jp/
e-mail:yokohama@isami.co.jp



Welcome to the
MMA WORLD

トップアスリートたちの新たなる挑戦

日のあたる道の最も高いところを突き進んできた男たちが、
今、修羅場に向かおうとしている。
大いなる栄光が待つ場所に背をむけて、
獣たちの食い合う場所へ
かつてはUFC、そして今PRIDE、K-1にも
多くのトップアスリートが闘いの場を求めて集まってきている。
巨大な競技人口の頂点に立つものたちが、
どんな思いを胸にここへやってくるのか。
それは、新しき成功への夢なのか、それとも闘う本能なのか

photo by Susumu Nagao

秀彦

MMA

HIDEHIKO YOSHIDA

柔道王はいかにして新たな栄光をつかんだか

闘争心の行方

**オリンピック金メダリストが総合格闘技のリングへ。
海外ではすでにあったことだが、こと日本に関して言えば
吉田の登場は初めてでありセンセーショナルでもあった。
しかし、その華やかな肩書きや印象的なほほ笑みとは裏腹に、
リングでは強烈な闘争心を観客に見せつけてくれた。**

李春成=文　徳原隆元、長尾迪=写真
text by Harunari Lee　photo by Takamoto Tokuhara, Susumu Nagao

having held the new glory
A hot baptism
The whereabouts of the fight heart

100kg級の練習パートナーが見つかったのは、正直、嬉しかった。しかし柔道家が、それも五輪の金メダリストが、なぜ誇りである道衣を脱いでまで、自分の練習に付き合ってくれるのだろうか。高阪剛は、訝しがった。それを問うと、「いや、べつに。なんとなくだよ」と、気のない返事がかえってくるだけだ。ならば、高阪には儲けものだった。

10年以上も前の学生時代、代表選手の出稽古に駆り出された高阪は、彼らの合宿先で吉田秀彦と手を合わせたことがある。「あ、こいつなら勝てるかも」。組んだ瞬間、ほくそ笑む自分がいた。直後、いつのまにか投げられている自分もいた。「やっぱりこいつらは、俺たちとは人種が違うんだ」。日本柔道のトップレベルの選手との力の差に、ひどく驚かされたものだった。

そんな男と練習ができるのだ。これほど恵まれた環境はなかった。

高阪が吉田と再会したのは01年、シアトルから帰国して2カ月後の11月だった。アメリカへ出発する前に、知人を介して一度だけ吉田と酒を酌み交わしたことがある。互いに同級生だ。すぐ打ち解けた。

96年のアトランタ五輪終了後、吉田は明治大学の監督に就任した。先輩の小川直也が前監督のあとを継ぐはずだったのだが、小川が突然プロ表明をしたため、そのお鉢が吉田に回ってきたかっこうだ。

高阪がアメリカへ行っているあいだに「PRIDE」マットの人気が沸騰し、総合格闘技はかなり注目される存在になっていた。その影響で、じつは明治大学の道場でも、選手たちが遊び感覚で「PRIDE」の真似事をやっていたらしい。そこへ時どき顔を出していたのが、横井宏孝だった。

遠くから見つめているだけだった吉田が、ふいに横井に訊いた。

「いつもどこで練習してるの?」

そこで横井が答えたのが、高阪も運営に関わる白金台のジムだった。いくつかの偶然と人の繋がりが、高阪と吉田のふたりを久びさに再会させる。だが以来、吉田がいやに熱心に通ってくる。週3回の練習に、すべて参加するという出席率のよさだ。

高阪は率直に喜んだ。

「いやぁ、ヘビー級の選手の練習相手を探してたんで、本当に助かるよ。悪いな。ありがとう」

11月の「講道館杯」に出場した際、吉田は「来年の全日本選手権で引退します」と関係者に打ち明けた。それをきっかけに、「吉田もプロ参戦か」と、格闘技やプロレス関係者のあいだではひとしきり話題となった。放映局のゲスト解説者などとして、総合格闘技の会場で彼の姿がたびたび目撃されていたからだ。

おそらく、吉田は迷っていたのだろう。もともと頭や言葉で考えるタイプではない。躰で考え、迷った自分に反射神経で答を出す。そうやって導き出したのが、「まずは自分の道場を持とう」という回答だったのだ。そして現役に別れを告げると同時に、10年間勤めあげた新日鐵からも、明治大学の監督という立場からも離れるつもりでいた。

これからの自分の人生は、自分の手で設計する。それが、吉田の意志だった。

6月に念願の道場が東京・梅が丘に完成してから、「PRIDE」を主催するDSEからの接触が熱を帯びてきた。社長と専務のふたりが、顔を揃えて吉田の説得にあたるという力の入れようだ。彼らは、吉田と同郷の愛知県出身だった。専務にいたっては、降車駅まで吉田と同じという偶然だ。

話の内容は、8月に国立競技場で開催する「Dynamite!」への出場要請だった。最初に逢ったときは、それほど強い関心を示さなかったのだが、メディアも吉田のプロ転向を煽り立てるなか、次第にその気になっていた。しかも吉田側の気持を良心的に汲み上げ、彼にふさわしい対戦相手と組ませようという誠意が見られた。

そして、髙田延彦をはじめ、何人かリストアップされた名前のなかで両者の合意にいたったのが、ホイス・グレイシーだったというわけだ。「木村政彦vsエリオ・グレイシー以来、半世紀の時を越えての対決」というストーリーが描かれ、この一大イベント最大の目玉として吉田のデビュー戦が位置づけられたのだった。

「まさか、こんなことになるとはなぁ」

花道を歩む吉田の背中を追いながら、セコ

吉　田



高阪は率直に喜んだ。

花道を歩む吉田の背中を追いながら、セコ

プロという舞台の熱い洗礼

ンドに付くことになった髙阪は思った。ついこの間までは想像すらしなかった光景だ。かたや吉田はといえば、ふだん通りの表情だ。20年以上にも及ぶ柔道生活で、このような経験は数かぎりなくあった。

「ここで負けたら、メダルはない。次のチャンスまで、また4年を待たなければならない」

これがオリンピックという舞台の恐怖であり、プレッシャーだ。柔道の大一番に比べれば、「負けてもあとがある」プロのデビュー戦は、さして重荷とはならなかった。ただひとつ違うとすれば、この大観衆と熱狂、そしてアマチュアでは考えられない演出効果の数かずだった。柔道時代の経験と、なんともいえぬ気分の良さが、吉田の表情から一切の緊張を払拭していたのである。

むしろホイスの顔に、固さが見られた。「生か死」を高らかに謳いあげ、自分たちの優位性を主張するかのような彼の表情は、終始平然とする吉田と比べると、まるで喜劇に等しかった。

試合前は何のプレッシャーも感じていなかったが、レフェリーストップでホイスを破り、ほっとしてみると、背中が少しぞっとした。もし負けていたら、日本柔道のステイタスは失墜、ゴールドメダリストの肩書も羊頭狗肉で終わっていたかもしれない。

「そうか、これがプロというものか」

吉田は「プロ」という言葉を嫌い、あえて「職業・柔道家」と名乗るが、心の底で自分が決めた禁句を囁いていた。

デビュー2戦目の相手として、ドン・フライを選択したところに、吉田の姿勢がよく表れている。眉唾な相手とは試合をしたくないのだ。それができるぐらいなら、新日本プロレスからの誘いも受けていたろう。しかし吉田は、小川直也のようなパフォーマーには断じてなりたくなかったし、またなれる才能もなかった。

ドンとは口をきいたこともないが、傍から見ても、彼が正真正銘のアスリートであることが勘でわかった。高山善廣とノーガードの壮絶な打撃戦を展開したのも、ドンが絶対に勝負を捨てない男だったからだ。柔道をベースとしたホイスとの闘いには特別ルールが採用されたが、今回は初めてのバーリ・トゥードへの挑戦である。ドンが相手ならば、たとえ負けても吉田は納得できた。

経費やファイトマネーまで含めてのドンとの交渉は、わずか4時間で終わったという。総合格闘技からの引退を決めかけていたのだが、吉田に自分が指名されたことを知ると、ドンは二つ返事で「OK」と答えたのだった。かつては自分も憧れたオリンピックのゴールドメダリストが相手だ。そんな人物から指名を受けるとは、これに優る光栄はなかった。

はたしてドンは、吉田の腕ひしぎ十字固めに最後までタップしようとせず、左腕を脱臼して病院へと直行した。ホイスと同様、「敗れた」という意思表示はしなかったが、完敗だった。試合後、ドンは三角巾で腕を吊った姿で吉田のロッカールームを訪ね、笑顔を振りまいている。

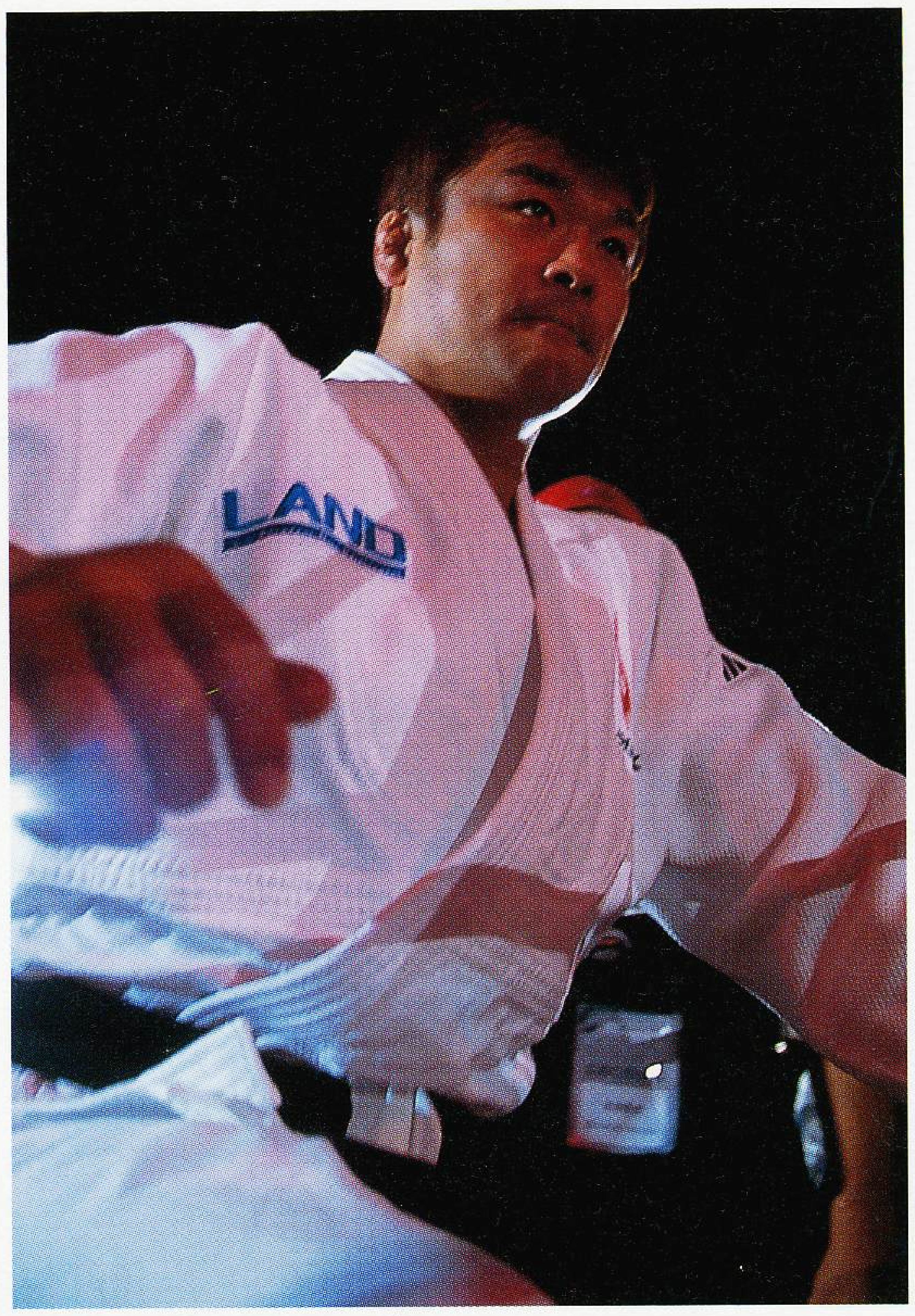
「これから病院へ行かなくてはならないんだが、ひと言、礼を言いたくて寄らせてもらったよ。今日は本当にありがとう。また機会があったら、ぜひやろう」

右手を差し出すドンと力強く握手したあと、風のように去って行った彼の背中を、吉田は満足そうに見送った。

「思った通りだ。なんていい男なんだ」

柔道時代の吉田はバルセロナ五輪の78kg級を手始めに、その後、何度も階級を変えてきた。それは、同じ階級で闘い続けることに飽き足りなくなった結果である。いつも挑戦の連続だった。常に刺激を求めていた。おそらくは、彼の格闘家としての本能がそうさせたのだろう。リスクを背負って自分の道場を完成させたことも、プロ格闘技への挑戦、そして自分が苦手とするストライカーをあえて指名したことも、すべてが挑戦だった。

豊かな経験をバックボーンとする冷静さを装いながらも、彼のなかに眠る激情がひとたび爆発すると、誰にも手が負えなくなる。それを顕著に見せたのが、ヴァンダレイ・シウバとの闘いだった。ドン、佐竹雅昭、そして田村潔司らストライカー勢とのバーリトゥードを制した吉田は、02年11月の「グランプリ」で、いよいよミドル級最強の男と雌雄を決することになった。



Hidehiko Yoshida

よしだ・ひでひこ

1969年9月3日生まれ。愛知県出身。身長180cm 柔道6段。92年バルセロナオリンピック 金メダル 99年世界柔道選手権大会優勝。02年Dynamite!のホイス・グレイシー戦で総合格闘技デビュー。以後、PRIDEのリングで田村潔司、ヴァンダレイ・シウバらと闘い活躍。

無敗記録を更新するシウバに、観衆たちもやや飽きはじめていたころだ。吉田に対する期待感は最高潮に達していた。

吉田は「PRIDE」参戦が決まった当時から、「殴られたら殴り返す」と宣言していた。たとえ自分が不得意とする打撃戦の展開となっても、どうしても抑えきれない自分を当初から想像した。

彼は、もともと痛みに強い。中学時代の中国遠征では、出発2週間前に左足首を骨折したにもかかわらず試合出場を直訴した。93年の「世界選手権」でも、椅子に座れないほどの痛みを腰に抱えながら決勝まで進出した。セコンド陣がひやひやしながら見守るなか、吉田は「一発お見舞いしてやる」ことにこだわり、果敢にパンチを振ってゆく。その結果、何発ものパンチを顔面に受け、レフェリーの心象を悪くしたのだ。

2分間のインターバルで自陣に戻った吉田を見て、「吉田道場」の青葉台支部を任されている中村和裕は思ったという。

「さすがの吉田さんも気持が萎えてる」

ところが、その直後、吉田の口から吐かれた台詞を聞き、彼は考え方をあらためざるをえなかった。

「あの野郎！ ぶっ殺してやる！」

中村が初めて目撃する、吉田の鬼のような形相だった。肚の底で燃えたぎる闘争本能が、彼の戦闘意欲を支えていたのである。こうなると、誰も吉田を止められなくなる。

ふたりの勝負は判定にもちこまれ、筆者の手書きのメモと同様、シウバが僅差で逃げ切った。だが関係者や記者を驚かせた激戦が、「プライド」史に残る名勝負だったことは疑いの余地がない。

吉田は、一度だけDSEと揉めている。それが、佐竹雅昭戦の内容だった。

ゴングと同時にグローブを合わせていった吉田に、それを拒否した佐竹が後ろ回し蹴りを放ったのが発端だ。常に正々堂々とした試合を望む吉田は、礼儀に反する汚い行為を露骨に嫌悪する。瞬く間にキレた吉田は、そのまま佐竹の頭部を両腕でロックし、道衣を使って絡み取る。1ラウンド、

あの野郎、ぶっ殺してやる！

わずか50秒あまりの秒殺劇だった。

これに不快感を示したのが、DSEの森下直人社長だ。翌日のスポーツ紙に掲載された社長の不満は、「勝負を早く決めすぎた」という点にある。

ここまで良好な関係を築いてきたはずの社長の言葉に、吉田は困惑した。

「では、どうすれば良かったんだ。プロレスでもやれというつもりなのか？」

プロのマットに上がることを決意したのは、「PRIDE」がリアルファイトだったからだ。社長の発言を額面通りに受け取れば、吉田に秒殺された佐竹に対しても失礼だろう。自分を飾ることが苦手な吉田という人間を、社長は正確に把握しきれていなかった。

悔やんでも悔やみきれないのが、ホイスとの再戦だ。シウバ戦で完全燃焼した吉田は、約1カ月半後の大晦日に組まれたこのカードを、一度は断った。だが「テレビが3局つくので、なんとか承知してほしい。目玉となるようなカードが欲しいから」と説得され、しぶしぶ承知したのである。だが切った咥内の抜糸もまだ終わってなく、そのおかげで食事もろくにできない。かなり長い時間をおいてからようやく練習を始めたものの、納得づくで引き受けた試合ではなかったため、練習に身が入るはずもなかった。

結果、道衣を脱ぐという奇策で試合に臨んだホイスに苦戦し、試合はドローに終わる。「どちらが勝ったかは、試合を観ればわかるだろう」とまでホイスに悪態をつかれ、言葉が何も見つからなかった。試合中、吉田は時間が早く過ぎることばかりを願っていた。これでは、ファンが望むようない試合になるはずもない。佐竹戦にクレームをつけられるなら、このホイス戦はプロとして失格だ。言い訳のしようもなかった。

吉田は、プロとして闘い続けることの難しさをあらためて知る。アマチュアにはない華やかさは、観衆一人ひとりが買ってくれたチケットや、テレビ局が支払う放映権料があるからこそ成立する。運営側が考えるビジネスとしての側面と、選手側が考える勝利へのこだわり、ともすれば相反する両方の利点をどう折衷させるか。そこにプロの難しさがあった。

02年の佐竹戦、03年のホイス戦とケチのついた年末試合が続いたが、今年の大晦日に向けては準備万端である。あのアレクサンダー・カレリンをシドニーで破ったルーロン・ガードナーとの一戦に向け、吉田は国内とハワイで2カ月に及ぶトレーニングをたっぷりと積んできた。もちろん、結果がどうなるかは神のみぞが知るところだ。しかし吉田は、今年こそ、気持ちよく新年を迎えるつもりでいる。

PRIDE 男祭り2004
2004年12月31日(金)
開場／15：30 開始／17：30
■会　場／さいたまスーパーアリーナ
■主　催／フジテレビジョン、ドリームステージエンターテインメント
■協　力／さいたまスーパーアリーナ
■入場料金／全席指定・消費税込　◇VIP(ビップ)　100,000円
【特典：専用入場ゲート・グッズ付】　◇RRS(ロイヤルリングサイド)
30,000円　◇スタンドS　17,000円　◇スタンドA　7,000円
■券売スケジュール／　11月14日(日)　10:00〜19:00
特別先行電話予約　11月28日(日)　10:00〜一斉発売
■お問い合わせ:ドリームステージエンターテインメント
TEL:03-5464-1531



ヴァンダレイ・シウバには判定で敗れ、ホイス・グレイシーとの再戦では何もいいところがなくドローで終わった。しかし吉

承知のように、秋山は在日韓国人の4世として大阪に生まれた。生野区は在日系の住民が多いことで知られ、小さい頃から好

な力をもっているのに、そういうヘンな伝統があるから、韓国柔道の発展を阻害してしまうんです。自分の国籍はいま日本です



秋山成勲

日本と韓国の掛け橋になりたい
三つの故郷

柔道家らしからぬ銀色に染めた頭髪、
そして在日韓国人という生い立ち。
K-1への参戦決定で一気に注目を浴びることになったが、
実際に話してみた彼は、非常に礼儀正しく爽やかな青年であった。
複雑な思いを持ちながら続けてきた柔道人生だが、
今、新たな舞台に向かって行く彼の胸中にあるのは
やはり柔道の2文字であった。

李春成＝文　和智正夫＝写真
text by Harunari Lee　photo by Masao Wachi

On behalf of judo,
it fights against MMA.
Front match

K A M A

ヴァンダレイ・シウバには判定で敗れ、ホイス・グレイシーとの再戦では何もいいところがなくドローで終わった。しかし吉田秀彦の「PRIDE」参戦は、ひとまず成功と言ってよいだろう。02年最後の2試合で苦戦を強いられたとはいえ、「吉田」という柔道家の商品価値が落ちたわけではなかったからだ。

むしろ彼の影響は、アテネ五輪後に次々とプロマット参戦を表明した元オリンピック・アスリートたちの行動によく現れている。「俺にもできる」。吉田の挑戦は、静かな水面に小石を放り投げたように他のアマチュア・ファイターにも刺激を与え、一世一代の決意をさせたのだった。

そのひとりである秋山成勲が「PRIDE」ではなく「K-1」事務局主催の「Dynamite!」に主戦場を求めたのは、意外な理由だった。

「いま頑張られてる吉田先輩も含めて、PRIDEは柔道家や柔術家がすごく多いじゃないですか。それを考えると、K-1のほうがより自分が目立てるチャンスがあると思ったんです。プロになろうと決めてからは、自分が目立つことしか考えてませんからね」

徹底的に鍛え上げた上半身も、銀髪に染め上げた短髪も、「自分ひとりが注目を浴びたい」という動機があった。そんな秋山がプロ表明したとき、ファンの多くは何の違和感も感じなかったろう。だが、もし彼が「PRIDE」を選択していれば、終了6秒前のチョークスリーパーでソア・パラレイに大逆転勝利をあげた、チェ・ムベとの対戦が注目されていたにちがいない。

チェは、秋山を開花させた釜山の出身だ。「韓国の総合格闘技の未来を背負ってるから、絶対に倒れるわけにはいかなかった」。

チェはソア戦のあとにそう振り返ったものだが、一方で、「自分がプロマットに参戦することで、日本と韓国の架け橋的な存在になりたい」と語るのが秋山だ。ふたりの対戦を通じて両者が手を組めば、それが日韓両国の総合マットに与える影響は計り知れなかったかもしれない。

承知のように、秋山は在日韓国人の4世として大阪に生まれた。生野区は在日系の住民が多いことで知られ、小さい頃から好物の焼肉で育ち、一日1リットルの牛乳を飲みほしながら、地元の柔道場へ通っていたという。

だが全日本柔道連盟は、日本国籍を有さぬ者の大会出場を原則的に禁じている。つまりどんなに長く柔道を続けた実績があっても、自分の力を測れる試合出場が制約されているため、「強くなりたい」という欲求を維持するのが難しいのだ。結果、01年の秋に日本国籍を取得するまで、最高成績は96年の「正力杯」第2位と、けっして目立つものではなかった。

しかし近畿大学卒業後、在日同胞選手として出場した韓国の国体が、大きな転機となる。この大会で韓国の代表チームにスカウトされなければ、現在の彼はなかったかもしれない。道衣の下に筋肉の鎧をまとう秋山は、釜山支庁で競技生活を続けながら、筋力トレーニングのおもしろさに目覚めたからである。一度捕獲されたら脱出困難を極める彼のパワーは、渡韓後の3年間で培われたものなのだ。

00年には「韓国国際」で優勝、続く翌年はモンゴルで開催された「アジア選手権」に韓国代表として出場し、20年以上にも及ぶ柔道人生で、国際舞台の頂点に立つ喜びを初めて味わった。

翌年、まるで服でも着替えるかのように日本国籍取得を決意したのは、もはや彼の力が韓国のレベルではおさまりきれなくなった結果だった。ソウル郊外の泰陵（テヌン）にあるナショナル・トレーニングセンターは、韓国のあらゆるスポーツのベース基地と言ってもよい。そこでのキャンプですら、マンションの一室に7~8人が詰め込まれるという惨状だ。「それほど苦にはならなかった」と秋山は言うが、選手層や設備環境の面では、明らかに日本のほうが恵まれていた。

「韓国は学閥が幅を利かせていて、特定の大学の選手や出身者に、露骨に有利な判定を下す傾向があるんです。せっかく潜在的な力をもっているのに、そういうヘンな伝統があるから、韓国柔道の発展を阻害してしまうんです。自分の国籍はいま日本ですが、根は韓国人ですから、日本と韓国の柔道のいいところを両方合わせもってるなと思いますね。日本は技を重視した一本勝ち狙い、韓国は組み手重視。その両方の特徴が、自分の柔道にはあると思います」

「閥」で動く韓国が、白いものも黒くしてしまうのは有名だ。その得意技は02年、サッカーの日韓共催ワールドカップでも発揮され、ゴールが取り消された対戦国を敗退させ、韓国をまさかのベスト4に押し上げた。ようするに韓国の強さには、魑魅魍魎とした虚像も入り混じっているわけだ。

また練習方法も、日本とは違い軍隊式だ。「練習をやらされている」ような空気に、秋山は不満を感じていた。高校を卒業すれば、苦しみや悩みを自分の力で解決していくのが日本式の強くなる方法である。ところが韓国には、自分のトレーニングメニューを、自分でデッサンするという自由な空気が見当たらなかった。

周囲のバックアップもあり、異例の早さで日本国籍を取得した秋山は、01年秋の「講道館杯」出場にぎりぎりで滑り込み、なんと初出場で初優勝を手にする。「日本人」になるのがもう少し早ければ、彼の人生は、もっと変わったものになっていたかもしれないと思わせる優勝だった。さらに翌年の「日本国際」も制した秋山は、ようやくその実力が認められ、日本に生まれて26年目にして、初めての「日本代表」に選出されたのである。

こうして彼の目の前にたちはだかったのが、「アジア選手権」だった。皮肉にも、開催地は韓国の釜山だ。悪質なブーイングが背中に飛ばされるなか、それでも動じぬ秋山は決勝まで駒を進め、地元の選手を倒して『君が代』を聴いている。もっとも、複雑な心境だったのはいうまでもない。

それからは04年のアテネ五輪に、ぴたりと照準を定めた。03年4月の「全日本選抜柔道体重別選手権」の81kg級決勝では、96年アトランタ五輪の金メダリストだった中村兼三を、わずか13秒、電光石火の内股一本で破り、地元大阪で開催された「世界選手権」への出場権を獲得した。誰の目にも、秋山の世界挑戦は順風満帆に映った。

しかし地元出身の期待のホープは、ポーランドの選手に敗れて「世界選手権」5位に終わる。さらにオリンピックの代表切符も塘内将彦にさらわれ、最後の最後で夢を叶えることができなかった。シドニー五輪後のあまりにも短い時間を「日本人」として全力で走り続けた男は、全身から力が抜けていくような錯覚に襲われた。

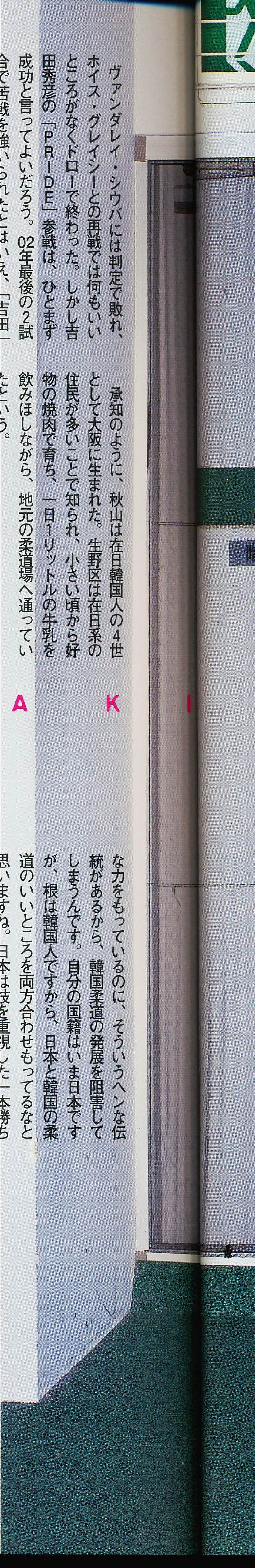
すでに、29歳になっていた。

「アテネ五輪を目指していた頃は、総合格闘技に対する興味なんて全然なかったですね。もちろん、一ファンとしての関心はありましたけど、小川（直也）先輩や吉田先輩がやられていたのを客観的に眺めていただけです。でも、やっぱりテレビの影響は大きいでしょうね。アマチュアの世界からプロというものをテレビを通じて観ていて、漠然とした憧れみたいなものは感じてました。“自分もあんな舞台に立てたらなぁ”って。でも、本当に行こうとは思ってませんでした。出れなかったけど、やっぱりアテネが最終目標でしたから、そんなこと考えてる余裕もありませんでした。ただ、こうしてプロとして闘っていくと決めた以上、これからはプロとしての自信と自覚をもつことが大事だと思いますね」

筆者がひとつだけ気がかりなのは、「K-1」の選手プロデュースの方法である。03年末、曙太郎の「Dynamite!!」出場が大きな話題を巻いたが、その経緯にははなはだ疑問が残った。デビュー戦まで、わずかな期間しかなかったにもかかわらず、打撃技術で一日の長があるボブ・サップが初戦の相手だったからだ。元キックボ

Y O S H I H I R O A K I

MMA





Yoshihiro Akiyama
あきやま・よしひろ
1975年7月29日生まれ。大阪市生野区出身。身長177cm体重81kg。近畿大学を卒業後、韓国・釜山に渡り、市役所に勤務しながら柔道を続ける。2000年には韓国代表として、韓国国際優勝。2001年9月、日本国籍を取得し帰国し、講道館杯優勝、2002年日本国際、フランス国際、9月の釜山アジア大会で、03年は世界柔道81kg級でも優勝を果たす。

クシングの世界王者、モーリス・スミスの道場で特訓を受けたサップは、そのデビュー戦では山本憲尚を強烈なパンチでKOし、アーネスト・ホーストにも連勝という実績の持ち主だ。

秋山は「これまで練習してきたことを、プロの試合でどこまで出せるかが重要」と、彼が得意としてきた多彩な足技や、柔道の特徴でもある絞め技の大切さを語る。そもそも体にしみついた癖は、消しゴムで簡単に消せるような性質のものではない。そして身につけたばかりの新しい技術は、練習ではできても、実際の試合ではそう出せるものでもない。

突き押しと張り手の曙が、ボクシングやキックの練習をしている新鮮な姿がテレビでも派手に喧伝されたが、時間がなさすぎた。もっと彼にふさわしい相手はいなかったのだろうか。ひとつの勝ち星もないまま5連敗の曙は、マッチメイカー側にとっても、使い方がひじょうに難しい男になってしまった。

同じことが、秋山の身の上に起こらないともかぎらない。彼の選択が決して間違っていなかったことを祈るだけである。

柔道をメジャーにしたい

「打撃は大阪の正道会館で覚えた程度ですが、相手をパンチで倒してみたいという衝動に駆られています。大晦日を一発目にして、今後は2カ月に一回ぐらいのペースで試合に出ていきたいですね。柔道で覚えた寝技をベースに打撃も身につけられれば、もっと怖い存在になれる。それが理想ですね。小川先輩は、柔道時代から並外れた体力で注目された存在でした。吉田先輩は下半身のバランスが強く、なかなか倒れない人でした。僕は僕なりの柔道家としての色で自分を染め上げ、皆さんの注目を集めてみたいです」

秋山には3つの故郷がある。「柔道」「在日韓国人」、そして「生野区」だ。

これらに、秋山は常にこだわっていきたい。だからホイス・グレイシーのように、道衣を脱ぐことは、まず考えられない。柔道家としての誇りがあるからだ。そしてファイトマネーを貯めて、生まれ育った土地に自分の道場を持つことが夢でもある。少年時代から通っていた道場の空気が、彼は大好きなのだ。自分を育ててくれた柔道に、今度は自分から恩返しをしてみたかった。

03年の「世界選手権」国別団体トーナメント決勝で日本を敗ったフランスは、すで日本を上回る柔道人口を底辺にもつ。秋山には、それが寂しくてならない。

「野球やサッカーのようなメジャー競技に柔道もなってほしいと思いますが、僕が生きてるあいだは無理かな。でも、柔道家として闘う自分の姿を見て、子どもたちが柔道に興味をもってくれたり、僕の道場に通ってくれたり、そうやって柔道の底辺が広がってくれれば、すごく嬉しいですね」

大晦日のデビュー戦の相手は、一時、「シリル・アビディではないか」という噂が囁かれたが、その後、流れたらしい。本稿を執筆している段階では、対戦カードがまだ決まっていない。だが柔道の強さは、すでに吉田秀彦が証明済みだ。彼のあとに秋山も続くことができるかどうか、いま、新たな挑戦が始まろうとしている。



吉田秀彦を<五輪で>破った男

カルロス・オノラトのMMA観

2000年シドニー五輪で、日本中から悲鳴が起こった
吉田秀彦の負傷、そして敗北。
彼を下したカルロス・オノラトの名は、一気に世界を駆け巡った。
あれから4年、柔道で最後に吉田を破った男は、「PRIDEから誘われた」と
アッサリ言葉にし、柔術の大会に出たことも明らかにした。
それでも、オノラトは今も柔道一直線。北京五輪を目指す。

Interview by Eduardo Ferreira　photo by Washington Alves

「将来的にどうなるか、誰にも分からない。でも、僕の将来は僕だけのものじゃない」

――ヨシダがPRIDEのリングに上がることによって、2000年夏のシドニー五輪で彼を破った君、カルロス・オノラトの名前が、MMAファンの間で再び注目されるようになっているけど。

「正直言って、僕はテレビでもバーリトゥード（以下VT）をあまり見ないんだ。好きな選手がいるわけじゃないし。ヴァンダレイ・シウバとホドリゴ・ミノタウロの試合は見たことがあるけど、VTではブラジルが世界を制圧しているんだね。ヨシダも頑張っているみたいじゃないか。彼が僕と戦ったとき、きっともう彼は真剣にVTへの転向を考えていたんだよ。あれが、最後の国際大会出場になってしまったからね」

――改めてヨシダとの試合を振り返ってもらえるかい？

「あんまり話すことはないよ。僕はただ単にラッキーだったんだ。彼が思いもしなかった動きをしかけ、それが僕にとって正しい方向に向かっただけ。ヨシダは僕が小技で攻めてくると予想していたんだ。そこに内股をしかけたもんだから、信じられないっていうような表情になっていたね。結果的に背中から落ちるのを嫌がり、手をついてヒジを負傷したから、僕の一本になったけど、嬉しい限りだよ。1999年の世界選手権の準決勝で、ヨシダには負けていたから、リベンジに成功し、戦績は1勝1敗の五分に持ち込むことができたからね」

――ヨシダに勝ったことにより、世界最大のVTプロモーション、PRIDEからオファーがあったという話が、日本でも大きな話題になっていたようだね。

「シドニー五輪の直後に、確かにオファーはあったよ。でも、僕は柔道に集中したいという理由で断ったんだ。僕はダニエル・グレイシーと友人で、彼が日本から帰ってきて『PRIDEが君に興味を持っているぜ』と聞かされて、その通りの事態になった。僕は『今後、PRIDEのリングに上がることは決してないなんてことは言わない。将来はどう転ぶかは自分でも分からない』と返答するくらい、素晴らしいオファーだった。でも、僕が思うには準備期間も十分ではなかったし、それで固辞したんだ」

――準備期間が十分にあれば、VTルールで戦う可能性もあったということかい？

「それは分からないけど、パンチや蹴りになれる時間は最低半年、いや1年ほどは必要だろうし、VTという違う世界の空気に馴染むにも時間が掛かると感じたんだ。どう考えても、今の僕はVTファイターに相応しいとは思えない。打撃のある試合と、柔道はあまりにも違いすぎる。それに柔道家カルロス・オノラトとして、人々が抱くイメージを守りたいという気持ちもある。VTはちょっと、僕に過激過ぎるんだ。お金の問題だけじゃなく、僕はこの『イイ奴』のままでいたいんだよ」

――ダニエル・グレイシーとは、なぜ知り合ったんだい？

「僕が柔道を練習している場所で、彼が柔術の指導をしていた。僕らはほんの少しだけど、寝技の練習をしたもんさ。彼は旅行も多く、その後、道場も変わったけど、僕らの関係は変わらずに、そのまま続いているんだ」

――柔術を習得できましたか？

「ノー、ノー。片手間にやって、習得できるほど単純なものじゃないよ。本来は、僕は寝技が好きじゃないんだ。ただ、ダニエルとの練習で、基本的なエスケープ方法は学ぶことができた。いくつか関節技を仕掛けることもできる。ただ、それだけ。僕は自分の寝技の技量を信じていない。どうあがいても、フラービオ・カントのような寝技を駆使することはできないよ」

――柔術の大会に出場したことは？

「大学のときに出ている。でも、褒められた出来じゃなかった。最初の2つの試合に勝って、柔道家だということがばれて、対戦相手は立ち技に付き合わなくなった。それで、僕はやられてしまったんだ」

――VTやムエタイのトレーニングをしたことは？

「全くない。たったの一度きりとしてない。僕の格闘技キャリアは、柔道とほんの少し、今言っただけの柔術の経験しかないんだ」

――柔道家は、VTに偏見を持っていると思うかい？

「そんなこと、ありえない。誰も偏見なんて持っていないよ。VTだって、今じゃスポーツじゃないか。流血する、顔が腫れることもある、でも、それは柔道と違うルールというだけで、皆はあのルールで勝つためにハードトレーニングをこなしているんだから、それをとやかく言うのは間違っている。二つとも確固たる地位を掴んだスポーツ、ビジネスのために柔道がVTのスポンサーになることもあるし、その逆だってあっていいんだよ。ただね、だからって柔道選手がVT選手にイージーに転向できるかというと、これもまた違う次元の話になる。柔道の基本は、護身だ。捨て身で技をしかけ、相手を倒すことなんてそうそうあるものじゃない。でも、打撃が使えるスポーツは、そういうことの連続じゃないか。まったく違ったものだし、簡単に転向云々を口にできるものでもないよ」

――では、家族のサポートでもなければ、君のVT転向はまだまだ先のことかな？

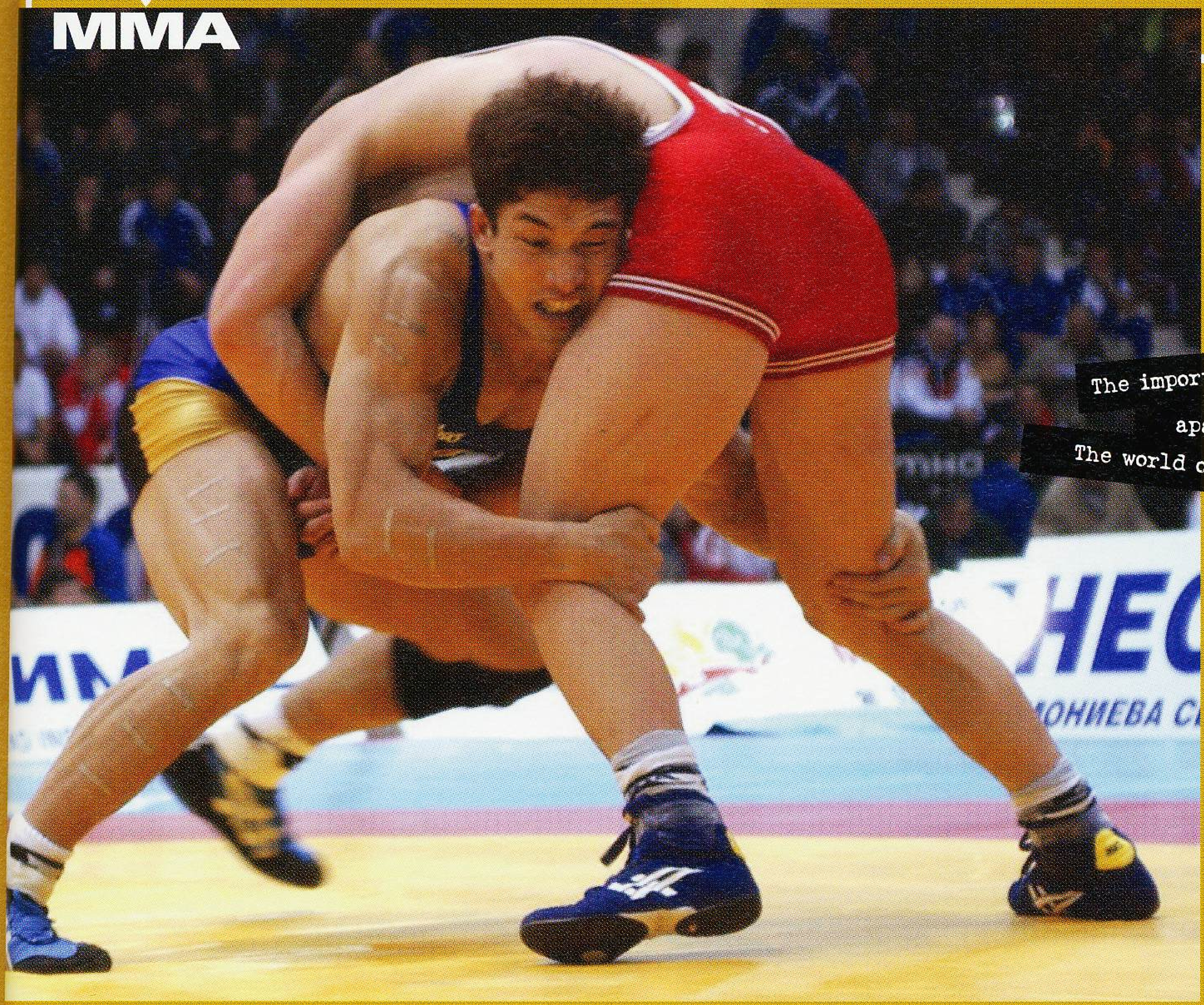
「僕の家内は、PRIDEからオファーがあっただけで、顔をしかめていたものさ。『顔をぼこぼこにされる必要があるの？』って彼女は聞いてきた。僕には3歳の息子がいるし、僕の将来は、僕だけのものじゃない。だから、今はVTのことよりも、北京五輪に向け、その一歩を踏み出そうという状況にあるんだよ」

レスリングエリートがやってきた!

ますます白熱するMMA興行戦争。新しき逸材は常に求められている。
そんな今、五輪トップレスラーたちが次々と参戦を表明。MMAに到った道程、そしてそのポテンシャルとは。

MMA

樋口郁夫＝取材・文＆撮影
text & photo by Ikuo Higuchi



The important figure of
apanese wrestling community
The world of MMA is entered.

日本軽中量級の新星
宮田和幸

米国では1996年のマーク・コールマンに始まったレスリング五輪代表選手の総合格闘技入り。日本ではなかなか実現しなかったが、00年シドニー五輪フリースタイル63kg級代表の宮田和幸（フリー）が11月20日にハワイで行われた「ランブル・オン・ザ・ロック」に出場し、それがやっと実現した。

総合の先人でもあるホイラー・グレイシーの三角絞めに屈したものの、度胸満点のファイトで第1ラウンドは互角ともいえる戦い。負けたのは経験不足によるもので、総合のキャリアを積んでいけば日本の軽中量級の期待を背負う選手に育つ可能性を感じさせてくれた。

「勝つとしたらパウンドでのKO勝ち」と話していたように、総合の練習を始めて3カ月では、極めることは難しいことは承知していた。そのパウンドはうまく当たらなかった。それも仕方あるまい。練習では人間を相手に本気でパンチをたたき込むことはできない。まして百戦錬磨のホイラーだ。頭の中の感覚どおりにいかなかったのは当然だろう。

いろんな面での経験不足によって負けたものであり、キャリアを積んでそれを埋めることができれば大化けする予感は十分にある。初めて1万3000人の観衆の前に立ち、グレイシー陣営がオクタゴンを取り囲む中でも「冷静さを失わなかった」というハートの強さは立派。得意のタックルを決めたり、当たらなかったがバックブローを試みるなど、我を忘れていなかったことが随所にうかがえた。

いずれ日本の総合の軽中量級を支える逸材であることは間違いない。レスリング選手として峠を越えてからの転向ではなく、28歳とまだ次の北京五輪をも十分に狙える年齢での転向だった。吉田秀彦の総合での成功に、世界選手権代表の秋山成勲、シドニー五輪金メダリストの滝本誠の柔道トップ選手が続いたように、宮田の総合での成否に、日本のレスリング強豪選手の総合への道をつくるか閉ざすかがかかっているといっても過言ではないだろう（本人にそんな意識はないだろうが…）。ぜひとも後進の道を開いてほしいと思う。

なかなか開かれなかった日本レスラーのMMAへの道

総合格闘技界でレスリング出身選手が幅をきかせるようになってから随分たつ。コールマンにはじまり、マーク・ケァー、ランディー・クートゥアー、ダン・ヘンダーソンやケビン・ランデルマン。シドニー五輪でアレクサンダー・カレリンを破って金メダルを取ったルーロン・ガードナーもPRIDEへ参戦する。レスリング・トップ選手の進む道として、総合のリングはごく当たり前にでき上がっていた。

しかし日本のそれは、なかなか進まなかった。96年アトランタ五輪代表の三宅靖志がコンテンダーズに出場したり、01年に山梨学院大学の選手がアブダビコンバット大会に出場したりして、そのムードが感じられた時期もあったが、三宅の後に続くトップ選手がおらず、全日本2位の山本徳郁（現山本"KID"徳郁）が義兄のエンセン井上のつてで修斗に取り組んだ程度。

アブダビコンバット大会出場は、日本レスリング協会に総合格闘技委員会が発足し、そのアドバルーンという感じでの行動。推進役の高田裕司専務理事（当時強化委員長）が自チームの選手を起用したのであり、出場した選手に「いずれ総合でやってみたい」という気持ちはほとんどなかった。

世間をにぎわせていた総合格闘技といえば重量級だったことも、日本のレスリング選手が進まなかったことの一因だろう。日本レスリングの重量級といえば、世界のトップとは体力的に大きな隔たりがある。ノールールに近い状態で殴り合い、倒し合いをすれば、骨格や身体能力の違いから圧倒的な不利な状況であることは多くの選手が感じていること。あの藤田和之ですら、欧米の重量級選手の間に入れば"非力"な部類に入るのが現実。これでは二の足を踏むのはもっともだろう。

軽中量級では日本と欧米選手にさほどの体力差はなく、スタミナ面ではむしろ日本選手の方がまさっている場合が多い。しかし戦いの舞台がなかった。修斗では重量級より軽中量級の試合の方が盛んに行われて

「最終的にはマッハと話をして決めました」

いたが、酷な書き方をさせてもらえば、注目度や収入の点でレスリングのトップ選手が魅力を感じるリングではない。戦い方をコンバートしてまでも挑戦しようとするトップ選手は、山本"KID"徳郁以外にはいなかった。

だが、K-1MAXやPRIDE武士道が人気を博し、軽中量級にスポットが当たり始めた。山本"KID"徳郁が短期間で注目される選手になったように、レスリング・トップ選手の格闘能力は高い。宮田の総合入りは、そんな流れの中での決断だった。

宮田は中学時代からレスリングに取り組み、全国王者に輝いた。茨城・土浦日大高校では、インターハイの優勝は逃したものの、負けた相手に国体でリベンジして優勝するなど全国トップ級の力を見せた。

日大へ進み1年生から東日本学生リーグ戦の62kg級のレギュラーを獲得。王者・日体大の上級生を破るなど4戦全勝をマークした。この時の4年生の主将がのちに新日本プロレスに入り、00年4月に不慮の事故で亡くなった福田雅一。ちなみに日大は、谷津嘉章をはじめ、高橋義生、本田多聞、藤田和之、矢野通とプロレスラー、プロ格闘家を多く生んでいる大学だ。

4年生（97年）になると主将に推され、日大の東日本学生リーグ戦、全日本学生王座決定戦、全日本大学選手権の大学対抗得点の年間三大タイトル獲得の原動力として活躍。リーグ戦は日体大の19年連続優勝を阻止し、その天下にピリオドを打つ価値ある優勝だった。

同年は、個人でも全日本大学選手権で優勝してMVPを獲得。全日本選手権でも3位に入賞して力を発揮した。それは99年に全日本選手権初優勝となり、翌年のシドニー五輪出場へとつながった。伸び悩むことなく順調に力を伸ばしたレスリングの申し子だった。

シドニー五輪は1勝1敗で予選リーグ敗退。当時24歳の若さだったので、アテネ五輪を目指してレスリングを続けていたが、総合格闘技入りの噂は2、3年前からあった。桜井"マッハ"速人（マッハ道場）とは高校の同級生。「マッハが熱心に誘っている」といった情報がレスリング界にも流れていた。

また昨年暮れ、高校と大学の先輩であり PRIDEのジャッジをやっている小林孝至氏（88年ソウル五輪金メダリスト）にPRIDEのチケットを頼んだことがあり、その時、いずれ総合へ進みたい気持ちを話しているという。

小林氏は、PRIDE武士道という軽中量級の大会がスタートしたこともあり、「おまえがその気なら、出場できるように推薦してやるぞ」と声をかけたというが、もちろんアテネ五輪を前にして総合入りはないと考えていた。すべては「アテネ五輪後」という前提のもとでのこと。実際に、宮田は必死になって五輪連続出場の道に挑んだ。

しかし、02年の全日本王者になりながら、03年の世界選手権代表をプレーオフの末に逃したことで、アテネへの道が困難を極めることになった。同級で日本代表となった池松和彦（日体大助手）が世界選手権で銅メダルを獲得。これにより、03年秋に池松が早々と五輪代表に決定してしまったからだ。同級の選手は階級を上げるか下げるか、あるいはスタイルを変えるかしなければアテネへの道がなくなった。宮田はグレコローマン66kg級に活路を求めたが、03年全日本選手権の予選で敗れ、まずアテネへの道がふさがった。

宮田が小林孝至氏に総合入りの気持ちを伝えたのはこの時期だった。しかし、アテネへの最後のチャンスはまだ残っていた。04年4月の全日本選抜選手権で、日本は3月の五輪予選でグレコ66kg級の五輪出場資格を取ることができなかったため、宮田は出場資格のあった74kg級へ上げて出場した。慣れないスタイルで、さらに1階級上での出場。こんな状況でも必死に五輪へ挑んだのだから、彼の五輪へかける思いの強さがうかがえる。

結局、その大会の予選で1階級下の全日本チャンピオンに敗れ、アテネへの夢が消えた。「アテネ五輪の代表権をかけて、世界3位の池松と戦わせてほしかった」という思いがあったことは容易に想像できるが、それを口に出さず、次のステップを探した。

まだ08年北京五輪を狙える年齢ではあった。しかし4年間は長い。もっと身近に燃える目標を見つけたいと思うのも当然だろう。それがプロの総合格闘技だった。

「最終的にはマッハと話をして決めました」。未知の分野へ踏み込むには、何らかのきっかけがあり、後押しする人間がいたりするもの。それはマッハの存在だった。

さらにKIDの存在もあった。山本"KID"徳郁とは中学生の全国王者として1990年の世界カデット（15～16歳）選手権に遠征した仲。「彼のK-1での試合を見て興奮しました。今は目標とする選手です」。自分より下の階級でやっていた選手（山本はフリー58kg級）のプロでの活躍が、彼の新たな闘争本能に火をつけることになった。

進んだ道が、小林氏がいてマッハが戦っているPRIDEではなくK-1ネットワークの大会だったのは、日大時代の恩師の富山英明監督がK-1の石井和義・元プロデューサーと懇意なことから。だが立場はフリーだから、縛られることなく、いずれPRIDEやUFCで戦うこともありうるだろう。

何はともあれ、総合でのデビュー戦は終わった。すべての面で経験不足だったことは前述したとおりだが、今後、トップに立つには、経験以外にももっと総合の技術をマスターしなければならない。

レスリングは相手をKOしたり、ギブアップを奪う格闘技ではない。最初にUFCが登場した時、もっとも向いていない格闘技選手はレスリング選手だと思われた。にもかかわらず元レスラーが総合の世界を席巻できたのは、めったにテイクダウンされない足腰の強さ、トップポジションを取れるバランスのよさ、道衣などつかむところがなくとも抑え込めるパワー、パウンドの強さ、心拍数（1分間の脈拍数）200を超える戦いに耐えられるスタミナなど体力面がずば抜けていたからだ。

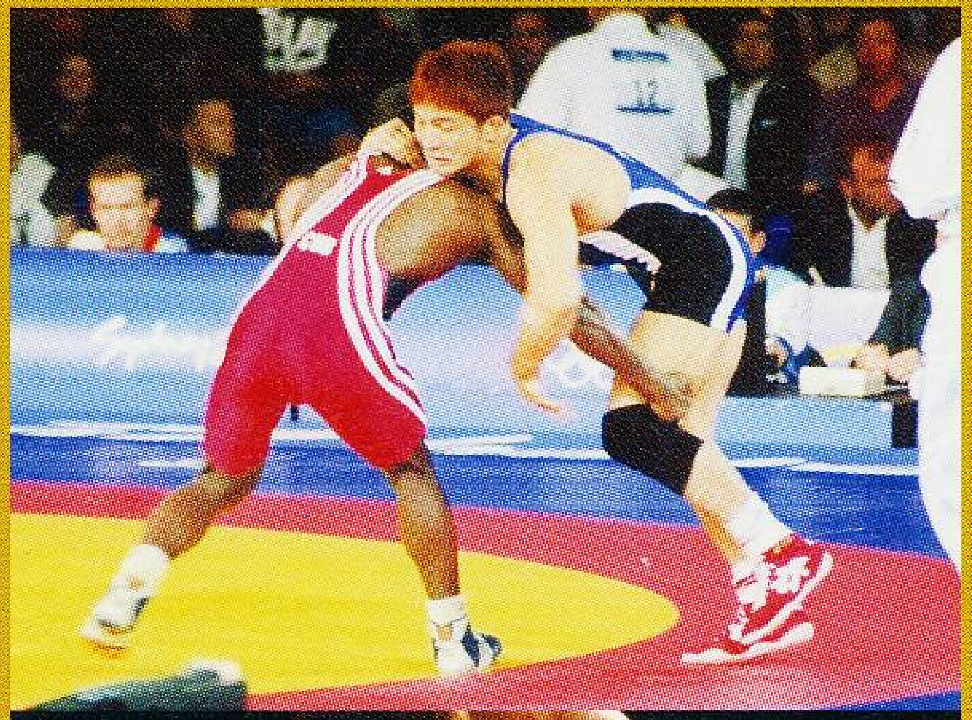
さらに世界中に普及しており、世界のトップに立つ選手は、いろんな人種・民族の間で争われる闘いを何度も勝ち抜いてきた選手。その経験や勝負度胸は、競技人口の少ない格闘技の出身選手の比ではない。

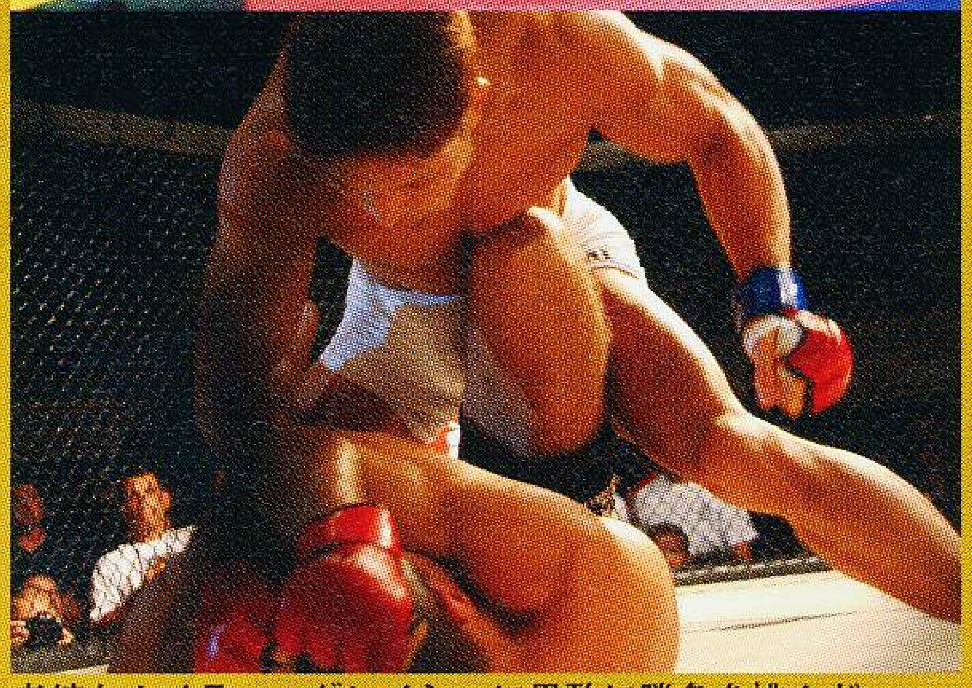
逆に、下から攻撃されたことがないこと、極め技を持っていないことなどが弱点とされた。どんなに体力があっても、この2つを克服しなければ総合の世界では通用しない。

宮田の場合も、体力的には申し分なく、ハートの強さもデビュー戦で証明された。関節技の防御を覚えることと、パウンドを含めた極め技をマスターすることが今後の課題だ。デビュー戦を終え、宮田自身が口にしていたことでもある。

最初にとんでもない相手とぶつかることになったが、総合の難しさを経験することになり、宮田にとってはかえってよかったのかもしれない。少なくとも"かませ犬"と戦い、快勝して総合の技術を学ぶ姿勢を持とうとしないよりは、ずっと将来につながったと思う。

「あと半年はみっちり練習して次の試合をやりたい」。総合の実戦を経験したあとの半年の練習は、しない段階での3カ月の練習の10倍もの質・量に匹敵するはず。今後の飛躍へとつなげてほしい。





老練なホイラー・グレイシーに果敢に勝負を挑んだ。

KAZUYUKI MIYATA
みやた・かずゆき

1976年1月29日生まれ、28歳。茨城県出身。茨城・土浦日大高～日大卒。中学時代の1990年に全国王者へ。茨城・土浦日大高校と日本大学時代は2、3位が多かった。99年に全日本選手権フリースタイル63kg級で初優勝。シドニー五輪予選最終ステージで出場資格を獲得した。同五輪は13位。01年に69kg級へ上げ、世界選手権出場を果たした。02年はけがのため世界選手権代表をはずれたが、全日本選手権で優勝した（階級区分が変わり66kg級へ）。その後、アテネ五輪を狙ったが、池松和彦に早々と代表を決められてしまい、グレコローマンで五輪出場を目指したものの、実現しなかった。

背筋300kgの怪物がMMAを揺るがす
中尾芳広

中尾芳広（フリー）がレスリングのアテネ五輪国内予選直前にK-1入りしてから1年が経った。11月20日にハワイ・ホノルルで行われた「ランブル・オン・ザ・ロック」に出場し、地元ハワイ出身のウェスリィ"キャベツ"コレイラに判定勝ち。UFCで活躍しタフな試合ぶりが持ち味のコレイラ相手に、目じりから出血させるほどパウンドをたたき込み、一時はマウントポジションを取るなど追い込んだ。

5月のK-1「ROMANEX」におけるドン・フライとの無効試合の後味の悪さを払しょくし、本格的にエンジンがかかり始めようとしていると言っていい。

03年秋、アテネ五輪の国内予選スタートを前にしてK-1入りした中尾の行動は、周囲を驚かせた。K-1から声がかかっていたことは確かだった。01年12月の天皇杯全日本選手権で、観戦に来ていたK-1の石井和義プロデューサーの目に最も強く焼き付けられたのが中尾だった。

「あの首の太さ。すごい体をしている。1年間鍛えれば、K-1ジャパンの王者になれるよ」。当時、日本人ヘビー級のK-1ファイターの育成が思うように進まず頭を痛めていた石井プロデューサーは、レスリング・トップ選手の体力のすごさに舌を巻いた。

しかし石井プロデューサー（当時）が強引に中尾を引き抜いたわけではない。同プロデューサーは日本レスリング協会の富山英明強化委員長（84年ロサンゼルス五輪金メダリスト）と懇意である。中尾をめぐって多少の行き違いはあったものの、富山委員長は「信義を通してくれた」と話しており、あくまでも本人の希望が最優先としてあった。

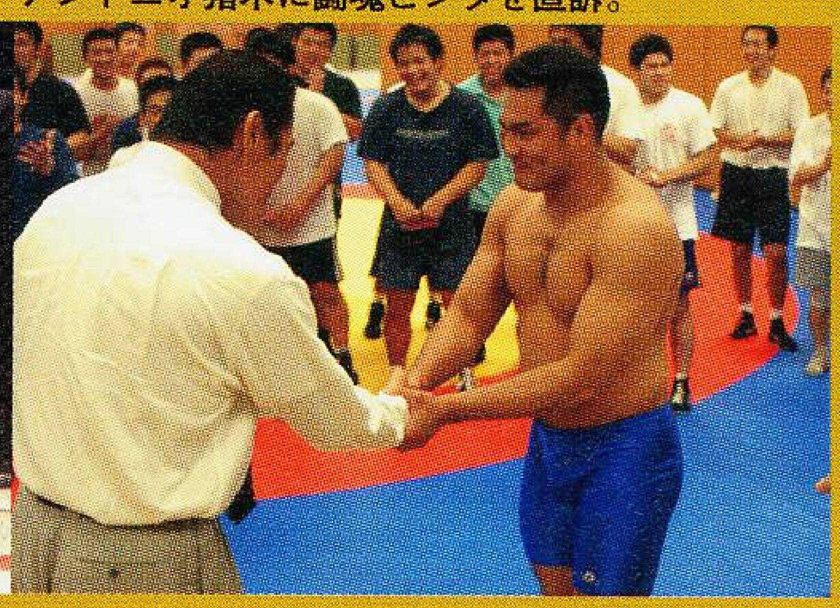
アマチュアでスポーツをやっている以上、オリンピック出場は夢。レスリングはプロがないため（プロレスは全く別のジャンルと解釈）、なおさらのことだ。

アテネ五輪の第1次予選となる03年9月の世界選手権で10位以内に入れれば五輪出場資格が手に入った。中尾はあと1勝でベスト8というところまで進みながら、"あと1ポイント"が取れずに無念の涙をのんだ。

コレイラ戦はMMAでの大きなステップとなった。



アントニオ猪木に闘魂ビンタを直訴。





「1年間鍛えればK-1ジャパンの王者になれるよ」（石井館長）

YOSHIHIRO NAKAO
なかお・よしひろ

1972年6月25日生まれ、32歳。東京都出身。東京・東京工高〜東洋大卒。東京・東京工業高校時代は全国大会無冠。東洋大時代もあと一歩で学生タイトルには無縁だった。自衛隊に進み96年国体82kg級で優勝するが、日本一はなし。01年、「29歳5カ月28日」という史上4位の遅咲きで全日本初制覇。02年にアジア大会と世界選手権出場を果たし、全日本選手権も制す。03年世界選手権では五輪出場資格を取る直前までいったが無念。その後、アテネ五輪の道を捨ててプロ入りした。

それでも世界における自分のいる位置が分かり、翌年冬に行われる2度の第2次予選で出場資格を取る可能性は十分にあった。それらをすべて投げ捨てK-1へ走った。それだけに、何が何でもプロで成功しなければなるまい。

デビュー戦を前に、ほぼ同じ階級のレスリング選手だった藤田和之（=猪木事務所／藤田はフリー100kg級、中尾は階級区分が変わりフリー96kg級）に対戦要求を突きつけるなど当初からプロ向きの破天荒な言動を発揮した。

東京工業高校時代の恩師の中根和広レスリング部監督は「プロレス志望でした」と話す。こうしたパフォーマンスは"プロレス少年"として身についたものだろう。

02年6月に、アントニオ猪木が全日本チームを訪れて選手を激励した時、突然立ち上がって「猪木さん！ 闘魂ビンタ、お願いします！」と直訴したのが中尾だった。もちろん独断でやった行動ではない。中尾のプロレス好きを知っていた某コーチが、「突破口はおまえしかいない」とそそのかし、中尾もこれを受けて実行したもの。彼ならそれを率先してやってくれる度胸があるとコーチも見込んだのである。

度胸だけでなく、体力も素晴らしいものがある。97年1月に実施した全日本チームの体力測定でマークした背筋力300kgは、これまでに日本レスリング選手の出した最高記録だとか。

レスリング選手の背筋力は、五輪代表選手やそれに近い選手なら、軽中量級で150〜200kg、重量級で200〜250kgの数値を示す。95年フリー90kg級世界5位でパワーのある選手として通っていた川合達夫が249kg、フリー130kg級のソウル五輪代表で10度の全日本王者に輝いた小幡弘之で253kgだ。

中尾の出した300kgが、いかにすごいかが分かろうというもの。全日本チームの体力測定は毎年実施しているわけではないので、藤田和之の数字は不明だが、おそらく300kgはマークしていないだろう。

藤田はデビュー戦でハンス・ナイマン（オランダ）をけさ固めで絞め上げて勝ち、"霊長類最強"とさえ言われたマーク・ケアーを圧倒勝利したことで、「日本選手にもこんなパワーのある選手がいるんだ」と印象づけた。

中尾がその体力からくる格闘能力をフルに発揮したなら、藤田以上の活躍を期待していいことになる。藤田はプロレスラーとしての知名度があり、ファンもデビュー戦から大きな注目を寄せた。中尾にはそれがない分、まだファンに強い印象を与えてはいないが、コレイラに殴り勝った事実は、世界の強豪を相手に通用するパワーファイターになる可能性を十分に示した。自信をもって2年目に臨めば、藤田超えもありうる。

コレイラ戦の勝利のあと、大みそかの「Dynamite!!」でフライとの再戦を希望し、「今回はキャベツを千切りにした。次はは(フライ)たたきだ」とウィットの利いたコメントを口にした中尾。「自分がいなければDynamite!!は盛り上がらない」とまで言う"マウスパフォーマンス"はプロとして立派。

次戦はぜひともスカッとしたKO勝ちを飾り、その卓越したパワーをファンに印象づけてほしいと思う。

レスリングエリートがやってきた!
MMA

1ポイント"が取れずに無念の涙をのんだ。

PRIDEが現役バリバリのレスリンｸﾞエリートを獲得した。00年シドニー五輪金メダリストであり"アレクサンダー・カレリンを破った男"として名高いルー

カンレスリングがベストの格闘技であることを証明したい」と口にしたように、米国レスリングの威信がかかる闘いといっていいかもしれない。

ガードナーがどんな闘いをするのかは全く未知数だが、これまでのレスリング選手の勝ちパターンといえば、タックル

してくることが予想される。その引きつけの力は尋常ではない。吉田の体を捕まえ、身動きできないようにしてからテイ

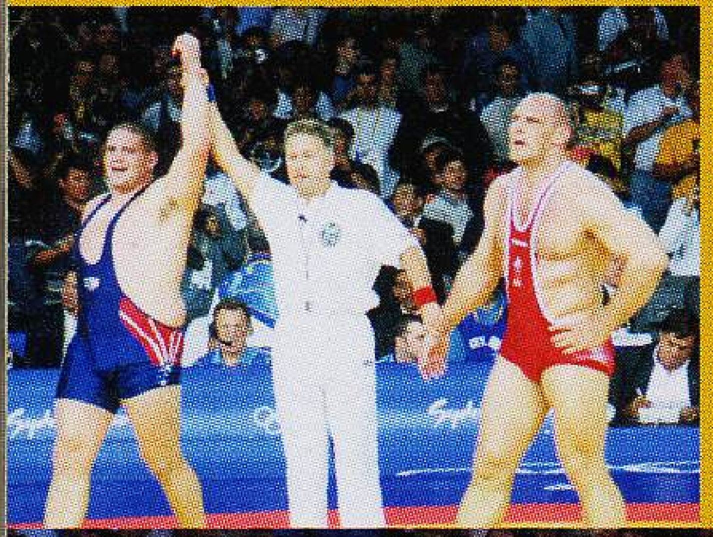
PRIDEが現役バリバリのレスリングエリートを獲得した。00年シドニー五輪金メダリストであり"アレクサンダー・カレリンを破った男"として名高いルーロン・ガードナー(米国)である。彼と吉田秀彦との金メダル対決は、格闘技界に大きな話題を投げかけた。

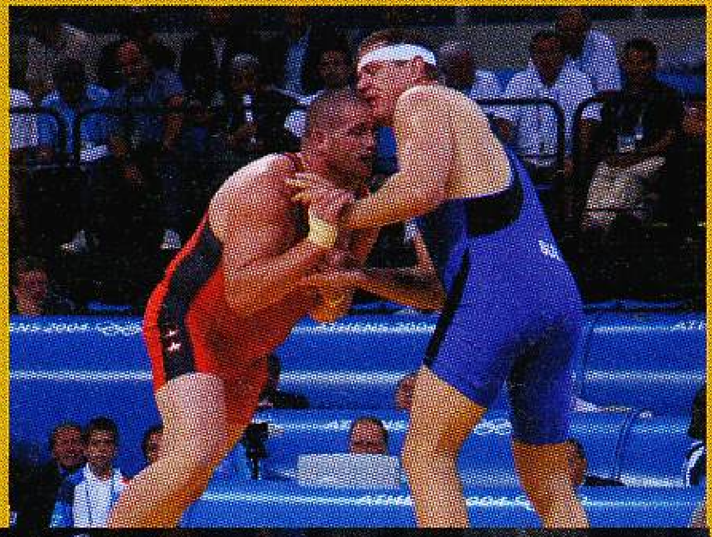
ガードナーはグレコローマン130kg級(階級区分変更で02年から120kg級)で活躍。00年のシドニー五輪では、12年以上にわたって無敗を続けた、あのカレリンに土をつけ、一躍米国のヒーローとなった選手である。ネブラスカ大学時代にはタイトル歴もなく無名の存在であったが、そこからはい上がって栄光を勝ち取った努力家だ。01年には世界選手権でも優勝。米国のグレコローマン選手で、五輪と世界選手権の両方を制したのは唯一、彼だけだ。

しかし、その後悲劇が彼を襲う。02年の2月に雪山で遭難してしまったのだ。摂氏マイナス30度の山の中で17時間の遭難。この事故により、凍傷で右足中指を切断するという非情な結果を招いてしまった。しかし驚異の精神力でリハビリを行い、見事復帰。しかも、この夏のアテネではなんと銅メダルを獲得するという奇跡的な復活をとげた。やはり常人とは思えない。

グレコローマン130kgでカレリンがらみとなると、マット・ガファリ(米国)が"カレリンと善戦した"を売り物に、02年8月の「LEGEND」に出場。小川直也相手に惨敗を喫し、観客の失笑を浴びたことがあった。あの時のガファリは現役を引退して数年たった40歳。下っ腹の出具合は悠々自適な暮らしをしていたことをうかがわせた。

同年11月の世界女子レスリング選手権(ギリシャ)で米国レスリング協会の広報担当者(USA協会HP担当者)にガファリの話をしたところ、笑ってしまって取り合ってくれなかった。その彼がガードナーのPRIDE入りはHP上にきっちりと掲載した。ガードナーが「アメリカのレスラーの代表として戦う。アメリカンレスリングがベストの格闘技であることを証明したい」と口にしたように、米国レスリングの威信がかかる闘いといっていいかもしれない。遭難という大ピンチからオリンピックにまで這い上がってきた男である。かませ犬で終わるはずがない。





カレリンを破り、手を挙げられるガードナー

RULON GARDONER

ルーロン・ガードナー

1971年8月16日生まれ、33歳。米ワイオミング州出身。00年シドニーオリンピック金メダル(カレリンを破る) 01年世界選手権優勝 02年雪山遭難の事故に遭うが、その後復活。03年世界選手権10位、04年アテネオリンピック銅メダル。

レスリングエリートがやってきた!

MMA

「アメリカンレスリングがベストの格闘技であることを証明したい」

不屈のエリートレスラー

ルーロン・ガードナー



ガードナーがどんな闘いをするのかは全く未知数だが、これまでのレスリング選手の勝ちパターンといえば、タックルでテイクダウンを奪い、上からのパウンドでKOという攻撃だった。

レスリング選手のトップポジションを取る能力というのは、マーク・コールマン、ランディー・クートゥア、ケビン・ランデルマンなどに見られるように他競技出身選手を大きく上回っている。

レスリング時代のガードナーは決して多彩な技を使う選手ではなかった。鉄壁のディフェンスで相手の攻撃を許さず、相手を追い込んでポイントにつなげるタイプだ。

92年バルセロナ五輪フリー82kg級金メダリストのケビン・ジャクソン(米国)なども、レスリングにおいては決して積極的に攻撃する選手ではなく、防御の強さで五輪チャンピオンに上り詰めたような選手だった。そんな彼が、総合のリングでは素早くテイクダウンを奪い、パウンドでの連打でKO勝ちを連続している。トップクラスのレスラーというのはそういうものだ。

まして、吉田との約30kgの体重差を考えれば、組みついて、腰投げ、あびせ倒しなど、あらゆるテイクダウンを繰り出してくることが予想される。その引きつけの力は尋常ではない。吉田の体を捕まえ、身動きできないようにしてからテイクダウンを奪い強力なパウンド、というパターンも目に浮かぶ。五輪トップレスラーの資質、30kgの体重差、そして地獄から這い上がった精神力。さすがに脅威といわざるをえないだろう。

レスリング選手は下から攻撃されたことがないため、下からの関節技をどう克服するかが大きなポイントにはなるが、130kgの全体重をかけられ、重いパンチを振り下ろされたら、吉田といえどもそうそう反撃できるとは思えない。

ケビン・ジャクソンの総合での戦いは、2年足らずで終わった。古巣のレスリングから全米ナショナルチームのコーチ就任の話があったからで、総合を続けていればどうだったかは分からないが、やめる前には戦い方を研究されてしまい、初期の旋風が失速していたことは確かだった。

ガードナーいわく、「1度頂点に登り詰めたが、別の分野で頂点を目指す気持ちになり切れなかったのではないか」と分析している。それは、自らも五輪金メダリストのプライドを捨てない限り、「PRIDEのリングでは通じない」と言い聞かせているようでもある。この気持ちを本心から実行できたなら、本当に恐ろしい選手になるだろう。

しかし何といっても気になるのは彼のトレーニングパートナーたちだ。UFCで活躍しているマット・リンドランドはネブラスカ大時代の先輩。このリンドランドやクートゥア、ダン・ヘンダーソンが所属するチーム・クエストがガードナーの今の練習場所である。レスラーが自分に欠けている総合のノウハウを学ぶにあたっては世界でも最高の場所と言って間違いないだろう。

10・31「PRIDE28」のリング上で握手した吉田が「すごいゴツい手。あれで殴られたらヤバイ」と話したように、体力的には申し分ない。とにかく第1戦を見たい。果たして、どんな闘い方を見せてくれるのだろうか。

アテネ五輪グレコローマン96kg級の金メダリスト

カラム・イブラヒム

190cmの長身で見事にビルドアップされた肉体は、宙返りも楽々とこなすトップアスリート。アテネ五輪金メダリストのイブラヒムはレスリングの試合で見られるパフォーマーぶりもまさにプロ向きの逸材だ。

横森綾＝取材・文　樋口郁夫＝撮影
text by Aya Yokomori　photo by Ikuo Higuchi

Athens Olympic
gold medalist
A somersault is easily.

カレリン以来の豪快な投げ技を決める重量級

「恋をしてしまいました」

五輪閉幕まであとわずかとなったある日。オリンピックのレスリングを初めて見たある日本人女性が、アテネの強い日差しで小麦色に日焼けした顔を輝かせて打ちあけてくれた。

様々な競技を見歩いた末、グレコローマンスタイル96kg級の金メダリスト、エジプトのカラム・イブラヒムに目が釘付けになったのだという。

先頃、大晦日に格闘技デビューが発表されたイブラヒムは、間違いなく、アテネオリンピックでもっとも輝いていたアスリートのひとりだった。

190cmの長身に、見事にシェイプアップされ、均整がとれた体。「映画スターのよう」と海外メディアでも紹介されたエキゾチックで端正な顔立ちは、広いオリンピック会場でもひときわ目をひく。

派手なのはルックスだけではなかった。

とにかく投げる、投げる。レスリングの重量級でこれほどスリリングな試合を見せてくれたのは、最重量級でありながら俵投げを得意とし、人類最強と呼ばれたカレリン以来かもしれない。

物静かでクールだったカレリンが、強者の渋い魅力を静かに放っていたのとは対照的に、イブラヒムは陽気に喜びをアピールする。

強さだけでなく、パフォーマンスも忘れない。勝利の感激に恍惚としながら、客席に繰り返し投げキッス。金メダルに決まると、丁寧に審判と握手を交わした後、セコンドのコーチをくるりと投げた。

そして、大きな体をものともせずに宙返り。国旗を手に持って場内を一周し、56年ぶりにエジプトが手にした金メダルの感激に酔いしれた。

さらに表彰式後には、メダルとともに渡された花束を、客席にいた美しい女性に投げ入れた。

キザとしか言いようがないこれらのことを、こともなげにやってのけ、嫌みがない。強さと明るい華やかさをあわせ持つ、新しいスターが誕生した瞬間だった。

4年前、シドニー五輪の出場枠をかけた二次予選が進行していたとき、やっと20歳だったイブラヒムは、ようやくアフリカ以外の選手が集まる大会に姿を現しはじめたころだった。

同じ頃、日本チームに帯同したコーチによれば、イブラヒムは「持ち上げる技、リ

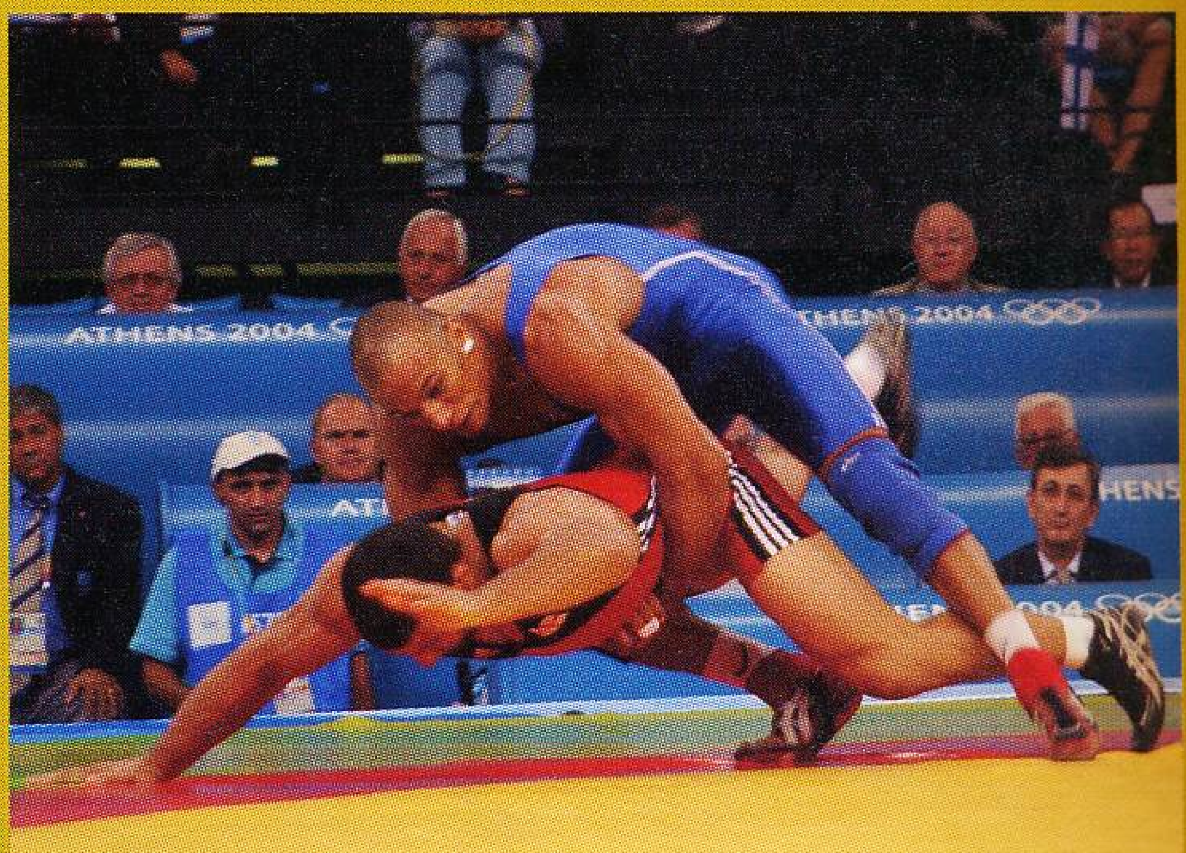
12.31K−1Dynamite!!に参戦



レスリングエリートがやってきた!
MMA

カレリン以来の豪快な投げ技を決める重量級





Abcd Efgh
カラム・イブラヒム

1979年9月1日、エジプト生まれ。25歳。身長190cm、体重96kg。6歳からレスリングを始める。02、03年の世界選手権で連覇。初の五輪出場となったアテネでは、グレコローマン96kg級で金メダルを獲得した。エジプトのメダルは84年ロサンゼルス大会の柔道・無差別級のラシュワンの銀以来20年ぶり、金メダルは48年のロンドン大会以来56年ぶりだった。

（左）11月20日（現地時間）、ハワイでイブラヒムの大晦日の参戦が発表された。公開トレーニングでは豪華な投げを連発。（下）アテネ五輪にて。強靭な背筋力で後ろに引っこ抜くように投げようとするイブラヒム。

フトはすばらしい。しかし、雑な選手」という印象にとどまっていたという。

その感想通り、防御がほとんどできなかった彼は、シドニー五輪への出場は叶わなかった。

頭角を現しはじめたのは02年ごろから。母国エジプトへほとんど戻らず、冬から初春まではアメリカ、世界選手権前の初秋まではヨーロッパ各国の合宿に参加する強化方法に切り替えていた。

エジプトという国の歴史は長いが、その大半は戦争と混乱に満ちている。中東のどこの国でもそうであるように、近頃は過激派のテロに悩まされてもいる。

最近では97年に、ツタンカーメン王の墓で知られる王家の谷に近いルクソールで、日本人観光客10人を含む69人が死亡した観光客襲撃事件が起きた。それから外国人の足が遠のき、日本からも2年間、まったく観光ツアーが組まれなかった。

治安が安定しない国で、トップレベルのスポーツ選手を養成するのは難しい。しかし、未来を形作るには、ロールモデルとなるスターがほしい。

個人種目であるレスリングは、マットとレスリングシューズ、レベルが高い練習相手を確保できれば、強くなれる。自国での養成が難しければ、強い者がいる場所へ行けばいい。イブラヒムの選択はシンプルでかつ、合理的だった。

経験を積むとたちまち成績を収め始めた。前哨戦といわれるヨーロッパ各地での国際大会で世界王者を破るなどし、02、03年と世界選手権では連続して銀メダルを手にする。

フランスで開催された03年の世界選手権では、豪快な投げ技を次々繰り出すイブラヒムは、すっかり人気者になり、観客も味方につけてしまっていた。途中、彼に不利な判定がつけられると、ルール通りに裁定されているにもかかわらず、審判へブーイングが飛ぶほどだった。

このとき、日本代表だった自衛隊体育学校の加藤賢三は、予選リーグでイブラヒムと対戦し判定負けしたものの、善戦している。

「対戦前から、強いとの噂は聞いていました。実際に見て手を合わせると、話に聞いていたよりも、ずっと上でしたね。大技を出す能力の高さはもちろん、華がある選手だと思いました。彼のまねをしろと言われても難しいです。同じように動けるものではないですよ。

あのときは運がよくて5点も取り返せましたが、それは大きくリードした彼が勝利を確信していたから。今思い返しても、どうやって点を取ったのかよく思い出せません。偶然やミスをしてくれたときでなければ、勝つのは難しい相手だと思います」

日本人でただひとり、イブラヒムと試合をした加藤によれば、たとえルールが違う試合であっても、彼が負ける姿は想像しづらいという。

「やっぱり強いだろうと思いますよ。反り投げで持って行かれちゃうんだろうな」

と、まるで対戦相手に同情するかのような言葉が続いた。

5人の兄弟と2人の姉妹に囲まれて、クレオパトラが宮殿を構えた街、エジプトのアレキサンドリアでイブラヒムは育った。子供の頃から彼は、運動能力が抜きんでていたらしい。

6歳だった彼がレスリングを始めるきっかけを与えた、今はニューヨークに住んでいる兄のアデルが、"弟ほど素早く動けたらよいのに"と羨ましく思ったほどだったという。

レスリングの合宿では、調整と気分転換を兼ねて、サッカーやバスケットボールなどの球技をトレーニングに組み込むことがある。ポーランドでの合宿でイブラヒムと一緒になったとき、そのしなやかさと能力の高さに驚かされた、と彼と同じグレコローマンスタイルでロサンゼルス五輪金、ソウル五輪銀の宮原厚次氏は言う。

「あまりにも高く跳び上がるジャンプ力に驚かされました。ただ跳ぶだけでなく、上へ伸びてゆくような感じなんです。アメリカのプロバスケットの選手のようでした。そういった運動能力の高さのおかげで、定石をはずれたレスリングができてしまうのでしょう。

ふつう、技をかけられないためには脇を締めて守るんです。ところが、彼は脇を空けて取らせるんですよ。そんなことをさせたら投げられてしまうのですが、彼は投げられない。しなやかに体を翻して、守りきってしまう。そして、逆に投げにゆくんです」

自らの身を危険にさらしながら、起死回生の豪快な投げ技を繰り出す。危うさと強さを同時に見せられたら、目にした者は嫌でも惹きつけられる。「恋をしてしまいました」という表現は、決してオーバーではない。

「彼は、どこの国の大会で見かけても、必ず女性と一緒ですね」

羨ましさが混じった口調で、ある選手がそう漏らしたことがある。実際、試合のとき以外は、いつも美女と連れだっている姿ばかりが思い浮かぶ。毎度、隣に立つ女性は異なるのだが。

彼に弱点はないのか？　ヒントは、03年世界選手権の決勝でスウェーデンのリドベリに破れたときに現れている。

グレコローマンスタイルの定石通り、脇を締めて接近戦を続けたスウェーデンのリドベリをイブラヒムは攻めあぐねた。得意の大技を出すチャンスを与えられないまま、判定負けで試合を終えた。

また、グレコローマンスタイルは、ルールで腰から下を攻めてはならない。そのため、低い姿勢への対処には慣れていないだろう。

接近戦と低い姿勢、この二つへの対処を、短期間の間にどこまでものにしているか。大晦日の試合の行方は、いずれにしても目が離せないものになるのは間違いない。

そして、格闘家となったイブラヒムに「恋をしてしまう」人はいったい、どのくらいいるだろうか？

アラブの英雄の新しい第一歩を見られる幸せをかみしめて、大晦日は過ごそう。

五輪で投げキス、宙返りのパフォーマンスも

だが、その"やるか、やられるか"といった姿勢こそが、滝本の滝本たるゆえんだ。
「気持ちが強い。根性がありますね。苦しくても絶対に顔に出しませんから」

とをしたくない気持ちが強い」
03年の世界選手権では秋山成勲や矢嵜雄大のカラフルな髪の色が論議を呼んだが、滝本はその走りなのだ。

4cm。6歳より柔道
門。学舎の同期には
谷学園高、日大を経
道81kg級で金メダル
のクラブチームで活
て、埼玉栄高職員。
袖釣り込み腰。

滝本の柔道は"やるか、やられるか"。抜群に切れる立ち技で一本しか狙わない。



"柔道界のファンタジスタ"はプロのリングでどう戦うか?

滝本の主な戦績
94年講道館杯優勝
95年アジア杯優勝
96年講道館杯準優勝
97年世界選手権3回戦敗退
97年ドイツ国際優勝
97年講道館杯優勝
98年講道館杯優勝
99年全日本選抜体重別選手権優勝
00年ドイツ国際優勝
00年全日本選抜体重別選手権優勝
00年アジア選手権3位
00年シドニー五輪金メダル
01年全日本選手権5位
02年講道館杯優勝
04年ロシア国際3回戦敗退
04年全日本選抜柔道体重別選手権2位

シドニー五輪金メダリスト
滝本誠

**また一人、柔道家が総合にやってくる。
誰の口をついても出てくる言葉は「天才」。
五輪の金メダリストという申し分ない実績に加え、
現在も世界の頂点に近い位置にいながら
こちらの世界にやってくるのだ。
柔道の天才は、リング上でも天才たり得るか?**

和良コウイチ=取材・文　共同通信（滝本）=写真提供
text by Koichi Wara

トップアスリートたちの総合参戦

天才がやってくる。シドニー五輪柔道81kg級金メダリスト、"柔道界のファンタジスタ"滝本誠が総合格闘技の世界にやってくるのだ。

内股や袖釣り込み腰といった技の切れは抜群。その勝負勘も素晴らしい。関係者に聞けば、「天才」「技がすごく切れる」といった言葉が誰の口からも出てくる男だ。

滝本とは講道学舎で同期であり、今も親しい間柄にある"ヒョードルに一本勝ちした男"小斎武志は以下いろいろと証言してくれた。

「一本気な男です。どちらが上か、力と力の勝負をしたがるし、"一本"に本当にこだわる」

常に攻撃的な柔道。"古賀二世"とも言われた天才肌は、立ち技の切れでは日本一だった。常に一本を狙って攻めるということは、同時にそれだけリスクを負うということ。見ていて、ひやりとする場面も少なくない。

初めて茶髪にしたトップ柔道家。柔道界の"異端児"だった。

だが、その"やるか、やられるか"といった姿勢こそが、滝本の滝本たるゆえんだ。
「気持ちが強い。根性がありますね。苦しくても絶対に顔に出しませんから」
気持ち、そしてスタミナがズバ抜けていることを表すのは、世田谷学園時代の金鷲旗（団体戦）。2日間の団体戦で、滝本は1日10人以上抜くこともあった。
「でも、どんなときでも絶対にバテた顔はしないんです」
天才は、ときに"異端児"扱いされることも多かった。伝統や格式が重んじられる柔道において、初めて"茶髪"で試合に出たトップ選手は滝本だった。
「昔から目立ちたがりだった。人と同じことをしたくない気持ちが強い」
03年の世界選手権では秋山成勲や矢嵜雄大のカラフルな髪の色が論議を呼んだが、滝本はその走りなのだ。
これまで報道されてきたエピソードの中からも、滝本という男を表す話を紹介しよう。
中学時代は講道学舎の先輩にあたる吉田秀彦の内股に憧れ、ずっと同じ技ばかりを練習。だがバルセロナ五輪では吉田が金メダルを獲得し、他の塾生が喜ぶ中、滝本は一人「先輩をオレが倒して、メダルを獲ってやる」と感想文に書いたという。
大学は日大に進学。だが、新入生がやらされる洗濯や雑用を「そんな時間があったら練習したほうがいい」と拒否。練習量で先輩たちを黙らせ、自分が4年になって主将になると、先輩の柔道衣を洗う伝統を廃止した。
また、酒が大好きで、飲み会では必ずといっていいほど酔いつぶれた。大学1年のときには暴飲暴食がたたって肝臓を壊し、約1年を棒に振ってしまう。
常にマイペースの滝本は、シドニー五輪前の強化合宿でもほとんど単独行動。ランニング中も他の選手はトレーニングウェアなのに、滝本だけサッカーの欧州有名クラブのユニフォームを着用。かなり浮いていたという。
シドニーの決勝では勝利が決まった途端、試合終了の挨拶を忘れてコーチに抱きつく。コーチが必死に「戻れ！戻れ！」とジェスチャーするも、滝本は抱きついたまま離れない。審判に注意され、報道には批判記事も。
表彰式では君が代が流れる中、大好きなサッカー選手のカズがやるように、胸に手を当てていた。これは金メダルを取ったらやると、予告していたという。
このようにキャラクターとしても確かにプロ向きといえるが、しかしなぜいまこの時期に、滝本は総合格闘技へ転向という道を選んだのだろうか。アテネ五輪代表の座は逃したとはいえ、04年4月の代表選抜の最終予選となる体重別では2位だった。まだ世界選手権、五輪といった頂点を狙える力はあると思えるが…。

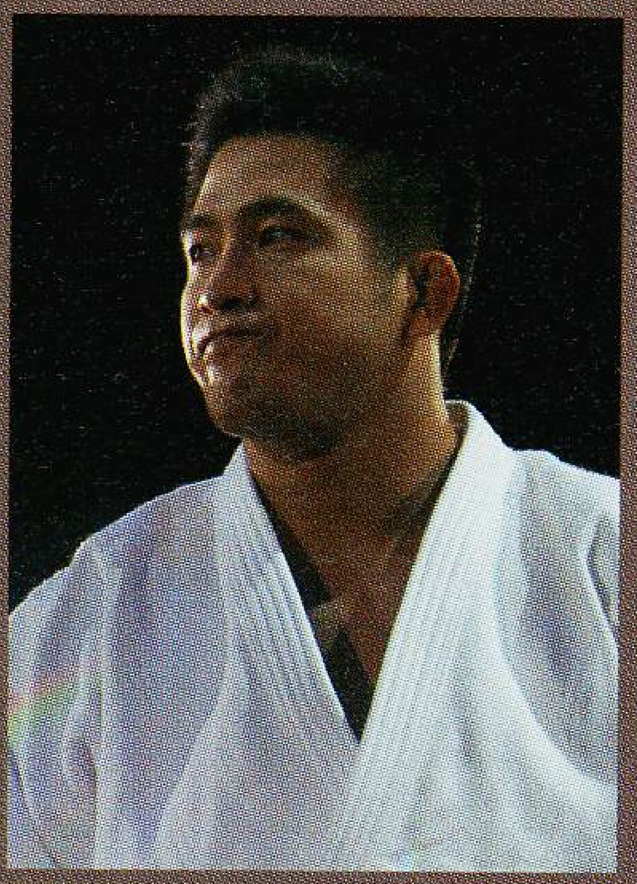
Makoto Takimoto
たきもと・まこと
1974年12月8日、茨城県岩井市出身。身長174cm。6歳より柔道を始め、中学1年から名門・講道学舎に入門。学舎の同期には大山峻護、小斎武志がいた。弦巻中、世田谷学園高、日大を経て、ＪＲＡに所属。00年にシドニー五輪柔道81kg級で金メダルを獲得。02年にＪＲＡを退社し、フランスのクラブチームで活動。03年に帰国し、高柳喜一商店、武興を経て、埼玉栄高職員。04年11月に退職届を出す。得意技は内股、袖釣り込み腰。

滝本の柔道は"やるか、やられるか"。抜群に切れる立ち技で一本しか狙わない。

「まだその力は十分にあります。でも正直30歳になったし、それを（柔道界が）許さない感じが…。やっぱり若い選手のほうにチャンスを与えるだろうし」
でも、滝本は即決の男です。悩まず行動するし、思ったことはすぐ実現したいタイプ。人がああいうからこういうからって変わる人間じゃない」
思い込んだら一本気なこの男は、もう総合の頂点を目指し気持ちを完全に切り替えていることだろう。
では、総合格闘家としての可能性はどうだろうか。切れ味鋭い立ち技も、総合では単なる一つの要素に過ぎなくなる。柔道の試合では寝技の印象は薄いが…。
「寝技も弱くないですよ。（吉田）秀彦先輩がプロになる前と比べたら…（笑）」
最近はGスクエアに行き始めて、裸のグラップリングはやっているようだ。だが、打撃の対処を身につけるには、あまりに準備期間がない。
柔道の元強化指定選手であり、柔術でも活躍している寝業師・小室宏二は言う。
「確かに滝本選手は、寝技はあまりやらないですね…。でも以前に古賀さんが『相手が道衣を着ていたらサップでも投げられる』と言っていたけど、滝本さんもジャイアント・シウバを投げられると思う。面白いマッチメイクをしてほしいですね」
吉田秀彦のプロデビュー戦がホイス・グレイシーだったように、手の合うマッチメイクが求められるところ。滝本の通常体重は85、86kgらしいが、いずれはホイスやヘンゾ、ホドリゴなどのグレイシー勢とやらせてみるのも面白そうだ。マッチメイク次第では、リング上でも"ファンタジスタ"ぶりを発揮するだろう。

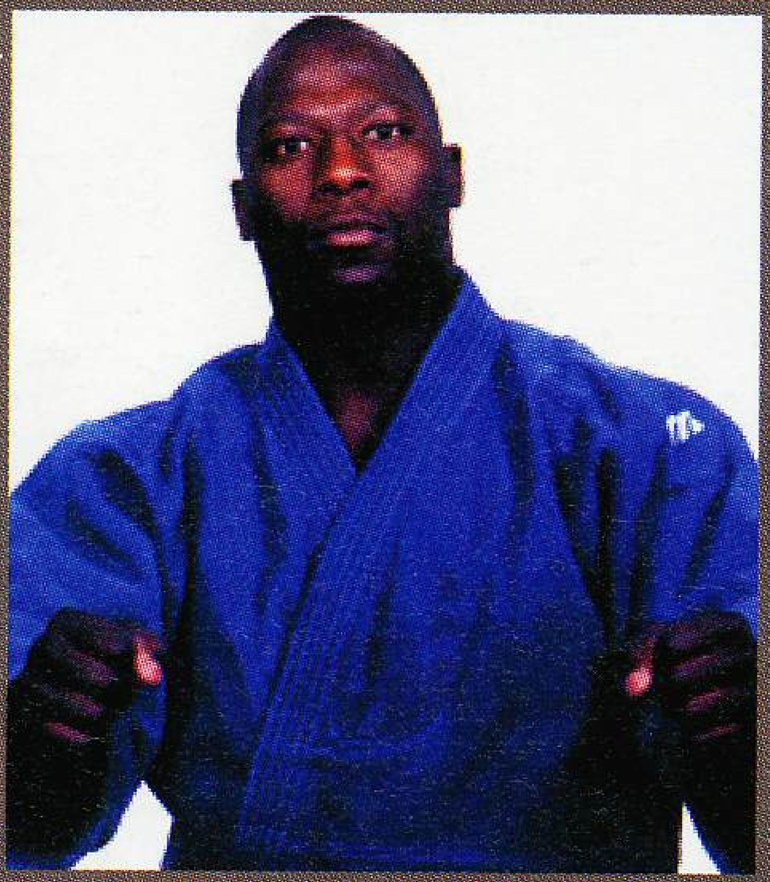
実績ある柔道家の総合転向




吉田秀彦（吉田道場）
92年バルセロナ五輪
78kg級金メダリスト
秋山成勲（フリー）
02年アジア大会81kg級優勝
中村和裕（吉田道場）
02年ドイツ国際100kg級優勝
大山峻護（フリー）
99年ベルギー国際81kg級3位
高森啓吾
（パンクラスMEGATON）
99年アジア選手権100kg超級2位

五輪アメリカ代表も総合転向？



アテネ五輪柔道アメリカ代表のラディ・ファーガソンがATT(アメリカントップチーム)入りした。ファーガソンは柔道全米選手権では00年から03年まで優勝、アテネ五輪の柔道100kg級アメリカ代表となる(2回戦敗退)。ヒクソン系の柔術黒帯ロイド・アーヴィンの道場で練習を始め、柔術も茶帯の腕前。北京五輪を狙っていると公言していることから、今回のATT入りがすなわち総合転向とは限らないが、近い将来何か動きがあるかもしれない



滝本の
94年講道
95年アジ
96年講道
97年世界
97年ドイ
97年講道
98年講道
99年全日
00年ドイ
00年全日
00年アジ
00年シド
01年全日
02年講道
04年ロシ
04年全日

た。常に一本を狙って攻めるということは、同時にそれだけリスクを負うということ。見ていて、ひやりとする場面も少なくない。

エリート・アスリートが残す、教訓。

柔道　ソウル五輪銅メダリスト［ベン・スパイカース］
レスリング　ソウル五輪金メダリスト［ケニー・マンデー］
レスリング　バルセロナ五輪金メダリスト［ケビン・ジャクソン］


エリック・パーソンのパンチを浴び目の回りは腫らし、実弟のビムに傷をみてもらうベン・スパイカース。

空前のエリート・アスリートのMMA転向ラッシュ。
総合格闘技バブルを目の前にし、
10年前に総合に挑戦した柔道家、
8年前に総合に挑戦したレスラーの存在を思い起こさせる。
エリート・アスリートとしてMMAに挑戦した先駆者たちは、
総合格闘技界にどんな影響を与え、現代のエリートたちに何を残したのだろうか。

高島学＝文
text by Manabu Takashima

長尾迪＝撮影（ケビン・ジャクソン）
photo -Kevin Jackson- by Susumu Nagao

オリンピックのメダルという燦然と輝く勲章を持つエリート・アスリートが、総合格闘技のリングに足を踏み入れようとしている。

2004年暮れの話ではない。1995年7月29日、埼玉県大宮市（現・さいたま市）にある大宮スケートセンターで行われたプロフェッショナル修斗公式戦。

メインイベントでエリック・パーソンと対戦するのは、オランダ人柔道家ベン・スパイカースだ。

自らの階級と無差別級で国内選手権を19度も制し、ロサンゼルス～ソウル～バルセロナ、3度のオリンピック出場経験を持つバリバリのワールドクラス。ソ連や東欧諸国がボイコットしたロスで7位、東西が8年振りに顔を揃えたソウルでは、86kg級で銅メダルを獲得している。

この試合が行われた3年前のバルセロナは、再び7位。PRIDEもK-1ROMANEXもない時代、UFCが始まって1年8ヵ月、まだまだ怪しげなマーシャルアーツ使いの出場が多く、五輪正式種目で成功を収めた人間が、UFCやバーリトゥードに出場すれば、問題なく勝てるという声は業界内部ですら、よく囁かれていた。

ただし、現在のように巨万の富を得られるような状態になかったMMA界に、揺るぎ無い社会的地位を既に手に入れたエリート・アスリートが参戦するなど夢の中の話でしかなかった。それがまだまだ格闘技界でも日陰の存在だった修斗に、五輪メダリストが参戦したのである。

「柔道ではやるべきことがなくなった」という理由で、総合挑戦を決意したスパイカース。決して、総合格闘技を馬鹿にしていたわけでなく、UFCのビデオを繰り返しチェックし、彼なりに対策をつんで、大宮スケートセンターのリングに上がっていた。

しかし、結果は無残なものだった。柔道衣を着用せず、オープンフィンガーをはめた彼は、すぐにパーソンの首の後ろを掴みにいき、パンチや蹴りをいいようにもらう。

一瞬の隙をつき、ロープ際で内股を決めたあたりは、五輪メダリストの面目躍如といったところだったが、その後はポジショニングの概念がなく、すぐに反撃を許してしまった。最後は打撃戦を嫌がり、腰高のタックルを仕掛けたところをギロチンチョークで切り返され、スパイカースは敢え無くタップを強いられた。

「エリックと戦って、総合の何たるかが分かった」と語ったスパイカースは、この3ヵ月後、第二のUFCという触れ込みでスタートした（実際は、最初で最後の開催となった）ワールド・コンバット・チャンピオンシップに出場、8人トーナメントの1回戦でヘンゾ・グレイシーと対戦した。

この試合もまた、試合前からさまざまな論議を呼ぶ一戦であった。

UFCのホイスの試合を見て、「あれはダメな柔道」、「柔道家なら誰でもあれぐらいの動きはできる」、「グレイシーは特別じゃない。五輪レベルの柔道家のように、体力のある者に彼らの技は掛からない」など、柔道の母国というプライドがうずくのか、日本では柔道家最強説は、一部で強く信じられていた。

果たして、柔道衣を着てケージに登場したスパイカースは、双手刈りでテイクダウンを奪ったものの、すぐにスイープを仕掛けられる。金網で跳ね返り難を逃れたが、ギロチンを片足タックルで倒され、ガードポジションを強いられる。

そして、ヒザを割られると、抑え込みを嫌う柔道家の癖が出て、パウンドも受けない前から、背中をヘンゾにあずけてしまい、襟絞めで落ちてしまった。ソウル五輪銅メダリストのMMA挑戦は、タップアウトと失神という結果で終焉を迎えた。

柔道の五輪メダリストから遅れること10カ月、ロス五輪金メダリストのマーク・シュルツがUFC9に出場し、ゲーリー・グッドリッジをTKOで下した。

ただ、シュルツはヒクソン・グレイシーの下に出かけ柔術を研究し、ボクシングも経験してからのオクタゴン入りだったため、バリバリのメダリストのMMA登場というセンセーショナルな話題にはならなかった。

レスリング・エリートのMMA挑戦の先駆者というイメージが強いのは、やはりケビン・ジャクソンとケニー・マンデーの二人だろう。ソウル五輪フリースタイル74kg級金メダリストのマンデーと、バルセロナ五輪フリースタイル82kg級金メダリストのジャクソンは、97年3月28日に米国のレスリングどころアイオワ州デモインで行われたエクストリーム・チャレンジに参戦。

エクストリーム・チャレンジは、地味ながら真の強豪が集う場所として、コアな人気を得ていたMMAプロモーションだ。

ジャクソンの対戦相手は、この2ヵ月前にハワイでフランク・シャムロックから判定勝ちを収めているジョン・ローバー。

マンデーは、前年に佐藤ルミナをボコったジョン・ルイスと対戦した。

ローバー、ルイスとも打撃だけでなく、ブラジリアン柔術をたしなむ、穴のない総合タイプのファイターだ。

そんな実力者を相手に、二人はテイクダウンを奪うと、殴る、殴る、殴り続けてダメージを与え、ルイスとローバーはまったく足を利かせることができなくなる。ルイスはそのままTKO負けし、ローバーに至っては、力任せの肩固めを極められ、一本負けを喫してしまった。

改めて、彼らの試合を振り返ってみても、二人が特別、総合格闘技を研究していたとは思えない。抜群の肉体能力を武器に、レスリングの最大の強み――テイクダウンを駆使し、あとはひたすら狩猟民族の遺伝子を掘り返したように殴りつけるだけ。それでも、名うてのMMAファイターを粉砕してしまったのだ。

スパイカースと、二人のレスラーの差は何だったのだろうか。

身もふたもない結論に行き着くが、それは彼らが長年培ってきた二つのスポーツ、柔道の技術と、レスリングの技術と、MMAとの互換性の差に過ぎない。

道衣を着て、掴む部分がある柔道。シングレット着用で、相手の体をホールドして、倒す必要があるレスリング。ともに打撃はなくても、MMAから打撃を外してみた場合、どちらの競技がより似て見えるのか。

議論の余地はないだろう。

そして、柔術が柔道に勝った。柔術がレスリングに勝ったと声を大にして叫ぶことが、いかにバカバカしい行為だったのかも、今となっては十分理解できるだろう。

柔術の技術は、道衣を脱いだ状態で十分に研磨され、UFCやエクストリームファイティングの時代を迎えていた。彼らは道衣がなくても、最もMMAにフィットした技術を持っていたのだから、勝って当然だったのである。

ただ、柔道の国際レベルにある選手や、レスリングの五輪出場選手の肉体の強さは、ずば抜けているといっても過言でない。ジャクソンとマンデーの出現により、「小さな者でも勝てる」「力のない者でも勝てる」という柔術家たちの言葉のマジックは、もう通じなくなった。

どんなに素晴らしい技術をもってしても、それを使い切る体力がなければ、絵に描いた餅でしかないことを総合の選手は、マンデーとジャクソンに教えられたのである。

同じ技術を極めた者同士が戦うと、大きい者が小さい者を制しやすいし、力のある者の方が、力のない者より強い。

当時のMMAファイターが、最も信頼を寄せていた〝技術〟の危うさに気づいたとき、MMAは総合格闘技にまた一歩近づいたのだった。

その証拠に、衝撃的なMMAデビューを果たしたマンデーとジャクソンだったが、マンデーはその後サブミッション・レスリングの大会「コンテンダース」で、マット・ヒュームのアンクル・ホールドに屈し、ジャクソンもフランク・シャムロック、ジェリー・ボーランダーという、ストレングスもテクニックにも長けている選手になす術もなく敗れている。

2004年も終えようかという今、黄金郷になったMMAの世界に、転向を決めるエリート・アスリートが続出している。

そのなかには柔道家もいるし、レスラーが含まれているのは知っての通りだろう。スパイカースやジャクソン&マンデーの時代とは比較にならないほど、MMAのレベルは上がっている。彼らが総合にチャレンジした時代は、今のように打撃を使い切るファイターなど、存在しなかった。

しかし、今や寝技やテイクダウンはできて当たり前、そこにいくつくまでの攻防でアドバンテージを握った選手が、総合格闘技という表現が相応しくなった現代MMAで生き残ることができる。

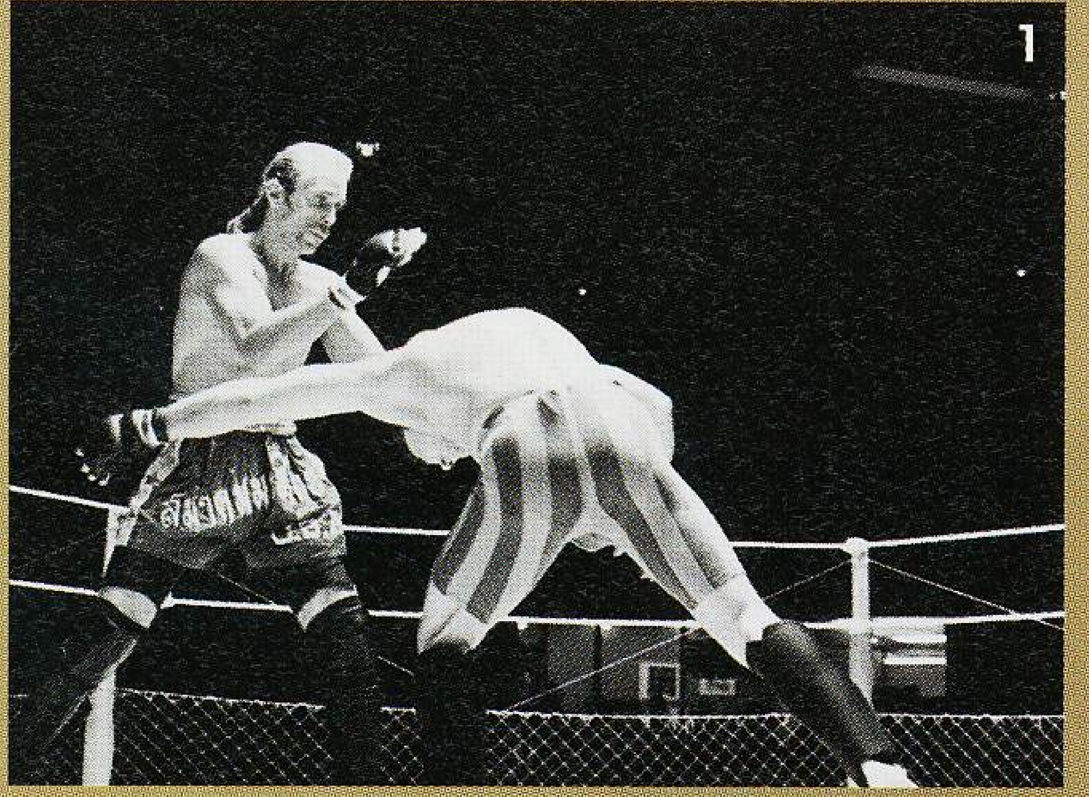
とはいうものの、戦いが厳しくなったのと反比例するように、それらの技術を学ぶ環境は以前と比較にならないほど整ってきた。スパイカースのようにいくら真摯な姿勢を持ってMMAに挑もうが、彼の時代のオランダでは、まともな総合格闘技を学べる場所など皆無だった。

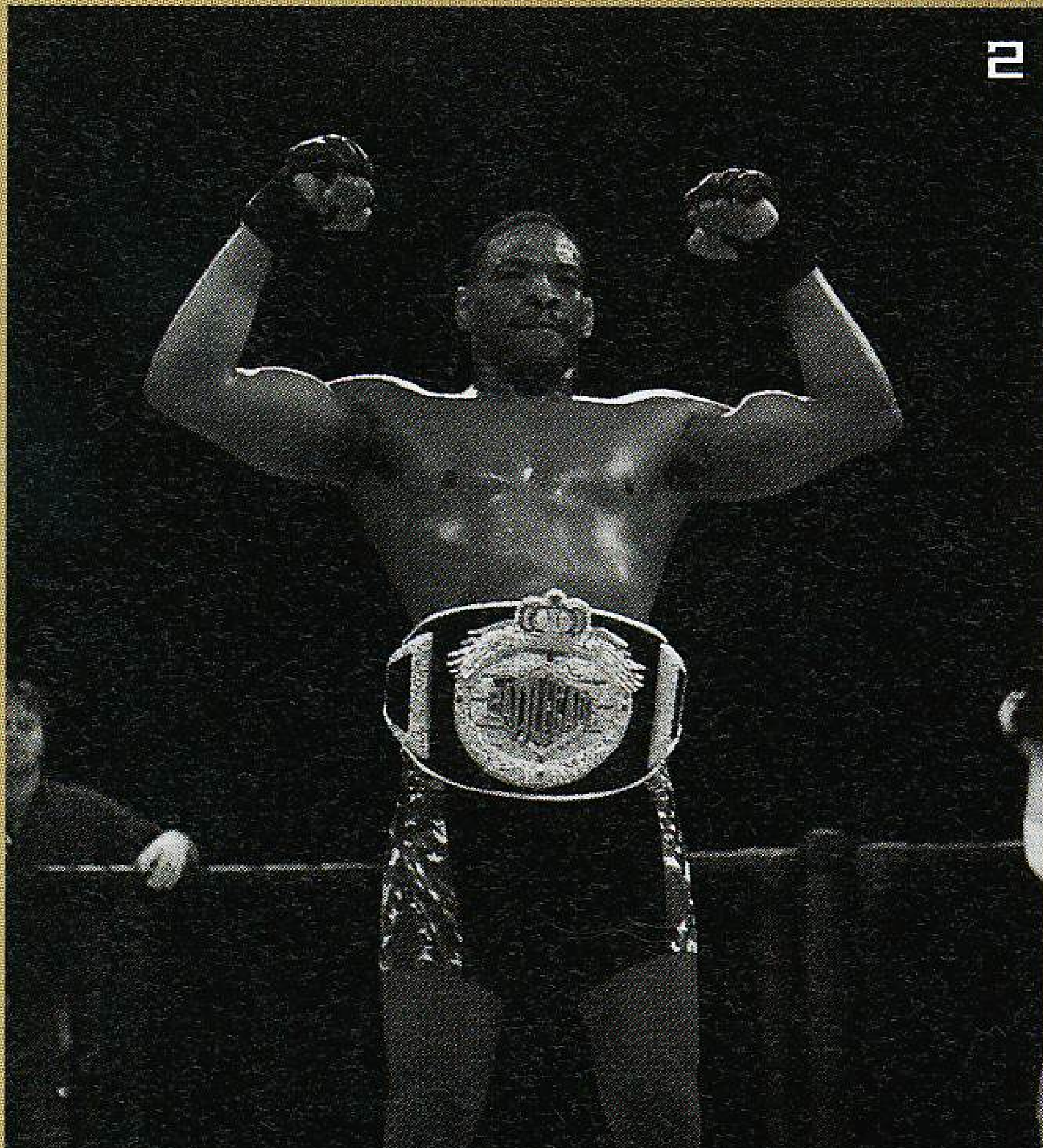
現代のエリート・アスリートたちは、解明つくされたMMA理論を踏襲し、体に染み込ませていけば良い。

その一方で、MMAファイターのフィジカル・トレーニングも進歩しているので、エリートたちの肉体的アドバンテージは、それほどではないかもしれない。となれば、いったい何が彼らのアドバンテージなのか。

それは世界中から国家を代表する選手が集まった厳しい競争を勝ち上がってきた自信と、通常では考えられないプレッシャーを跳ね返してきた心根の強さに行き着く。

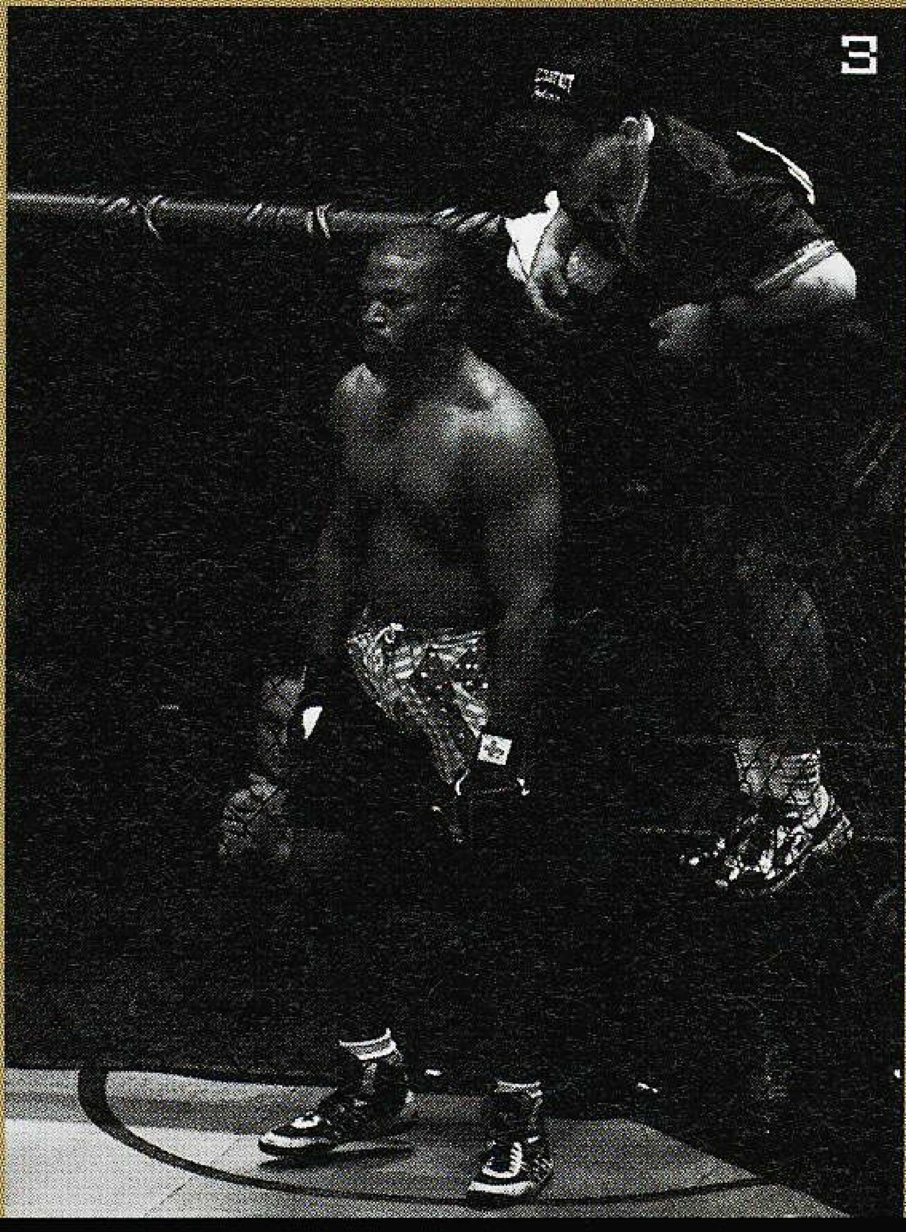
戦いを語るとき、最後の最後は根性論に辿り着くのである。

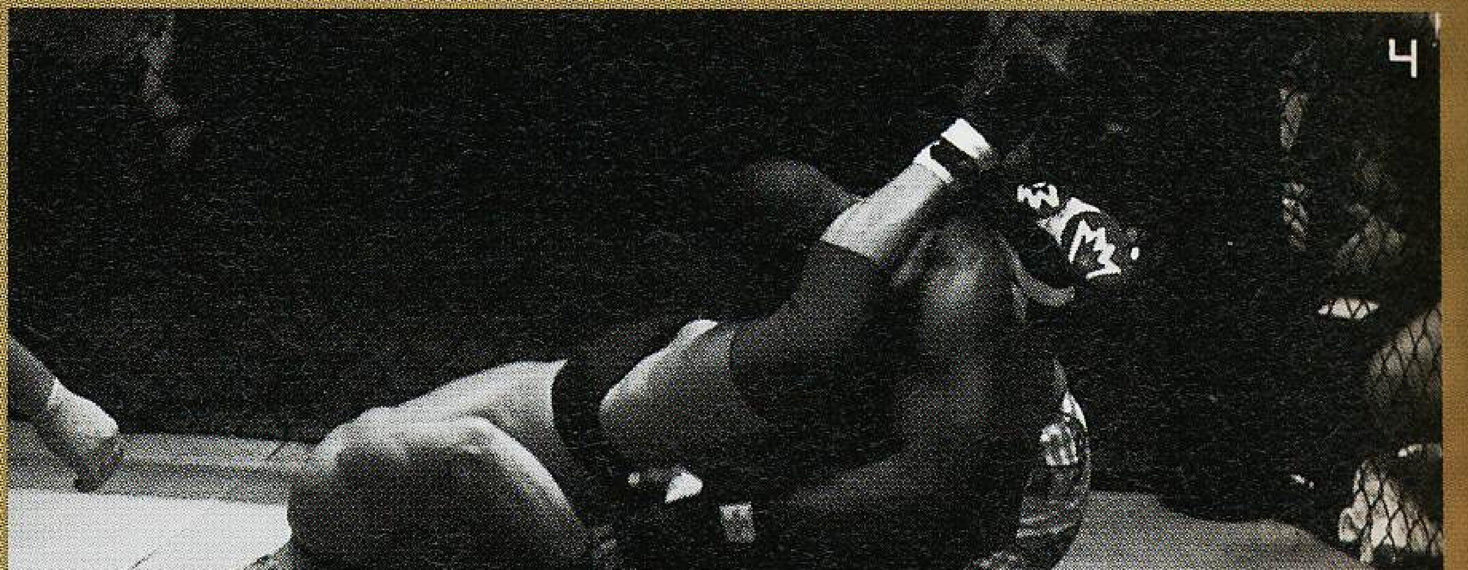




Teachings of a pioneer

②頭を下げ、腰高のタックルはまったく総合格闘技では通じなかった。③MMAファイター＝ケニー・マンデーのたった一度の晴れ姿。④MMA戦績６戦４勝２敗。今の時代に挑戦していれば……と思わせるのが、ケビン・ジャクソンだ。１９６５年生まれだから、それでもランディ・クートゥアより年下だ。⑤１９９７年12月21日。日本で行われたUFCで、フランク・シャムロックと対戦し、テイクダウンを奪ったものの、下からの十字でわずか16秒で敗れた。

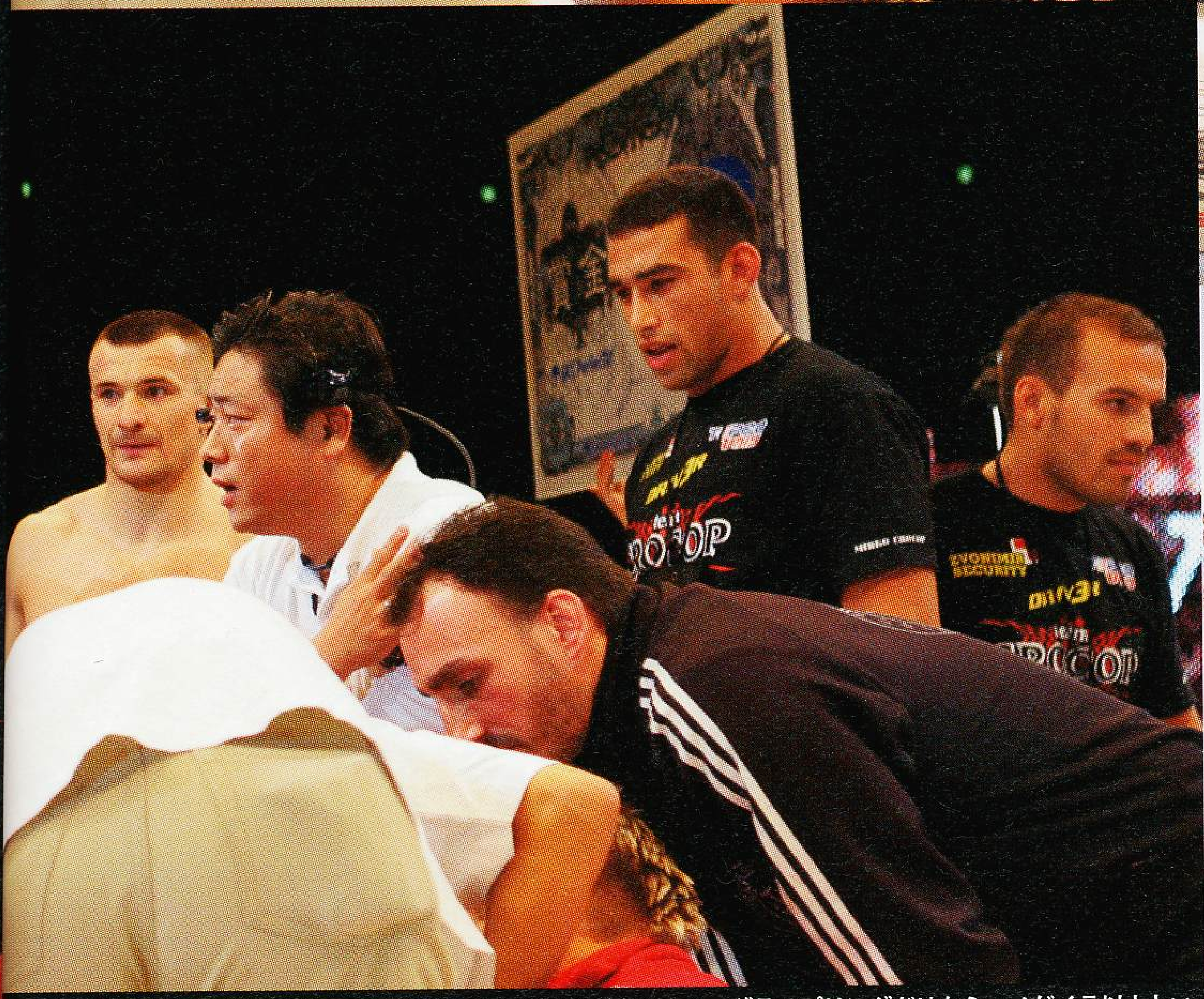






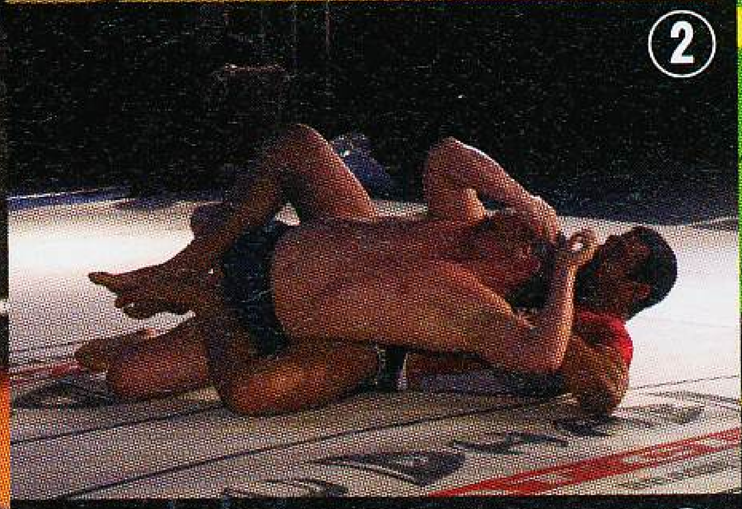
…ジョシュ戦でミルコの側には常に懐刀ベウドゥムの姿が見られた

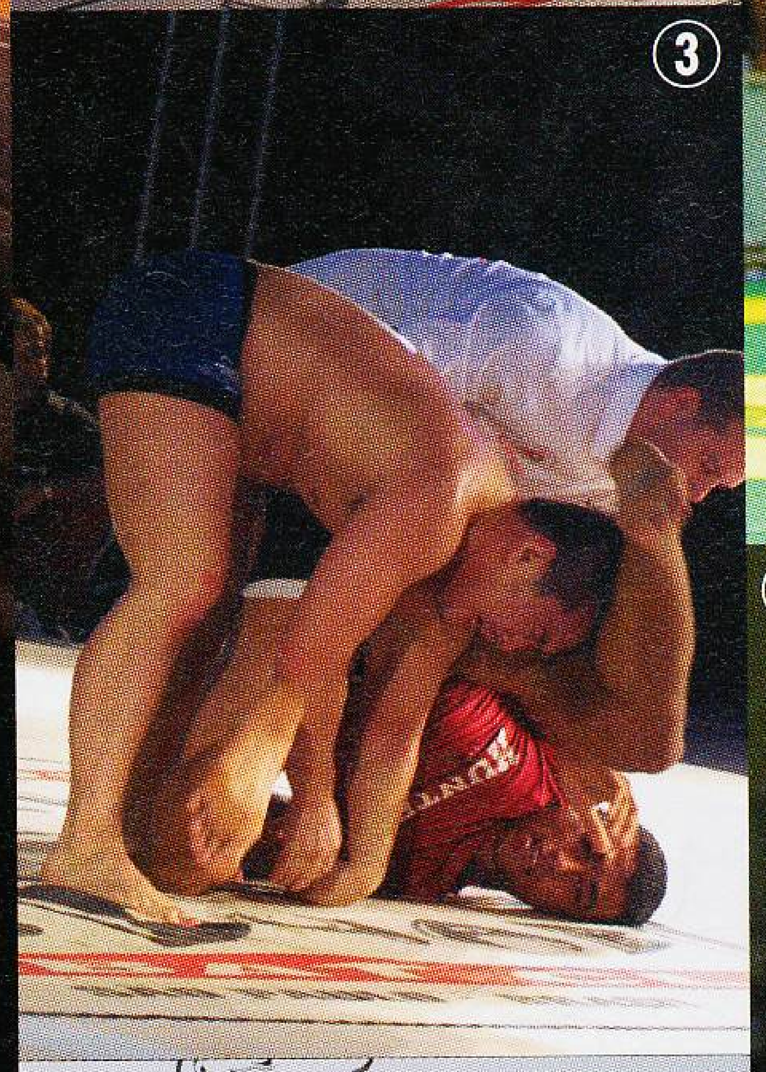




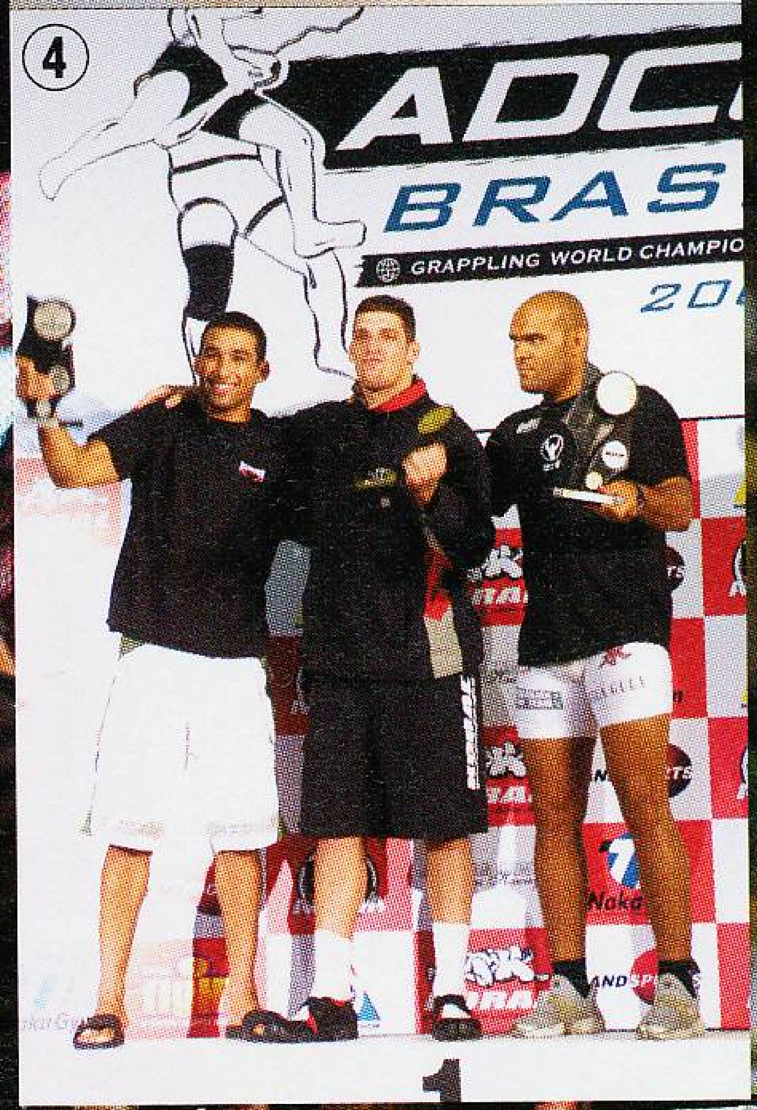
100kg以上の体躯を誇りながら、軽量級のように器用なベウドゥム。グラップリングだけなら、ノゲイラ以上という評価も実は聞かれていた。ミルコが全幅の信頼を置くのも頷ける実力者だ。

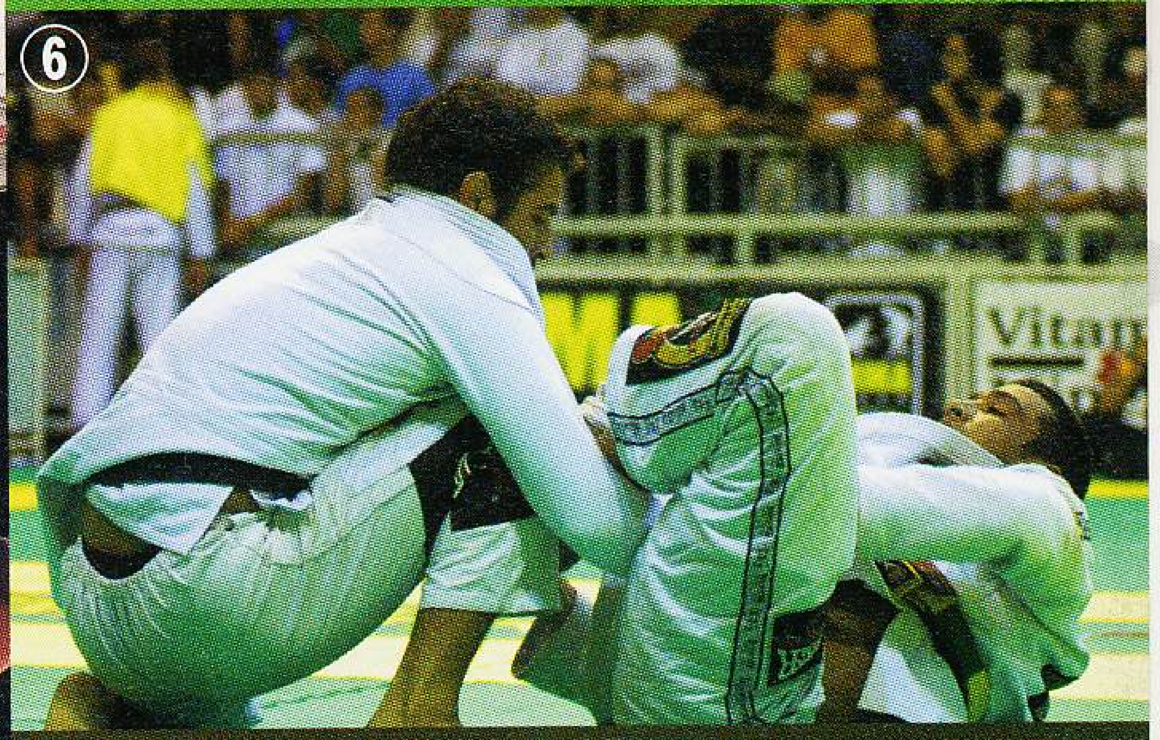


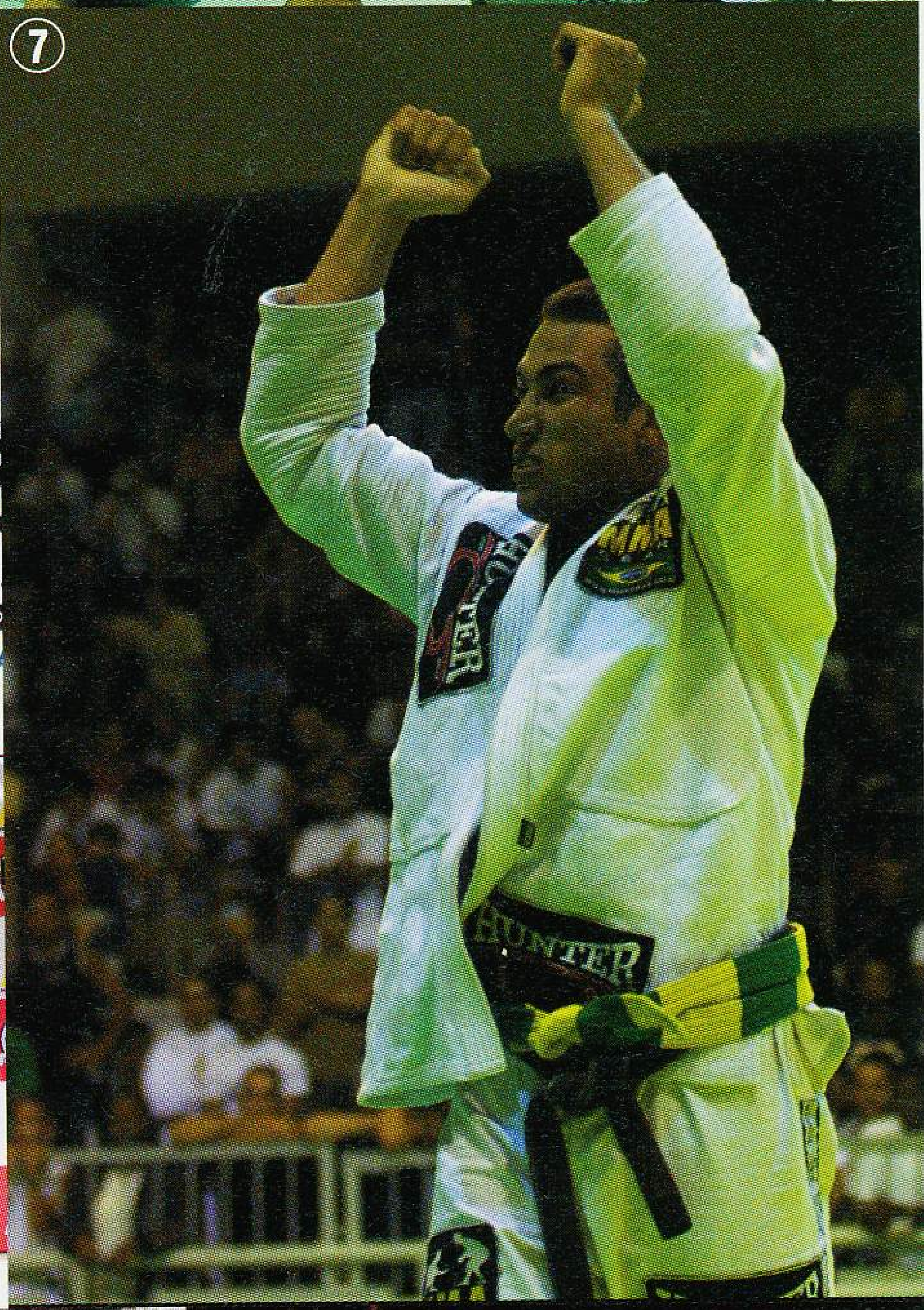


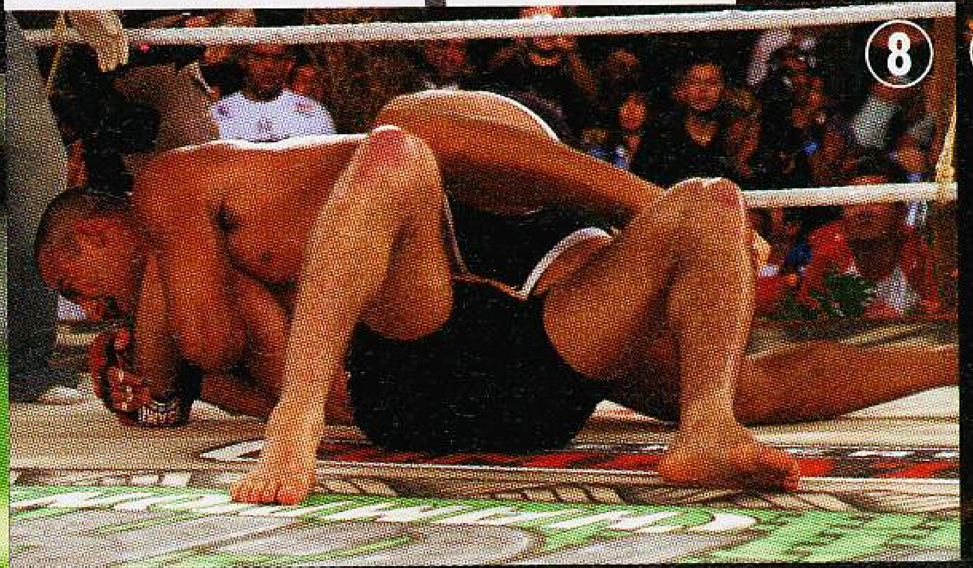
















①組み技世界一決定戦アブダビコンバットでは、日本人選手とも対戦を経験している。99kg級１回戦で高坂剛を下している。②③ 無差別級で対戦した小路晃には、バックマウントから腕十字を極めて一本勝ち。バックマウントからかなりえげつない攻めも見せていた。④ 結局、まったく無名だったベウドゥムは99kg超級で２位、無差別で３位に入り、その名を一気に組み技界に知らしめた。⑤⑥ アブダビから2ヵ月後、初めて挑んだ黒帯の世界大会。コパドムンドではレオ・レイチに決勝で敗れたものの、１週間後のムンジアルで早くもリベンジに成功。黒帯になって初めて世界を制した。⑦ 世界王者になった瞬間の表情、その気の強さの一端が伺える。⑧ ブラジルで初めてVTを経験したのは、話題のジャングルファイト。サンパウロを代表する重量級柔術家ガブリエル・ナパォンを破る。⑨ この年の10月には、兄弟子マーシオ・コウレタ（左）が出場したアルティメット・ショーダウンにセコンドとして、訪米。中央はビバリーヒルズ柔術クラブのビニシウス・マガリャエス。⑩ 2度目のジャングルファイトでは、なんとあのエベンゼール・ブラガからスタンドのパンチでＫＯ勝ちを収めている。これが、持って生まれた天性の運動神経の良さなのか。⑪⑫ 2004年のムンジアルでは、なんと本来はメジオ級のフェルナンド・テレレが決勝進出。体重差は30kgほどだったが、実はリスキーなのは元がペサディシモ級のベウドゥムの方だった。この試合を「楽しかった」と振り返る彼は、テレレへの声援一色の会場で、ラペラ・チョークを極め一本勝ち大会二連覇を達成した。

…った懐刀
…が語る

『ミルコ論』と『自分自身』

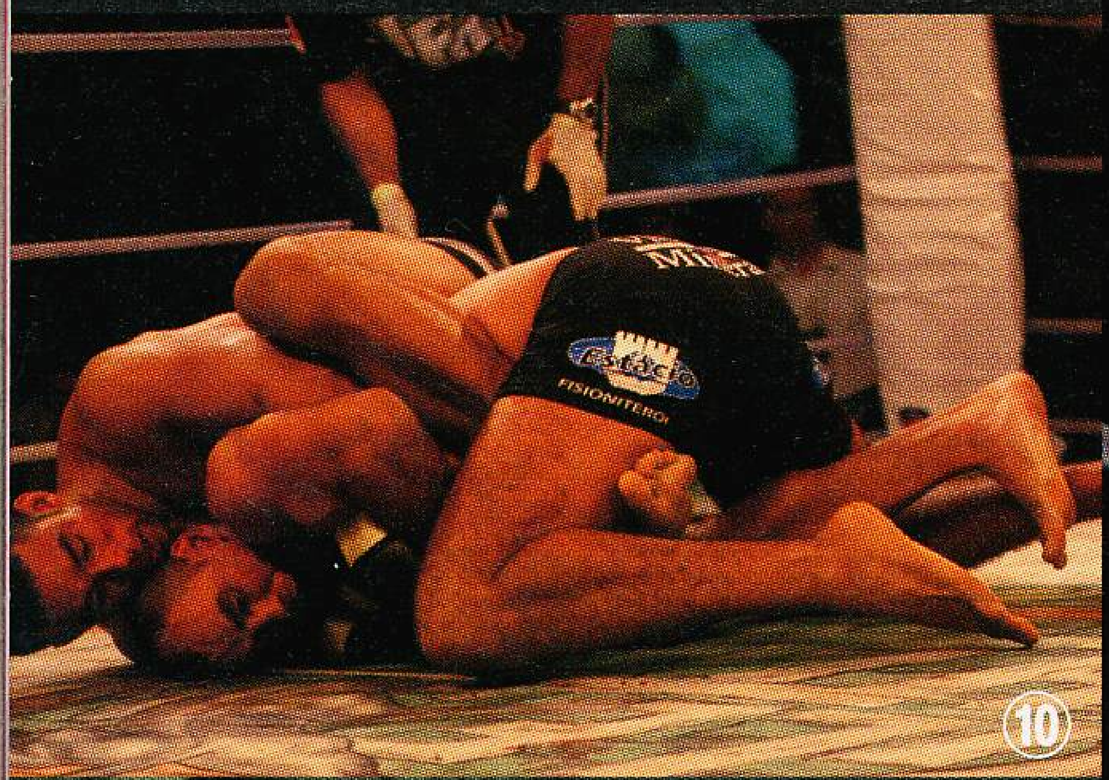
アブダビでTK&小路を下し、ムンジアル連覇、MMA戦績5戦無敗

ここに挙げた写真の数々、驚くべき実力を持った無名の男。
その一方で、組技マニアの間で知る人ぞ知る存在だった
ファブリシオ・ベウドゥムが、突如意外な形でメジャーに浮上した。
柔術の黒帯世界チャンピオンの座に2度ついた彼が、
チーム・クロコップに加わったのだ。
「もう俺を極められなくなったから」という理由により
何度も寝技のコーチを雇ってはクビにしてきたミルコが、その腕を見込んだ懐刀。
「組み技でノゲイラより強い」とミルコも太鼓判を押すベウドゥムは今、
近日中に訪れるはずのPRIDE参戦に向け、
クロアチアでミルコの家に住み練習に励んでいる。
MMA界いちのストライカーが全幅の信頼を寄せる
グラップラー=ベウドゥムが語る「ミルコ論」、そして彼自身の可能性とは——。

和良コウイチ=取材 text by Koichi Wara　和智正夫(室内)、マルセーロ・アロンソ&高島学(試合)=写真 photo by Masao Wachi　Marcelo Alonso & Manabu Takashima

Jul.2000 Mudial Faixa Azul Super Pesad 1st
Absoluto 1st
Jun. 2002 Millennium Brawl 7 winner against Tengiz Tedradze
Sep.2002 Millennium Brawl 8 draw against James Zikic
Mar.2003 World Absolute Fight 2 winner against Kristof Midoux
May 2003 ADCC Submission Wrestling World Championship +99kg 2nd
Open 3rd
Jul.2003 Copa do Mundo Faixa Preta Pesadissimo 2nd
Mundial Faixa Preta Pesadissimo 1st
Sep.2003 Jungle Fight 1 winner against Gabriel Napao
May 2004 Jungle Fight 2 winner against Ebenezer Braga
Jul.2004 Mundial Faixa Preta Pesadissimo 1st

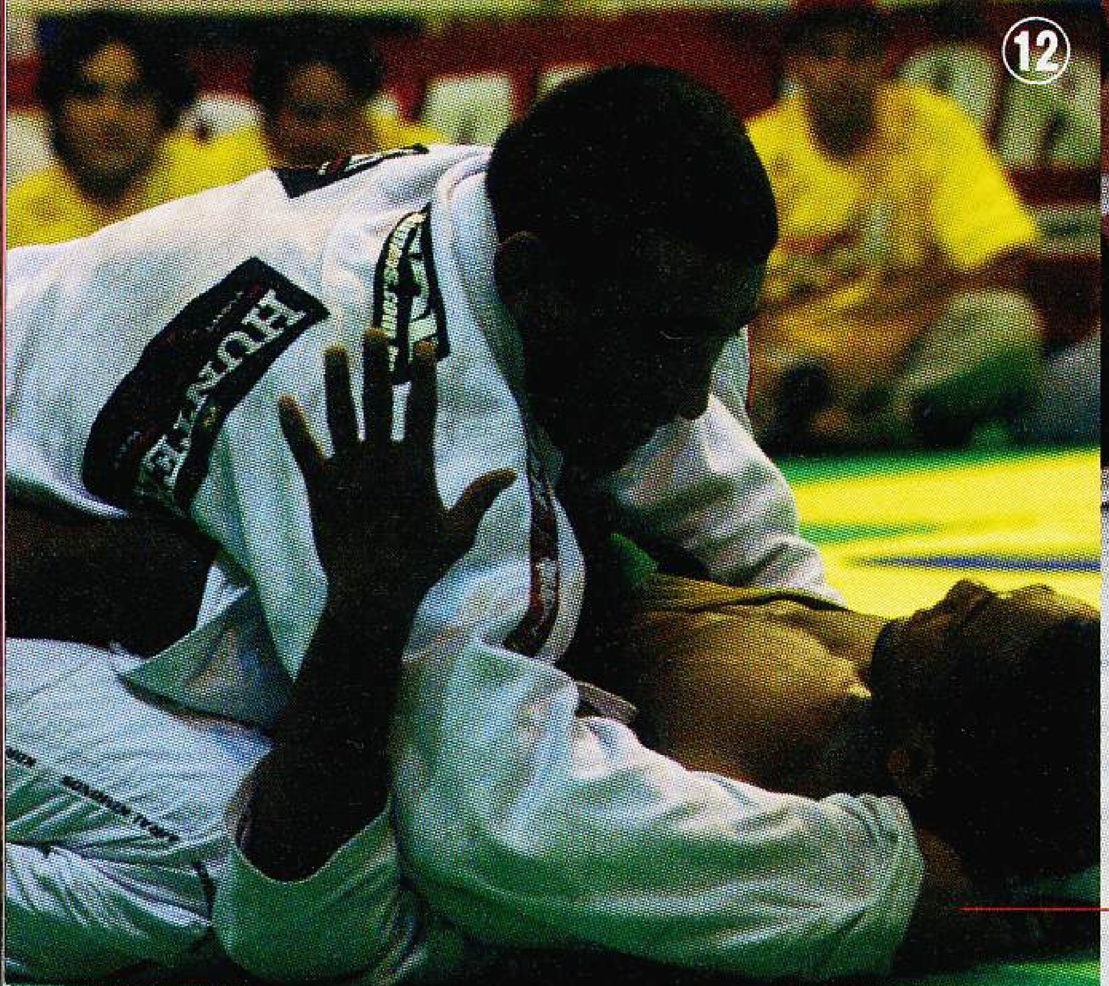




⑩



⑪



⑫

ミルコ・クロコップが「ノゲイラより強い」と認めた懐刀
ファブリシオ・ベウドゥムが語る

一番、ジョシュ戦で

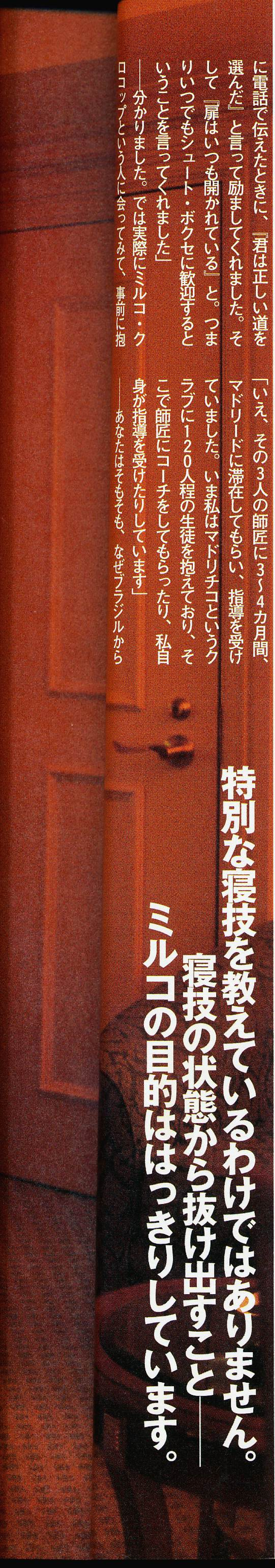




100kg以上の
う評価も実



ミルコは冗談好きで私といつもふざけあっています。とても面白い人ですよ。



The man who was existence to know

The true figure of MIRKO

Fabricio Werdum

特別な寝技を教えているわけではありません。寝技の状態から抜け出すこと——ミルコの目的ははっきりしています。

——ファブリシオさんが日本でチーム・クロコップに合流したのは、ムンジアル（柔術世界選手権）後の8月上旬ですよね？

「そうです。私は7年前から住んでいるスペインで、ミルコのマネジャーであるイマイさんからメールで誘いを受けました」

——メールをもらってすぐにチーム・クロコップ入りを決めることができましたか？

「このオファーはビッグニュースでした。実は私は7年しか柔術をやっていないのですが、最初の目標はムンジアルを制覇すること。それはもう4回にもわたって達成することができたので、次はVTだと思っていた矢先のメールだったからです」

——4度世界チャンピオンになったというのはすごいですね。

「最初は柔術を始めて2年目のとき、青帯のアブソルート級（無差別）とスペルペサード級（97kg未満）で優勝しました。その後黒帯になってムンジアルでも2度優勝しました」

——なるほど。でもファブリシオさんには先にシュート・ボクセからの誘いがあったと聞きますが。

「実は『タタミ』という雑誌にシュート・ボクセがヘビー級の柔術家を探しているという記事が出て、私のほうから行こうと思ったのです。正式なオファーがあったわけではありません。それで連絡を取った矢先に、よいオファーをもらったのでチーム・クロコップ入りすることに決めたのです」

——しかしフジマール会長もあなたを欲しがったんじゃないですか？

「チーム・クロコップに行くとフジマールに電話で伝えたときに、『君は正しい道を選んだ』と言って励ましてくれました。そして『扉はいつも開かれている』と。つまりいつでもシュート・ボクセに歓迎するということを言ってくれました」

——分かりました。では実際にミルコ・クロコップという人に会ってみて、事前に抱いていた印象とは違いがありましたか？

「そうですね。まずミルコから『一緒に住もう』と誘ってくれたんです。いまクロアチアの首都ザグレブという美しい街で、私はミルコの家族と一緒に住んでいます。ただ、ミルコは他に家を一軒建てている最中で、出来次第にそちらに移る予定ですが、私はそのままアパートに残ります。

ミルコの印象は、テレビで見ていた印象では非常にまじめな人だと思っていましたが、実際は冗談好きで私といつもふざけあっていて、とても面白い人ですよ」

——あなたはどれぐらいマドリードに住んでいたんですか。

「マドリードには柔術を始めた頃から7年間いました。ムンジアルのときは1カ月前からブラジルに行って、集中的に練習します。私の先生は、シルビオ・ベーリンギ、マウリシオ・ベーリンギ、マーシオ・コウレタ。私が言いたいのは、VTではクロコップ・ジムに所属していますが、それ以外でムンジアルやアブダビコンバットに出場するときはベーリンギ柔術の所属です」

——あなたの先生の3人は、ブラジル在住なわけですね。

「そうです。ベーリンギ兄弟の二人はリオに住んでいて、マーシオ・コウレタはリオ・グランジ・ド・スルというブラジルの南部に住んでいます。私の最初の師匠はマーシオ・コウレタであり、彼を通じてベーリンギの2人を紹介してもらったのです」

——ほとんどマドリードにいるということは、あなたにはマドリードにおける柔術の師匠もいるわけですか？

「いえ、その3人の師匠に3～4カ月間、マドリードに滞在してもらい、指導を受けていました。いま私はマドリチコというクラブに120人程の生徒を抱えており、そこで師匠にコーチをしてもらったり、私自身が指導を受けたりしています」

——あなたはそもそも、なぜブラジルからマドリードに移住したのですか？

「もともと母親が20年以上前からスペインで仕事をしていたからです。以前から母親に家族一緒に暮らさないかと言われていて、それであるとき私たち兄弟みんなでスペインに行くことになったのです」

——分かりました。現在あなたはミルコに寝技を教えて、ミルコはあなたに打撃を教えているということですが。

「その通りです。お互いに無いものを補って、毎日練習しています」

——あなたのような優れた柔術家がチーム・クロコップ入りしたことにより、やはりミルコの寝技も変わったと思いますが。

「私に言わせると、ミルコは寝技のスペシャリストになるのではないかと思います。彼は技術の習得の時間がすごく短い。何でもすぐに覚えますから」

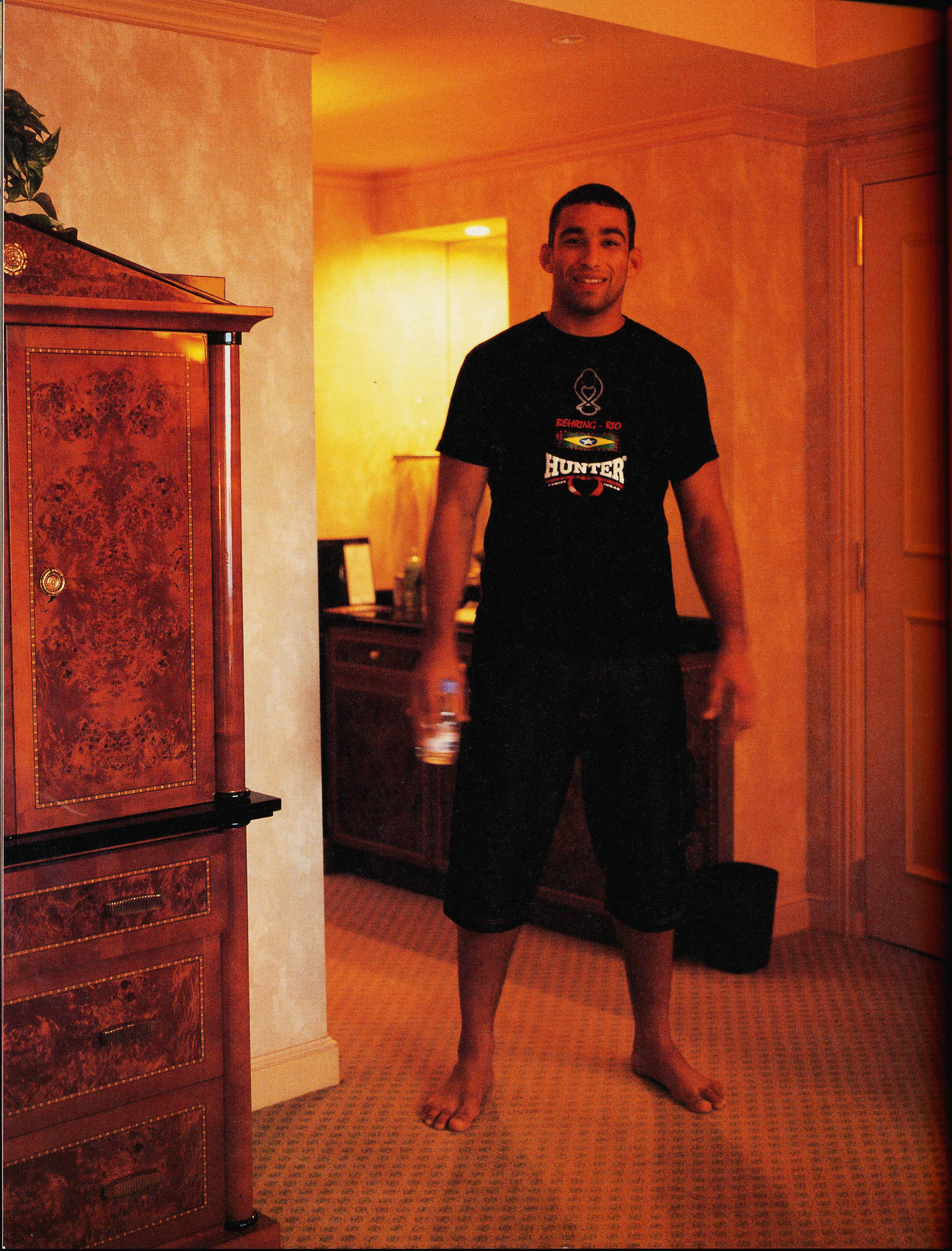
——もうノゲイラ戦のように、ミルコはマウントを取られて腕を伸ばすようなミスはもう犯さない？

「あの状況に関しては、腕を伸ばしたまま逃げようとしたのは致命的なミスです。2度とそういうことは起きないと思います」

——あなたが入った当時は、まだミルコによくない点はいろいろありましたか？

「まずミルコは腰が非常に硬かったですね。立ち技系なので姿勢からしてそうなのですが、これは寝技では非常に不利。腰に柔軟性があるのは、非常に重要なことなのです。いまではミルコもだいぶ柔らかくなったのではないでしょうか。私がチーム入りしてここ2カ月間、特別なことをしていたわけではなく、横四方で抑えられた状態から脇を差して戻すなどの基本を徹底してきただけですよ」

——いままでミルコの元には何人もの寝技のコーチが来て、そして去っていきました。



いうことを言ってくれました」
――分かりました。では実際にミルコ・クロコップという人に会ってみて、事前に抱

こで師匠にコーチをしてもらったり、私自身が指導を受けたりしています」
――あなたはそもそも、なぜブラジルから

ミルコの目的ははっきりしています



私はノゲイラよりも寝技で上回っている自信があります。

あなたといままでのコーチとは実績も実力もだいぶ違うと思いますが、それについてミルコは何か言っていましたか？

「これといってミルコに言葉をもらったわけではないですが、やはり私が道場に行ったときに感じたのは、基本的なことが必要だということです。特別な寝技を練習しているわけではありません。基本的なことというのは、寝技の状態から抜け出すこと。ミルコの目的ははっきりしているのです」

——では、あなた自身もミルコの指導によって立ち技がすごくよくなりましたか？

「私がチーム・クロコップに行って一番上達したのは、まずフィジカルコンディション。毎朝7時からトレーニングが始まります。2時間ぐらい走ったり、ウェイトも1時間ほどやったりして、ハード・トレーニングでフィジカルがよくなりました。もちろんボクシングも上達しましたよ」

——もしかしてミルコのようなハイキックが蹴れるようになったとか（笑）。

「それはちょっと無理（笑）。彼のように蹴るのは、誰にとっても難しいです。ミルコは毎日、ハイキックの練習をしていますから。両足に重りをつけて練習をしています し、股関節が柔軟です。スパーリングのときはスネ当てを二重にするほど、彼の蹴りは威力があるのです」

——もし、ミルコとジョシュ・バーネットの再戦が実現したら、どんな試合になると予想しますか？

「基本的にミルコは自分から寝技にはいきません。立ち技の多い展開になり、結果的にミルコがKO勝ちすると思います」

——ジョシュ・バーネットの寝技は高く評価されていますが、あなたから見てどうですか？ 例えばノゲイラなどと同じレベルにあると思いますか？

「ノゲイラと比較するのは無理でしょう。私はジョシュの試合を2試合しか見ていませんが、それほど寝技のスペシャリストだとは思わない。基本を知っている程度でしょう」

——分かりました。ファブリシオさんはいま総合の練習ばかりやっていると思いますが、もう柔術の試合には出ないのですか？

「もちろんキモノを着た柔術の試合は好きですが、マネジャーの判断もありますからね。私自身は出たい気持ちがありますし、経済的によければ出たいですね」

——道場名からすると、他にウィナーという人がいるのですか？

「そうです。ウィナー・ベーリンギというのは、ブラジル南部のマーシオ・コレッタ

ンデドスル出身

ンモ級優勝

無差別3位

「何としても勝ちたかったのです。高阪は奇策を使うタイプだと知っていましたから、私から先に仕掛けました（笑）。

が、いまVTで目指すものは何ですか。

「当然、次の目標はPRIDEのチャンピオンになることです。私が20歳で青帯のと

ま総合の練習ばかりやっていると思います
が、もう柔術の試合には出ないのですか？



この2年のうちにPRIDEのチャンピオンになります！

「もちろんキモノを着た柔術の試合は好きですが、マネジャーの判断もありますからね。私自身は出たい気持ちがありますし、経済的によければ出たいですね」

——もう少し柔術の話を聞かせてください。実は、03年夏、あなたのムンジアルでの試合を見ていました。手足が長くてテクニックがあり、レオ・レイチとの決勝戦であなたは何度もスイープを仕掛けていたのは、とても興奮したものです。

「あの試合は、とても緊張しました。なぜなら私は柔術の黒帯になってから7カ月しか経っていなかったからです。レオ・レイチは私が柔術を始める前から黒帯でした」

——あなたの所属している道場ウィナー・ベーリンギには、あなたの他にもマリオ・ヘイスという素晴しい柔術家がいましたが、他の道場とはいったい何が違うのでしょうか。

「ウィナー・ベーリンギでは、基本を重視しています。そして、護身術を丹念にやっています。ですから他の道場のように、大会で勝つことだけを目指しているところではありません。いまでもリオの道場に行くと、私は『護身術のデモンストレーションをやれ』と言われます」

——ベーリンギ兄弟はどんな人たちなのか教えてください。

「まずシルビオ・ベーリンギは、人に教えるということにとても優れています。例えば、彼は門下生が100人いても、それぞれに何が必要かを瞬時に見分けることができます。

マウリシオ・ベーリンギは、大会に出るに当たってのサポートが非常に心強いです。試合に向けて気持ちの面でもサポートしてもらっています。私のスポンサーである『Hunter』はマウリシオが持っている柔術系のブランドで、われわれ門下生に対して大会中のホテルの宿泊や食事など様々な面でサポートしてくれます」

——道場名からすると、他にウィナーという人がいるのですか？

「そうです。ウィナー・ベーリンギというのは、ブラジル南部のマーシオ・コレッタの道場を指します。ちなみに私のスペインでのチーム名は、ウィナー・ベーリンギ・スペインです」

——では、あなたがいままでもっとも印象に残っている柔術の試合は何でしょうか。

「今年のムンジアルのペサディシモ級決勝戦、テレレとの戦いが最も興奮しました。テレレは本来メジオ級（79kg未満）の選手なので、ペサディシモ級の私が負けるわけにはいかないという大きなプレッシャーの中での試合でした」

——あなたが思うベストな柔術家を5人挙げてください。

「マリオ・ヘイス、マーシオ・コウレタ、ジャカレ、レオ・ヴィエイラ、マルセロ・ガルシア。もう一人挙げるならホジャー・グレイシーですね」

——ちょっと話を変えます。いま日本ではBCGで練習していますが、『日本最強のグラップラー』高瀬大樹とスパーリングしてみて実際どうでしたか？

「彼は非常にテクニシャンです。私より体重が軽いのですが、彼は非常にガードがよく、かつ爆発的なパワーがあるのでいいファイターだと思います」

——03年のアブダビコンバットでは、高阪、小路といった日本のファイターと戦っていますね。

「高阪との試合では、2度挨拶をしました。試合開始のとき、まず手をパチンとやって挨拶しますよね。その後、本当は必要ないのに、もう一度挨拶をするフリをしました。高阪がその動きにつられた際に、私はタックルに入って倒し、そのままパスガードを奪ったのです（笑）」

——頭がいいというか、ずる賢いですね（笑）

「何としても勝ちたかったのです。高阪は奇策を使うタイプだと知っていましたから、私から先に仕掛けました（笑）。

小路も非常にテクニシャンですし、私より体が小さいので、あの手この手といろいろ攻めてきたのを覚えています。最終的に私が一本で勝つことができ、非常に嬉しかった試合です」

——報道によると、あなたのVT戦績は5戦5勝、2つのKO勝ち、2つの一本勝ちということで合っていますか？

「はい。1試合目は三角絞めで一本勝ち、2試合目は判定勝ち、3試合目は三角絞めのまま腕関節を取りました。4試合目はジャングルファイトのガブリエル・ナパオン戦で、パウンドによるTKO勝ち。そして、5試合目もジャングルファイトでのエベンゼール・フォンテス・ブラガ戦。非常に難しい試合だったのですが、相手の足を見てタックルに入るフェイントからスイングフックをヒットさせました。そのフックは試合10分前に私の兄と練習したフックです（笑）。これは最後の手段だと思って練習したのですが、うまく入ってKO勝ちしました」

——あなたが04年大晦日にPRIDEデビュー戦を行なうという噂がありますが？

「いま私がクロアチアで練習しているのも、PRIDEに出場するという約束があるからです。私としては大晦日に出る前提で練習しています」

——柔術の世界でトップになったあなたが、いまVTで目指すものは何ですか。

「当然、次の目標はPRIDEのチャンピオンになることです。私が20歳で青帯のとき、『25歳で黒帯になる』と宣言しました。周りの友達は信じませんでしたが、私はそれを実現させました。いま私はここ2年でPRIDEのチャンピオンになる、という目標を設定しています」

——もし、あなたの知人でもあるノゲイラと試合が組まれれば戦いますか？

「ノゲイラは私のアイドルとして尊敬していますが、もちろん戦えと言われれば誰とでも戦います」

——寝技でノゲイラより上回っている自信はありますか？

「自信はあります」

——PRIDEのリングでは、誰と一番戦いたいですか。

「もちろん、現チャンピオンのヒョードルです。私が彼に抱く印象は、非常に冷静であるということです。戦いの最中に感情が表れないのは、強さの証明だと思います。技術的にはパウンドが強烈で、寝技に関しても基本が備わっている選手ですね」

——では、最後に日本の総合ファンにメッセージを。

「一度きりではなく常にPRIDEのリングに上がれるファイターを目指し、私はいま猛特訓を積んでいます。リングに上がったときには常に人を魅了できるように戦います！」

Fabricio Werdum
ファブリシオ・ベウドゥム

1977年7月30日、ブラジル・リオグランデドスル出身
身長193cm、体重110kg
03・04年ムンジアル・黒帯ペサディシモ級優勝
03年アブダビコンバット99kg級2位＆無差別3位
チーム・クロコップ所属

■こぼれ話■

ファブリシオの生年月日は1977年7月30日だが、発表されたプロフィールには『8月24日』となっているものもある。なぜか。
「父親は非常に愛国心の強い軍人なので、8月24日がブラジルの国家的な記念日だから、わざわざこの日に出生届けを出したのです」
——ではどちらを載せましょうか？（笑）
「7月30日にしてください。いつもコーチのマーシオ・コウレタにバカにされるんですよ。誕生日パーティーの最中に『証明書を見せてくれ』と言われて、『今日と違うじゃないか！』って笑われて（笑）」

ミルコが見たファブリシオ

寝技に限って言えば、ファブリシオは世界最強の寝業師だ。いままでの柔術のコーチとは全てのレベルにおいて比較にならない。まず驚かされるのは、ヤツの見せる技術が非常に「理に適っている」ということだ。最小の力で最大のものを動かす極意とでもいうのかな。基本に忠実であり、そのうえ腕っ節が強い。ノゲイラと戦った俺からしても、ファブリシオの方が断然腕力があるよ。

あとは、ヤツは負けん気も相当強い。慣れないクロアチアでの生活の中でストレスも溜まったのだろう。一度、本気でケンカになりかけたことがある。スパーリングでマウントを取ったヤツは、いきなり本気でパウンドしてきたんだ。そのときのヤツの目は本気だったね。俺も落ち着いて下から2発ぐらい殴って、抜け出してからローキックを数発入れたら、さすがにおとなしくなったが、強くなるにはあれくらい負けん気が強くないとね。俺もその後、すぐに謝ったけどな。

ジョシュ戦の前に寝技になっても怖くないと思えたのも、最高のパートナーと毎日練習していればこそ。ファブリシオが俺に何を教えているのかがノゲイラは相当気になるみたいで、メディアの人間にいつも聞いてくると言われた。俺が教える打撃のタイミングや距離の取り方などをファブリシオがものにできれば、PRIDEルールでヤツはノゲイラに勝てるよ。

パウンドは

（真剣勝負的寝技拳論）

寝ている相手を拳で殴りつける——。こういう形式の試合を初めて見たとき、あなたは「野蛮」だと思わなかっただろうか。いまから十年以上前、93年11月の第1回UFCは日本人にとって、いやアメリカ人にとっても、どれだけ衝撃が大きかったことだろう。

現在でこそスタンダードになった「グラウンドでの顔面パンチあり」というルールだが、日本では選手やそれに追随するマスコミから〝あれは人に見せるものじゃない〟と批判され、色物扱いされ続けてきた歴史も忘れてはならない。

だが、どこのリングでもグラウンドでのパンチ＝パウンドが見られるようになったいまでも、パウンドを得意とする選手に「技が無くて力任せ」という偏見らしきものがあるのは、みんな「パウンドは技術ではない」と思っているからではないか。

でも、それは間違いだ。インサイドガード、ハーフマウント、サイドポジション、ニーインザベリー、マウントポジション…。上から殴るとひと言で言っても、これだけ自分の位置が変われば距離も違うし、ウェイトの乗せ方だって変わってくる。ナックル、鉄槌、裏拳と当てる場所も違う。

相手がガードポジションからの展開に優れた柔術家だったら、下からの動きをすばやく察知する能力が必要だし、さらに技の掛け際、逃れ際といった際（きわ）に打ちつけるパウンドが有効だ。そう、ヒョードルのように。

「ヒョードルのパウンドは撮りづらい。ノーモーションだからね。ティトやケビン・ランデルマンは身体全体を使うから撮りやすいんだけど」と、カメラマンの長尾迪氏は証言するが、ヒョードルのパウンドには謎が多い。主にグラウンドのときに使う、あの肩を入れて、手の甲を内側にして打つロシアンフック。自らの肩や肘、拳も痛めて不思議ではないと思うのだが。

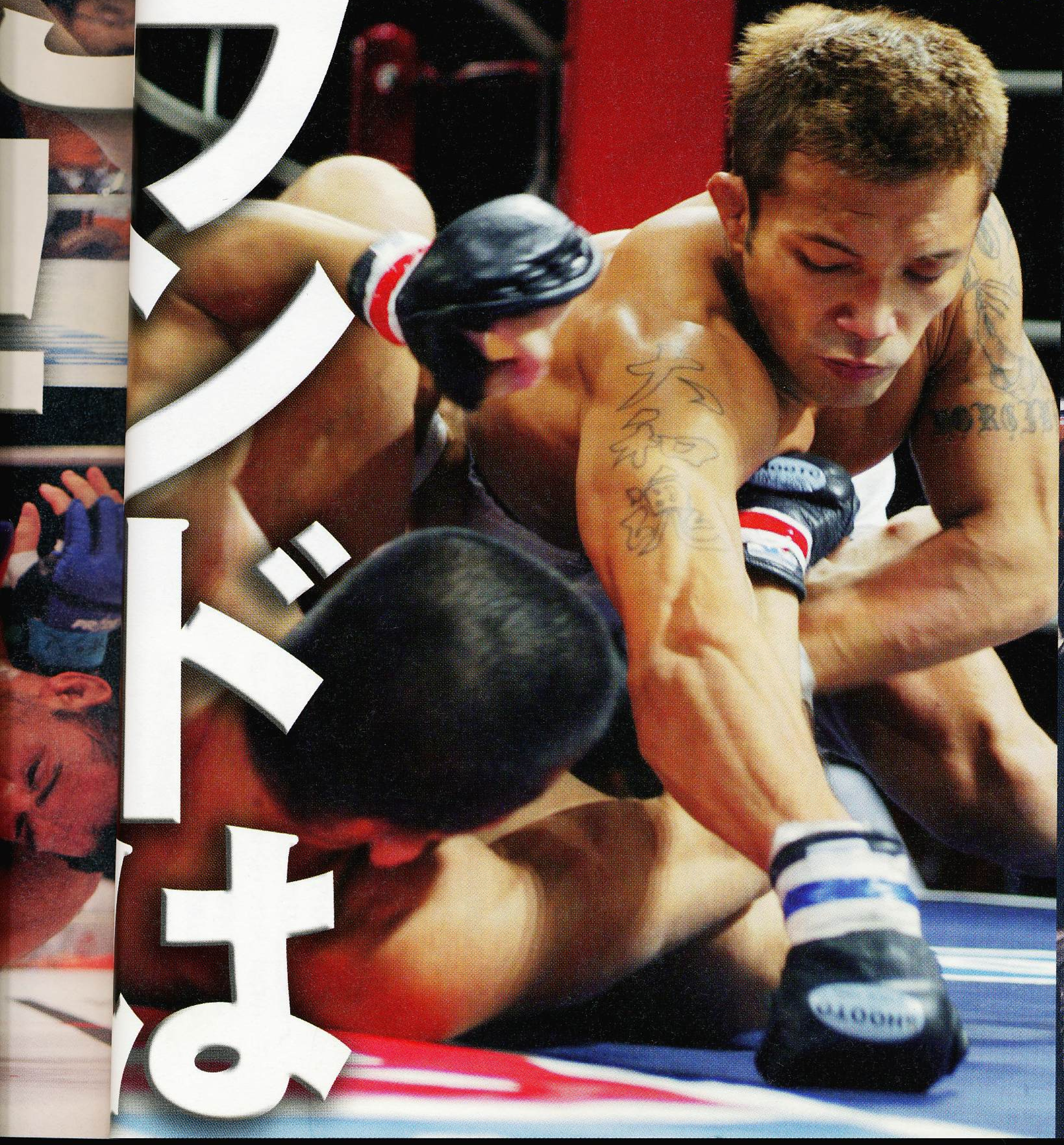
総合格闘技の歴史と同じように、パウンドの歴史もまだ浅い。ブラジルでは約50年前にVTが流行った時期があったが、素手といまのグローブとではだいぶ異なる。ボクシングの歴史を見れば分かるように、グローブ着用によって技術は進化するのだから。

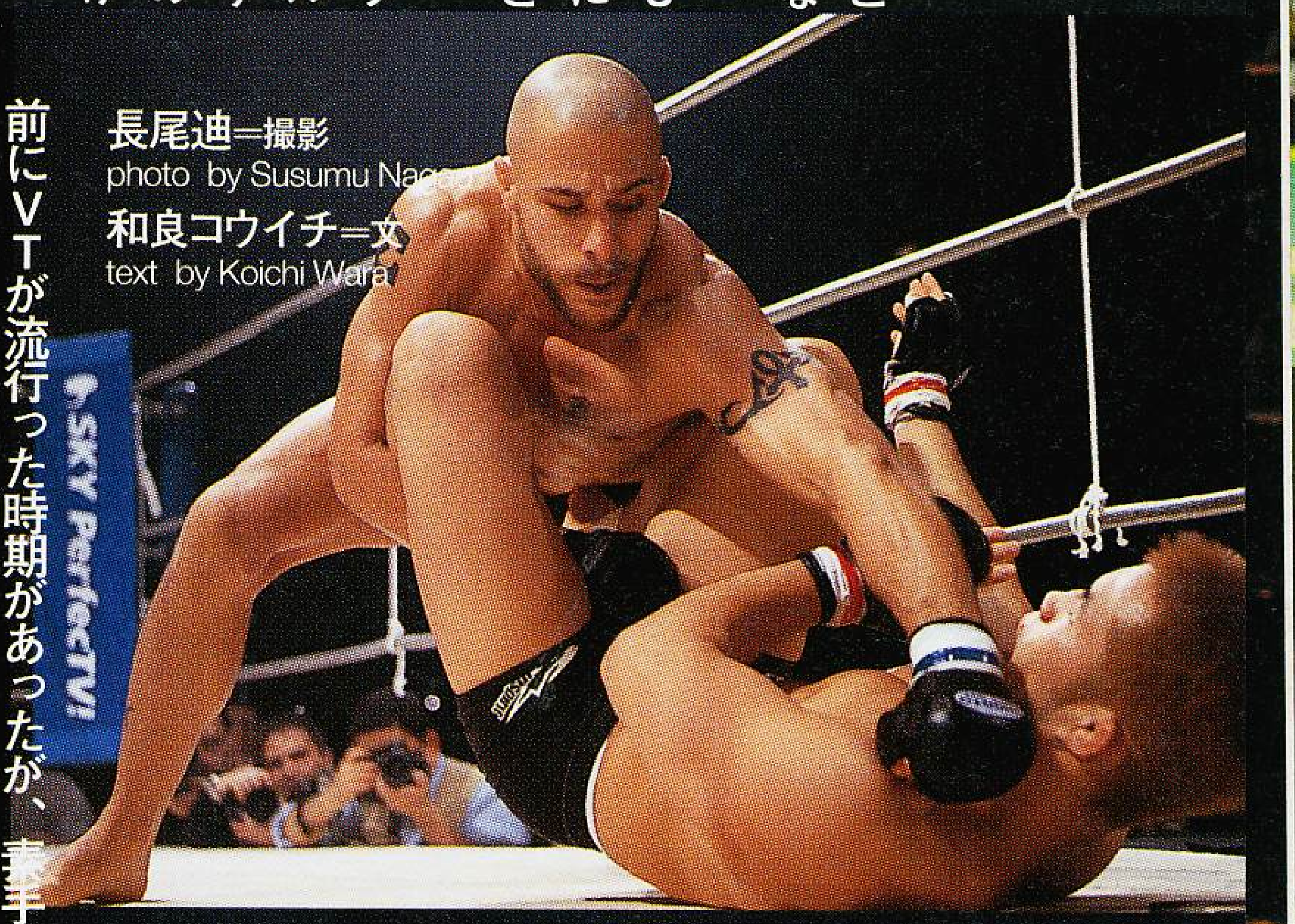
いまパウンドを得意とする選手は多いが、打ち方はそれぞれ特徴がある。KOを狙う選手、パウンドを有効に使ってサブミッションを狙う選手という違いもある。ヨアキム・ハンセンのように、下からのパウンドで確実にダメージを与えるという変わった選手も出てきた。

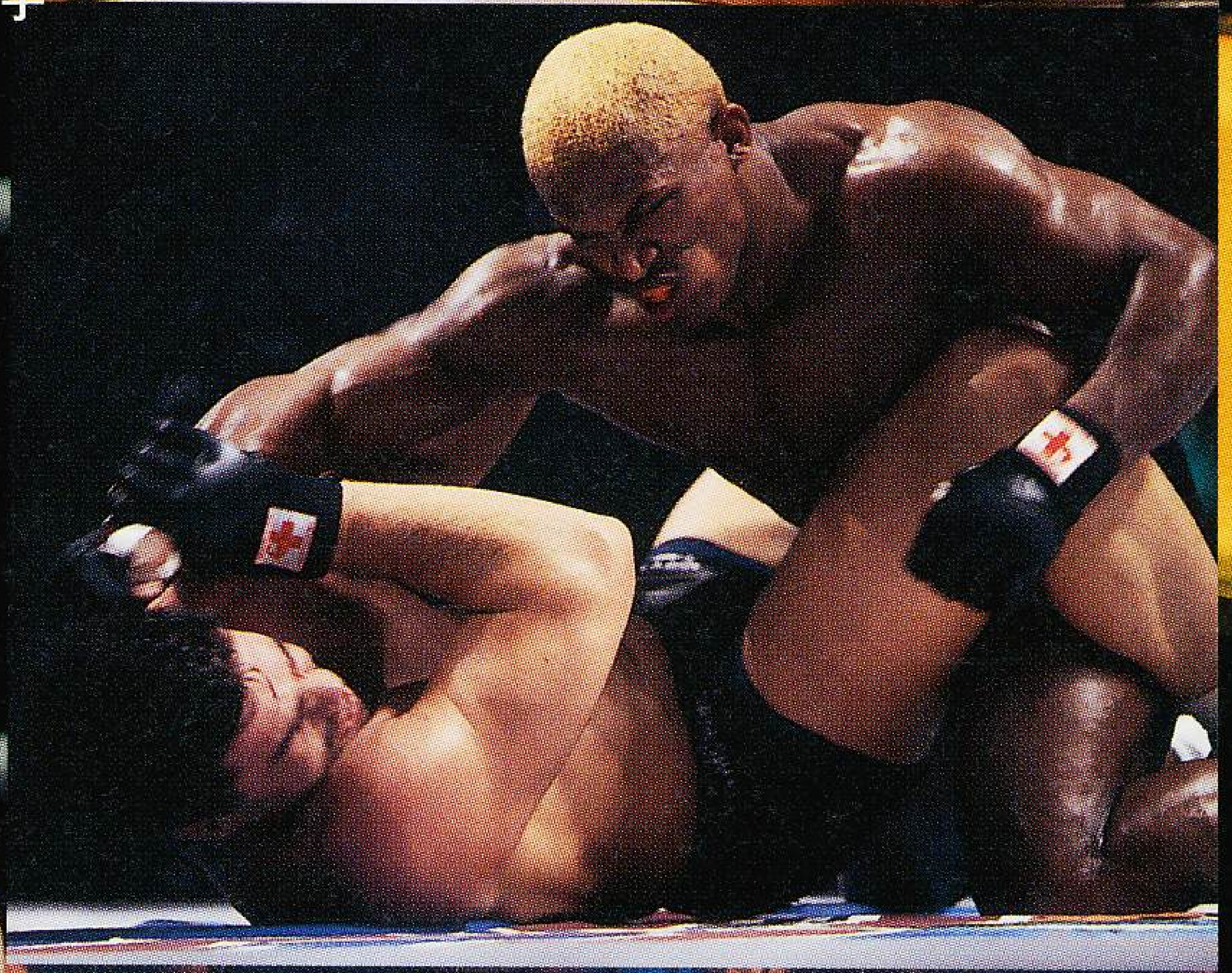
長尾氏の言葉は続く。「長年、総合を撮ってると関節技はまず撮り逃がしがないんだけど、パウンドはやっちゃうんですよね」。

パウンドという技術は、まだまだこれからも研究、開発されていくだろう。ここでは、パウンドの世界の奥深さを知ってほしい。

長尾迪＝撮影
photo by Susumu Naga
和良コウイチ＝文
text by Koichi Wara



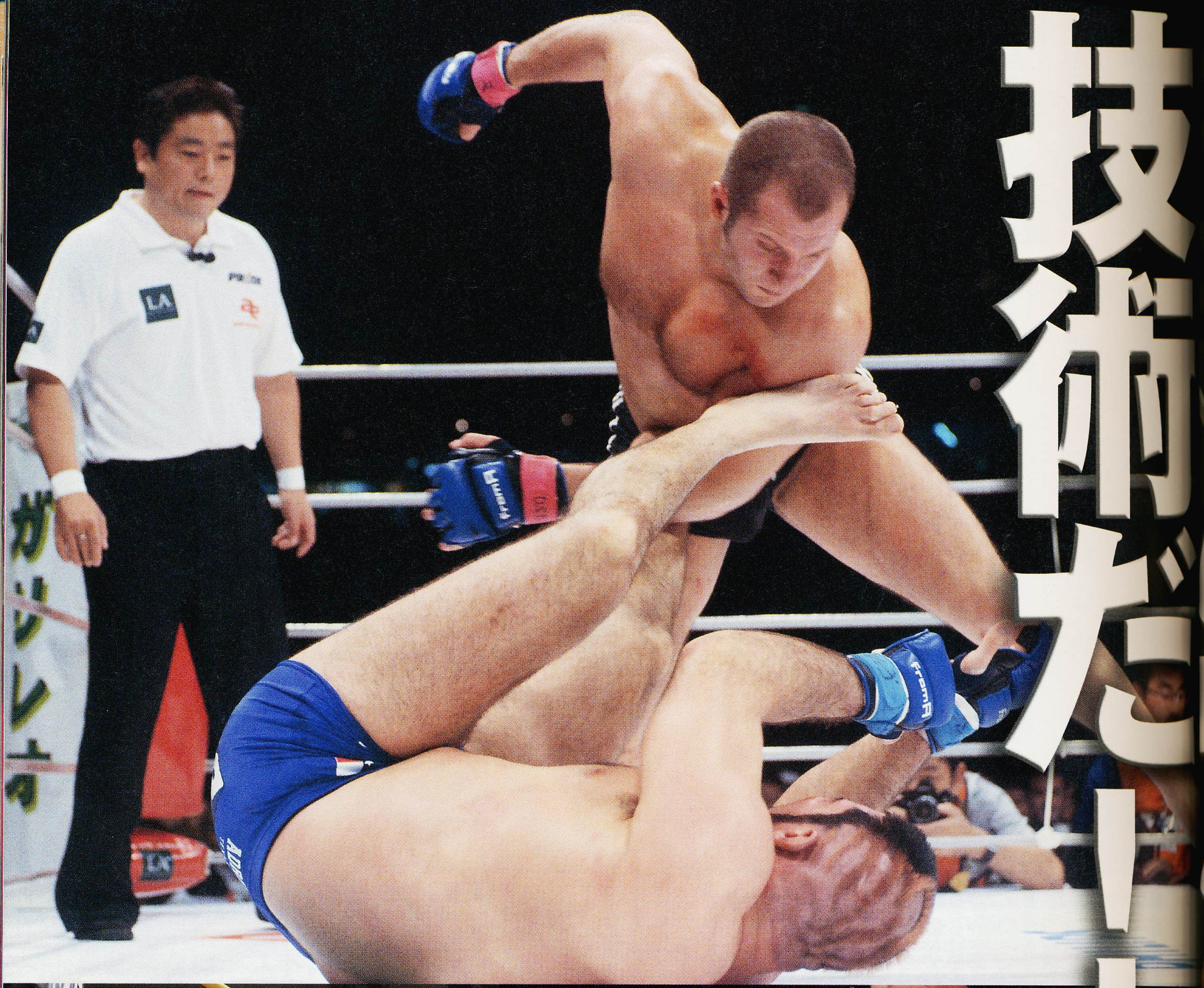






総合格闘技の歴史と同じように、パウンドの歴史もまだ浅い。ブラジルでは約50年

技術だ！







ガードからのサブミッションがあるなら、
パウンドだって、あっても変じゃないっ！

パンチなど二人で追求することはなかったのではないですか。
「確かにね。柔術が基礎の人間は、グラッ

究し続けてきたから問題ないけどね」
——ピュア柔術ファイターは、あまりトップからもパンチを使いませんね。いくらポ



（真剣勝負的寝技拳論・実技編）

誰がパウンドは、トップから放つものだと決めつけた？
ガードポジションから嫌がらせでなく、
ダメージを与えるパンチを放つことができるヨアキム・ハンセン。
今をときめくPRIDE軽量級スター＝五味隆典のパウンドを完封し、
修斗ウェルター級世界王座に就いたこともある北欧の強豪が、
自ら生み出したパウンド論を大公開！
ただ殴るのでなく、ポジショニング＋サブミッションが織り交ぜられた彼のパウンド論は、
まさにグラウンドで打・抑・極が回転する流れるような技術であった

text & photo by Manabu Takashima

Who took to task.
The punch which gives a damage
Technology which flows

パウンドに一番必要なこと？ ポジショニングの知識さ

ガードポジションからのパウンドを開発した ヨアキム・ハンセンのパウンド論

ガードからのサブミッションがあるなら、パウンドだって、あっても変じゃないっ！

――ハンセン選手、あなたが出現するまでMMA界には、ガードポジションから相手にダメージを与えるパウンドを放つことなど、到底考えられないことでした。なぜ、そんな発想が思い浮かんだのですか？

「それはねぇ、なんでだろうね（笑）。自分でもあまり分からないや。ただ、逆に言うと『なぜ、ガードポジションからパウンドを打ってはいけない』という疑問も湧いてくるよね。なんだろう、だから確固たる理由なんてなくて、イマジネーションの話だよ。関節技を仕掛けられるなら、パウンドだってできるだろうっていうね」

――誰かがヒントを与えてくれたというのは？

「僕の打撃のコーチをずっとしてくれているマルコス・ヤコブセンは、総合を踏まえた練習をしているときに、当然のように色んなところから殴る練習をしていた。今から思うと、僕は大きな練習相手とスパーをして、いつもガードポジションを強いられていたから、そのことが大きな要因になっているんじゃないかな。ユノラフ（エイネモ）とスパーをしていて、僕が上をとるなんてことは一度としてなかったからね。ならガードをとった体勢でもパウンドできるんじゃないかと、上を取った選手にパッドを持ってもらうようになったんだ。それまで誰もやったことがなかったから、ガードからのパウンドに関しては、僕らに一日の長があると信じているよ」

――ヤコブセンはもともと、北欧で有名なムエタイ・ファイターでしたよね。もし、彼が関節技を知っていれば、ガードからのパンチなど二人で追求することはなかったのではないですか。

「確かにね。柔術が基礎の人間は、グラップリングにこだわるからね。ポジショニングと関節技のコンビネーションが無限にあるように、ポジショニングとパンチの連携も数知れず存在することに気づかないでね。パウンドは上からなんていうのは、固定概念でしかないよ」

――ただハンセン選手は、ガードからのパウンドだけでなく、トップからのパウンドも得意にしていますね。いわゆる米国のレスラー系の選手のパウンドと、あなたのパウンドではどこに差があるのでしょうか。

「多くのパウンドファイターの試合は、観ていてもストレスが溜まることだけは確かだ。テイクダウンして、あとはインサイドガードからコツコツといき、ダメージを与えてからラッシュをかける。もっと色んな工夫ができるのに。上になったときも、ポジショニングを知らないから、不安定な状態でパンチを放つ場合が多い。僕らはガードからだけじゃなくて、インサイドガードやハーフガードの状態からのパウンドも研究し続けてきたから問題ないけどね」

――ピュア柔術ファイターは、あまりトップからもパンチを使いませんね。いくらポジショニングの知識が豊富でも。

「彼らは正しいパウンドの打ち方を知っているよ。腕と拳をいかに自由に使えるかを、優秀な柔術ファイターは心得ているはずだからさ」

――でも、ハンセン選手のように創意工夫のあとが見られ、有効に効かすパウンドを打つ柔術家はあまりいません。特にガードポジションからパンチを打つ選手なんて、見たことがありませんよ。

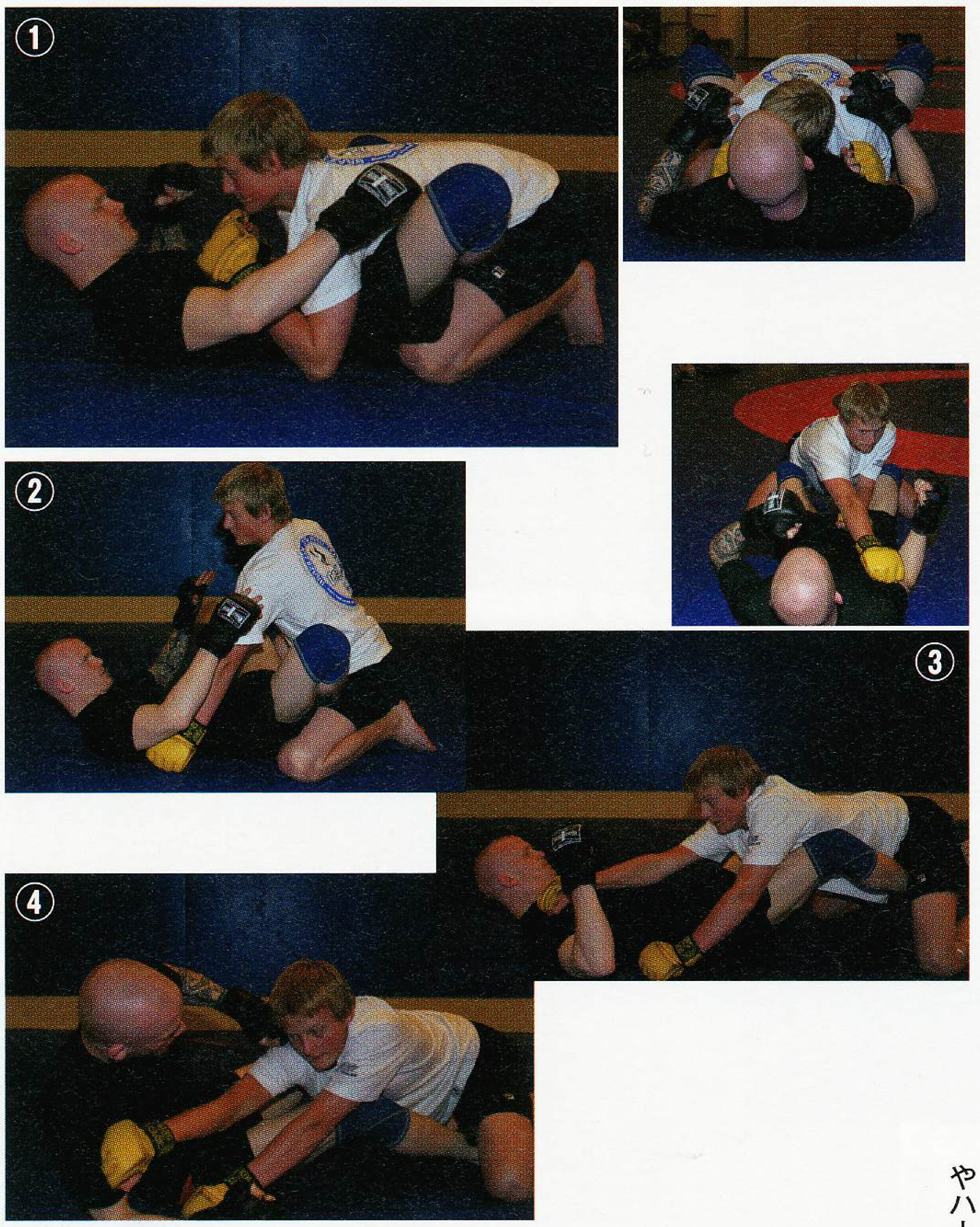
「優秀な柔術家は、総合の試合でも下にならないからじゃないか？　僕と違ってね（笑）。僕はガードからいかにパウンドするかということを研究したから、トップからのパンチにもその知識を活かすことができるようになったんだ」

――総合格闘技の試合で、良いパウンドを打つに当たって、最も重要なポイントはどこにありますか？

「とにかく寝技でミット打ちを繰り返し、有効なパウンドを打つことができるタイミ

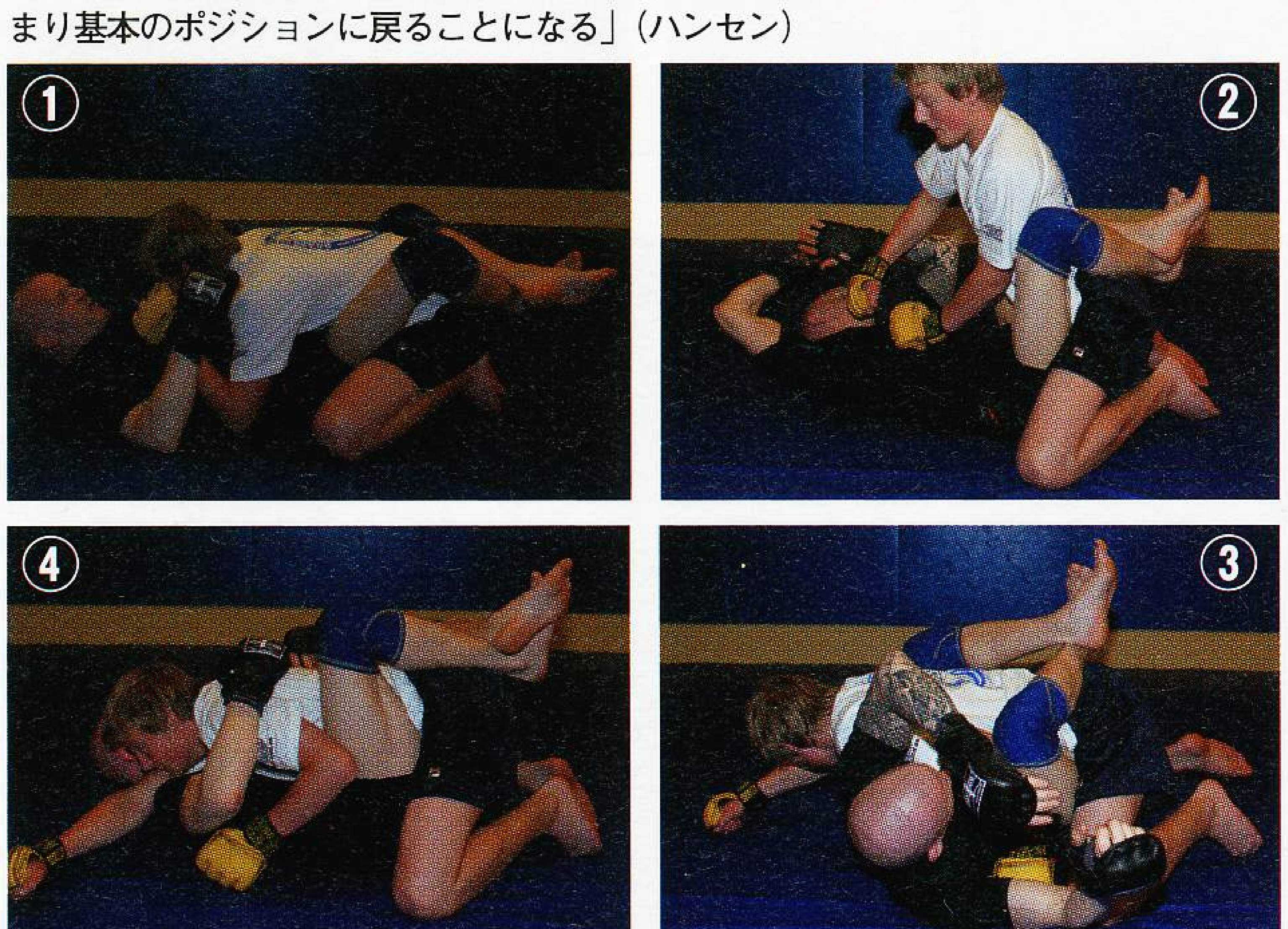
#1 <ガードポジションからのパウンド>

①バタフライガードをとる。②インサイドガードにいる相手が、体勢を起こし殴ろうとすると尻が下がる。③殴ってくる瞬間に、相手の足の付け根を蹴る。すると相手との距離が広がり、パンチは届かなくなる。「タイミングが大切。しっかり顔面を守りながら、相手の動作を見ること」（ハンセン）。④体も伸びきり、不安定な状態になっている相手の顔面にパンチを入れることができる。「相手の腰骨を蹴り上げた瞬間に、自分が殴ることを考える。相手の姿勢が、思った以上に前のめりになっていれば、右腕を巻き込んでバックに回ることもできる」（ハンセン）



#2 <クローズドガードで相手のパウンドを殺す方法>

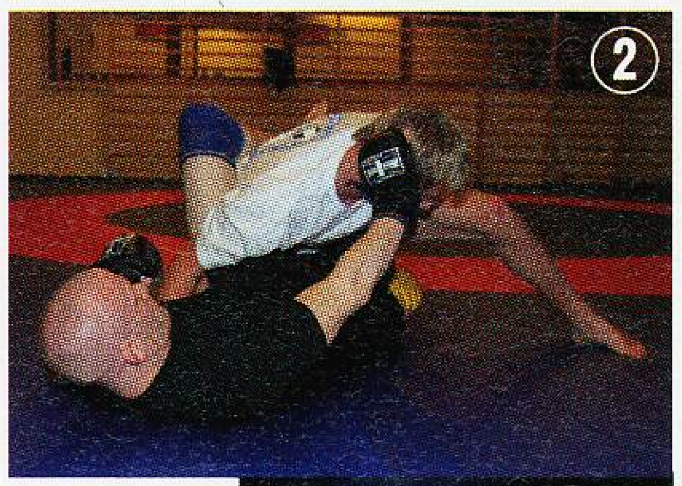
①まず、しっかりと相手の腰の上で足を組む。②相手がパンチを打ってきたのと同じ方向に体をねじる。③その時に、ガードをとった足を上げて、相手がバランスを崩したところでパンチとは逆サイドに体を再び捻りこませる。④相手の姿勢が崩れているので、再びガードに戻すことが簡単になる。「ガードに戻るということは、相手の隙を見てスイープでも腕十字でも、三角でもまた何でも仕掛けることができるということ。つまり基本のポジションに戻ることになる」（ハンセン）



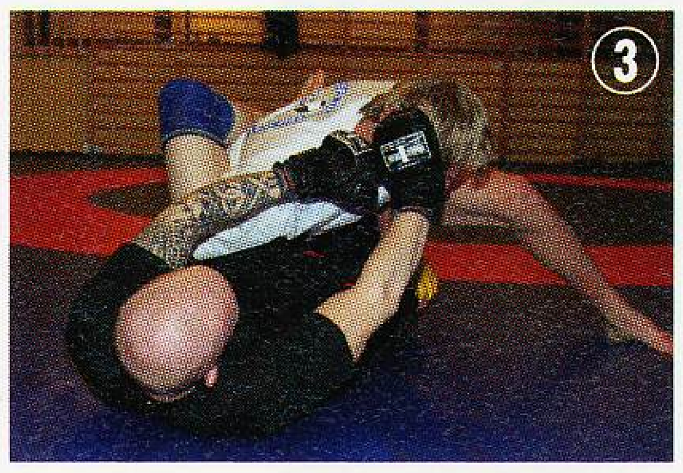
#4 <パスガードを防ぎ、勢いのあるパウンドを当て、ガードに戻す方法>

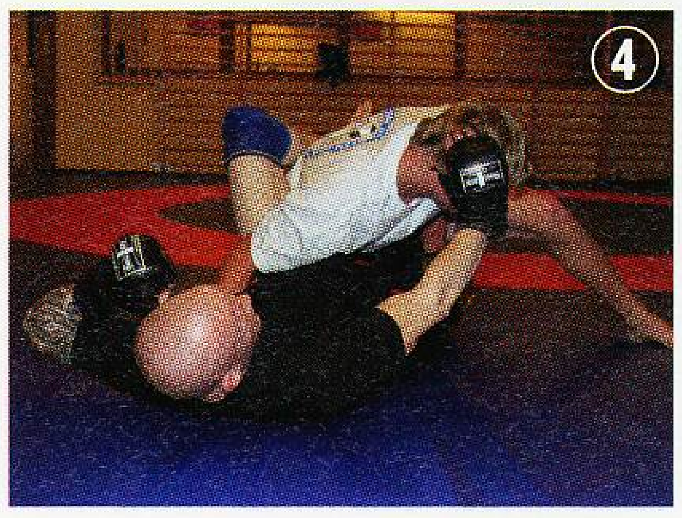
①上をとった選手が左側にパスを狙う。②左足を抜かれ、ハーフガードの状態になると、相手が一気にパスを狙ってくる。このとき、右手でパスを狙った方向へ相手の顔面を押す。パスを防ぐために。首を殺されると、相手はなかなか動けない。③頭を押さえられた相手は、それに逆らって必死で頭の位置を元に戻そうとする。④頭を押さえたまま軽いパンチを出すと、さらに頭を戻そうとする。⑤その瞬間、圧していた右手を外すと、勢いをつけた状態で頭が戻ってくる。左のパンチを思いっきり打ち込むと、戻そうとした力が加わり、左パンチはカウンターのような衝撃を与えることができる。⑥相手の頭は戻ってくるが、動きは確実に悪くなっているので、エビで距離をつくる。⑦ここで、右足の甲を相手の足の付け根に押入れ、フックガードの体制を目指す。⑧この時、大切なのは相手の右脇を差しておくこと。そして左足で、しっかり相手の尻を押さえつける。⑨相手は自由を奪われ、ハーフガードに戻すことができる。

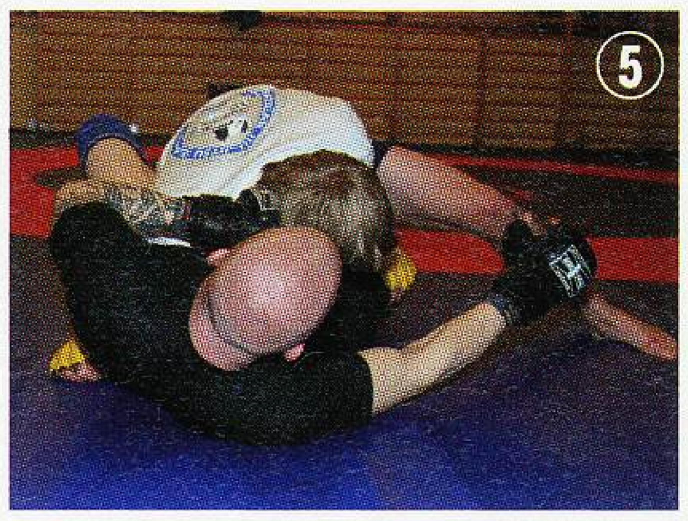


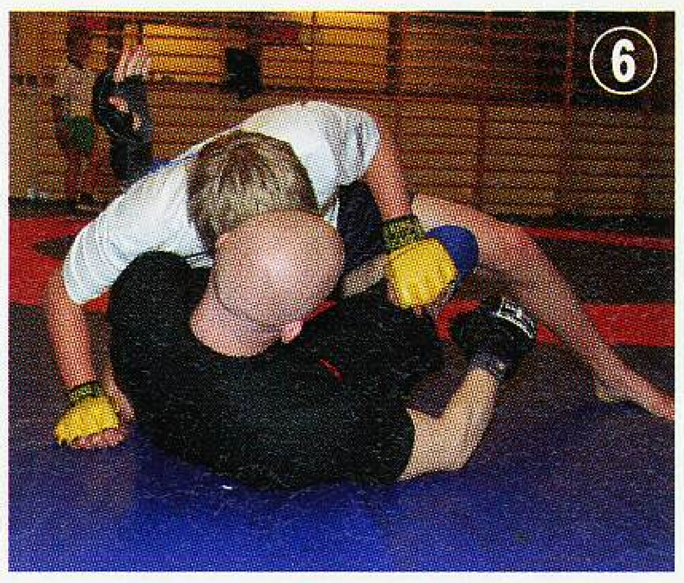


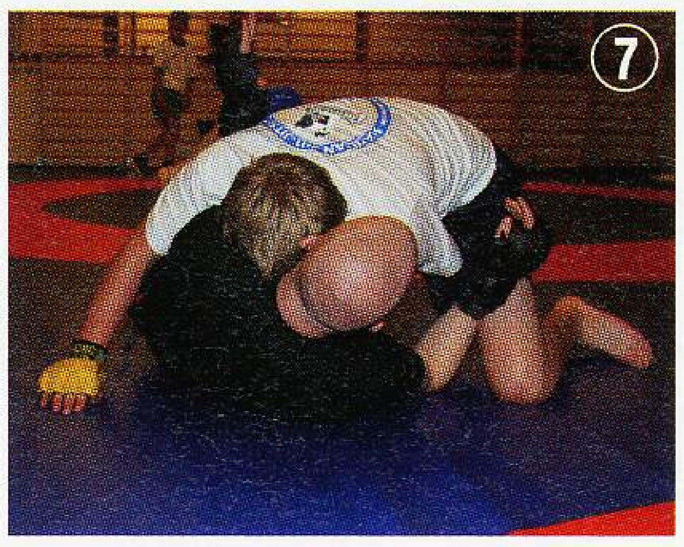


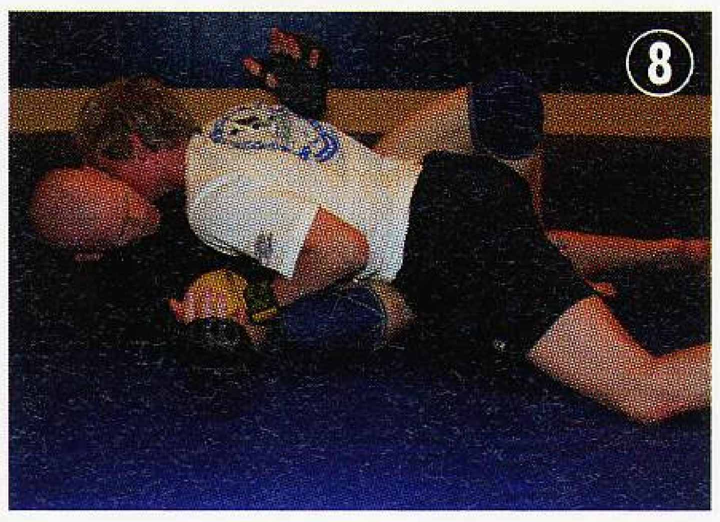


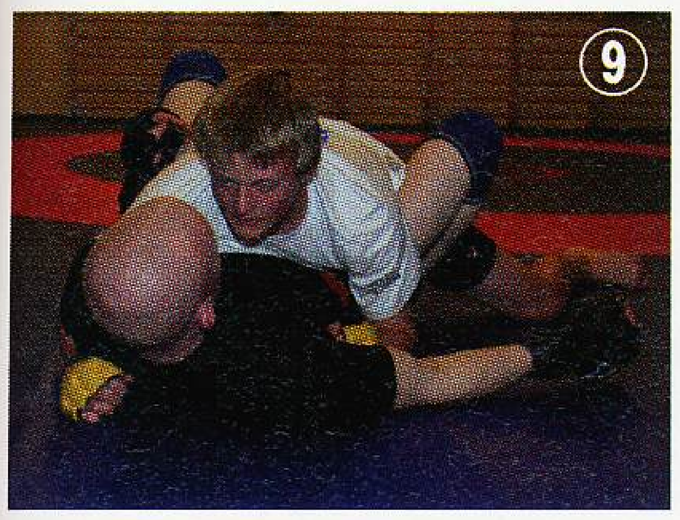










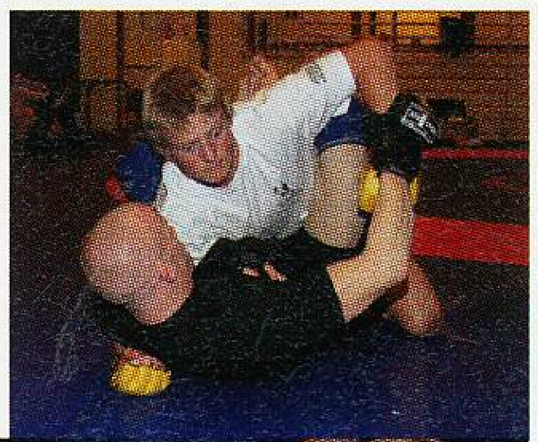


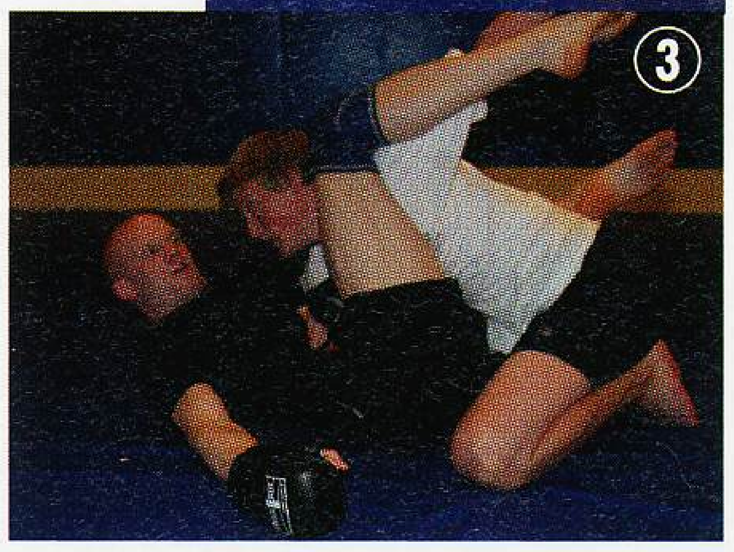
#3 <パンチを防ぎ、相手を固定してパウンドを入れる方法>

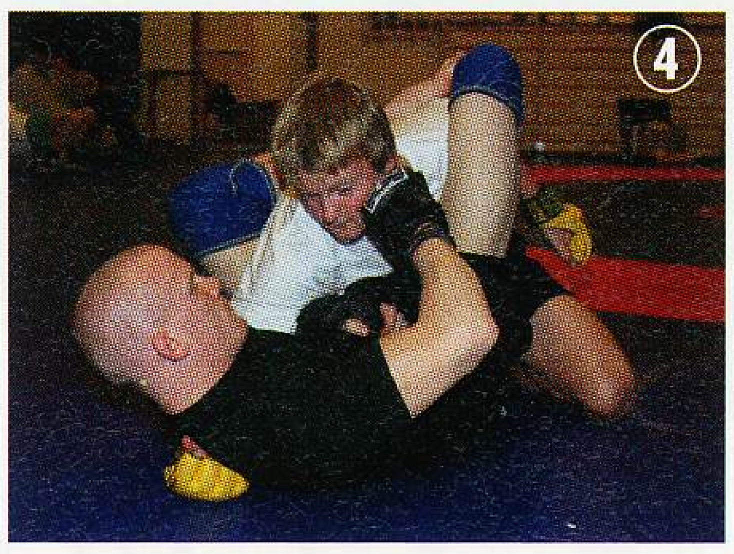
①まずしっかりと相手の左手首を掴み、右腕も抱え込む。相手のリストをしっかりコントロールしていれば、ここから三角絞めもかけやすい。②相手が殴るために腕を振り上げる。しっかり、手首を押さえて足を深くいれ、パンチを凌ぐ。③それでも必死で殴ろうとする相手は、必ず拳を振り上げてくるから、そうなると手首を離す。と同時に、ヒザを思いきり浮かせて右足で相手の腕を制しながら、肩越しにヒザの裏を固定し、足を背中側に回すと、相手はパンチを出せないばかりか、顔面ががら空きになる。④右手も動かすことができない相手の顔面を殴ることできる。⑤それでも殴ってくれれば、簡単に三角絞めに移行できる。「殴れるし、三角にもいける凄く合理的なポジションだよ」(ハンセン)

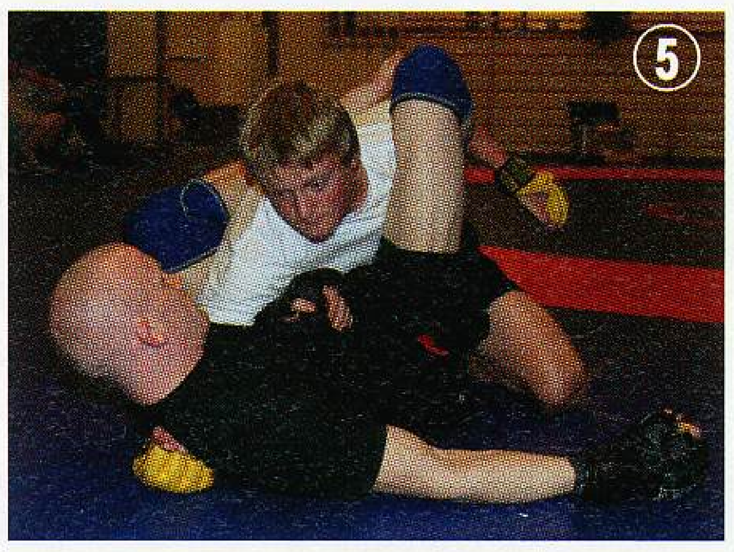












ングを体得すること。あと、頭以外をいかに殴るか。頭ばかり殴っていたら、相手も防ぐことが楽になってくるからね。ボディも殴り、効かせることが必要だよ。そして、腕を取られないこと。コンパクトに、ショートレンジのパンチを打つこと。大振りは厳禁だよ。腕を取られ、関節技に持ち込まれないよう気をつけないといけない」

――今、パウンドが流行っていて、関節技になかなかいかない試合も多いです。

「いや、関節技にいかないのではなく、いけないんじゃないかな。でも、そういう選手は、良いパウンドを打つこともできないよ。効かせるパウンドを有効に打つには、グラップリングの知識が絶対に必要だから。関節技、ポジショニングを知らない奴は、有効なパウンドを打つことは無理だろう。僕は柔術の基礎をしっかり体に叩き込んでいる。サブミッションの試合もたくさん出てきた。だから、効率の良いパウンドを使うことができるんだ。逆にいうと、柔術の基礎がなければ、効率の良いパウンドを使い切るのは無理だということさ」

――だから、パウンドからパスガード、関節技、それらの反対のパターンという動き

ポジショニングとパウンドの連携は無限に存在する

ができるのですね。最終的にパウンドでKOするのと、サブミッションで一本を極めるのはどちらが好きですか。

「そうだね、パスガードできるならパスをして関節技を狙うね。でも、なかなか上手くパスできなかったり、関節技を仕掛けることができなければ、パウンドを連打する。絞めやチョークをたやすく取れるように。相手からバックを奪うためにパウンドを使うこともあれば、バックをとってもなかなか極めることができないから、パウンドを使うこともある。とにかくディフェンスに長けた選手が相手であるほど、パウンドは重要になってくる。どんなに優れた選手でも、頭を殴り続ければ、その注意力は落ちていくからね」

――だから、思い切り叩きつける必要もないということですね。

「足を利かせる、パスを防ぐ、関節技から逃れることに必死になっている選手は、リングの上で僕と指相撲をしているのと同じことだよ。指相撲は片手で行うものだろう? もし、握り合っている拳だけに神経を集中していたら、すぐに顔面を殴ることができる。反対にパウンドから頭を守ることだけを考えていたら、パスが簡単になる。総合格闘技というのは、本当にチェスのような頭脳戦なんだよね」

――パウンダーの多くは、殴りづらくなるという理由でサイド・ポジションを取りたがりませんが、ハンセン選手の場合は?

「パウンドには、ハーフガードが適している。やはりサイドは打ちにくいね」

――インサイドガードとハーフでは?

「ハーフだよ」

――その理由は?

「分からない。ただ、僕はハーフガードの方がヒット率が高いんだ」

――でも、柔術家の多くはハーフガードからの返しをたくさん持っていますよ。

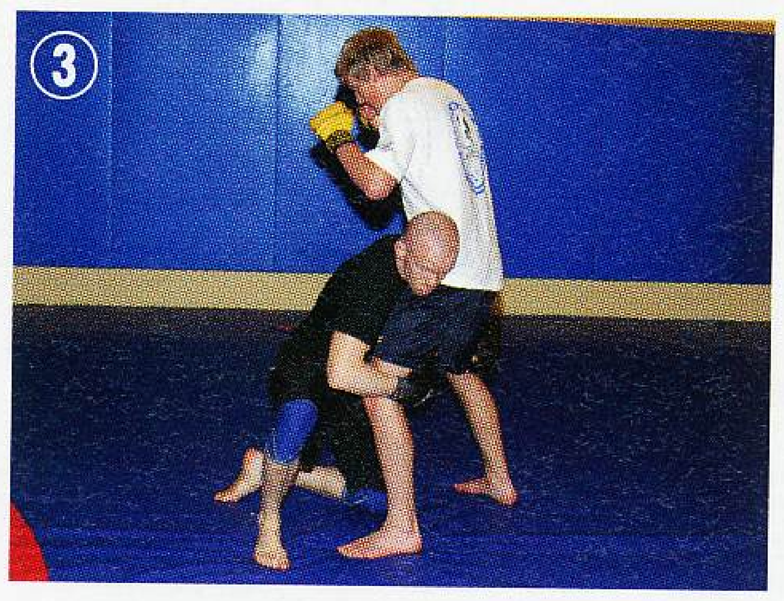
「とにかく距離をつぶして、下の選手の体に自分の体をしっかり固定させることが重

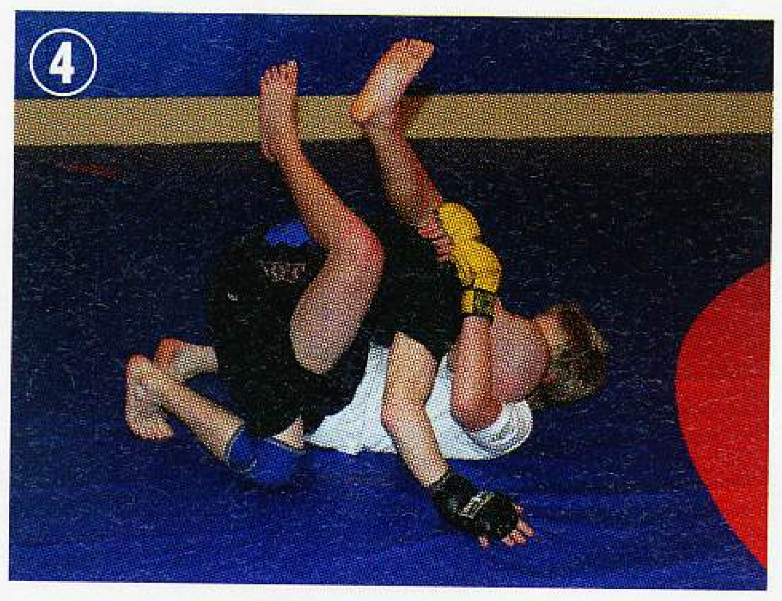
#5 <テイクダウンからパウンド、パスを奪う方法>

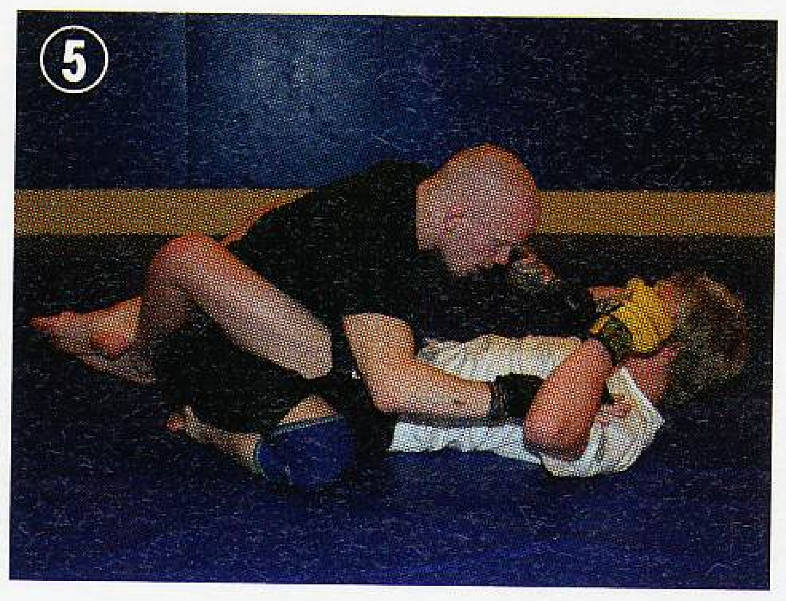
①相手がローキックを蹴ってくると、ブロック。②左ストレートのフェイントを見せる。③直後に、タックルをしかける。④テイクダウンに成功。⑤相手がクローズドガードを取る。⑥インサイドガードに入ると、一旦、頭を下げて相手の二の腕をプッシュする。⑦「肩を抑えてもダメ、腕が伸びてくるので、必ず二の腕を押すこと。これで相手は下から殴ることはできないんだ」(ハンセン)。⑧頭の位置を相手の近くにもっていく。⑨相手は殴ろうとしても、十分な距離がないため、脇を広げてパンチを狙うようになる。⑩脇が開くと、ガードが取れないので、すぐに頭を起こしてパンチを入れる。⑪一発、二発と効かせると、ガードは崩れ、オープンの状態になる。⑫この状態なら十分にパンチは届くので、パウンドを連打する。⑬パンチが届かないよう、下の選手がヒザを立ててくる。⑭そのヒザを押す。⑮さらにヒザを割っていき、足を抜く最大のチャンス。⑯ここで一気にパスを狙う。「大切なことは、右腕で相手の左脇をさして、十分な体勢をとること。ただ、ここで相手選手は＃４の技術を使って、下からのパウンドを打ちハーフガードに戻そうと試みることもできる。チェス・ゲームだよ」(ハンセン)

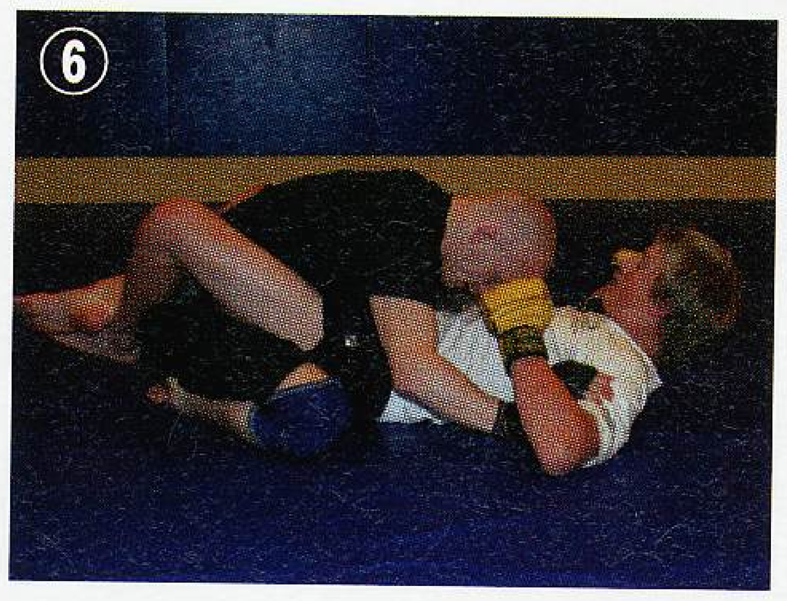




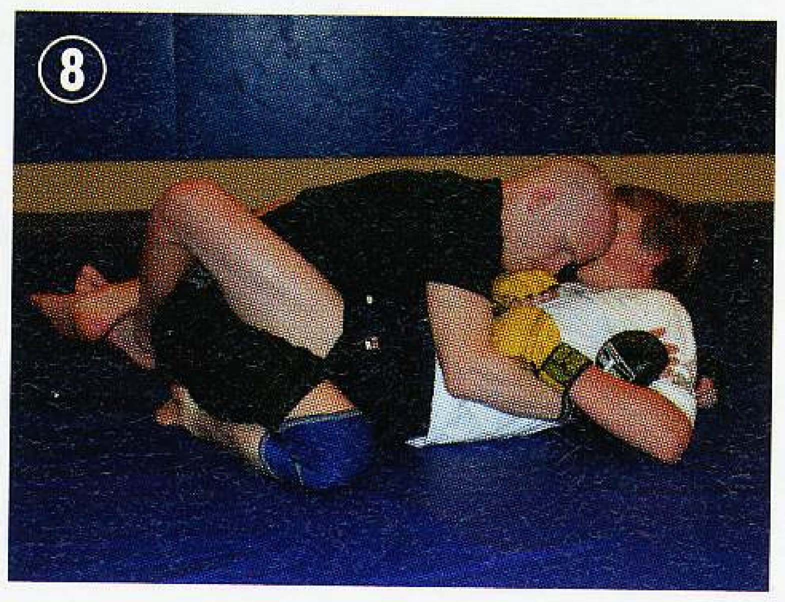


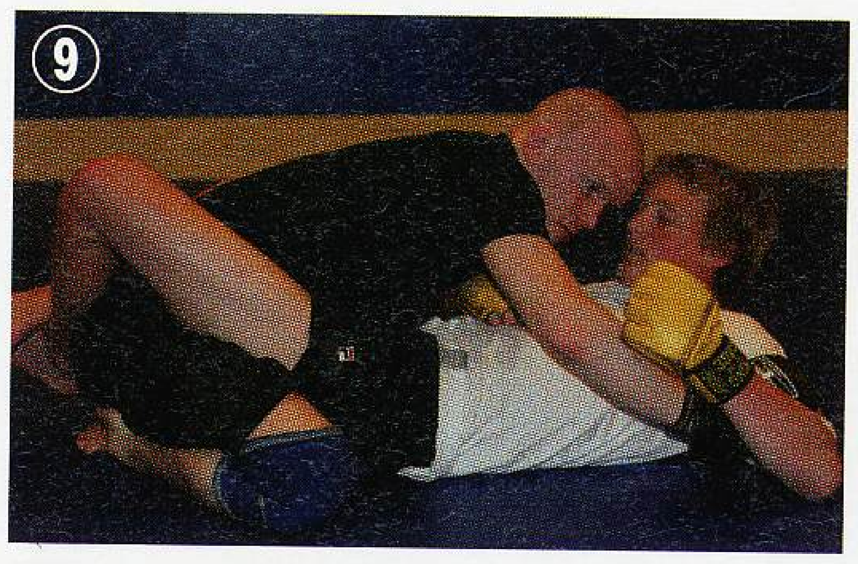




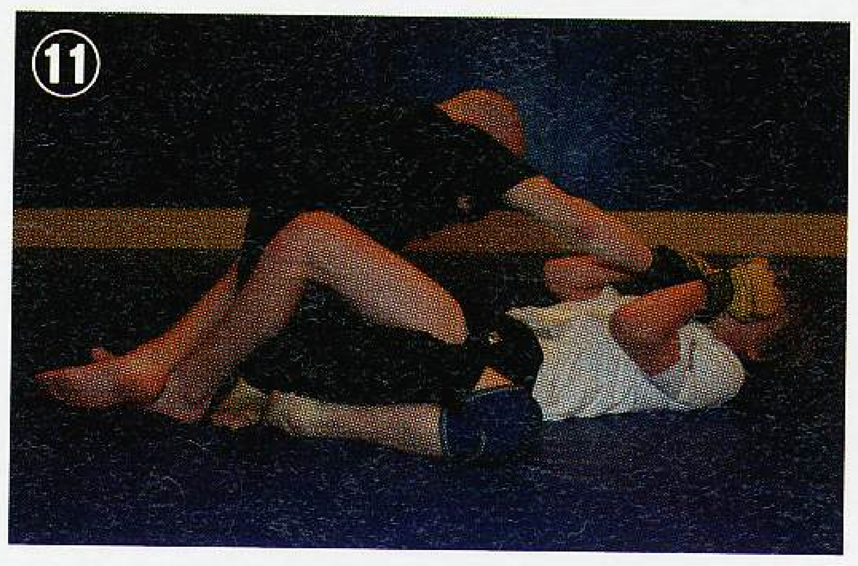


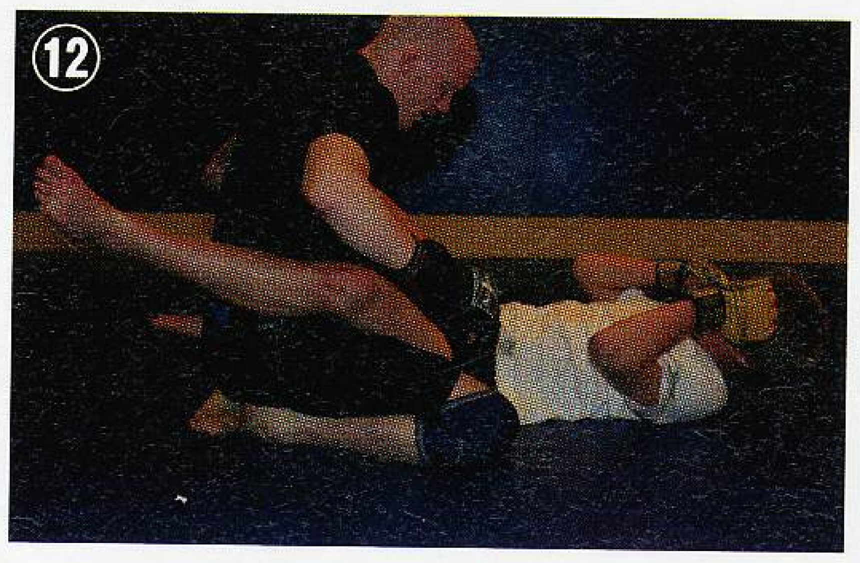


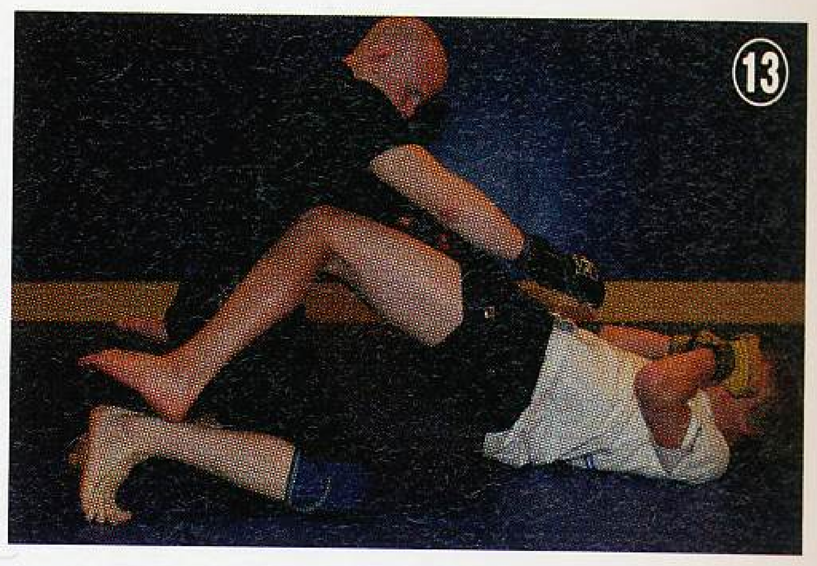


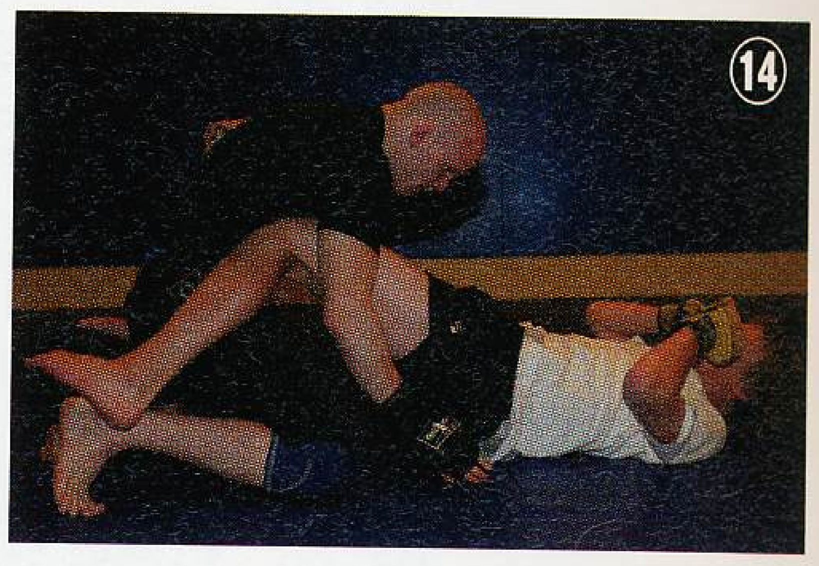


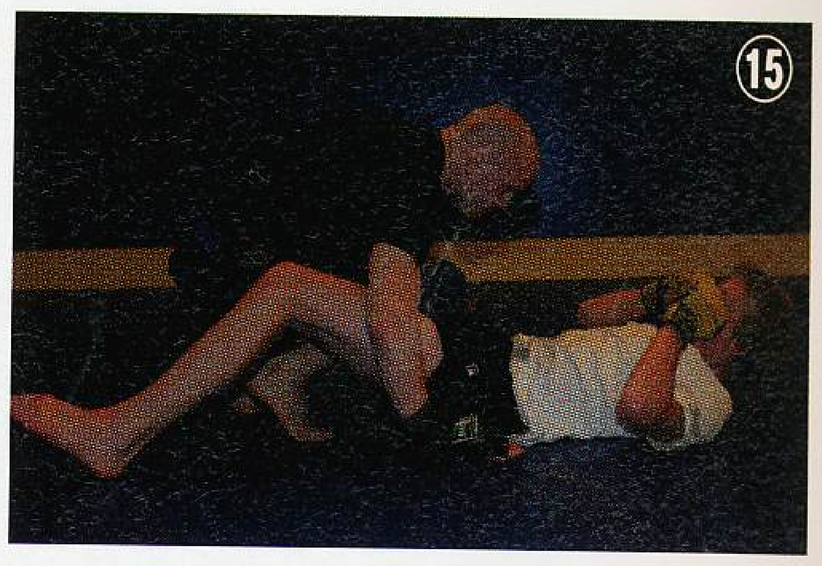


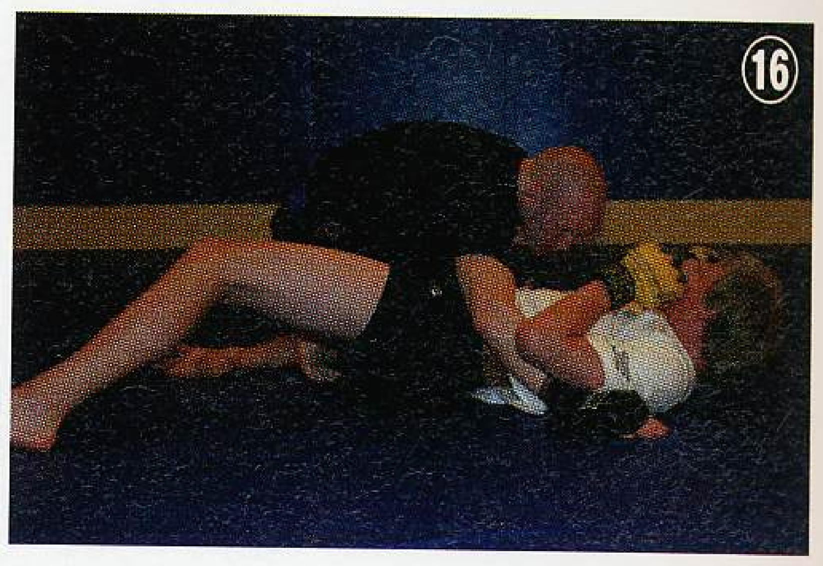












守りに集中するということはリング上で指相撲をやっているようなもんさ

要だ。それに下の選手が、何かを仕掛けてくることは当然のことだからね」

——上を取ったときに、下の選手がクローズドガードを取ったせいで、試合が膠着してしまうということが多いですね。

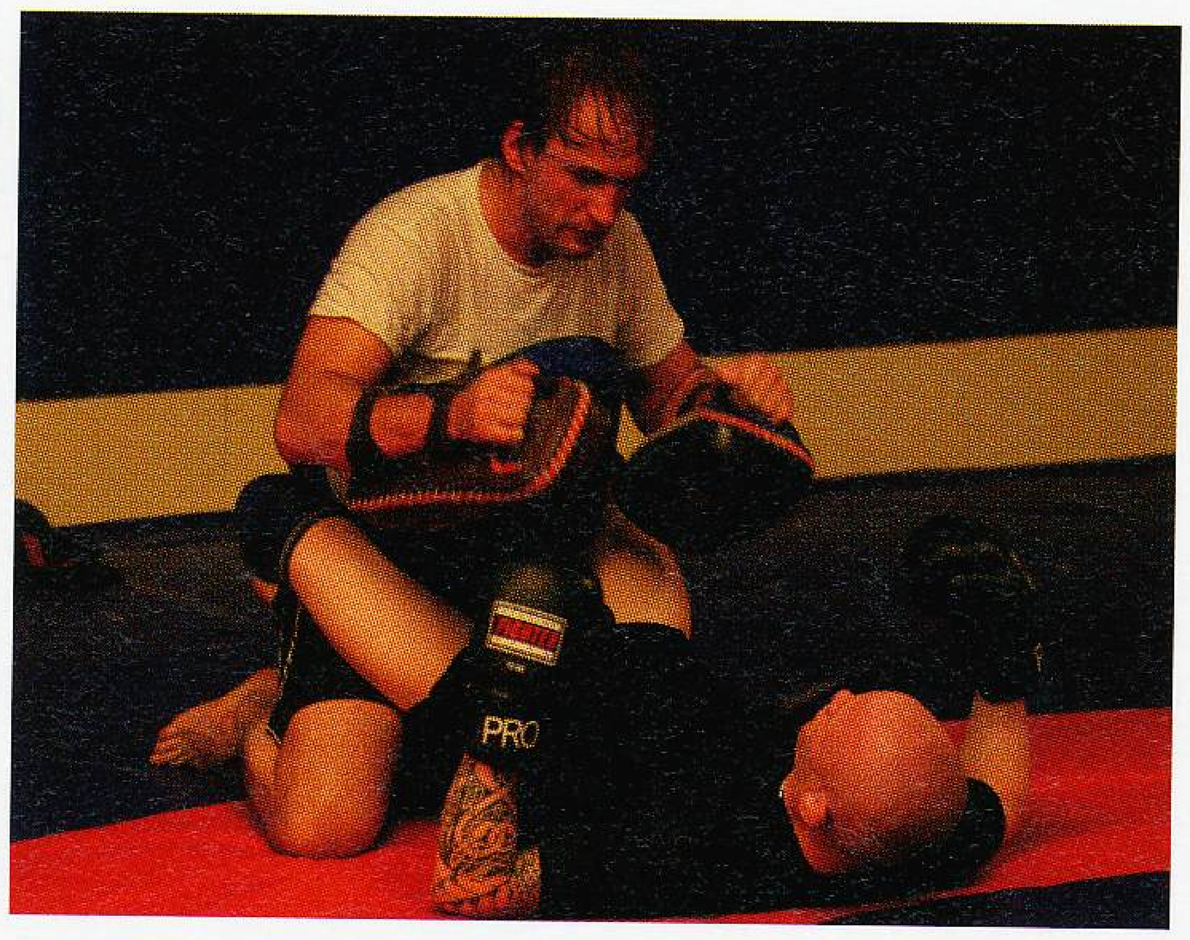
「なんでだろうね？　クローズドガードを取った選手は、中にいる選手の腰骨を蹴ることはできないし、ヒザも押すことができない。だから、総合の試合だと上の選手にとって、とても都合の良いポジションになるんだけどね。立ち技しかできなくて、その立ち技が飛びぬけている選手と戦っているなら、スタンドに戻らせないためにクローズドガードは有効だけど、寝技を知っている総合格闘技家を相手にした場合、絶対にとってはいけないポジションだよ」

——サイドを奪った場合はどうしますか？

「次に狙うのは、ニーオンザベリーから、パウンドだね。一発か二発、思い切りパンチを落としたら、再びサイドに戻るよ。それを繰り返し、十分なダメージを与えてKOを狙い。そう……、前言撤回だ。僕はパウンドで倒す方が好きなんだ。関節技はあまり上手くないから……（笑）。テイクダウンも上手くなくて、下になることも多い。そして、下からの関節技も極まらない。特にね、組技を知らない選手はセオリーが通じないから、とんでもない逃げ方をされることがあるんだ。あと、ヒジを抜くのが上手い選手も結構多い。だったら殴り倒したほうが手っ取り早いよね。とにかくパウンドでKOしたいなら、ポジショニングを学ぶことが大切だ。そして、関節技が上手くなればパウンドがもっと有効になる。柔術を知っているグラップラーだからこそ、優れたパウンダーになれるんだよ」

Joachim Hansen
ヨアキム・ハンセン

1979年5月26日　ノルウェー・オスロ出身
チーム・スカンジナビア所属　身長178cm
体重63～69kg
英国旅行中に見つけたUFCを見て、実兄と関節技を独自に研究し始める。99年11月フィンファイト3で優勝。02年12月の修斗NKホール大会で来日しタクミを破る。03年3月に佐藤ルミナ、8月には、五味隆典を下し、世界W級王者に。12月、ビトー・シャオリン・ヒベイロに敗れ王座陥落。気の強さと長い手足を生かしたファイトが特徴。



打撃の師ヤコブセンの持つパッドに、下からのパウンドを打ち込む。

所英男

It always moves about.
A technical theory is told.
The tips which take one are taught.



ZSTを代表する寝業師が、一本を取るコツを伝授！

打撃に『当て勘』という言葉があるのなら、寝技に『取り勘』という言葉があってもいい。勝負どころで瞬時にバッと極めに入るこの男の動きは、まさに『取り勘』の持ち主だ。常に動きまくり極めを狙う“名勝負製造機”こと所英男に、極め技の技術論を聞いてみた。

和良コウイチ＝取材・文 text by Koichi Wara
大屋美和（試合以外）＝撮影 photo by Miwa Ohya
ゴールドジム・サウス東京アネックス＝協力

—今日は所選手の技術論をたっぷり聞かせていただこうと思っています。
「いやー、上原さん（ZST広報）からちょっと話を聞いていたんですけど、あんまり技術あるわけじゃないんで、ちょっと不安です（笑）」
—そんなことないですよ。なぜ所選手を選んだかというと、やはり常に動いて極めを狙う姿勢です。簡単に「常に極めを狙う」といえるけど、実際そう楽なものじゃないでしょう。
「そうですね。取るのは難しいですね」
—たとえば正直、試合前に『これは取れないんじゃないか』と思う相手もいるわけですよね。
「はい（苦笑）。大石さんとかは絶対無理だろうなという感じがしました」
—そういうのが頭にあると、試合のときにも動きが止まったりはしませんか？
「不安なんですけど、そういうとき梁（正基）さんとか声かけてくれるので」
—動くというのは、それだけ自分にリスクがあると思いますが。
「リスクあるかもしれないですけど、動いたほうが相手も隙ができますから」
—ぶっちゃけ、判定でも勝てばいいやと思いませんか？
「……でも判定だとちょっとZSTだとよくないんで（と上原広報を横目でチラリ）」
—常に極めを狙おうとすれば、すごいスタミナを使うわけですよね。
「自分ではあまり自信ないですけど。自分のペースでやると、けっこうあるかなと思うときはありますけどね」
—基本的な質問をしますが、所選手は総合を誰から習っているんですか。
「梁さん。出稽古で教わった技術を、また梁さんにまとめてもらう感じで」
—もともとは山本喧一選手に習っていたわけですよね。いまでもその部分は残っている？
「もうそれがほとんどベースで、いまそれに付け足していっている感じで」
—山本選手の技術というのはどういう感じですか？
「パスガードとかもうまいんですけど、極める技術が本当に長けている感じがします。アームロック一つにしても、ちょっと普通じゃない感じで」
—ちなみにいま出稽古はどちらで？
「今成さんのところ（ROKEN）とかスポセン（新宿スポーツセンター）とか。最近たまにパレストラの裸の日に行かせてもらっています」
—出稽古先で、『ちょっとこの人はすごい』と思う選手は？
「やっぱり今成さん、矢野さんはすごいですね。あとGスクエアで高瀬さんとやらせてもらったんですけど、本当にすごかったです」
—ZSTではグラウンドの顔面パンチがないので、他の総合とは少し技術が違ってくる部分があると思いますが、その辺は意識しますか。
「基本的に技術は変わらないと思うんです。でも、動きがちょっと大きくなるかな。顔面パンチありだと密着することが多くなると思うんですけど、KOKルールだと隙間が大きくつくれるんで、余計動けると思います」
—ああ、たとえばガードの相手がパウンドを恐れて密着するとか、そういうのがなくなりますよね。でも、他の総合だとマウントを取った後に顔面殴って、腕が上がったところに腕十字というパターンがよくありますけど、そういうことはZSTではできないですよね。
「はい。あまりそういうこと（マウントパンチ）したことないですし」
—ではマウントになったとき、顔面パンチなしだとまず何を考えるんですか。
「僕の場合は、マウントから極めることができる技というのは限られているので、まず脇を差してポジションを移動しようかなということを意識します。横四方になったり上四方になったり」
—というと、マウント自体は別においしいポジションではないわけですね。
「そうですね。でも見た目が有利なんで。かっこいいポジションだし（笑）」
—どちらかというと横四方などのほうがいいと。

の世界。

「はい、極めを狙えるので」
—所選手の試合を見ると、よく足関節を狙っている印象があるんですけど、実際

ギウス・モリ
。足関で一本

oro
県揖斐郡出身

最近、クロスヒールにハマッている。
いつか試合で極めたい

感じですか？
「パスガードとかもうまいんですけど、極

「はい、極めを狙えるので」
——所選手の試合を見ると、よく足関節を狙っている印象があるんですけど、実際になかなか一本は…（笑）。
「そろそろ足関で極めたいと思っているんですけど（笑）。コイツには足関があると思わせたいんですけど、なかなか取れなくて」
——どこが悪いから取れないとか周りから指摘を受けますか？
「そうですね。やっぱり膝の締めとか」
——"足関十段"の足の締めは、ハンパじゃないらしいですね。
「ハンパじゃないです、本当に」
——彼自身は、特に足の締めを意識して鍛えていないらしいですね。
「やっぱり自然に元から強いというのがあると思います。だから足関が合っているんじゃないですか。向き不向きがあると思いますけど」
——所選手も練習だとけっこう足関も取っている？
「けっこう練習だと、極まる前にタップすることが多いじゃないですか。だから取れることはたまにありますけど」
——ヒールもアンクルも膝十字もアキレスも取れる？
「あ、アキレスはないです。ヒールとアンクルで相手が危ないと思ったときのタップぐらいですね（笑）」
——では今後磨いていくと。あと足関を除いて、練習では得意だけど試合ではあまり出ないという技はありますか？
「けっこうアームロックが好きなんですけどね。あとヒザ十字とかいくつか」
——ヒザ十字は坪井戦で形には入ったのに惜しかったですね。
「極まったタメシがないんで。いつか極まると思いますけど（笑）」
——よく打撃の場合に『当て感がある』という言い方をしますけど、私は所選手の場

際（きわ）で極めにいくことはけっこう意識している

すばらしき極め技の世



"レミーガ"ことレミギウス・モリカビュチス戦の所英男。足関で一本を取る日も近いか。

Hideo Tokoro
ところ・ひでお
1977年8月22日、岐阜県揖斐郡出身
身長170cm、体重65kg
所属 STAND

最近、クロスヒールにハマッている。いつか試合で極めたい！

合は『取り感がある』と思っています。十字で取った中原戦や大石戦なんか、瞬間的にパッと取る感覚がすごいなと思って。
「ああ、詰めて詰めて取るんじゃなくて」
——そうですね。隙をなくして追い詰めて取るのではなく、相手の殴ったパンチの引き際みたいなところでパッと取るのが。
「際（きわ）というんですかね。そこで極めにいくことはけっこう意識しているかもしれないです」
——あの辺って、教えてできるものじゃないという感じがします。
「そうだと嬉しいんですけど、はい（笑）」
——あと、所選手の試合って、一度取ると次の試合も続けて同じ技で取る傾向がありますよね。裸絞め、三角絞め、腕十字…。
「うーん…（戦積を見せると）あ、本当ですね！　あ、すごい！　気づかなかった！」
——いま初めて気づいたんですね（笑）。
「じゃあ次の試合はネックロックになるはず（笑）。でも、たまたまです」
——一度それで勝つと、無意識に狙っているのかも。いいイメージが体の中に残っていて。
「ああ、なんかあるかもしれないですね。けっこうワンパターンなんですけど」
——過去の試合の中で「これは会心の一本だ」というのを挙げるとすると？
「本当にまぐれですけど、嬉しかったのは大石さんを極めた試合です」
——この後に所選手の技術を紹介してもらいたいんですけど、最近ハマっている技はありますか？
「最近、クロスヒールホールドにはまっているんですよ」
——クロスヒール！　あれは試合ではなかなか極まりませんよね。
「ちょっと練習ではまっているだけなんで（笑）」
——それこそ「小さなヴォルク・ハン」の異名通り、ハンがよくリングスで使っていた技ですから。
「はい。いつか試合で披露して極めたいです！」

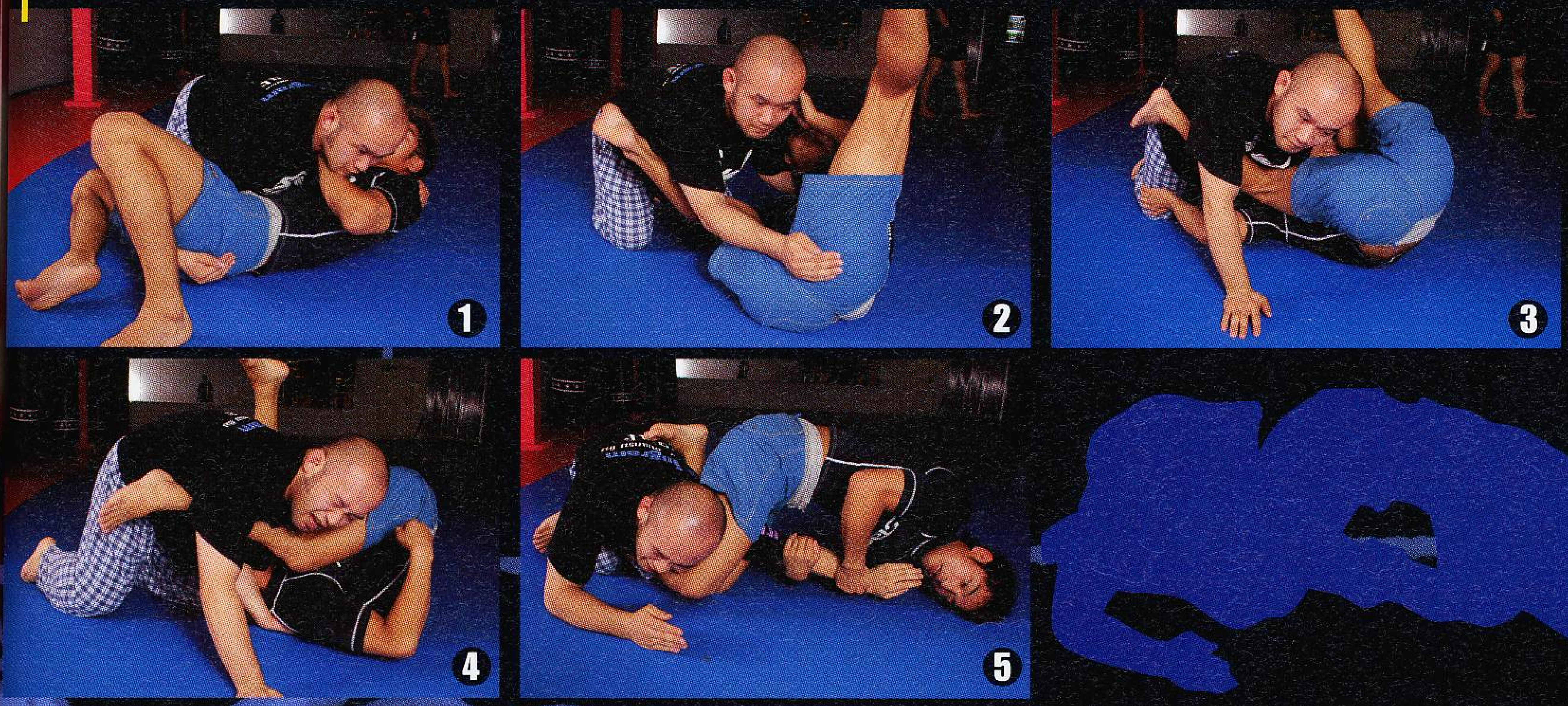
■ 所英男のプロ戦績
13勝（8一本、1KO）5敗1分
リトアニアBUSHIDO(04/11/20)
●【判定0-3】ダリウス・スクリアウディス
ZST GP2 (04/11/3)
○【1R0分38秒　フロントチョーク】勝村周一朗
ZST.6(04/09/12)
●【1R 1分44秒 ヒールホールド】小谷直之
BATTLE HAZARD 01(04/07/04)
○【3分23秒 三角絞め】佐東伸哉
ZST.5(04/05/05)
○【1R 3分30秒　三角絞め】レミギウス・モリカビュチス
リトアニアBUSHIDO『VENDETTA』(04/04/04)
○【2R 3分40秒 裸絞め】エリカス・ペトライティス
GT-F 決勝戦(04/03/07)
○【2R 2分39秒　裸絞め】若林次郎
GT-F 準決勝(04/03/07)
○【2R判定2-1】松本秀彦
GT-F 1回戦(04/03/07)
○【2R 判定3-0】大石"JACKAL"真丈
ZST GP final stage 2回戦　(04/1/11)
●【1R 0分53秒KO】TAISHO
ZST GP opening stage　(03/11/23)
○【1R 3分13秒　腕十字】大石"JACKAL"真丈
ZST.4 (03/09/07)
○【1R4分56秒　腕十字】中原太陽
ZST.3 (03/06/01)
●【1R1分45秒KO】レミギウス・モリカビュチス
ZST.2 (03/03/09)
○【延長R判定2-1】松本秀彦
ZST.1 (02/11/23)
○【2R4分09秒　腕十字】坪井淳浩
デモリッション(02/09/08)
○【1分41秒TKO】滝田J太郎
プレミアムチャレンジ(02/05/06)
○【10分判定】矢野卓見
リングスBATTLE GENESIS vol.8 (01/09/21)
●【3R判定】小谷直之
クラブコンテンダーズ(01/08/15)
△【5分2R判定】阿部裕幸

これがTOKORO流オリジナルテクニックだ！

どんな体勢からでも仕掛けられるTOKORO流。ここでは得意とする腕十字の一つと、グラウンドコブラやクロスヒールホールドといった試合では見せたことのない独自の入り方を紹介してもらった。これが極まったら、ファンの驚く姿が目に浮かびそうだ。

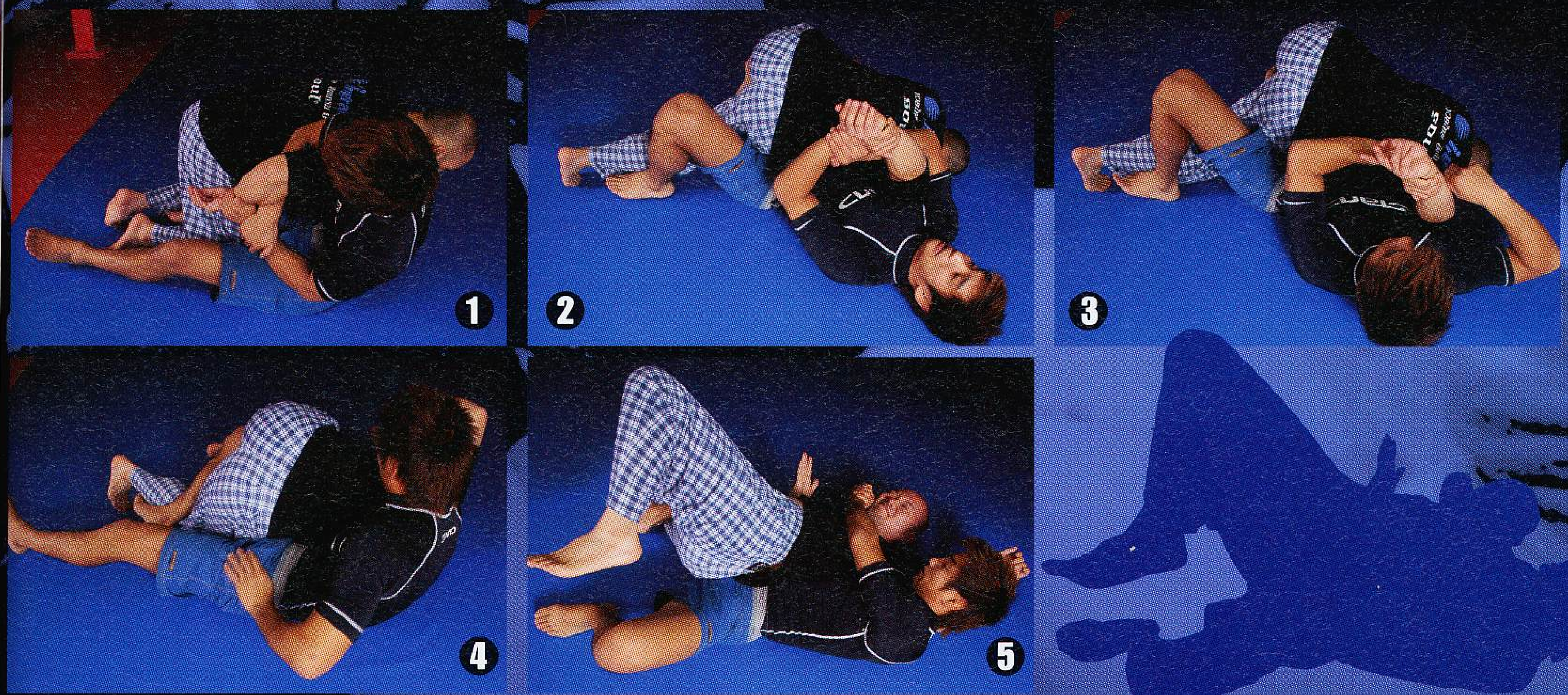
1 抑え込まれた状態からの腕十字

横四方で抑えられた状態から、相手の首と腰に当てた手で押し上げて距離をつくる。同時に頭を内側に入れるように、身体の軸を回転。相手の左腕に絡みつき、腹を出して腕十字を極める。



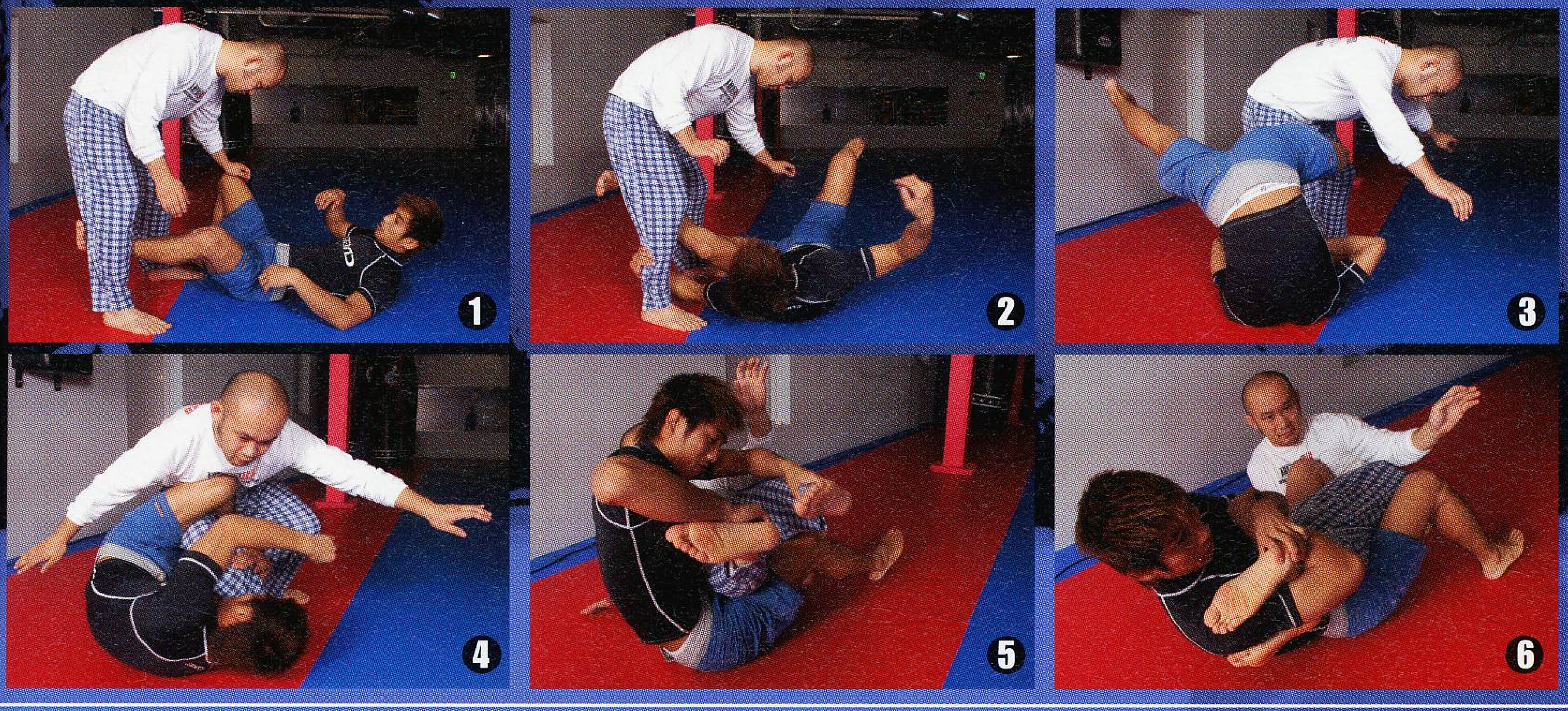
2 アームロックからのグラウンドコブラ

ガードポジションからアームロックを仕掛ける。相手の脇がある程度空いたら、手を持ち替えて、自分の身体を起こす。このとき、右足をかけて相手は前転して逃れないようにしていることに注意。自分の頭を相手の脇下に突っ込み、下から伸ばした右手と左手でクラッチを組み、グラウンドコブラで締め上げる。エディ・ブラボーの“ツイスター”と非常によく似ているが、「エディ・ブラボー？　ツイスター？」（所）とのことで、自分で考えた動きのようだ。



3 クロスヒールホールド

ガードポジションから振り子のように足を回し、相手の右足に絡みつく。遠心力を生かして、右足は相手の内側、左足は相手の外側に入れて倒す。相手が床に尻をつけた後は、手でつかんで相手の足を組みかえる。写真の場合だと、相手の右足を下に、左足を上にしてクロスさせる。相手の右足踵を抱えるとクロスヒールホールドの完成だ。



煽り映像から見えてくる

ZST World!

An interesting game
ZST which hands down RINGS KoK

～リアル格闘エンターテイメントの追求～

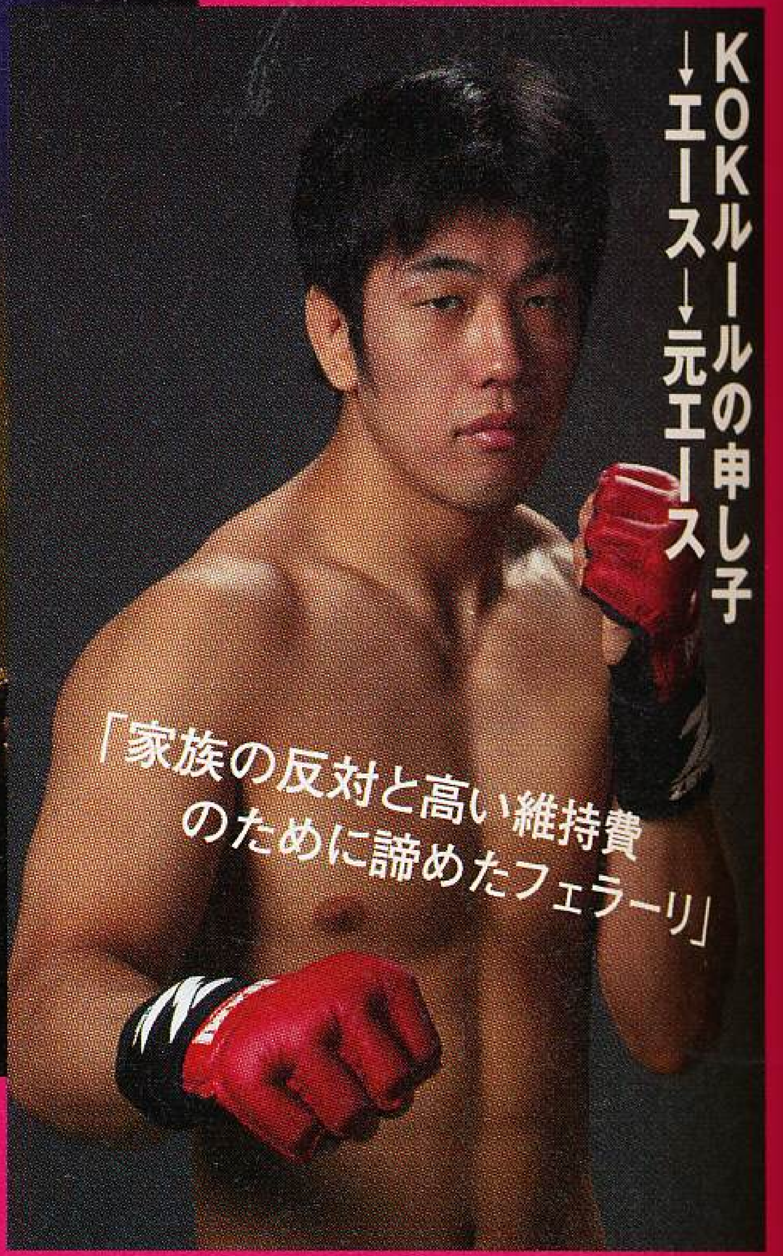
所英男。いじられやすいキャラながら、勝っても負けても入魂の名勝負を繰り返す彼には、誰もが全幅の信頼を寄せているのが分かる。持ち上げとこき下ろしが延々と続く。





常用会場Ｚｅｐｐ　Ｔｏｋｙｏの特徴を活かした、光と音の競演がリング上の選手の存在を引き立てる。これぞＺＳＴらしさの真骨頂。

小谷直之。エースでありながら、格闘技一筋、非社会的な彼の一面をフェラーリ購入希望のエピソードが見事に表している。敗北が続くと、エースにも容赦のない毒が吐かれる。



パウンド無し、クローズドガード禁止、膠着厳禁。
スピーディーでテクニカル、リングスKoKを伝承するZSTは、他のMMAとは一線を画した、世界観を持っている。
リング上は真剣勝負。そして、“面白い試合の追及”というエンターテイメント路線。
この路線を際立たせているのが、試合前の煽り映像に代表される舞台演出だ。
常にオチがつく名文句の数々、観客の笑いを誘いながら、選手に対する礼を欠かない温かさ。
ZSTワールドを知るには、煽り映像&舞台演出のあり方から。映像&舞台監督の話を交え、ZSTワールドを徹底解剖する。

松本幸代＝取材・文
text by Yukiyo Matsumoto

ZST 事務局＝写真提供
photograph offer by ZST

Ｋ－１、ＰＲＩＤＥに代表されるように、現在の格闘技イベントでは、観客の気持ちを煽るためにスクリーンに映し出される選手紹介映像は欠かせないアイテムとなっている。選手のバックに赤々と炎のＣＧが立ち上がり、戦慄のＫＯシーンを短いカットで畳み掛けるそれらの映像は、「カッコイイ」の一言で言い表すことができるだろう。ところが、ＺＳＴの選手紹介映像は違う。明らかに違う。違いすぎる。

まず手始めにナレーションの一部を紹介してみよう。旗揚げ当初こそ「ＺＳＴ無敗のエース」とカッコよく紹介されていた小谷直之も、いざ負けが込むと敗北シーンの映像とともに「大きなプレッシャーによる無様な試合」だの「本人のやる気とは裏腹に、何をやってもダメダメ状態」とばっさり斬り！

所英男にいたっては「誰もが驚く驚異的な成長を遂げている所！」と大絶賛かと思いきや「しかしファンを散々その気にさせておきながら、ここ一番の試合でプチ失神やあの高速タップで、あっさりと期待を裏切ったりするのも、この男の特長のひとつである」と、最後はやっぱり斬り！

格闘技映像のセオリーなどまったく無視。なのに面白い。抜群に面白い。1秒でも早く選手の顔や闘う姿を見たくなる。これは一体どういうことなんだ？　そこで、大会演出を手がける井内弘巳（ハイ・ステージ）さん、映像監督の関和紀（株）エル・アミティエ）さん、そしてＺＳＴの上原譲広報の3人に、常識破りな選手紹介映像ができてしまった経緯を聞いてみることにした。

井内さんの本職はライブコンサートのプロデュースや舞台演出。95年のバーリトゥード・ジャパンをスタートに、コンテンダーズからＷＷＥの日本公演まで演出家として幅広く活躍中だ。ＺＳＴでは旗揚げ戦から映像はもちろん照明、音楽など大会進行に関わる全般を取り仕切っている。

その井内さんが「この人なら」と見込んで、ＺＳＴ2から映像制作を依頼しているのが関さんだ。ミュージックビデオなども制作していただけに、スタイリッシュな映

像はお手の物。サムライTVではPRIDE番組のオープニング映像、また通の修斗ファンの間で語り草となっている「WANNA SHOOTO」のオープニング映像も、この関さんの手によるものだ。

ここで、ZSTの映像ができるまでのプロセスを井内さんに説明してもらおう。

「たとえば『今回は選手一人ひとりが20秒間隔で入場してくる』など、僕が細かい演出プランを立て、関さんに電話でざっくりと伝えます」。なぜ電話なのか。井内さんの答えは明快だ。

「じっくりプランを詰めちゃうと面白くないんですよ。関さんの技量を信頼しているので必要な秒数だけ伝えて、あとはその時間内で遊んでもらう。実は当日のリハでも僕は極力見ないようにしているんです」

関さん渾身の作を、本番の雰囲気の中で観客と同じ目線で楽しみたい。だから事前に見ないというのだ。井内さんの目下の悩みは「中継番組でチラッと本部席が映った時に、スクリーンを見ながら思わず笑っちゃってる自分の顔を発見してしまうこと」なのだそうだ。

さて裏方までが「思わず笑っちゃう」選手紹介映像は、何がきっかけで誕生したのか。関さんは「まずZST1での小谷直之とヤノタク（矢野卓見）における試合のギャップというのがありました」と語る。

クールな表情で戦慄の一本勝ちを連発する小谷。妖しげな動きでリングを独特のムードに変えてしまうヤノタク。対照的なスタイルが混在するZSTというリングを表現するには、KOシーン連発の「カッコイイ」映像では物足りない気がした。

「なにか人間性が出せる方法はないかなと。それがきっかけといえばきっかけですね」

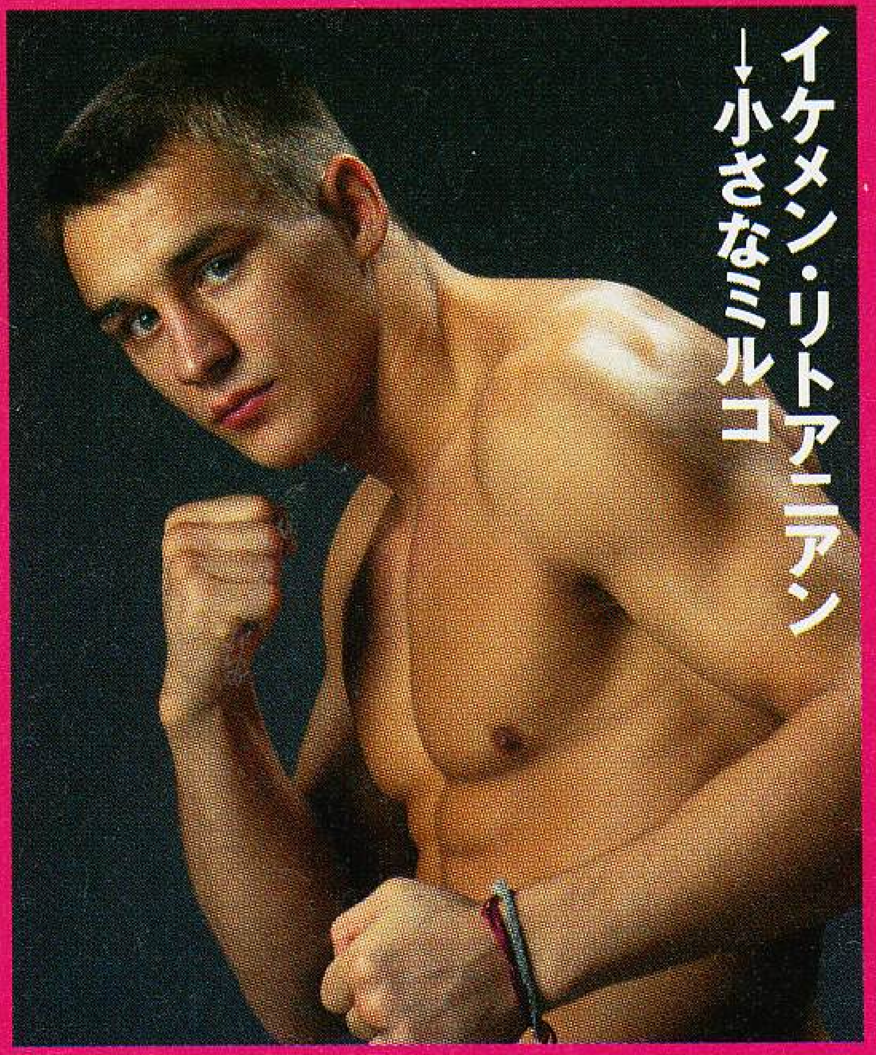
演出にあたってZST事務局から出てきたオーダーも、既存の格闘技団体とは一線を画していた。

『競技』は他に色々なところがやっている。うちは『ショーエンターテイメント』だと。

「だったらカッコイイところを見せても仕方ないじゃないですか。簡単に言って、カッコイイ映像がドキュメンタリーだとすると、僕らがやっているのはバラエティ。バラエティの中に"熱湯風呂"があったら、それもリアリティじゃないですか」（井内）

たしかに、クールな小谷をそのまま見せても「強い」という印象に留まるかもしれない。そこで「小谷よ、世界の階段を駆け上がれ！　乗れ、フェラーリ！」「家族の反対と高い維持費のために諦めたフェラーリ。しかしそれ以上の大きな夢をつかむためにも、絶対に負けは許されない！」といった"熱湯風呂"的インパクトを効かせることで、「フェラーリに憧れるけど残念ながら諦めちゃった小谷」というキャラクターが、なるほどホノボノと立ち上がってくる。テレビのバラエティ番組にも携わる井内さんらしい柔軟な発想だ。

笑っちゃう映像づくりの原点でもう一つ重要なポイントは、意外にも上原広報から送られてくる選手資料だったという。国内外の選手と密に接しているだけに、上原広報の持つエピソードは豊富だ。



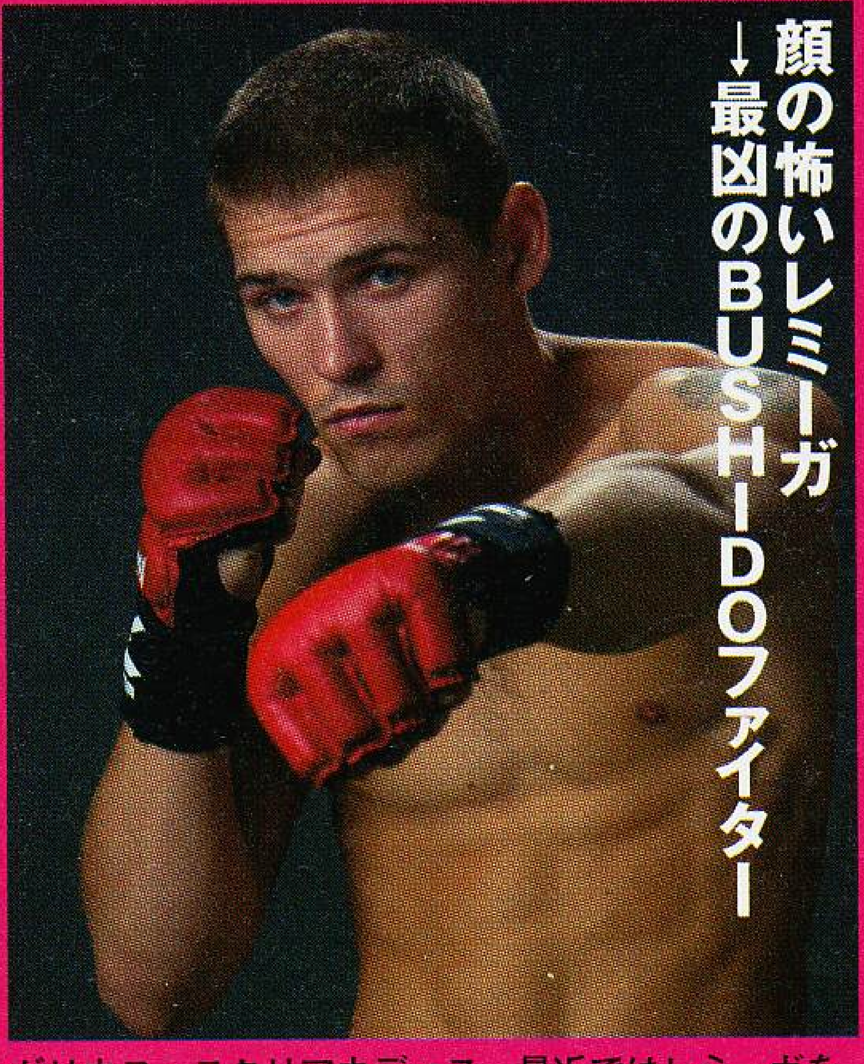
レミギウス・モリカビュチス。ファイトは豪快かつ鮮やかだが、映像でその人間臭さを演出する。しかし映像の余韻を打ち消す一番手でもある。



ミンダウガス・スミルノヴァス。海外勢では一番のいじられキャラ。タップを拒み続け、負けず嫌い王と称され、何かと引き合いに出される。



大石真丈。映像監督が修斗好き、崇拝者という影響で、絶対に茶化されない。連敗したあとも、真剣に勝利を願う気持ちが伝わってきた。



ダリウス・スクリアウディス。最近ではレミーガを凌ぐほどの存在感を持つ。ZSTガールの肩を抱くので、セクハラ男の烙印を押された。



佐東伸哉。パンクラスから継続参戦しているが、勝ち星になかなか恵まれず、佐藤から佐東への改名効果を問われるなど、いじられキャラに。



松本秀彦。ZST煽り映像史上、最も安直に付けられたキャッチ。映像も本人のコメントで作りこみはなし。敬意を表しすぎか？

ZST1で初招聘したものの、今成の足関節で、バキバキと音がするほどの負傷をしたレミーガこと、レミギウス・モリカビュチス。一堂心配し暗い顔で空港まで見送ったが、上原広報が出発前に「ケーキでも食べようか」と話しかけたところ、「ケーキ！　わーおっ！」と大喜び。いの一番にエスカレーターを駆け上がっていった。「お前、怪我してるんじゃねーのか!?」と上原広報が心の中で、突っ込みを入れたことは言うまでもない。

こんな情報を仕入れたら、演出陣としてはレミーガの無邪気でまっすぐな人柄を観客にも伝えたくなる。そこで「イケメン・リトアニアン」に始まり、しまいには「乱闘のどさくさに紛れ、今成に超強烈なハイキックを狙うなど、明らかに間違った武士道精神を持つイケメン・リトアニアン」と、選手紹介のナレーションが加速度を増して人間臭くなっていくのである。

もっとも、こんな爆笑ナレーションだからこそ、難色を示す者が少なからず出てくるのも当然だ。情報を提供した上原広報も「選手を落とす」ようにも受け取れるこのスタンスには大反対だった。

「やっぱり大会は選手あってのもの。僕は選手をフォローする立場なので『ちょっとキツイぞ』と」

ZST内部、選手からも苦情は出たが、上原広報は結果的にこのスタンスを受け入れた。リングス時代の反省があったからだ。

「リングスにはヒョードルもノゲイラもいた。でも僕らは何もできなかったじゃないですか。今、PRIDEさんでヒョードル、ノゲイラといえば誰もが知っていますよね。あれはいい反省材料なんですよ」

前田日明という絶対的なカリスマがいた頃には、オーソドックスな作りで十分だった。余計な飾りはむしろ不要だ。だがZSTは違う。まず選手が何者かを知ってもらい、面白いと思わせたい。そのためには試行錯誤してでも可能性を探り当てたい。暴論と紙一重の斬新な映像づくりは、ZSTだからこそできる冒険なのかもしれない。

「それに僕はバトル・ジェネシスをやっていた時から、いつか前田さんに怒られるよ

格闘技界、煽り映像ナンバーワン。キャッチコピー、ナレーション特集

■ ZST 2

梁正基／戦う時代錯誤―アナクロイズム―
エリカス・ペトライティス／小さなミーシャ
今成正和／足関十段
郷野聡寛／グラバカの火薬庫
アントワーヌ・スキナー／黒き狼「未知なる強豪なのか、それともただの金魚か」

■ ZST 3

ジェフ・カラン／ブラジリアン柔術の武者
ダニー・バッテン／リングスUKの強豪

■ ZST 4

内山貴博／奥多摩の男
小谷ヒロキ／KOKルールの申し子の兄

■ ZST GP Opening Stage

レミーガ／小さなミルコ
アロイシオ・バロス／ブラジルのブルース・リー
矢野卓見／東洋の神秘
「今日こそ、へたれ返上だ
タクミ／浪速のイケメンシューター
マーカス・アウレリオ／ホイラーを倒した男
TAISHO／朝日を昇らせなかった男
ジェイソン・マックスウェル／ジェンス・パルヴァーをKOした男
小谷直之／ZST無敗のエース「乗れフェラーリ」

■ ZST GP FINAL STAGE

所英男／「毎試合、不利といわれながら良い意味で期待を裏切り続けている」
TAISHO／ジェンス・パルヴァーを倒した男を倒した男
矢野卓見／「試合直前での逃亡、開始直後のタオル投入を考えている」
今成正和／「優勝賞金を片手にブラジル娘との新たなグラップリングマッチに挑むことができるのか」
マーカス・アウレリオ／「リングスKOKトーナメントのノゲイラ、そのものだ」

■ ZST 5

花井岳文／「所詮アマチュアどまりの選手だったのか」
佐東伸哉／ハイブリッド・コンニャクレスラー「藤から東に変えた微妙な改名効果」
内山貴博／「無謀にもレミーガに挑戦し、予想通りアッサリとKO負けしている」
マーカス・アウレリオ／「今夜エースを下し、他団体へ行ってしまうのか」
小谷直之／「購入を諦めたフェラーリとともに、ファンの期待もアッサリと裏切ってしまい無様な敗戦を喫している」

■ BATTLE HAZARD

所英男／「出場選手のなかでは一番弱いと思われていたGT―Fではまさかの優勝を果たしている」
佐東伸哉／「佐藤ルミナを追い込んだと本人が言い張る、あの幻の足関テクニック」

■ ZST 6

ダリウス・スクリアウディス／勝つと必ず調子に乗り、ZSTガールを触りまくり、そして自らの下に抱き寄せるといった悪質なセクハラ行為を試合の度に繰り返している」
内山貴博／「このまま奥多摩の山奥に消えてしまうのか？」
村田卓実／「企画倒れ気味に終わったタックマッチに出場」
佐東信哉／「早くこいこい改名効果」
ミンダウガス・スミルノヴァス／元祖負けず嫌い王「帰ってきた高田の兄」
小谷直之／「何をやってのダメダメの状態」、「ファンが望む好試合を一切無視し」
所英男／「一見考えていないようで、やはり何も考えていない」

■ZST-GP2

勝村周一朗／リアル・タイガーマスク「ルビー・モレノ似」

うなことをやりたいとも思っていたんですよ。演出や映像はもちろん、グラップリング・ルールといった競技の面でも『前田さんだったら怒るだろう』ということを逆に俺はやってやるぞ』という気持ちがあった。逆に言うと、それがリングスを新しい形で継承していくことだし、それこそが今のZSTですから」

当初は心配で映像を事前チェックしていた上原広報も、今ではすべてを作り手に委ねている。

「別に選手をバカにしているわけじゃなくて、初めて見に来た人にも選手の顔と名前を覚えて帰ってほしいんですよ。その代わり、照明や入場シーンはきっちり演出させてもらいますから」と頼もしく誓ってくれる井内さんや関さんの手腕に、全幅の信頼を置いているからだ。

その「きっちりと演出する」ことについてだが、2人にじっくり聞いてみると、「きっちり」なんていう言葉を遥かに超える緻密さだった。

たとえば関さんは、映像を作る際に徹底的に「音」にこだわる。

「映像につけている音にはこだわっていますね。ライブハウスで流すのと同じ音で、テレビなんかでは使わない音域まで入れています。そうすると低音が響くんですよ」

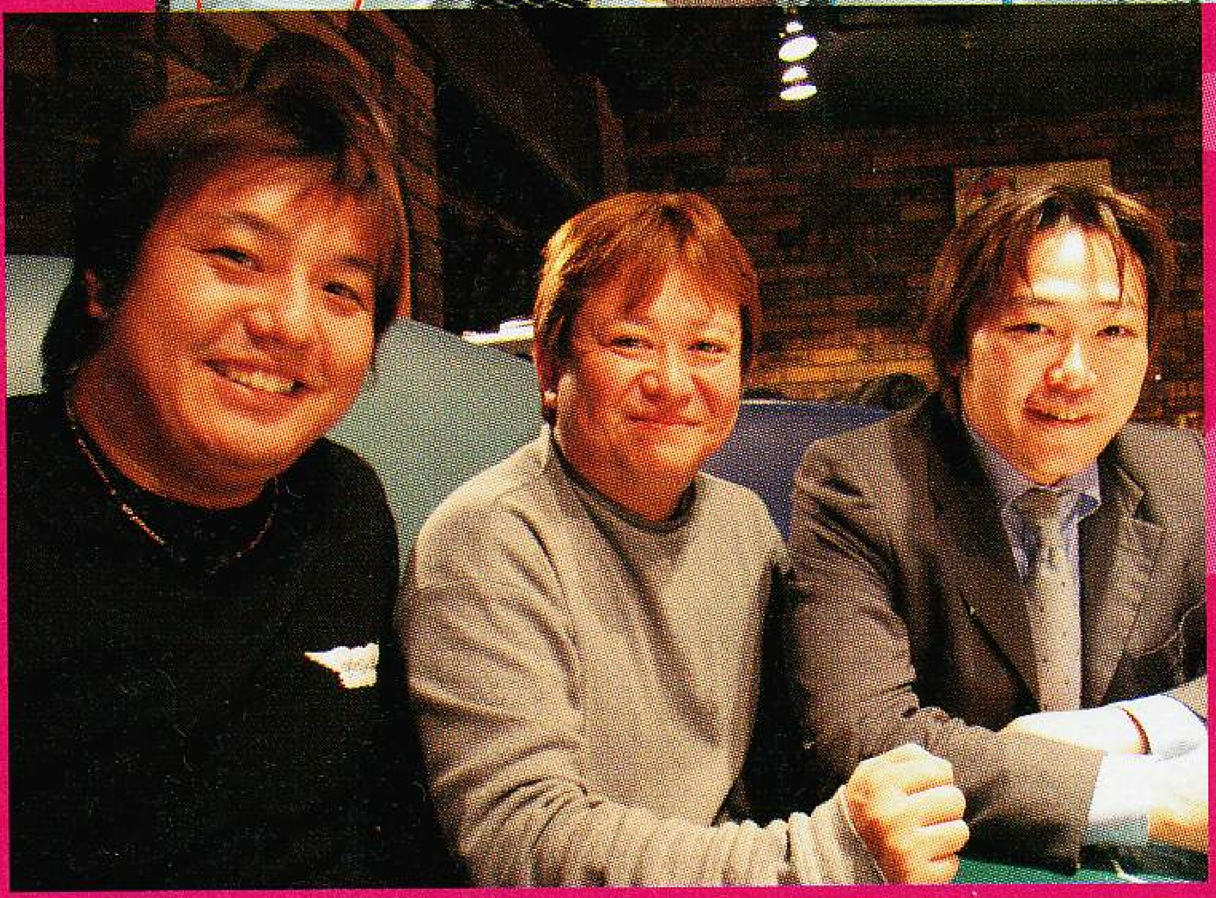
この重低音は、知らず知らずのうちに観客の期待感を喚起させる効果があるという。



ZSTガール。左から、遠藤舞ちゃん、尾藤ゆうちゃん、小野寺愛ちゃん、梨本千影ちゃん。業界でも大人気の4人。「ガチ！」的にもカワユイ。

井内さんの演出も徹底している。休憩時間はストップウォッチできっちり計り、15分以上には絶対しない。「僕が駆け回っている間に、知らないところで始まってるんですよ」と上原広報が苦笑するほど時間厳守だ。井内さんに言わせれば「観客に無駄な時間を1秒たりとも過ごしてほしくない。当たり前のことですよね」。

試合中、薄くトランス系の音楽が流れているが、あの音にも実は仕掛けがある。



ZSTの世界の伝道者。左から映像監督の関和紀氏。演出監督の井内弘巳氏。ZST広報の上原譲氏。選手への愛情が、辛らつながら後腐れのない映像を生み、プロとしての厳しさの追求が、リング上の生き残り合戦を熾烈にする。そんなZSTのキーパーソンズだ。

「Zeppはもともとコンサートホールですから、音が反響しないように作られているんです。だから場内がシーンとした時にはリングの音だけが聞こえて凄く〝寒い〟状態になっちゃう。だから、つまらない試合の時にはBGMのレベルを微妙に上げて試合に集中させせない。『試合は忘れてもらってもいいですよ』というぐらいの感じでやっていますよね」

「イベントは観客ありき」をここまで徹底しているプロモーションが他にあるだろうか。観客を楽しませる姿勢は無論「一本およびKO勝ち至上主義」という形で、選手たちにも重くのしかかってくる。

「ルールミーティングでうちの人間が『下手な試合をやるなら負けて下さい』というニュアンスで、一度言ったことがあったんです。文句を言った人がいたんですけど、やっぱりそういう選手は上がらなくなる。そこまで徹底してお客さんが喜ぶ試合を考えられる人間じゃないと、ZSTのリングは難しいと思います」（上原）

この方針に対し井内さんは、演出面で工夫を凝らし共鳴する。

「判定勝利の選手は花道を歩かせませんし、帰る時にピンスポットも当てません。マイクアピールをしたいと言っても、絶対にマイクを渡しません。『次は一本で』という激励の意味もあるし、一本勝ちでカッチリ勝った選手に対する礼儀ですしね」

井内さんも関さんもプロレス少年時代を過ごしているだけに、格闘家をリスペクトするDNAがしっかりと組み込まれている。ホメ殺ししたり落としまくったりの映像や細かいこだわりの演出は、そのまま選手への叱咤激励であり、大いなる親愛の証でもあるのだ。そんな映像を選手はどう見ているのか。上原広報が答えてくれた。

「たとえば所くんなんかは『今度はどんなイジられ方をするんですかねぇ』とけっこう気にしてる。リハーサルの時に、最初から最後までじっと陰で見てますからね」

井内さん、関さんとも選手たちに感想を求めたりはしない。自分たちの思いは、演出を通して伝わっているはずだから。

「でも作っている方としては、いつも選手がそれ以上の試合をやってくれちゃってるんで。本当にそれは凄いことですよね」

魅せる闘いを求める主催者がいて「演出を超えてみろ」と挑む裏方がいる。そんな彼らに削りに削られながら、磨きあげられていく格闘家たちが、ZST的格闘ワールドを創り上げていく。

ター級で腹を据えた分、ここで勝ち上がらないと、どうしようもないんで」
――なるほど。では話を進めますが、伊藤

文

pro debut

中で

る。

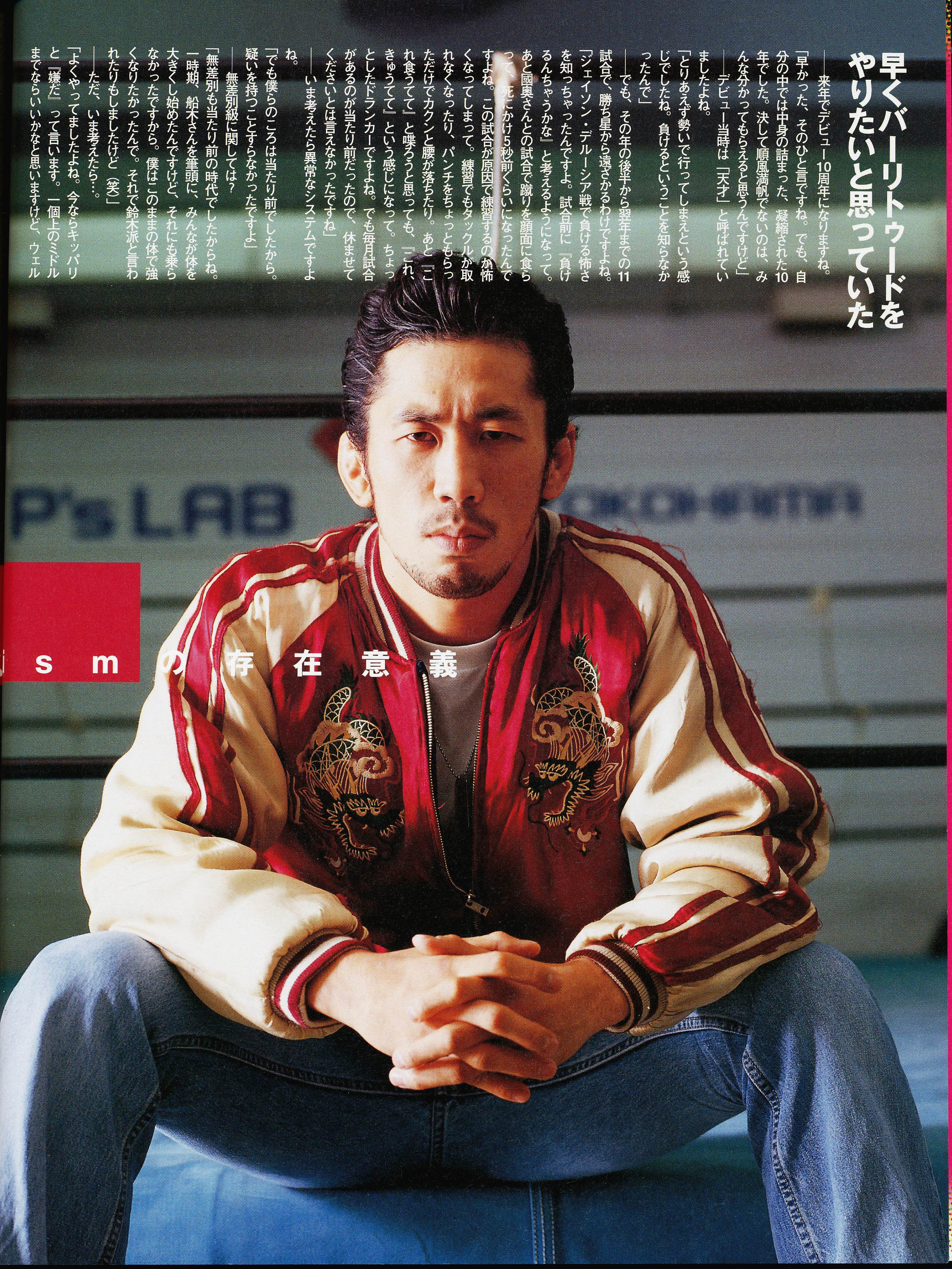
ラスsmの存在意義

看板背負って出られるんですから」
――でも試合は完敗。そこからほぼ毎試合、試合後に再戦の話をしていますよね。

骨折したときは怖いと思いましたけど。でも、それを抜きにして、今でも勝ちたい、強くなりたいと純粋に思っていますから

早くバーリトゥードをやりたいと思っていた

――来年でデビュー10周年になりますね。
「早かった、そのひと言ですね。でも、自分の中では中身の詰まった、凝縮された10年でした。決して順風満帆でないのは、みんな分かってもらえると思うんですけど」
――デビュー当時は「天才」と呼ばれていましたよね。
「とりあえず勢いで行ってしまえという感じでしたね。負けるということを知らなかったんで」
――でも、その年の後半から翌年までの11試合で、勝ち星から遠ざかるわけですよね。
「ジェイソン・デルーシア戦で負ける怖さを知っちゃったんですよ。試合前に『負けるんちゃうかな』と考えるようになって。あと國奥さんとの試合で蹴りを顔面に食らって、死にかけ5秒前くらいになったんですよね。この試合が原因で練習するのが怖くなってしまって。練習でもタックルが取れなくなったり、パンチをちょっともらっただけでカクンと腰が落ちたり。あと『これ食うてて』と喋ろうと思っても、『これ、きゅうてて』という感じになって。ちょっとしたドランカーですよね。でも毎月試合があるのが当たり前だったので、休ませてくださいとは言えなかったですね」
――いま考えたら異常なシステムですよね。
「でも僕らのころは当たり前でしたから。疑いを持つことすらなかったですよ」
――無差別級に関しては？
「無差別も当たり前の時代でしたからね。一時期、船木さんを筆頭に、みんなが体を大きくし始めたんですけど、それにも乗らなかったですから。僕はこのままの体で強くなりたかったんで。それで鈴木派と言われたりもしましたけど（笑）」
――ただ、いま考えたら…。
「よくやってましたよね。今ならキッパリと『嫌だ』って言います。一個上のミドルまでならいいかなと思いますけど、ウェル



までならいいかなと思いますけど、ウェル

ター級で腹を据えた分、ここで勝ち上がらないと、どうしようもないんで」

――なるほど。では話を進めますが、伊藤選手にとって最初の大きな転機といえば、99年のパンクラチオンマッチだと思うんです。初のノールールマッチということで。

「興味なかったんですけどね。掌底というよりも、純粋に前のルールで頂点に立ちたいと思ってたんで」

――ただ、その時代はもうバーリトゥードが主流になっていましたよね。

「逆に独自性のあるルールだと思っていました。ほかの団体とかの試合も興味があって見ていたので、少しずつはバーリトゥード的な練習も始めてはいたんですけど、それはバーリトゥードをやりたいからという気持ちでやってたわけじゃないですね」

――練習をしてみて違和感はありました？

「いや、初めて練習したときは、やりやすいと思いましたよ。なんでもできますからね。掌底時代は顔面はパーで、ボディはグーなわけじゃないですか。『シバくぞ、オマエ』ってやってる中で、グーとパーを打ち分けるって、どないやねんって（笑）」

――意外ですね。自分は初のノールール戦を取材しているんですけど、試合前に伊藤選手がものすごくナーバスになっていたのを覚えているんですよ。そのあとの長い欠場明けもキャッチレスリングの試合が続いたので、顔面パンチありのルールに馴染むのは難しいのかなと思っていたんですよね。

「いや、それはないですね。ただ、そのカーター戦で網膜はく離をやっちゃって。それで復帰するときに顔面打撃ありはちょっと、という感じだったんですよね。だからルールに馴染めないとか、怖さがあって今のルールの試合をやらなかったわけではないですよ。それより、キャッチやってても上には上がれへんから、早くバーリトゥードをやりたいと思ってましたから」

――では次の大きな転機というと、三島戦での敗戦だと思います。そこから、すごく変わったという印象があるんですけど。

「そうですか。例えばどんな感じで？」

――ストイックな感じになりましたよね。

観客から野次が飛んでも、「やかましい」みたいな感じで突き放したり。自分の世界を突き進んでいるというか。

「でも、やっぱり一番は網膜はく離で休んだときじゃないですかね。すごく考える時間があったのと、その年に酒が飲めるようになったんで。あのときのケガがなければ変われてなかったと思います」

――その変われた要因を具体的に言うと？

「飲みの席で人間関係が広がったのが大きかったと思います。技術的にとかではなくて、人間的に広がったような気がするんで。それまでは何も知らないのに、これやりたいとか、ただ言っていたような感じですからね」

――では三島戦での負けがキッカケで、特別変わったというわけではないんですね。

「そうですね。でも三島戦は、やる気満々でしたね。だってパンクラスVS修斗ですよ。

伊藤崇文

The 10th anniversary of a pro debut

It is never favorable life.

パンクラス生え抜き第一号選手としてデビューした伊藤崇文が、来年1月でプロデビュー10周年を迎える。デビュー当時に天才と呼ばれた男は、今、トップへと続く階段の途中で試行錯誤を繰り返している。決して順風満帆の格闘技人生ではない。だが伊藤は65戦を消化した今も、強さだけをシンプルに追及している。

松浦俊秀＝取材・文
text by Toshihide Matsuura
大屋美和＝写真
photo by Miwa Ohya

生え抜き第一号が語るパンクラスism

三島戦は100の力を出し切っての結果です

看板背負って出られるんですから」

――でも試合は完敗。そこからほぼ毎試合、試合後に再戦の話をしていますよね。

「それだけ印象に残ってるんですよね。別に三島選手のことが嫌いとかじゃないんですよ。みんなには嫌っているみたいなニュアンスで伝わってると思うんですけど。試合に関して言えば、力強さはあまり感じなかったですね。でも、それで油断したわけではないです。負けたのは、あのときの僕の実力です。１００の力を出し切って、それであの結果になりました」

――ただ試合後は「プロレスラーとか言っているヤツは、やっちゃってくれ」みたいな汚い野次も飛びましたよね。そのへんも含めて消化しきれていますか。

「できてますよ。でも苦しかったです。ずっとプロレスラーだと言ってて、ずっとそうなりたかったし、そう見られたかったし、実際そうだと思ってるんで」

――伊藤選手が考えるプロレスラーの定義って、どのようなものなんですか。

「まず強さ。パフォーマンスをやりたいなら、他のプロレス団体に入ればいいだけの話なんで。仮に負けても目立ったからいいじゃなくて、一生懸命やった上でじゃないと自分で納得できないですから。ただプロレスラーと言ったら『ロープに飛ぶの？』とか言われるじゃないですか。そうじゃないと言っても『ＰＲＩＤＥみたいなもの？』とか言われますからね。ＰＲＩＤＥとか言われたら、頭にくるんで黙りますよ」

――完全に格闘家としての発想ですよね。それなのにプロレスラーという肩書きにこだわるのは、なぜなんでしょうか。

「簡単ですよ。スタート地点がプロレスだからです。ちゃんこ番、便所掃除、雑用、坊主。そういうのを経たという自負ですね。でも、今もう一度同じことをやれと言われたら、間違いなく辞めますけど（笑）」

――ちなみに辞めたいと思ったことは？

「ないですね。ただ和田戦で左腕の尺骨を骨折したときは怖いと思いましたけど。でも、それを抜きにして、今でも勝ちたい、強くなりたいと純粋に思っていますからね」

――65戦もしていながら、まだそう思えるって凄いことですよね。

「自分では、そうは思わないんですけどね。ただ上に行ったらどうなるのかって、まだ見たことがないので、それを見たいだけです。間違いなく楽しいと思いますから。もちろんプレッシャーはすごくなると思いますけど。下の選手はやれと言われたことをやってればいいんでラクでしょうけどね」

――下の選手という意味では、國奥選手の退団を受けて新道場長になりましたよね。過去、下の選手とか他のジムから参戦してくる選手を見て、プロ意識が足りないと発言したこともありましたよね。

「いまは挨拶が嫌とか、そういう理由で辞める人間がいますからね。他のジムの選手に対しても、ｉｓｍとは違うなと感じることはありますよ。強い弱いのを抜きにして空気が緩いなって。リングが広く見えるんですよ。なんかプロっぽい選手が上がると、体の大きさを抜きにしてリングが小さく感じるじゃないですか。

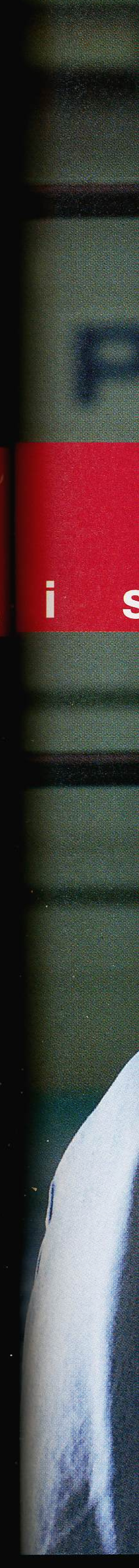
　空気が緩くなった一つの原因として、あまり言っていいのか分からないんですけど、ジム生が来るようになって選手と近くなったからというのも多少あると思います。前は道場は、一般の人が絶対に入れないような場所だったじゃないですか」

――道場長としてｉｓｍを、そのような雰囲気に変えていきたい？

「旗揚げのころの雰囲気が好きなんで、そのころに戻したいというのはあります。だから新道場長の方針としてはプロ意識を植え付けるという部分ですよね。強くなるってことは毎年やっていることですから」

――プロ意識の部分を個人的に表現すると『名優』という言葉になるんですよね。

「そうですね。漠然としたイメージですけ



ｉｓｍがなくなったら、ただのアマチュア団体になってしまう

ど。たとえば僕とXさんの写真が2枚あったとして、その写真に再生ボタンが付いているとしますよね。アナタはどっちの再生ボタンを押しますか？といって選ばれた方が名優だと思います。写真を見ただけで話の続きが見たいと思わせるような期待感があるというか。写真一枚でそう思わせる人は、僕の中では間違いなく名優ですね。目で何かを語っているような人にあこがれますから。

まぁ、こういうことを考えるのが、ｉｓｍの選手としてのアイデンティティでしょうね。そこが他の団体や、他のジムの選手とは違う部分だと思います」

——パンクラスになぜｉｓｍが必要かと問われたら、そこらへんがキーワードになりそうですね。

「ｉｓｍがなくなったら、ただのアマチュア団体っぽくなるかもしれないですよ。観客からお金を取っているという意味で、格闘技界にはパンクラスもｉｓｍも絶対に必要だと思いますね」

——では、この先、精神面ではなく技術的なことで伊藤選手が個人的に目指すものはなんでしょうか。

「打撃でしょうね。キックを始めたのも、和田戦で腕を骨折したからなんですよ。蹴りが飛んでくるのが怖くなったというのがあって。でも、こんなんでビビってたら間違いなく上に行けないと思って、それで和田戦のあとからキックのジムに通おうと思ったんですよね。だから網膜はく離で精神的に変わって、腕を折って技術的な考えが変わったという感じですよね」

——そのジム名は明かせるんですか？

「大丈夫ですよ。ＡＪです。週2、3回行っていますね。それまでは大学のレスリング部に通うくらいで、ほとんど出稽古というものをしてなかったんですけどね」

——キックといえば、郷野選手の全日本キック参戦が決まりましたね。

「自分もちらっと話はあったんですけどね。でも諸事情で流れたんで、今は逆に時間をかけてもいいかなと思ってます。今度プロテストを受けますけどね」

——なるほど。では、ちょっと余談なんですけど、ＧＲＡＢＡＫＡに対する意識っていうのは、今はどうなんですか？　前はセコンドについていながら、試合後に握手をしないときもありましたけど。

「ああ、試合後の握手については礼儀としては正しいと思うんですけど、別に全員が全員行かなくてもいいと思います。なんも思ってへんやろ、どうせって思うんで」

——それは面白い話ですね。

「前から嫌やと思ってますね。闘った本人だけでいいと思うんです。ありがとうって、何がセコンドにありがとうやねんって思いません？　それまで敵に知恵を与えている人間に対して。蹴ってもええくらいですよ（笑）。だから相手がもし握手を拒否してきても、僕は別に怒らないです」

——相手が嫌いなわけではないですよね？

「そうですね。嫌いだから握手しないとかじゃないですよ。でもリングに上がって何分かで、すぐに尊敬なんかしないですからね。僕の中では時間をかけて思うのが尊敬なんで。毎回、相手選手を尊敬していたら、僕なんか65人も尊敬する人がいることになりますよ（笑）」

パンクラスｉｓｍの存在

——闘う者同士だと分かるような気がするんですけど、セコンドでそういう感覚になるのは面白いなと思いますね。

「熱くなりましたけど（笑）、蹴らんでもええから別に握手を毎回せんでもええんちゃうかっていうくらいの感覚ですね。だから、僕もありがとうございましたっていう意識では行ってないですから」

——一番印象に残っているのは、パンクラスとＧＲＡＢＡＫＡの対抗戦のときに、菊田選手が挨拶に来たら真後ろを向いた時ですね。

「そんなことありました（笑）？　ちょっと覚えてないですけど、握手が嫌だったんでしょうね。別に菊田さんのことが嫌いなわけじゃないですから。それに今のＧＲＡＢＡＫＡは別に嫌いじゃないですよ。前は大嫌いでしたけど。オマエら誰やねんって感じで（笑）。でも今は僕らと同じようにパンクラスを背負っているように感じますし、郷野選手とかにはプロ意識を感じるんで頑張ってるなと思いますね」

——分かりました。では最後に今後のビジョンを教えてください。

「相手のセコンドと仲良くすることですね。菊田さんが来ても、プイっと後ろを向かないと（笑）」

伊藤崇文の主な戦績

～通算：65戦32勝25敗8分～

▼1995年 EYES OF BEAST
1.26 ○VSグレゴリー・スミット
(8分47秒、レッグロック)
※プロデビュー戦
7.23 ○VS柳澤龍志 (判定2-0)
※ネオブラッド・トーナメント優勝
★95年：10戦7勝3敗

▼PANCRASE TOUR 1996 TRUTH
7.23 ●VS船木誠勝
(2分1秒、スリーパーホールド)
★96年：9戦7敗2分

▼PANCRASE 1997 ALIVE TOUR
6.18 ○VSジェイソン・ゴドシー
(11分9秒、チョークスリーパー)
10.29 ○VS美濃輪育久
(6分34秒、アンクルホールド)
★97年：11戦7勝4敗

▼PANCRASE 1998 ADVANCE TOUR
★98年：7戦4勝3敗

▼PANCRASE 1999 BREAKTHROUGH TOUR
11.28 △VSショーニー・カーター
(15分時間切れドロー)
※パンクラチオンマッチ。初のノールール戦
★99年：9戦3勝2敗4分

▼PANCRASE 2000 TRANS TOUR
12.09 ●VS鈴木みのる (判定3-0)
※キャッチレスリングルール
★00年：1戦1敗

▼PANCRASE 2001 PROOF TOUR
8.25 ○VS柴田 寛
(2R1分22秒、アンクルホールド)
※オープンフィンガーグローブ着用。
パンクラス新ルールでの初試合。
6月にはコンテンダーズで宇野薫&高瀬大樹と対戦
(フルタイムドロー。パートナーは鈴木みのる)
★01年：6戦4勝1敗1分
(柴田戦以外は組み技限定ルール)

▼PANCRASE 2002 SPIRIT TOUR
7.28 ●VS國奥麒樹真
(1R4分59秒、腕ひしぎ十字固め)
※パンクラス初代ウェルター級王者決定トーナメント決勝戦
9.07 ●VS三島☆ド根性ノ助
(1R0分53秒、腕ひしぎ十字固め)
※DEEP2001
11.30 ○VS和田拓也
(判定3-0)
★02年：6戦4勝2敗

▼PANCRASE 2003 HYBRID TOUR
★03年：2戦2勝

▼PANCRASE 2004 BRAVE TOUR
7.25 ●VSヒース・シムズ
(1R3分35秒、TKO)
※パンクラスVSチーム・クエスト3対3先鋒戦
10.12 ●VS門馬秀貴
(1R1分34秒、三角絞め)
★04年：4戦1勝2敗1分



TAKAFUMI ITO
いとう・たかふみ

1972年６月21日、大阪府大阪市出身身長176cm、体重73kg
パンクラスism所属。高校生のときはレスリング部。93年のパンクラス旗揚げ戦を観戦し、同団体への入門を決意。後日、横浜文化体育館の前で、土下座しながら入門を直訴したことは有名。



CONTENTS

INFOREST MOOK GACHI MAGAZINE

cover photo
model:
Hidehiko Yoshida
phtographer:
Shin Yamagishi
design:
Hideyuki Kaise(Zapp!)
title logo design:
Ken Suzuki(Zapp!)

だし、ノゲイラ、ヒョードルもそうだし、前田さんの影響って大きいですよ」
――今後K-1の「ファイティングネット
ようにいいビジネス関係が出来ればご協力します、ということです。だからあえて名前を付ける必要はなかったんですよ！」

るかなぁ

誰かに解明してほしいですよ！ ホイスに聞いたら『（ホドリゴは）疲れたんだろ』って（笑）」
――団体が提示してくる対戦相手を見たら、選手は、これは自分を「生かそう」とするマッチメイクなのか、「潰そう、負け



「ガチ！」恒例（！）谷川貞治 K-1イベントプロデューサーインタビュー

選手は潰しません！ K-1は選手を「生かします」から!!

前回「ゲラチェックなし」掲載で波紋を呼んだ谷川Pインタビュー。「さすがに今回は無理かな…」と第2弾を申し込んでみたらあっさりOK！谷川Pの第一声は「で、今日は何の取材でしたっけ？」だったけれども…。ゲラチェック問題から、ボビー出場の是非、曙とサップの処遇、そして、「ファイティングネットワーク」使用にあたってアノ人の許可は得たか、等々多分、ライターとしてはK-1記者会見No1出席率を誇る私（茂田）が、普段は周りに他の記者がいるので聞けなかった疑問や言えなかった意見を、ガチで（ダブルミーニング）谷川Pにぶつけてみました！

茂田浩司＝聞き手・構成
text by Koji Shigeta

――今回、初めて谷川さんにインタビューさせていただきます。
「あ、そうでしたっけ？」
――はい。今日は普段お話出来なかった突っ込んだ部分のお話をさせていただけたら、と思います。
「はいはい、どうぞ。えっと、これは何の取材でしたっけ？」
――「ガチ！」ですよ（笑）。前回、原稿チェックうんぬんがあった。
「あー、はいはい。今回は原稿見せてくださいね（ニッコリ）」
――その「ゲラチェック問題」ですけど、最近の格闘技業界はどうかなと思うことがあるのでそれは後で触れますね。ただ、前回の本が出た後、高島（学）さんが編集の人間にブチ切れてました。
「信頼はしてますけどね」
――記事を読むと高島さんがすごく配慮して書いてる感じを僕は受けたんですけど、谷川さん的にどこか問題はありましたか？
「問題っていうのはないんですけどね、なんか、ちょっと、偉そうな感じがありませんでした？」
――え？ いや、そんな感じは全然受けなかったですよ。色々気遣うことが多いんですね。また盲腸になっちゃいますよ（笑）。
「あれ、ストレス性らしいんですよねぇ（笑）」（＊10月のK-1MAXの後、谷川氏は盲腸で入院した）
――では、まず先日のハワイの「ランブル・オン・ザ・ロック」ですけど、大盛況だったようですね。
「もうすっごい沸きましたよ！ 8000人の会場で、チケットは3日前に初めてソールドアウトで、追加席を1000以上作って、それでもギッシリですよ。去年も同じ会場で、五味君とBJ・ペンがやったんですけどあんまり入らなかったようで」
――去年までは「BJ・ペンんちでやってる大会」でしたよね。
「そうそう、今回で国際大会になったんですね。K-1がテコ入れして」
――それで大会名に「K-1ファイティングネットワーク」が付いたんですか？
「ええ、あの…（笑）」
――ファイティングネットワーク・リングスならぬ？（笑）
「あははは、あの憧れの（笑）。いや、要は世界中のプロモーターから『K-1の大会をやらせてくれ』とか『K-1と一緒に総合の大会をやりたい』という要望が凄く多いのと、あとヨーロッパとかでは勝手に『K-1チャレンジ』とかK-1を大会名に付けるところもあるんですよ。それは放っておけないので今K-1がどこの大会にライセンスを出すか、ルール作りをやっているんです。その時にちょうどBJ・ペンのお兄さんのJD・ペンから『協力してくれ』と要望があって、ちゃんとビジネスを出来る方だし、いいサンプルになるから『では一緒に』と。ただ、やっぱり『大会にK-1を付けてほしい』とお願いされるんですね。でもK-1と付けるとK-1の大会みたいになるし『K-1プレゼンツ』だと海外ではK-1がスポンサーみたいに思われるんです。それで、急遽なんか付けなくちゃいけなくって…、あの、僕はホラ、やっぱりね、昔のね、知識しかなくって…（笑）」
――思わず「ファイティングネットワーク」と付けちゃいましたか（笑）。
「ええ、一番それらしくていいだろうと（笑）。だって『K-1○○大会』にしたら、なんで金網でK-1やってんの？ って話になっちゃうでしょ。だから『ファイティングネットワーク』にしたんですけど、前田（日明）さんは上手いこと考えたな～、と改めて思いましたよ（笑）」
――「ファイティングネットワーク」を使います、と前田さんにご連絡は？
「ああ、僕は取ってないですね。『真似しやがって～』って思ってると思いますけどね（笑）」
――今回イブラヒム（アテネ五輪レスリング・グレコ96kg級金メダリスト）の参戦が発表されましたけど、現役五輪選手のプロ参戦はカレリンとかダン・ヘンダーソンとかリングスでよく見ましたよね。
「いや～リングスはいい団体だったですよ。初期の頃から本当に面白くって、前田さんがまたノゲイラ、ヒョードルとか上手いこと見つけてくるし。やっぱりK-1もそう

だし、ノゲイラ、ヒョードルもそうだし、前田さんの影響って大きいですよ」

——今後K-1の「ファイティングネットワーク」に前田さんがアドバイザー的に参加する構想はないんですか?

「いやー、ご協力していただけるなら僕らは全然ウェルカムですけど、ご本人がどう思ってるか（笑）」

——今後K-1ファイティングネットワーク」は世界中に広げていくんですか?

「K-1として気をつけたいのは、長続きさせていくためにはきちんとビジネスにならないとダメだということなんですよ。『この人はいいからライセンスを与えよう』とか信頼関係だけでやると絶対長続きしないです。特に外国人は『こういうルールの下にビジネスをしましょう』ってガイドラインを作らないと。逆に、それがあれば僕はどこの団体と協力してもいいし、別に『K-1ファイティングネットワーク』と付ける必要もないんですけど、海外の場合は主催者が付けてほしがるし、テレビ局もそうですよ。『ランブル・オン・ザ・ロック』は日本（スカパー）とアメリカでPPVをやるんですけどね」

——あ、スカパーでやるんですか。映像が見たかったんでよかったです。

「やります。で、なんで日本とアメリカでやるかというと『K-1ファイティングネットワーク』と付いて『K-1が何かやる』ということで注目されたんですよ。それで名前を付けたんですけどぉ」

——別に「ファイティングネットワーク」と付けたことを責めてるわけじゃないですよ（笑）。団体間で有力選手を引っ張り合ってファイトマネーが高騰しても、ビジネスとして成立するはずないですよね。で、K-1ではジム単位、プロモーション単位で「ファイティングネットワーク」の傘下に収めて信頼関係を築いていく、新しい形を作ろうとしてるのかな、と思ったんです。

「そういうことも含めて、世界のネットワークはK-1の一番の特徴なんで、世界中でいい形でのビジネスをしていきたいですね。国内も今年は『一撃』とか伊原会長の大会（TITANS）とか上手く連携したようにいいビジネス関係が出来ればご協力します、ということです。だからあえて名前を付ける必要はなかったんですよ!」

——はいはい（笑）。

「名前付けて『世界制覇』みたいな感じに思われるかもしれないけど、それは『K-1ブランド』が欲しいテレビ局の事情ですよ。アメリカのPPV会社も『ランブル・オン・ザ・ロック』だと『UFCもあるしねぇ』という反応だったのが『K-1』が付いたら興味を持ってくれて『カードもUFCよりいいね』と。スカパーの方も今回現地に来ていただいて」

——カードはJD・ペンさんなんですか?

「マッチメイクはこっちです。」

——BJ対ホドリゴはいいカードですね。

「そうでしょ?（ニコニコ） 最初ね、メインはビクトー対誰かでBJは入ってなくて、ビクトーが怪我で欠場になってBJが急遽出なきゃいけなくなって『対戦相手を探してくれ、強いヤツでいい』というから、ちょうどホイスに『ホドリゴを出してあげてくれ』と言われてたんでK-1でBJ対ホドリゴを推薦したんです。だから、僕らはアンダーカード以外の上の方のマッチメイクのアイディアと選手の派遣、あと日本とアメリカのテレビを付けてあげたんです。なるべくBJたちも儲かるように」

——会場も満員で、試合も盛り上がって、BJも勝って、本当に良かったですね。

「BJは試合の後で涙ぐんでましたよ。『世間では、BJはクレイジーだ、UFCを辞めてK-1に行ってどうするんだ、って言われたけど、今日はK-1に来てよかった。これまでは一部の格闘技マニアにしか知られていなかったけど、今日ハワイで英雄になれたよ』と言ってて。その言葉を聞いて僕も嬉しかったですね。でも、物凄く強いねー、あの男は!! なんであんなに簡単にホドリゴをパスガードしちゃうんだろう!」

——BJは強さの次元が違うと聞きます。

「ねえ。特別変わったことをしてるように見えないのにパスガードしちゃうんだから! 誰も越えられないでしょ、グレイシーのガードなんて。あのレベルの高さを

K-1 Producer Sadaharu Tanigawa

「K-1ファイティングネットワーク」を前田さんは怒ってるかなぁ

僕らは「有名選手のイメージを落としてやろう」とは考えません

誰かに解明してほしいですよ! ホイスに聞いたら『（ホドリゴは）疲れたんだろ』って（笑）」

——ははは。でもBJはそこまでK-1にお世話になっておきながら、試合後「桜庭とやりたい」って言ったらしいですね。

「BJは今、体重上げてるから。見たいですよねー、桜庭選手と」

——あの一谷川さん、呑気におっしゃってますけど（笑）「K-1に感謝」って涙ぐんでた男が「桜庭選手とやりたい!」って、それ、おかしいですよね?（笑）

「まあ、機会があれば（笑）」

——いつか組んであげて下さい。ところで、BJを含めてK-1の選手はよく「K-1のために頑張る」とか「K-1を一緒に盛り上げたい」とか言うんですよね。K-1は選手との結びつきが強いのかなと感じる部分なんですけど、いかがですか?

「やっぱり石井前館長もそうだったし、僕もそうですけど、格闘技がある程度分かるので、まず『この選手はどうしたら伸びるんだろう?』と一生懸命考えるんですよ。有名選手が新たに参戦してきた時に『潰そう』とか『どうせ高い金を払ってるんだからイメージを落としてやろう』みたいには考えないんです」

——外から来た選手に対しては「最初はガツンと喰らわして」みたいなマッチメイクをするケースは結構見ますね。

「ええ。だけど、僕らは例えばホイスなら『あと、ホイスがやることって何だろう?』と考えるんですよ。ホイスはPRIDEで高田さんや桜庭選手、吉田選手と価値ある試合をしてきたわけだから、じゃあ、次、となると難しいですよね。そういう時にポンと『曙選手はどう?』と言うと乗ってくるんですよ」

——先ほどホイスの会見を見たんですけど（＊取材日は11月23日）、本人も新たなテーマが見つかったと感じてるのか、凄く生き生きしてましたね。

「曙選手もそうですよ。最初に電信柱の陰で口説いた時も『ボブ・サップとやりませんか?』と話を持っていったんですけど、そうするとね、格闘家は動くんですよ」

——団体が提示してくる対戦相手を見たら、選手は、これは自分を「生かそう」とするマッチメイクなのか、「潰そう、負けさせよう」とするマッチメイクなのか、をとても敏感に感じ取るでしょうね。

「格闘家は明らかに分かってますね。だから（須藤）元気君も、KIDも、武田選手もそれほど有名じゃなかったですけど、僕らは彼らを生かすことを考えて、彼らが人気が出るようなマッチメイクをしてきたつもりですよ。K-1も選手も、お互いに生きることを考えてきましたよね。だから、今回のイブラヒムもいきなり潰したくないんですよね。いいカードを組んで、イブラヒムが成長していけばいずれはホイス対イブラヒムなんて凄く面白いカードになるかもしれないし。でも、いきなり地味に強いヤツ、シュートボクセの選手とかオランダのガチガチのバイオレンスファイターとやらせてもね（笑）」

——現役の金メダリストが血だるまになるところなんて誰も見たくないですね。

「そういうのもあって、割とファイターの方には…、まあ失敗もしてますけどね。曙選手なんて結構失敗してますよ（苦笑）。でも今回ホイスに勝てば今までの負けは帳消しですよね、借金ゼロというか（笑）そういう大博打になるように出来るだけしてあげたいんですよ」

——以前から感じてるのは、選手に対して手綱を締めるべきところで締めずに失敗した部分はないですか? 曙選手やサップも最初は順調だったのが途中からブレ始めた。それは谷川さんを含めたスタッフが不慣れなこともあってつい選手を甘やかしたのかな、と思ったんですが。

「そうですねぇ…」

——二人とも昨年の大晦日の功労者で、曙選手は大晦日までほぼ毎日練習後に記者の囲み取材を受けて大会をPRした。あの対応は国技の横綱を務めた人だから出来るんだなと感心しました。ただ、今年は1戦ごとに体が格闘家のそれに変貌し、スキルもアップする「成長物語」を見せなくてはいけなかったのに、それは失敗しましたよね。

「武蔵との試合までは良かったんですけど

選手

K-

「生

前回「ゲ

「さすがに

谷川Pの

ゲラチェ

「ファイテ

多分、テ

普段は周

ガチで

茂田浩司＝

text by Koji Sh

——それで大会名に「K-1ファイティングネットワーク」が付いたんですか?

「ええ、あの…（笑）」

初期の頃から本当に面白くて、前田さん

がまたノゲイラ、ヒョードルとか上手いこ

と見つけてくるし。やっぱりK-1もそう

ねぇ。

――サップもしっかり準備せず、中途半端な試合で終わった。昨年春のK-1の危機の救世主をあのまま終わらせてしまったら、それこそ「選手を生かす」K-1の方針に反するんじゃないかと思うんです。

「ボブ・サップは必ず再生させます。ちょっとまだ大晦日がいいカードが出来てないんですけど、大晦日から来年、必ずボブ・サップを上げたいと思ってます。なんだかんだ言っても、来年も曙とサップは重要な選手ですから」

――サップ本人とはコミュニケーションは取れてるんですか？

「取れてますよ。大晦日も出ます。いい相手がいなくて困ってるんですけどね」

――大晦日は「ボビー」も出ますけど、谷川さんのイメージとしては「格闘バラエティ」を作ろうとしてるんですか？

「バラエティ？　バラエティとまでは言わないですけど『お祭り』ですよね。でもただのお祭りではなくて、僕は『勝負論』がなかったら絶対成立しないと思いますよ。例えばK-1ならGPのような純粋な競技、勝負論があればいいと思うんですよ。でも大晦日のDynamite!!に関してはGPのような競技性や勝負論はちょっと置いて、いかに夢のカード、意外性のあるカードが組めるかですよね。後は、観客動員も大切ですけど狙ってるのは視聴率。視聴率をいかに上げるかです。例えば『勝負論』でいえば魔裟斗対ブアカーオになるし、ホイスも別の相手、僕はホイス対ヴァンダレイ・シウバなんか見たいですよ。だけど、視聴率に結びつけるには横綱と戦ったりとかになる。でもそこに勝負論が全くない、『マンガ』とか『お笑い』にしちゃダメなんです。ボビーも『もしかしたら勝つかな』と思う相手を選びますよ」

――ボビーは…、どうなんですかね？

「僕は素材はいいと思いますよ」

――素材の良さは番組見てて分かります。ボビーを出せば毎週、高視聴率番組の「からくりテレビ」でDynamite!!のPRも出来る。まさに谷川さんの狙う「紅白を見る視聴者層」にダイレクトに大会をアピールできるメリットは大きいですよね。

「ええ」

――ただ、宇野薫選手や武田選手が出場を強くアピールするほどステイタスのある「大晦日」に、人気バラエティ番組の出演者だからあっさり出られる、ということに僕は凄く違和感があるんです。番組内で企画したものではなく、K-1が独自に査定試合を課すとか、出場するための「ハードル」もなく出場できてしまうのでは、折角の大舞台が安っぽくなりませんか？

「ボビーに関していえば、格闘技としては第0試合にしようと思ってますよ。でもね、対戦相手を聞けば勝負論の見える試合になるし、視聴率も取れると思いますよ（ニヤリ）」

――そうなんですか（＊後日、ボビー対マイク・ベルナルドが発表された）。

「変な話ね、『総合格闘技の一番を決める』という意味ではヒョードル対ノゲイラ以上のカードはないと思うんですよ」

――異論はないですよね。

「ええ。でも、年末に関して言えばね、ボビーのカードの方が視聴率は取ると思います。年末は『有名な人が出て、なおかつ、いかに勝負論があり、夢のカードであるか。』例えば魔裟斗対お笑い芸人じゃダメなんですよ。魔裟斗対KIDのように『KIDならひょっとしたら？』という『勝負論』もしっかり入ってないと。だから、僕はボビーが勝つと思ってて、最初はいろいろ言われるかもしれないですけど、終わってみたら『ボビーは今度は誰とやるんだろう？』となってると思いますよ。ま、ボコボコにされて負けてしまうかもしれないですけどね（笑）」

――さんまさんは会場に来るんですか？

「さんまさんは正月休む人なんで分からないですねぇ。メッセージとかはもちろんあると思いますけどね。ただね『からくりテレビ』ではそうやって煽ると思いますけど、樋口さん（＊魔裟斗を見出し、K-1 MAXを作ったプロデューサー）が作る『格闘王』では物凄く真面目にボビーを扱いますよ。だから二つ見せた方がいいんですよね」

――ああ、なるほど。

「だから、試合がダメだったら、もしかしたら放送しないかもしれないですよ。まったく『ダメダメの試合』になったら、ダイジェストで『ボビーが負けました』だけになっちゃうこともありますよ」

――なるほど。ところで、先ほどの「魔裟斗対ブアカーオではなく魔裟斗対KID」のお話はそうですね。魔裟斗対ブアカーオを大晦日に見たいと思わないんですよ。

「大晦日は世間のムードが全然違いますからね。だから、大晦日のカードとしては『曙対サップ』が百点満点なんだと思いますよ。おじいちゃん、おばあちゃんも知ってる選手がぶつかる、という」

――そうですね。谷川さん、大晦日のカードを考えるのって楽しくないですか？

「楽しいんですけど…」

――一番得意そうな感じがするんですよ。大晦日のDynamite!!的なカードを考えることが。

「ああ、それは石井前館長を含めてそうですね。一番得意かもしれないですね」

――ただ、その一方でK-1 MAXとかGPとか競技的な大会のカード作りはあまり得意じゃないのかなとも思うんですけど。



「得意じゃないことないですよ」

――お好きじゃないのかな、とか？

「いやいやいや、そんなことないですよ。えーと、逆に言うとね、大晦日の弊害なんですよ。『曙対サップ』をやると、翌年のテレビ局はそこしか目に入らないんですよ。僕らは通常の競技に戻したいんです。パッとシフトチェンジして『あれは大晦日だからやったので、これからは普通の、純粋な競技の勝負論で行きますよ』とやりたいんだけど、日テレさんもフジテレビさんもTBSさんもそこにボブ・サップだ、曙だっていうものを求めるんですよね」

――本格路線のMAXもそうですか？

「MAXは違いますけど、でもMAXは平均的にずっといい数字を取っていかないと。僕、MAXの方が逆にやりやすいですね」

――やりやすいですか？

「これはネタばらしになっちゃうけど、魔裟斗対KID、KID対村浜、元気対魔裟斗はやっぱり『曙対ボブ・サップ』に似てるんですよ。バックボーンも違うんだし。でも、体重制限があって70kg対70kgだと『競技者（同士）』になっちゃうんです。70kgのデブっていないですよね（笑）。『フリークス』がいないんです」

――なるほど。

「異色の組み合わせをしても、異色な感じ、不思議な感じがしないんです。だけどヘビー級で同じことをやると極端な例では『モンターニャ・シウバ対バタービーン』になって『そんなの好きだな～』とか思われちゃうんです（笑）。ヘビー級だとめちゃめちゃ『競技性がゆがめられた』みたいになっちゃうんですよ。アーツやイグナショフと、マーク・コールマンだと全然体の作りが違いますけど、魔裟斗と元気とKIDの体はそこまでの違いは感じないですよね。だからMAXもそうだし、桜庭選手の85kgとか階級別の方が楽ですね」

――「格闘技」に対してファンが求めるものはここ数年で随分変わったと思うんです。10年前、格闘技に梶原一騎だとか異種格闘技戦だとかの「匂い」を付けてた時代から、最近はK-1 MAXとかPRID

聴率的にはヒョードル対ノゲイラよりもボビー対ベルナルド

魔裟斗対KIDは実は「シウバ対バタービーン」と似てるんです

K-1 Producer Sadaharu Tanigawa

EGPのようにより競技的なものを求める
傾向が強くなってると思うんですよ。
「まあそうですね。梶原一騎とか猪木さん

別なイベント限定』で、モーとかイグナシ
ヨフとか若手をどんどん育てていかないと
本当はダメなんですよ。でも、それだとテ

すよねぇ

やらないといけないですけど、それでK-
1がパワーダウンしてもいけないですか
ら。だから来年一番力を入れるのはK-1

笑）。それはよくないなぁ」
――魔裟斗選手のようにノーチェックで全
て任されると逆に書く方も細心の注意を払

EGPのようにより競技的なものを求める傾向が強くなってると思うんですよ。
「まあそうですね。梶原一騎とか猪木さんの異種格闘技戦とか、佐山さんのタイガーマスクとか、今は誰も知らないでしょ」
——ただ、大晦日だけはそれっぽい「匂い」が残ってた方が合うかなと思うんです。
「ええ」
——でも、通常のMAXやK-1GPは競技的に見られてて、そこにその「匂い」があるとかえって邪魔な気がするんです。
「そこはね、ホントに分けたいんですよ。逆に言うと心底分けたいんですよ」
——谷川さんは「競技的にまとまったもの」があまりお好きではないのかな、と。
「いやいや、そうじゃないですね。僕、そっちの方が好きですよ。K-1GPみたいにトーナメントというシステムが『アングル』になったり、サッカーW杯とか組み合わせがアングルになるものは神様が作り出すナチュラル・アングルで僕、大好きなんですよ。ただ、やっぱり大晦日で視聴率を取るとそういうものをテレビ局から強く要望されてしまうんですよ。だから、来年は『特別なイベント限定』で、モーとかイグナショフとか若手をどんどん育てていかないと本当はダメなんですよ。でも、それだとテレビ局の人は不安なんですよね」
——しかしですよ、谷川さん体制になってから呼ぶ選手はガムリンとかTOAとか「第2のサップ探し」でしたよね？
「あの〜、特にK-1ジャパンがそうなっちゃったんですよねぇ（苦笑）」
——「ジャパン劇場」には取材陣からも「いかがなものか？」との声が（笑）。
「ちょっと反省してます（笑）。でも今はね、だんだん僕は武蔵が強くなって自信が付いてきたんですけど、ジャパンの選手だと残念ながらゴールデンで出来るレベルにはなかったんですよ。じゃあジャパンの選手とGPベスト8ファイターばかりとやらせると、これは勝負にならない。レベルが合って、興味を引く人となるとTOAとかになっちゃうんですよ（一同笑）」
——（笑）よく分かります。
「かといってボスジムの第3、第4の男とジャパンの選手でやって勝った負けたでは、強さのレベルが全然一般の人には分からない。でも最近ジャパンの選手は実力が付いてきたんで、ちょっとコンセプトを変えてしっかりやりたいと思うんですよ」
——今、日本のプロ野球が低迷してメジャーが人気で、サッカーもJリーグよりヨーロッパだし、日本代表も「対世界」が明確にある。今は「世界」を見せないと、国内でゴチャゴチャしてても人気は広がらない。K-1ジャパンがまさにそうでした。K-1の総合部門もやるなら「世界NO1」を目指さないと生き残っていけないかな、と思いますけどいかがでしょう？
「そうですね、軸がないと絶対ダメです。軸があって、回数を重ねていかないとダメでしょうね」
——それは来年「ROMANEX」を復活させるということですか？
「いや、名前は変えるかもしれないですし、あんまり興行が過多になっても力が入らないのでそういう人たちの協力をさせていただくかもしれないですし。方向性はまだ分からないですね。総合をやるならしっかり



昨年末、全国的な注目度を集めたボブ・サップと曙の試合だったが、これがその後のK-1の方向性を大きく動かすことになった。

ROMANEXは名前を変えるかも。K-1の総合選手は他の団体に出していきます

ゲラで変に直されると話が面白くなくなっちゃうんですよねぇ

やらないといけないですけど、それでK-1がパワーダウンしてもいけないですから。だから来年一番力を入れるのはK-1のヘビー級です。ジャパンは組み替えたり、MAXは今の感じでやっていけばいいんですけど、ヘビー級は特にキチンと立て直していかないと。いい選手はたくさんいるんですけど『アンディ』（・フグ。故人）になる選手がなかなかいないんですよね」
——敗北が次なる展開を生む選手、ドラマになる選手、ですよね。ミルコや魔裟斗選手のように。
「それは課題ですけどね。ただ、さっきの『世界を見せる』というのは元々K-1がやり始めて、得意としてることですから、僕らからするとやっと時代が追いついてきたのかなと思うんですよ」
——総合ではKID選手、須藤選手、秋山選手と華のある選手が揃いましたけど、どんな展開になっていくんですか？
「そういう選手については総合格闘技をやっていく団体に出していったり、もっとスター選手になっていくようなプロモーションをしていったりですね」
——いっそ、MAXを総合のイベントにする、という考えはありませんか？
「え?! いやMAXはMAXでやっていきますよ（笑）。この階級はいい素材が揃っててこれからもどんどん出てきますから、これはこれで確立していくと思います。中量級の総合は面白いと思いますけどね」
——分かりました。最後にゲラチェックですが、業界の大先輩の谷川さんのご意見をぜひうかがいたいのは最近の格闘技界は、明らかに意味のないチェックが多くて困ってるんですよ。
「ああ、それは僕もよく分かりますよ。まったく理由がないのに直す人って多いじゃないですか（笑）」
——チェックする人の「感性」で直されたり、こちらの質問まで全部削除されたり、語尾をいじられて「こんな喋り方はしてなかったよな」という原稿になったり。
「僕は（ゲラを）見せることはいいとは思うんですけど、変に直されたりすると話が面白くなくなっちゃうんですよね（苦笑）。それはよくないなぁ」
——魔裟斗選手のようにノーチェックで全て任されると逆に書く方も細心の注意を払いますし、力も入るんですけどね…。
「…」
——ちなみに、谷川さんが「書く側」から「作る側」に回って2年になりますが、今でも戸惑うことはありますか？
「元々、石井前館長に付いてアドバイス的なことをしてたので仕事的な感覚は全く変わってないですね。実際に自分が交渉するのはプロデューサーになってからですけど、それもそんなに苦手ではないですよ。ただ僕は『伝える側』にいたので記者の人の気持ちも分かるので、喋りすぎちゃうところは反省しないと（笑）。あと、偉そうにするのがイヤなタイプなんですけど、舐められてもK-1としては良くないんですよ。でも『K-1プロデューサーとしてもっと堂々と』と求められるとイヤだなと思う時もあります。石井前館長はカリスマ性があったし、そういうスタンスを取るのが上手かったですけど、僕は同じようには出来ないし。求められてもいないと思いますけどね（笑）」
——いつまでも気さくな谷川さんでいてください（笑）。今日はお疲れのところをありがとうございました。



谷川貞治

たにがわさだはる

1961年9月27日生まれ。愛知県名古屋市出身。日本大学法学部政治経済学科卒業後、ベースボールマガジン社に入社。格闘技専門誌『格闘技通信』編集部に創刊時から所属し、二代目編集長になる。その後、1996年に同社を退社。同年株式会社ローデスを設立（専務取締役）し、CS衛星放送の格闘技チャンネル『FIGHTING TV SAMURAI』の立ち上げに参加。フジテレビのK-1中継の解説、格闘技情報番組『SRS』のコメンテーターを務めるなど、格闘技評論家として幅広く活躍。1999年6月に格闘技専門誌『SRS・DX』を創刊。2003年1月K-1イベントプロデューサーに就任。

前日ハワイから帰国。当日はホイスの会見に同席後、ガチを含めて取材2件、打ち合わせ多数…。

舟木昭太郎

格闘技マスコミ史



キックの創成期から見続けてきた。マスコミ界の重鎮がいま語る

いま格闘技ブームと言われる中、専門誌が苦戦している。ではネットのなかった時代、雑誌作りはどのようなものだったのか。キックの創成期から『ゴング』に関わり続けて30数年。マスコミ界の重鎮が語る雑誌論に耳を傾けよう。

田中周治＝取材・文
text by Shuji Tanaka

seeing from the initial stage
A leader tells now.
A thing like Gachi! is good

—まずは舟木さんと格闘技メディアの関わりからお話しいただけますか？

「僕はキックが好きだったんで、自分でも練習をやってたりしてね。恵比寿に日本で初めてのムエタイジムである山田道場があって、そこの第一期生だったんですよ」

—へぇ、ご自身でキックボクシングをなさっていたのですか。

「そう。後楽園ホールに出入りしてリングサイドに座らせてもらっていたから、試合のことをメモしたりしてね。そうしたらある時、デイリースポーツの名物記者の近藤さんっていう人に、後に本部長になった人なんだけど、『うちに書いてくれ』って誘われたんですよ。まあ、フリーライターとして活動し始めたわけですね」

—『ゴング』を出版している日本スポーツ出版社とも、その頃から関わり始めたのですか？

「当時、近藤さんが『月刊ゴング』にキックの連載を持っていて、それを任されるようになったのが最初かな。それからしばらくして…昭和46年の11月だったかな？ キックだけの増刊を作ることになって、まとめる役が必要だと。じゃあ、僕もいつまでもプラプラしていてもしょうがないから、入社しましょうってことで、社員になったんですよ」

—その頃の『月刊ゴング』は、やっぱりプロレス一色という感じだったんですか？

「8割くらいはプロレスでしたよ。その中で、私はボクシングとキックボクシングを担当していたんだけど。ただ、私がゴングに関わり始める時に寺内大吉さんに相談したら、『これからはキックの時代だよ』って言われたんですよ。それで編集会議をやった時に『これからはキックなんかも、もっと扱わないと時代に乗り遅れるよ』という話をして、例の連載が、最初は1ページだったのが2ページになったんです」

—その頃、キックボクシングの人気は世間的にも上り始めていたんですよね。

「TBSとか日本テレビとか東京12チャンネル（現テレビ東京）で、ゴールデンタイムで放映しあってね。だから、雑誌的にもこれは将来的に、読者層が広がるって感じていたんですよ」

—沢村忠さんや藤原敏男さんは、そんなに人気があったんですか？

「TBSは日本キックボクシング協会を放映していて、日テレと東京12系合同で全日本キックボクシング連盟をやっていた。沢村の日本系と石原慎太郎コミッショナー、藤原の全日本系。しばらくして交流戦が始まったんだけど、TBSが圧倒的に強いわけ。試合数も違うしね。地方興行も含めると、月に20試合くらいあったんだから。お金があるから、タイからチャンピオンクラスがどんどんやってくる。技術的にもぜんぜんTBSの方が上だったよ」

—今では考えられないほど、キックボクシングは本当に人気があったんですね。

「TBSは25%とか30%くらいの視聴率を獲っていたんじゃないかなあ。とにかく沢村は、キックの枠っていうのを超えちゃったんだよね。当時、ボクシングはスターがいなくて右肩下がりでね。その頃はキックの駆け出しの選手の方が、地方の街を歩いていても、「あっ、何々さんだ！」とか言われて、サインをしてくれって周りが人だかりになったりしてね。だって、全国ネット合計32局で日本系を放映していたから

具志堅、沢村、藤原の一番いい時を一番近い位置で過ごせたのが幸せ。

ね。10年間も、毎週7時になったらテレビでやっているわけだから」

——対抗戦をやっている頃が、人気のグラフでいうと頂上ですか?

「まぁそうだね。いや、少し陰りが見えてきた頃かね。ただ、日テレと東京12系は関東ローカルだったんですよ。確かに藤原は凄く強かったけれど、沢村とは知名度が全然違ったからね。知らないわけよ。地方興行では苦戦していったんだよね」

——人気面では藤原さんより沢村さんの方が抜群だったんですね。

「キックの増刊号は2冊出したんだけど、最初は沢村&全日本の一冊だったんだよね。それが凄く売れて、2冊目も作ろうということになって。藤原は今でこそ伝説的な人だけど、その当時は全国的じゃなかった。断然、沢村でしたよ。それで沢村がいたから彼の下にどんどん凄い選手が集まってきてね。やっぱり、あの派手さ、テレビ映りの良さが抜群だったんだろうね。足を上げたり飛んだり、そういう立体的なのがテレビ向きで、おじいちゃんからもおばあちゃんからも、子供からも支持を集めた。ゴールデンタイムで、最低でも22～23%の数字は挙げていたからね。もっと言えば、沢村のそういう大きな流れがあったから、全日本系もあそこまでやっていけたという見方もできる。やっぱり沢村の功績は大きいし、沢村がいなかったらキックはポシャってたと思うんです」

——ただ、現在の格闘技界では、藤原さんの実力は凄くて、沢村さんはショー的だったという風潮がありますが…。

「それはね、沢村自身が可哀想だと思うよ。彼はね、『ひと月2回くらいでやりたい』って言ってたんですよ。ところがプロモーターはそんなこと聞かないわけよ。いろんなしがらみというか、繋がりから、こっちを受けたら向こうも受けなくちゃいけないとかいう風になって、結局すべてを受けざるを得ない。一度、沢村が電車の中でガクンとなって寝ているのを見かけたことがあったんですよ。旅芸人のようでそれは可哀想な姿だったよ」

——現在の格闘技界では、相当する選手はいないですね。

「そう、沢村のようなスーパースターはいないよ。もう有無を言わせなかったからね。河川敷でやって、1万3千人位観客を集めたこともあったしね。全て沢村ありきで、沢村が来るはずだったのに、急に来ないってなったら、暴動になっちゃう。沢村も、腹が痛いなんて休んだりできない。だから、彼は刺身を一切食べなかったんですよ。腹を壊したりしちゃいけないからって、肉しか食わなかった。鹿児島や高知、下関なんかに行って、美味しい海のものを出されても手を付けなかった。だから、その習慣が残っていて、彼は今でもコーヒーと肉しか口にしないんですよ(笑)」

——舟木さんご自身も地方興行に帯同されていたんですよね。

「ほとんど毎日が現場。キックなんて地方が多かったしね。例えば丸々一週間かけて、沢村とともに宮古島、種子島を回ったりしてね。当時は現地にリングなんかないから、全部運んでいたんだよなぁ」

——まるで、旅の一座ですね。

「そう、一座だったね(笑)。本当に得難い体験をしたよ。僕の場合、幸せだったのは具志堅(用高)、沢村、藤原の一番いい時を一番近い位置で過ごせたことかな。藤原がバンコクで試合をしたときに、お客さんが数万人に膨れ上がって会場に入れないから、外で騒いだりしたことがあってね。ムエタイが最後の光芒を放った時期に、藤原が乗り込んで行く。目抜き通りには大看板が立っていて……日本人としては鳥肌が立ったよね。一番いい時代だったよね」

——取材する立場から見て、単純に凄いことだと思いますよ。

「具志堅には、彼が世界に挑戦するときに初めて密着したんだけれどね。山中湖に行って3日くらい一緒にいたけど、『チャンピオンになるんじゃないかなぁ』って閃きがあったの。それで当時のボクシングページに、あまり大きくはないけれど囲みの記事を掲載してね。そうしたら、チャンピオンになっちゃった。今なら『あんな大王者なんだから勝って当たり前』って思うかもしれないけれど、当時は、新聞記者の間でも『何Rまで立っていられるか』と言われていたくらいだから、たとえ囲みの記事でも画期的だったわけですよ。まあ、その記事がきっかけで、具志堅との信頼関係が築けたと言ってもいいんじゃないかな。彼が引退してからも、DVDを出す権利をうちの事務所(アッパー)に任せてくれていたり、ずっと関係が続いているんですよ」

——そこまで信頼を得るのは凄いですね。そうやって選手と信頼を築けたことが『ゴング格闘技』の創刊に繋がるわけですか?

「まず(昭和)57年の7月に『ワールドボクシング』を創刊したんですよ。創刊して編集長もやった。それから、59年の4月に『週刊ゴング』を創刊して、これも3年間編集長をやった。それで61年10月に『ゴング格闘技』の創刊。計3冊創刊したんだけど、それが今でも残っていることは、個人的に嬉しいよね」

——一つにまとまっていた『月刊ゴング』を3部門に分けたのは、より専門的な記事が読者に求められているという読みがあったからですか?

「あの頃はベースボールマガジン社の『週刊プロレス』が既に出ていたんだけど、売れていないという噂があったんですよ。だから、日本スポーツの連中は、週刊化にみんな反対だった。だけど、僕がアルバイトを使って書店を全部調べさせたら、実際はけっこう売れていたわけですよ。私はプロレスはあんまり知らないし、はっきりいって好きでもなかった。でも、やらないと日本スポーツはダメになると思ったんですよ」



——そういう使命感で週刊化に踏み切ったわけなんですね。すぐに軌道に乗ったのですか?

「それが、半年で7千万円くらい赤字だったんだよ。ちょうど、自社ビルを建てたばかりの頃でね、針のむしろだったね(笑)。周りからは『ほーらダメだろ。だから月刊にしておけば良かったのに』って言われて。そうしたら、長州力の維新軍がジャパンに移籍することになった。長州と近い付き合いをしていた週刊ゴングに情報が全部入るようになったわけ。それで、その年の12月の決算で3千万円の黒字まで逆転したんだよね」

——『ゴング格闘技』も最初の頃は苦労したのですか?

「いや、創刊号では前田日明VSドン中矢ニールセンを特集できたから、最初からドーッと黒字だった。でも、逆にそうやって最初から上手くいったから怖かったけどね。こっちは手を加えなくても、前田と誰かを対談させていれば、どんどん売れていった。だから、誌面をどうするんだというコンセプトをあまり持たないでやってたし、落ちるのも早かったね」

——前田さんとも、仲が良いというか、信頼は厚かったんですよね。

「彼はキックが大好きで、特に藤原のファンだったんだよね。だから、私の解説したビデオなんかも観ていたのかもしれないし。あとは福島生まれで訛っているし、信用できたんじゃないの? だから私が仕事ができるとかできないとかという点での関係ではなかったように思うけどね(笑)」

——でも実際に、他の専門誌を出し抜いて『ゴング格闘技』だけ独占インタビューを掲載したことがあったじゃないですか。

「そうだったね。リングスをWOWOWで放映することになったときに、私に解説をやってくれないかと来たんですよ。でも、

Shotaro Funaki talking……

前田襲撃事件では前田君と凄く揉めたね。事前に知っていたのに教えなかったって。

とにかく忙しくて、試合当日に4時頃から拘束される訳にもいかなかった。それに私はキックが専門だったからね」

——それで、谷川（貞治）さん、そして熊久保（英幸）さんと、リングスの歴代解説者が誕生したわけですね。

「まあ、はじめは早口で分かり辛いかなとも思ったんだけどね（笑）。熊久保も人間的に、例えば人を出し抜いたりすることがない奴だから、好感を得られたみたいだしね。それからもリングスとはいい関係を築けたと思いますよ」

——ただ当時は、リングスと仲が良い分だけパンクラスの取材はしにくかったとも思うんですが…。

「やっぱり、パンクラスに対する我々の姿勢だよね。リングスを上げた分だけ、パンクラスを下げれば問題だろうけど、パンクラスという一つの団体に対してきちんと向き合えば、リングスのことは関係なく対応してくれましたよ。ただ前田襲撃事件ではモメたけどね」

——NKホールで安生選手が前田さんに殴りかかった事件ですね。

「パンクラス社長の尾崎さんは、自分たちもグルになって襲ったと思われたことを冗談じゃないと怒ったわけ。取材拒否が1カ月くらいあったかな。まあ、話し合った結果、何とか分かってもらったんだけどね。ところがね、前田君も『ゴングは自分が襲われることを知ってた。知ってたくせに教えなかった』と怒ったんだよ。尾崎さんよりも前田君の方が凄く揉めたね」

——確かにあのときの『ゴング格闘技』には写真がきちんと載りましたね。

「確かに、近くから撮った写真もあったけど、最初は10メートルくらい離れたところから撮っているんだよね。だからネガを見せて、『前田さんどうですか？　知っていたら最初からもっと傍に寄って撮っているでしょ』って言ったんだよね。まあ、最終的には分かってもらえたんだけどね」

——他にも騒動はあったんですか。

「昔、引退してしばらくしてガッツさん（石松）を取材したとき、ヨネクラジムの米倉会長のことを結構揶揄したことを言っちゃって、それをそのまま掲載したことがあったんだよね。それで、米倉さんが怒っているという話が飛び込んできた。で、すぐにウイスキーを買って目白の駅からジムまで走って行ったよ（笑）。夏の暑い時だったな。『すみません、申し訳ありません』って頭を下げると、汗が滴り落ちる。そうしたら『もういいよ』って。その汗見ただけでいいから』って。あそこで怖がってグチャグチャと延ばしていたらダメ。だから、僕はトラブルを厭わないから。それが元で、逆に絆が強くなる、人間関係が深まるチャンスだからね」

——現在の専門誌だって選手たちとの関係は希薄になっていないと思いますが、売上はあまり伸びていないと聞いています。

「確かにそうだね。今はインターネットの時代だから、試合の結果だって瞬時にわかっちゃうんだもん。そういう時代にね、われわれ格闘技のマスメディアみたいなものが、どうやって生き残っていくのかってことを真剣に考えないと。もちろん、格闘技を好きだという気持ちは大切だろうけど、ただ単に趣味だからやっているっていう時代じゃないと思うよ」



Shotaro Funaki
ふなき・しょうたろう

福島県生まれ。中大卒業後、フリーライターを経て、71年日本スポーツ出版社入社。『週刊ゴング』『ゴング格闘技』『ワールド・ボクシング』各編集長を歴任。日本スポーツ出版社専務取締役、日本スポーツ映像株式会社代表取締役を務め、02年9月独立のため退社。「株式会社UPPER」を創立、代表取締役に。

——アッパーでは、紙媒体に関わる以外に何か仕事をしているんですか？

「パチンコのキャラクター管理までやっていますよ。来年、パチスロで、侍ジャイアンツと、ボクシングでは具志堅・渡嘉敷・輪島の三羽ガラスの台が出る予定になっていてね。他にも紙媒体だけど、『柔道一直線』の版権を持っていたりするわけ。梶原一騎さんの奥さんからお世話になったお礼にと、アッパーを設立したときに出版権を頂いたんですよ」

——結局は信頼なんですね。

「もちろん、信頼は大事だろうけれど、それさえあればすべてOKというわけでもない。少し大きな話になるけど、全ての不況の原因は少子化だと思うからね。10年前はプロレス会場で子供が走り回っている姿は当たり前だった。今は見たことないでしょ？　K-1だってPRIDEだって20歳過ぎのアベックや若者ばかり。昔の後楽園ホールでは、子供たちがサイン帳を持って選手を追いかけていましたよ。

繰り返しになるけど、そういう時代にただ取材をして試合を見てっていうんじゃ、メシを食っていけないだろうね。その中で生き残っていくには、コアな読者をガッチリつかんで少しずつ増やすしかない。ピンナップなんか入れる必要はない。コアな読者は、内容だけ面白ければ買ってくれるんです。値段もあまり関係ないの。千円の本を5百円にしたら倍売れるかといえば、そうじゃないんだから」

——試合結果だけを知りたいファンは、インターネットだけで用は足りますからね。

「ここまで急速に普及するとは思わないほどに、インターネットの時代になったでしょ。会場にいながら携帯電話で試合の結果をチェックしていたりする。何でも分かっちゃうんだよね。だから、雑誌が速報号と謳っても全然、速報じゃないわけ。そうなると変わらざるを得ないんだよね。だから、今の『ゴング格闘技』を見てもらえばわかるけど、ほとんどプレビューでしょ。終わった試合に関しても、手を加えていろんな角度から料理人が料理をしている。これは時代が変わってきているから」

『ガチ！』のようなものがいいって30数年やってようやく分かった。

——よりコアにマニアにですね。

「そうそう。はっきり言うと格闘技の専門誌はマニアックな本だからね。別に、その他大勢の人にばらまく必要はないわけですよ。マニアックな読者を一人増やすために、ベストを尽くすと。だから、この『ガチ！マガジン』は非常にいい雑誌だと思いますよ。マニアのためにオタクが作ることがポイントですよ」

——ただ、マニアな内容になると、売れ行きが良くないこともありますよね？

「ぶれないで地に脚をつけて信念を持って、どれだけがっちりやれるかってことですよね。ところが、他の雑誌のここがいいんだという浮気心が出てくるとダメなのよね。初志貫徹なの。自分を信頼することなんだよね」

——『ガチ！マガジン』の編集者が聞いたら喜ぶと思いますよ（笑）。

「これは立派ですよ。自分が20年前にこれを作れと言われても作れないもの。だから自信を持ってやればいいんじゃないかなぁ。ただ、『この雑誌はいい』ということは、30数年雑誌作りをやってきて、ようやく、少し分かったかなぁって感じなんだよね」

——30数年でようやくですか!?

「ようやくですよ。でも、そういう新しい雑誌には触発されるんだよね。実は、あと一冊くらいは創刊したいなぁと思っているんだよね（笑）。これまで自分ができなかったことも、今思えば『なんで考えられなかったのかなぁ』って思う。やっぱり、やるべきだなぁとフツフツとやる気が湧き出てくるんですよ。そういう自分を改めて客観的に眺めると、どこまでいっても編集者なのかなぁって……。つまり、格闘技が好きなんでしょうね」

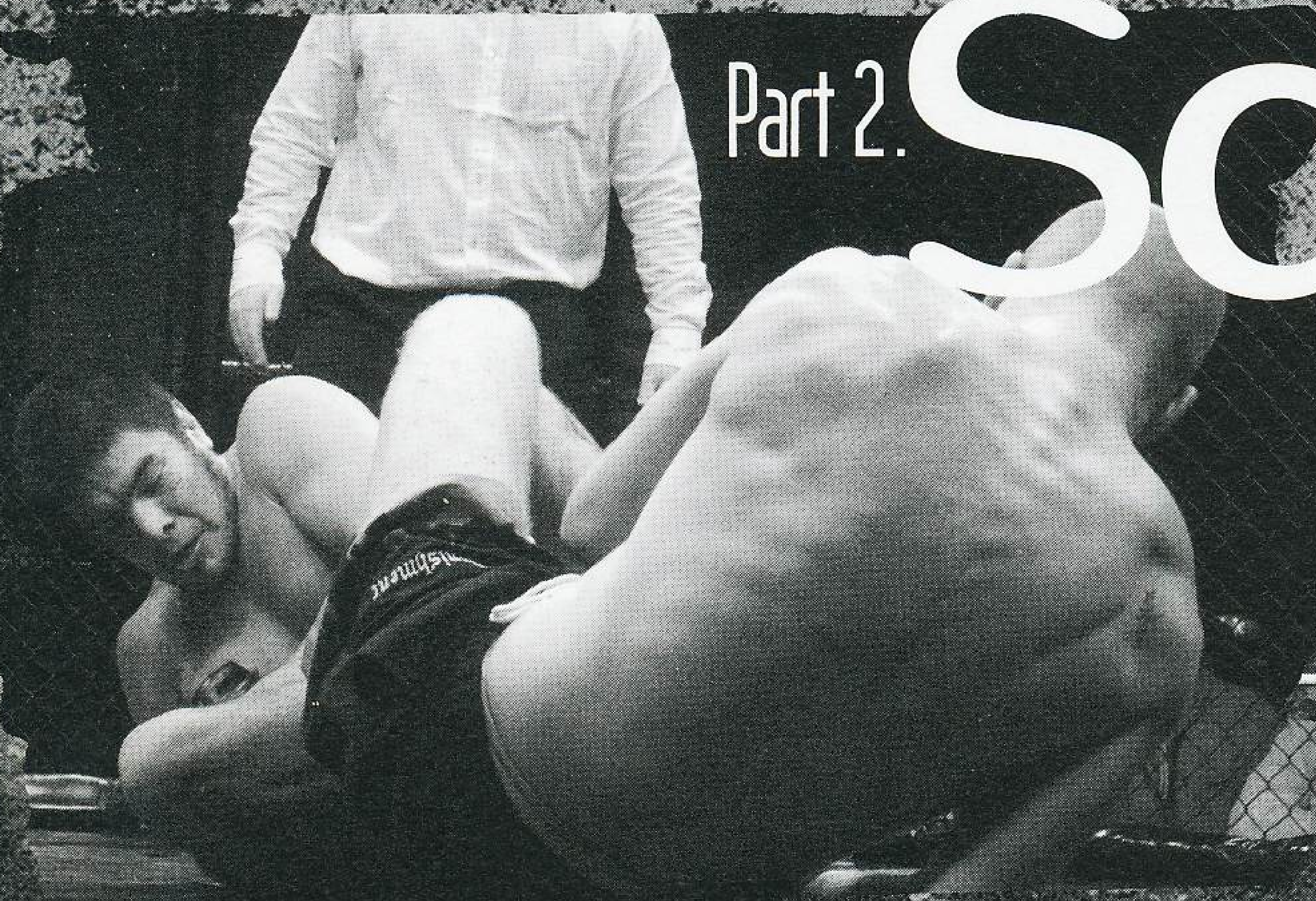


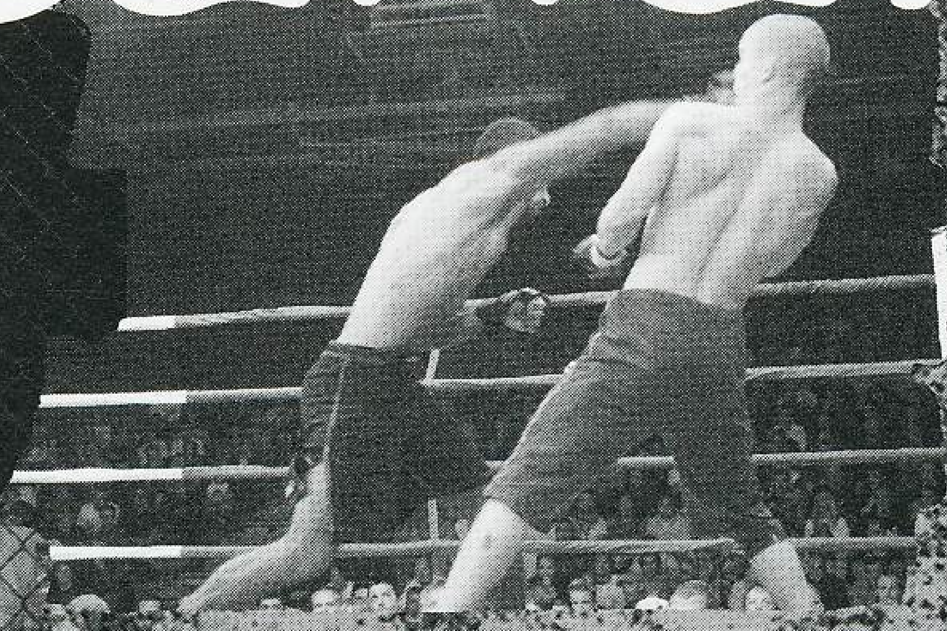


Part 1.
Korea
by Eitetsu HASEGAWA

新興 総合格闘技国家を知る——
Discover MMA Rising Nations

今や世界中に広まったといっても過言でないMMA。
米国、ブラジル、日本、ロシアが、興行規模、選手層、選手の質という面で、先駆者的存在であることは間違いない。
しかし、これだけ世界に広がったということは、私たちの知らない間に、とてもつもなく強い選手が現れていることも十分に考えられる。
総合格闘技が盛んになる、強い選手を輩出するには、それなりの理由、歴史が存在する。
そこでMMA先進国に追いつけ、追い越せとばかりにメキメキと力をつけている——、
チョット気になる国と地域を取り上げてみた。





Part 2.
Scandinavia
by Manabu TAKASHIMA







Part 4.
Canada
by Arnold “Sushiboy” Lim

Part 3.
Baltic States
by Manabu TAKASHIMA

でしょ」って言ったんだよね。まあ、最終的には分かってもらえたんだけどね」



30数年やってようやく分かった。





実質、活動年数2年の韓国ＭＭＡ界。いろいろ問題は多いが、短期間での発展は驚異的だ。

韓国総合格闘技界の現在地

2003年に「格闘技元年」を迎えた韓国。
高額賞金トーナメントをぶち上げ、それを一般マスコミが煽り未曾有の「格闘技バブル」に突入したが、この騒ぎは1年も経たずして崩壊した。
バブル崩壊までの2年間＝韓国総合格闘技の歴史を振り返り、今ある位置、今後とるべき道を考察していきたい。

Large sum prize tournament
Collapse of the 'bubble' economy

長谷川永哲＝文・取材
text by Eitetsu Hasegawa

M-fight＝写真提供
photograph offer by M-fight www.mfight.co.kr

――2003年4月、賞金総額1億ウォン（約1千万円）を懸けた第1回スピリットMC・無差別トーナメントが開催され、韓国格闘技界は前例のないバブル景気を迎えた。この時点で韓国の格闘技界はテコンドー、ハップキドー、ボクシング、キック＆ムエタイ等の打撃系格闘技を指す。総合はKPWが産声を上げたばかりで「無規則（ノールール）格闘技」、「異種混合格闘技」等と呼ばれ、名称も定まっていない状態であった。韓国格闘技界の根幹を成すテコンドーはオリンピック種目でもあり、当然アマチュア競技会でその優劣が決せられる。

ハップキドーもまた、武術色が強いためファイトマネーとは無縁であった。

当時、プロ興行として〝戦い〟を扱っていたボクシングでは、国内タイトル戦のファイトマネーが100万ウォン（10万円）、これがキック＆ムエタイとなると50万ウォン（5万円）＋チケット50万ウォン分。

これらの状況を考えると、スピリットMCが提示した優勝賞金3000万ウォンはまさに驚異的な額だった。

韓国プロボクシング界は一時期、6人の世界チャンピオンを抱えるほど隆盛を誇っていたが、最近ではスター選手の不在により低迷。キックに至ってはプロモーションの乱立で収拾がつかない状態に陥っている。他方、プロレスというと65年の「張永哲事件」（日本では「大態元司リンチ事件」として知られる――派閥争いが招いた乱闘事件――が警察沙汰になるのを避け、張永哲が「プロレスはショー」と公言）を切っ掛けに失速しており、長くビジネスとしては成り立っていない。

加えて韓国ではソンビ（儒学者）文化が根強く、文武の「文」（学者、インテリ）が尊ばれ、「武」（肉体派）は蔑まれる国民性を持つことも強く影響し、格闘技は非・人気種目となり、その歴史は固定ファン層も存在しない空白の時代が長く続いていた。

そんな中でスピリットMCが起爆剤となり、同プロモーションから枝分かれしたネオファイトの優勝賞金はヘビー級3200万ウォン、ミドル級2500万ウォン、かつて日本のインディ・プロレス＝FMWの

人気者だったイー・ガクスーがこれらの動きに追従し創設したWKFもヘビー級20

も採算がとれる状態ではなかった。
これら打撃系興行の惨状は、総合も同様

チケット実売は8000に及び、会場は満員の観客で埋め尽くされていた。

イトへの不信感が募った。
③奥田事件――ネオファイト第2回ミドル

Part 1. Korea

Discover MMA Rising Nations

by Eitetsu HASEGAWA

人気者だったイー・ガクスーがこれらの動きに追従し創設したWKFもヘビー級2000万ウォン、ミドル級1500万ウォン、ライト級1000万ウォンを掲げるなど、未曾有の「格闘技バブル期」に突入した。

日本経済のバブルの要因は、その土地高騰にあったが、韓国総合格闘技界バブルのきっかけはケーブルテレビによるK－1、PRIDE、KOTCの中継であった。

普及率の高いケーブルテレビが、深夜枠で海外の格闘技を放送し、と同時にマニアはインターネットを駆使し情報を集め、注目度が上がった。そこに目をつけたイベンターが、巨額の運営資金を投じ世界的なメジャー大会を目指し、プロモーションを興す。彼らはケーブルテレビで観たような派手な演出を駆使した大会さえ開催すれば、それに見合う収益を得ることが出来ると思っていた。それが、大きな間違いの始まりだったのである。

総合以外でも、サムゴー、ナムサックノーイ、ブレイク前のブアカオ等のムエタイの強豪が参戦した「KOMA-GP」、WTFテコンドーの一流選手によるプロテコンドー大会「KOK」、全日本キックで火がついたイム・チビンを看板選手とした「ストライキック」等、打撃系の大規模興行が打ち上げ花火的に開催されたが、会場では閑古鳥が鳴き、運営面でも多くの問題を抱えるなど、ビジネス的にはどうひいき目に見ても採算がとれる状態ではなかった。

これら打撃系興行の惨状は、総合も同様で、最初は物珍しさから非・マニアの一般層が大挙して押し寄せ8000～9000人の観客動員を誇った大会もあったが、回を重ねるごとに観客動員数は落ち込んでいった。そんな実状を把握せず確保した大規模な会場の空席を埋めるべく招待券をばら撒くという、悪循環という副産物まで生んでしまった。

加えて過去のプロ興行のほとんどがスポンサーの「持ち出し」興行だったため、入場無料というケースが多く、韓国の観客には、驚くべきことだが「チケットを買う」という習慣がない（ということは前述した「50万ウォン分のチケット」という選手への分配は、紙くず同然だったわけだ）。

客席を埋めるために購買層を殺すという矛盾、抜け道のない螺旋階段を生まれて間もない韓国総合格闘技界は、駆け下りようとしていた。

観客動員数が頭打ちとなり、スポンサーも離れ、2003年末以降大規模な賞金トーナメントはなくなり、呆気なく「格闘技バブル期」の終焉を迎えた。

バブルを終え、堅実路線を選択した韓国総合格闘技の住人達は、「チケットを購入して観戦する観客は3000人が限度」と判断。それが04年7月に旗揚げ戦を行ったK－1韓国大会は、高額のチケットにも関わらずチケット実売は8000に及び、会場は満員の観客で埋め尽くされていた。

パウンドという新しい概念を導入した総合格闘技界だが、目新しさがなくなった今、世界規模の打撃系イベントK－1に見られる派手なKOシーンに惹かれる一般層には、難解な寝技はなかなか受け入れられない。そのためにも、実状に見合った地道なプロモートを興行で、非・マニアのファン層を育てなくてはいけないというのに、ファンの気持ちを逆なでするような事件が、立て続けに起こってしまった。

それらの事件簿をここに列挙しよう。

①UDU暴動事件――WKFヘビー級決勝戦でキム・ヨンソン選手の判定負けを不服とした応援団であるHID（対北朝鮮工作員）同志会のメンバーが暴動を起こした。8000人（主催者発表）以上の観客が集まった会場は怒号が響き渡り、椅子が飛び交う騒乱状態に。大会自体でも、格闘技経験のない女子大生を審判に起用し、ブレイク後背後から反則パンチを受けて気絶した選手にカウントを数える等、数々の失態を見せてしまっていた。

②マーク・コールマン、エキシビジョン事件――ネオファイト第1回大会でスーパーファイト「マーク・コールマン対ウェス・シムズ」が発表されていたが、同門の二人はエキシビジョンであった。素性を知らない観客はリアルファイトを期待していたためネオファイトへの不信感が募った。

③奥田事件――ネオファイト第2回ミドル決勝で、真武館の奥田正勝が再三再四、関節技を極めるも、その度に審判がブレイクを命じ、ホン・ジュピョのパウンドが数発入ったところでレフェリーストップ。明らかな贔屓レフリングに韓国ファンから非難を浴びた。ネオファイトは以降の大会からグラウンドに制限時間を設ける。

ここに挙げた以外でも、韓国総合格闘技界のイメージダウンの要因となったのが、大規模な大会の開催直前の中止事件だ。

パンクラスに参戦したキム・ジョンワン、美濃輪育久の参戦が発表されていた「KO－KING」。韓国プロレス団体がドン・フライを招聘しリアルファイトを宣言した「ウルトラFC」。「奥田事件」に目をつけ奥田対ホンの因縁のカードを組もうと動いていた「コリアファイト」。

そして、現地のジュライメディア主導で日本から所属選手を招聘し、広報活動まで行っていたパンクラス韓国大会等など、僅か2年半の歴史のなかで、考えられない数のキャンセル劇が起きている。

無事開催された大会の中にも、日程がずれ込むケースが多く、何度も期待を裏切られたファンは、新プロモーションの発足に懐疑的にならざるを得なくなっていた。

バブルが崩壊した韓国総合格闘技界には、様々な創意工夫が見られるようになる。

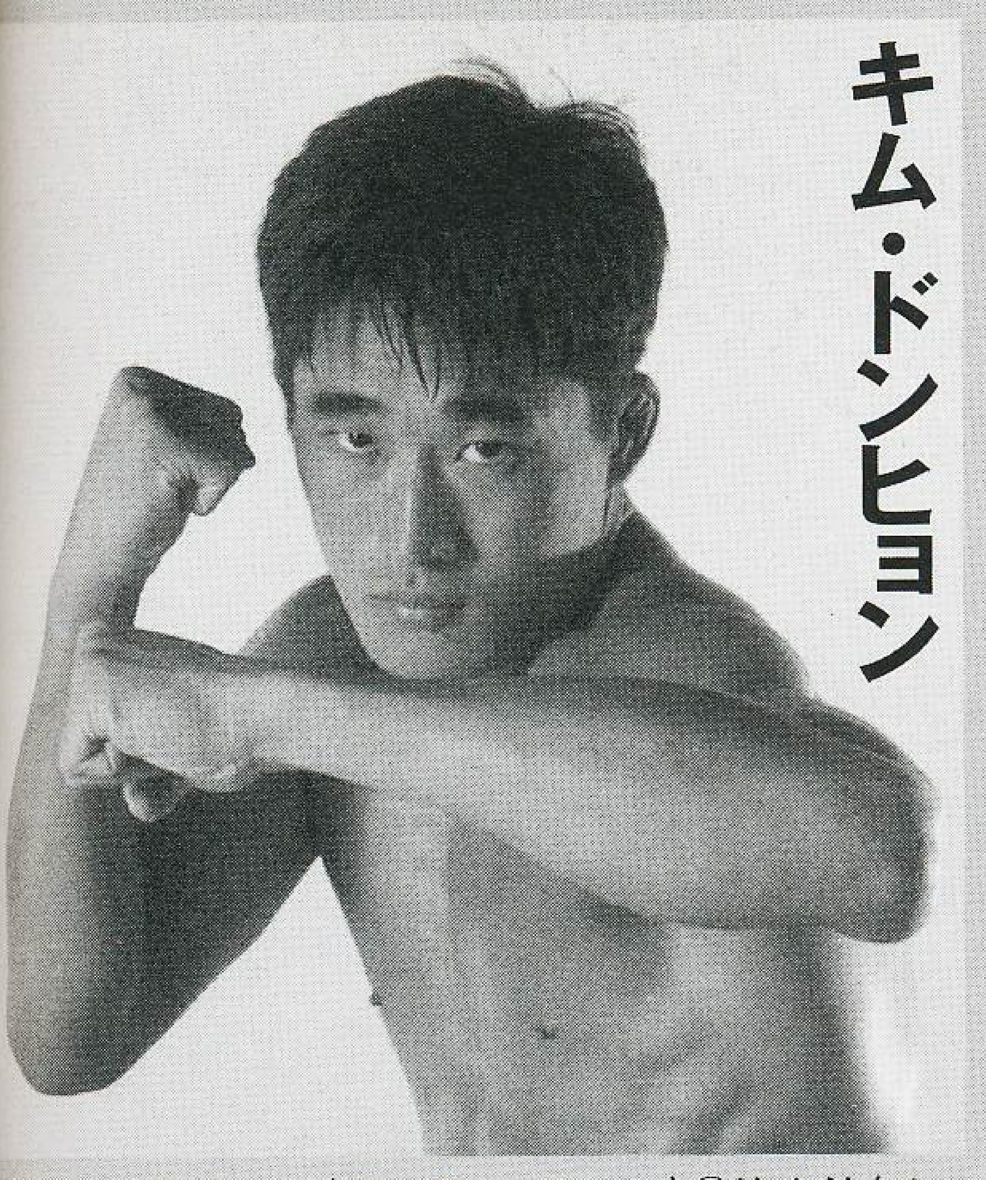
韓国MMA大会&事件史

- ■2002年11月24日　第1回KPWアマ無規則格闘技大会開催
- ■2003年2月23日　第2回KPW無規則格闘技大会開催
- ■4月26日　第1回スピリットMCトーナメント（無差別8人トーナメント）開催
- ■6月15日　第3回KPW異種混合格闘技大会開催
- ■8月16&17日　WKF異種格闘技トーナメントが、-70kg、-80kg、+80kgの3階級で開催され　、HID暴動事件が発生した
- ■8月30日　第1回ネオファイトがヘビー級4人トーナメント、ミドル級16人トーナメント2回戦まで行われ、エキジビジョン事件が起きた
- ■9月6日　スピリットMCが　第2回　予選トーナメント「闘魂の序曲」を±80kgの2階級16人トーナメントの2回戦までを開催
- ■9月28日　第4回KPW開催
- ■10月11日　第2回スピリットMC決勝トーナメント「闘魂」開催
- ■11月3日　KO―KING中止、美濃輪育久セミナー
- ■12月3日　WKF異種格闘技トーナメント世界大会が±80kgの2階級8人トーナメントで開催される
- ■12月20日　第2回ネオファイトで、ヘビー級16人トーナメントが2回戦まで行われ、ミドル決勝トーナメントで「奥田事件」が発生
- ■12月21日　第5回大会KPW開催
- ■2004年2月7日　スピリットMC第1回アマチュア・インターリーグ 開催
- ■2月15日　チェ・ムベ　PRIDE初参戦
- ■2月27日　格闘技バー「ギムミー5」がリニューアルオープン
- ■3月20日　第3回ネオファイトで行われたライト級8人トーナメントで、真武館の久原清幸が初代チャンピオンとなる
- ■3月28日　ウルトラFC中止
- ■4月4日　第6回KPW開催
- ■4月10日　第3回スピリットMC「I will be back」開催
- ■6月12日　第4回スピリットMC「REVOLUTION」開催
- ■6月26&27日　初の大規模国際大会グラジエーターFCが開催される
- ■7月15&16日　WKF異種格闘技トーナメント格闘王選抜大会開催
- ■7月17日　K－1韓国大会が行われたが、同日開催予定だったパンクラス初の韓国大会は中止に
- ■9月11日　第5回スピリットMC「Unlimited」開催
- ■9月12日　第4回ネオファイトで、ライト級8人トーナメントが行われる
- ■9月18日　コリアファイト中止
- ■10月2～4日　第5回ネオファイトでヘビー級決勝トーナメントが行われ、米国のブランドン・リー・ヒンクルが優勝
- ■10月13日　大田市で格闘技クラブ「ゼニア」オープン
- ■10月25日　第7回KPW開催
- ■11月13日　格闘技クラブ「ゼニア」が閉店
- ■11月20日　スピリットMC第2回アマチュア・インターリーグ開催



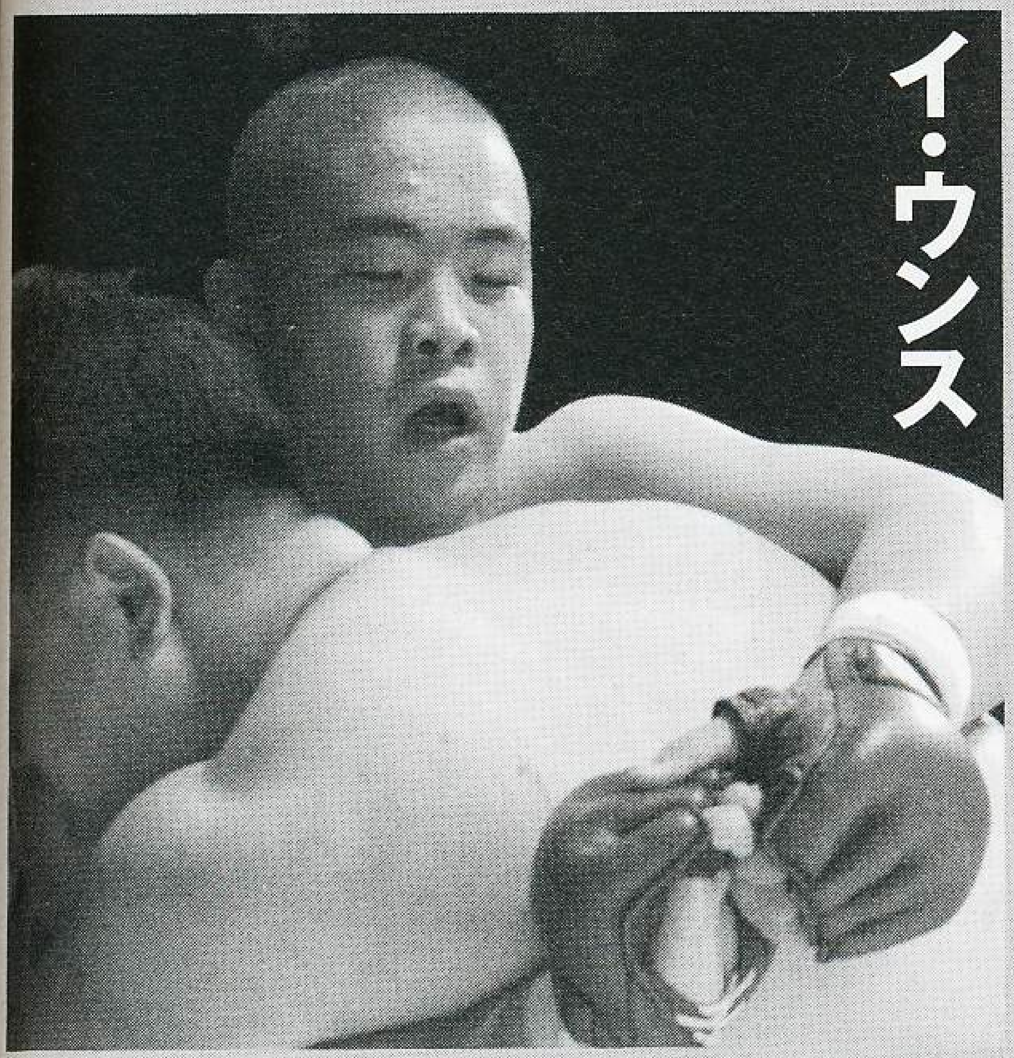
韓国MMA界の未来
～日選手の名前と顔を覚えよう～

①名前ジム②身長③体重④生年月日⑤出身地



①キム・ドンヒョン（Kim-DongHyoun）②浄心館（チョンシムグァン）③184cm④80kg⑤1981年11月17日⑥大田（テジョン）

現在、体育大学で柔道を専攻する現役大学生。KPW、グラップリング、ブラジリアン柔術の全てのトーナメントで優勝。アルバイトが禁止されている浄心館所属の選手のため、バーファイトにも参戦。柔道仕込みの寝技が強力な武器だが、打撃の実力も上がってきている。04年9月にモルドバで開かれたサンボ世界大会に出場するつもりで、モルジブへ行ってしまったエピソードを持つ。



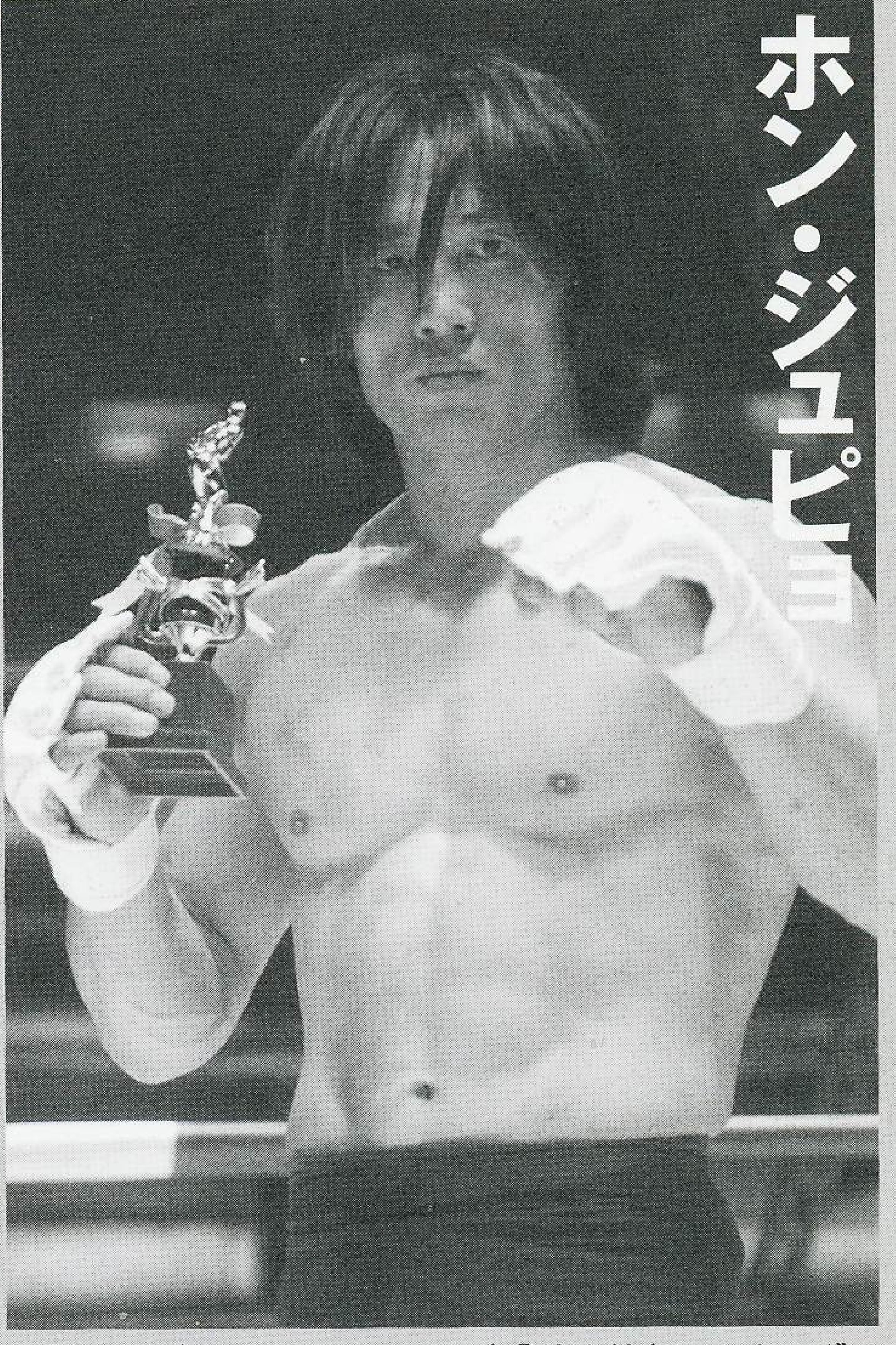
①イ・ウンス（Lee-EnSoo）②フリー③183cm④104kg⑤1982年3月7日⑥ソウル

エンセン井上ファンが高じて第1回KPW参戦。コリアン・トップチームに在籍し、スピリットMC第1回トーナメント決勝で優勝者イ・ミョンジュ（K－1、TITANS参戦経験有）と40分に渡る死闘を繰り広げる。2回大会では見事優勝、同団体ヘビー級王者となった。重量挙げで培った身体能力の高さとラフなファイトスタイルは、一見の価値あり。現在は兵役のためタイトルを返上し、所属もフリーとなるが軍隊への入隊ではなく公益勤務要員（出勤制の準公務員）として勤務することが決定的。1ヵ月の軍事訓練後は選手活動を再開する予定だ。



①イム・ジェソク（Lim-JaeSuk）②浄心館（チョンシムグァン）③182cm④78kg⑤1979年11月9日⑥ソウル

中学時代に浄心館に入門した生え抜きの選手。兵役で「鬼を喰らう」といわれる海兵隊に入隊。除隊後キックのミドル級チャンピオンから総合格闘家に転身し、現在は龍仁大学警護学科在学中。キック仕込みの打撃にグラウンド・センスを併せ持つ。最近ではバーファイトで行われた64人トーナメント（!）で優勝。ホンと共にその実力はトップクラス。現在はホン同様、本場ブラジルにて柔術修行中。本人は日本での試合を熱望しており、「平仮名なら読める」らしい。



①ホン・ジュピョ（Hong-JuPyo）②浄心館（チョンシムグァン）③183cm④85kg⑤1970年4月17日⑥ソウル

韓国伝統武術であるテッキョンの高手（達人）、剣道の指導の傍ら、柔道、ボクシング等あらゆる格闘技を修練。総合に参戦してからはブラジリアン柔術に開眼し、現在はブラジルへ渡りグレイシー・バッハにて柔術、ファス・バーリトゥードにて総合を修行中。ネオファイト・ミドル級トーナメントではK－1USA参戦経験のある選手を下し、決勝戦進出。決勝では贔屓レフェリングで優勝したため「悲劇のチャンピオン」となるもの、その実力は韓国トップ。武道家然とした風貌から人気も高く、05年に予定されている帰国後は、内外を問わず積極的に試合をこなす予定。兵役中は国防部儀仗隊（儀礼・警固専門部隊）に所属していた。

その代表格は、格闘技バー「ギムミー5」だ。2003年12月の開店当初は、キック団体であるストライキックに委託し、月～土、毎日2試合を常設リングで、キックを呼び物にしていたが、集客に結びつかず2ヵ月後に閉店に追い込まれた。

しかし、04年2月に運営をネオファイトに委託し、リニューアルオープン。グラウンド時間制限（30秒）有りの総合格闘技と、肘なしのキックの2つのルールを導入し、同時に収録も開始して編集したものをK－1やPRIDEの放送コンテンツが底をついたケーブルテレビで中継し、好評を得るようになった。視聴者が来店することで集客となり、その飲食費が即、運営費になるという非常に簡単明快な運営システムを作り上げた一方で、問題視されていた1日6人の選手の確保は、大規模興行が縮小により実戦に飢えた選手も多く、テレビ中継で選手を募集するため、玉石混合ながら選手は確保できている状態にある。

実際の試合では、皮肉なことに玉石の「石」の選手が参加することで一般視聴者、観客が求める「派手なKO」「ノーガードのド突き合い」が繰り広げられ、会場、番組名となる「ギムミー5」の知名度は韓国においてK－1、PRIDEに匹敵するまでの存在に成長している。

関係者も当初は、「神聖な格闘技を酒のアテにするのか」と否定的であったが、「一般大衆に総合格闘技を浸透させる」という意味での功績が大きく、認めざるを得ないようになった。戦う側にとっても経験が積めた上で、実益（ファイトマネー）があり、さらにテレビでアピールまでできるのだから、モチベーションは高まるばかりだ。

選手の育成に貢献している一方で、審判団の育成、安全管理といった課題は残るが、今や全国規模に広まりつつある格闘技バーにあって、冠スポンサーが付いてトーナメントを開催するなど、「ギムミー5」はそのメインストリームとなっている。

寝技に時間制限を設けるバーファイトスタイルが定着しつつある中、膠着ブレイクを持続し孤軍奮闘している老舗が、スピリットMCだ。世界基準の「総合格闘技」の完

コリアンMMA、五大ジムを紹介！

——①所在都市②ベース③主な所属選手——

チーム・タックル

①ソウル②レスリング③チェ・ムベ、マイケル・サジン・クォーク、ノ・ヨンアン、キム、ジェヨン、キム・ヒョングァン（兵役中）

「プサンの重戦車」チェ・ムベがレスリング引退後、韓国初の私設レスリング教室を開設するも、総合格闘技を目指す練習生の多さからレスリングをベースとした総合ジムとなる。チェ自身も総合の練習、レスリングの指導を行っている。総合は米国ハワイのグラップリング・アンリミテッド出身マイケル・サジン・クォークが、打撃は極真空手出身のキム・ジェヨンが指導。現在、韓国滞在中のコブス・ハイサマンも練習している。

浄心館（チョンシムグァン）

①ソウル②キックボクシング、ブラジリアン柔術③ホン・ジュピョオ、イム・ジェソク、キム・ドンヒョン、キム・チャンヒョン

もとはキックのジムだったが、いち早くブラジリアン柔術を取り入れ、格闘技バブルに備えてきた韓国版シュートボクセ・アカデミー。積極的に選手を受け入れ、各地に支部、系列道場がある。豊富な人材を誇り、国内の全ての大会に選手を送り込む。選手への待遇は良いが内弟子、プロ選手は原則として副業、アルバイト禁止という規則がある。

コリアン・トップチーム

①ソウル②レスリング③ファン・ナンギュ、ラ・サンボク、ウィ・スンベ

レスリング出身のハ・ドンジン監督、チョン・チャニョルコーチが主催するジム。徹底したトップアスリート式で、所属選手にレスリングスタイルを修得させ、レスリング主体の総合格闘家育成を目指す。姉妹提携である真武館韓国本部との合同練習も定期的に行っている。

真武館韓国本部

①ソウル②空手③奥田正勝、チェ・ヨン

MMA空手である真武館空手の海外支部ではあるが師範の奥田正勝、グラウンド・コーチのチェ・ヨンが積極的に総合大会へ出場するため総合ジムとして認知されている。練習生もレベルに合わせて、アマ大会出場している。ちなみに現地での発音は、チンムグァンハングックポンブとなる。

テグ異種格闘技（イジョンキョクトゥギ）アカデミー

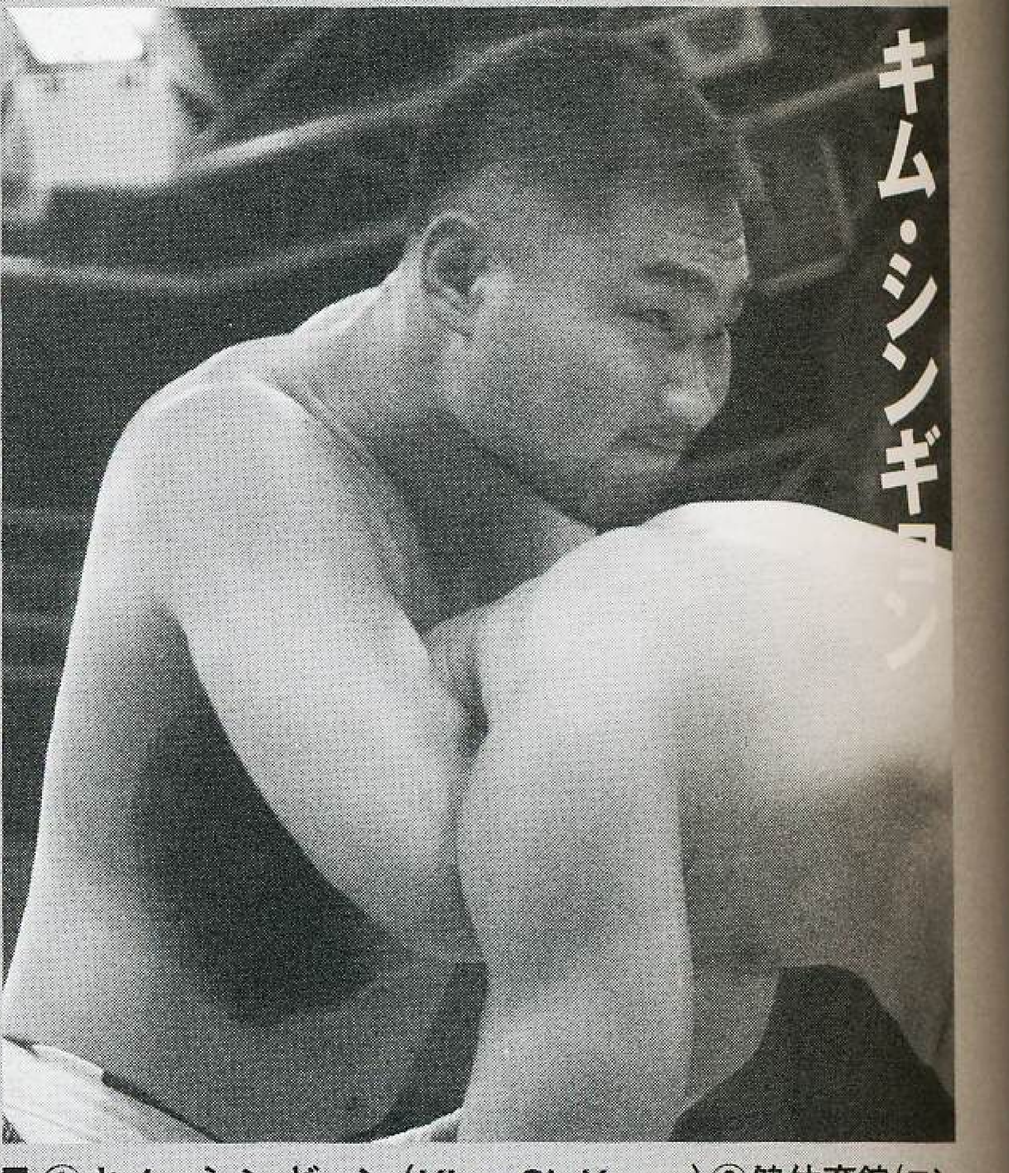
①テグ②柔術③チェ・スンピル、パク・コンイル

マチャド柔術を習得したイ・ジェフン（台湾で行われた、アジア太平洋選手権・優勝）が主宰する総合格闘技ジム。チェはネオファイト・ライト級8人トーナメント準優勝、パクはGRAP（チェ・ムベ主催のグラップリング大会）優勝と、地方というハンディを感じさせない好成績を残している。



①チェ・ヨン（Choi-Youg）②真武館韓国本部③184cm④82kg⑤1978年4月12日⑥大阪

格闘技を始める以前はバスケット選手だったという、叩き上げの総合格闘家。プロレスラーである実弟の崔リョウジの格闘に対する姿勢に触発され総合を始める。打撃よりも寝技主体のグラップラータイプ。韓国では真武館＆コリアン・トップチーム、日本では相補体術＆コブラ会＆夢想戦術でトレーニングを積み、韓日を又にかけて活動している。2005年に開催予定のスピリットMCミドル級GPのチャンピオンを狙って、現在はトレーニングに余念がない。趣味は不味い物巡り。



①キム・シンギョン（Kim=SinKyum）②健体育館（コンチェユックァン）③185cm④95kg⑤1976年3月4日⑥安山

キックボクシングのヘビー級チャンピオン。K−1韓国大会にも出場しているが、バーファイトを主戦場とし総合の試合をこなすたびに、実力を上げている。コブス・ハイサマンを一撃でKOする打撃にサブミッションのスキルアップも顕著で、ネオファイトではブランドン・リー・ヒンクルを腕十字で追い込む場面もあった。公益勤務要員時代は刑務所の看守として勤務していた。



①ユ・ウソン（Yu−WooSung）②健体育館（コンチェユックァン）③178cm④78kg⑤旧暦1982年5月21日⑥忠清南道（チュンチョンナムド）

中学時代に培ったレスリング力をベースとしたグラウンド・テクニックと、キック等の打撃を武器にKPW第4回大会-75kg級でぶっちぎりの優勝で衝撃デビューを飾る。その後は、ネオファイト・ライト級8人トーナメントで1回戦を突破するも、負傷により準決勝を欠場。最近はバーファイトで32人トーナメントに参戦し、1回戦突破している（11月26日現在）。ルックスがテレビ視聴者に受け、実力以外の部分でも韓国総合格闘技界の期待がかかっている。今のところ、依然として負けしらず。



①ナ・ムジン（Na-MuJin）②飛虎体育館（ピホチェユックァン）③190cm④80kg⑤1983年11月13日⑥全羅南道（チョルラナムド）

ハプキドーをベースにしたストライカー。グラウンドにはまだ適応できていないが、指導者が陸上競技のコーチであり、無限のスタミナとミドル級としては反則に近いリーチからのパウンドが武器。相手に足関節、ガードポジションを取られた状態からでも、そのリーチを活かしたパウンド攻撃でKOが狙える。スピリットMC初代ミドル級チャンピオン。初防衛戦でイ・チソン（浄心館）にタイトルを奪われたが、イが引退したため現在は空位のタイトルを狙う事実上のトップランカーである。現在、公益勤務要員として一人暮らしの老人を対象とした食事の配達員として勤務中。

成を目指すが、それゆえに世界基準の運営、興行を求められ、必要以上に粗が目立ってしまう損な役割も担っている。

スピリットMCの問題点は、審判のレベルが低いという一番のことで間違いない。また、ジャッジの判定基準が明らかにされていない点も気に掛かる。

また興行として、韓国系カナダ人のデニス・カンをヘビー級のエースとして重用しているが、やはりファンは感情移入が難しい。自前の中心選手の育成が今後の浮沈を握っているだろう。そんななか、この11月にはインターリーグで、唐突にキック・ルールが行われ、ドキュメンタリー番組で取り上げられたこともある極真空手出身のキム・ジェヨンが、無名のキックボクサーと対戦。キムの知名度を上げようとしたマッチアップは、皮肉にも彼の判定負けという結果に終わり、多くのファンが興ざめしてしまった。もちろん、その要因は勝敗以前の部分にあることを、韓国総合格闘技界をリードしていくべきスピリットMC関係者は肝に銘じてもらいたいものである。

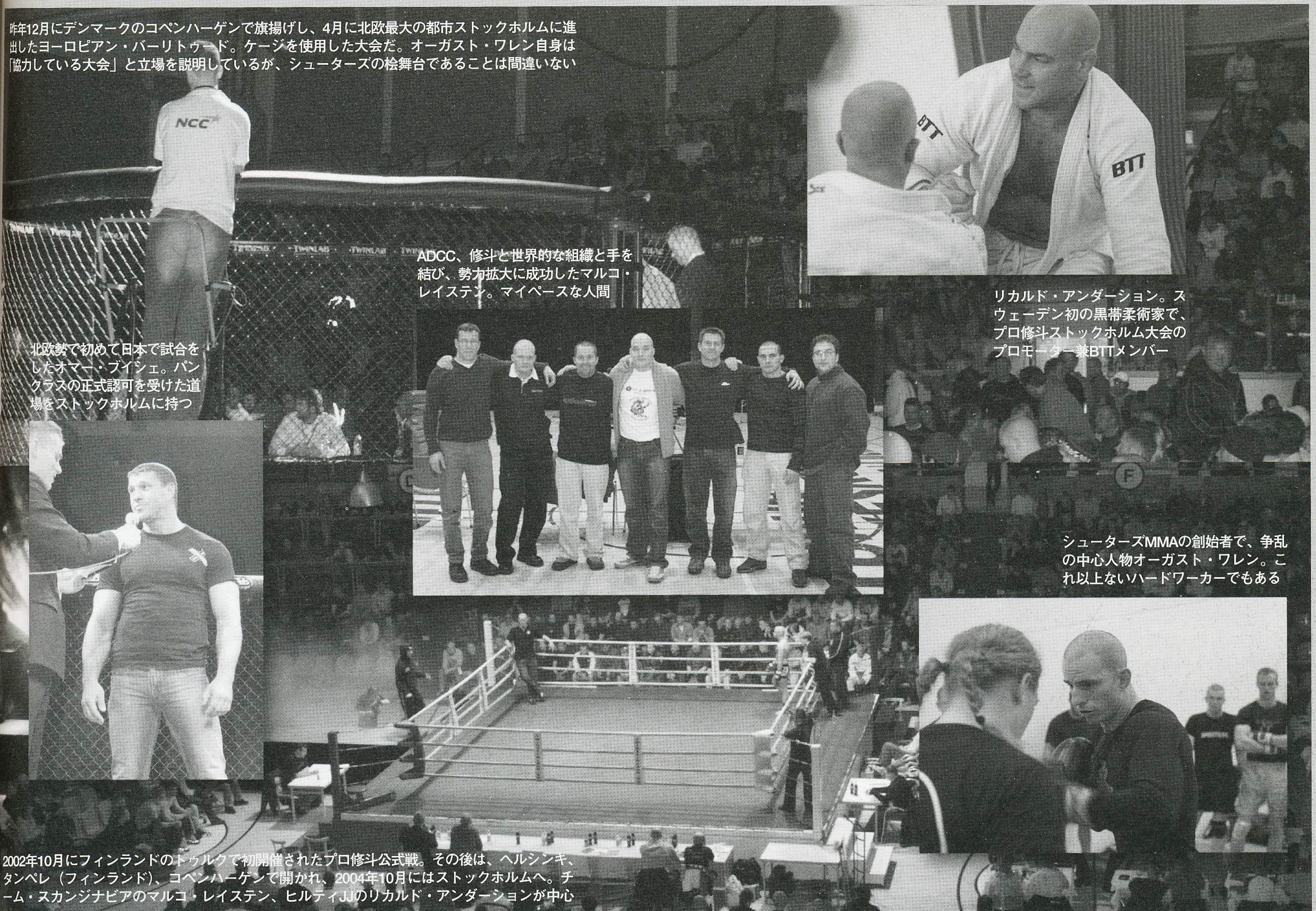
最後に大規模大会の行く末はというと、昨年、世界の有名選手を集めた「グラジエーターFC」が、2005年3月に第2回大会開催を発表し、来夏にはCMA誠ジムの諸岡秀克会長の協力の下、日本進出（札幌大会）が予定されているという。

その諸岡会長は、韓国総合団体の運営陣を「目指しているのはプロ大会、でも実際やっていることはアマチュア」と指摘する。日本は第2期UWFから、20年以上の歳月を経て世界最大の総合格闘技大国となった。

それに比べると韓国はまだ3年足らずである。韓国内の選手層も厚くなりつつある今、もう一度大会プロモーターは総合格闘技の立ち位置を考える必要があるだろう。

03年に起こった「ブーム」は、実際のところ「格闘技ブーム」ではなく、「格闘技興行ブーム」という砂上の楼閣であった。

今、韓国総合格闘技界に求められているのは、「地盤固め」である。この時期を逸してしまえば、いずれ楼閣は崩壊し空中へ消え去ってしまう。先の見えない混迷の韓国総合格闘技界の明日はどっちだ！



昨年12月にデンマークのコペンハーゲンで旗揚げし、4月に北欧最大の都市ストックホルムに進出したヨーロピアン・バーリトゥード。ケージを使用した大会だ。オーガスト・ワレン自身は「協力している大会」と立場を説明しているが、シューターズの検舞台であることは間違いない

ADCC、修斗と世界的な組織と手を結び、勢力拡大に成功したマルコ・レイステン。マイペースな人間

リカルド・アンダーション。スウェーデン初の黒帯柔術家で、プロ修斗ストックホルム大会のプロモーター兼BTTメンバー

北欧勢で初めて日本で試合をしたオマー・ブイシェ。パンクラスの正式認可を受けた道場をストックホルムに持つ

シューターズMMAの創始者で、争乱の中心人物オーガスト・ワレン。これ以上ないハードワーカーでもある

2002年10月にフィンランドのトゥルクで初開催されたプロ修斗公式戦。その後は、ヘルシンキ、タンペレ（フィンランド）、コペンハーゲンで開かれ、2004年10月にはストックホルムへ。チーム・スカンジナビアのマルコ・レイステン、ヒルティJJのリカルド・アンダーションが中心

確執&興行戦争は北欧発展の障害？　それとも起爆剤？

an Obstruction or a Trigger to Development ???

北欧諸国の強さは、もう格闘技ファンの間では十分に浸透していることだろう。
ユノラフ・エイネモ、ヨアキム・ハンセンという世界レベルのファイターを輩出したこの国は、
10年近いMMAの歴史を持っている。プロ興行も行われるようになり、競技人口も増加の一途を辿っている。
その一方で、この業界にありがちな政治的な諍いがチラホラ見え隠れするようになってきた。
最大の因縁は北欧総合四大始祖のオーガスト・ワレンとオマー・ブイシェの確執。
そしてワレンのEVT、もう一人の始祖リカルド・アンダーションがチーム・スカンジナヴィアの
マルコ・レイステンとともにプロ修斗をオーガナイズしたことで、興行戦争もおきようとしている。
果たして、雑誌業界も呑み込んだこれらの確執は北欧発展の障害になるのか、
それとも競争原理こそ大いなる成長の要因となるのか。

北欧――、スカンジナビアの総合格闘技界が可能性の塊だということは、もう周知の事実だろう。いまさらながら、新興MMA国家の一つに数えられることすら、嫌がる選手、この地域をずっと注目してきたファンもいることだろう。

オマー・ブイシェがパンクラスのレギュラー外国人選手となり、プロ修斗がスカンジナビアで開催されるようになったのを機にヨアキム・ハンセンが来日（その8ヶ月前に彼の代役でヤニ・ラックスも修斗に来日している）。あれよあれよという間に佐藤ルミナ、五味隆典を下し、初防衛戦でビトー・シャオリン・ヒベイロに敗れたものの修斗世界ウェルター級チャンピオンにもなってしまった。

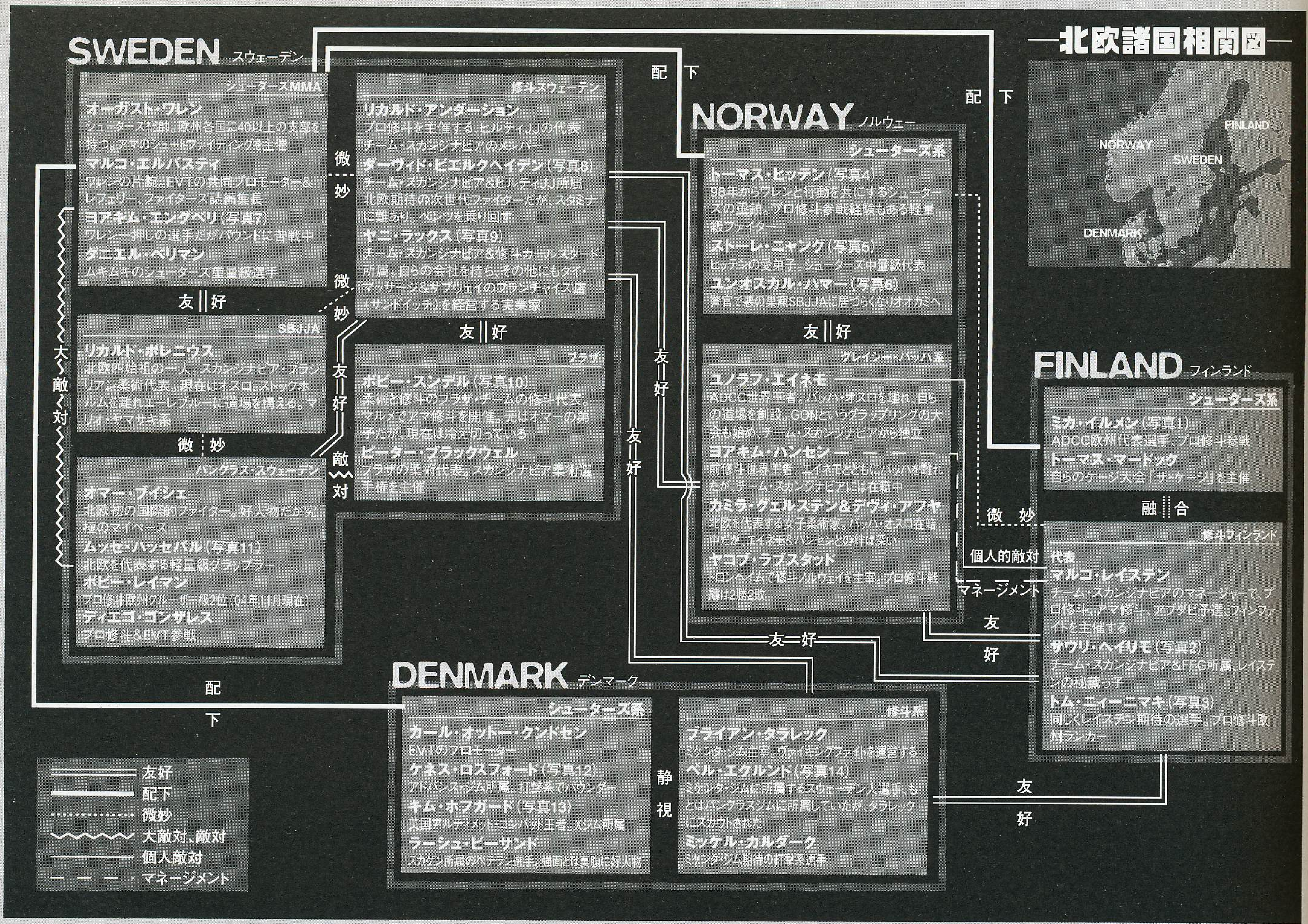
その間、アブダビコンバット世界戦手権でユノラフ・エイネモが99kg級で優勝し、スカンジナビアの力を2003年の時点で、ガッチリと見せつけている。

修斗やADCCという通の世界にはまり込んだ部分で、名を馳せた北欧勢。

さらに彼らとは別個にシューターズMMAという組織で育まれた選手たちが、03年12月にコペンハーゲンで行われた北欧ケージ処女興行となったヨーロピアン・バーリトゥード（EVT）で、大量にプロデビュー。欧州レベルでは、その質の高さが評判になっている。

04年に入ると、エイネモの負傷、ハンセンの相次ぐビッグマッチ出場機会の喪失により、やや右肩上がりの角度が緩やかになったという印象もあるが、10月にはストックホルムでスウェーデン初のプロ修斗興行が行われ、そのわずか1週間前には同じストックホルムで、EVTが二度目の大会を開催しており、なんと同地で興行戦争なる言葉まで聞かれてしまった。

ハンセン&エイネモの二人による一過性の話題に終わらず、興行戦争が起きようが着々と選手が成長し、質・量とも上昇し続けているのは、スカンジナビアにはしっかりとした歴史（北欧四始祖と呼ばれるリカルド・ボレニウス、リカルド・アンダーション、オーガスト・ワレン、オマー・ブイシェの物語）があるからだ。



Part 2. Scandinavia

Discover MMA Rising Nations

by Manabu TAKASHIMA



ただ、歴史という名のベーシックだけでは、選手も業界も育つことはない。

そこに競争原理が働かなければ、選手も強くならないし、興行を行うモチベーションも起こらない。

我こそは北欧のパイオニアだという自負があるからこそ、その競争原理、確執、遺恨は生まれてくる。先に挙げた、4人の始祖の人間関係の綾が、付属してくる全ての問題を巻き起こす。

生みの苦しみという言葉があるが、96年に始まったアンダーション＆ボレニウスのブラジル修行と帰国後の柔術の発展、そしてワレン＆ブイシェ＝裸派の渡米と総合系の基礎つくり。この間の出来事は、まさに北欧MMA界が誕生するための生みの苦しみだったといえるだろう。

ただ、生みの苦しみを経験すれば、全てが丸く収まるだろうか？　子供は勝手に大きくなってくれるのだろうか？

そんなはずはない。親の身になってみれば、確かに生んだという幸福、子育ての幸せを日々感じているに違いないが、その裏で子育ての苦悩というものを誰もが経験している。

難産の末、ようやく生まれたスカンジナビアの総合格闘技。今は育てる時期を迎えたのだ。だからこそ、生みの苦しみの時期とは違う、それぞれの問題、葛藤が存在し、人間関係がこじれるのも当然の話だ。

北欧格闘技界の確執の中心は、シューターズMMA総師オーガスト・ワレンがいつも座っているといっても過言でない。

シューターズ・シュートファイティングを商標登録したことによって、旧友オマー・ブイシェとの冷え切った関係が、もう5年以上も続いている。

ワレンはシューターズという組織を軌道に乗せるために、様々な策を講じ、今では欧州8カ国にまたがるシューターズのネットワークを確立した。

そんな彼のことを格闘技畑の人間はどうしても、「鼻持ちならないビジネスマン」という風に捉えがちだ。

ワレンは道場の規模拡大だけでなく、それにともないアマチュア大会の定期開催、選手の成長を待って、非常に近い筋にバーリトゥード大会を開かせ、また教え子が格闘技雑誌を買収し、雑誌創りにも関係している。本人がいくら否定しようが、同じオフィス内にシューターズの事務室とファイターズ誌の編集部が混在していれば、第三者に癒着と見えても、仕方がないことだ。

ただ、それもこれも、シューターズの名前を挙げるため。ワレンは、他の始祖達には見られない働きを続けてきた。

それがまた、「格闘技界のためじゃない。自分のためだ」という批判を生む。

対して、ワレンが事もなげに「自分のためじゃない。シューターズのためだ。シューターズは自分にとって、家族も同然。スカンジナビアの格闘技界で、私のように頭を巡らせ、ハードワークを続けてきた人間がいるだろうか？　私が私の努力でここまでやってきたんだ。その利益をシューターズで分配して、何が悪い」と言ってしまう。

言っていることは正しい。だが、この言いようでは、敵を増やし続けていくこともまた、想像に難くない。

ワレンのことを良く言わない北欧の格闘技関係者は、実は彼のことをよく知らない人間が多い。だが、知らない人間に良く思われないアトモスファをワレンとシューターズは持ってしまっている。

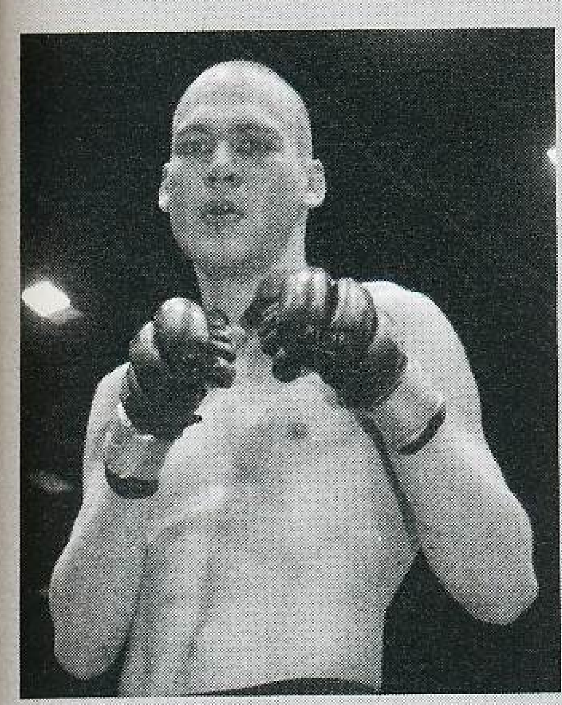
だからこそ、ファイトライフ誌というシューターズの活動を無視した専門誌まで登場するのだろう。この雑誌が、反シューターズであるのは、売り上げを伸ばすため。そのために、シューターズのコンペティターとなる人物、組織を取り上げる。

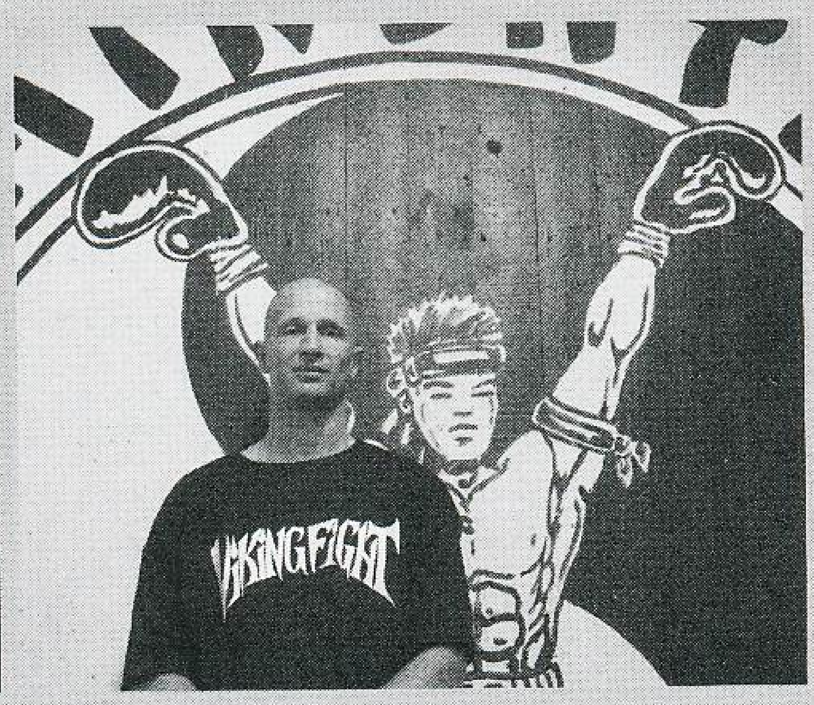
創刊号の表紙を飾ったブイシェが、ワレンのことについてしゃべりすぎた。

彼の中に、ワレンを快く思わっていない部分は確かに有る。ただ、EVTとプロ修斗を彼らの関係と同一線上に置いてしまうのは……、問題だ。

ストックホルムで、プロ修斗を開いたアンダーションは、数週間だけ一緒に練習したワレンのことを口にすることはない。ただ単に成長してきた選手に活躍の場を与えるために、チーム・スカンジナビアのマネージャー＝マルコ・レイステンの言を聞き入れ、興行に手を出したに過ぎない。

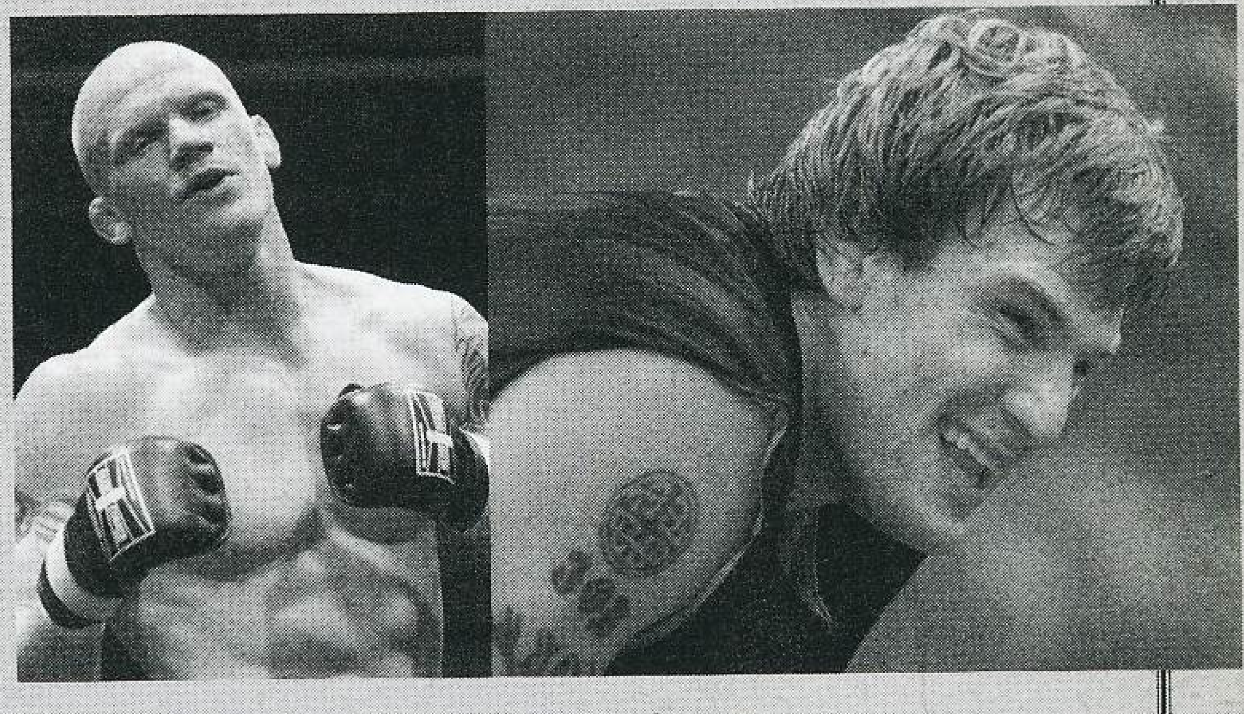
Part 2.
Scandinavia
Discover MMA Rising Nations
by Manabu TAKASHIMA


ワレンは弟子というが、アマ＆プロ修斗に出て、自らの大会「ザ・ケージ」をヘルシンキで主催したトーマス・マードック。カナダ系フィンランド人でインテリ。


コペンハーゲン郊外にミケンタ・ジムを持つブライアン・タラレック。ヴァイキングファイト内で修斗公式戦を行うものの、あまり修斗について詳しくない。



シューターズMMAの総本山ルプスと同じ建物内に編集部を持ち、そこもシューターズの事務室とシェアというファイター誌と、ブイシェを表紙にして「ワレン口撃」を行ったファイトライフ誌。


北欧の扉を開けたユノラフ・エイネモとヨアキム・ハンセン。ともに最も脆弱な地盤のノルウェイ人というのがミソ。爽やかな笑顔が魅力的だが実は神経質なエイネモと、強面で天下泰平的なハンセン（本当はおぼっちゃん）。

出稽古厳禁のヒルティJJ。パンクラスの生徒は出入り禁止だが、ボレニウスの教え子やチーム・スカンジナビアの選手はOKになることも。ワレンほど分かりやすくないが、ヒルティもまた、何かしらの雰囲気を醸し出していることは否定できない。

ワレンがシューターズMMAの教え子たちに、更なるチャンスを与えるための経験の場所としてEVTを始めたように、チーム・スカンジナビア勢がプロ修斗を開催するのも、日本をターゲットとした所属選手のレピュテーション・アップの場にすぎない。ワレンだけでない、誰もが自らのグループのことを考えている。

組織の頭領として、シューターズMMAという名の自分の城の増築に巧みだったのがワレンで、個々の家の集合体として修斗村を作ったのが、チーム・スカンジナビア。

ブイシェは他人の城には住みたくなく、共同生活も好きでない。流浪民のごとく、気ままな生活を送っている（と、教え子の談話あり）。そんなブイシェについていけず、ボビー・スンデルやペル・エクルンドは彼の下を離れて行った。

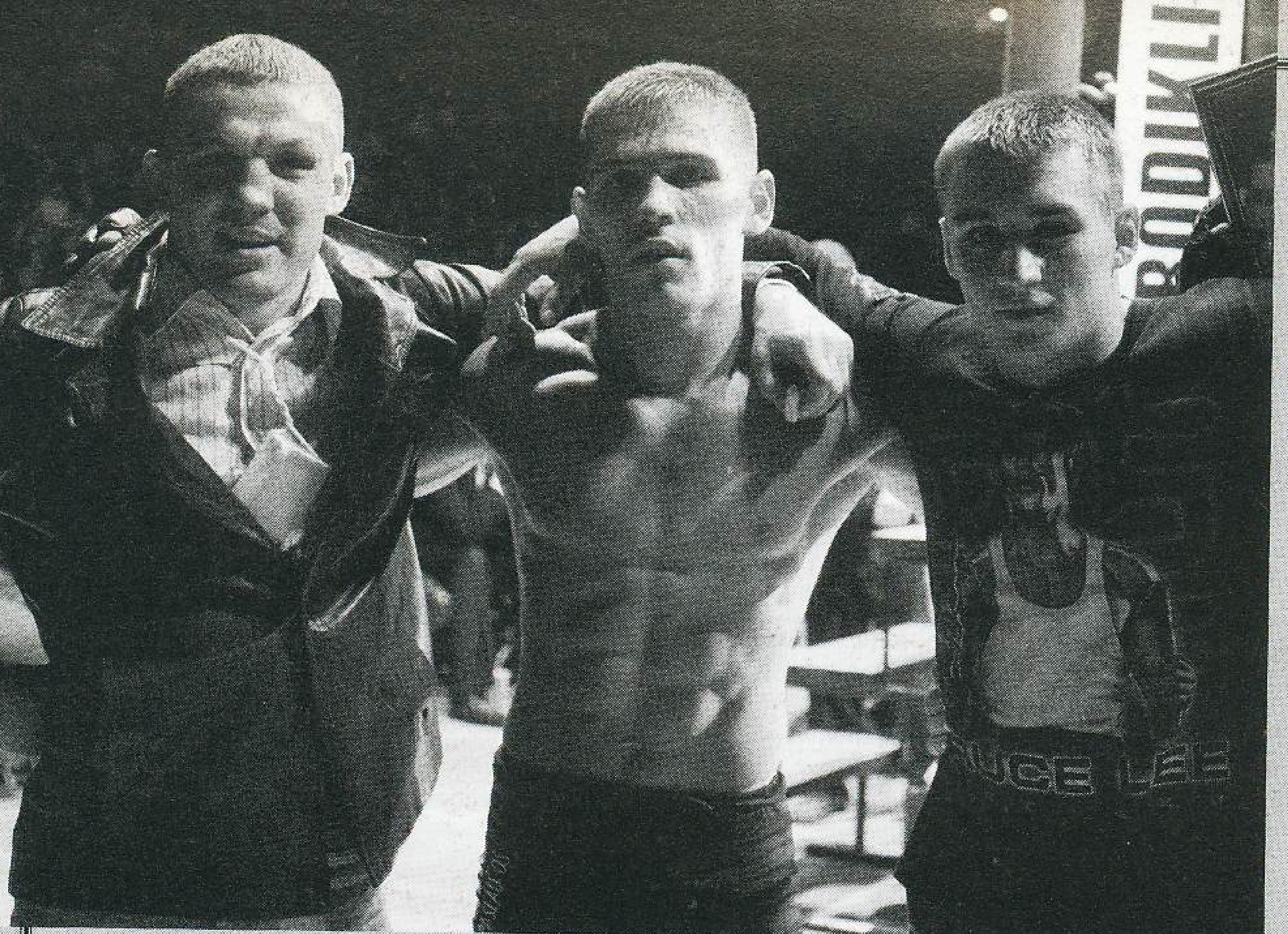
シューターズMMA＝ワレンは選手育成、大会開催、雑誌創り、全てを自らの手でまかなう。シューターズMMA＝ワレンと表現できるのが、この組織とこの人物を端的に表しているといえるだろう。

一方、「修斗」、「チーム・スカンジナビア」、「オマー」、「ファイトライフ誌」は、「＝」で結びつけることができない。

ただ、前ページの相関図を見てもらうと分かるように、一言で北欧といっても、面倒な問題があるのはスウェーデン国内だけ。

ノルウェーは交流が盛んで、フィンランドはワレンが「シュートファイティング」といったジムも、レイステンによれば「修斗」になる。要はどちらでもあるし、どっちでもないということだ。

ユダヤの格言で、「人間、苦労が終わると死を迎える」という言い回しがある。生まれてきたら最後、ずっと苦労はつきもの。確執、遺恨、大いに結構、勝ち上がったものが、北欧の覇者になる！



5周年記念大会を見て、BUSHIDO勢が強くなる理由

世界中のどこよりも、経験が積めるリトアニア

**鋭い打撃、からっきしの寝技。
そんなリトアニア勢の評判はもう、過去のもの。
まだまだ日本ではかませ犬のような印象を受ける
Bushidoファイターたちだが、彼らが目ざましい活躍を見せ、
ポーランド、ベラルーシを含んだバルチック諸国全体が
底上げされる日は、すぐそこにまで来ている**

ティターナス襲撃王たち。左からコマス、スクリアウディス、モリカビュチス。まだ総合格闘家として穴は多いが、そのファイトから強さ、怖さが伝わっている本物のファイター



04年11月20日に行われたブシドー設立5周年大会は、シーメンス・アリーナで大々的に行われ、5200人の観客が集まった

2004年11月20日、リトアニアの首都ビリニュスで、ブシドー旗揚げ5周年記念大会が行われた。

新装間もないシーメンス・アリーナの外気温計は、マイナス9度を指している。寒いというよりも、痛いという表現方法が相応しい、（温暖化の影響を受ける）極寒の地で、総合格闘技が熱く、熱く盛り上がっている。地元有名バスケットボール・チームの本拠地シーメンス・アリーナは、客席を全面開放すると収容人員1万6千人を誇る巨大多目的ホール。

セットバックで一面を潰し、2階席の大部分に暗幕が張られた会場には、ブシドー代表ドナタス・シマナイティス氏の目算より、やや少なめの5200人の観客が訪れていた。

「バスケットに次ぎ、サッカーを凌駕している」ブシドー人気だが、ワールド・カップ欧州予選で、この国は強豪スペインを打ち破る位置につけており、サッカー人気が少し盛り返しつつあるようだ。

それでも5千人以上の観客というのは、世界のMMA界に誇れる数字であることは間違いない。日本でもPRIDEとK-1以外で、チケット販売実数が5千を上回るプロモーションが、どれだけ存在しているだろうか。

04年の秋から一番組を加え、ブシドー中継は週に4度も実施されている状況下で、これだけの観客動員を誇る事実を知れば、誰もが羨ましく思うに違いない。

まだ、世界的レベルで見て、リトアニアの選手たちは、十分な力を持っているとは言いがたいことは認めるしかない。

ただ、これだけの活動基盤があれば、どんな国の選手と比較しても、実戦経験値を上げるという意味で、最大のアドバンテージを握っていると言えるだろう。

加えて、EU入りを果したとはいえ、経済状態が、旧西側諸国と比較し、まだまだ厳しい状況にあることも、この国の選手の強化に有利な状況を生み出している。貧富の差が広がる一方のリトアニアの平均月収は日本円にして、3万円に満たないという。

シマナイティス氏の辣腕マネージメントによって、日本行きの機会を手にした場合、日本人選手が「OLの月給だ」と嘆くファイトマネーでも、平均年収の半分近くになる。

つまり、彼らは1度や2度、日本で戦うと、母国に帰れば練習に専念できるという生活環境を手にしている。

ファイターとして生き、他の仕事を持つ必要がないのである。

ほんの2年前に三角絞めで敗れた、この国のトップ選手は「あんな卑怯な技は見たこともなかった」と、MMAで戦う基礎知識すら持っていないことを露呈していた。それが今や、レミギウス・モリカビュチスが（オランダの無名選手相手とはいえ）、その三角絞めで一本勝ちを収めるようになったのである。

レミーガが、ヴァンダムと呼ぶ相棒ダリウス・スクリアウディティスは、ZSTの名勝負製造機・所英男と対戦し、（ロープ掴みの反則が見逃されたとはいえ）足関節を凌ぎ、タックルを潰して、最大の持ち味であるパンチ、ヒザ、ローキックを叩き込み続けた。

柔術的寝技の知識および、テイクダウンの防御法の知識がゼロに近かった打撃系選手は、膨大な伸びしろを残していた分、今、急激に力を付けてきている。

普段は各々が、それぞれのジムで練習しているが、定期的に湖水地帯のサウナ&ジャグジー付のコテージをスポンサーから提供され、トップ選手の合同トレーニングも行われている。

そして、冬季は月いち間隔で行われる興行で、実戦トレを積み、日本に遠征すると誰もが羨むような現金を手にして、国に戻ってくる。

MMAに関わる国は、各々の国がそれぞれのお国事情を抱えている。そんななかで、ファイターが生活を営む国にあって、アベレージ以上の経済状況を作り出せるか否かが、その後の格闘家人生を大きく左右することは疑いようがない。

リトアニアの国内トップレベルの選手は、ブシドーの庇護の下、その条件を楽々とクリアしている。リトアニアが強くなれば、今は彼らの対戦相手としての価値しか持たれていないラトヴィア、ポーランド、ベラルーシの選手たちの意識にも、変化が起こり、より強くなることは自明の理だ。以上の理由により、バルチック諸国はすぐにでも、総合先進国に肩を並べる存在になると予想する次第である。

BUSHIDOが誇る、世界に出ていくファイターたち



レミギウス・モリカビュチス／5周年大会では三角絞めで勝利。総合力アップをアピール



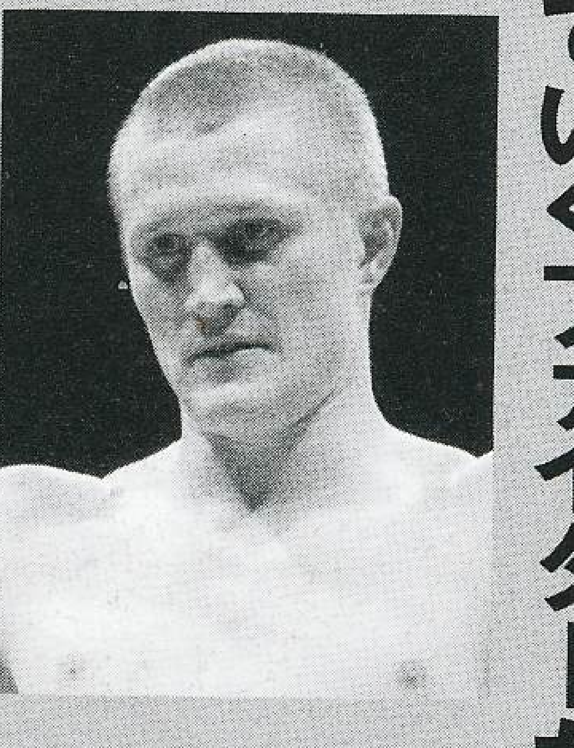
エギリウス・ヴァラビーチェス／ブシドー重量級のエース。タフ・ファイトが必要か



ケッティス・スミルノヴァス／このところ2連敗。1Rが強くて2R失速というケースが多い



ダリウス・スクリアウディティス／ブシドー勢の中で一番のストライカー。パウンドも見たい



ペトラス・モリカビュチス／シューマッハー顔の若手ナンバーワン重量級ファイター



ラミュナス・コマス／期待の中量級。この選手の場合はチューナップ・ファイトが必要か

Part 3.
Baltic States
by Manabu TAKASHIMA

人口密度3人の国から生まれる、ダイヤの原石たち

波乱万丈、小さなファイティング・コミュニティーの悲喜こもごも



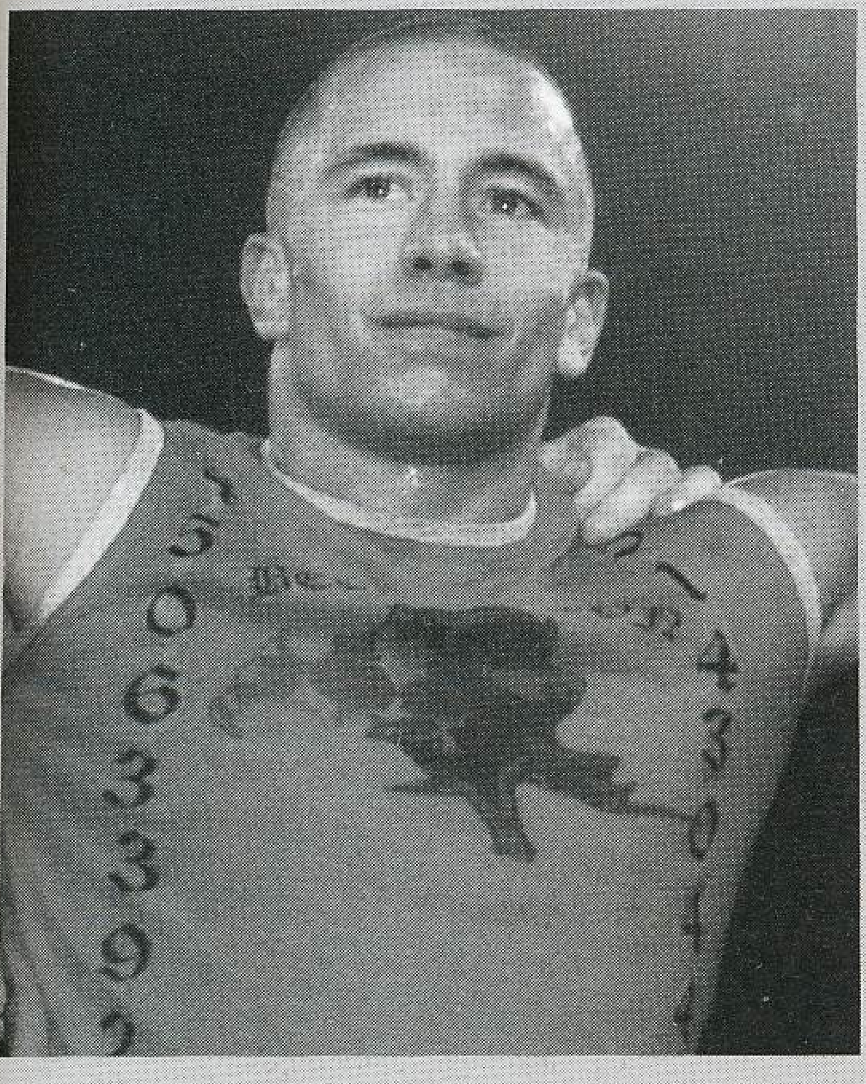
米国2億8千万。ブラジル1億6千万。ロシア1億8千万。日本 1億2千万強。総合格闘技先進国の人口と比較して、カナダのそれは 3200万弱とあまりにも少ない。ちなみに国土は約997万平方キロメートル。ロシアの1700万に次ぐ数字で、米国の937万、ブラジルの855万を上回っており、日本の37万とは比較にならない大きさを誇っている。広大な国土と、少ない人口。それでいて、スポーツは盛んで、MMA界でも次々と新たな人材を送り出しているカナダ。まだまだ目立った存在はいないかもしれないが、波乱に満ちた短い歴史を持つカナダの総合格闘技界は、これからが注目の国であることは間違いない。世界基準にあるカナディアン・ファイターとともに、この広大な国土を持つ、小さな小さなファイティング・コミュニティの歴史、現状をここで紹介したい。

Discover MMA Rising Nations Part 4.

Canada

by Arnold "Sushiboy" Lim

アーノルド・"スシボーイ"・リム＝文・取材・写真
text & coverage & photo by Arnold "Sushiboy"Lim



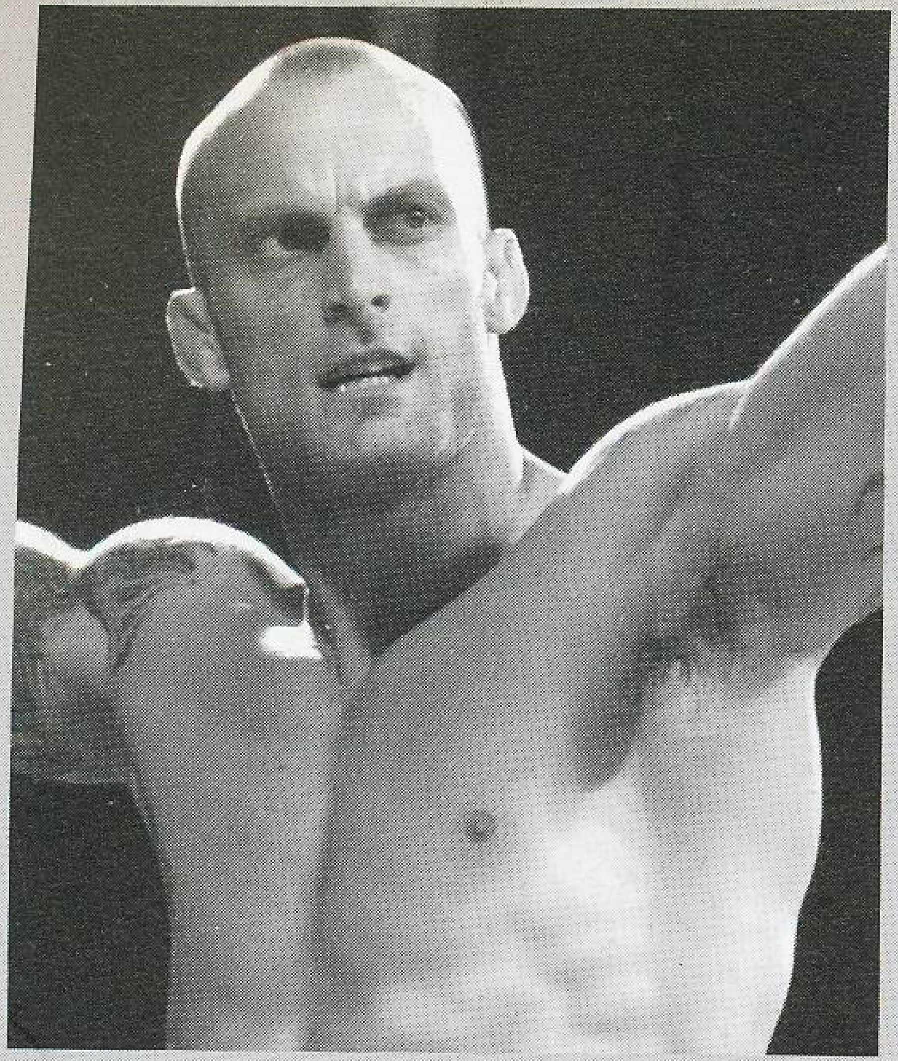
Georges St.Pierre
ジョルジュ・サンピエール

①トリスター・ジム②7戦6勝1敗③1981年5月19日④77kg前後

すでにUFC世界ウェルター級王座に挑戦経験がある、カナダの出世頭。もともとは極真空手を習っていたが、師匠を肺癌で亡くしたのを気にMMAに転進。TKOカナディアン・ウェルター級チャンピオンとなり、UFC進出のきっかけをつかんだ。モントリオールで柔術アカデミーを開いたBTTメンバーのファービオ・オランダとも親交があり、寝技も熟知している。とはいっても、サンピエールの最大の魅力は素晴らしい当て勘を持つ打撃。中段後ろ回し蹴りを食らったマット・ヒューズが、思わずもんどりうって後方に倒れこんでしまったほど。穴の見つからないファイターで、小さくまとまらない限り、どんどん強くなるに違いない世界レベルの選手。



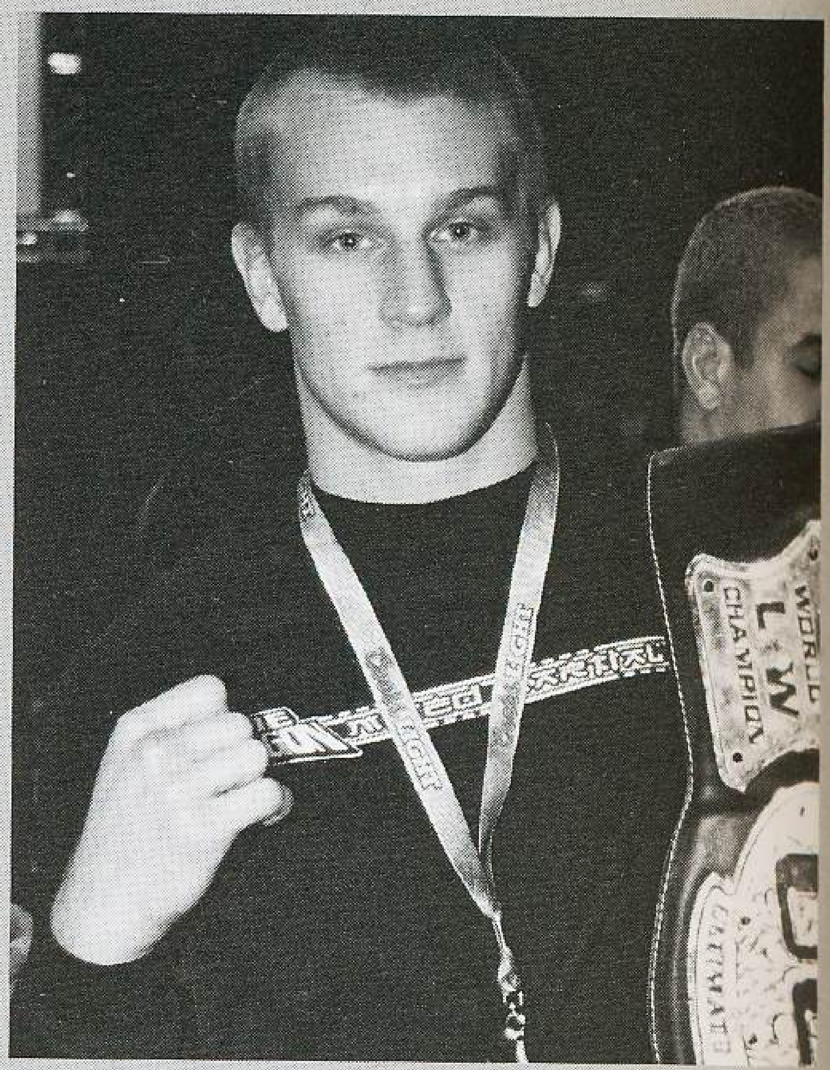
UCC、TKOと私財を投げ打ってカナダMMA界の発展に貢献しているステファン・パーティ氏。彼なくして、カナダの総合格闘技界は語ることができない。



Justin Bruckmann
ジャスティン・ブルックマン

①シャウ・フランコ②10戦７勝3敗③ 974年7月23日④70kg前後

04年11月にプロ修斗に参戦し、強烈なスタンドのパンチ、パウンドと以外にも繊細な寝技の連携で福本よう一を下し、日本デビュー戦を飾っている。元は柔道家で足払い系のテイクダウンも得意。83kg時代にデイビッド・ロワゾとは１勝１敗の五分の戦績を残し、77kgではサンピエールに遅れをとっている。70kg転向以降は負け知らずの快進撃を続けており、カナダでプロ修斗が開催されているのでレギュラーになる可能性も高い。



John Alessio
ジョン・アレッシオ

①ミレニア柔術②21戦14勝7敗③ 1979年7月５日④77kg前後

パンクラス来日経験もあるアレッシオは、カリフォルニアをベースにしているカナダ人ファイター。長く打撃系のシャークタンクに所属していたが、ミレニア柔術に移籍し才能を開花させた。前ＴＫＯカナディアン・ウェルター級王者で、KOTCの王者だったこともある。ＵＦＣ参戦は単発に終わったが、RJWの光岡映二に勝利しており、狙いはＰＲＩＤＥ参戦。04年11月にカリフォルニアで行われたＰＲＩＤＥオーディションにも参加している。

人口密度がたった3人の国、カナダ（ちなみに日本は３４０人）。

初めて、この国で本格的なＭＭＡの大会が開催されたのは、１９９６年4月26日のことだ。大衆的なＵＦＣと比較して、階級制を用い、地味なキャラでも実力者たちをプッシュして何げに通の間で評価が高かったエクストリーム・ファイティングが、カナダ全土でＭＭＡが許されていない時代に、ケベック州に乗り込んできた。

法的に許されていないのに、なぜ、大会開催が可能になったのか。それは開催地が、カナダ政府から自治の許しを得ているインディアン（ネイティブ・カナディアン）テリトリーのカウグナワガ地区だったせいだ。

ハウフ・グレイシー、ジョン・ルイス、イゴール・ジノビエフ、カーロス・ニュートン、コナン・シウヴェイラらが参加した大規模な大会の開催に、カナダ政府は必要以上に介入してきた。

まず、カウグナワガ地区の外で、大会出場予定だったオランダ人オーランド・ウィットは「カナダの法律で許されていないファイトを行うのであれば、試合後にインディアン自治区から出てきた時点で逮捕する」と詰め寄られ、試合をキャンセル。

ウィットと警察のやり取りを聞いても、関係者の多くは、まさか本気でやることはないだろうと高をくくっていたが、大会終了後、モントリオールにあった選手＆関係者の宿泊先のホテルに、警察官が出動し、ジノビエフ、コナン、スティーブ・ネルソンら6人が収監された。一度は警察の包囲網を抜けたマッチメイカーのジョン・ペレッティは、自ら警察に出頭し、「我々は法を犯していない」と証言。収監された者には大会を主催したバトルケード社が保釈金を支払い釈放となったが、後味の悪さはいつまでも消えなかった。

この後、カナダ政府はＭＭＡ開催に関して、州政府の意思に任せる方針をとるようになる。エクストリーム・ファイティング開催から8年経った今も、カナダの半数近くの人口を誇るオンタリオ州では、ＭＭＡの開催は認められていないままだ。

ケベック州でＭＭＡ開催が認められるようになったのは、常識では考えられない行動力を発揮した一人の男が、モントリオールに現れたからだ。

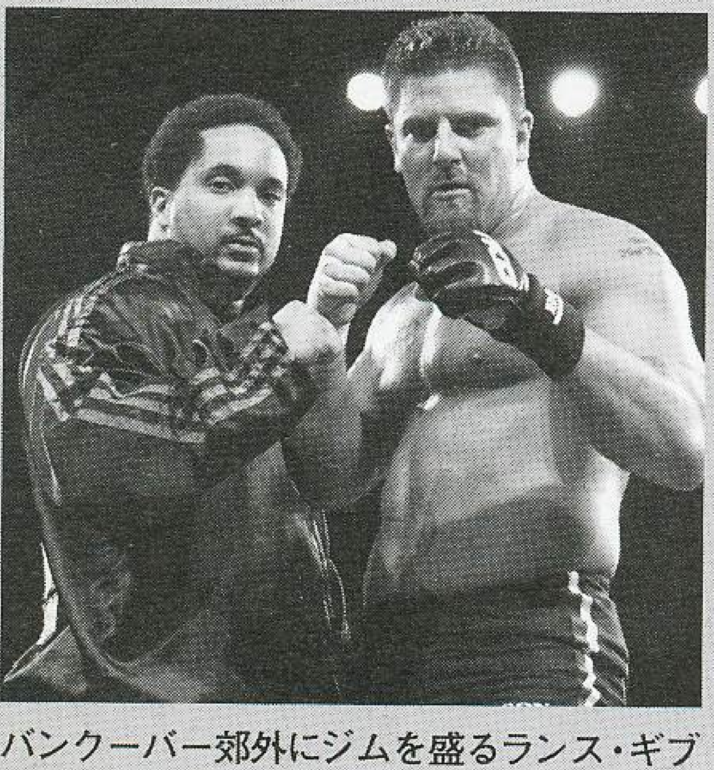
カナダの大手遠距離通信会社「テレグローブ」に勤めるエリート、ステファン・パーティは大のＭＭＡファンで、自らのコネクションを最大に活かし、まずは休止されていたＵＦＣ中継の再開に関し、ロビー活動を開始する。

これに成功したパーティは、同中継のフランス語解説者の座を手にし、カナダのＭＭＡファンの間で、その名を浸透させていった。そんな彼にコンタクトをとったのは、米国のネイティブ・アメリカン・テリトリーで地道にＭＭＡ興行を行っているインターナショナル・ファイティング・チャンピオンシップ（ＩＦＣ）の代表マイク・トーマスだった。

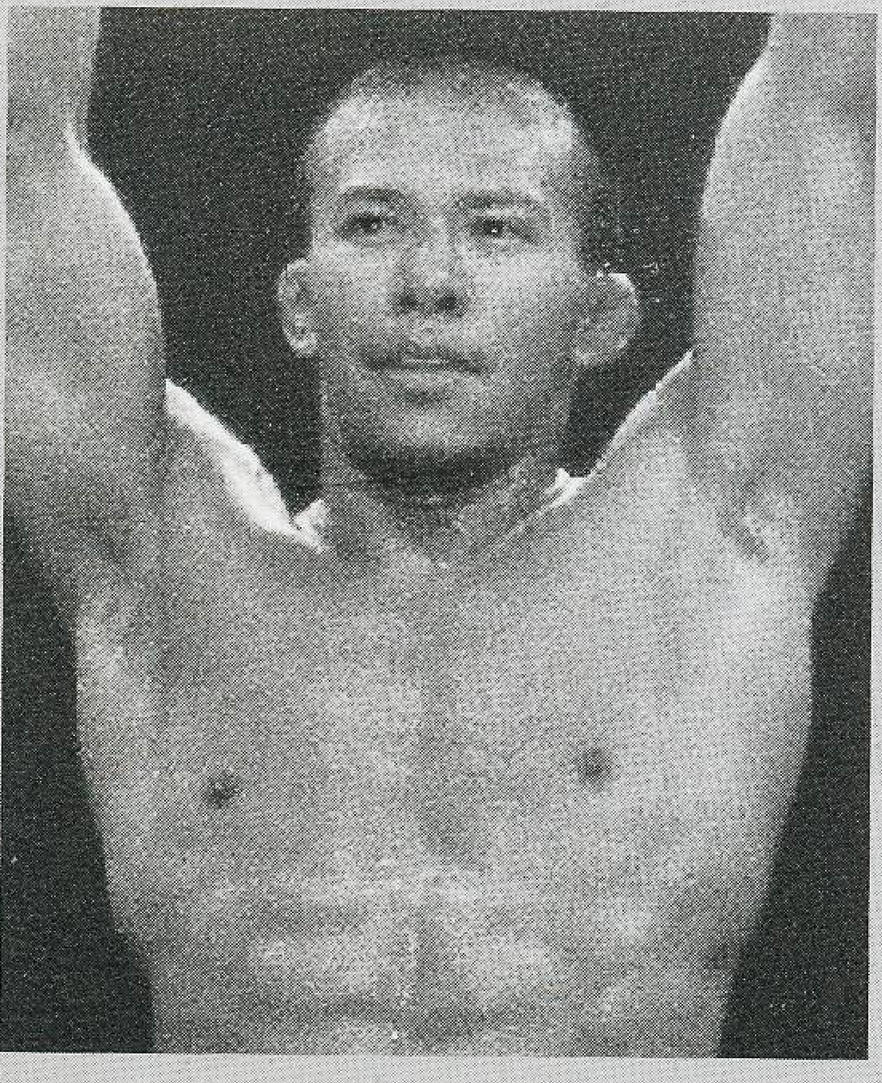
トーマスは、再びケベック州カウグナワガ地区でＭＭＡを開こうと、パーティを週給４００ドルで雇うようになった。

テレグローブ社から週給１３００ドルを得ていたパーティは、この条件を飲み、ＩＦＣのカナダ開催に奮闘する。息子の信じられない行動を知った実母は、あきれ果てて数ヵ月間、パーティと口をきかなくなってしまったそうだ。

１９９８年5月20日、週給４００ドルの男の努力が実り、ケベック州政府がオープンハンドのパンクラス・スタイルながら、総合格闘技の開催を認め、ＩＦＣケベック大会がスタートを切った。２０００年1月22日までに、5度の大会開催に尽くしたパーティは、この頃からローカルファイターの発掘という役目を自らに課し、スティーブ・ビクノー、ステファン・ポドヴァンな



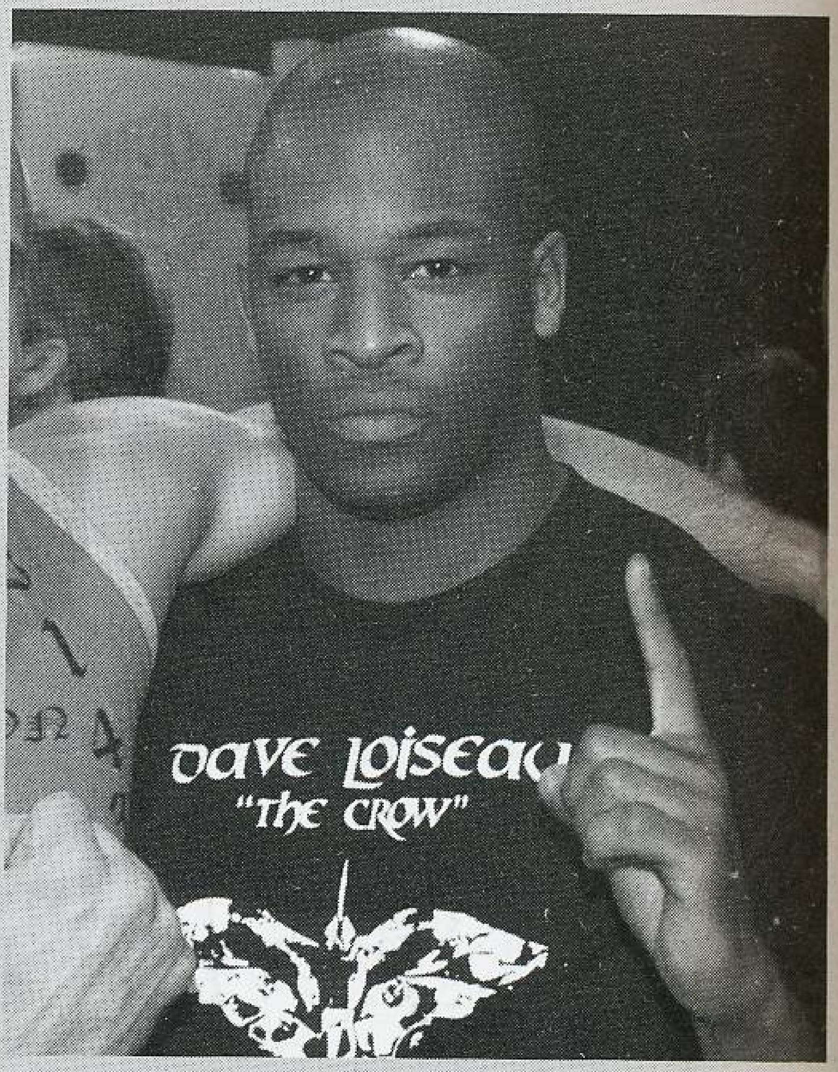
バンクーバー郊外にジムを盛るランス・ギブソン（左）。プロ修斗に来日経験がある、UFCベテラン。AMCパンクレイションのマット・ヒュームを師事して、もう10年の月日が経過した。



Ivan Menjivar
イヴァン・メンジバー

①トリスター・ジム②17戦14勝３敗③ 1982年5月30日④65kg前後

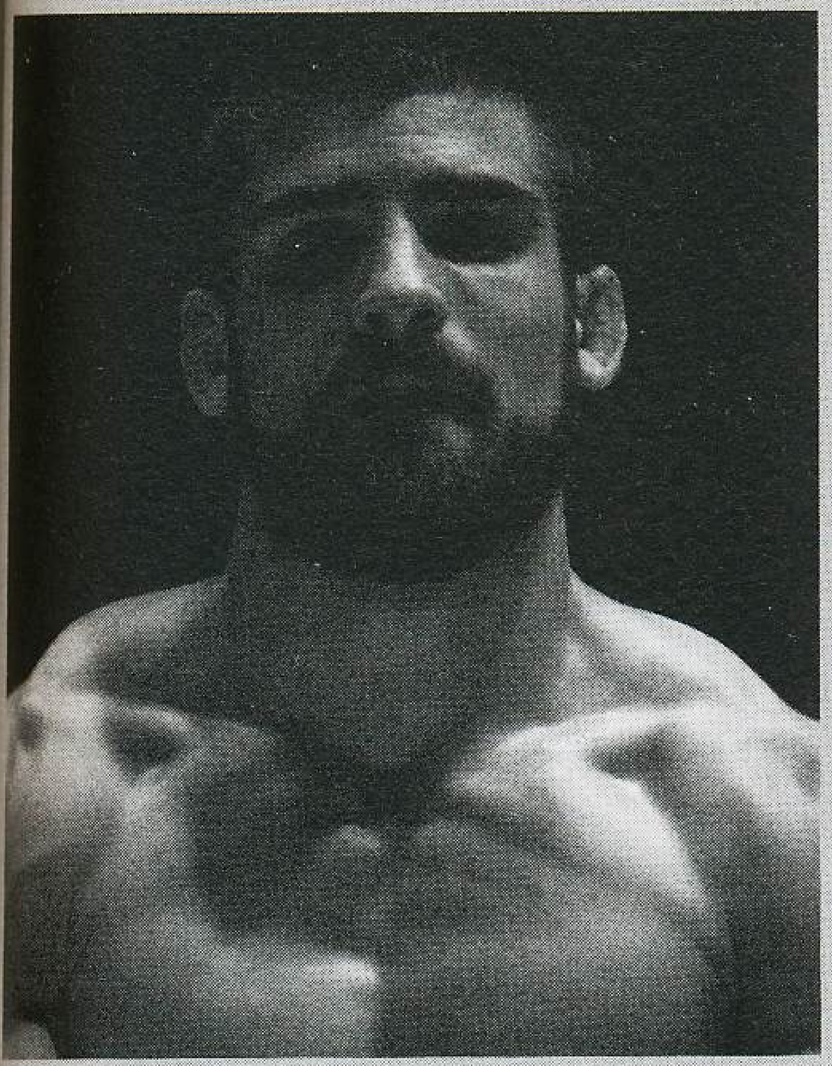
意外にも強豪揃いのカナダ軽量級勢にあって、期待度ナンバーワン・ファイター。以前は対戦相手不足で77kgで戦ったこともあり、その後もベストウェイトよりも５kg以上重い体重で戦ったビトー・シャオリン、ＵＦＣのマット・セラ戦を経験。敗れはしたものの強豪相手に判定に持ち込み評価を上げている。ジェフ・カラン、ライアン・アッカーマンには勝利しているプライド・オブ・エルサルバドルの早期来日が実現することを期待したいところだ。



David Loiseau
デイビッド・ロワゾ

①トリスター・ジム②15戦11勝４敗③ 1979年12月17日④84kg前後

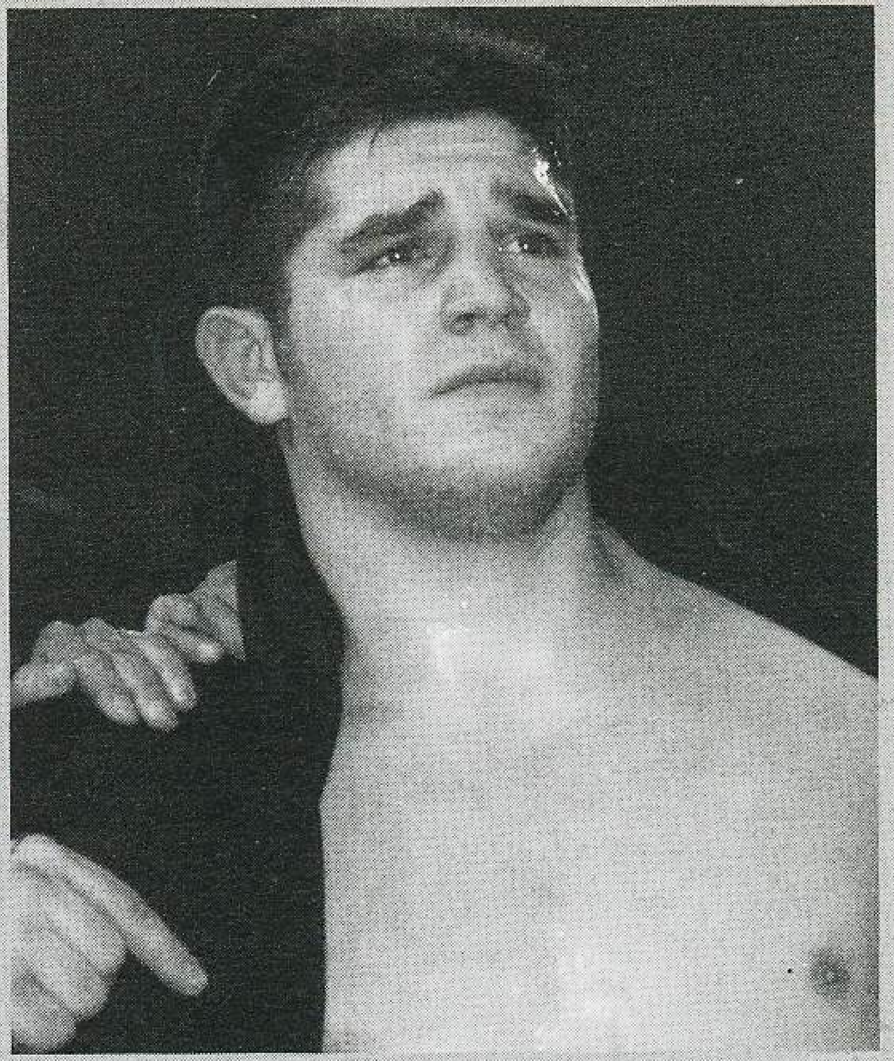
ザ・クロウの異名を持つロワゾの最大の武器は、スピーディーなパンチ攻撃。サンピエールと同じトリスター・ジムに所属し、彼もまたＵＣＣ、ＴＫＯで育ちカナディアン・ミドル級王座に就いている。ステファン・パーティのマネージメントの下、ＵＦＣにも進出したがマーク・ウィアーを破ったものの、ホルヘ・リベラに敗れ定期出場はならなかった。現在は再びＴＫＯを主戦場にし捲土重来、北米最高峰ＵＦＣ再出場を目指し奮闘中。



Antonio Carvalho
アントニオ・カルバーリョ

①シャウ・フランコ②6戦6勝0敗③1979年5月3日④65kg前後

ニックネームのパトは、アヒルという意味。彼の柔道時代の師が『もし、シャウの下を離れるようなことがあれば、鷹と大空を舞う代わりにアヒルとともに地は這うことになるぞ』と語ったことが由来になっている。柔術茶帯のカルバーリョは、まだ大舞台の経験がなく、目に付くのはIHCが行うプロ修斗アレン戦のTKO勝ちぐらいのもの、しかし、6つの勝ち星の中にただの一つも判定勝ちがないという事実は、彼の可能性を十分に示している。



Patrick Cote
パトリック・コーテ

①チーム・ユニオン②6戦5勝1敗③1980年2月28日④84kg前後

本来はミドル級でＵＦＣ出場が決まっていた04年10月。ガイ・メッツァーの急遽欠場の混乱のなか、メインでティト・オーティズ戦を実現させた。これまでに母国でビル・マフード、スティーブ・ヴィグノーを下したハードパンチで、ティトに両ヒザをマットにつけさせるなど、大健闘。ティトのチキン振りを露呈することに成功し、米国のファンのハートを掴んだ。これからは本来の階級でも、大物食いが十分に予想されるファイターだ。

ど、後のUCCの常連となる選手たちのMMAデビュー戦の手引きもしている。

ただ、IFCの興行成績は、最初の2大会以降はジリ貧で、ついにトーマスはカナダでの大会開催を断念。パーティは古巣テレグローブに復職した。

その頃、MMA開催に最も厳しい状況下のオンタリオ州トロントでも、パーティと同じ志を持つビジネスマン＝ピート・ロドリーが、選手のスカウト、そして援助を始めていた。ロドリーの耳には、当然のようにIFC開催に尽力したパーティの話は届いていたが、すぐに我が耳を疑ってしまうフレンチ・カナディアンの突拍子もない行動が、伝わってきた。

テレグローブ社に戻ったパーティは、わずか2週間で、辞職願いを提出。愛車とマンションまで手放し、彼は自らの手で新しいカナディアンMMAプロモーションを立ち上げる決意をしたというのだ。

このとんでもない決断で、最愛の恋人まで失ったパーティに、ロドリーは思わず手をさしのべ資金援助を約束。ここにカナダ人による初のプロモーション、ユニバーサル・コンバット・チャレンジ（UCC）が誕生した。

パーティ&ロドリーのMMA★Loveコンビの最初の仕事は、ケベック州政府にフルMMAルールを認めさせる交渉だった。パーティもロドリーも、UFCルールに準じたルールでない限りプロモーションの成功は考えられないという確信があった。結果、3ヵ月間という短期間で、ケベック州政府がフルMMAルール使用の大会開催を承認するに至る。

2002年6月2日、モントリオールで第1回UCC開催が決定した。

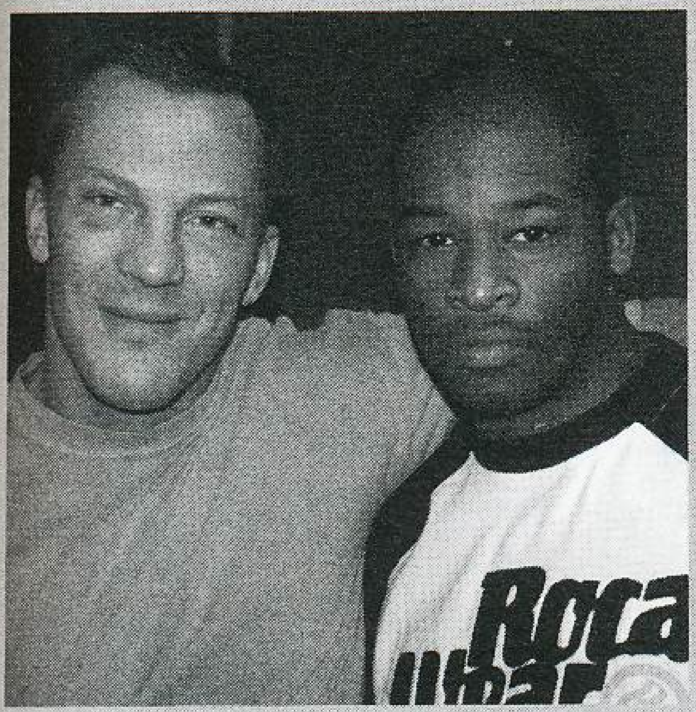
当初、フランス系住民の支持が強いクリストフ・ミドゥーVSキモをメインに添えていたが、ミドゥーが交通事故で出場不可能となり、豪州からエルビス・シノシックを招聘。しかし、計量当日にキモが拳を負傷し、出場回避を伝えてきた。

この緊急事態にUFC出場経験もあるデイビッド・ベネトゥーが、メイン出場に名乗りをあげる。州政府の正式認可を受けた大会だけあって、ベネトゥーは試合前日に採血し、ブラッドチェックを慣行、ベテラン・カナダ人ファイターの男気に助けられ、UCCは無事、船出を迎えられたのである。

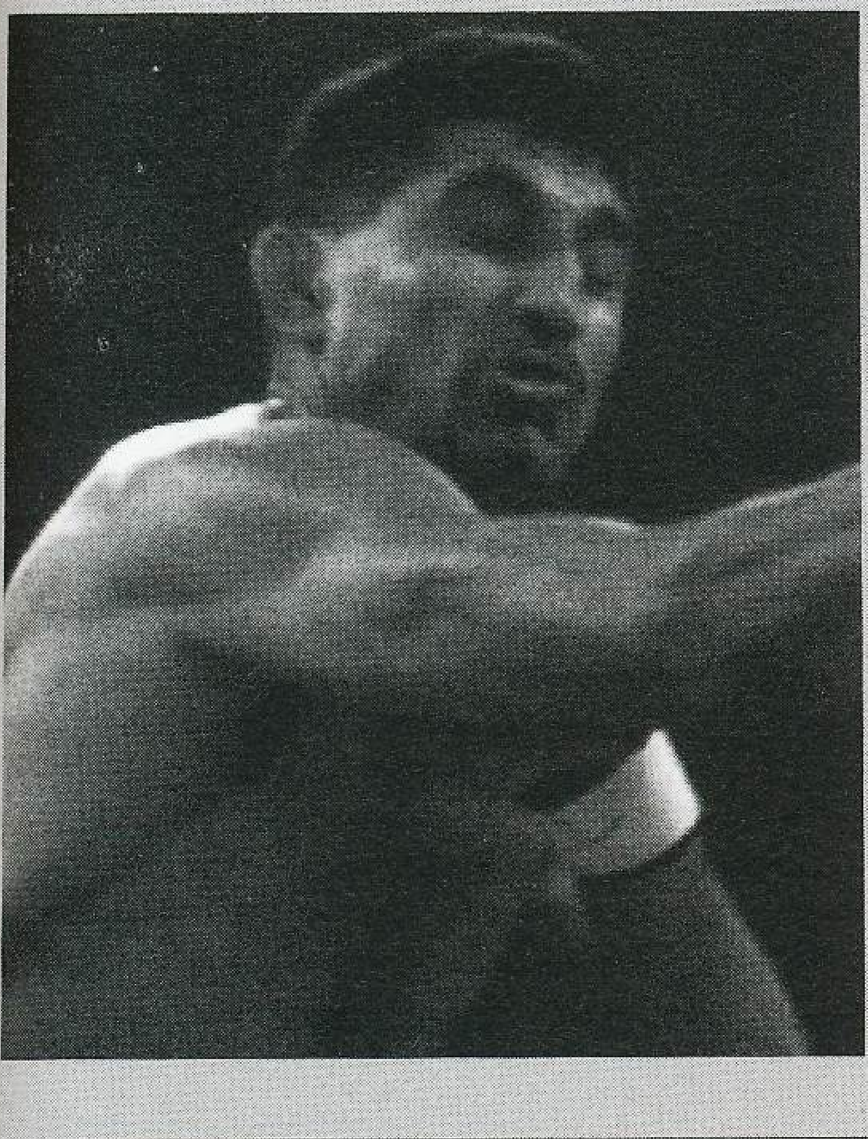
3200人の観客が集まった第1回大会。第5試合では、ロドリーが発掘したジャスティン・ブルックマンが、パーティの秘蔵っ子デイビッド・ロワゾを破る。元々はただのMMAファンだった二人のプロモーターは、万感の思いで、リング上を見つめていたに違いない。

ただし、興行の世界は甘くない。第2回大会で1500人、以降4200人、3100人と順調にゲート収入を得ていたUCCだが、なんと屋外会場を使用した第5回大会で第1試合が始まった直後に、雨が降り出してしまい、大会はキャンセル。チケット代金の返金を余儀なくされ、大きな痛手を負ってしまった。しかし、ジョルジュ・サンピエール、リカルド・ナンコー、イヴァン・メンジハーなど、カナダ人選手が確実に力をつけ、モンティ・コックス率いるチーム・エクストリームのファイターを招聘するなど、プロモーションとして力をつけてきたUCCは、第6回大会では5900人、第7回大会には5400人もの観衆を集めることに成功した。

これで完全に軌道に乗ったかと思われたパーティのプロモーター・ライフも、続く2002年3月に開いた第8回大会が、千人強の集客に終わり、8万ドルの赤字決済に。ファイナンシャル・プロブレムは、パーティとロドリーの間に不協和音を呼び、結局、この大会を最後にロドリーはUCCを去ることになった。一人残ったパーティも、カナダ以外にも名が通るようになった



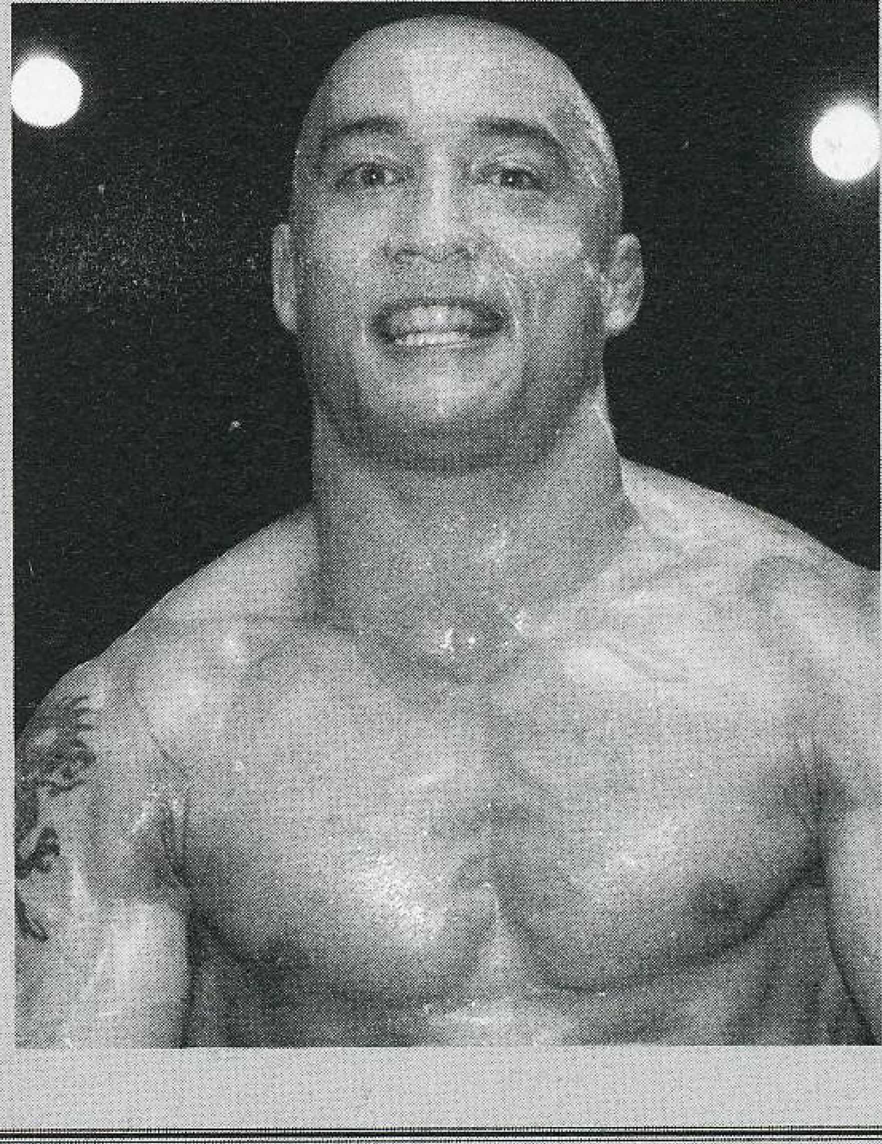
デイビッド・ロワゾと肩を組むビル・マフード(左)は現役のMMAファイターだが、自らXFCというイベントを年に一度開催し、カナダMMA界の底辺の底上げに貢献している。



Kultar Gill
クルター・ジル

①ギブソン・パンクレイション②7戦5勝2敗③1979年3月29日④70kg前後

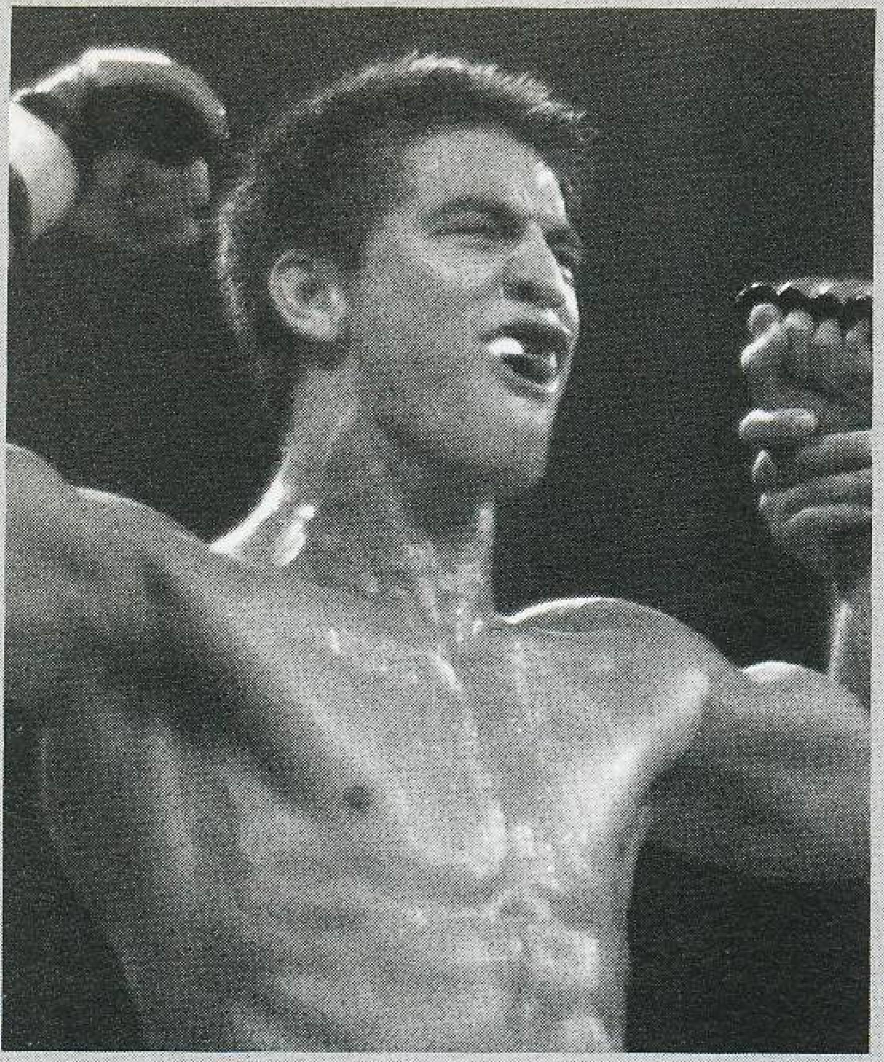
180cm以上の長身に長いリーチとコンパス。MMA転向以前はキックボクサーとして活躍し、20戦以上のキャリアがあるという話も、その体型を見れば納得できる。まだ寝技に弱点があり、二つの敗北はイーブス・エドワースにヒールフックを極められたものと、柔術黒帯のファービオ・オランダに敗れたもの。しかし、あのエドワーズとの打ち合いで優勢だったという本物の打撃が、夢の舞台ＵＦＣへ彼を導くことになる可能性も十分にある……かもしれない。



Denis Kang
デニス・カン

①マルクス・ソアレス柔術②24戦16勝7敗1分③1977年9月17日④84kg前後

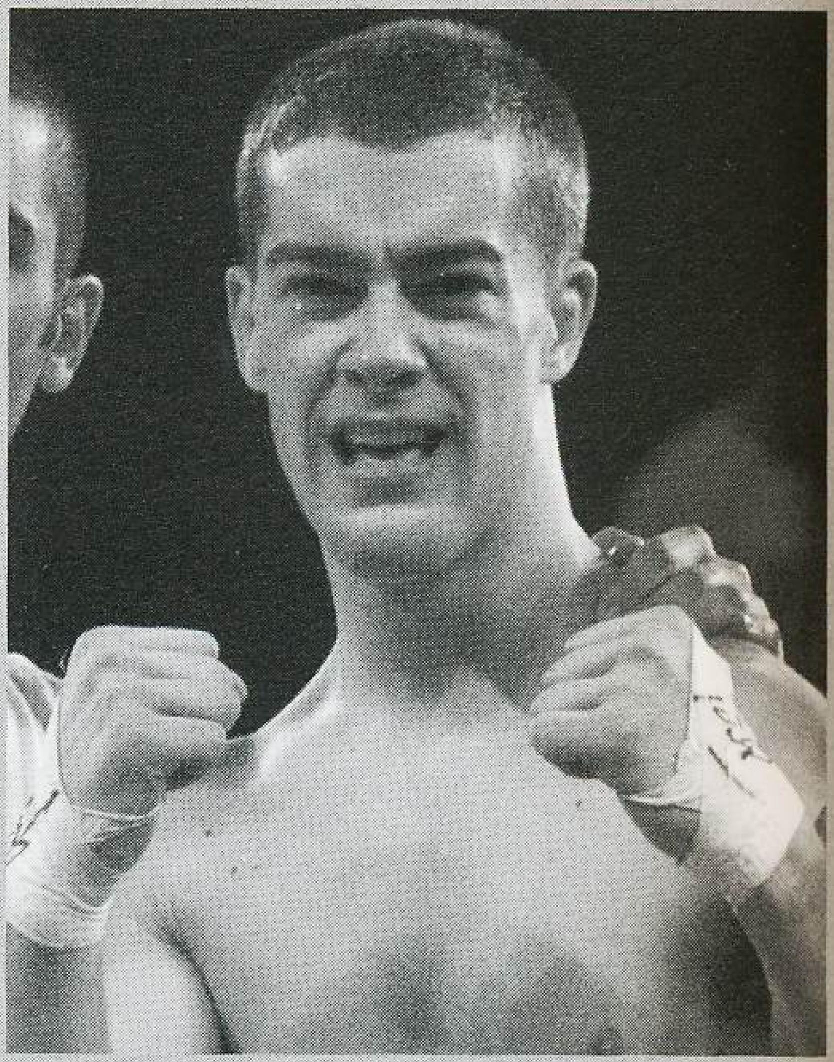
今や韓国総合格闘技界のエースに君臨するカンは、父を韓国人、母がフランス人というカナダ国籍の持ち主。元ＢＴＴのソアレスの下で柔術を学び、米国のサブミッション大会グラップラーズ・クエスト、ＡＤＣＣ予選でも活躍している。日本のパンクラスに参戦し勝ち星に恵まれなかったが、その後、ロシアでアンドレイ・シメノフと引き分け、自信をつけ韓国へ。Ｋ－1に出場するなど、目ざましい活躍を数十年振りに再会した父の母国で見せている。



Sam Stout
サム・スタウト

①チーム・トンプキンス②6戦3勝2敗1分③1984年4月23日④70kg前後

カナダのトロントと米国デトロイトの中間に位置するロンドンにあるストラキング系ジム＝チーム・トンプキンス所属。今や先輩マーク・ホーミニックを上回る打撃を見せているのが、このスタウトだ。まだキャリア6戦でそれほど勝ち星が先行しているわけでもない選手が、ここにリストアップされた理由は、石の拳と呼ばれる、その破壊力十分なパンチにある。ＵＦＣ出場だけでなくＫ－１も視野にいれているスタウト。実現の可能性は十分にある。



Stephane Vigreault
ステファン・ヴィグノー

①トリスター・ジム②10戦8勝2敗③1982年4月20日④67kg前後

カナダでもまだまだトップとはいえないステファン・ヴィグノーだが、名門トリスター・ジムで、カナダのトップファイターにもまれており、著しい成長の跡をリング上で見せている。主戦場とするＴＫＯが米国ネヴァダ州ルールより、細かいウェイト制を敷いているため、中途半端な体重で戦っているが、腕十字で一本勝ちがあれば、パウンドでＴＫＯ勝ち、スタンドのバックハンド・ブローでＫＯ勝ちと魅せる勝利でファンの支持も高い。

ＵＣＣの名を捨て、ＴＫＯコミュニケーションズを旗揚げ。ＵＣＣから通して数えると、4年間で18回の興行を行っている。

と同時に、パーティはＴＫＯのトップ選手と、ＴＫＯマネージメントの名の下、契約した選手のブッキング業にも乗り出し、サンピエール、ロワゾ、メンジハー、パトリック・コーテらがオクタゴン出場し着実に成果を上げている。

ＴＫＯ自体は、カナダ人選手の切磋琢磨する場所と位置づけ、ビッグネームの招聘は今ではかなり限られてきた。ただ、ＴＫＯというサバイバル戦に勝ち残ることで、パーティのお眼鏡に適うとUFC出場のチャンスが広がることもあり、このケベックの大会は安定期に入り、カナダ人選手の育成に貢献し続けている。

東のパーティが私財を投げ打ち、州政府との折衝の末に、ＭＭＡを世に認めさせたのは、全く対照的なやり方で、ＭＭＡが盛んになったのが、太平洋岸の大都市バンクーバーを中心とするブリティッシュコロンビア州だ。１９９６年のある日、ジェイソン・ダーローは、キックボクシング興行のなかで、自らルールを作成したＭＭＡの試合に出場するため、控え室で集中力を高めていた。もちろん、州政府の公認など得ていないイリーガル・ファイトだ。しかし、彼の試合前にプロモーターが、全てのチケット収入を持ち逃げし、この地区における最初のＭＭＡの試合は実現に至らなかった。

この後も、太平洋地区のＭＭＡ普及を支え続けたのは、アンダーグラウンドＭＭＡだった。１９９８年、デニス・カンがベアナックルの地下ＭＭＡに出場したときの話だ。50ドルのチケットを購入した彼の友人は、プロモーターが指定した場所へ到着すると、そこには２５０人ほどに膨れ上がった観客と思しき連中が、手持ち無沙汰に突っ立っていた。警察の介入を恐れたプロモーターは、開催場所を観客にすら明らかにせず、用意したバスやバンで彼らを試合場へ連れて行ったという。

96年にＭＭＡの試合に出場し損ねたダーローは、州の許可を得ないまま地下ＭＭＡ興行を開催していたが、ブリティッシュコロンビア州ではそれぞれのカウンティに、アスレチック・コミッションの窓口を併設していることを知る。彼は州のコミッションでなく、タウンホール（役場）のコミッションの許可さえ得られれば、公にＭＭＡ大会を開催できるという方法を思いついた。カナダ太平洋岸で、初めてＭＭＡを認可したヴァーノンは、人口3万5千人に満たない小さな街である。

このコミュニティーごとのコミッションで認可を受けるというやり方は、以後ブリティッシュコロンビア州に基盤を置く全てのプロモーションが、右に倣えとばかり踏襲するようになる画期的な発見だった。

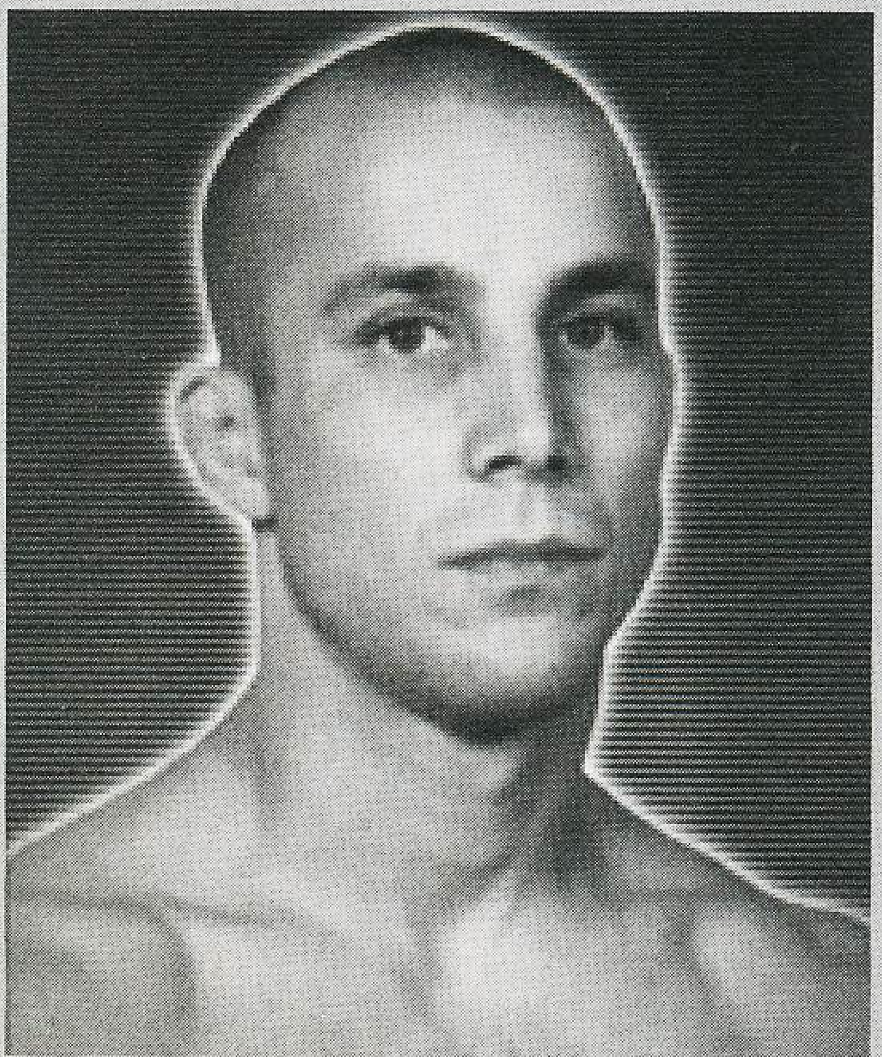
地下ＭＭＡで燻っていたファイター、プロモーションがこれで一気に勢いをつけた。その代表格がジェイソン・タウン率いるワールド・フリースタイル・ファイティング・チャンピオンシップ（ＷＦＦ）だ。

２００２年4月13日、ケローナでサンクションを受けたＷＦＦは、その後、バンクーバー進出にも成功し、04年7月には国際修斗コミッションの認可を受け、カナダ国内で初めてとなるプロ修斗公式戦を開催。その大会で、ファイター・オブ・ザ・ナイトに選ばれたブルックマンは、4ヵ月後に来日を果たしている。ＷＦＦはプロ修斗開催で、日本とのパイプをアピール。カナダ太平洋地域をリードするプロモーションとして、急速に成長している。

東のＴＫＯ、西のＷＦＦに続けてとＡｐｅｘファイティング、アルティメット・ジェネレーション・コンバット（ＵＣＧ）らも、活動が活発化しているカナダ。大きな大きなＭＭＡ界の赤ん坊が、今、ヨチヨチと"本格的に"歩き始めた。



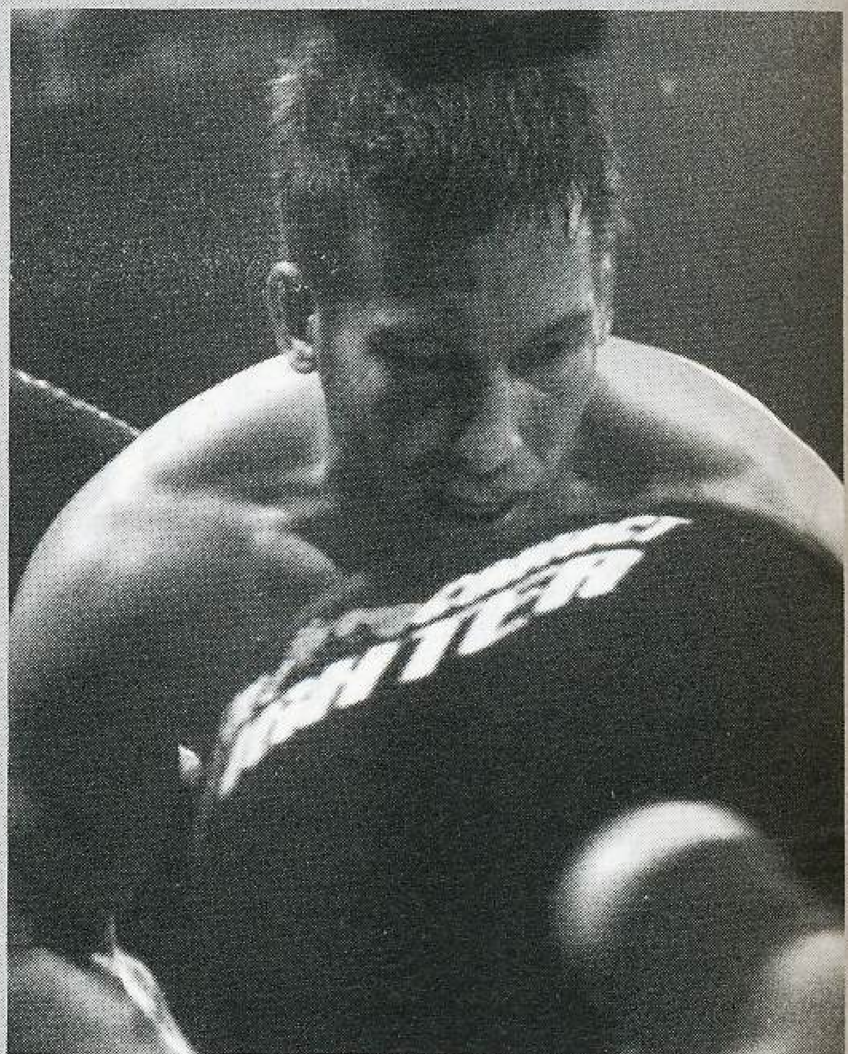
MMA禁止、オンタリオ州トロントにジムを構えるシャウ・フランコ（左）と弟子のジャスティン・ブルックマン。右端はブリティッシュコロンビア州でプロ修斗公式戦を開催するWFFのプロモーター、ジェイソン・タウン氏。フランコはシウヴィオ・ベーリンギの黒帯で、松涛館空手六段、イスラエル柔術協会三段という猛者。



Richard Nancoo
リカルド・ナンコー

①シャウ・フランコ②9戦6勝2敗1分③1975年7月8日④60kg前後

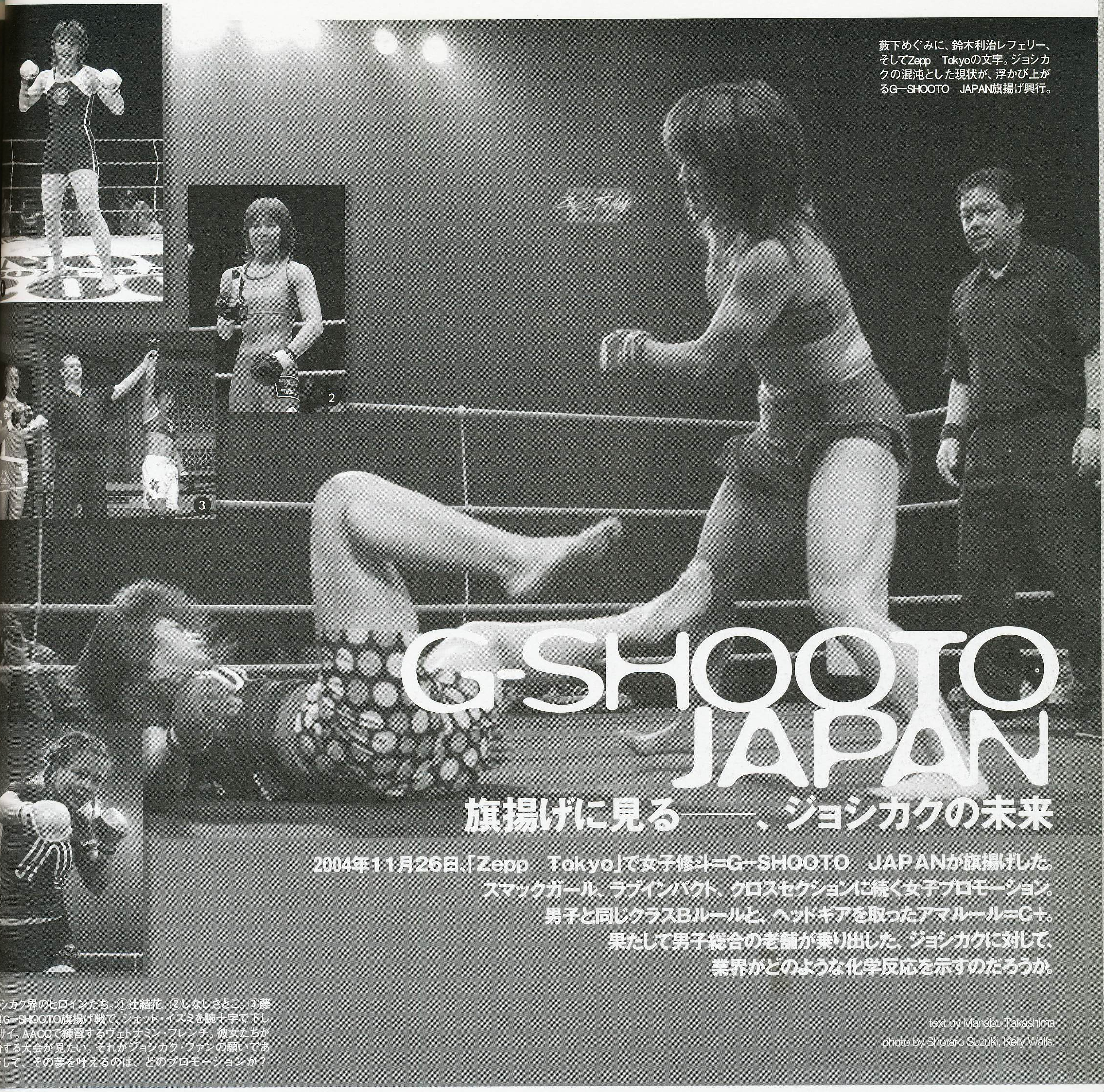
シャウ・フランコ門下第3の男は、ベストウェイトで戦った経験がない。それぱかりか10kgも重い選手との試合を強いられることもしばしば。柔軟な体を利した変幻自在の組技は、見る者を魅了してやまない。カナダでプロ修斗が始まり、盟友ブルックマンが来日したことで、日本行きを想定し60kgで戦うことを決意。柔軟、変幻自在、60kg、超マニア的発想で北欧軽量級のトリック・スター、ムッセ・ハッセバルとのマッチアップを見てみたい。



Jeff Joslin
ジェフ・ジョスリン

①チーム・ジョスリン②5戦4勝1敗④77kg前後

ナイアガラ瀑布に近いハミルトン在住のジョスリンは、ブラジリアン柔術とトラディショナル空手の融合を目指す一風変わった特徴を持つファイターだ。自らの道場で指導者として活躍する彼は、勝つときはＫＯか一本勝ち。唯一の敗戦は判定負けというもの。この事実からも、彼が何を望んでＭＭＡのリングに上がっているかが良くわかる。日ごろの鍛錬の成果を発揮するためにリングに上がっていた彼は、今後はＭＭＡでなく柔術に専念するという話もある。あくまでも武道家というわけだ。



藪下めぐみに、鈴木利治レフェリー、そしてZepp Tokyoの文字。ジョシカクの混沌とした現状が、浮かび上がるG—SHOOTO JAPAN旗揚げ興行。

G-SHOOTO JAPAN
旗揚げに見る——、ジョシカクの未来

2004年11月26日、「Zepp Tokyo」で女子修斗=G—SHOOTO JAPANが旗揚げした。スマックガール、ラブインパクト、クロスセクションに続く女子プロモーション。男子と同じクラスBルールと、ヘッドギアを取ったアマルール=C+。果たして男子総合の老舗が乗り出した、ジョシカクに対して、業界がどのような化学反応を示すのだろうか。

本ジョシカク界のヒロインたち。①辻結花。②しなしさとこ。③藤恵 ④G—SHOOTO旗揚げ戦で、ジェット・イズミを腕十字で下したビ・サイ。AACCで練習するヴェトナミン・フレンチ。彼女たちが一同に介する大会が見たい。それがジョシカク・ファンの願いである。そして、その夢を叶えるのは、どのプロモーションか？

text by Manabu Takashima
photo by Shotaro Suzuki, Kelly Walls.

「SMACK GIRL（以下スマック）」、「LOVE IMPACT（以下ラブインパクト）」、「CROSS SECTION（以下クロセク）」のジョシカク3プロモーション時代は、良くも悪くも小康状態で、需要が冷え切ることがなくとも、大幅に伸びることもなく足踏み状態が続いていた。

そんな無風状態にあるジョシカク界に、台風までとはいわないが、温帯低気圧ぐらいの雨風を「G-SHOOTO JAPAN（以下G修斗）」が、もたらした。

競技・総合格闘技を標榜する本家本元が、エンターテインメント路線といいつつ、かなり（良い意味で）競技的になってきたジョシカク界に、乗り込んできたのだ。

こういってはなんだが、興行組織としてはここ数年、苦戦を強いられ芳しくない修斗だが、零細産業とよんでもおかしくないジョシカク界に、本格参入となれば、必死で縄張りを確保してきた先行プロモーション勢も、本音をいえば心穏やかでないに違いない。

G修斗の特徴は、基本パウンド厳禁のジョシカクに、プロ修斗公式ルールとして、パウンドを持ち込んだことだ。

もっとも、全ての試合で男子修斗と同じようにパウンドが投入されていれば、他の3プロモーションも、完全に違うルールということで、余裕を持って眺めることができたかもしれない。しかし、実際にはプロ・ルールは1試合。修斗ご自慢のアマ・ルールから、ヘッドギアやシンガードを取り除き、打撃の減点法と組み技の加点法を組み合わせた判定でなく、プロと同じダメージやアグレッシブネスを判断基準とした、ジャッジの10点採点法が採られている。

「プロ・ルールに出場するのは危険だから、プロとアマの中間にあるルール」を採用したのなら、選手層の薄さから各プロモーションを梯子する選手ができてきて当然という業界内からの反発は必至だ。

G修斗側では、そんな気はなくても「ヨソではプロだけど、修斗ではプロじゃないですよ」といわれているようなもの。

左の囲みでも、直接的な表現は避けているが、「スマック」&「クロセク」関係者から

各プロモーションの反応は・・・

SMACK GIRL／長尾メモ8実行委員の考え

「まず、試合は面白かったですね。ただ、C+ルールの将来というか、興行として成立するための問題が、最初から浮き彫りになっていたと思います。30秒ブレイクもなく、寝技で一切の打撃攻撃が禁止ですから、どうしても間延びしています。それとお金を出して見ている側と、やっている現場側に距離があって、演出が上滑りしていたんじゃないですかね。それこそ光と音に拘った演出といっても、ダンスにしてもスマックがこけたことですから。もう、客席を凍らせちゃって。最初はああいうことをやりたがるわけですよ。まぁ、予算があればどこでも拘りたいでしょうし。あと、天に唾を吐いて戻ってきちゃうようなことをいうと、進行は良くなかったと思います。ただ、G−SHOOTOができたことによって、アマ修斗で優勝した選手とか、行き場がなくてスマックに出ていてくれたのが、今後はどうなるんだろう？という危機感は当然持っています。うちもプロ興行として、ますます研ぎ澄ましていかなければいけませんし、身の引き締まる思いがしています。スマックは選手を抱えていないので、選手が出たいと思ってくれる場所を提供しないといけない、それが一番重要なところですね。上滑りしない、選手が試合をして気持ちのいいリングを作っていきたいです。そして定期的に続けること、継続することがさらに大切なことになってきます。私はスマックでアマをやろうと言い出した首謀者ですし、これまでにアマチュアの大会も11回開いてきました。あまり興味のない篠の視野に、アマチュア上がりの選手が入ってきている。そういう意味で、アマチュアをプッシュしたのは、私の自慢です。あと、G−SHOOTOにしても若林さんと、クロスセクションとはWKさんと話をさせていただいていて、ラブインパクトとは絶縁状態にあるんですが、女子格闘技全体で円満外交で、ジョシカクを盛り上げて行きたいと思っています」

SMACK GIRL
オススメ ジョシカク・ファイター


薮下めぐみ
（SOD女子格闘技道場）


赤野仁美
（AACC）

GCM CROSS SECTION／伊東征二広報の考え

「G−SHOOTO旗揚げ戦を見て、女子選手のレベルが相当上がっていることが確認できました。パウンド有りに対応できる選手も生まれている。しかし、Zeppというのはまだジョシカクを行うには、ちょっと早すぎるハコかなと。それを埋めるパフォーマンスだったかもしれませんね。演出的には男子と女子は違いますが、アマ修斗で積み上げていってプロに上がるという部分、修斗のレギュレーションに合った試合が見たいというのはあります。ウチから修斗さんに出させてもらっている選手たちは、修斗のそういう部分を凄く大切にしている人間ばかりなんで。スマックさんにしても大森のアマチュア・スマックFの効果が凄く出てきていると思うので、G−SHOOTOでは演出以外は、男子と同じだなぁという試合が見たい。僕は修斗の試合を見るのが大好きなんで。クロスセクションの魅力は試合内容。レベル差のある試合は組まないようにしていますし、拮抗した勝負が売りで、それで見ていて楽しければいうことないですね。余計な演出も、ネタっぽい人を引っ張ってくるつもりもないです。要はウチが見たい選手、ウチに出てくれるという選手に出てもらっているということなんですよ。演出が派手になりすぎると、試合内容で負けてしまうことがある。演出に負けない試合がどんどん組めるようになるのが一番なんですが、現状はまだそこにいきついていない。そのために、安全性を第一に考えて、試合内容を向上させる。パンクラスさんも女子参入を発表しましたし、色んなプロモーションが出てきていますが、そこで選手のケガが増えてしまえば意味がないんで。最低限、そこだけは守ってもらって、その部分を軽視するところには、正直格闘技の興行をやってもらいたくないという気持でいます。将来的にはウチも、パウンドの導入を検討していますが、早急な話ではないです。安全面の徹底と技術力のアップがなってからですね。その二つが、ジョシカク発展の鍵であることは間違いありません。ということは、長い目で見るしかないんですよね」

GCM CROSS SECTION
オススメ ジョシカク・ファイター

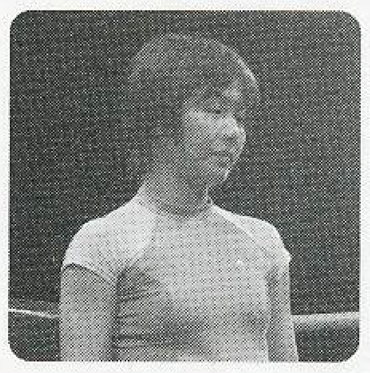

吉田正子
（NATIVE SPIRIT）

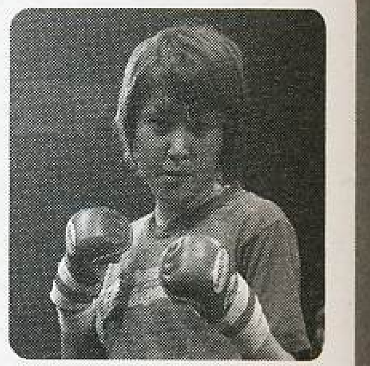

端 貴代
（和術慧舟會東京本部）

G-SHOOTO JAPAN／若林太郎氏の考え

「セコンドの仕事もあったので、全体像を振り返る余裕はなかったんですけど、いろいろな面で生みの苦しみの段階かと。男子の修斗だってプロで10年、15年の歴史があって、尚且つアマチュアの下地があって完成された世界なんで、G−SHOOTOと男子の修斗を比べることはできないですから。本来、プロなんだからパウンド有りで男子と同じルールでやらないといけないんだけど、選手育成という意味でアマだけでは難しいので、こういう形にしているのも男子の修斗と同じ目で見られないことの表れだし、スタート地点に立ったばかりなので、お客さんに甘えるのは良くないことだけど長い目で見るものだと思っています。リミックスやスマックガールがジョシカクの歴史を作ってきて、ある意味イベント主導ではある社会が、徐々に競技志向に変わっていっている。そんななかで、選手であれば、レベルがどうのこうではなくて、お客がいる舞台が用意されていれば、そこで戦いたいはず。要は試合をさせてあげることが必要で、男子と同じ目線でやってもしょうがないし、違う発展の仕方をしているから、今はその方法論に乗っかっています。今回は準備期間とか色々な問題があったんですが、今後はクラスBとクラスC+を半々で組んでいきたい。薮下選手なんて外国人を呼んでパウンド有りのプロルールの方がずっと戦いやすいだろうし、その力も十分にあるので。G−SHOOTOに関しては、修斗内部でも反対の声はあります。でも、それってファンが『女の子は殴りあうべきじゃない』っていうレベルと同じことで、きちんとした技術があれば男女は関係ないと僕は理解しています。修斗の規約には『女子はダメ』なんて項目はないわけだから、競技的発想をもってしても、G−SHOOTOはあって然りだと。ただ、G−SHOOTOのスタッフは木村浩一郎君を初めとする面々で、修斗の人間で男子の活動と重なっているのは僕だけですから。だから見せ方の問題として演出とかも、自然と男子の修斗とは違ってくるだろうし。今回は演出も凄かったですね。僕もあそこまでとは、知らなかったんですよ。修斗の人間として言わせ頂くと、ジョシカクのなかでは新参者ですから、それぞれの特徴を持っているなかで、選手が出たいというところに派遣していくつもりで、『あそこはダメ』、『ここは出られない』というのは一切ないです、男子と違って。あと安全面を大切にすることは当然として、女子だからこそという問題をしっかり見詰め合って行きたいと思っています。ジョシカクは、修斗に限らず男の総合と比較して、核となる選手はまだ育っていません。だから、アマチュアを拡大し、下のレベルが広がっているなかでトップになるという状況を目標にするのは競技として当然だと思う。そういう意味では男子の修斗と同じ世界観を女子でも創っていきたい。そして、女性が『やってみたい』と思えるようなものにしてきたいですね」

G-SHOOTO JAPAN
オススメ ジョシカク・ファイター


高橋ちひろ
（パレストラ東京）

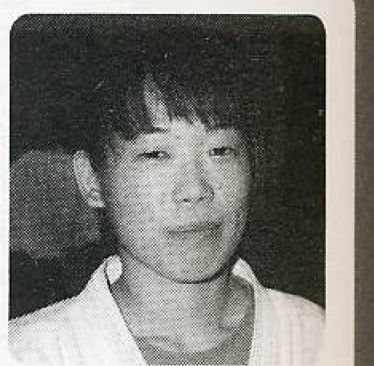

MIKU
（クラブ・バーバリアン）

LOVE IMPACT／柴田賢一郎氏の考え

「G−SHOOTOを見て、色んな意味で凄くジェラシーを感じ、また参考になりました。修斗さんは日本全国の加盟ジムのネットワークがあるので、プロを目指す人も増えるでしょうし、育成システムも確立されているので、レベルの底上げにもつながるでしょうね。偉そうな意見になってしまって恐縮なんですが、G−SHOOTOさんの参入を終えて、2004年はジョシカクのプチブレイクの波、プレゼン期間が終わったと思います。今後はそれぞれがプレゼンしたどの中身に世間が食いつくのか。2005年はジャッジメントの年になると思います。ラブインパクトの特徴は、世間へのアプローチの仕方、極端な例でいうとブッキングやカード編成の過程で実力云々よりも選手の素の部分を活かすことを第一に考えている点でしょうね。ジョシカク全体が成立するには、選手の方からもプロ意識という部分で自己改革の徹底と、運営側と選手側が運命共同体になることですかね。世間から色物扱いされないアプローチの仕方を考え、現状の格闘技ビジネスとの差別化も必要でしょう。あとは運営側が常に冷静でいること。プロモーションの乱立は心配ごとではありません」

LOVE IMPACT
オススメ ジョシカク・ファイター


小林由佳
（西山道場）


瀧本美咲
（禅道会高森道場）

は、プロアマ混合ルールに関して、なにやら含みのある意見が出されている。

もっとも、「さすが修斗だけあって、試合に攻防が見られる。今までのジョシカクとはちょっと違う」という声が上がるなど、レベルの高さ＝修斗というブランドは、ジョシカク界でも通用しそうだ。

30秒ルールがなかったことによって、不利な体勢にある選手が、ホールドするのではなく技術で劣勢を跳ね返そうとしたからこそ、技術の応酬が見られるという考え方もできる。

ただ、ジョシカク・プロモーションのライバルは、実はジョシカクでなく、男子総合格闘技プロモーションであるということも忘れてはならない。迫力という点では、最初に「女子なのに」という断りがない限り男子総合には勝てない。

「プロのレベルに達していない」のだから、技術の応酬でも、この「女子なのに」という断りを外しては、売り物にならないだろう。やはり売りは「女子」という部分になるのか。では競技を謳うG修斗は、どういうアピール手段が講じればよいのか。

競技として、男子と同じ視線で見ていないと断言できるなら、興行としても同じ目線で見なくてもいい。ただ、その違う視線をどこに持っていくのか。あの延々と続いた、ダンスを指すのではないことだけは確かだが、実際のところ消去法では、正解には辿り着かない。

「女子」らしさをどこに置くのか。「共栄共存」という建前を外したとき、各プロモーションの本当の姿が見えてくるはずだ。

今後のジョシカク・スケジュール

●クロスセッション
12月12日（日）東京・半蔵門TOKYO FMホール
開場18：00　試合開始18：30

●スマックガール
「ワールド・リミックス」
12月19日（日）ツインメッセ静岡
開場16：00　試合開始17：00
「スマックガールF」
2005年1月8日（土）東京・下北タウンホール
開場13：00　試合開始14：00
※女子プロ柔術「Gi−Feminino」と同日昼夜開催

女子格闘技記事を深読みしたら…あるある!!　あなたもフェミコードにひっかかっている?

性差万別

WOMAN FIGHT Part2

格闘技記事から「それってモロ、女をバカにしてない? ナメてない?」的な文章を拾ってご紹介したところ、業界から総スカンを食ってしまったこのコーナー。でも編集者がヒネクレてるのか、第2弾が決定しちゃいました。今回は男性記者だけじゃなくて、男に妙な幻想を抱いている女性記者も槍玉にあげちゃいまっす!

姉崎美香=文
text by Mika Anezaki

フェミコード抵触の歴史は古い。なぁんてガチっぽい書き出しで始めてみましたが、むかーしの雑誌とかを読み返すと、やっぱスゴいんですよね。

例えば平成元年9月20日発行の『Number』。この号では「網島理友の覗き見ルポ」なんていうのがあって、ビーチバレーの記事についたタイトルが**〈江の島ビーチはハイレグだらけ〉**。そしてチアリーディング大会は**〈太腿だって、スポーツだッ!〉**。あの名コラムニスト網島氏でさえ**〈おそらくボクの今までの人生で、こんなに沢山の太腿を見るのは初めての経験じゃないかと思〉**い、ドギマギしてるんです。**難易度★**

平成11年7月29日号のスポーツ美少女特集では、しょっぱなにアマレスの山本聖子が登場。まだ幼い顔立ちの聖子の写真につけられた文章っていうのが笑えるんですよ。「親元を離れて、お友達と一緒に暮らし始めました」という聖子に、間髪入れずに**〈むむ、オノコの気配じゃ〉**と筆者が合いの手。するとなぜか聖子も「いやだァ」と甘え口調に。これで調子に乗った筆者は**〈ヘアスタイルも激変したと伝え聞いておる。失恋でもされたかな?〉** **難易度★**

いやだァ! "オノコ"って死語ですよぉ! 参りましたね。5年前はまだ、こーゆー「スケベおやじノリ」が許されていたのです、あの『Number』で。

しかーし! 5年のタイムラグも何のその、なんと現在でも脈々と受け継がれてることが発覚。しかもかの『格闘技通信』で!

"チョッキ編集長"でお馴染み、三次敏之氏の編集後記、その名も「編集チョッ記」で山本美憂とのツーショットから始まった**〈別に自分が女性と仲が良いシーンを自慢したいわけではない〉**シリーズ(NO.350~359)がそれ。女子格闘家や女性の格闘技関係者と編集長自らがツーショット写真に納まるという、かなり需要を無視した企画です。NO.354では「4号連続達成できた」と喜びながらも「それがどうしたっていう突っ込み大いに結構。異論・反論お待ちしてます!?」というので、今さらですが突っ込ませていただきます。

自ら出演している番組のアシスタント(ちなみに"チョッキーズ"と命名されている…)に腕十字をかけられた編集長は、**〈今から宣言しておくが、次号はチョッキーズのもう一人との"絡み"の写真を掲載するつもりだ〉** **難易度★★**

スケベおやじも真っ青の大胆発言。そして予告どおり、女の子にマウントを取りながら**〈ついに『セクハラ』か!? いや、そんなことはない〉**と一人ノリ突っ込みで弁解。とまあハラハラした連載でしたが、NO.359の**〈やめた、やめた〉**の奔放な一言をもって9回で唐突に終わりを告げてしまったのでした。あーホッとした。

ちなみに、格闘技に詳しい武蔵野美術大学の亀井好恵非常勤講師(民俗学)は、『AERA NO.32』の「ジョシカクに生きる~女子格闘技ブームの理由~」という特集の中で、女性が格闘技をめざす理由についてこんな説を唱えております。

〈輝いて躍動する身体はエロチック。エッチっぽい感じがするけれど、それは人間の根源的な感性のひとつのエロス。だから彼女たちは格闘技に魅せられるのです〉

きっと編集長も「人間の根源的な感性」に突き動かされて、こんな連載やっちゃったんでしょうね。ちなみにもう一人の識者として『AERA』で自説を披露しているのは、ご存知ターザン山本氏。曰く**〈女の子は結婚や仕事ではアイデンティティーを得られなくなっている。女が成り上がるための手段は芸能界やミスコンだったけど、それが、褌一貫でだれでも手っ取り早くできる、格闘技というアウトローの世界にまで広がった〉** **難易度★★**

女が成り上がる手段を芸能界とミスコンに限定しちゃうところが、恫喝系というか"アジ語"系としてのこの方の凄みでしょうねぇ。そのすぐ後でサンビストの藤井恵が**〈私が求めているのは、強さ。それはパワーだけでなく、精神的なものも含めた全体的な力〉**と爽快に喝破してしまっているので、ジョシカクに対する男女のとらえ方の違いが、より鮮明になっちゃってます。

さて「男女の違い」は、男子格闘家に対する女性記者の偏見という形でも表れます。例えば『格闘技通信』のジョシカクページをいつも担当している松本幸代記者。女子について書く時はカラッと乾いた感じですが、男子をテーマにすると、なんか変なリビドーが出ちゃうみたいで…。

1・24修斗の高谷裕之対ジョン・ホーキ戦でパウンドしてる高谷の写真につけたタイトルが**〈だって俺、これしかねぇし〉**。そして**〈タップしたら俺の人生終わりだし〉**(『格闘技通信NO.344』)。さらに5・3修斗の高谷対パーリング戦を取り上げた記事のタイトルも**〈俺が修斗・世代交代のヒーロー? ありえねぇけど、やるしかねぇ〉**(『同NO.350』) **難易度★★**

そりゃあ高谷がかつて札つきのワルだったのは知る人ぞ知る事実ですが、なんか"任侠"入ってません? きっとこの方の愛読書は『ヤンキー母校に帰る』? そして好みのタイプは宇梶系?

男性記者が「だって○○なんだもんッ、ウフ!」みたいなセリフを女の子に言わせたいのと一緒かも。『仁義なき戦い』風っていうの? 理想の"男道"みたいなものがあるんでしょうね、きっと。でもそれに全てを当てはめるのは危険だと思うな。そんな"オノコ"は今や絶滅種だし、男だって決められた枠にハメられるのはイヤだと思うしね。ってことで、今回も総スカンを食うことは間違いなし。いやだァ!

★ごくごく平均的な【夢見るユメオくん&ユメコさん】系
★★イマどきそれかい!の【恫喝男 or 女】系
★★★一番やっかいな【エセフェミ】系



若林太郎

前田日明 ▶ 石井館長 ▶ 佐山聡 ▶ 中井祐樹

俺のゆく道、すなわち――

ニッポンの総合“裏面史”

この男、関係者ならずとも名前や顔を知られ、2ちゃんねるで悪口を書かれることもしばしば。なぜか大きいのは鼻と声だけじゃなく、その存在感。リングス、K－1、修斗などでプランナーを務め、前田日明、石井館長、佐山聡の右腕であった男が語るニッポンの総合裏面史は、衝撃的な事実の連続だった。

聞き手＝和良コウイチ、高島学

新生UWFの旗揚げのとき「お前、入らんか」と誘われた。

――ずばり、若林太郎とは何者なのか、ということを今回は伺いたいんですが。

「(以下一気にしゃべり続ける)僕はもともとプロレスファンだったんですよ。高校時代はアントニオ猪木が世界一強いとか、タイガーマスクがすごいとかって世代で。サンボをやっている弟(次郎)もそうだったんだけど、プロレスファンでも技マニアでしたね。いろんな格闘技の技を研究しないとアカンということになって、格闘技に興味を持ちだすようになったんです。そういう流れから、旧UWFにはかぶれまくりました。当時は僕も旧UWFはガチだと思っていた。佐山聡さんがタイガーマスクを引退してシューティングを創始したのが浪人時代ですね。UWFでは『実力ナンバー1決定戦』が行われてました。

スーパータイガージムは84年にオープンしてて、僕は一浪してるんで大学(日大芸術学部)に入ったのが85年。要するにただのプロレス少年だったので、総合格闘技をやってUWFに入ろうと思ってたんですよ。体重は当時64kgぐらいでちっちゃかったけど、シューティングなら階級制だからできると思って。それでスーパータイガージムに入ろうと思って、2回見学に行きました。でも、入会金がすごく高かったんですよ。当時で3万、さらに月1万ぐらい掛かったはず。正直言って、大学生の身分でその金額を捻出するのが厳しかったんです。そのくせジムで上下のスウェットとか買ってたりするんだけど(笑)。

そうこうしているうちに大学で勧誘されて、合気道部に入っちゃったんです。先輩にUWFが好きな人が2人ぐらいいて、「合気道には関節技があるんだよ」って言われて。運動部に入った瞬間に、ジムに通うという選択肢は当然なくなって、そこから合気道の練習をするようになりました。入った段階では合気道に試合がないというのも知らなくて。それで、ちょっと「しまった」とも思いつつ、やめられなくもなって。

でも当然、総合格闘技への意欲はおさまらなくて、蹴りとかにも興味はあったんだけど、当時から寝技のほうが好きだったんですよ。UWFの関節技にすごく憧れていて。そしたら大学にプロレス研究会というのがあって、そこが実戦派だと。要するに、UWFごっこをするサークルだったわけです。もちろんすぐに入会してそこで練習してみたら、見よう見真似だったんだけど、僕はかなり強いほうだったんですよ。先輩にも勝ったりして。でも、4年生に1人強い人がいるよって。それが治郎丸明穂さんだったんです。僕が放送学科1年で、治郎丸さんは映画学科の4年でした。SAW(サブミッション・アーツ・レスリング)とかクロスヒールホールド、ヴォルク・ハン、グロム・ザザという名前を考えたのも治郎丸さんです。

当時、治郎丸さんは学生でありながら、既に『週刊ビックレスラー』という雑誌の記者をやって、ライター業をスタートさせてました。あの頃のフリーライターの中核的存在の一人で、布施(鋼治)さん、渋澤(恵介)さん、近藤(隆夫)さんたちが同期ですね。で、李(春成)さんはその上なんですよ。

その後、治郎丸さんはビックレスラーから週刊プロレスへ行って、書くようになるんですよ。当時は布施さんと治郎丸さんがUWF担当で。その後格闘技通信の創刊に深く関わり、格通初期のメインライターになるんです。姿三四郎が表紙で柔道特集やったのとか、全部治郎丸さんの企画のハズですよ。

それで格通が合気道特集をしたときに電話が掛かってきて、治郎丸さんが持っていない資料を貸したんです。この時初めて「資料提供:若林太郎」ってメディアに名前が出たんですよ。嬉しかったですね。当時は実際にやってたこともあって、合気道関係の本集めから始まって、古武道から中国拳法の古書まで買いあさってました。この時期に、かなりマニアックな知識を蓄えていくんですよ。

大学4年の5月に新生UWFが旗揚げするんですが、その1、2カ月前に治郎丸さんに呼び出されたんです。当時、治郎丸さんは角川文庫から出た『パワーオブドリーム』とか、田中正吾の『背中合わせのアキラ』のゴーストライターをやってて、前田日明とすごく仲良くなって、新生UWFのプランナーの一人になってたんですよ。それで、「若林、お前Uに入らんか」と。それも卒業してからじゃなく、いますぐ入れと。かなり惹かれはしたんですが、大学を退学するのは親に申し訳ないんで、この時は誘いを断りました。

この年の夏にUWFの有明コロシアム大会に行った時に、僕はちょっと「あれ、違うんだ」って思い出すんですよ。○○さんの試合と、ゴルドーの試合とか見た後、家で風呂につかりながら何かしっくりしないなっていう。その後、治郎丸さんにチラチラ聞いたりして、段々事実が分かっていくようになっていくんです。でも未練は捨てきれずに、プロレスやUWFは見続けるんですよ。

89年に大学を卒業した後は、学生時代からバイトしていたCM制作会社にそのまま入社するんですよ。電通が100パーセント出資してる電通プロックス(現・電通テック)っていう会社に」

――格闘技業界に就職しようという気はなかったですか?

「さらさらなかったですね。僕は最終的には映画監督になりたいと思って、日大芸術学部に行きましたから。その手段としてCM業界で仕事してみたいと。だから就職してすぐ、89年の5月12日に修斗はプロ化してるんですけど、見てないんですよ。当時バブルでCM業界はすごく忙しくて、格通を買うのがやっとぐらいの生活でした。海外ロケに出たり思い通りの生活をしてはいたんだけど、格闘技が見られない生活、雑誌を見て「あぁ行きてぇな」とか思う生活がずっと続いたんです。

その翌々年の91年5月にリングスが旗揚げするんですよ。UWFがバラバラになった頃は、治郎丸さんともあまり連絡を取っていなくて。それで前田日明がリングスを旗揚げすると知った直後ぐらいに、また治郎丸さんから電話がかかってきたんです。治郎丸さんは旗揚げの時からリングスのメインプランナーになるんですよ。『世界最強の男はリングスが決める』とか『アストラルバウト』なんていう言葉は治郎丸さんのアイデアです。それで電話がかかってきて、「若林、お前リングス入らんか」って。結局その話は断るんですけど、旗揚げ戦は横浜アリーナまで見に行ってるんですね。

その後リングスは大阪、札幌と回って、12月に有明コロシアムで『炎上』という大会を開催するんです。一度断ったにも係わらず、その後も治郎丸さんからの勧誘は続いてました。僕もちょっと心が動きつつあったのか、リングス・ロシアが出来たときには、会社の機材を内緒で使って、ロシア語版リングスルール解説ビデオを作ったりしています。

そんな関係で、『炎上』はチケットを貰って見に行ったんです。この時の第1試合が木村浩一郎vsグロム・ザザ。これが見てたら、なんだかUWFっぽくない。木村浩一郎に後で聞いたら、試合直前に治郎丸さんがやって来て、「浩ちゃん、ガチでやっていいから」って言われたらしいんですよ。この日は佐竹や角田さんの試合もガチっぽかったし、「もしかして」と思ったのね。

そしたら案の定、大会終わって治郎丸さんから「あれガチだったんだよ。角田の試合も佐竹の試合もガチ。俺はリングスを変えていくから、見てろよ」って言われて。当時、僕はもう二人も子供がいたし、そのときはコマーシャル業界もまだまだバブルだったから、給料はすごくよかったんですよ。だからすごく悩んだんだけど、本音は「リングスやってみてぇ」って、『炎上』を見終わった段階で思ってましたね。

その1週間後ぐらいにリングスの忘年会が六本木であって、僕もそれに呼ばれたんですよ。この時初めて直接、前田さんに若林太郎という人間を認識してもらって、「ガチンコの団体をやっていきたいんだよ。

頼むよ、若林くん」って言われたんですよ。そりゃあもう、やるしかないって思うわけですよ。これが91年の年末ですね。

CM制作会社を辞めたもう一つの理由としては、翌年の3月で入社からちょうど丸3年になるタイミングだったことです。どんなことがあっても3年は辞めないと思って会社に入ったんです。ちょうど区切りもいいし、だから3月に辞めてリングスに入る決意をしました。

その段階で有給が2カ月くらいたまっていたんで、1月の興行から全ての興行についていくんです。有明の次は1月のNKホール。角田vsロブ・カーマン、佐竹vsジェラルド・ゴルドー、長井満也と木村浩一郎と試合もガッチガチの試合ばかりで、俺はもうこれに人生を賭けるんだって思ってました。2月の尼崎大会からは佐竹が入場するときに登場するゴジラの着ぐるみに入ったりもしています。正式入社の直前にあったのが、3月26日、『硬派er～格闘技オリンピック1』。僕はリングス・スタッフとして手伝いに行って、そこで初めて石井館長とも面識ができました。当時は正道会館がイベントを始める前で、当日の運営にはかなりリングスが協力してたんです。

それで、4月1日から晴れて社員になって最初の興行は広島ですね。『雷』（いかずち）っていう。このときは初めて1週間ぐらい前に広島へ前乗りして、いわゆるプロレスの宣伝カーを運転して広島中をグルグル回りました（笑）。それで、広島大会で唯一ガチだったのが、西（良典）さんvsウィリー・ピータース。そしてその次の興行が、有明での1周年記念大会「光臨」。

当時、前田さんは僕を含めてスタッフには八百長の話は一切してなかったのね。外国人が来日するとルールミーティングをして、その後に前田道場で打ち合わせをしてるんだけど、そこには通訳の人しか行けない。僕はその仕組みを知っていたけど、他のスタッフ達にはまだ信じている人達もいた。僕は治郎丸さんの次のセカンド・プランナーだったけど、マッチメイクに口も出してたし、治郎丸さんや前田さんにも意見を言ってました。で、治郎丸さんはガチを増やしたいと意見していたらしいんだけど、ガチをすると盛り上がらない、かつケガ人が多いってことで、広島大会に象徴されるように八百長試合が増えていたんです。それをどうやら治郎丸さんが、いろんな所で愚痴っていたらしい。それが耳に入って前田さんが激怒した。

リングスは週に1回、スタッフが集まる会議をしていたんですが、その場で前田さんが治郎丸さんに対して、ウィリー・ウィリアムスを呼ぶために買ってあった『四角いジャングル』全11巻を両手でガッとつか



若林氏がかかわった"新リングス"旗揚げビデオ。

前田日明にリングスの忘年会で誘われて最終的に入社を決意した。

んで投げつけたんですよ。それで「おまえ出てけ」となって、治郎丸さんは失脚するんです。その後、前田さんからは「これからは若林くん頼むよ」って言われて。現場のトップとしてマッチメイクをやるようになって、前田さんの家に行ったりした時代がちょっとあるわけです。

当然、治郎丸さんはリベンジを企てていて、「真剣勝負をやるというから俺は手伝ったんだから、俺は前田抜きのリングスを作る」。この時の僕はやや治郎丸さん寄りでした。やはり大学の先輩・後輩だったし。それで治郎丸さん主導で、前田さん以外のリングス社員が集まる秘密会議とかが行なわれるようになるんです。この時の案では、「前田以外のネットワークを全部こっちへ持ってきて、ガチンコの団体を旗揚げしよう。そのポスターには『ガチ』と大きく書くんだ」って

――このムックに相応しい話ですね（笑）

「有明の次が仙台だったんだけど、もう自分を騙しながらやってられないし、『興行の試合内容に自信が持てない、人生を賭ける自信が持てないので退職します』って退職願を書いてリングスを辞めたんですよ。前田さんは寝耳に水だったと思うけど。僕とOさんっていう女性はそこで抜けて、治郎丸さんと3人で作ったのがオフィス・ミツルギなんですよ。ミツルギっていうのは治郎丸さんの命名で、「身を剣にする」っていう意味で、格闘技の会社だよと。

その後もいろいろあったけど、前田日明っていう人は嫌いじゃないし、もうちょっと遅く生まれてたらガチンコの世界の人になれた人だと思っています。ただそばにいる人間が最悪だった。なぜか才能のある人って意外と周りの人間に恵まれてないことが多くて、どんどん人が離れてしまいがちですよね。

ミツルギは、この年の年末に旗揚げ興行をやるべく東京武道館を押さえるんです。仕事を始めてみて分かったのは、治郎丸さんはあくまでプランナーであって、イベントのプロでは無かったということ。だから作業は手探りでした。前田日明パワーで巧くいってた交渉も、インディペンデントとなるとなかなか苦しいわけです。当初の案では、メインは平直行vs市原海樹っていうカードにして、ヴォルク・ハンも出そうとしていました。密かにハンが宿泊してるホテルへ行って、ロシア語辞典を見ながら会話したり（笑）。「大丈夫だ」とか言ってるうちに、ハンはリングスと新しくできるリングスの両方に上がると、あちこちで言っていたことが判明して。

治郎丸さんは古武道関係にも詳しくて、柳生心眼流の島津兼治先生とか、新体道の青木宏之先生とか、戸隠流の初見良昭先生とか、僕も憧れだったんで紹介してもらったりしてたんですけど、なかなか選手も集まらないから、その先生たちが演舞とトークライブをやるとか言い出した。「それ格闘技興行じゃないっすよ。いっそシンポジウムとかしたらどうすか」「それや、若林」と。それが「格闘技シンポジウム」です。治郎丸さんに「何したらいいと思う？」と聞かれて、僕は「一つやりたい試合があるから、佐山さんを口説いてください」と。それが朝日昇vs坂本一弘だったんです。この頃から僕はシューティングって面白いじゃんと思い出していたんです。この案はケンもほろろに断られて、実現できなかったんですけどね。

ミツルギ時代には、ライター業も行うようになっていきます。僕のライターデビューは、リングスのパンフにウィリー・ウィリアムスの紹介記事を書いたのが始まり。その後リングスのファンクラブ会報「キャプチュード」なんかも作ってました。ミツルギに入るときに、「家族がいるから給料をください」と。そしたら「分かった。その代わり働かんとアカン。ライターをやれ」となって。それで格通で「格闘カルトQ」っていう連載を書いたりしてました。まあ、

僕が書いた企画書が「K-1」に。館長のもとでプランナーになる。

なし崩し的にライターをしなきゃいけなかったわけです。

あと当時、治郎丸さんと石井館長の付き合いもあって、92年夏頃に「世界のキックチャンピオンを集めてトーナメントやろうと思ってんのや。治郎丸ちゃん、企画書書いてや」と言われて、それを僕が書いたんです。当時僕たちが考えたのは、『FIST＝ファイティング・インターナショナル・ストロンゲスト・トーナメント』という名前で。「内容はいいけど、タイトルはこちらで考えるわ」って館長は持っていって、「通ったよ、あの企画」ってなった（笑）。それがK-1。

その後治郎丸さんはだんだんと宗教的なことに興味を持つようになって、そっち方面の人と仲良くなって…。そういう仕事までしたくなかったし、格闘技シンポジウムが失敗して、会社経営が厳しくなってきた。それで「辞めます」って言ったのが、92年の頭ですね。

当時は編集長だった谷川（貞治）さんから「格通入らない？」、石井館長からも「K-1やらんか」って誘われて、僕としては「辞めても大丈夫かな」っていうのがあったんです。で、いろいろ考えた結果、谷川さんと石井館長に、「ちょっとフリーで試してみたいので、できれば社員という形ではないんですが、仕事をさせてほしいです」って言って、事務所も何もないフリーとしてスタートを切ることになるんですよ。僕が正道の仕事を初めてやったのは、後楽園での『聖戦1』のビデオの監督。外部プランナーとして会場に行くようになったのは第1回目のK-1GPからです。当時正道会館が高田馬場に道場を開いたばかりで、「道場に机用意してあるから使ってや」って館長に言われて、「じゃあそこで仕事すればいいか」って、だんだんそれからK-1のメインプランナーみたいになっていくわけですよ。

その頂点がたぶん、93年9月5日に武道館で開催した『K-1イリュージョン林の章』。ビデオ監督もやってるんですけど、この時は裏側の運営をかなり上のほうでやらせてもらって、マッチメイクにも口を出させてもらった。リングスでは興行の基本を学んだんだけど、応用・実践として全体の運営の仕切りをやらせてもらった感じですね。シュートボクシングにいた中崎寿光君が僕の下に入ったこともあって、彼を通じて外国人選手をブッキングしたりする仕事もするようになっていきましたね。でも人間関係のもつれなんかもあって、この年の年末に両国国技館で開催されたK-2グランプリからスタッフを外されるんです。ビデオ監督だけやらされて、だったらもういいやってことでこれを最後にK-1を離れることになります。

ただ、石井館長にはすごくいろいろなことを教えられましたね。正道会館時代はいつも館長に連れて歩いてもらって、館長室にも出入りさせてもらっていたし、選手のブッキングや、イベントを仕切らせてもらったし。そういう意味では今やってることの根幹はあそこでできたと言えます。御世辞になるかもしれないけど、格闘技界で初めてすごいと思えたのが、石井館長なんですよ。この人、仕事できる人だっていう。思いついたらすぐ電話する。ダメでも電話する。強引に口説く。そういうことができて、頭の切り替えが早い。キックが人生賭けたいほど好きだったら、あのままくっついてでもK-1でやっていたと思います。

K-1を離れて、さあどうしようってことになって、僕がいたCM会社の上司に相談したんですよ。そしたらその元上司が副業で経営している会社がバックアップしてくれることになって、それで作るのがテルティウス・ファクトリーなんですよ。93年年末のK-1が終わってすぐその話になって、正月明けには高田馬場に事務所を見つけてました。でも一人じゃ厳しいし、それで名前が浮かんだのが、面識があってややも僕の中で治郎丸さんとダブる部分があった布施鋼治さんだったんです。当時、布施さんも仕事場を探していたから、一緒にやろうってことになって。テルティウス・ファクトリーというのは場所の名前で、財布は全然別だったんですよ。要は共通の仕事場というだけだったんですけど、事務所の名前をつけた方が、いろんなことができるみたいに見えていいだろうって。僕はもう団体運営には懲りてて、ビデオ監督とライターで食っていこうとしてました。

パンクラスの尾崎社長に電話して

…ンの総合

そんなある日、西良典さんがやって来るわけです。「長崎で道衣を着た総合の大会をやるんで手伝ってもらえませんか」って言われて、「それはやりたい！」って。当時Jリーグが始まったばっかりで、それで「トーナメント・オブ・J」って名前を考えて、ルールを書いたんですよ。その時に選手をブッキングをしたのは僕とフルコンの記者だったMくん。僕は格通に記事を書いて、なおかつビデオもやったんです」

——93年5月に旗揚げしたパンクラスについては、当時どう思っていたんですか？

「NKの旗揚げ戦には、僕はK-1のスタッフとして石井館長と見に行ってるんですよ。僕の中では評価してたし、「自分が入るべきだったのはリングじゃなくて、パンクラスだった」と思った瞬間もあったぐらいです。当時は『プロレスの達人』で尾崎社長のインタビューもしていたし、第2回UFCでジェイソン・デルーシアに日本の状況を訪ねられた時にもパンクラスを推薦したりしていました。そういう意味ではパンクラスに偏見なかったんですよ。まあ正直、みんなに思われてるほど、今も無いんですけどね。

パンクラスに選手を紹介したこともありますよ。スコット・バムバム・ソルビンっていうSBに1、2回来ていたスープレックスの得意な選手がいたんです。彼から日本で戦いたいという話が来た時に、だったらパンクラスが丁度いいと思って、僕は尾崎さんに電話してるんですよ。実際の招聘交渉の仲立ちとかは一切してないんだけど、そういう話を持っていったりもしてました。

94年1月にパンクラスが横浜文体で初めて興行を行った時、この時が山田学さんが初めてパンクラスに挨拶に行った大会だったんですけど、なぜか帰りに「フグでも食おうや！」って石井館長に誘われたんですよ。この時一緒にフグを食ったのが、石井



シューティングにかかわり始めてつくったビデオの数々。

もともと僕がリングスでやろうと思って……つかもしれないけど、選手生命を左右する

パンクラスの尾崎社長に電話して外国人選手を紹介したこともある。

館長、僕、西（良典）さん、山田さん、そして山田さんの付き添いで来ていた朝日（昇）さんっていう5人。この時に朝日さんと面識ができて、「いまシューティングがオープン化しているから今度他流派の選手も紹介してほしい」と言われたのが始まりで、94年頭から選手を紹介するようになったんです。

この年の7月には最初のバリジャパがありました。この時はイベントの仕切りは福昌堂がやってたんですよ。山田編集長の下で、実際に動いてたのはＴＯＪで知り合いになってたM氏。そのM氏と電話で話をしてたら「外人が全然集まらない」と言われて、「俺、外国人選手に知ってる奴たくさんいるから、声かけてもいいよ」ってことで、デル・クックやゴルドーに電話したんですよ。

この時ウィリー・ピータースの参戦が報じられたことがあったんだけど、これはゴルドー経由で本人から出場希望があったんで、電話でドールマンに確認したんですよ。そしたら「大丈夫だ」って言うから、M氏に「ウィリー・ピータースが出ると言ってるんですけど」と伝えたんですよ。ただ「絶対契約しているはずだから、年契の有無をリングスに確認してもらえますか」と言ったんだけど、すぐに雑誌に出ちゃった。そしたら案の定、リングスから抗議が来て、いつのまにか僕がウィリー・ピータースを引き抜こうとしたことになっていたという（苦笑）。

当時僕は、ＶＴＪ94直前に博多スターレーンで行われた『Fighting Sprits ”鼓動“ 鼓の章』のプランナーもやってたんだけど、この大会に前田さんがゲストで来たんですよ。直接会うのもリングス辞めて以来久々だし、マイったなぁと思ったけど、前田さんに挨拶しに行ったんですよ。「すいません、前田さん、行き違いがあったみたいでご迷惑をおかけしました」って言ったら、「消えろ」って言われて、それから前田さんと喋ったことはないんです。

そういう流れでＶＴＪ94ではヒクソン以外の選手は、僕がブッキングしたんです。ただ直接修斗側とやったわけではなくて、間に福昌堂が入ってるんで、僕はM氏とだけやりとりしていたんですよ。そしたらウィリー・ピータース事件とか細かいトラブルだとかは全て僕の責任になったらしくて、大会直後にスタッフが集められた時に、石山会長に「なんだこの始末は！」って言われたんですよ。その上、通訳の姉ちゃんにまで皮肉を言われたりして、僕的にはギャラももらわずに手伝っていたんで、プッツン切れて、もう一生修斗は手伝わないとこの日の夜は周りに宣言してました。やっぱり団体の仕事はするもんじゃないと。

でも、その何週間か後に佐山さんから直接電話が来たんですよ。ＶＴＪ94の前段階で佐山さんとは顔見知りになってました。誰かに紹介されて、「いつもありがとうございます」とか言われて。旧ＵＷＦ時代はスーパータイガーのファンでしたから、「佐山聡にありがとうございますと言われちゃったよ、俺」っていうファン的に盛り上がってました（笑）。この時は京王プラザホテルで佐山さんに会って、「また次もバリジャパやってもらえませんか」って言われたんですよ。そう佐山さんから言われてしまうと断るに断れず、でも僕からも条件を出したんです。「バリジャパではなく、僕は修斗でやりたいことがあります。修斗の公式戦を手伝わせてください。」と。もう一つ、当時は修斗のビデオが出てなかったんですよ。だから公式ビデオを作らせてくれと。金は全部僕が出します、僕の会社で自主制作しますと。それを条件に僕は正式に修斗を手伝うことにしたんです。

その1発目が94年9月26日の「バーリ・トゥード・アクセス」。中井祐樹vsアートウー・カチャーがメインでした。その段階ではビデオ監督がメインの付き合い。ゆえに本部席にも一切座ったりしていません。

もともと僕がリングスでやろうと思って始められなかったことは、アマチュアの構築なんですよ。修斗では全日本アマ修斗がこの年の6月から始まっていて、「俺がやろうとしてたことって、こういうことが一番おさまりのいい形かも」って思いながら大会を見ていました。まだビジネス的ではないのかもしれないけど、総合格闘技の競技化を目指すなら、いまはシューティングしかありえない、と考えていました」

――アマチュア修斗の存在が大きかったんですか？

「当時はまだ、アマチュア修斗が今のような形になると思っていなくて、全日本アマ修斗というワクがあって、そこに選手を出せて査定もできる。なおかつ大道塾とか真武館とかそういう所とリンクして、トップ選手は修斗のリングに上がってもらいたいな、ということを考えていました。佐山さんの「修斗のルールで戦う人がシューターですから」っていうのが、すごく胸に響いてて。

9月の後楽園大会は撮影したにも係わらず、グレイシー側と修斗との契約がちゃんとできてなくてオクラ入り。制作費はすべて持ち出しだったので、頭痛かったですね。実際にリリースできたのは、次の11月の後楽園での『バーリ・トゥード・アクセス2』から。ルミナのプロデビュー戦があって、なおかつ中井さんがウェルター級チャンピオンになった大会でした。そういう意味ではやっぱり運命的なものがあったのかなと、今にすれば思いますね。

翌年のＶＴＪ95も、最初は第1回大会のように外国人を呼ぶ用意をしてたんだけど、つたない僕の英語のせいもあったり、いろんな人に手伝ってもらった中で情報が錯綜して、中村頼永さんたちと大喧嘩するんですよ。それで、ＶＴＪ95は僕一切手伝わないんです。最初、中井さんとはキモが対戦する予定だったんですが話がまとまらず、代わりにジェラルド・ゴルドーの参戦が決まりました。ゴルドーとは僕は仲が良かった分、彼の残虐性も分かっていたので、あのトーナメント組合せが決まったときには、すごく反対しました。佐山さんに「勝つかもしれないけど、選手生命を左右するような大怪我をする可能性があるから止めてください」と直訴するために大宮まで行ったんですけど、「僕が負けるわけないじゃないですか」という中井さんの言葉に押し切られました。あれはいまでも後悔しています。

このＶＴＪ95ぐらいの頃には、もう僕は格通では原稿を書かなくなってます。これには骨法とのいきさつが関係していました。当時、格通は骨法に大きく紙面を割いていたんですが、古武道マニアの私としては骨法が日本武道の粋みたいな扱われ方をすることにもの凄い憤りを感じてました。まずはその歴史の部分ですね。まあいわいる由緒正しい古武道流派も、その歴史は史実に基づいているとは言い難いものばかりなんですけどね。

その骨法が初めて開催した「骨法の祭典」が確か1回目のＵＦＣと同じ日にあったんだけど、会場で見てる時に、知り合いのプロレス・ライターの人に聞かれたのをこれ幸いに、つい調子に乗ってここがおかしいとかさんざんぶちまけてたんですよ。今から考えると、全くもって大人気ないんだけどね。どうやらそれを、そばにいた道場生とかが聞いてたらしいんだよね。伝聞によると堀辺さんと仲が良かったターザンがこれに怒って、「若林に書かせるな」ってことになって、突然ある日から僕は格通で書けなくなるんですよ。ただ僕もそこで負けたくなかったし、謝る必要もないと思ってた。

ただし、僕自身が一番怒ったのは、堀辺さんや骨法に対してではなく、事実を隠蔽して格通がやっていることがとにかくイヤだった。堀辺さんがベースボールマガジン社の顧問になる時も、陰で骨法の悪口を言ってた格通のT氏は、「無記名でいいから堀辺さんを糾弾する文書を会社に送ってくれ」なんて頼んできてた。その人が僕を切ったわけだから、これこそ八百長だよね。骨法を取って、僕を切った段階で、たぶん格通の雑誌としての方向性は決まったところがあると思う。「ああ格闘技雑誌って、しょせんプロレス雑誌の子分なんだな」っ

佐山さんはみんな反対にもかかわらず独断でグラウンドパンチの導入を決定。

ていうのは思い知らされましたね。

後に堀辺さんとは話すようにもなったし、新しいものとしてやってるんであれば、それはその人の方法論だからと、今は認めているところもあります。選手を集めて自分の方法論でやって、世に勝負するわけだから、堀辺さんが批判されるべきところは何もない。それは堀辺さんのビジネスだから。『柔術バイブル』の歴史コラムを書いたときには、事実誤認があるって電話が来て、堀辺さんに会いに行ったんです。そのときに「君とは敵対している部分があったと思うけど、僕たちがターザンに頼んで格通に書かせなくなったってことはないよ。ターザンさんが判断してやったかもしれないけど、それは誤解しないでくれ」って、直接ご本人から言われました」

——では、もうそこからライターの道は絶たれた？

「そこでライターを辞めたわけではないです。とりあえずメインの仕事でしたし。というか格通から「切ります」とかハッキリ言われたことはないから。焦りはあったけど、つきあいはあったし。その後、フルコンが合気道特集をやるんで書いてくれって言われて、フルコンに書いたんです。その後は『格闘王』（福昌堂のムックシリーズ）によく書くようになるんですよ。

そんな状況の中、VTJ95の後に、僕は朝日さん、坂本さんと一緒にオランダへ行ってるんですよ。それは外国人選手を発掘するという名目で行きました。たしかこのぐらいの頃から、プランナー契約をするんです。比重としては自分の事務所にいながら修斗の団体の仕事をするようになっていきました。

このタイミングで起こったのは、修斗のグラウンドパンチ解禁。屋台村ヨンドンでアマチュア修斗の横浜フリーファイトの第1回目が開催されて、この時にやったプロマッチで初めてグラウンドパンチが解禁されるんですよ。グラウンドパンチの解禁には、最初僕はものすごく反対していたんです。バリジャパ95で中井さんが目をやった直後ということもあるんだけど、「なんでそんな急に解禁しなきゃならないんですか。絶対反対です。技術なくなるし、足関にいく選手がいなくなりますよ」って。当時のシューティング関係者はほぼ全員反対をしていました。でも佐山さんにある日説得されるんですよ。「UFCにしてもバリジャパにしても体重差があって、技術力のある人間とない人間を戦わせている。修斗では、同じ体重で技術力のある者同士をやらせれば、絶対に残酷にならない」と3時間くらい説得されたんですよ。

たぶん僕に反対されるとめんどくさいからというのと、僕を説得することで周りの選手を説得させようとしてたんだと思うんです。「アマチュアでポジショニングをちゃんと学んでやっていけば、グラウンドパンチは危なくない。殴られないことができる。その例がアートゥー・カチャーvs中井、中井vs草柳であって、絶対ああいう試合にみんななるから」って。それで俺も賛成するようになって、結局選手を説得して回ることになるんです」

——そのときは佐山さんが独断で強引に決めた、みたいに言われましたが……。

「独断で強引だったとは思います。でも結局、なんで一時期ポジショニング・ポイントのあるルールをやったのかというと、グラウンドパンチを解禁するためにやってたんですよね。「ポジションを覚えれば殴れないんだよ。足でコントロールすれば殴られないでしょ。それを解禁した時の修斗はUFCとも全く違ったものになる」って言われたんですよ。いま振りかえると、この判断は全くもって正しいよね。で、恐ろしいと思うのは、佐山さんがいなくてグラウンドパンチを解禁していなかったら、たぶんその後の修斗の発展はないと思うんですよ。だからやっぱり佐山さんは天才としかいいようがないですよね。

オランダへ行った成果や、グラウンドパンチ解禁などの変革が、集大成として結実したのは、95年7月29日に大宮スケートセンターで開催した『コンプリート・バーリ・トゥード・アクセス』です。この大会が今の興行の原型になったと言っていいでしょう。かなりエキサイティングで面白い興行になった。そこでみんな意見が変わったんです。グラウンドパンチ解禁は、間違いじゃなかったって。

それで次の興行は、突然駒沢でやることになったんですよ。最初に考えたメインはムリーロ・ブスタマンチvsエンセン井上。でも、ブスタマンチのOKは取れたんだけど、エンセンを出せなくなっちゃった。この大会の直前に行われたUVFに協力することになってて、エンセンを出す話があったんだけど、様々な事情があって怪我があるから出られないことにしてたんですよ。その手前もあって、エンセンは出せないと。それで急遽組むことになったのが、中井さんとジアン・マシャドの柔術マッチだったんです。さらにはケンドー・ナガサキさんがバリジャパに出たいと言いきたんで、じゃあその前段階として駒沢にも出てもらいましょうと。

実はこの大会の前後から、スポンサーだった龍車グループと佐山さんがしっくりいかなくなってきたんです。僕は直接佐山さんから、「万が一、龍車が離れてしまってスポンサーがいなくなったら厳しいけど、最悪の場合は自分がタイガーマスクに復帰してお金を稼いで、修斗を守るから安心して」って言われたんです。たぶんこれは選手たちには言ってなかったと思います。その流れがあって、よく大宮に遊びに来てた小林邦昭さんを口説いて、ダメ押しで佐山さんとのエキシビションも組み入れることになったんです。ところが、本番で佐山さんが小林さんをKOしちゃった。この大会から本部席に座るようになってた僕は、対応に大わらわでした。

この年からこの業界に現れたのがWKネットワークの久保社長です。たしか95年初頭だったと思うんですが、「トーナメント・オブ・J」を東京でやろうって話が出て、その絡みでまだ目黒にあった事務所で初めてお会いしました。ただ最初、メインのプランナーは例のM氏が務めてました。ただ彼もイベントは仕切ったことのない人だからなかなかうまく行かなくて、それで改めて僕が呼ばれたというわけです。大会当日はディレクターもやったし、ブッキングもやって、僕が仕切る大会になったんですよ。その後、様々な嘘がバレてM氏は慧舟會から失脚するんです。それでしばらくは、慧舟會でもプランナー的な役割を務めることになって行くんです。

駒沢大会の後、目の怪我で現役を続けられなくなった中井さんを、日本プロシューティングのプロデューサーにしようということになって、96年の1月大会から僕と中井さんの2人で興行を仕切るようになります。この時2人で考えたのは、新人を育てなければいけないということ。今までの試合数では無理だから、MAキックみたいに一興行で試合をたくさん組もうって言い出して、その頃は12試合ぐらい組むようになってました。

同じ頃、当時レフェリーだった小方康至氏と鈴木利治の二人から、修斗にコミッションを作りたいという相談がありました。もちろん僕は大賛成だったので、二人は高田馬場のテルティウス・ファクトリーで3日ぐらい泊り込んで、ルールを明文化したんですよ。それで、「コミッションを作るために、俺たちにそういう全権を譲ってほしいっていうのを佐山さんに言おうと思うんですけど、絶対佐山さんキレると思うんですよ」って鈴木利治に暗い顔で言われたから、「じゃあ俺も一緒に行くから行こうよ」って付いて行って、大宮ジムで佐山さんと話したんです。そしたら佐山さんは「いいじゃない。やってやって、そういうのやってもらいたかったんだよ。でも大変だよ、文句言われるだけだよ」って言ったんです。こんなこと言えないですよね、普通。ルールに関する権利をあなたたちでくださいと言ってるんですよ、創始者に。それで修斗コミッションができて、初めての興行が5月7日後楽園大会、プロ化7周年記念興行。メインに川口（健次）さんとエリ

佐山外しの秘密会議が行われて 修斗は坂本新体制になった。

ック・パーソンのチャンピオンシップがあって、歴代シューターが来て、佐山さんがリングに上がって歴代チャンピオンと記念写真を撮った。奇しくもこれが日本プロシューティングの最後のプロ興行だったんです」

――佐山離脱の真相はどこでも語られてないんですが、それは話してもらえますか？

「伝聞もあるので事実誤認もあるかもしれないんだけど、龍車グループが大きな企業と合弁事業をすることになった。合弁事業をするからには、その会社が健全経営されてるかどうかがやっぱり重要になってくるんですよ。結局、龍車は非常に無理をして、黒字に1回もなったことのない日本プロシューティングを関連会社でやっていたわけですよ。それがネックになって、切り離さなければいけないという話になっていったらしいんです。格闘技的には天才なんだけど、それゆえ計画性とは無縁だし、実務という面では佐山さんがトップではどうしようもないというのが関係者の一致した意見だったんですよ。でも僕自身は、実務の面から佐山さんが外れるのはしょうがないけど、どんなことがあっても修斗から佐山さんは抜けるべきではないと一貫して主張してたんですよ。

それでバリジャパ96が終わった日の夜ぐらいから不穏な動きがありました。もう佐山さんとやってられない、みたいな話がホテルのあちこちで始まり出して。それから少し経って、7月中旬だったと思う。コミッションの2人とは仲良かったんで、「明日の会議に若林さん行きますか？」って聞かれた。当時、佐山さんやスタッフ、トップ選手が揃って、時々運営会議と称されるものが行われていたんです。そこで全体の方向性を決めたり、事後報告会とかあったりしたんですけど、その日の会議というのは当時のプロ選手全員に声がかかっていた。でも僕には声がかかってなかったんですよ。変だなと思いながら会場である大宮ジムに行ったんですが、「若林くんは出ないでくれ」って言われて、僕はその会議に出られなかったんです。で、佐山さんと大宮ジムの事務室で喋ってたんですよ。なにやってんすかね、みたいな感じで。その時に佐山さんを外そうっていう会議が行なわれていて、最終的に多数決をしたらしいんです。この時反対に手を上げたのは、小方康至と鈴木利治の2人だけだったと聞いています」

――田中健一も反対したと聞いたことがあります。

「そうかもしれません。あと渡部優一さんも佐山派だからということで会議には呼ばれていなかった。中にはあまりにも突然過ぎて、何が起こってるか分からなくて、反対できなかったと後に言っている人もいます。明確に自分は外すことに賛成したって言っているのは、坂本（一弘）さんと中井さんの2人だけです。この2人は「だからこそ、自分には修斗を守る責任もある」と言ってますが。僕も佐山さんと一緒に外そうって話になったらしいんですけど、当時の若手選手たちが「外国人選手を呼んだり、いろいろやってくれてるんだから」って言ってくれたらしく、僕だけそのまま続けるってことになったんです。ただその会議には僕自身は出てないので、それ以上の詳しい内容ははっきりは言えませんけど。

その会議が終わった後に龍車グループのトップ二人と中村頼永さんがやって来て、「佐山さんに外れてもらうことをみんなで決議したんだよ」って話をしたんです。その時に説明された会議の内容は、グラウンドパンチを鶴の一声で解禁したことについていけないってみんなが言ってるということが、主な理由に挙げられていました。その日を最後に、佐山さんは修斗から外れることになるんですよ」

――でも、当時はもうグラウンドパンチに選手も観客も全然馴染んでいた時期じゃないですか。

「実際に会議で話されたこととは別のようですね。ただ当時、佐山さんはタイガーマスクとして新日本プロレスに上がりだしてたんですよ。これが選手にとっては、佐山さんの裏切りに感じられていたはずです。これには理由があって、小林邦昭さんが新日を説得して駒沢に出たにも関わらず、結果的にKOされたじゃないですか。そのことで小林さんは新日をクビになりそうになったんですよ、責められて。それで小林さんを救うために佐山さんは新日本プロレスに出てたらしいんです。「自分がタイガーマスクをやって修斗を守る」という話を聞いてた僕には納得できても、詳しい話を知らない選手には理解できない心変わりに見えたんでしょう。ただ、佐山さんがすごいと思うのは、そこで修斗から抜けたことですよ。最終的に自分が抜けることで事態が収拾したわけじゃないですか。修斗を成り立たせるために、ものすごい額の借金を作ってそれまでやってきた訳ですから。修斗を競技として僕らに残してくれたんですよ、佐山さんは。

それで96年10月の大会から、主催が日本プロシューティングからワールド修斗に変わり、修斗は坂本体制になっていくんです。

この頃、慧舟會は骨法と骨舟同盟というのを作ってたんですけど、久保社長から、これに修斗も加わって骨法、慧舟會と連合みたいなネットワークを作ろうと提案があったんです。それの2回目の打ち合わせに修斗側から中井祐樹と僕、慧舟會側から久保社長と慧舟會に入ったばかりの小路晃選手とで東中野で落ち合って、近くの喫茶店に入ったんです。そこで久保社長が「中井くん、道場やらないのかい？　援助するよ。物件探してあげるよ」って話をしたんですよ。その時に「若林くん、中井くんと一緒にやればいいじゃないか。1人で道場やるのは大変だし、手伝うべきじゃないの」って言われてから、「道場かぁ」って。

中井祐樹という人は、片方の目が見えなくなって約1年も経ってベルトをどうするかっていう話になったとき、「引退する前にもう1試合だけ試合をやらせてくれ。それで目が見えなくなってもしょうがない。最後はルミナとやらせてくれ。チャンピオンになった以上は下の者の挑戦を一度は受けなきゃいけない、それが責任だから。負ける気は一切しない、多分勝つと思うけど、負けても悔いがないから、最後に1試合やらせてくれ」と言ったんですよ。その男気にしびれたというか、それはきっと実現してあげられないんだろうけど、中井さんが修斗のプロデューサーをやってる間はとにかくこの男に付き合っていこうっていう気



伝説のミニコミ誌『総合格闘技世界』（2号で休刊）。

久保社長が「道場やりなよ」とひと言。パレストラと修斗が僕の終着駅です。

持ちになって、これをきっかけに修斗の運営に生活の中心がシフトしていったんですよ。

当時ライター業も行き詰まっていたし、仕事も修斗のプランナーがほとんどを占めていて、生活も厳しくなってきた。格闘技界に入っていろんな人を見てきたけど、96年頭からバリジャパまでの数カ月を密接に過ごして、年下なんだけどすごくしっかりしているし、最初はまったく頭になかったんだけど、中井祐樹とやれるなら賭けてもいいかもと思い始めたんです。96年の暮れには中井さんと2人で道場をやろうって決心してて、この段階で「パレストラ」という道場名も決まってました。

ただ物件探しについては久保社長の厚意に甘えっぱなしで、自分たちでは動けないでいました。でもいい物件が見つからない。そんな中、97年1月のルミナvsヒカルド・リッキー・ボテーリョが行われた興行を最後に、僕は修斗のプランナーを降りることになります。

そんなことと、もともとアマチュアをもうちょっと何とかしたいと思ってたことが重なって、この年の5月には、アマチュア総合格闘技を扱う『総合格闘技世界』というミニコミを作ったりしました。でも仕事的には、ちょっとビデオ監督やっていたけど、収入がどんどん減っていって暮らしていけなくなるんですよ。道場をやろうと思ったけどなかなか始められないし、家族もいるから親戚も心配し始めて、栃木の木材会社に係長待遇かなんかで入社する話が親戚や親の間でどんどん煮詰まってきた。

「俺もとうとう格闘技界を辞める時が来たのか。事務所たたんで格闘技界を去るしかないのか」って時に、江古田の物件が見つかったんです。狭いんだけど、開通直前の大江戸線の駅から非常に近いし、中井さんも見て「やろう」って話になって、そこから一気に具体化して、97年12月のパレストラ東京開設にこぎ着けるわけです。

――前田日明、石井館長、佐山聡と来て、最後は中井祐樹とパートナーが変わりましたが。

「基本的に大きな意味で、やることはあまり変わってない。総合格闘技のムーブメントの最初の部分から係わった人間として、競技化というものを夢見れば、修斗に行き着くのは必然だったと思う。誤解を恐れずに言えば、やや波瀾万丈ではあったけれど。いま俺のやってることは、俺のリングスなの。俺にとってリングスとはこういうものだったんです。

以前、ゼンショーという会社がリングスを応援してたんだけど、ゼンショーの小川社長にこんな話をしていただいたことがあるんですよ。「若いんだし、いろいろやりたいことをやっていいんだよと。でも一つ、リングスに関して君は勘違いしてることがある。理想もあるしやりたいこともあるだろうけど、同時にリングスはビジネスだから。社員がいて給料が入ってる会社でしょう。その時に最終的なハンドリングをする人は責任を取る人なんだ。リングスが誰のビジネスか考えてごらんなさい。リングスは前田日明がやってるビジネスだから、最終決定権は前田日明にあるべきなんだ。それは理解しないとダメだ」。この言葉は、今でも胸に残っています。だからゼンショーの小川社長には本当に感謝してるんですよ。

それもあって、結局なにかあった時にいろいろな団体を辞めようと結論したのは、「俺のビジネスじゃないから」。修斗は徐々にマイビジネスに近くなってきて、中井さんと道場をやろうって決めた時に、完全にマイビジネスにしようと。パレストラと修斗がマイビジネス。修斗・イズ・マイライフ。今のところここが僕の終着駅ですね。

僕が昔夢見たのは、総合格闘技の競技化だった。ミニコミ誌を作っている段階では、各地にあるものを情報的にリンクさせれば何とかなると思っていたけど、いまこうしてアマチュア修斗やってみて思うのは、同じ基準で同じルールでできるものがないとやっぱり大きいものになっていかない。総合格闘技を競技化するっていうのは、修斗である程度達成したかなと思っています」

――今までやってきたパートナーたちと比べて、中井祐樹という人との関係はどうですか?

「今までの人との関係は、僕はあくまでプランナー、助言者で、主と従じゃないけど、誰かのビジネスを助けてきた立場だったんですよ。会社的には、中井さんは社長で僕は社員なので、主と従ではあるんだけど、パートナーですね。パレストラ作った時に、「どうせ半年で仲間割れするよ」とか言われてたんだけど、決定的な大きなケンカはしたことないのね。やっぱり道場を開くまでの長い時間にいろいろなことを話して始めたんで、安定してます。だから、格闘技界に入ってからは、たぶん今が一番幸せですね。」

ニッポンの総合
“裏面史”

若林太郎と格闘技史

1984年	9月7日	旧UWF「ビクトリーウィークス(実力No1決定戦)」(後楽園)
	9月11日	旧UWF「ビクトリーウィークス(実力No1決定戦)」(後楽園)
1985年	9月11日	旧UWF「第2回公式リーグ戦」(後楽園)
1988年	5月12日	第2次UWF「STARTING OVER UWF」(後楽園)
	8月13日	第2次UWF「真夏の格闘技戦　THEPROFESSIONAL BOUT」(有明コロシアム)
1989年	5月18日	修斗「プロ化第1戦」(後楽園)
1991年	5月11日	リングス「ASTRAL STEP 1st."SPIRIT U"」(横浜アリーナ)
	8月2日	リングス「ASTRAL STEP 2nd."AQUA HEAT"」(大阪府立)
	9月14日	リングス「ASTRAL STEP3rd."神威"」(札幌中島体育センター)
	12月7日	リングス「ASTRAL STEP FINAL."炎上"」(有明コロシアム)
1992年	1月25日	リングス「MEGA BATTLE 1st."回天"」(東京 ベイNK)
	3月26日	正道会館「格闘技オリンピック。」(東京体育館)
	4月3日	リングス「MEGA BATTLE 3rd"雷"」(広島SP)
	5月16日	リングス「MEGA BATTLE 4th."光臨"」(有明コロシアム)
	6月25日	リングス「MEGA BATTLE 5th." 獅子吼"」(宮城県スポーツセンター)
	12月11日	ミツルギ「格闘技シンポジウム～総合格闘技開催前夜祭PART1」(東京武道体育館)
1993年	3月30日	「K-1 GRANDPRIX前哨戦～聖戦(サンクチュアリ)。～」(後楽園)
	4月30日	「K-1 GRAND PRIX'93 10万ドル争奪 格闘技世界最強トーナメント」(代々木第1)
	9月4日	「K-1 ILLUSION 風林火山“林の章”」(日本武道館)
	9月21日	パンクラス「YES WE ARE HYBRID WRESTLERS」(東京ベイNK)
	9月30日	修斗「第1回オープントーナメント」(後楽園)
	11月13日	「UFC 1」(アメリカ・コロラド州デンバー)
	11月13日	骨法「第一回骨法の祭典」(後楽園)
	12月19日	「K-2 GRAND PRIX風林火山“山の章”」(両国国技館)
1994年	1月19日	パンクラス「ROAD TO THE CHAMPIONSHIP」(横浜文体)
	3月11日	「UFC　2」(アメリカ・コロラド)
	4月23日	慧舟會「ザ・トーナメント・オブ・J」(長崎県総合体育館)
	6月19日	修斗「全日本アマチュア修斗大会」(町田市総合体育)
	7月16日	大東志塾「鼓動」(博多スターレーン)
	7月29日	「Vale Tudo Japan 94」(東京ベイNK)
	9月26日	修斗「VALE TUDO ACCESS」(後楽園)
	11月7日	修斗「VALE TUDO ACCESS」(後楽園)
1995年	4月20日	「Vale Tudo Japan Open 95」(東京ベイNK)
	6月4日	修斗「横浜フリーファイト」(屋台村ヨンドン)
	7月29日	修斗「COMPLETE VALE TUDO ACCESS」(大宮スケート)
	8月4日	UVF「UVF 2nd」(東京ベイNK)
	9月26日	修斗「VALE TUDO PERCEPTION」(駒沢公園総合)
	10月13日	慧舟會「ザ・トーナメント・オブ・J95」(東京武道館)
1996年	1月20日	修斗「VALE TUDO JUNCTION 1」(後楽園)
	5月7日	修斗「VALE TUDO JUNCTION　3」(後楽園)
	7月7日	「Vale Tudo Japan 96」(東京ベイNK)
	7月28日	修斗「FREE-FIGHT KAWASAKI」(クラブチッタ川崎)
	10月4日	修斗「Let's get lost」(後楽園)
1997年	1月18日	修斗「Reconquista」(後楽園)

Taro Wakabayasi
わかばやし・たろう

1965年7月8日、大阪生まれの北海道育ち。日大芸術学部卒業後、CM制作会社電通プロックス（現：電通テック）に入社。92年にリングスに入社するも、数カ月で退社。ミツルギを経てフリープランナーとなり、1年目のK-1にスタッフとして参加。同時にフリーライターおよびビデオ監督としての活動も開始。93年には布施鋼治氏とともに「TERTIUS FACTORY」開設。94年より修斗のマッチメイク、イベントディレクターを務める。同時に『the TOURNAMENT of J』、大道塾主催『THE WARS 3～5』などのプランナーを努めた。97年にはミニコミ『総合格闘技世界』を創刊。94年9月より中井祐樹と交流を深め、97年のパレストラ旗揚げに参加。番頭の肩書きの下、様々な業務とこなす。日本修斗協会事務局長およびアマチュア普及委員長。合気道2段。柔術青帯。なおサンボ選手の若林次郎は実弟。

あの人は今…

ジェイソン・デルーシア

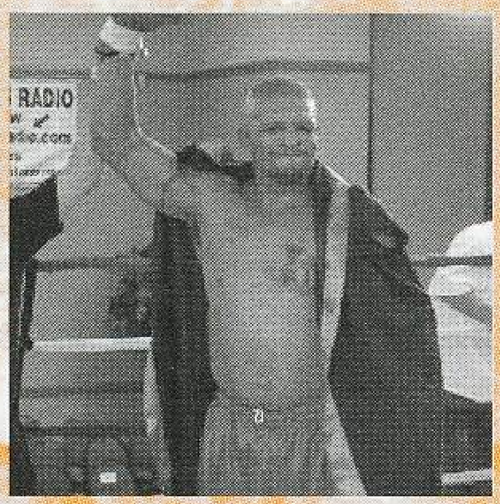
パトリック・スミス

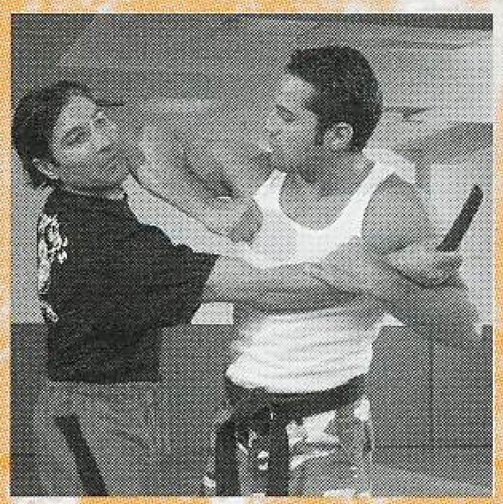
オレッグ・タクタロフ

ジョエル・ギャルソン

ウゴ・デュアルチ

格闘技ファンを長く続けていると
心の片すみに色々な思い出の選手が残っているもの。
決してカリスマと呼ばれるほどではなかったにせよ
愛すべきキャラクターのあの選手この選手…
彼らは今、どうしてるんでしょうか？



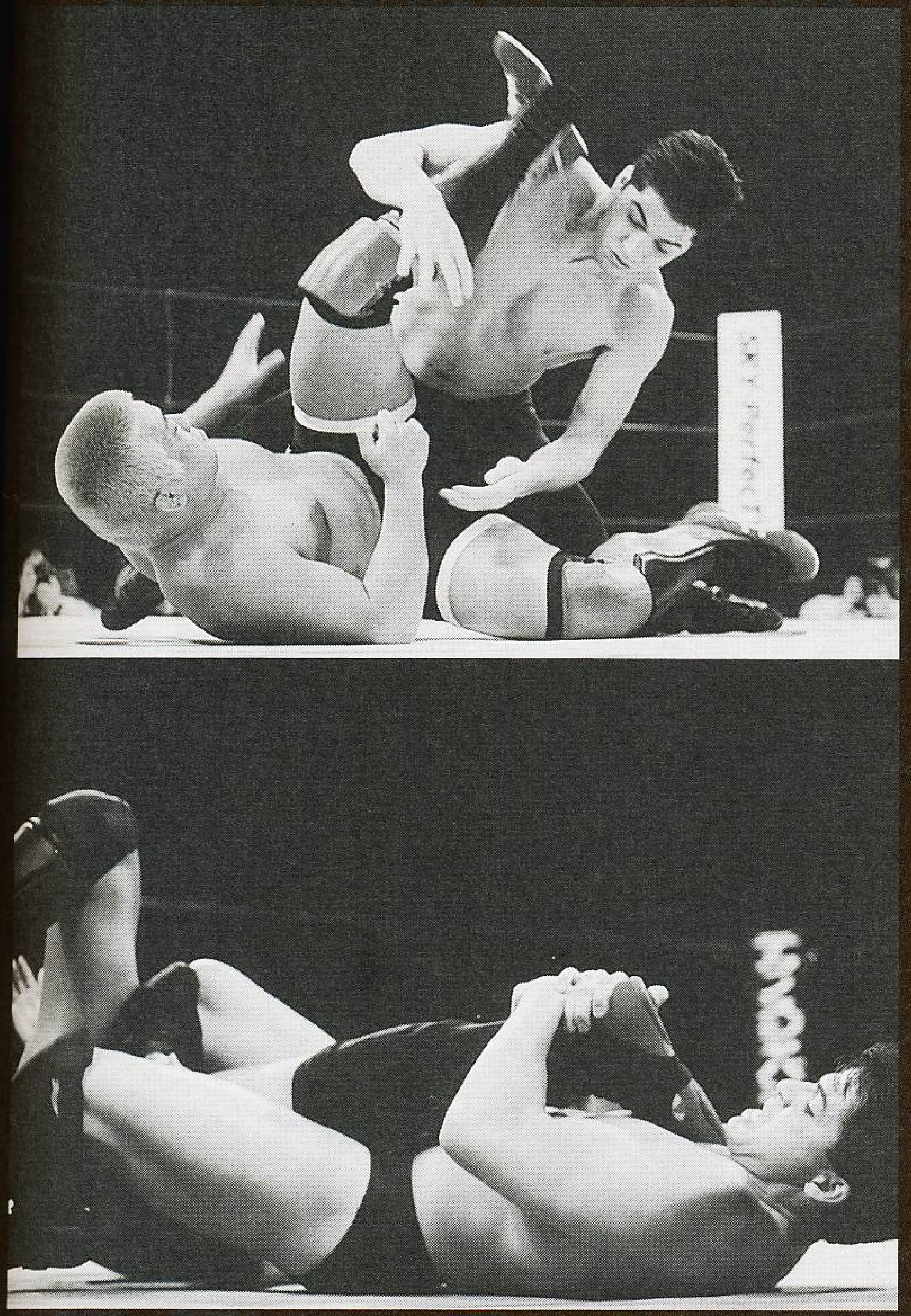

ら一気に具体化して、97年12月のパレストラ東京開設にこぎ着けるわけです。

合気道マスターは生涯100試合を目指す

「なんでオレが試合に出られないんだ。PRIDEでヴァンダレイと試合させろ!」

**カンフーをイメージさせるサイドキックが印象的で、
パンクラス初参戦で船木を破ったジェイソン・デルーシア。
以後、コンスタントに活躍するもVTルールに以降してからは精彩を欠いていた。
今は一体どうしているのだろうか。取材を試みてみれば、
そこにはかつての温厚なイメージとはギャップのある、怒れるジェイソンが存在した。**

Text by Tadashi Tanaka Special Thanx to Nippon Sports Publisher


初参戦でエース船木から１本勝ちを果たす

近藤有己がリング上で、最後となったNKホールでの激闘を振り返り、かつてのよき対戦相手の名前にデルーシアをあげていた。98年の夏、近藤が3カ月も米国武者修行をしていたが、その練習仲間兼下宿先でもあった。ホームページにもあるが、15年実践している合気道をどう実戦活用していくかが求道者としての生涯のテーマでもある。以前、筆者が彼にプレゼントした（当時近所に住んでいた）山田嘉光師範のビデオは百回も繰り返し見たという。

ジェイソンは警察やスクワッド（特殊任務部隊）で合気道を教えており、自身のメソッドをコンバット合気道と呼ぶ。「合気道はリアルじゃないのでは？」という質問は海外でもよくされるが、ジェイソンは投げ技を実戦で使っているのだ。「五獣拳」の使い手として紹介されることも多いが、トレーニング方法に違いはあるものの、「五獣拳」もまた合気道の解釈のひとつであることをご存知だろうか？ 年をとってもKOパワーが「気」の鍛錬によって以前よりさらに増していると断言するところは、筆者が山田先生と話しているかのような錯覚に陥った。

引退どころか、試合に出たくてたまらないのに、「なぜかオレがブラックリストに載っている。なんで組んでくれないんだ」と怒りをぶつけてきた。輝かしいキャリアに尊敬を払わず、試合を組んでくれない各プロモーションには苛立ちを隠さない。UFC第1回＆第2回出場という先駆者であるにも関わらず、新しいベガスの事務所に電話しても、「どこかのガキと一緒のような扱いをされた」と憤慨する。

最後となったUFCは99年11月の日本大会ジョー・スリック戦。アクシデントといってよい不運のケガで負けてしまったため、当時のマッチメイカー＝ジョン・ペレッティーは再戦を約束してくれたのに、パンクラスは美濃輪育久にリベンジさせた。「オレはその美濃輪に2回勝っているのにな」「國奥には3度勝ってる。高橋には2度。オレはリマッチを受けてきたのに、なんでオレが負けた試合はチャンスがないんだい？」〜ごもっともである。

ただし筆者は現UFCマッチメイカーのジョー・シルバと米国時代から交流があるから、「むしろパンクラスは貴方を守るべく、対戦相手選びはより好みしたと聞いている」と問い直したら、「最初の相手ダン・ヘンダーソンは向こうの理由でダメになっただけ。結局ビデオもない相手と戦わせられた。守るんだったらビデオで研究させてくれよ。自分はいつも不利な条件だったんだ」と、内情をブチまけてきた。

以前のジェイソンはスポーツマンだったが、今の心境を尋ねると「キル」。闘って殺したいのだそうだ。本気でカムバックしたいのに場が与えられてない。最後の記録は03年8月フランク・シャムロック主催のシュートボックスフロリダ大会のメインイベント。なんと試合2週間前に右腕を完全に壊してしまったのに、左腕だけでキャンセルせずに戦って勝った。

現在の格闘技界のスターたちにも辛辣なコメントばかりを並べたので、昔からの友人だった筆者は驚いた。スター連中を次々にコキおろしたのだ。

「オレがヴァンダレイと闘いたいと言えば、（業界の）ゲームがわかってないファンはクレージーだと言うだろうね。でもよ〜くこのビジネスをわかっているなら納得するはずだ」「一体どんな資格があって高田がヒクソンと戦えるんだい？ いや現実はわかっているよ。彼はBACKED（支援）されてるからね。オレはそうじゃないからな」「ごちゃごちゃ言うんだったら、1試合チャンスをくれ。証明してやるよ。経験と知識というのは武器だ。だからヴァンダレイと戦いたいんだ。いざやってみたらわかるよ。同じくらいの強豪だってことがね。オレはティトがまだハイスクールにいた頃から闘ってきた開拓者なんだぜ」

「若い日本人選手をアップさせる（売り出す）ためのJOB BOY（かませ犬）扱いされてしまったんだよ。すべてはプロモーターの売り方次第なんだ。結果的にオレはイメージで損してしまった。いざ試合させたら、トップ連中と遜色ないことがわかるはずだ」

日本人に悪感情を抱いているわけではない。実際は逆だ。「アメリカ人はミスを犯さないようにと、守り重視の試合をするのに対して、日本人はエキサイティングな試合をするために、小さなチャンスに賭けて積極的に仕掛ける点が素晴らしい」と誉めてもいる。確かにレスリング系のグラウンド＆パウンド戦法は、安全なポジションに留まったまま、判定で勝とうとする傾向がある。「対する日本人は、客のことを考えている」との分析は正しい。

須藤元気のファンだという。チャンスを狙ってくるからだ。「アメリカ人はすぐにクリンチしてつまらない試合をやる。潔く飛び込んで、失敗したら散ればいいという発想がない」「あのジャイアントスイングを見たかい？ あれこそ格闘技の試合でもっともアメイジングなムーブだったよ。それから彼はボストンクラブまでやったんだよな。最高だ。こういうのをプロフェッショナルというんだよ」

ホイラー・グレイシーをKOしたことを喜んでいた。須藤のK-1での活躍までチェックしてるようだ。ただしパンクラスで一緒だった時期を持ち出すと「窪田にボコボコにされていたんだよな。なぜか判定は元気だったんだけど、あれは窪田の勝ちだろう（笑）」。桜庭も大好きだという。尊敬するのは「ランディー・クートアや

Jason Delucia

近藤有己、ナチュラルだから」と歯に衣を着せない。「ランディーは英雄。ひとつの技量に優れているわけではないが、オールラウンドに秀でている」「チンアップ（懸垂運動）があるだろ。オレの知ってるあるファイターは、片腕だけでチンアップができてしまう。化け物だよ。ステロイドのおかげさ。オレは本当のことを言うから嫌われるんだ」

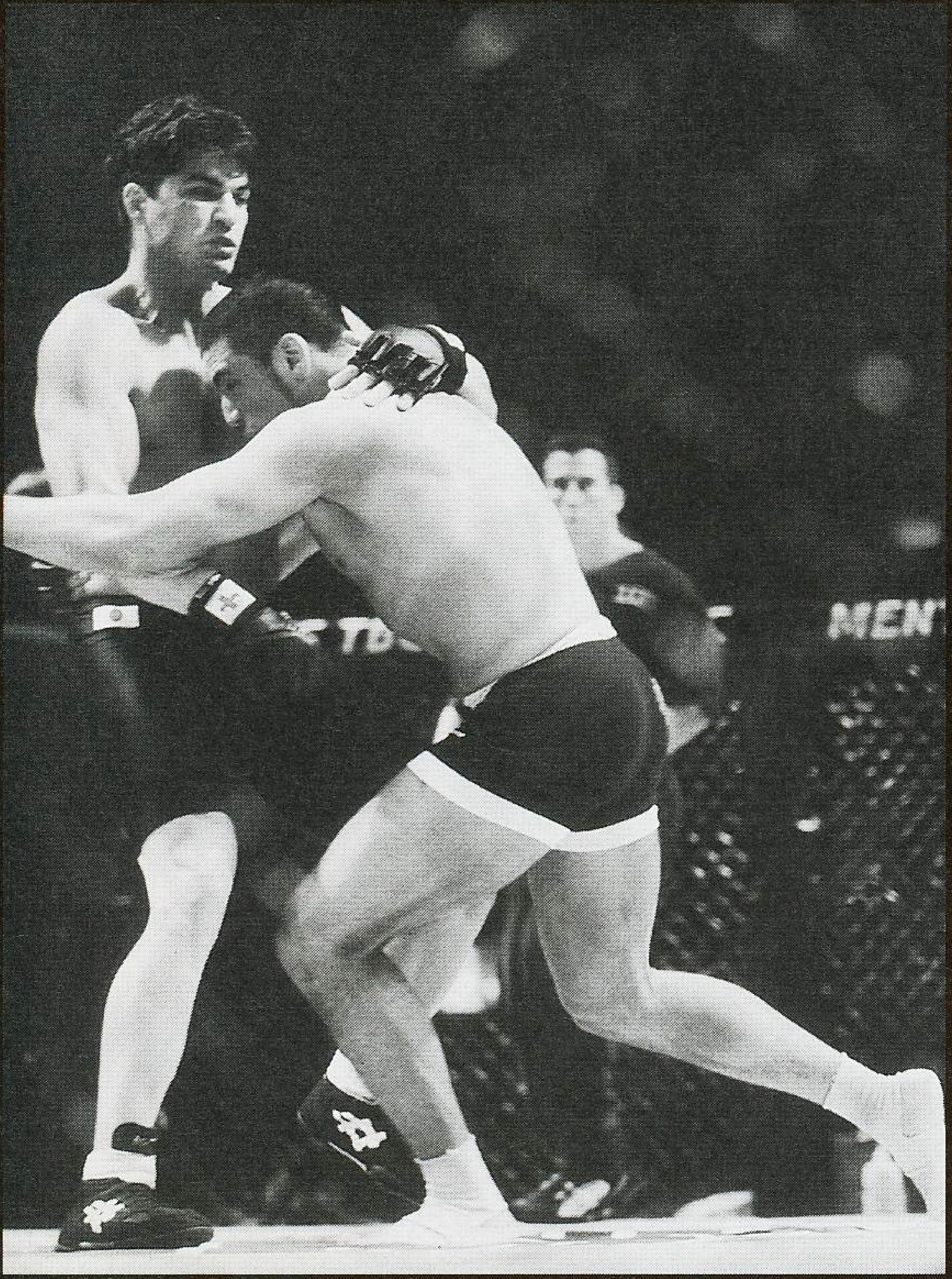
「ティトはヴァンダレイに勝ったじゃないか。イメージ戦略が成功しただけさ。近藤が負けた試合は見たけど、たまたまああなっただけだよ」と切り返してきたのは驚いた。4年半で18戦無敗の記録を持ち出したら、「オレは2年で18戦してるぜ。守られてるんだよ。スポンサーがいるわけだ。オレはそうじゃない。むしろ負け役を期待されて呼ばれてしまう。損な役割をさせられてきたんだ。アンストッパブルだって？ マイク・タイソンだってそう言われてきたんだぜ」と厳しい。だから彼はヴァンダレイ戦を特にこだわっている。ナチュラルな合気道ファイターが、化け物の肉体退治をするカードは確かに見ものだ。

「プッシュされているプロモーション側のエースは、対戦相手を事実上選んでいるだけではない。いつ闘うかのタイミングも与えられていて、これがいかに有利なことか考えたことあるかい？ オレなんかにはベストな状態のときに呼ばれた試しがない。いつもオファーは急で、長時間の飛行機に乗って試合する。そういうことまで考えて欲しいよ」

「選手として本当のことを言おう。ヴァンダレイとやりあうより、セーム・シュルトと闘うほうがしんどい。オレのようなテクニカルタイプならヴァンダレイに勝てるチャンスのほうがはるかに大きいんだ。この違いわかるかな？」

「大衆が知覚するイメージと、プロモーター側からみた舞台裏は違う。たとえばアメリカの独立プロモーターがヴァンダレイの試合を組んだとして、無名だけどベストの状態の選手と当ててみたら結果は違ってくるぜ。不敗神話なんてものは作られたものだよ。オレのように、一匹狼は、プロモーター側から支援されてない。実は相手と同一条件で闘っているわけではないんだ。観客はそこまでわかってないんだ」

「ヒクソン・グレイシーがいい例さ。なにも特別なんじゃない。広報がうまかったんだよ。400戦無敗？ オレはイニシエーション（道場マッチ）の帝王なんだぜ。いきなり乗り込んできた連中をどれだけ相手にしてきたことか。それを入れたらオレは1000試合はやってる」



UFC-Jでのジョー・スリック戦。アクシデント的にヒザの靭帯を傷め、無念のTKO

Jason Delucia
ジェイソン・デルーシア

1969年7月24日　マサチューセッツ州出身
183cm、90kg。UFC1、2に参戦。初参戦で船木に勝利、その後も長く活躍するが、VTルール以降はパッとしないまま01年の藤井勝久戦を最後に日本では試合をしていない。
http://www.jasondelucia.com

『グレイシー・イン・アクション』という創世記のビデオには、グレイシー道場破りに行って、ホイス・グレイシーに返り討ちにあう22歳のジェイソンが記録されている。ライオンズデンの他のチャンピオンたちに隠れてしまい大人しい印象があるが、彼こそがやばい橋を渡ってきたつわものなのだ。渡り歩いた剣豪の現代人版でもある。総合の世界では早すぎたパイオニアだった。

私的ワーク論も納得させられる。活字にはできないが饒舌にしゃべってくれた。「ファイターが毒まんじゅう（金）を食べてしまうことはよくある」

格闘技の場合は微妙だ。「プロレスのようなワークじゃない。あれは誰をオーバーさせるかという完全に決められたものだ。だけど格闘技の場合は、うまいことプロモーターが一言吹き込みデザインすることによって、結果を望む方向にコントロールする」

たとえば最初のバス・ルッテン戦。ヒール・ホールドでロープブレイク・ポイントを先取したのはジェイソンだ。しかしギロチンにやられてしまった。再戦が組まれて、「今度はヒールでリベンジだね」と言われたから、2カ月間ヒールの練習をみっちりやってきたのだという。ところが成田空港に着いた途端、突然「ヒールが禁止になった」と言われ、特訓がムダになり、結果としてまた負けてしまった。

ジェイソンはボクシングにも辛らつだ。やらせではない。しかし「アメリカの場合はレフェリーがグルだからな。プロモーター側の選手が断然有利なんだよ」

一番印象に残っている試合を聞いて、返ってきたのは意外にも94年の冨家戦だった。「創成期の総合で、30分間クリエイティブに闘うことがどれだけ大変かわかるか？」

まったくその通り。どちらかといえば5分3Rより30分で本領発揮できるという。「プッシュされてるホイス・グレイシーだと有利なルールを押し付けられる。最初からハンディをつけられているわけさ」

彼の考えるベストマッチは、世間の評価とは違うものだともいう。全盛期だったバス・ルッテンとの3度目（96年6月）は、負けたけど学ぶものが一杯あった。「あのバスとスタンド勝負でかくも長時間互角に渡り合えたのは自信にもつながった」

クレイジーなファイトの数々も思い出が深い。「石井大輔戦は凄かった」とポツリ。「オレは美学としてグランドで顔面を殴ったりはしなかったんだが、この試合ではムキになって殴ったさ」

日本での最後の試合は01年9月の藤井戦。これもヒザのケガによる不運な結果であった。船木とのタイトル戦で壊された箇所だという。小川の子分として藤井がPRIDEに出ていることは知っている。

「すべてはコネなんだよ。オレにまともな3試合契約でもくれれば喜んでやるさ。それで初戦が期待にそぐわないなら、残りはなしという条件でも構わない。証明するチャンスをくれ。経験の蓄積がどれだけパワーがあるかがわかるよ」

目標はさらに50試合することだという。プロ試合だけで50をとっくに超えているが、生涯100試合が到達点なのだ。「誰かがそんなオレをストップさせたら、だったら引退するさ。オレをマジにタップさせてみろって。ヴァンダレイがオレをタップさせることはありえない！」



奥さんのキム夫人、息子のルーク君とともに。

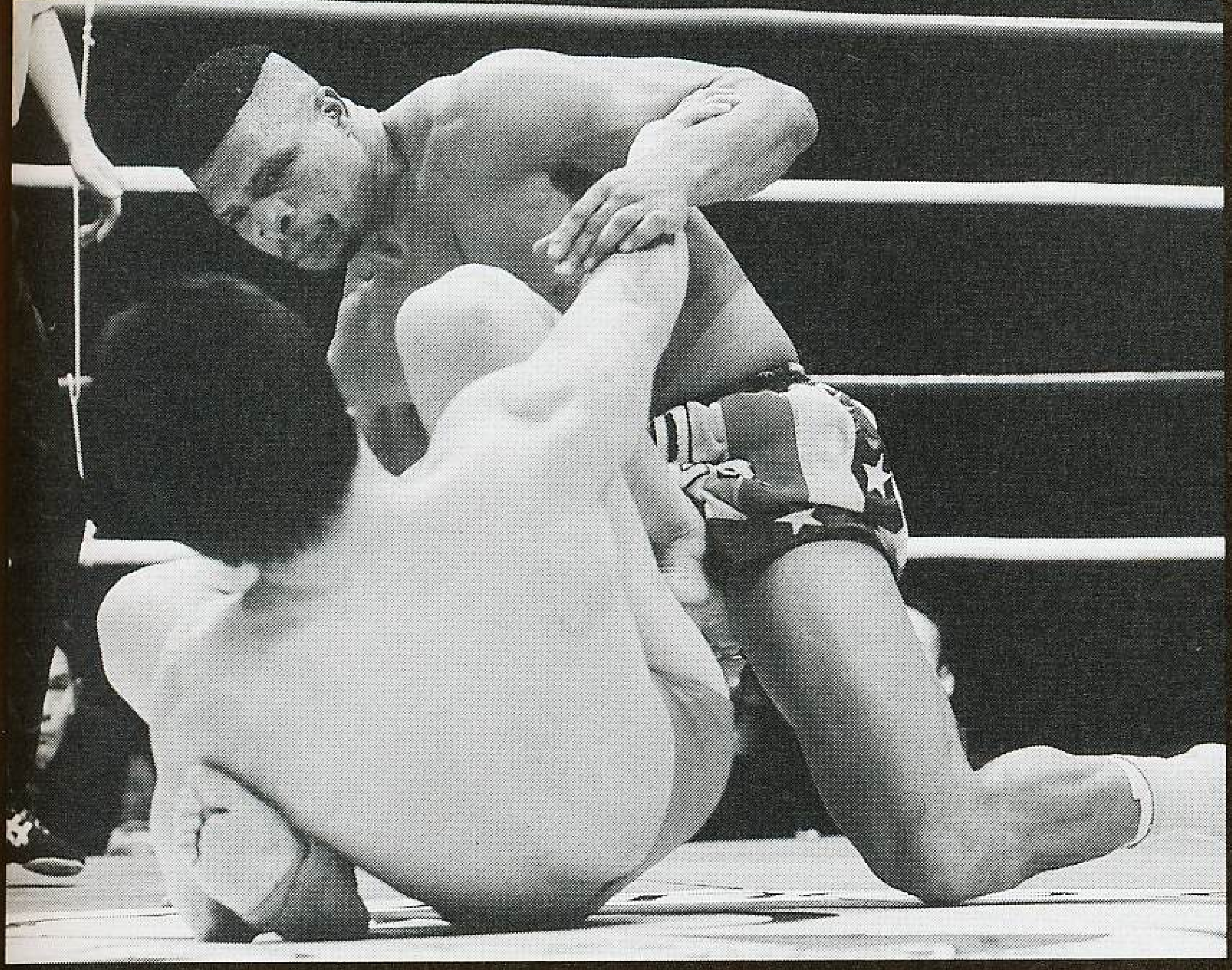
初期MMAの猛者が日本行きに夢を賭ける

「UFCの殿堂入りより、今もグラウンドと打撃が進化していることが重要なんだ」

初期UFC、いや初期総合格闘技の血なまぐさく、ある意味うさん臭い雰囲気を象徴する特異な存在であったパトリック・スミス。日本で見なくなってからしばらく経つが、ケンカ屋は相変わらずであり、なんとPRIDE参戦を目論んでいたのであった！

Patrick Smith

Text by Tadashi Tanaka Special Thanx to Nippon Sports Publishing



ある意味、アンディ、田村、武蔵などのステップアップをしていたと言えるかも

多くの日本の格闘技マスコミが、第1回アルティメット・ファイティング・チャンピオンシップの存在を、この男の口から初めて耳にした事実をご存知だろうか。

1993年11月にUFCが開かれたコロラド州デンバーで、テコンドーに勤しんできたパトリック・スミスは、当地に移住した日本人空手家、二宮城光が主催する円心会館「サバキチャレンジ」で優勝。その実績を買われ、正道会館のカラテ・ワールドカップに招聘され、彼の人生のなかで重要なパーツとなる日本の土を初めて踏んだ。初戦の相手は正道のエース佐竹雅昭。テコンドー譲りの軽やかなステップから、思い切り中段突きを放ったパト・スミだったが、その拳がボディを固めた佐竹のヒジを直撃。拳を壊して、泣く泣くリングを後にした。

敗戦の弁を記者団に語っているときに、デンバーで行われるグラウンドで打撃が許される「何でも有り」の大会に出ることを明らかにしたのだ。

地元代表として出場したUFCでは、ケン・シャムロックにヒールを極められて初戦敗退。

しかし、連続出場を果たした第2回大会ではアメリカン忍者を名乗るスコット・モリスを相手に、頭突きやエルボーを駆使し、これ以上ない残虐な勝ち方で初戦を突破。勢いついた彼は、ホイス・グレイシーに敗れるまで快進撃を続け、準優勝という結果で、地元ファンの大きな声援を受ける。

その後、戦いの舞台をK-1に移し、キモ、田村潔司戦で日本のファンにも受け入れられると、武蔵のデビュー戦の相手を務め、さらにアンディ・フグとの因縁で、K-1のリングに「リベンジ」というコンセプトを持ち込んだ。これはパト・スミの隠れた功績の一つだ。

かつてのライバル、アンディの死を彼が知ったのは、信じられないことだが僅か4、5カ月前のことだという。「とても良くしてもらった」と感謝の念を持ち続けている石井館長の逮捕に関しては、今回の取材で初めて知った模様で、受話器の向こうでパト・スミが絶句していることは、太平洋を越えた距離にいる記者の耳にも、はっきりと伝わってきた。スタン・ザ・マンが引退したことにも、寂しさを隠せない様子で、久しぶりの日本からのコンタクトで、改めて何年間も大好きだった日本を離れてしまっていることを実感した様子だった。

パト・スミの雄姿が、最後に日本で見られたのは97年。キングダムのリングでのことだ。

ちなみに彼は現在もなお独身生活のままだという。03年10月にリング復帰して以来、毎月のように試合をして、体重も240ポンドに落としたらしい。

「それでも日本に行っていた頃より、重いんだけどな。ただ、寝技の技術が上達しすぎて、この辺りではオレと闘いたがる奴がいなくなってしまったんだ」という彼は5月にはMMA、8月にはキックに出場し、ともに勝利を手にしている。

「クリスマスの1週間前にもシカゴで試合する。2月19日には柔術家とMMAのカードが決まった。ようやく忙しくなってきたところさ。しばらく干されていたからね。大変だったのは、ボクシングではコミッションがうるさくて、あらゆる身体検査をパスする必要があったこと。オレは保険に入っていなかったから、X線検査から目のテストまで、全部で7500ドル（約80万円）も使ってしまった」

HIV検査も6度も経験したそうだ。

この11月にカリフォルニアで開かれたPRIDEの全米オーディションの参加者の中に、パト・スミの名前を見つけることができる。

「グラジエーター・チャレンジのヘビー級チャンピオンとのスパーリングだった。マジにやるなといわれたけど、おかまいなしにパウンドしてやったさ。（笑）。結果がわかるのは4週間後、でも好感触はあった。なんといっても、キングダムのノブヒコ・タカダがオーディション会場にいたからね」

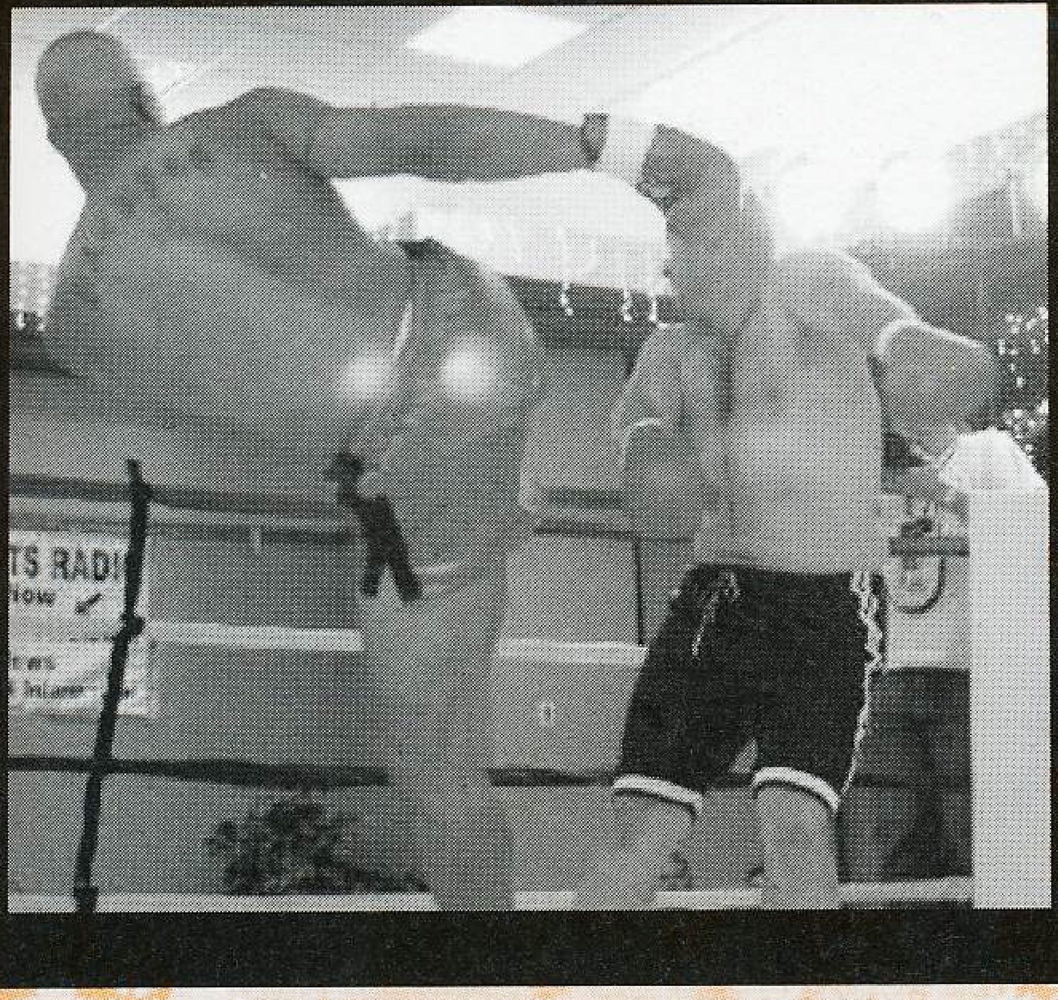
パト・スミにとって、DSE統括本部長の高田延彦は、今もチーム・キングダムの一員だ。オーディションには、自腹で出かけたそうだが、翌日にハッスルの審査があったことは知らなかったという。「知っていれば受けていたのに残念だ。ボクシング、キック、MMA、プロレス、俺はなんだってやるつもりだ」というパト・スミ。4年ものブランクについては、多くを語りたがろうとしないが、話題が今後のことになると、「もう負けるのはゴメンだ」と再起に賭ける気持ちを雄弁に語りだした。「今、体脂肪は8%なんだ。ファンの皆が、俺のカムバックを喜んでくれている」

2003年11月に10周年を迎えたUFCで、ファンが選出する10人の殿堂入りメンバーからは落選してしまったが、「そんなことはどうでもいい。過去の実績を評価されるよりも、これからのことの方がずっと大切だし、自分の将来を考えるだけで楽しくてしょうがない。グラウンドでも、ボクシングでも、今、最高の体調にあるんだ」と、PRIDEのオーディション結果が届く日が、待ちきれない様子だ。

MMA創成期の伝説的ファイターが、過去の栄光に縛られることなく、今も前向きに"ファイター"として生きようとしている。41歳になった今も進化し続ける彼の姿を、「一度だけでもいいから見てみたい」と願う日本のファンも決して少なくないはず。パトリック・スミス、8年ぶりの来日は実現するのか。ぜひ実現させてあげたい、なぁ。

Patrick Smith
パトリック・スミス

1963年生まれ。身長188cm体重102kg。コロラド州デンバー出身。UFCからK1、キングダムなどで活躍。ストリートファイト風のファイトスタイルやキャラクターで人気を呼んだ。



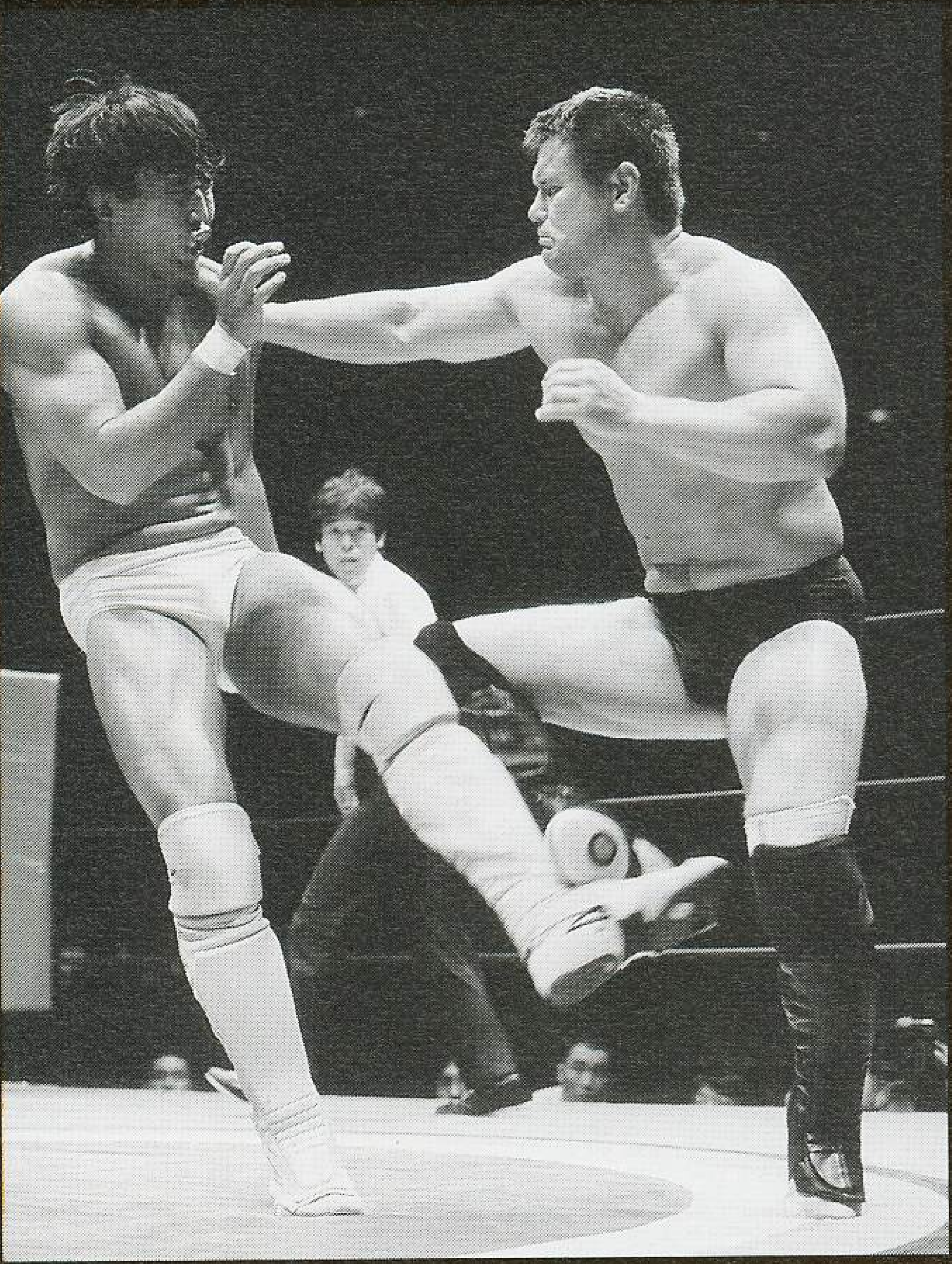
ロバート・デ・ニーロと共演したサンボの鉄人

「夢はサンボの起源と歴史をテーマにした映画を作ることなんだ」

初期UFCでは、タンク・アボットらと壮絶な試合を展開してみせたオレッグ・タクタロフだが、今や映画俳優として多くの作品に登場している。果たして格闘家は引退したのだろうか。彼の近況を知るべく、電話で取材を試みた。

Oleg Taktarov

Text by Tadashi Tanaka Special Thanx to Nippon Sports Publishing



不本意な結果に終わった柳澤龍志戦でのタクタロフ

十周年を祝うUFC45（03年11月）に、今は映画俳優となった愛称"ロシア熊"オレッグ・タクタロフの才姿があった。総合格闘技という未知の分野を切り開いた開拓者として、ホイス・グレイシーやケン・シャムロックとともに、殿堂入りを果たしたからだ。

俳優としては、ロバート・デ・ニーロと共演した『15ミニッツ』、ジャン・レノと共演した『ローラーボール』や、ウィル・スミス主演の『バッドボーイズ2』でも強烈な印象を残している。待望のニコラス・ケイジ主演『ナショナル・トレジャー』がいよいよ公開だ。今年の夏から8年のロサンジェルス生活を捨ててモスクワ暮らし。本人は饒舌だった。

「格闘技あっての俳優業」の初心は忘れてはいない。週に2日はボクシング、2日はグラップリング、合間の3日はサッカーと、スポーツ漬けの日々を送りつづけていて、「いつでも戦える状態だ！」と言う。

97年10月のPRIDE.1回で、ゲイリー・グッドリッジに失神KOを食らった戦慄のシーンを境に、「引退したと思ってました」と向けると怒りだした。

「ゲーリーにとっては良かったよな。あれで彼の名声が始まったんだろ。9月末にブラジルでジョーン・アルバレスをKOして、試合後の5日間は現地で取材とか滞在契約が残っていた。そこから長時間のフライトで日本に入ったんだ。腹を壊して病気だった。コンディションは最悪だったんだ。負ける相手じゃない。2週間もないのに2試合なんて無茶だった。やはり1ヵ月はあけないと」

今年の4月に沖縄での米軍海軍基地で開催された大会「King of Fights」で、総合のエキシビジョンをやったと言う。サッカーの腕前も自慢らしく、同じ滞在中に沖縄でやった大学チームとの試合で3ゴールも決めたらしい。さらには「2月にアントニオ猪木（実際はLA道場のサイモン猪木）から連絡があって、8月なら試合に出てもいい」と話したというから、"現役格闘家"で間違いない。しかもその話をフォローしたところ「今年はイノキボンバイエがなくなったから機会がなくなった」と返事されたと言う。具体的なオファーも披露してくれたことで、口先だけの「オレはいつでもやってやる！」ではないことも確認できた。

猪木との接点は96年LAでの『平和の祭典』からだ。藤原喜明と組んで、猪木、ダン・スバーン組とプロレスの試合を行なっている。しかしこれも、直前の「パンクラスでの柳澤龍志戦に不利に働いた」という。「ビデオを検証してくれよ。指を使って首を攻撃したとか訳のわからない理由で反則ポイントを取られて、それで判定負けだぜ。（時間が）15分の試合で最後はオレがアンクルロックを極めかけてたんだ。こっちの計算ではあと1分20秒あるからと思ったら、いきなりゴングで終了さ。タイムまで覚えているぜ」

どうやら前日の晩に猪木と会合したことで、「移籍されるとパンクラスが考え、オレに勝たれたら困るという仕打ちだった」と本人は分析する。まぁお互いの言い分があるのでコメントは控えるが、オレッグの負け試合にはすべて理由があることはよくわかった。

現役という部分で納得させられたエピソードがある。なんとティト・オーティズからケン・シャムロック戦の前にコーチを依頼され、レッグロック対策などに真価を発揮したという。なんでも「寝技になって最初の2分で3回もティトをタップさせてやった」と豪語するのだから凄まじい。「技術に加えて経験豊富なオレをブラジリアンが極めることはできない」「レッグロックを北米で広めたのはオレ。すべての教則ビデオもオレが教えた」と自慢する。

WBC世界ヘビー級王者ビタリ・クリチコともボクシングを練習しているエピソードを披露して、いかにトップ勢と競い合っているかを強調していた。

総合格闘家との交流は続いているのだろうか？　「もちろんさ」。こちらも途絶えてないようだ。

「テキサス州ダラスに1年住んでいたこともあって、ガイ・メッツァーやアレックス・アンドレアとは、今でも頻繁に連絡している」。

またフランク・シャムロックとは95年からの一年ほどサンディエゴのライオンズデンでルームメイトだった。

「あんなに覚えの早い選手はいなかった。なにも知らない状態から、あっという間にすべてを習得していったよ」「他のライオンズデンの選手はウェイトをリフトしたり、ケンにくっついて回るだけなのに、フランクはオレの技術を学んだんだよ。他の選手はオレにかかれば15秒でタップさ。でもフランクは、しまいには10分持つようになった」

エメリヤーエンコ・ヒョードルについて尋ねたところ、彼との接点はないという。「だって彼はまだ26、27だろ？」。ロシア選手の活躍は嬉しいようで「新世代だよね。バランスがいい。ボブ・チャンチンも有名だが、グラウンド技術には難がある。彼（ヒョードル）はオールラウンドになんでもできる。どこで相手を驚かせるかわからないよな」と誇らしげだ。同じエカテンブルク出身のアンドレイ・コピィロフとは交流があるそうだ。

プーチン大統領が柔道愛好家であることを切り出してみると自身の格闘技観を語りだした。「ボクシング、空手、レスリングなどと違って、サンボというのは決してスタイルではない」「柔道などをベースにロシア人用にスピリドノフが発展させた護身術で、19世紀のロシア革命の前のことだ。なんでもありだからスタイルのひとつとして扱われるのはおかしい」。

夢はサンボの起源と歴史発展をテーマにした映画を製作することだという。



今年、沖縄でサッカーを楽しんだオレッグと大学生たち

Oleg Taktarov

オレッグ・タクタロフ

1967年08月26日生まれ　ロシア連邦ゴーリキ出身
身長185 cm体重98 kg　世界サンボ選手権で2回優勝を果たす。初期のUFCに4回出場し、タンク・アボット、マルコ・ファスなど強豪にも勝利。トーナメント優勝も果たしている。その後、1996年パンクラスで柳澤龍志戦。『PRIDE.1』でゲーリー・グッドリッジ戦など。現在は俳優として活躍している。
http://www.olegt.com/

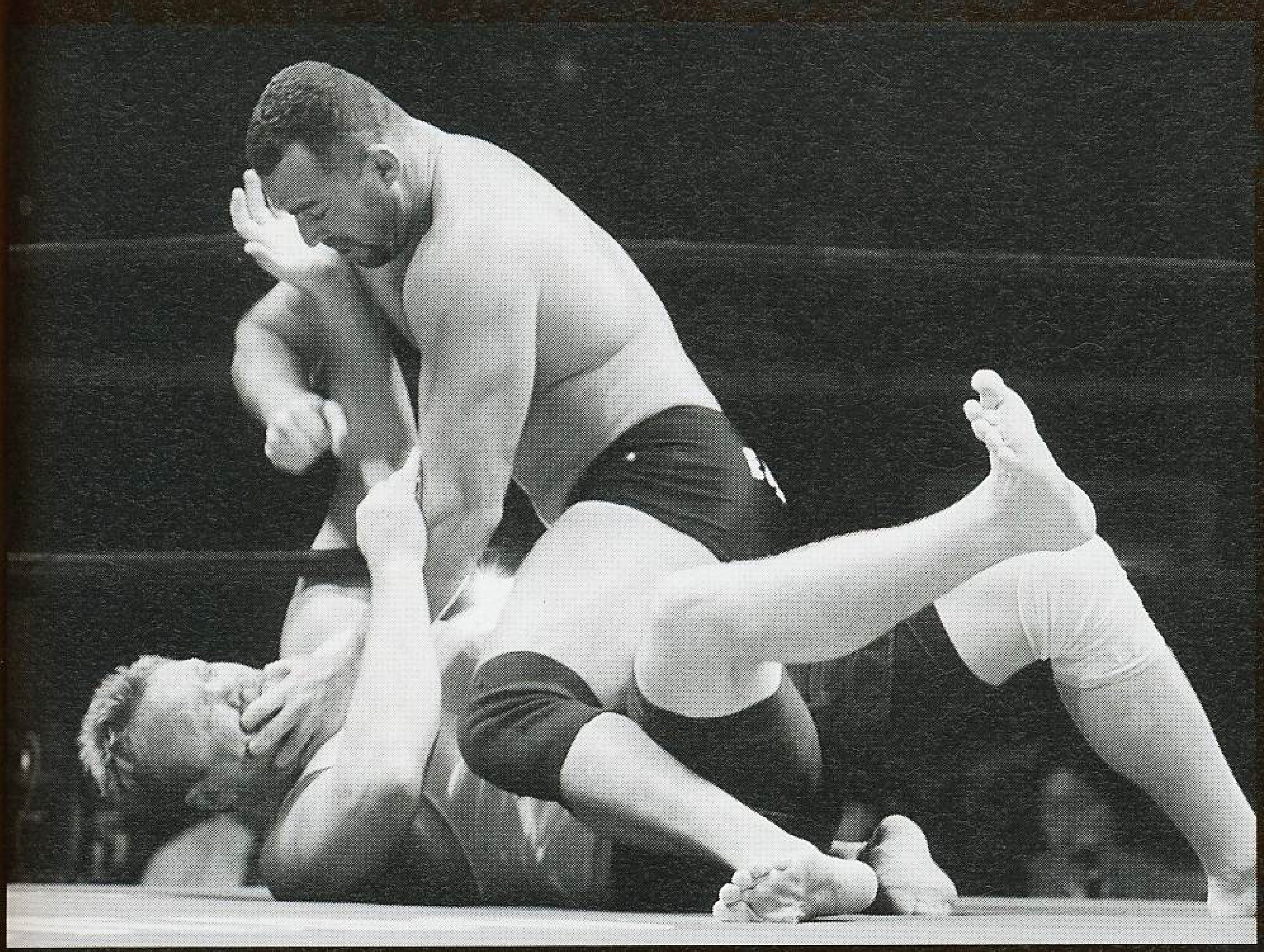
ヒクソンの仇敵は、ルタリーブリ再生に動き出す

「この4年はビジネスに集中していた。でも、心が満たされることはなかった」

ペペビーチ、グレイシー・アカデミーで2度に渡り、
ヒクソンとプライベートＶＴを行ったウゴ・デュアルチ。
ルタリーブリの首領は、その後、柔術とも雪解けし、娘を得た。
生計を立てるために、ビジネスに専念した4年間。
心のとこかで、ルタリーブリへの想いがくすぶり続けていた。
ルタリーブリの首領が、2005年、ルタ再生に動き出す。

Hugo Duarte

Text&Photo by Marcelo Alomso Special Thanx to Nippon Sports Publishing



豪快なテイクダウン、強烈なトップからの攻め。ウゴ・デュアルチは、総合格闘技化以前のＶＴの怪物だった。

「娘が生まれるまで、自分のなかにこんな心に安らぎを感じる要素があるなんて、思っていなかった。俺の人生は、娘が生まれてくるためにあったんだと、ドミニカを初めて抱いたときに分かったんだ。ルタリーブリへの強い情熱は、一度たりとして冷めたことはない。ただ、娘を育てるためにどうしても、ビジネスに専念しなければならなかったんだ」

ペペビーチとグレイシー・アカデミー、今や伝説と化したヒクソンとのプライベート・バーリトゥードをやってのけたウゴ・デュアルチは、2000年秋に格闘技界から距離を置いた理由をこう語る。

打撃をのど元に受けたに違いない、甲高いのにしゃがれている声は、ルタリーブリの普及に努めていた当時と、何ら変わりない。

執拗にヒクソンの首を狙ったのは、全てルタリーブリの強さを天下に示すためだった。

バーリトゥードが、ベースとなる格闘技の技量だけで争われていた時代、柔術界の誇りヒクソンと並び、ルタリーブリの首領（ドン）は、怪物というニックネームを持ち、誰からも畏敬の念を持って接されていた。しかし、ヒクソンが24時間グレイシー柔術最強の男であり続けられたのと違い、実物大のウゴは、とても人の良い親しみやすい人間だった。

エリオ・グレイシーの三男坊として、幼少の頃から負けが許されない人生を歩んできたヒクソン。17歳のときにたまたまルタリーブリの道場の前を歩いていて、その恰幅のよさを買われ、ルタリーブリの始祖ファウスト・ブルノシーラにスカウトされたウゴは、根本的に同じ種類の人間ではなかった。

いつの間にやら400戦無敗のヒクソンが、初来日を果たした1年7ヵ月後、日本にやってきたウゴは、豪快なタックルと得意の腕がらみで一本勝ちを手にした。が、北尾光司VSペドロ・オタービオや、ヴァリッジ・イズマイウ、カーロス・バヘットら柔術勢ばかりか、同じルタ系のジョイユ・デ・オリベイラやエベンゼール・ブラガよりも強いインパクトを残すことができなかった。

Hugo Duarte
ウゴ・デュアルチ

1963年8月9日生まれ
ブラジル・リオデジャネイロ出身
身長183cm、体重109kg
96年4月UVF1で日本初登場。98年11月PRIDE.4でTKO負けを喫する。
ヒクソンとのプライベートVTを経験。柔術・ルタ抗争の中心人物。

この辺りも、絶対的な主役を張れることを理解してから、日本にやってきたヒクソンと、とにかく日本で戦いたかったウゴの違いが良く理解できる。

負けが許されないヒクソンと、強い相手と戦いたいウゴ。来日後は当然、まるで違った格闘技人生を歩み、ライバルだったことすら、忘れ去られるようになる。打撃も、テイクダウンも、パスも関節技も全てを使いこなさないと生き残れない総合格闘技化したバーリトゥードの最前線で勝ちあがろうとしたウゴ。だが、その想いはもろくも玉砕し、2000年3月5日オランダでボブ・シュクライバーに敗れたのをきっかけに、彼はリングを下りた。

オフィシャルの場での生涯戦績は、9戦6勝3敗。ちょっとした、修斗クラスBやデモリッション、パンクラスゲート、ZSTジェネシスバウトに出場している選手よりも、実戦経験は少ないかもしれない。それが、全てウゴ・デュアルチの実像だったとはいえないが、時代が変わったことに気づかない世間知らずの気の良いオヤジだったことだけは確かだ。

現役を退く少し前から、ウゴはルタリーブリを柔術と同じように、全国規模で普及させるために、数々の試みに挑戦していた。リオ州選手権、ブラジレイロの開催、アカデミー対抗戦も開き、ペケーニョやクロマドに続く、若い世代が一気に力を伸ばし始めた。その矢先のことだ。長女の誕生とともにウゴは、格闘技界からフェードアウトしていった。

「この4年間は、ファイトマネーで購入した3台のタクシーをレンタルし、上がりの一部を上納してもらっていたし、ペペビーチ前にあるフィットネス・ジムのインストラクターや事務の仕事をがむしゃらにやっていた。プライベート？　もちろん娘と過ごしていたよ（笑）」

笑いごとではない。

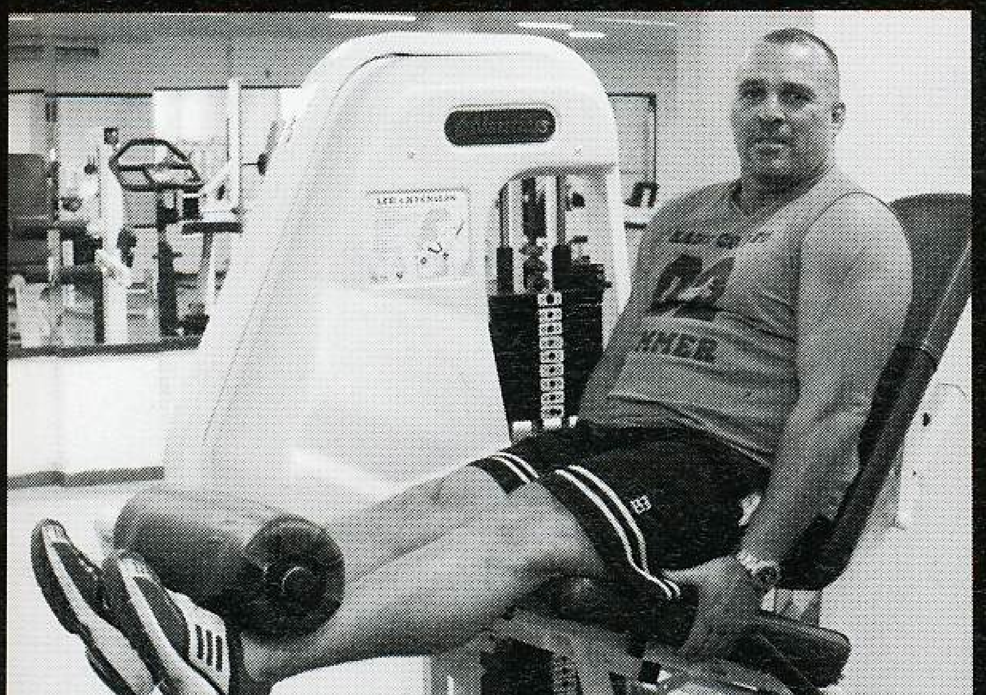
ウゴが現場を離れた4年の間に、ルタリーブリはトーナメント開催数も激減し、一時期ウゴに変わってリーダーシップを握ったマーシオ・クロマドも、自らの教え子がバーリトゥードで戦うようになると、ルタリーブリの大会オーガナイズを買って出ることをピタリと辞めてしまっていた。

かつて、裸の柔術と評されていたルタリーブリだが、今や裸の柔術の座は完全にサブミッション・レスリングに奪われ、アブダビコンバットが隆盛を極めると、柔術勢までもがセン・キモノ＝サブミッションの大会を開くようになっている。

そんな事態にようやく、ルタリーブリの首領が重い思い腰を上げる決心をした。

「いくらビジネスで成功しようが、俺の心は満たされなかった。娘ももう、幼稚園にはいったことだし。そろそろルタリーブリの舵を取るときがやってきたと思っているんだ」とウゴ。

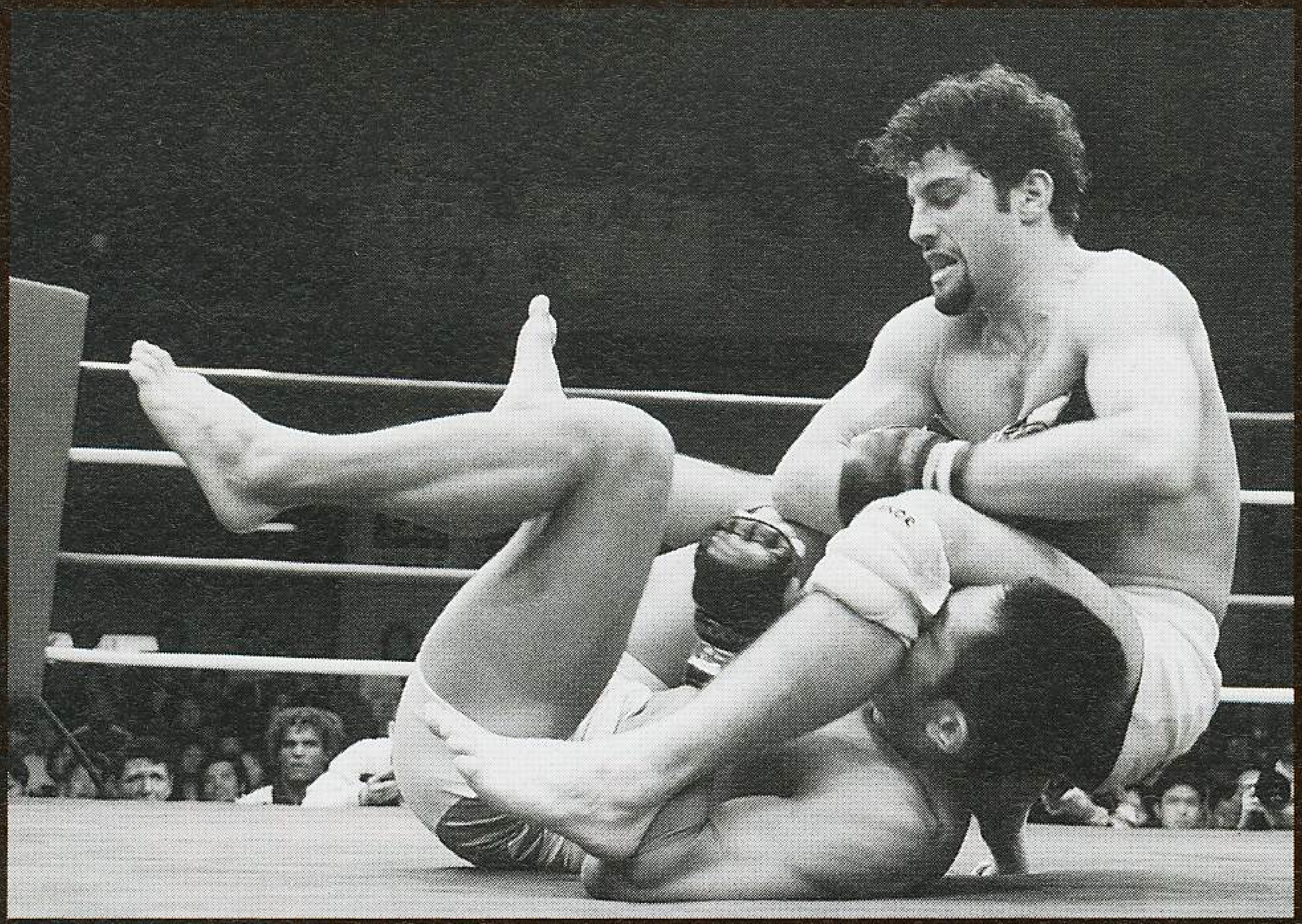
彼がやらなければならないことは、たくさんある。トーナメントの開催もそうだが、そのトーナメントにどれだけ出場選手が集まるかを確認せねばならない。「何も問題ない。ボタフォゴに再びアカデミーを作るので、また練習生が戻ってくる。ＢＴＴにいるカカレコも、修斗王者のペケーニョも、シュートボクセのダニエル・アカーシオも元は言えば、俺の弟子たちだ。ブラジル全土で活躍している彼らが、私が動き出せば黙っているわけがない」。かつて怪物と呼ばれたルタリーブリの首領。05年には浦島太郎と呼ばれていないことを、今はただ祈るばかりだ。



因縁のペペビーチが眼前に広がる高級住宅地で、フィットネスジムのマネージャー業に専念していたウゴ。ボタフォゴに自らのジムを作り、ルタ再生に動き出す。

人生の一本勝ちを選択した、もう一人のサムライ

「カーロスは、引退セレモニーを開き、いの一番にモニ・アイザックに感謝の意を表すべきだ」



日の出の勢いにある佐藤ルミナを破ったジョエル・ギャルソン。サムライ・クラブの盟友カーロス・ニュートンとともに総合格闘技界にセンセーショナルを巻き起こした。

最近ではやや黒星が先行しているが、器用に日本語を操り、試合に勝つと漫画ドラゴンボールの主人公が繰り出すポージングが、すっかりお馴染みとなったカーロス・ニュートン。彼の勇姿を目にして、古くからの総合格闘技ファンは、ある選手のことを思い浮かべることが、多々あるのではないだろうか。

ニュートンがＶＴＪ97で衝撃的な日本デビューを飾り、翌年3月に再来日を果たした際、佐藤ルミナの対戦相手として、初来日を果たした選手ジョエル・ギャルソンのことを。

当時、サムライ・クラブというトロント郊外にある道場に所属していたニュートン。イスラエル人モニ・アイザックを師に持つ二人は、ブラジリアン柔術とは一線を画した組み技の使い手だった。

まるで古流柔道ともいうような表現が当てはまる、投げ技を軽視しない、「待て」もない寝技を駆使するスタイルは、イスラエルの戦闘武術をも体得しているアイザックの長年の鍛錬の成果だ。彼は二人の才能溢れる愛弟子にその全てを伝授していた。

この日、ニュートンは草柳和宏のアームロックを切り返し──、ギャルソンはルミナを投げ捨ててから、腕ひしぎ十字を極めて勝利を掴んだ。

「ボールになりたい」、「宮本武蔵を尊敬している」、人懐っこい笑顔と巧みな話術で、人を惹きつけてやまないニュートンとは対照的に、ギャルソンは感情表現が不得手で、口数こそ少なくないが、なかなか自分の思ったことを言葉にできない青年だった。

父親がトロント大学の教授、母親も学校の教師という家庭に育ったギャルソンは、ルミナを破った当時は現役の大学生。労使関係の専門課程を選択していた。「人間性を読むのは、ビジネスも格闘技も同じだから」と、専攻理由を語ったギャルソン。

Joel Gerson
ジョエル・ギャルソン
1974年10月30日　カナダ・トロント出身
98年3月初来日。プロ修斗のリングで佐藤ルミナに一本勝ち。8月にはブラジリアン柔術黒帯のヒカルド・ボテーリョと名勝負を繰り広げた。MMA通算成績は1勝1敗。現在は自らの道場「エッジ」で指導に専念する。

1998年、修斗公式戦で10デビュー以来連勝中だった佐藤ルミナに初めて黒帯をつけた無名のカナダ人選手がいた。ジョエル・ギャルソン。いわゆる今流のMMAワールドではなく、武術系の香りを匂わせていた彼は、総合戦績1勝1敗という戦績だけを残し、リングを去った。旧友カーロス・ニュートンは、その後、ローニンとなり地位と名声を手にしたが、ギャルソンはサムライのまま、師に仕え指導者となる道を選択した。

Joel Gerson

Text by Manabu Takashima Special Thanx to Nippon Sports Publishing

彼はその5ヶ月後に同じくプロ修斗のリングで、柔術黒帯ヒカルド・ボテーリョと対戦し、年間最高試合と絶賛された高度な組み技合戦の末、判定負けを喫した。この150日間に経験した2つの試合が、彼にとって終生のMMAキャリアとなる。

ルミナを破った実績から、ウェルター級チャンピオン宇野薫への挑戦権を持ちながら、修斗のリングに戻ることはなかった。

「今だから言えるけど、あのとき、宇野との対戦をPRIDEからオファーされていたし、UFCからも声が掛かっていた」。30歳を迎えたギャルソンは、まるで噂話をするかのように小声で話し始めた。

「でも体重70㎏に満たない僕が、MMAの世界で成功しても、一生暮らしていけるようなファイトマネーを得ることなんて、無理だって分かっていた」

リングでの夢を簡単に諦められたわけではない。ただ、ギャルソンは一流企業で働く優秀な頭脳と、師アイザックの下で、大好きな組み技格闘技を広める夢を持っていた。

MMAの世界に残るか、すっぱり足を洗うか悩んでいた頃、修斗やPRIDEで成功を収めたニュートンがサムライ・クラブを離れた。アイザックの懐に入るマネージメント・フィーが高すぎるというのが、その理由だった。サムライ・クラブを離脱したニュートンは、自らをローニンと呼ぶようになった。

「カーロスは師匠を失ったから、ローニンになったんじゃない。自ら離れたんだ。僕は手取り足取り技を指導してくれたモニを裏切ることなんてできなかった」とギャルソンは言う。かつて天才とうたわれた旧友に対し、ギャルソンは嫌悪感を持っていることを隠そうとしない。

「カーロスは、もう限界だ。ファイターは引退する時期を見誤ってはいけない。引退セレモニーの際には、一度も感謝の意を表したことがないモニに頭を下げて、リングを下りるべきだ」

口下手な彼の口をついて出てくる言葉は、全て本心ばかりだ。

MMAのリングを去ってから、「人の心を読むのが好き」だったギャルソンは銀行や電子機器メーカーに人材を紹介するヘッドハンティングの会社に勤務するようになった。リング上や畳の上で楽しんでいた心の読みあいをビジネスにしたのだ。

そして、どんなに忙しくても、サムライ・クラブの指導だけは続けていた。ローニンではなく一生、恩師アイザックのサムライであることを心に近い、MMAへの未練を断ち切っていた。

サムライは3年前から生活を指導一本に絞った。

04年9月1日に、自らの道場「エッジ」もオープンし、MMAよりも、会社勤めよりも好きだった指導に追われる日々を送っている。

エッジには柔道、柔術、ムエタイ、空手、イスラエル・サバイバル術など多くのクラスがあり、組技の授業はほとんど彼の受け持ちだ。ただ、だからといって、指導に専念しているわけでもない。

「指導以外？　ジムの経営に頭を使っているんだ。どうやって、ジム経営を拡大していくか。生徒の数が増えれば増えるだけ、教える方はやりがいを感じることができる。それだけ僕の人生も幸せになる。僕はポルシェを乗り回すことが幸福だなんて思ったことは一度もない。指導を通して、人間関係を築いていく。そして道場経営も軌道に乗せる。リング上の勝利が、どれくらいの期間、人間を幸せにしてくれるだろうか。僕は人生という舞台で勝者になりたかったし、なろうと努力を続けている」。サムライを続けることで、安住の地を見つけたジョエル・ギャルソンは、一生をかけて一本勝ちを狙い続ける。



柔道、柔術、イスラエル武術などの指導を自らの道場「エッジ」で行う現在のギャルソン。少し、がっしりした体型になったようだ。

チーム・クエストには、レスリングクラスはない

知恵袋ロバート・フォリス——。ランディ・クートゥアの偉大さ、チームの強さを大いに語る



チーム・クエストの象徴的存在ＵＦＣ世界ライトヘビー級王者ランディ・クートゥア。左端はダン・ヘンダーソン。隣がクエスト期待のネイサン・クォーリー、マチャド兄弟の手ほどきを受けている柔術系の選手。クートゥアの右が、ヘッドコーチのロバート・フォリス。

**ランディ・クートゥア、ダン・ヘンダーソン、マッド・リンドランド。
レスリングの世界で名を残す偉大なアスリートたちが、結成したチーム・クエスト。
来日選手を次々と輩出するチームの強さ、その支柱となっているクートゥアの人間性について
ヘッドコーチを務めるロバート・フォリスに語ってもらった**

高島学＝文・撮影　長尾迪＝撮影(UFC)
text & photo by Manabu Takshima　photo -UFC- by Susumu Nagao

—ロバートさんは、いつからクートゥア選手と行動をともにするようになったんですか？

「最初に会ったのは、1998年だと思う。UFC-Jで、ランディがモーリス・スミスに勝った試合の前だった。ランディに頼まれて、スパーリング・パートナーを務めることになったんだ。あの頃は、ランディもMMAとレスリングを並行して練習していたから、私は別にランディの専属というわけではなかった。私はそれほどレスリングの経験があるわけじゃなく、柔術やキックボクシングも同じように万遍なくやってきた人間だから。それからも、彼を手伝ったり、自分の練習をしたりしながら、コンタクトは取り合っていた。チーム・クエストの専属コーチになってからは2年10ヵ月が過ぎたよ。最初は私とランディ、ダン・ヘンダーソンとマット・リンドランド、とても小さなグループだった」

—ロバートさんのチーム・クエストでの肩書きは何になるのでしょうか？

「一般的にはヘッドコーチかな。あとスポートファイトのプロモーションと、クエスト関係のプロダクション会社の代表でもある。コーチング以外の仕事は、以前はランディと分担してやっていたんだけど、先に現役を退いた私が、今も現役のランディの分も働くのは当然のことだからね。ただ、コーチやコーナーマンの仕事も一切、手は抜いていないよ。私は若い選手の試合について作戦を立てたり、トレーニング・スケジュールを組み立てることも大好きなんだ」

—今、ジムにはどれくらいの練習生が通っているんですか。

「250人くらいかな。フィットネス感覚でなくファイターとしてジムに通っているのは20人ほど。そのなかでも、プロとして試合に出ているのは10人ぐらいだ。練習生はどんどん増えているし、何倍にも増やそうと思っているけど、今はこれでいい。十分に忙しいからね」

—チーム・クエストではカリフォルニア州リノや、ここオレゴンでスポートファイトという自主興行を行っていますね。

「リノは1回だけだよ。2003年の6月から2～3ヵ月に1度の割合で、ポートランドやグレシャムで大会を開いてきた」

—オレゴン州政府はMMAを認めているということですね。

「そうさ。MMAもわけの分からない連中がバーファイトと変わりない試合をしたりしていた時期があったから、最初の頃はなかなか理解されなかったけど、選手の安全面をいかに考慮しているかを説明し続けて、ようやく許可をもらった。それだけじゃなく、今では凄く協力的になったんだよ」

—スポートファイトのルールは、UFCと同じネヴァダ州MMAルールなのですか。

「そうだよ。ただ、アマチュアも試合はエルボーは禁止している」

—えっ、アマチュアのあるんですか。

「一回の興行で、プロが5、6試合でアマチュアの試合は4、5試合は組んでいる。アマチュアで結果を残した者が、プロへとステップアップする。さっきも言ったように安全面への配慮を考えれば、当然のことだよ。キッズ・ファイトは、ヘッドギアとパッドをつけて、みんな一生懸命キックやパンチ、パウンドを繰り出しているよ」

—えっ！　パウンドまで許しているんですか？

「軽くね。親たちも喜んでいるし。やっている子供たちも楽しそうにやっているよ」

—う～ん、親の承諾があるなら反論できませんね。



クートゥアが、ラスベガスでＦＯＸテレビのリアリティショーの収録のため、ジムを離れている間、フォリスがぶっつづけでクラスを受け持つ。

「子供たちの多くはね、ランディのことも、UFCのことも知らないのに、ここにやってくるんだ。で、MMAのベースを学んで、少し大きくなって、まだ興味のある子は真剣にトレーニングに集中するようになる。ハイスクールになると、アマチュアの試合に出るんだ。ヘッドギアなし、エルボーが使えない以外は、UFCと同じルールのね。でも、さっき話に出たバーファイトのようなMMAイベントより、ずっと安全なんだよ。レフェリーやドクターがしっかりしているから。オレゴンの人々のMMAに対する姿勢は、とてもポジティブなものだし、ここのボクシング・コミッションも私たちの姿勢を見て、非常に協力的だしね」

――サンクションを得るのに、クートゥア選手の実績が評価された部分はありますか。

「MMAの戦績だけでなく、レスラーとしての実績もね。何よりもテーブルの席での彼の落ち着いた対応、紳士的な佇まいは特別な雰囲気があるからね」

――41歳になって、なおあの肉体を誇り、誰からも尊敬されていますからね。

「一緒にいると、もっと強く感じるよ。正直で、フェアでとても誠実なんだ。まぁ、マイケル・ジョーダンっていう具合にはいかないけど、ランディはポートランドではかなりの有名人さ。MMAには彼のような人格者がもっと必要なんだよ」

――ところでポートランドでは、レスリングが盛んなんですか。

「ミッドウェストを除くと、米国でレスリングが盛んな街なんてないよ。じっさい、今やMMAの方が有名なんじゃないかな」

――でも、ランディのようなMMAとレスリングの両方で成功したアスリートのいるクエストには、五輪志望のレスラーだって足を運ぶんじゃないですか。

「クエストには、フリースタイルもグレコローマンも、カレッジスタイルもいっさいレスリングのクラスは設けていないよ」

――えっ？　いやロバートさんに話を伺っていると、驚くことばかりですよ。クエストにはレスリングクラスがないと言うのですか？

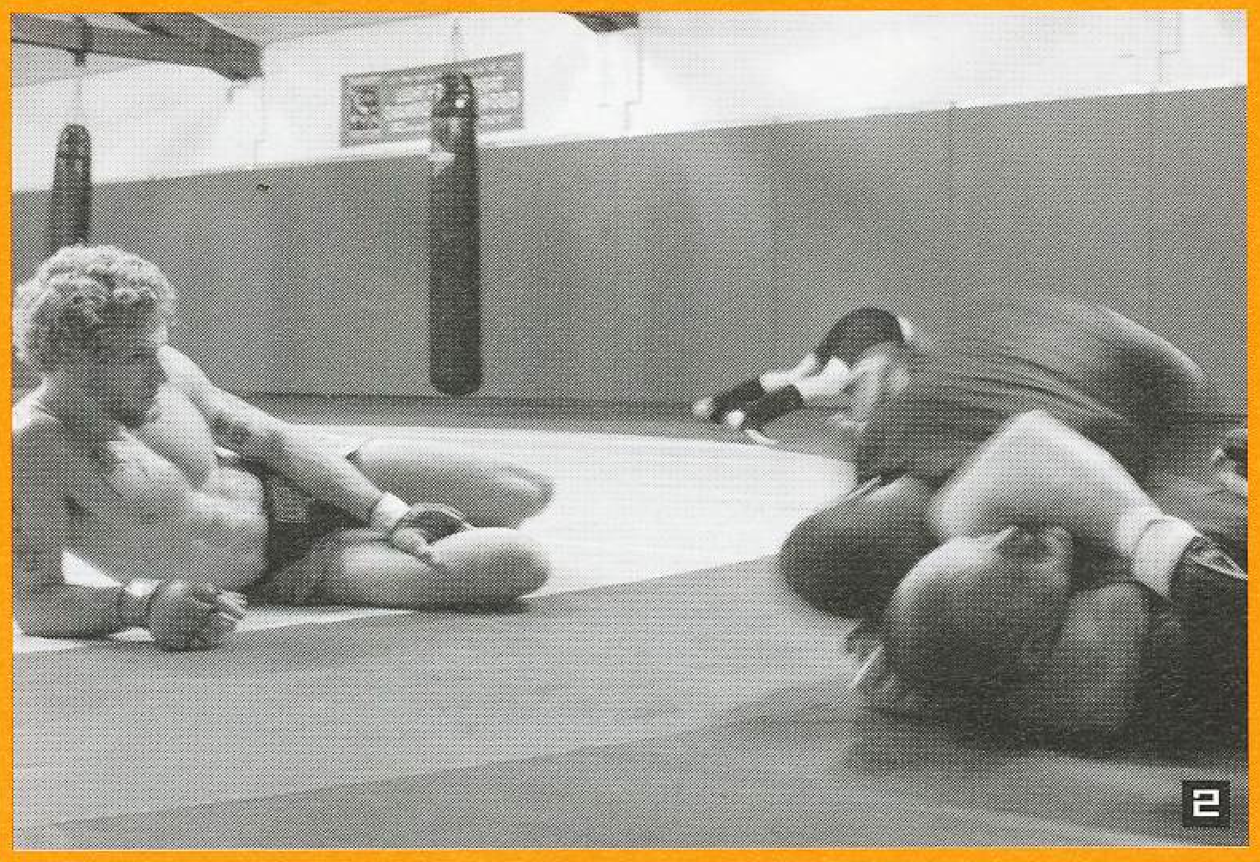
チーム・クエストは関節技が得意

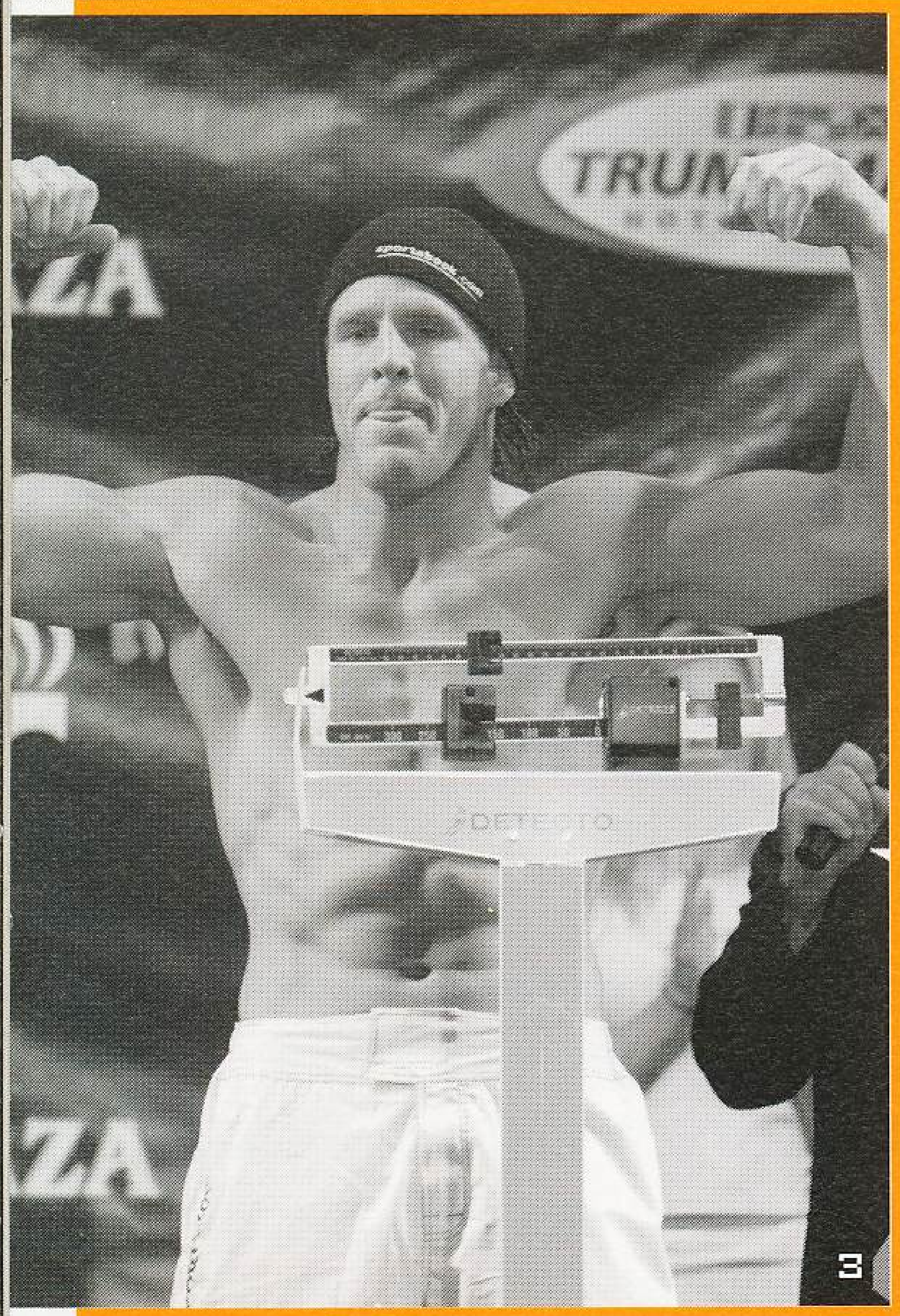
「そうだよ。レスリング・ビジネスは将来の展望もなさそうだし。MMAのためにテイクダウンや防御の練習に時間は割いているけど、レスリングだけのクラスはない。ここに通っている練習生は、片足タックル、両足タックル、胴タックル、レスリングの基礎はしっかり教わるけど、それはレスリングのコンペティションで勝つためじゃない。MMAに必要だからなんだ。君のような格闘技界の人間ほど、チーム・クエスト＝レスリングと勘違いしているんだよね。私がチーム・クエストのコーチだというと、記者はみんな、『レスリングの経験は』でなく、『何年間、レスリングをやってきたのか』って質問するんだよ。チーム・クエストの選手は、レスラーからの転向してきた者ばかりだと誤解されているんだよね、今も」

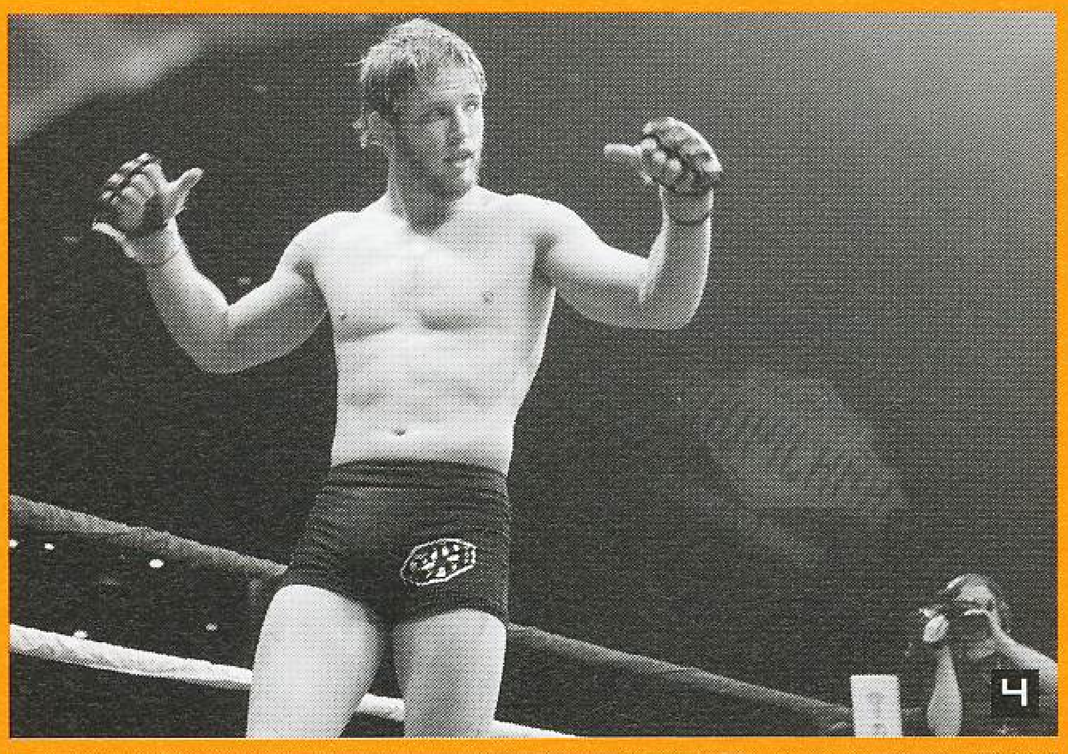
――いや、私もしっかりと勘違いしていました（苦笑）。

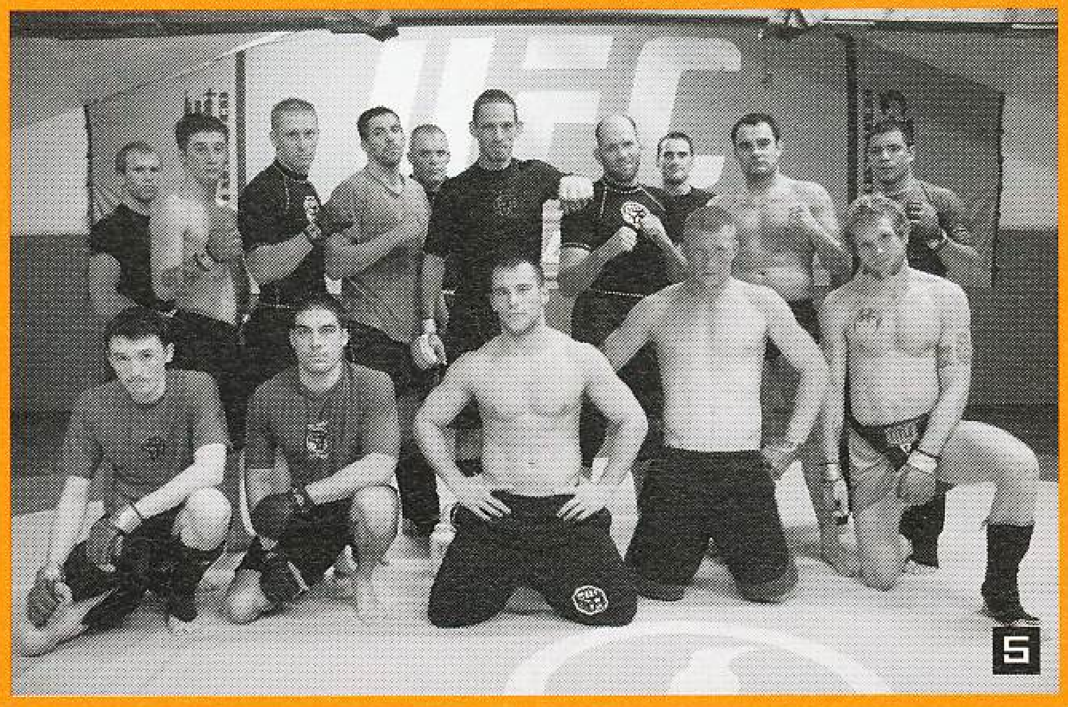
「まぁね、シドニー銀メダリストのマットもいるし、ネブラスカ大のエースだったライアン・シュルツ、それにバルセロナ五輪とアトランタ五輪に出場したダンもいるから、みんな、そう思ってしまうよね。でも、ここのファイターのほとんどは、ハイスクールで少しだけ経験した人間や、まったくレスリングの経験のない連中ばかりなんだ。でも、どこのジムよりもレスリングの技術をMMAに活かす術は知っているよ」











①レスリングマットの一片は、金網。オクタゴンはないが、オクタゴン対策はバッチリ。②ガードからの攻めを得意にするマーク・ホーウィックが、肩固めの反復練習を見入る。③UFC世界ミドル級トップコンテンダー、エヴァン・ターナー。テキサス州アマリロから、クエスト入りするためにポートランドに移り住んだ。④軽量級期待のライアン・シュルツは、コロラド在住。⑤プロクラスの面々、後列フォリスの右がマット・リンドランド。左から3人目がヒース・シムス。前列中央はデニス・デイヴィス。その右横がエド・ヘルマン。

――基本はテイクダウン、そしてパウンドですか？

「それも大きな勘違いだよ。チーム・クエストの選手は、関節技を得意にしている選手も多いし。ガードポジションからのサブミッションだって、お手の物なんだよ」

――では、クエストには柔術のクラスも用意されているのですね。

「道衣有りのクラスはない。でも、だからって関節技ができないということじゃないと思うんだ。今時、道衣を着てMMAの試合に出る選手もいないじゃないか。裸の柔術、つまりサブミッション・レスリングはクエストの得意中の得意分野だし、トップをキープする力も秀でているよ。加えてボトムを強いられたケースを考えて、しっかりガードポジションの練習もやっているから。MMAなら一般的にトップをとって戦うことがスマートな方法だよね。自らガードポジションを取る必要はないけど、下になるケースも十分に考えられるから、対策に抜かりはないよ。あと、私の方から先に言わせてもらうと、クエストにはキックボクシングが得意な選手もいるからね（笑）」

――了解しました（笑）。

「レスリングのトップクラスがいる。柔術マニアもいるし、キックばかりやっているような奴もいる。色んな連中がいるから、それぞれが練習パートナーの良い点を見習うことができて、強くなれるんだ」

――MMA、サブミッション、キックボクシング以外のクラスは？

「コーチを養成するインストラクター・クラスを設けている。あと、チーム・プラクティスもね」

――チーム・クエストは、MMAのエリート養成スクールですね。

「スポーツとしてのMMAの頂点に立つことが私たちの唯一にして、最大の目標だ。ランディやダン、マットのように素晴らしいパフォーマンスをファイトのなかで見せて、試合後はきちんと対戦相手に敬意を払う。この業界の人間に欠けている部分を、ランディは凄く大切にしている。私たちの大会を見に来てもらうと分かってもらえると思うけど、会場には子供がいて、家族み

んなでMMAを楽しめる雰囲気がある。私たちは血だらけのブラッディなショーをやるつもりは一切ない。人の顔を殴ったり、蹴っとばしたりしているけど、スポーツとして日ごろの練習の成果を試合で発揮しているに過ぎないんだ。『MMAはスポーツなんですよ』って、人々に説いて回るより、ランディの姿勢を見てもらうほうが、ずっと理解してもらえるんだ。Eメールでも、凄く彼に敬意をはらった言葉が世界中から送られてくるからね。例えば、ランディがビトー・ベウフォートのパンチがかすってカットし、負けてしまった試合があるじゃないか。ほとんどアクシデントのようなパンチで、すぐに試合が終わってしまったんだ。あの日のために、必死で練習してきたのに、何もする前に。それでもランディは、まったく不平を言葉にすることなく、ビトーに『おめでとう。傷が治ったら、私の挑戦を受けてくれ』という言葉を出すことができる人間なんだよ。彼のそういう本当に謙虚な姿勢を多くの人間に見習って欲しい。私はランディのああいう偉大なところを尊敬してやまないんだ」

――41歳にして、あの肉体を維持しているのも脅威です。やはりクートゥア選手の練習は、とてもハードなんですか。

「ランディのトレーニングは、スマート、よりスマートに、何よりもスマートにというのが信条だ。ハードなトレーニングこそ、全てを生み出すと信じて、1日に8時間も練習する選手がいるみたいだけど、私たちは違う。ジムにいる時間は6時間。集中して練習するのは3時間だ。私たちのやっている日に3時間のトレーニングは、究極的にスマートなものだと思う。ランディの年のせいもあるかもしれないけど、長時間練習したって、何も楽しくないじゃないか。楽しくないことは長続きしないよ。だから、私たちは楽しく練習するために中身の詰まったことをやっている。ああ、それからね、楽しく練習するのと、楽するのは決して同じことじゃないからね。まぁ楽しくとハードトレーニングも同じ意味ではないけど、楽しくなければ精神的にもヘルシーではいられないじゃないか」

――ロバートさんの哲学上、どうやら、街の喧嘩自慢のような練習生は、クエストではやっていけないですね。

「いや、そんなことはない。そういう連中は、自分に自信がある奴らが多いけど、すぐに長く伸びた鼻をへし折られるからね。それで気持ちを入れ替えるか、辞めていくかどっちかだ」

――ところで、このところクートゥア選手とヴァンダレイ・シウバ選手の対決を望む声が増えていますが。

「誰だって、見たいだろう。MMAの歴史に永遠に刻み込まれる試合になることは間違いない。そして、ランディがシウバをテイクダウンして、こてんぱんにやっつけるんだ。リングだろうが、オクタゴンだろうが、勝つのはランディさ。巷ではランディはリングで戦えないなんて思っている連中もいるみたいだけど、僕らがオクタゴンとリングでゲームプランを使い分けられないと思われているとは、全くバカバカしい話だよ。」



全員で一つのことに集中する、それがチーム・クエスト。

――PRIDEルールには、UFCにないグランドでの踏みつけ、頭部へのヒザ攻撃が許されていますが。

「UFCで禁止されているからといって、ランディが使えないとでも思っているのかい？　ランディはテイクダウンを得意とし、相手のタックルを切ることができる選手なんだよ。ヒザが許されているルールなら、危険度が増すに決まっているじゃないか。私はヴァンダレイ・シウバのことを見下しているわけじゃない。とても強いファイターだと思う。でも、私はチーム・クエストの人間だ。シュートボクセの人間で、シウバが負けると思っている人間がいないように、私はランディが敗れる姿なんて、これっぽっちも想像ができない。ランディは、私の人生の中で一番スマートなアスリートの一人だし、ゲームプランを組み立てるのに秀でている。無尽蔵のスタミナを誇っているのも、彼の強みだ。ベースがしっかりしているし、試合そのものの正しい価値もきちんと理解している。彼の口癖を教えてあげようか？」

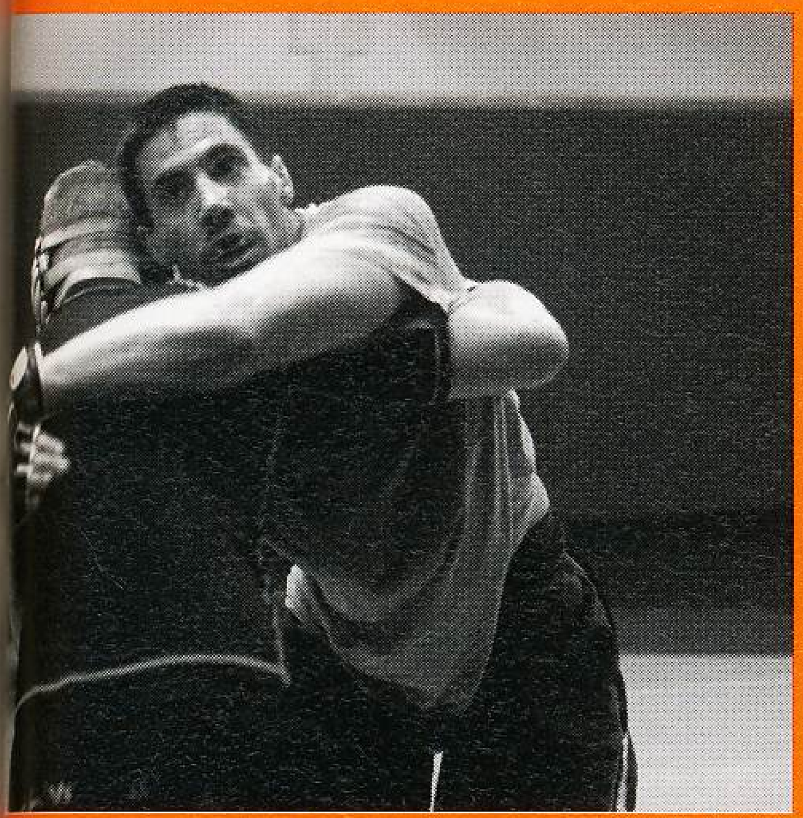
――ぜひ、お願いします。

「彼は戦いを控えた選手にいつも、こう言っているんだ。『家族は君を愛することを絶対にやめない。本当の友達は君の前から去ったりしない。試合に負けても、この世が終わるわけじゃないんだ』ってね」

――素晴らしい言葉です。では、最後にロバートさんが思う、チーム・クエストの強さを教えていただけますか。

「チームであること。世界を見て回った人間が集まって、他の人間に伝える。MMAはインディビジュアルなスポーツだけど、ここは本当の意味でチームがある。ジムのなかで誰が一番強いとかいう考えを持たない。そして、良い意味での競争心もある。チームが個人を強くしているんだよ」

寝技でヒザ有りなら、ランディはよりもっと危険な男になる



レスリングのクラスはなくても、念入りにテイクダウンの練習は行われている。



ＵＦＣレギュラー・メンバーのポートレート。



ジムの入り口に掲げられた、トレードマーク。



MMAの練習でも、リンドランドからテイクダウンを奪うのは至難の技。

Gachinko Column
[総合格闘技の現在を考える]

ガチコラ! Vol.1



先生が教えてくれた「いかに戦うか」

「私は『いかに戦うか』よりむしろ、『いかに戦わないか』をみんなに伝えたいんだよ」

我が師ペドロのこの言葉を聞いたときは、さすがに少しびっくりした。ペドロが教えているのは合気道ではなく、ブラジリアン柔術だ。黒帯三段のペドロは、まだ30代半ばで、僕ら生徒と毎日スパーリングをガンガンやってくれる。もちろん誰も勝てない。腕試しにやってくるレスラーやＮＨＢファイターなども、全部自ら相手にしてタップを取る。ペドロは僕らの前で毎日ガチに戦っている。

でもペドロには、「試合で勝つこと」へのこだわりはすごく薄い。競技柔術でもＮＨＢでも、自分が出ることにも、生徒を勝たせることにもほとんど興味を示さない。そこに不満を抱いてうちを去った生徒も少なくない。

「もちろん試合は柔術の一部だし、ＮＨＢだってそうだ。でもいまはみんな勝つこと、自分が人よりタフであることを見せびらかすことにこだわりすぎだよ。柔術は、もっともっと多くのものを人に与えることができるんだ。そっちの方が私にとっては断然大切なことだ」

「柔術をやることで、よりよい人生が送れるようになる。人に敬意を持つことができる。謙虚さを学び、自信を得て、自分の強さを見せびらかす必要もなくなる。なにより道場でファミリーができるんだ。例えばお前が明日、突然ここを去って日本に帰ることになったとしよう。私はみんなに、お前のことを憶えていてほしいと思う。お前が取ったメダルの数ではなく、お前がどういう人間だったか、ということを」

こういう言葉をくれる師を持つ自分は、幸運なんだと思う。「いかに戦わないか」の意味もなんとなく分かる。でも、試合大好きの僕はそれを全面的には受け入れられない。ペドロもかつてはガンガン試合に出ていたし、ＮＨＢもやっていたそうじゃないか。そこでいっぱい実績を残したからこそ、今の境地に至ったわけで。でもいまの僕は、まだまだ結果がほしい…。

そんな僕の考えを見透かしたのか、ペドロは言った。

「トニーを見てみろよ！」

トニー？　そうだ。負けるのが大嫌いな僕も、彼との練習では、それを超えた気持ちを持てる。

トニーは、なんと60歳を越してからうちに入門してきた。若い頃は相当のスポーツマンだったらしく、見事な肉体を維持していて、力も強い。でも最初のうちは、僕とスパーするたびに膝や腰を痛め、途中退場していた。

それでもトニーは「お前は私のネメシス（天敵）だ。この呪いが解けるまでやらねば」とジョークを飛ばしつつ僕とスパーを繰り返し、やがて途中退場することもなくなった。「練習の翌日はいろんなところが痛むんだよ。お前もこの年になれば分かるはずだ」と苦笑いしながらも、トニーは道場に通い続け、自分より何十歳も若い連中とやり合っていた。

そのうちペドロはトニーに青帯を与えた。当時スパーでトニーより強い白帯はけっこういたと思う。でもそういう問題じゃなかったのだろう。

そして、ある日のスパー。トニーは僕をハーフの体勢で胸を合わせて完全に抑え、怪力でアームロック。僕は逃げるすべもなく、すぐタップ。初めて取られた。

でも、負けず嫌いの僕が、極められてこれほど感動したことは他にない。別に「格下」が強くなったことが嬉しかったのではない。60歳を超えて柔術を始めた人間が、自分の年齢より半分以下の（しかも自分より長くやっている）人間から一本取る…柔術ではこんなことも可能なんだということを、トニーが証明してくれたことが感激だった。

「いまから30年以上たって60歳になったとき、僕もトニーみたいに、20代の人間から一本取るよ！」と言うと、嬉しそうな顔をしてくれた。

そんなトニーをしばらく道場で見ないなと思っていたら、今年の７月のある日、ひょっこり顔を出した。トニーは僕を道場の隅に呼びつけ、自分のお腹を指差し、こう言った。

「いままで言わなくて悪かったけど、実は私のここにガンが見つかったんだ。しばらくキモセラピー（抗がん剤による化学療法）を受け、9月に手術することになりそうだ…」

そして10月。だいぶやせたトニーが再び道場に顔を見せると、みんなが歓声をあげて彼を取り囲んだ。「この年で、あのセラピーと手術に耐えられたのは、間違いなくこの道場で付いた体力のおかげだよ」とトニーは笑った。

ペドロは僕に言った。「トニーはガンに勝って戻って来てくれた。柔術に助けられて。私にとってこれほど嬉しいことはないよ。生徒を試合で勝たせることなんかより、はるかにね」

先生。やっぱりあなたが伝えてくれているのは、「いかに戦うか」ですよ。

1 ひねリン　1972年東京都出身。南カリフォルニア在住。観戦記ネット（http: //www.kansenki.net/kansenki.htm）レギュラー書き手。ペドロ・カルバーリョ道場紫帯。

楽しくなければ精神的にもヘルシーではいられないじゃないか」

が許されていますが。
「ＵＦＣで禁止されているからといって、

い。そして、良い意味での競争心もあるチームが個人を強くしているんだよ」

和良　今日は、わざわざお集まりいただきありがとうございます。皆さんが今、紙媒体に対して、どのような印象を持たれているのかを伺いたくて、この機会を設けさせていただきました。とりあえず私と高島の二人は専門誌側の人間として受け答えする所存ですが、メモ8さんはスマックガールで仕事をされているので、ファンと業界人の中間にある方として、座談会をリードしていただこうと思っています。

メモ8　基本的な趣旨は、要はネット野郎が格闘技雑誌とか編集者の方に文句をつけるという事でよろしいですか？

高島　みなさんが普段から感じられていることを、どんどん言ってもらえれば…と思っています。まず、お名前とハンドルネームを一致させたいので、最初はお一方ずつ、挨拶代わりに我々に一言頂けますか。

メモ8　今回は面白い事を言いそうだという以上に、それぞれの分野で突出した人に集まっていただきました。まずタカハシさんは、基本的にプロレス系が大好きな方なんですが、グレーシーバッハで柔術もされていて、最近流行ってきたブログ、日記にレスが付くような形式のものですね。あれで有名人なんかよりもヒット数が上回ったりする方です。長文で、むしろライター的感覚で凄くいい文章を長く書いている方で。しっかりしたものを書くので非常に信頼されています。ハイ。まず、強く主張したいとすれば最初に、何をおっしゃりたいですか？

タカハシ　えっ、強いこと…。取り敢えずぶっちゃけた話、これはワークだろうって思っている試合を予め聞かせていただけますか。それを聞いてから話したいなと。まあ、ちょっとこの辺で話すレベルの確認というのと、聞く機会が無いので聞いてみたいなと。

高島　申し訳ないですが、ぶっちゃけワーク云々をここで語っても、それは活字になりません。ただ、この機会に皆さんが紙媒体についてどう思っているかを聞かせていただきたいので、自分の格闘技感を明らかにしておきます。ただ、これはこの場限りで、私の持論ですから、オフレコとさせてもらいます。

☆数分経過し、いよいよ本題へ。

某っち　結局、僕が言いたいのは雑誌っていうのは真実を言えないじゃないかということです。

和良　すみません、お名前がまだ分からないのですが……（笑）。

メモ8　彼はにわかっち。平仮名で書くか最近では「某っち」とも名乗ってます。掲示板で暴論を吐きまくるという方です。


左から長尾メモ８氏、タカハシ氏、某っち氏、グリフォン氏

某っち　暴論じゃないよ。

高島　皆さんはキャラを作っているんですか？

某っち　それはありますね。

メモ8　ただ彼の場合は凄く熱くて、大変ですよ。桜庭と菊田のこと話しだすと、涙ぐんで怒りますからね。

高島　桜庭って、コアなファンに嫌われる要素を持っている選手なんですか。

某っち　僕は本当に嫌いですね。でも、そんなに悪い人ではないとも思っています（笑）。

メモ8　彼は正直、ネット上で実名晒されたり…。あまりにも強い暴論を吐きすぎて。そういう嫌な目にもあっているんです。

和良　実名なんて分かるんですか？

メモ8　結局、身内と思っていたネット仲間から、漏れたりするんですよ。友達の友達はみんな友達なんだけど、ポッと実名出ちゃったり、勤め先が出たり…。

某っち　挙句、リングス叩いていたらリングスファンに殴られました（笑）。

メモ8　という意味で彼は、この中では一番暴れん坊キャラですね。で、君の言いたいことは？

某っち　言いたいのは紙メディアの衰退と癒着。癒着と言ったらアレだけど、取材拒否とかもあって、紙が衰退して、ネットが繁栄してきていると思うんですよ。それなのに紙は、いつまでも桜庭は偉いとか、マッハ、菊田がんばれとかね。とにかく、すぐに日本人だけえこひいきして褒めちぎって、そんな事をしているから

今や、専門誌の存在を脅かすまでに成長したインターネットのハードコア・ファンの発言の数々。
掲示板、ブログ、観戦記など、プロの記者を凌ぐ支持を実は集めている。
今回、ガチ！編集部ではスマックガールの広報として活躍中の元ネッター、長尾メモ8氏の推薦をうけた、
性根の入ったネッター3名を招き、司会のメモ8氏とともに紙媒体への不満を語ってもらった。
情報化社会にあって、今、その存在価値が問われるようになった専門誌。
ネッター四天王と、記者側から出席した和良コウイチ＆高島学の受け答えは？？？

（※決して暴露、中傷合戦ではなく、明るい未来を導き出すためのポジティブな座談会です）

マスコミの特権が非特権化してる

結局、自分で自分の首を絞めていると思うんですよ。僕は五年前からネットをやっているんですけど、当時はプロレスも真剣勝負、ましてやU系なんてガチガチの真剣勝負だって人達ばかりだったんですよ。格闘技板にも関わらずU系が真剣だと信じているんです。あまりのレベルの低さに…。レベルの低さっていうか…。それでもネットは変わってきましたからね。

メモ8　とりあえず紹介を先に進めてしまうという事で。次はグリフォンさん。彼ももうネット関係の間では古株で、ジョシュ・バーネットの秋葉原おもちゃ買出しツアーを企画した人です。アメリカの有名掲示板であるアンダー・グラウンド・フォーラムでも、有名な存在です。結構向こうだと選手が気軽に書き込むんですよ、ネットの掲示板って。そこにグリフォンさんが日本のことを、物凄く下手な英語ながらも書き続けている。ただ、どちらかというと彼もひとり語りの方が得意なんですけど、情報魔でNHBニュースっていう掲示板で、延々情報を出されている方です。

和良　いつも見ています。

グリフォン　恐れ入ります。

メモ8　難しいこと言いたがると思うんですけど、どうぞ（笑）。

グリフォン　よろしくお願いします。今回「ガチ」さんでは、インターネットの連中が専門誌をどう思っているかということで、この企画を出されたと思うので一応それに則して話していきたいと思っています。小難しい話ではないので。ま、インターネットの特徴を考えましたところ、インターネットっていうのは速報ですよね、言うまでも無く。速報っていいながら遅い人もいますけども（笑）

メモ8　悪かったな（笑）。

グリフォン　そういう形で単純に結果がパッと出てくれれば、それを見られるっていう点で、有る程度、雑誌がこれに押されるっていう話はありますよね。その点が、ネットが出現し変わりつつある現象ですよね。また、ホームページがあることによって、選手自身が自分で情報をコントロール出来る。昔はメディアを通して、言い事も悪いことも伝わったものが、今はホームページでパッと広報して、さらにはそのホームページで儲けようなんてことをプロモーション自体が試みている。そういう形でマスコミの特権が、どんどん非特権化されてきていると思うんです。で、もう一つ、ネットというのは記録が蓄積され、そして検索できる。だから、お二方も取材をたくさんされているんですけど、もう10年も経つと忘れたいこととか、あるんじゃないですか。しかし、ネットだと検索してすぐに発見できるんですよね。高瀬大樹が「総合格闘技で俺以上に寝技が強い奴はいない」とか言っていたのとかを。

和良　俺が取材したやつだ（笑）。

グリフォン　そういう高瀬暴言集（笑）みたいなものを私がそこだけ切り抜いてネットにアップして、誰でも検索すれば出るようにしているわけです。U系のワーク云々に関しても、ネットは紙媒体より先に真実を伝えた。私の考えでは、「紙のプロレス」も大体それに合わせるような形で変えていったところがあるんじゃないかと。それと私のように下手糞な英語でもネットを使えば海外とのコミュニケーションが容易くなる。やっぱり昔だったら海外取材なんて、記者さんの特権だったわけですよ。そういうことが、今は素人がクリックするだけで出来るようになった。翻訳ソフトなんかもありますし。紙メディアのみなさんが本当に選手と信頼関係があるから書けること、調べられることもあるんですが、もう記者の表面的な部分での"特権"というのはなくなりつつあると思うんです。

高島　要はインターネットの特徴、良さっていうのがイコール紙メディアの弱さだと。

グリフォン　そうですね。その一方で高島さんのような人は内部に密着しているから、その時に佐藤ルミナはこう呟いた、マッハはこんなことを言ったということは書けるわけですが……。

高島　でも、それは紙メディアとインターネットの違いではなく、ネットを媒体とする記者の方も存在するのだから、紙メディアとネットの差ではないですよね。

グリフォン　ただ、紙メディアっていうのは、ある種、伝統があって大きな資本があって、それでやっぱりそれなりの信用もありパワーもあるから、やれるわけですよね。ただし、そこでしがらみっていうのは当然出てくるわけで。紙メディアのみなさんは逆にジレンマで苦しんでらっしゃると思うんですが。

高島　はっきり言って話題を八百長云々にするために、この企画を設けたわけじゃありません。ここに皆さんに集まっていただいて意見を聞くことによって、僕らは今後、どういう風に雑誌作りをしていくか、という部分でヒントを頂きたいわけですから。

グリフォン　これお世辞じゃないんですけど、

ネットの強みは紙メディアの弱み

2000年ぐらいだったかな、確か田村がヘンゾに勝った試合あたりから「ゴング格闘技」が面白くなった。やっぱり技の解説とか、キックボクサーに聞く、柔術家に聞く、あの分析とかがすごく好きで。

某っち 海外のレポートとかも、詳細にやっていたのが、ある時期からやめていますよね

グリフォン あの頃のものは保存しています。

メモ8 ただ、それはここにいるようなマニアにとって面白い本で、マニア受けする雑誌が良いかといえば、それは違うんじゃないですか？

高島 そこが一番の肝なんですよ。

和良 個人的に、僕は自分が面白いと思うことしか面白がれないタイプなので、そうすると、高島君とちょっと指向は違うんだけど。彼は仕事を仕事として、捉えているから。ただ、僕にとって面白いものはやっぱり技術であり、読者ももっと知りたがっているに違いないと信じています。これぐらいの記事じゃ絶対満足しないよっていうのが、当時からあったし。

グリフォン ディープな技術論が始まった頃は、反響としてはどうだったんですか。

和良 反響っていうのは分からないですね。

グリフォン 売り上げはどうでしたか。

和良 売り上げは上がっていましたね。

高島 ただそれは、技術論だからとか海外が載っているからじゃなくて……。

グリフォン PRIDE人気ですか？

高島 これは僕個人の考えですが、テレビで格闘技が盛んに見られるようになったことは、ネット云々以上に雑誌作りに影響を与えたし、ネットの広まりにも影響していると思うんですよ。それまでと同じように格闘技ファン、興味を持っている人を相手に原稿を書いているんですが、PRIDEやK-1人気で、ファンの幅が広がってきた。だから、どのような雑誌になるかというのは、作り手によって違いが出てくる。

グリファン みなさんから見て編集長論っていう点では、いろいろな人と付き合っていると思うのですが、誰が印象に残っていますか。

高島 僕はやっぱり一年生だったときに指導してくれた谷川さんの影響が、今も大きいです。基礎作りは谷川さん、ノビシロを見つけたくれたのが、宮地さん。谷川さんの下にいた時期は短かったですけど、「いつ、クビを切られるか」と、ビクビクしていました。それも編集長云々だけでなく、編集長によって編集部のあり方が大きく違って、谷川さん時代の「格闘技通信」編集部に教わったことが大きいです。物凄く文章を直されて、それによって「なんで直されたんやろ」とか、「俺は間違ってへん」とか考えることができたと思っているので。

メモ8 私はナマクラ型で、掲示板で暴れん坊になったり、速報をやったり色々やるんですけど、実はけっこう名前が売れるきっかけになったのは、朝岡さん時代の「格通」にからんだ文章を書いて、で、それがけっこう読まれたんですよね。徹底して朝岡さんの「格通」の編集方針に異を唱えた書き方をして。いまだに良い出来の文章だったなと思っているんですけど。あの頃、ノーフェイクマークをやり始めたじゃないですか。で、私もちょうどそのとき、何人かの有志で田中正志をブレイクさせようってやりはじめた頃だったんです。ご存知のように田中さんの書くものは、そういう部分にズバリと切り込んでますから。それこそ、ネットの悪い方の側面でもある、何でもヤオだフェイクだとやたらと言う傾向に拍車をかけてしまった人間の一人でもあるんです。

高島 なぜ、ファンの人がワーク云々を口にすることを気にするのか、僕には理解できないんですよ。「誰かから何かあんのんか」と。

メモ8 逆に言えば一般人の人間でも、そういう気遣いをするぐらいに、ワーク云々は扱えないということは分かります。私が朝岡さんの編集方針にすっごい絡んだのは、朝岡さんの指摘の仕方の下手さが許せなかったんですよ。それまで明らかにそれとわかる編集をしていたわけですよね。それがその時は、未だに忘れませんけど、4つの団体をだして、これは疑われているみたいな書き方しながら、でもそんな風に中途半端に疑ってはいけないみたいな、どっちつかずで。「今までの方針と違うじゃねーか」って。当時、自分はただのファンだったんですけど、スマックガールがその4つの中で一番弱いプロモーションで、あたかもそれだけ八百長だっていうように書いていたんですよ。なんだよ、叩き易いところを叩いているだけじゃねえかって（笑）。要するに、「お前の人生が八百長だろっ」て話ですよ（笑）。

高島 でも人生って八百長じゃないですか？ 僕はリング上の八百長は嫌だけど、若い頃なんて、人生八百長だらけだった（笑）。

メモ8 もちろん、私も大人なんで、それはわかりますけどねえ……（苦笑）。

高島 朝岡さんに関しては、僕は当事者ですから言えるんですけど、あの人は本当に戦っていた。格闘技界の慣習や会社と、それで疲れが原稿に出ちゃう。それは読者の方はいくらでも叩いていいと思います。お金を払って買ってくださる、その人たちは編集者、ライターの事情なんて関係ないから、どんどん叩くべきでしょう。ただ、そういう中で朝岡さんっていう人は真剣に戦って、真剣に向き合っていたんです。

インタネッター四天王が、「Gachi」にもの申す！

グリフォン 何かを変えたかったから……。

某っち 僕は嫌いじゃなかったな。

グリフォン 戦っているというのはノーフェイクっていうキャンペーンについて？

高島 それだけじゃないんですけど、そのノーフェイクにしたって、堂々と謳っていれば、編集部内だけでも論議が起きますからね。それにメモ8さんのように、整合性を求める人も当然出てくるし。でも、それだけ朝岡さんの原稿は、ファンに読まれていたということですよね。じゃあ、商業誌として正解じゃないですか。

メモ8 「ガチ」の話に戻せば、創刊号は外の人間に文句をいわせて突破していこうっていう風に感じたんですが。それは方法論として、明確に意識していたんですか？

タカハシ 私は「ガチ」は新しい人をどんどん入れていったと感じましたね。

某っち プロレス村の影響がない人とか。

グリフォン 「海外記者に聞く日本の格闘技の不思議」というアンケートがありましたよね。さっきメモ8さんが言ったように、その声で、日本の格闘技界を変えようと？

高島 あれは海外格闘技記者の座談会をやろうとして、ぽしゃってしまったから、生まれた企画なんですよ。本当に深い意味はない。「ガチ」の狙いは、一つだけ。みんなが一般へ一般へと流れるんだったら、じゃあ好きな人に焦点を絞ると、どれだけ売れるんだろうかと。

和良 要するに有る程度こういうメディアに対してリテラシーのある人達が読むものがないっていうのが、一番だったんです。

高島 それで何部刷れるんだろうって（笑）。

タカハシ マニアは大体こういう本はとっておくもんなんですよ。で、売れる本っていうのは、本当に読み捨てていくもんだと思うんですよ。そこから考えていくと格闘技雑誌っていうのは、スタンスをどこに置くかって、それは難しいと思うんですよね。

グリフォン マニア向けってことで私がアンケートで一番感心したのは、ガチの方向性ってこれかなぁって思ったのは、日本人ファイターの感想を言って下さいっていうところに、高瀬大樹と郷野聡寛が入っていたこと。それに返答する海外勢も、インターネットで有名人のシャーウッドとかも、紙媒体に発表することに飢えている部分もあるだろうなって思いましたね。プロライターとは、書いて生活の糧を得ていることなんですけど、元々書くということ、表現欲っていうのは、金銭とは結び付かないところもありますから、ネットのみなさんは誰も一銭にもならないのに、書きますからね。

某っち だからボロクソ書くんだよね。金もらってないから好きに書いていいんだから。

グリフォン 取材拒否も怖くない

某っち 俺は格闘技で金稼ごうって気持ちは全然ないんで。メモ8さんは「2ちゃんねる」が嫌いなんですけど、「2ちゃんねる」っていき過ぎな面もあるけど、あの匿名性っていうのがネットの一番大切なところかなと。ただ、これもカットされると思うんですけど……、××が××を相手に八百長しましたよね。で、それをネットで書いていた人がいるんですよ、業界の人間で。業界誌でやれば当然抗議がくるけど、ネットは匿名だから、そういうところで本当のことか書けるところがある。

メモ8 それは信頼性の問題との引き換えになりますよ。逆にそれこそメディアリテラシーっていうか、偽物を区別する目を個々の人間が持たないと、何でもヤオガチ論争になってしまう。

某っち 人の本音がある程度でるから、ネットは良いんじゃないですか。例えば、「2ちゃん」で桜庭のことを「雑魚ラバ」と言ったり、で、これって、「2ちゃんねる」だから出来ることですよね。僕みたいに殺されてもいいからっていう覚悟がないと、固定のハンドルネームでは書けないじゃないですか。固定ハンドルでやっていると、自分に対する風あたりが強くなるから。

グリフォン ただ一般論というか、凡庸な意見になってしまうけど、雑魚ラバとか保身菊田とか、近藤は寝技ができないマグロとかいうレベルでなく、匿名だと民族とか国籍がどうこうとか過激な悪質表現っていうのは出てきちゃうわけですよね。

高島 少しひっかかっていることがあるんですが。先ほど、プロが自分の名前では書けないからネットで書くという話がでましたよね。それって僕からしたら考えられないことなんですよ。僕はこれで喰っているから、タダで書くつもりは絶対にない。あと「雑魚ラバ」という表現、初めて知ったんですが、自分は何があろうが選手に対して尊敬心だけは失わずに記事を書いているんで、そういう表現は取材拒否云々とかなくても、絶対にしたくない。

和良 その流れの中で一つだけ言うと、選手に対するリスペクトって言うのは基本的にマスコ

マスコミ人も選手へのリスペクトが欠けている

ミの人も、すごく欠けていると思います。バックステージでも本当にファンと同じ目線といったら失礼かもしれないけど、アイツはしょっぱい、アイツもう要らないよ、という目で見ていて…。僕はいろんな道場とか現場行って見ているですが、やっぱり仕事終わってから練習し、若い連中に極められたりして戦い続けている。それだけでも、凄いと思っているし。

グリフォン ウゴ・デュアルチの言葉ですけど「リングに上がった者は、誰しもが勝者」だっていうことですよね。

和良 プロの選手がいろいろ言われるのは当然のことだと思うんです。だけど…、僕なんか柔術の試合に出ようと思って申し込んで、試合が近づくにつれて負けたら嫌だな〜って思うようになるんですよ。別に怪我する訳じゃない、極められたら、参ったをすればいいだけなのに。

某っち 気持ちは分かりますよ。ただし金払ってるのこっちなんですよ。

メモ8 私やタカハシさん、グリフォンさんは書くことが好きだから、言論人みたいな意識を持ちたくなるけど、某っちは客としてのスタンスを最後まで凄く大切にしているんですよ。

某っち 絶対に道場に行かないというか、習ったりは絶対しない。会っちゃうとダメじゃないですか。やっぱり。

和良 僕が今言ったのはファンに対してではなく、格闘技マスコミが選手に対して尊敬心がないということなんです。痛みとか、負けたらすげー悔しいだろうなとか、怪我したのに飛行機で27時間もかけて帰国するのかとか、そこまで考えたうえで、原稿を作っているのかなって。想像力が足りないなって。

グリフォン 俺達はシニカルに見るぜっていうのを一つのスタンスにしたメディアとして「紙のプロレス」というものがあります。彼らなりの尊敬心もあるんでしょうけど、基本的にはプロレスラー達をオモチャ・餌にして笑いを取る。そういうスタンスだからこそ、真実を衝く批評・批判もできたという部分もあると思うんです。ところで、プロモーションとの距離のとり方について、どのように思われていますか。例えば紙プロとDSEとの関係などは？

高島 どこも商売なんだからね、読者は嫌なら買うのをやめればいいと思っています。

グリフォン しかし、これだけPRIDEが人気出たら、「ガチ」でも表紙がミルコ。ミルコであるとないとでは売り上げも変わってくるって部分もあるんじゃないですか？

高島 雑誌だと表紙は、大切なわけですか？

タカハシ 女性雑誌って、表紙見れば中身が全部わかるようになっていますよね。

高島 例えば財布に千円しかなくて、格闘技雑誌が780円だった。この表紙なら、買うのをやめようなんてことはあるんですか？

グリフォン マニアは表紙なんて関係ないよっていうかもしれませんが、実際の結果として表れているでしょう。魔娑斗が表紙だと売れるんだって話があったり、「紙プロ」でも小川で売り上げアップで、ターザンだと救いようが無かった（笑）とかあるみたいじゃないですか。

某っち それと信用度。前回が面白いと、次も買うとか。また「ガチ」が出るなら、前が面白かったんで、買おうってなるんで表紙は関係ない。浮動票には関係あるかもしれないけど、マニアには雑誌に対する信頼感ですかね。

高島 雑誌自体を買うっていう感覚が、若い人の間では減少しているみたいですしね。

和良 ちょっと基本的な質問していいですか？ みなさん毎回買っている格闘技雑誌っていうのは何になるんでしょうか？

タカハシ 自分は「紙プロ」だけですね。

グリフォン 私も悪口はいいますが、やっぱり「紙プロ」が一番面白いと思います。

某っち 僕は「ゴン格」と「格通」だけ。「Number」とかも、格闘技特集は買っています。

メモ8 私、今年からスマックの事務所を私の本業の事務所にしてしまって。送本されてくるんですが、以前は三誌とも買っていました。

グリフォン 私は立ち読みして面白かったら、違う専門誌を買うときもあります。

高島 何が要因なんですか？ 号によって買うとか買わないとかは？

某っち コラムとインタビューですかね。

グリフォン 私もインタビューによってですね。

高島 見やすさという面で、写真とかレイアウトなんて気になりますか？

タカハシ 当然あります。

某っち 漫画でも、読者の目線がどう動くか計算されて書かれている。適当じゃなくて、全て計算されていて、それと同じでレイアウトにしても、どこに目線が行くかってあると思いますよ。レイアウトは重要ですよ。

高島 写真はどうですか？

メモ8 2年前まで「ゴン格」は秀逸でした。白いところが多かったんですよね。そこが私は好きでした。

"Gachi."

高島 ただ、それも雑誌の有り様で「ガチ」は、月刊、隔週雑誌より店頭に並ぶ時間が長い。だから、四ヶ月、五ヶ月並べるための情報量で。「ゴン格」と同じレイアウターの方にやってもらったんですが、どうしても文字だらけになってしまうんです。

グリフォン 凄い量ですよね。新書でいうと、これ三冊分くらいあるんじゃないですか？

和良 コンセプトがあったんですよ。立ち読みで終わらせないという。立ち読みで終わってしまうレベルにはしたくない。

高島 手にとってもらってその時、買ってもらえるかどうか。レイアウターの人が嫌がろうが何だろうが情報量で勝負っていう（笑）。

和良 実際、同業者にも、ごちゃごちゃしてると言われましたけど、それは狙っていたんです。

グリフォン あるライターに言わせると、一般スポーツ誌はギャラがいいんだよ〜って。

高島 そんな、あんまり原稿料では左右されへんよなぁ？

和良 されない…かな？（笑）。

高島 そりゃあ、一般誌で専門誌よりいいギャラもらうのはエエことかもしれへんけど……。

和良 どんな仕事ができるかですね。

高島 僕らみたいなライターに必要なのは、専門誌。良い専門誌の存在が、専門ライターを育てるのに一番いいと思うんで。それともう一つ、こちらから皆さんにお伺いしたいことが。雑誌にちょっとエロっぽいのが載るっていうのは？

某っち それはOK。

タカハシ 女子格闘家のってこと？ 俺は全然ダメ。もっと綺麗なお姉さんが載っている雑誌がいっぱいいるのに、全然嬉しくない。

高島 水着とかネコのカッコとかしょうも無い見せ方じゃなくて、ちょっとした色気とか。

タカハシ 試合のいい表情ってあるじゃないですか。色気じゃなくて、充実感っていうのか。そっちのほうが、よほど女の子も可愛く見える。だって、格闘技雑誌であって、グラビアの専門じゃないでしょって。

某っち あのう、ネットの世界で隣コラっていうのがあるんです。隣人のコラージュを作ったほうが興奮するって人間がいるわけですよ。それと同じ考え方で、イエローキャブの女の子とかとは別で、身近な存在の女の子っていう意味で、女子格闘家のお色気はありですよ。

メモ8 だからそう考える人間が、格闘技雑誌開くかって事でさぁ。それはエロとして凄く届く可能性は有るとしても、客寄せとして格闘雑誌がそれを載せるべきかって。

グリフォン 難しいんじゃないかな。

メモ8 過去に水着だとか浴衣だとか、そういうのもありましたけど、逆にグラビアっぽく作ると、さっきタカハシさんが仰ったように、所詮この程度だなってなる可能性も高いわけでね。やらせる側として、女子格闘技にエロさを感じてもらうのは一向に構わないんです。ただ、やらせる側からエロで売るんじゃなくて、当たり前のシーンのちょっとした表情で感じてもらうなら大歓迎という。

某っち 作為的に作ったものに拒否反応を起こす人って、結局どう転んでもチケットや雑誌を買わない人だと思う。でも中には、興味持つ人って絶対いるからそれはプラスだと思う。格闘技やっているから、美女って形容される女の子もいるわけだしさ。

タカハシ じゃあやっぱりあるんだな、需要は。

某っち 競技、競技って言って、「ジョシカク面白いです！」じゃあ、見に行かないよ。

メモ8 そんな事は当然分かっていて、でも、一方で「女子だ」、「エンターテインメントだ」、「キャットだ」って言われ過ぎる嫌いがあるから、競技として当たり前にあるべきこと、キャットファイトとの差別化を、一生懸命やってるわけ！ エロだけで客が入るなら、どこのキャットファイト団体も満員にしてるって。

高島 ところで、皆さんは他に収入がある方ばかりですよね。そうすると、例えば体調が悪かったり、少し億劫に感じれば、ネットで執筆しなくなることもあるわけですか。

グリフォン 実はですね、それに関連して少し考えてきた事があるんです。高島さんはファンか、プロかということが仰りたいわけですよね。プロのライター志望者が、雑誌社にライターとして採用される。アルバイトとして採用されるのと、我々みたいに適当にやっているけど、英語は出来るとかから、ネットで活動するというのは違いますよね。ネットには例えば「大宮の近くに住んでいるから、大宮フリーファイトだけはずっと観てきた」とか、そういう一芸に秀でた人や、弱気なんだけどインターネットではガーっと書ける人が存在する。底辺が広い、入り口が広い。自分たちにしても膨大な中から、何かの拍子に目立ってきたというのがあるんで。出版社で勤められている人は、ある程度入

立ち読みで終わらせたくない

りロで選別され、中でしごかれて残っていくわけで、辿ってきた道程が違ってくるっていうのがあるんですよ。

和良　僕らは、自分たちのレベルが高いとは全然思ってないですよ、ぶっちゃけ。ただ、仕事と趣味は違うというだけで。

グリフォン　高島さんはさっきお金にならない文章を書くつもりは無いと仰いましたが、和良さんは紙メディアで書けない事なんかをネットで日記なんかにちょっと書いてみようとは？

和良　全然ないですね。これでもプロなんで。仕事と趣味はやっぱり違うんですよね。仕事と趣味って何が違うかって言ったら、依頼が有るか無いか。締め切りが有るか無いか。そこが違いますよね。人からの依頼なしで、文章を書こうとは思わないです。ただ、プロとして、自分の思っていることが、そのまま全て受け入れられるとも全然思っていないので、編集者に「あ～ここがダメ、ここ直して」って言われる方が実はホッとするんですよ。

高島　自分の文章、論文みたいやもんな（笑）。

和良　それ、よく言われる（笑）。ただ、それが全然分かってない奴だったら、腹が立つだけなんですけどね。

高島　お前に言われたぁないわって（笑）。

和良　でも、腕のいい編集者って居てくれるので、「あぁ、そうか！」っていうのはあります。

高島　「良かったよ」って言われて、ホッとして涙が出そうになったりして。でも、後で聞いたら、「だって良かったって言うしかないじゃん。あれから書き直す時間ないし、あなたをあそこで傷付けたら、立ち直れなくなったでしょっ」て、3年後に聞かされたり（笑）。すいません、余談が過ぎました。私たちのほうから、皆さんにお伺いしたいことは一応、聞き終わりました。最後に皆さんから、専門誌に対して要望のようなものはありませんか。

某っち　ネットでは5年掛けて、プロレスやU系がリアルファイトじゃないって事が、完全に浸透しました。雑誌も時間は掛かると思うけど、今の大政翼賛会的な興行側の顔色ばっかり見た記事を無くしていって欲しいなと思います。主催者が歓迎しない、やって欲しくないような記事が、スパッと書けるなら、紙メディアもまだまだ健在だと思うんですけど。

高島　その志が無くなったら、僕はこの仕事をやらないことだけは、約束できます。

グリフォン　私はお二方が、もっとインターネットに否定的な意見を持っていると思っていた

ネットには一芸に秀でた人がいるんです

んですが、まぁ、インターネットは良いか悪いかは別にして、圧倒的な現実として生活の中に入ってきて根付いたことは事実な訳ですね。紙メディアとしては自分のフィールドの中で、プラスになるような事をドンドン仕掛けていく。ネットと紙の敷居を作らないで、自分の得意な事だけを活かせることを考えて欲しいんです。「ガチ」だって、ウェブページにアーカイブを作ったりして、クリックした中の10人が買ってくれるだけでも、良いと思うんですよ。

和良　ネットに関して、敵対するっていうのは全然ないですね。ただネットを見始めたのが、結構遅くてまだ3年位しか経ってないんですよ。

高島　ネットに関しては、これは僕個人の考えですけど、今に雑誌界がネットを取り込んで、電波でプロの仕事ができるようになるのではないかと。金を払ってでも見たいネット、どのように雑誌と連携していくか、それはもうかなり進んだレベルで考えられていますよ。ネットが社会を変えたんですから。雑誌が引き立つ有料ページ、もしくは年間購読者だけ対象のウェブなんていうのが近いうちに出てくるんじゃないですか。なんて、いやに思わせぶりかもね。

和良　でた、ビジネスマン高島！（笑）。

タカハシ　「週刊プロレス」が出た時のキャッチコピーが、「月刊では遅すぎる、日刊では浅すぎる」、だったと思うんです。当然、その時はネット情報とか無かったんですけど、自分は紙メディアの方が上だという気持ちがあります。それは何故かっていわれたら、形として残るって事だと思うんですね。ネットって消費されていくものだと思うんです。もちろん検索すれば出てきますけど、毎日ガーっと山の様に消費されていくものだと思うので、その残るという部分で本作りっていうことを差別化していってもらいたいと思うんです。

高島　自分が書いた文章、自分が撮った写真が印刷され、それを読者の人がずっと持っていてくれる。それ以上、記者冥利に尽きる事はないことですね。ただ、定期刊行物は次の号が出た時点で、前の号を捨ててもらっても全然構わないと僕は思っているんです。今、僕らの能力は月間誌なら1ヶ月間楽しめるもの、最低、次の発売日まで楽しんでもらえるものを創っていくということ。雑誌が店頭に並んでいる間は、手にとってもらえるものを創る。それが絶対的かつ最低条件のつもりで、やらせてもらいます。

和良　僕がこの業界に入ったのが94年で、そ

say to

格闘技は技術がわかった方が絶対楽しい

れから10年経った訳ですけど、実は意識が昔のままの編集者って凄く多くて。それがどういうところに表れているかというと、自分が読者を啓蒙する側って意識が凄く強いことなんですね。でも、実際のところはネットのコアなファンの人達の方が詳しかったり、知識あるじゃんって。最近、思うようになったんです。知識を比べたら本当に恥ずかしくなるような人達でも、本職にしている。じゃあ、僕が力を持って編集長をやれていわれた場合、一般層が凄く大事なはずなのに、自分にはそこを引き入れる能力が多分無いんです。だから、自分は自分の好きな事、面白いと思う事しか出来ないので、「ガチ」に関していうと、しょうがないから書いたって記事は全く無いんです。

高島　ダメなことかもしれないけど、高島学と和良コウイチは、ああいうものしか創れない。

和良　そう、そう。ただ、この「ガチ」を創って、少しだけ分かったことは、このぐらいのレベルの雑誌を出版して、この位の数の人たちが買ってくれるんだということなんです。

高島　「ガチ」を創る背景には、実は「柔術王」というものが凄く関係していて、一回きりっていうつもりで創った部分もありました。ぶっちゃけ「柔術王2」を創るために「ガチ」を創った。売れようが、売れまいが関係ないというのなら、「ガチ」はもっと極端になっていたと思う。それが、売れるかどうかは分からないけど、僕らのできる範囲で少しでも売れるようにと思って。その先に「柔術王2」というニンジンをぶら下げられていたんで。

和良　色んな編集者やライターからは、「マニアックだね～」とか、「売れるの？」なんて反応しか出なかったんですよ。マニアって言葉は、悪い響きもあると思うんですけど、僕の中ではどちらかといえば、見巧者という見方をしているんです。そんな、皆さんは結構シビアだと思うんです。そういう見巧者が買うものが無いっていう現状は……、何とかしないといけない。見巧者が見たいものって、技術だったり、インタビューだったり、もっと知りたいと思うものがないなら、自分達で作ろうかと。

高島　で、今日集まってくれた四人のようなマニアックな人が、いっぱい増えてくれたらなと。マニアが多くなれば、それはもうマニアじゃない。見識の上がったファンが多くなるということで。技術は分かった方が絶対に楽しいし、初めてきた外国人だってどんな技が得意で、誰に勝っているか知っている方が面白い。目の前で観たものが面白いから、食いつくんだったら、それこそファンが「これ良かったね」、「いや、ダメだ」って論議しているのと変わらない。

グリフォン　そこでまたインターネット論になりますが、大宮FFのことしか書かないよっていうような人たちが点在しているのが、ネットのひとつの特徴だと思います。それは実はちゃんとしたメディアもやっています。ル・モンド（フランスのリベラル系高級紙）とか。「俺達はこれから扮装地域にバックパッカーとして旅行に行くぜ」っていう連中と契約して、何の前金もないし保障もしないけど、いい写真が撮れたら、ル・モンドで買うからということで、名刺だけは渡している。だから、雑誌もそうあるべきじゃないですか。

メモ8　今、「ゴン格」にしろ「格通」にしろ、アマ大会の結果がチラッと載るくらいでまともなレポートって無いですよね。そもそもプロ興行でも、修斗の下北、デモリッション、へたすりゃパンクラスレベルまでも、きちっと報じられなくて、自分のネットの速報が一番詳しいなんていうケースもある。

高島　だから雑誌論を語るというのは、ネット論を語ることと裏表なんですよ。ネットが出てきて窮地に立たされた雑誌も、実はネットによって違った角度で生きることができる。

メモ8　なるほど、では、意味深な言葉を以って、今回はこれくらいでお開きということにしたいと思います。

和良　長時間、貴重なご意見を聞かせていただき、感謝しています。今後の雑誌創りに活かさせて頂きたいと思いますので、本当にありがとうございました。

長尾メモ8
1：42歳　2：スマックガール実行委員会（笑）　3：スマックガール（苦笑）　4：女子選手すべて・近藤有己・宇野薫。5：インターネット（大爆笑）
6：観戦記ネット
http://sportsnavi.yahoo.co.jp/fight/kansenki/

グリフォン
1：30代前半　2：会社員　3：PRIDE・パンクラス　4：ジョシュ・バーネット　5：歴史関係の読書
6：NHBニュース
http://cgi27.plala.or.jp/kudoking/nhbnews/
はてなダイアリー「見えない道場本舗」
http://d.hatena.ne.jp/gryphon/

某っち
1：年齢＝18歳（笑）　2：職業＝秘密　3：好きなプロモーション＝UFC　4：好きな選手＝ジェームズ・トンプソン・曙太郎・永田さん・ほか全ての海外の選手　5：格闘技以外の趣味＝漫画研究
6：カトー・クン・リー・鷹の格闘潮吹きマン○固め!!
http://hyper4.amuser-net.ne.jp/~auto/b13/usr/vtbanzai/brd1/bbs.cgi

タカハシ
1：37歳　2：会社員　3：WWE　4：武藤敬司（嫌いな選手は小川直也です）　5：あまりにも雑多なので6を参照してください
6：タカーシ日記2004『指先から散弾銃』
http://blog.livedoor.jp/hardcore_heaven/

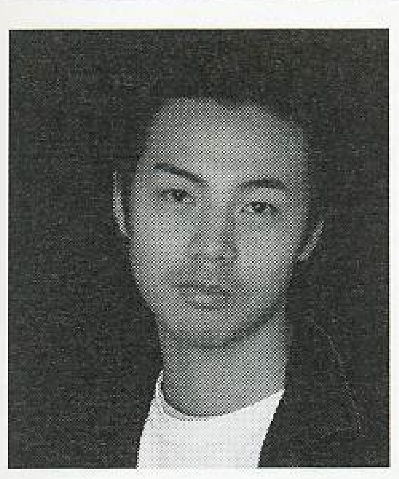
ー史上初の大アンケート実施!ー

格闘技ライターさんいらっしゃい!

**普段読んでいるあの雑誌のライターさんはどういう人?
そう気になったことはないでしょうか。
ネットが普及したり格闘技ブームと呼ばれたりするなかで、
いま格闘技ライターたちは何を考えているのか、
史上初の大アンケートを実施しました。これは活字媒体で
仕事をしている『フリーランス』のライターをだいたい網羅しています。
ついでに、これを読めばライター志望の人もちょっとだけ
その方法論が分かるようになるでしょう。
フリーランスならしがらみなく原稿が書けるだろう…
なんてことは残念ながらほとんどない業界ですが、
我ら一匹狼たちの心の叫びを聞いてくれ!　ついでに仕事もくれ!**

※掲載は五十音順

ゴン格系 | **格通系** | その他



HITOSHI ARAI

新井 等
（スポーツライター）

①格闘技通信。大会パンフレット等にも、書いています。②何でも見ますが、得意分野はまだありません。しいて挙げるなら、Ｋ－１とシュートボクシング（ＳＢ）でしょうか。③前職の時に松井さんとお会いしたことがきっかけ。その後、押しかけ同然で現在に至ります。④03年10月に、大阪で行なわれた巧志会空手の大会を取材したのが最初です。それ以前にも原稿を書いたことはありましたが、この業界に本格的に携わってから書いたのは、この時が初めてです。⑤いろいろな方に助けられていますが、そのなかでも本島さんと松井さん。普段からお世話になりっぱなしです。⑥このアンケートを書いている翌日に、シン・ノッパデッソーンのサンドバッグになる予定です……。⑦今年８月に格通で書いた、綱川慎一郎ドクターの原稿。記事の一部で、綱川ドクターがプロレスラーの天龍源一郎さんに憧れているという話を書きました。この記事がきっかけで、天龍さんと綱川ドクターが会食をしたというのですから、ライター冥利に尽きるというものです。⑧11月のＳＢで行なわれた、宍戸大樹VSチャンプアック・チョーセパサート。あの場にいて、本当に良かったと思える試合でした。⑨ＳＢの菊地浩一選手。宍戸選手と二人で、ライバルストーリーを作っていってほしいです。ＤＥＭＯＬＩＴＩＯＮで活躍中の井口摂選手も、今後ブレイクすること間違いなし！⑩いろいろな人のニーズを満たさなければいけないのが、専門誌の難しいところですよね。僕も、そこを頭に入れて仕事していくつもりです。⑪今のところ、嫌と思うようなことはありません。もしも不満な点がこれから出てくるようであれば、若さを活かして少しでも改善したいとは思っています。⑫雑誌の名前でまずビックリ。内容でまたビックリ！⑬まだまだ修行中の身ですが、格通をはじめ、いろいろなところで書かせていただいています。格闘技の魅力を、みなさんに伝えられますように。

質問内容

①主に活躍している媒体
②得意分野または専門分野は？
③格闘技(系)ライターになったきっかけは？
④初めて格闘技の原稿を書いたのはいつか、その内容は？
⑤この業界におけるあなたの師匠または恩人は？
⑥格闘技の経験の有無、有りならどんな競技か？
⑦最近（2004年）もっとも思い入れのある自分の原稿は？
⑧最近（2004年）見たベストマッチは？
⑨あまり注目されていないが自分が評価している選手(複数可)とその理由は？
⑩いまの専門誌に思うこと。
⑪格闘技業界の嫌なところは？
⑫（もし読んでいれば）『ガチ!マガジン』第1号の感想を。
⑬あなたの出版物やHPなど何か宣伝があれば（特になければ結構です）。

ゴン格系 格通系 その他



SHU INAGAKI
稲垣 收
（フリー・ジャーナリスト、翻訳家）

①ゴング格闘技とブラジルのグレイシーマガジンで定期的に。ヤングジャンプで月イチくらい。またWOWOWでUFCの解説もしています。②K-1、PRIDEなどの外国人選手の取材ならおまかせ。また外国人記者の記事の翻訳も手がけています。③91年頃、ソ連崩壊の取材でよくロシアに行っていて、週刊プレイボーイの編集者に「リングス・ロシアの取材に行きませんか」と頼まれ、ヴォルク・ハンの道場に行ったのがきっかけ。ロシアではパゴージン氏とノダリ氏に歓迎のウォッカ地獄に叩き込まれました。その後、内戦中のグルジアにリングス・グルジアの取材に行ったり、『KGB格闘マニュアル』を翻訳したりして、どんどん格闘技漬けに…。④92年に週プレで、ハンがロシア内務省特殊部隊の秘密道場で隊員たちに戦闘術を教えている記事を書いたのが最初。⑤恩人と言えば「ゴン格で書いてくれませんか」と誘ってくれた熊久保氏ですね。⑥キックをクロスポイント吉祥寺で3年。その他、合気道、ハン、ホイス、フランク・シャムロックのセミナーなど。⑦ゴン格1月号のノゲイラ＆母インタビューでしょうか。⑧ROMANEXでの須藤元気vsホイラー、「一撃」でのフィリオvsボンヤスキー⑨全日本キックのライト級王者、大月晴明。"KO製造機"としてキックファンには有名だが一般にはまだ知られていないのでメジャーになってほしい。⑩速報ではネットに負けるのだから、もっとじっくり読ませるロング・インタビューを増やすべき。読み捨てでなく、保存しておきたくなるような。そういう記事ならインタビュアーの技量の差が出る。⑪マッチメイクがギリギリまで決まらないのは選手にとってもファンにとっても問題。また、判定に団体の思惑が入りすぎるのも困る。⑫内容的には面白いけど、字が小さすぎる記事が多いですね。あと、地がオレンジのページは目がチカチカします。⑬空手バカ一代にも登場した"NYの顔役"クレイジー・ジャックの自伝、『アウト・オブ・USSR』（ジャック・サンダレスク著、小学館）が拙訳で出ております。残部数僅少につき、ぜひ早めのご購入を!!

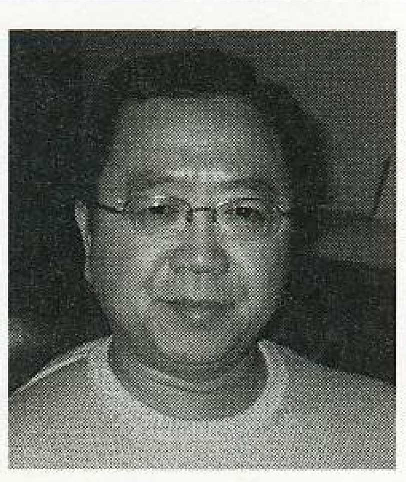
ゴン格系 格通系 その他



TAKASHI ISHIZUKA
石塚 隆
（フリーランス・ライター）

①『ゴング格闘技』、『ワールド空手』にて毎月執筆。不定期に『週刊プレイボーイ』、『Number』など。また、他のスポーツ、音楽、文化、社会などをテーマに専門誌、一般誌にて幅広く活動中。②Ｋ－１、空手をはじめとした打撃系全般。もちろん総合も書きます。技術論は必要事項なのですが、選手の生き方や考え方、文化背景など、サイドストーリーを加味した血の通う原稿を書くことを心掛けています。③学生時代の講師（ライターの村瀬順氏）の勧めで『ゴン格』、『ワールド空手』編集部を紹介してもらい、以来おつきあいをさせてもらっています。④96年12月、第28回極真全日本大会の記事を『ゴン格』と『ワールド空手』で書きました。内容は、岩崎達也選手から一本を奪い衝撃的なデビューを飾った野地竜太選手について。⑤この業界を紹介してくれた村瀬氏、元『ゴン格』副編集長で現『ワールド空手』編集長の福島知好氏。また専門誌と一般誌の温度差や切り口、マーケティングのちがいを指南し筆の幅を広げてくれた『週刊プレイボーイ』副編集長の安楽竜彦氏。⑦すべての原稿に思い入れはあるのですが、強いてあげるのならば、シリアスなモノで毎月のように『ゴン格』で執筆する魔裟斗選手の原稿。肩の力が抜けたモノなら『週刊プレイボーイ』での武蔵選手と加藤鷹氏の異色対談記事。⑧ブアカーオ×武田幸三。ヘンな話ですが、むせぶような色気のある試合でした。⑨田中健太郎選手。高校生時代から見続けてきて、その成長ぶりが手にとるようにわかるからです。努力の天才は、ようやく全日本王者になりました。やはり僕は空手が好きなようです。⑩雑誌の種類を問わず、読者を意識し編集者の要望に応えるのがプロのライターだと思うので、僕の口から言うことはないです。⑪どの社会にも不平不満はあるはずです。ゆえに、そこはグチらず"明るく元気に快活に"で、やっております。真面目かつ"愛"と"ユーモア"を大切に。

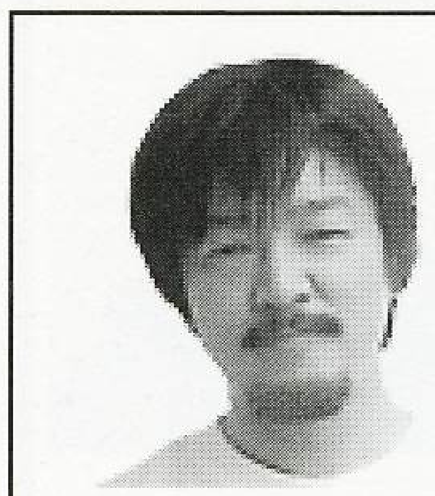
ゴン格系 **格通系** その他



BUNKO ENDO
遠藤文康
（A&B Europe代表：オランダ在住）

①基本的には格闘技通信に寄稿しています。他雑誌およびパンフ類にも寄稿することはありますが、むしろ取材でオランダを訪問した記者およびテレビ関係者のコーディネイトをすることが多いです。②キックボクシングおよびオランダ総合が中心。キック全盛のオランダでの大会取材が始まりだったため、個人的にはキック系に思い入れがあります。③93年に訪蘭した佐竹選手および同行した格闘技通信編集部安西次長（当時）のお世話をしたことが機縁となって格通側からの依頼で通信員となりました。④93年4月にオランダリングスのトム・フォン・マウリック選手が射殺される事件がありました。オランダの新聞に掲載された事件の翻訳記事が最初の原稿となりました。⑤業界に入ったきっかけは谷川編集長（当時）および安西次長です。今もって特に安西次長には深く感謝しております。⑥まったくありません。⑦秋口に格闘技通信に掲載されたブランコ・シカティックのインタビューとガチに掲載されたドールマンのインタビューです。どちらも正確な近況を紹介できたと思っています。⑧3月のバドル・ハリのＫＯ試合。６月にイグナショフがシュルトを秒殺ＫＯした試合。⑨日本未登場のバドル・ハリ(19歳)。Ｋ－１に出る機会があれば優勝するでしょう。⑩団体からの取材拒否を恐れるあまりに真実を掲載せず自主規制してしまう点が残念です。決して秘密を暴露せよと言っている訳ではありません。既に公になっている事柄ならば、本当のことをきちんと掲載せよと言いたいだけです。⑪問題が起こったときに責任を取る人が少ない事。自己正当化や責任転嫁をはかり、陰で人を批判する者が異様に多い事。⑫ドールマンの原稿を寄稿した経緯もありますが、よかったと思います。⑬特にありません。オランダに何か用事のある方はご連絡ください。ただし、急な依頼ごとはなるべく勘弁してください。

ゴン格系 格通系 **その他**



HIDETO IDA
井田英登
（BOUT REVIEW編集長）

①Boutreview、All about「K-1、PRIDE、格闘技」ガイド、たまーに活字系からもお呼びがかかりますが、名刺に刷り込むほどは書き（け）ません。②海外MMA、選手人物モノ、たまに狂犬原稿。③在阪準キー局での格闘技ネタのラジオ番組の企画が成立直前でコケて、ネットに企画をシフトしてBOUT REVIEWを始めた時からでしょうか？　以降ライターという肩書きになった自覚の無いまま、いつしか専門誌にも書かせてもらうようになり、今に至ります。④BOUT REVIEWのオープニング用に、生まれて初めての喧嘩の記憶について書いた「戦うことの意味」なる原稿が、最初といえば最初。⑤ノー師匠、ノーコネクション、ノー恩人なので、逆に業界的に根が浅くて苦労します。でも人としては、居なくて幸いでした。メンドクサイばっかりなんで。⑥学生時代の授業の柔道。若干の路上での喧嘩。⑦All About集中連載「総合格闘技をオリンピックに」(4回)。自分の中でのプロアマ通したパースペクティブの整理になって、吉。あるいはNumberで書いたノゲイラ原稿の最初のバージョン。あれが載っていたら「格闘技ライター」と名刺に刷り込む覚悟でしたが。⑧心情的ベスト＝ミルコvsランデルマン、歴史的ベスト＝魔娑斗vsブアカーオ、内容的ベスト＝前田吉朗vsパイシャオン。⑨大山峻護、池本誠知、勝村周一朗。あるいは「川尻と宇野」の今後と、「五味と三島」の今後。あと長田賢一。⑩ただで配りましょう。なら読むかもしれません。⑪全ての価値観が"地域貨幣"でやり取りされていること。プロレス市場の再配分というビジネスモデルに、未だに憑かれていること。スポーツ業界の番外地であることに、業界人とやらが揃って自虐的快感を感じているらしいこと。⑫読んでません。⑬BOUT REVIEWという蟷螂の斧が、ネット配信開始8年目です。そろそろいろんなものを壊す作業に入ります。BOUT REVIEW（http://www.boutreview.com）All About「K-1、PRIDE、格闘技」（http://allabout.co.jp/sports/k1/）

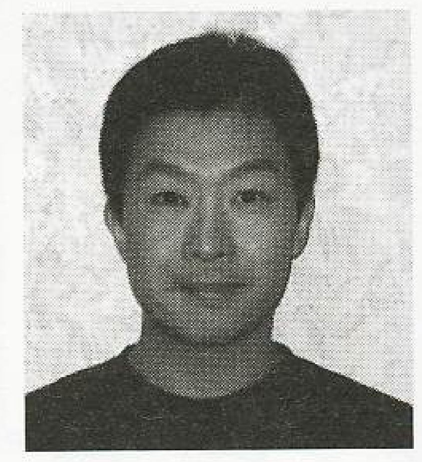
ゴン格系 | 格通系 | その他



HIDEYUKI KUMAKUBO
熊久保英幸
(格闘技コメンテーター&ライター)

①ゴング格闘技、サムライTVでの解説、ヤングジャンプ。②キックボクシング、空手、シュートボクシングなど主に打撃系が得意分野ではあるが、PRIDE、ZST、DEEPなら任せなさい！③ゴン格を辞めた時点で他の職に就こうと思ったが、休養中に誘われて格闘技を観客席で観戦。面白さ、素晴らしさに再び気づき、あらゆる形で格闘技を広めていこうと思ったから。④89年1月、ゴン格編集部にバイトで入った時。3日目にカメラを持たされていきなり取材に行かされた、アマSB全日本大会がデビュー戦。⑤近藤隆夫さん。と言うか、当時の編集部には近藤さんしかいなかった。殴られ蹴られで忍耐力が身に付く。その後の編集長、宮地克二さんには雑誌創りの点で影響を受けた。恩師は採用してくれた舟木昭太郎さん。⑥柔道、剣道を部活で半年。近所にジム・道場がなかったので技術本を見て独学程度。ほとんど見る専門。⑦自分の子供のようなもので全て気に入ってるが、あえて言うなら現時点で一番新しい『ゴン格』12月号の宍戸大樹（SB）の原稿。⑧10・31『PRIDE.28』でのシウバ×ジャクソン。両者の闘争心が前面に出ていて、壮絶な決着も素晴らしかった。⑨中原太陽（WK）、菊地浩一（SB）、裕樹(RISE)。もう有名だけど長南亮。全員、技術的にも優れているが何より気持ちが伝わってくる試合をするのがいい。⑩格闘技の楽しさばかりに目が行って、厳しさや怖さ、本来持っている激しさを表現する点が欠けていると思う。ネットにどう対抗するかが課題。⑪他団体の悪口や批判をすぐ口にする事。嫌いなら嫌い、認めないなら認めないで無視すればいい。その団体や選手を好きなファンもいるのだから、彼らの気分を悪くする必要性がない。悪意と嫉妬しか感じない。⑫個人的にはビジュアルよりも文章に重点を置いたところが○。私の名前は間違わないでほしいね。⑬格闘技情報WEBマガジン『ゴッド・ブレス・ザ・リング』（通称GBR）http://gbr.cplaza.ne.jp/を配信中！

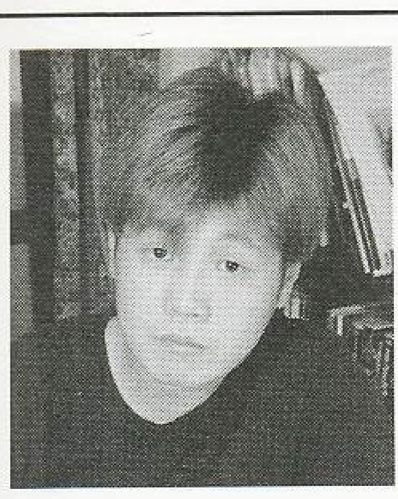
ゴン格系 | 格通系 | その他



NORIHISA OKAMOTO
岡本典久
(格闘技ライター)

①ゴン格。たまに『秘伝』とか。そのうち格通に電撃移籍します（ウソ）。②格闘技なら何でも。書いていて燃えるのは技術分析。技について選手や関係者に話をうかがえるのはお仕事を超えて楽しいです。③格闘技ライターになるために専門誌に売り込んだのがきっかけ。当時編集長だった谷川さんも熊久保さんも山田さんも会ってくださり、意外にいい業界なのかなと。④無記名の情報記事から入って、記名は95年夏頃の全日本キックだったような。⑤みんなが師匠であり恩人であり仲間です。そういう気持ちでやっています。⑥空手と護身術を少々。地域のサークル活動として教えています。⑦特にないです。自分にとって原稿とは熱があればそれでよし。なければ裏で何かあったのかな、などと深読みしていただければ。⑧シウバvsジャクソン(PRIDE.28)。ジャクソンの潜在能力の高さと、シウバの勝負どころを逃さない集中力が存分に発揮されていました。⑨志田幹(P's LAB東京)。技の組み立てが丁寧で、打撃戦での眼の良さを感じます。ネオブラ決勝で前田吉朗に敗れ、両者の差は開いた感がありますが、彼も着実に進化していますよ。⑩今は格闘技が世間に注目されているため、力のある媒体に圧されて専門誌までもが浮き足立っているように見受けられます。しかしながら、彼らが見切りをつけた後も格闘技を報じていくのは専門誌であり、われわれです。誇りと情熱を見失わずに、がんばってください。⑪人が動かしている世界ですから、足の引っぱり合いとかヤクザまがいの恫喝とか取材拒否とかいろいろありますけど、志の低い者や誠実さを欠いた者はいずれ淘汰されます。長い目で見れば、別にどうってことないですよ。⑫すみません、読んでないです。自分が書いた記事すら読み返さないんで…。⑬会場などで見かけたら気軽に声をかけてやってください。http://www1.cnc.jp/okamoto/（連載コラムの保管庫）

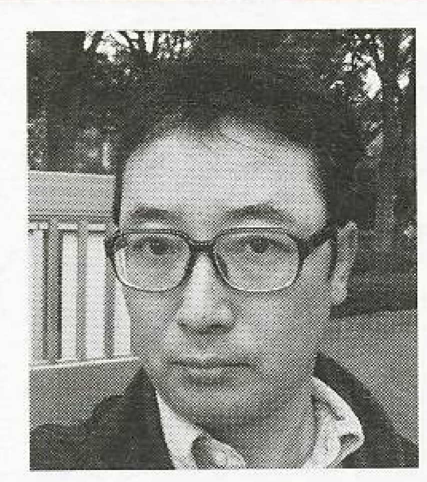
ゴン格系 | 格通系 | その他



TAKAO KONDO
近藤隆夫
(スポーツジャーナリスト)

①「Number」「月刊プレイボーイ」等、さまざまな雑誌で書いています。CS局スポーツ・アイ及びBSフジで放映されている「PRIDEリバイバル」にレギュラー解説者として出演中です。②総合格闘技。③85年に、大学在学中に押し入る形で「週刊ゴング」の取材編集スタッフとなったのがスタートです。翌86年秋、「ゴング格闘技」に創刊からかかわりました。④う〜ん、おそらく、85年当時発行されていた「月刊ゴング」の格闘技コーナーでキックボクシングの試合レポートを書いたのが最初だったと思います。⑤二宮清純氏。⑥高校時代まで柔道。でも都大会に出場したのが最高成績で大した選手ではありませんでした。⑦難しい…。毎月、思ったままに書いている「スポーツコミュニケーションズ」という名のウェブサイト内連載『INSIDE格闘技』の原稿なのかもしれません。⑧「PRIDE28」でのシウバ×ジャクソン戦。シウバのモチベーション維持能力の高さには敬意を表します。もう一つ挙げたいのは、「DEEP13th」での長南亮×松井大二郎戦。互いに絶対に負けられないとのシチュエーションは会場全体を緊迫した空気で包みました。その緊張感がたまりません。⑨好きなスタイルの選手ではないが日本のリングに上がれば面白そうなのは、アカデミア・ボクセタイに所属するイタリア人、アレッシオ・サカラ。ノゲイラ兄のスパーリングパートナーを務めている男で気性も総合格闘技向き。総合の戦いの中で的確なボディブローでのKOを真剣に狙う戦法は興味深い。⑩特にありません。⑪「ファンのために」を連発するのは、そろそろやめて欲しい。自らの勝利のみに執着する選手の姿にこそ、観る側は緊張感を持てるのだから。⑫玄人ファン向けの誌面作りに好感が持てます。⑬『グレイシー一族の真実〜すべては敬愛するエリオのために〜』（文春文庫プラス）よかったら読んで下さい。

ゴン格系 | 格通系 | その他



OSAMU KIMURA
木村 修
(物書き)

①ゴング格闘技、秘伝、たまにナンバー②キックボクシング、総合格闘技などリアルファイト。古武道、中国拳法、体づくり系も結構やっている。③旅行雑誌を経て、約4年間パーゴルフというゴルフ雑誌の記者をしていたが、バブルの最盛期、ゴルフがつくづく嫌になって、空手、格闘技などを専門とするFという出版社に入ったのがきっかけ。④1989年。最初は剛柔流空手・山口剛玄師範の追悼記事。⑤編集、執筆については、一通り身につけていたので、特に教わったことはない。F社では入社していきなりスパーリングを経験。キックボクシングを始めるきっかけをつくってくれたという意味では山田英司さんだが、恩はもう返したと思う。一番ご馳走になったのは往年の名キックボクサー島三雄さん。お世話になった人は多くて書き切れない。⑥ここ15年ほどキックボクシングを練習。ずっと山木ジム。34歳まではいろいろ試合にも出た。サンボと中国拳法を数カ月やったこともある。⑦ただいま五次選考中の小説と未だ日の目を見ない、リング禍後のキックボクサー・井手本高司を追ったドキュメント。後は今月書いた加藤スネーク督朗のインタビュー記事とか。⑧木村允vs.フアサイ戦なんかよかったなあ。驚いたということで言うとKIDvs.村浜。ブアカーオvs.フジ・チャルムサックもよかった。試合前の個人的盛り上がりも入れるとヴァンダレイ・シウバvs.近藤有己。⑨評価されてはいるんだろうけど、K-1MAXからお呼びがかからないということで、全日本キックの佐藤嘉洋。チャンスをやりたいのは、MAキックの木村允。⑩ノーコメント⑪ノーコメント⑫こういう雑誌は苦しいんじゃないかな、と思ったが、知り合いの藁谷氏とか高島氏とか熊久保氏が関わっていたので、続けばいいなあと思うと同時に、仕事もくれよ、と思った。⑬文芸書で有名な版元から出す予定の武道の身体についての著書を執筆中。まだ発売日をいえる段階ではないのですが。

質問内容…①主に活躍している媒体②得意分野または専門分野は？③格闘技（系）ライターになったきっかけは？④初めて格闘技の原稿を書いたのはいつか、その内容は？⑤この業界におけるあなたの師匠または恩人は？⑥格闘技の経験の有無、有りならどんな競技か？⑦最近（2004年）もっとも思い入れのある自分の原稿は？⑧最近（2004年）見たベストマッチは？⑨あまり注目されていないが自分が評価している選手(複数可)とその理由は？⑩いまの専門誌に思うこと。⑪格闘技業界の嫌なところは？⑫（もし読んでいれば）『ガチ！マガジン』第1号の感想を。⑬あなたの出版物やHPなど何か宣伝があれば（特になければ結構です）。

ゴン格系 格通系 その他



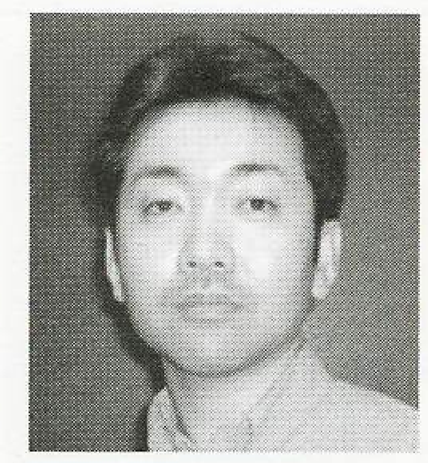
TADASHI TANAKA

タダシ☆タナカ

(格闘技ジャーナリスト)

①各実話誌、各週刊誌から、スポーツヤァ、スポルティーバ、ナンバーまで幅広く書かせていただいてます。②注文はＫ-１やＰＲＩＤＥに集中。女子プロからUFCまで何でも屋。NY在住17年の人脈が武器。得意なのはヘビメタ音楽評論ですが…。③作る側の視点に立った世界最初の同人誌と学生プロレス興行を手がけていたら、週刊ファイト（当時）のターザン山本からお誘い電話あり。④79年週刊ファイトの「タイガー・ジェット・シン特集号」から。⑤I編集長こと井上義啓が師匠。「喫茶店トーク」の初代相手でした。⑥ヘビメタで首を激しくふる運動しか…。⑦実名でない覆面仕事のほうが…。今はなき週刊特報の格闘家インタビュー連載はUドラゴンから鈴木みのるまでどの回も好評でした。⑧K-１ MAX七夕決戦魔裟斗vs.ブアカーオ〜前蹴り芸術より日本人魂に感動。⑨伊藤崇文（がんばれ）、北岡悟（惜しい）、佐藤光留（笑える）⑩北米業界紙Wrestling ObserverとFigure Four Weeklyは購読。日本のものは実際中身よく知らない。⑪村意識。⑫コールマンの本音は他誌にない読み応え。シャムロックの再婚まで引き出した取材力には自信あり。⑬既存の報道姿勢に対抗する「シュート活字」を提唱するためよく誤解されますが、記事はまず面白いかどうかがすべて。昔からファンタジー活字も得意で堅物志向ではありません。アメプロ隆盛と日本の凋落を対比させた『日本プロレス帝国崩壊』（講談社）は現在2刷へ。格闘技ブームの頂点から闘龍門まで全体像を紹介しつつ、プロレスの仕組みやＰＲＩＤＥの秘密を詳細した『誰も知らなかったプロレス&格闘技の真実』（幻冬舎）は色あせない情報量が誇り。『迷宮Xファイル』（芸文社）はヒット作に。実話マッドマックスで連載開始。ヘビメタ愛好者用http://hm.noririn.net/に出没。

ゴン格系 格通系 その他



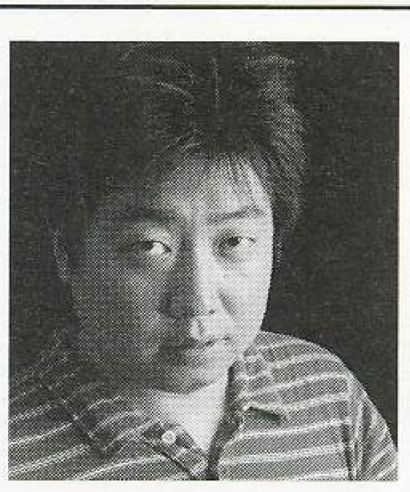
KOJI SHIGETA

茂田浩司

(スポーツライター)

①バトル三昧（iモード）、Number、産経新聞、スポーツナビ、スポーツヤァ、Jスポーツ「シーザー魂」解説ほか。ちなみに、格闘技以外のスポーツ選手や俳優さんのインタビューなどもしております。②格闘技全般、と自分では思ってます。③フリーになった直後の96年4月、土屋ジョー（全日本キック）のロシア・シベリア遠征に自費で同行。レポートの企画を「格闘技通信」に売り込んだ。④「東京ウォーカー」スポーツページの編集を始めた94年。大会紹介の囲み記事。⑤藤原敏男さんと宮地克二さん（元ゴン格編集長）。藤原さんには格闘技の見方と考え方を、宮地さんには仕事のやり方を教えて頂いた。お二人との出会いがあったから今までこの仕事を続けてこられました。⑥キック3ヵ月、新空手K-3で１戦（１敗）。⑦Numberの前田日明インタビュー。一度会ってじっくりと話を聞いてみたい方だった。企画実現までの過程や、掲載までのドタバタを含めて印象深い。⑧宍戸大樹vsカテウ・キビス（S-cupトーナメント準決勝）。横浜文体に格闘技の神が舞い降りた瞬間でした。⑨菊地浩一（SB）。10年に一人の逸材。うまく育ってほしい。中村和裕＆横井宏考（PRIDE）PRIDE重量級が「日本人ゼロ時代」を迎えるかどうかは彼らの成長次第では。宝樹まもる（全日本キック）。ひと目見て、ただならぬものを感じた。彼を抜擢したプロモーターに感服。小谷直之（ZST）周囲の声に惑わされず、真直ぐに自分を貫いてほしい。裕樹（REAL DEAL）ハートがいい。体格的なハンデをどう克服するかが課題か。⑩紙プロだけは読みます。これで察して下さい。⑪他業界をよく知らないのでこれはコメントのしようがないです。⑫本文の文字が読み辛かったのが残念！⑬最近「週刊ゴング」で初仕事。11月からは「スポナビ」で新企画スタートの予定。売り込んでみるもんですね。読む人の多い媒体で仕事が出来るのは嬉しいことです＼(＾０＾)／

ゴン格系 格通系 その他



SHUJI TANAKA

田中周治

(スポーツライター)

①『週刊ゴング』、『サブラ』などでインタビュー記事を中心に執筆。K-1で総合の試合があるときは実況のお手伝いを少々。②専門分野はPRIDEを中心とした総合。得意分野は技術論より精神論。③学生時代に、前『ゴング格闘技』編集長に雀荘でナンパされた。スポーツライターに憧れていたので、文章を読んでもらったところ、「文章はいまいちだけど麻雀は強いから」という理由で単発のバイトを紹介してくれた。最初に食らわせた四暗刻単騎が相当強烈だったらしい。④97年7月、PRIDE１オフィシャルブックでビデオ紹介の原稿を書いたような覚えがある。⑤同じく雀荘に居合わせた師匠の近藤隆夫。ゴン格の単発バイトをし出した頃、メジャーリーグのムックを作る手伝いをしたのをきっかけに、そのままドサクサにまぎれて弟子入り。フリーになった今でも「後にも先にも履歴書さえ書かないで事務所に入って来たのは君だけだ」と言われている。⑥なし。⑦８月に『週刊ゴング』に掲載された「PRIDE GPプレビュー」記事。ジョシュ・バーネットに国際電話で話を聞いて構成したが、携帯へ直接掛けて1時間ほど話したのでジョシュにも相当な着信料金を負わせてしまったはず。⑧PRIDE28のヴァンダレイ・シウバVSランペイジ・ジャクソン。⑨小路晃。今年10月にイチローの取材でシアトルに行ったときに、2回ほど彼と食事をした。毎日、合宿のようなストイックな生活を送っているらしい。海外での貴重な経験は今後の格闘技人生に必ず生きるはず。⑩購買層はコアなファンかもしれないが、「格闘技は日本にメジャーリーグがある」という気概を持って、もっとマスにアピールする企画も欲しい。⑪トッププロ選手の取材セッティングも割とスムースに運ぶし、メディア側から見れば恵まれた業界だと思う。⑫マニア向けの雑誌も必要だし、いいんじゃないでしょうか。

ゴン格系 格通系 その他



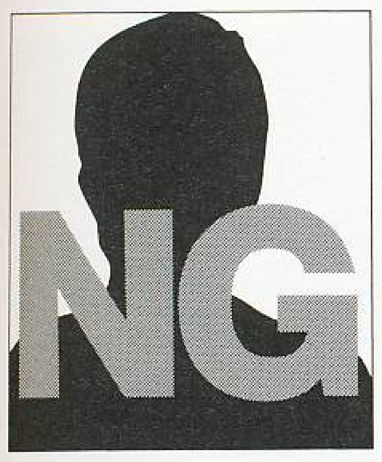
MANABU TAKASHIMA

高島 学

(ライター)

①原稿を書かせてもらっているだけで活躍しているところはないです、マジで。②海外情報。③もともとサラリーマン時代に名古屋で安田拡了氏率いる「名古屋の格闘技を考える会」という非営利組織に所属しており、９４年の海外放浪の際、訪問先の格闘技ジムの紹介を機関紙に寄稿していました。そんなおり、オランダのボス・ジムで当時格通の記者をやっていた若林太郎氏と出会い、親交が始まり、帰国後、安田、若林両氏から「やってみないか」と誘われ、サラリーマンに戻る前に腰掛で「経験のため」にと思い上京しました。④95年１月、コマンドサンボ。⑤安田拡了氏、若林太郎氏、布施鋼治氏。⑥有。サンボ少々。コマンドサンボ、キック＆レスリングを本当に少々。⑦スポルティーバ誌「北欧紹介」の原稿。⑧ホジャー・グレイシーVSホナウド・ジャカレイ。⑨修斗クラスBの選手、柔術家／注目されている選手より強い選手がままいる。高瀬大樹と植松直哉／人間的に面白い（興味深い）。所英男／自分の理解の範疇を超えている。⑩専門誌は面白い教育テレビであり、風俗嬢のポートレイト。だから創るのが難しくて、面白い。問題点は人材不足。よく「レベルが低い」という意見を聞くけど、それは格闘技雑誌に限らず、雑誌界全体がカタログ雑誌化、ライト感覚な読者を対象としている代償だと思う。格闘技を見る人が増えているので、どこに焦点を置くか。ビギナー相手なら「全てをカバーする」必要はないし、コア相手なら「人気者を扱う」必然性もなくなってくるはず。あとは紙媒体以外で速報性のあるメディアが出てきたことによって、試合レポートの作り方を変えていく必要がある。面白い試合レポートを作らないと、意味がなくなる。⑪目先の自己利益をたくさん考えている人に限って、全体利益を謳うこと。⑫創った側として、誤字脱字が多すぎる。恥。⑬これを読んでいる方へ、格闘技ファンに購入を薦めてください。

ゴン格系　格通系　その他

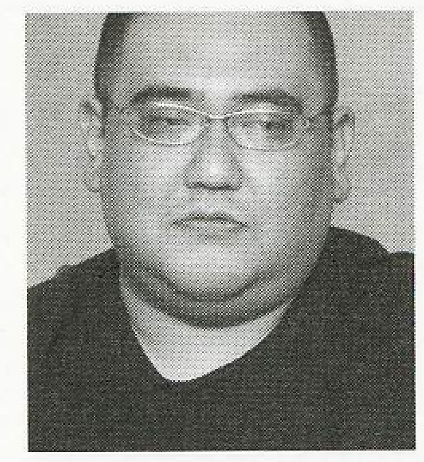


TETSUOMI HAYASHIDA

林田哲臣
（フリーライター）

①ゴング格闘技やBBムックなどで書いたり、写真を撮ったりしています。他にもちょこちょこ書いていますが大人の事情で複数のペンネームを使って活動しています。最近はペンネームでの仕事のほうが多いような…時々ビデオやマンガの監修もやっています。②主に空手やキック等、打撃系の取材がメインですが、最近ではブームのおかげで武術や身体理論の仕事が多くなってきました。③以前から武道系の仕事を少々やっていましたが、本格的に始めたのは上京して約半年後、住むところもなく困っている頃にフルコンタクトKARATEの仕事に誘ってもらったのがきっかけです。部屋を借りられるまではデパート脇や公園で原稿を書いていました。④95年、地方のタウン情報誌に書いたアマチュア格闘技大会の記事が初めての格闘技取材でした。⑤当時福昌堂にいたM課長、K編集長、Mさん。上京のきっかけとなったT会長、美容師の藍原さん。試合の見方を磨いてくれたO江さん。リング脇で「どうよ？どうよ？」と言ってなかなか帰してくれませんでしたが、その解説が今活きています。⑥学生の頃空手とキックを少しだけ。最近は遊びでやることはありますが、練習と呼べることはやっていません。あとだらだらと伝統武術をやっていますが、おかげでそっち方面の仕事が増えました。⑦竹山春友さんと堺貞夫さんの原稿。格闘家のその後を勉強させてもらいました。⑧04年はまだこれだ！という試合に出くわしていません。残り2ヵ月何かあるかな？⑨鈴木国博。極真絡みのチャンピオンが注目されないのは時代的にしょうがないけど、競技を極めるために狂人的に自分を追い込む姿は男泣きできるはず。⑩雑誌数が増えたのに全体的に元気が無いように感じます。⑪未だに実力差、体格差のあるマッチメークが多々あります。格闘技を競技として確立させるためにもやめるべきでは？

ゴン格系　格通系　その他



NORIHIRO HASHIMOTO

橋本宗洋
（フリーライター）

①『紙のプロレスRADICAL』、『DVD club』ほか各種パンフ、サイト。②立ち技、総合、男、女なんでも。苦手分野はないが“これ”という得意技もない便利屋稼業。③96年から『格闘技通信』のアルバイト。その後フラフラしてたところを谷川さんに拾われ『SRS・DX』編集部に在籍、同誌休刊を機にフリー活動を開始。④『格通』で海外の大会の情報をリライトしたのが最初。署名原稿は96年秋の全日本テコンドー（ITF）だったと思います。それ以前、読者コーナーに投稿していた暗い過去もありますが。⑤谷川貞治、柳沢忠之の両氏。ほか、お世話になった人は多数。特にフリーになりたての頃、声をかけてくれた方々。⑥小学校、中学校時代に柔道を軽くやってました。⑦『紙プロ』ロシア取材でのセルゲイ・ハリトーノフもの。ハリトーノフの寡黙なキャラクターはもちろん、ロシアという土地そのものが印象的。原稿では“特殊部隊”という部分に突っ込んで書き、他媒体の原稿とはかなり差別化できたかなと。⑧『PRIDE.28』でのシウバVSランペイジ。レベルの高さ、緊張感あふれる展開、衝撃的なフィニッシュと、他のどんなメジャースポーツにも見劣りしない素晴らしさだったと思います。特に思い入れはなかったんですが、その分、客観的に凄さが理解できたというか。⑨小林聡と大月晴明。後楽園ではスターだけど、この人たちにはそのレベルでとどまってほしくないので。“キックは人気がないから”じゃなく、人気が出るようにしていくのもマスコミの役目。⑩重大な転換期に来ていると思います。ネットがある以上、速報性ではかなわないし。ただ、ネットには“書きっぱなし”という怖さもあるので、情報に対する責任感や記名性という部分で、紙媒体はより重要になるとも思います。⑪狭い!!　“小さな世界だけの偉い人”が多すぎる。⑫情報の量、濃さなど狙いがはっきりしてるところがいいっすね。あとはデザインと校正だけ。

ゴン格系　格通系　その他

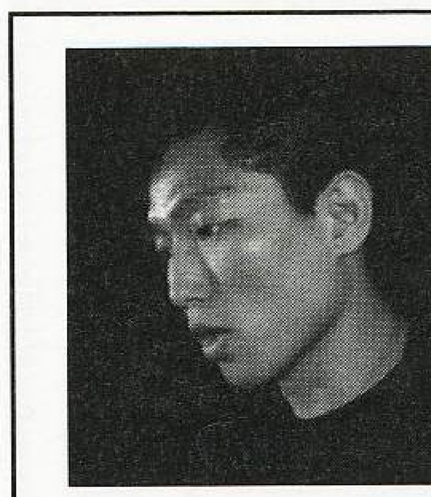


IKUO HIGUCHI

樋口郁夫
（スポーツライター）

①格闘技通信、内外タイムス、共同通信。②アマチュアのレスリングが“本籍”。それにからんで総合、K－1など。レスリング出身選手のアマ時代の活躍ぶりを数多く見たり聞いたりしています。③学生時代にレスリングをやっており、運動記者になって別の角度から格闘技に関心をもったから。レスリングはもとより、格闘技そのものが世間的にマイナーな存在になっているので、反発心をもったことも大きい。④1994年にヒクソンが木口道場でセミナーを開いた時。本格的には高橋義生がヴァリッジ・イズマイウを破ったこと。⑤師匠・恩人というより、目標はボクシング・ライターでもある長田渚左。⑥学生時代にレスリング。⑦「格闘技スーパースター列伝」（ベースボールマガジン社、12月発行）のアレクサンダー・カレリン。最後まで自分の必殺技にこだわり五輪Ｖ４を逃したカレリンを描いてみた。⑧ミルコ・クロコップVSケビン・ランデルマン。打撃のスペシャリストが組技出身選手にＫＯされることもあるのが総合と認識させられたことで印象深い。⑨井上和也。これぞプロという豪快な試合をするから。⑩団体の広報的な役割によってファンを獲得し業界の活性化に協力することも必要だが、ジャーナリズムであることも忘れず厳しい観点からの批評も欠かしてはならない。曙のＫ－１入り会見などになると、一般メディアを前にして萎縮しているのが現状。そんな時にこそ、自信たっぷりで自分たちが会見を仕切るくらいの気構えがほしい。⑪ありますが、どの世界にも共通することですので割愛させてください。「格闘技業界だから」という部分では、あまりないです。⑫本格的、個性的な専門誌。ミーハー的な格闘技ファンは読まないだろうが、その分、本質をしっかり追求できると思う。⑬日本レスリング協会公式HPも編集しています。
http://www.japan-wrestling.jp

ゴン格系　格通系　その他



EITETSU HASEGAWA

長谷川永哲
（やさぐれ格闘家：ソウル在住）

①格闘技通信にて韓国格闘技情報「キョクトゥギトンシン」、韓国の格闘技専門ウェブマガジン「M-fightマガジン」にてマンガコラム「リ・ヨンチョルの格闘マンガ一代記」連載中。今年８月、ＳＡＭＵＲＡＩで放送した「グラジエーター」で解説デビュー。②ヨン様以外の韓国情報。③所属ジムの主催のキック興行で裏方（通訳）にまわされ、凹んでいたところを取材に来ていたスポーツライターの布施鋼治氏に拾ってもらう。④２００３年１０月、格闘技通信にて韓国格闘技マップ製作。⑤そりゃ布施さん。⑥一応現役でキックと総合やってます。過去は柔道、空手（日本空手協会）、ボクシングを。柔術は総合やる上で必要なんでやってますが（青帯）あまり好きではない。⑦「格闘技　技の大辞典」で朝鮮相撲の解説。未経験の種目の上、予備知識なしでやったのでやりがいがあった。⑧４･17全日本キックライト級最強トーナメントでの小林聡対サトル・ヴァシコバ。この試合の前に同会場で試合して控え室にいたため生で見れなかったのが残念。⑨藤原ジムの金東光：一度ジム離れてまた戻ってきた根性がすごい。結果も出してる。真武館韓国本部の奥田正勝：韓国での試合は全てアウェイになるのを承知で参戦し続ける姿勢。パンクラスTOKINの三浦広光：7・25のデビュー戦とは思えないアグレッシブさとその劇的な負け方。⑩出版社から郵送される格通以外は読めないんでノーコメントで。⑪日本の業界のことはよく知りません。韓国の業界なら「安易な発想で興行やろうとするな！」⑫他誌では出来ないことやってるんで嬉しい反面「大丈夫か？」と思う。ドールマンのインタビューは泣けました。海外格闘技ライターへのアンケートは質問と答えを交互に見るので読みにくかった。⑬取材仲間が日本語で韓国格闘技情報のブログやってます。http://www.doblog.com/weblog/myblog/6267「Feel Like a Kimchi 」で検索したら出てきます。

質問内容…①主に活躍している媒体②得意分野または専門分野は？③格闘技（系）ライターになったきっかけは？④初めて格闘技の原稿を書いたのはいつか、その内容は？⑤この業界におけるあなたの師匠または恩人は？⑥格闘技の経験の有無、有りならどんな競技か？⑦最近（2004年）もっとも思い入れのある自分の原稿は？⑧最近（2004年）見たベストマッチは？⑨あまり注目されていないが自分が評価している選手(複数可)とその理由は？⑩いまの専門誌に思うこと。⑪格闘技業界の嫌なところは？⑫（もし読んでいれば）『ガチ！マガジン』第1号の感想を。⑬あなたの出版物やHPなど何か宣伝があれば（特になければ結構です）。

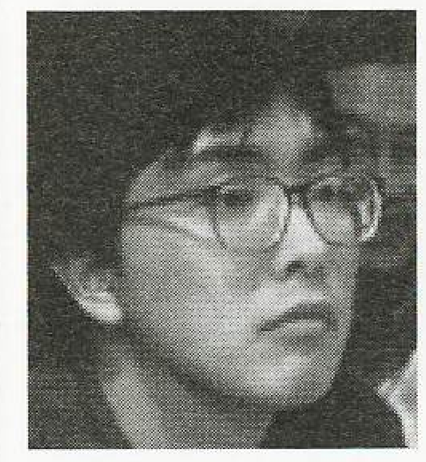
ゴン格系 格通系 その他



TAKAO MATSUI
松井孝夫
(スポーツライター)

①格闘技通信、他、いろいろと（バドミントンなんかも取材しています。大好きなサッカーも、少し記事を書いたことがあります）。以前はナンバーでも書いていましたが、知り合いの担当者がすべて異動してしまい、今はやっていませんね。あとはK-1のパンフレットを製作しています。②K-1、キックなどの打撃系。総合格闘技も好きですけど、なぜかいつも打撃系ばかりの仕事が多いです。残念。③選手の内面に迫って見たかったので。④かなり昔のことで、よく覚えていません。キックの立嶋篤史選手の記事だったような…。⑤谷川貞治さんとターザン山本さん。⑥オランダでボスジムに3ヵ月間、通っていました（ダイエットで）。基本的には、取材する立場の人間が格闘技を習うべきではないと思っています。中途半端に技術を知って、トップ選手のテクニック、駆け引きを知ったかぶりでは書きたくないです。書くのならば、トップ選手の意見を載せるというのがスタンス。⑦自分の原稿に満足したら終わりです。⑧いい試合というのは、それぞれが感じること。ラーメンの好みと一緒だと思っています。なので、ノーコメント。⑨本音を聞けた選手は、有名だろうと無名だろうと、誰もが素晴らしい。⑩自分も含めて、もっとプロになりましょう。選手や試合を批判ばかりしていないで、まず自分がプロになることが大切だと思います（見せ方、写真選び、タイトルのつけ方、もちろん効果的な記事の書き方。学ぶべきことは、いくらでもあります。自分も勉強中です）。あと、記者はジャッジマンではありません。あくまでも、伝達者です。⑪ネガティブに捉えてばかりいる人とは、話したくありません。自分も影響を受けるので。⑫すみません。まだ読んでいません。⑬自分よりも選手に注目してください。

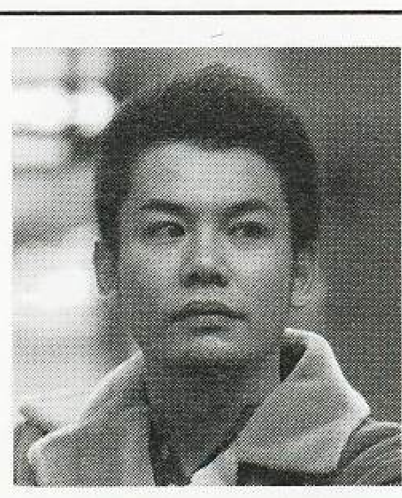
ゴン格系 格通系 その他



KOJI FUSE
布施鋼治
(スポーツライター)

①ＧＡＯＲＡ、格闘技通信、格闘魂、共同通信、近代柔道、Ｓｋｙ Ｐｅｒｆｅｃｔ ＴＶ!!、Ｓｐｏｒｔｉｖａ、デイリースポーツ、Ｎｕｍｂｅｒ、別冊宝島、北海道新聞など（五十音順）。②プロ、アマチュアを問わず、格闘技全般。周囲からは「キック＆ムエタイ好き」と言われるけど、食わず嫌いは避けたい。でも最近は興行（大会）数が多すぎて、とても全部はフォローできません。③週刊プロレス編集部でアルバイトしていた時期に格闘技通信が創刊されたのがきっかけ。その流れに乗ったわけです。④何だろう。ベタ記事だったと思うけど、覚えていません。⑤貧乏学生だった私を居候させてくれた李春成さん、週プロ編集長時代のターザン山本さん、格通編集長時代の谷川貞治さん。まだ社会の右も左もわからない頃、この方々には本当にお世話になりました。⑥柔道とレスリングを少々。とてもやっていたと胸を張れるレベルではないですけど。⑦Ｓｐｏｒｔｉｖａ１月号（04年11月25日発売）に掲載した、ロシアレポート。非常にやり甲斐のある仕事でした。⑧４月17日、タイで見た加藤督朗VSガオラン。ＰＲＩＤＥ28のシウバVSジャクソン、11・５の宍戸大樹VSチャンプアック。⑨たくさんいるので、絞れません。⑩若手ライターを数合わせで使うのではなく、育てる土壌を作ってほしい。⑪同じ名称の団体（組織）が当たり前のように存在するなど、一般人には理解できないことが多すぎること。世間にはびこる「格闘技＝暴力」というイメージを未だ具現化する者がいること。⑫他の格闘技雑誌と比べると、企画が斬新ですね。一般大衆を無視して、コアな格闘技ファンだけをターゲットにするならば、これもアリでしょう。でも私をオヤジ扱いするのはやめてほしい（笑）。⑬04年春から事務所『ＦＵＳＥ（フューズ）』のＨＰ（アドレスは松本幸代の欄を参照）をスタート。随時更新中の日記コーナーでは、私の愚かな日常を綴っています。

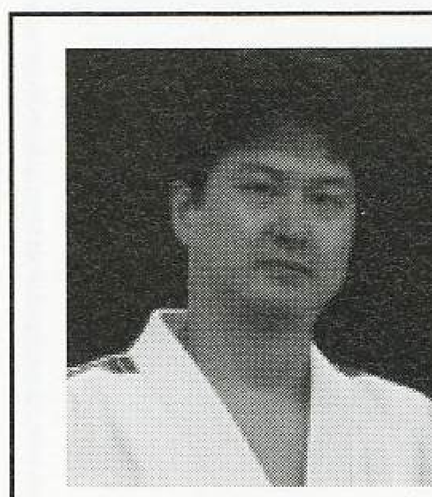
ゴン格系 格通系 その他



TOSHIHIDE MATSUURA
松浦俊秀
(フリーライター)

①格闘技通信。②主に総合格闘技。③もともとプロレス畑ながら、とある事情で会社（ベースボール・マガジン社）に部署異動を申し出る。そこで運よく現編集長の三次さんに拾われ、晴れて格闘技通信編集部員に。しかし異動１年後に早くも、もう一つの夢が出てきてしまったため、三次さんの恩をアダで返す形で今年の８月31日に退社。現在は海外移住に向けビザを申請しつつ、フリーのライターとして活動中。④おそらく７年くらい前のパンクラスの試合。デビュー原稿が他にあるので、格闘技と限定されると思い出せない。⑤格闘技通信の三次敏之編集長。恩人というニュアンスとはちょっと違うが、お世話になっているという意味ではパンクラスの中元徹郎広報、ＺＳＴの上原譲広報ほか多数。⑥なし。でも海外でお金が続くようなら、30歳過ぎでもできそうだから柔術をやってみようかなと。⑦かなり難しい質問ですね…。基本的に自分が書いた原稿に満足したことがないですし、満足してはいけないものだと思っているので。あえて挙げるとすれば、６月に韓国で開催された「グラジエーター・ファイティング・チャンピオンシップ」の総括記事ですかね。⑧川尻達也VS宇野薫。⑨北欧の総合選手。今年、初めて現地で大会を取材したら、自分の予想を遥かに上回るレベルだったから。⑩雑誌業界歴８年。しかも格闘技業界歴となると、純粋には２年ちょっと。このキャリアでエラそうなことは言えません（陰では言いますが）。⑪団体、プロモーションが多すぎるところでしょうか。⑫細かな部分のこだわりはサスガと思いました。ただ、この８年間、原稿も書きながら編集の仕事もしていたので、やはり誤字脱字の多さが気になりました。⑬ベースボール・マガジン社から今後発売予定のムック「格闘ボディデザインブック」と「格闘技スーパースター列伝」も、よろしくお願いします。あと写真がエラそうで、すみません。

ゴン格系 格通系 その他



AKIRA HONDA
本田朗
(フリーライター)

①格闘技通信で定期的に書いています。プロ柔術ＧｉやシュートボクシングのＧ大会パンフにも書いたことがあります。今年４月から毎週火曜日に格通ｉモードで「週刊柔術通信」を連載中です。②総合格闘技、ブラジリアン柔術。00年前後からは、都内開催のブラジリアン柔術大会をほぼ全て観てきたと思う。③柔術がやりたくて、シューティングジム八景の柔術クラスに入門。６～７年ほど前、同ジムでコンバットレスリングの大会が開かれ、ジムの宣伝にもなるかと思い大会レポート的なものを格通に送った。１ヵ月後ぐらいに、当時格通の編集長だった朝岡さんから連絡があり、フリーのライターとしてやらないかと誘われたのがきっかけです。④確か#で書いた原稿をもう一度短く書き直したものが最初。４分の１ページぐらいの大きさでした。原稿料代わりに、こちらが希望したホイス・グレイシーの生写真（大きく引き伸ばしたもの）を２枚もらいました。⑤格通の三次編集長。ライターを始めた当初は（今でも）、時に厳しく指導を受けたと思います。⑥ブラジリアン柔術を１年ほど。バリバリの白帯です。⑦格通で書いた今年９月の修斗後楽園大会の川尻＆菊地や、Ｇｉ－05の中井VSデラヒーバの試合レポートなど。一つに絞るのは難しいなぁ。⑧これも一つだけ挙げるのは難しい。最近ではＰＲＩＤＥ．28のシウバVSジャクソンかな。ここ数年はビッグマッチが多すぎて…。⑨これも最近観た中でですが、ネイサン・マーコート。パンクラスのミドル級の常連でも、やはりファンは國奥や三崎を支持しがち。外国人で地味ではありますけど、地力はある。もっともっと認めてあげてもいいと思う。⑩試合レポートをもっと詳しく載せるべきでは。⑪色々な面でまだ歴史が浅いこと。⑫昔のブラジルのＶＴのページが面白かったです。⑬毎週火曜日に格通ｉモードで「週刊柔術通信」を好評連載中です。柔術にまつわる様々な事を取り上げていますので、ぜひアクセスを！

ゴン格系　格通系　その他

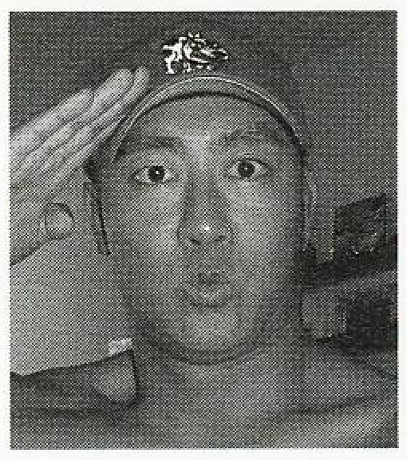


TOMOYA MOTOJIMA

本島燈家
（ライトハウス代表）

①格闘技通信がメイン。たまにナンバーやムック本など。格闘技以外の原稿を書くこともありますし、いろいろなことをしています。②昔からジャンルを問わずに取材していたので、今でも幅広く見ています。「専門」という意識は視野を狭くするので、できるだけ持たないようにしています。③格闘技通信（ベースボール・マガジン社）で社員スタッフとして働いた後、独立しました。現在もどちらかと言うと、編集者兼ライターという意識が強いです。④10年近く前のことなので正確には覚えていません。たぶんボクシングかキックボクシングの試合だと思います。⑤書くチャンスを与えてくれた人、取材に応じてくれた人、文章をチェックしてくれる各誌の編集者は、みな恩人と思っています。その人たちの存在がなければ今の自分はいません。⑥ボクシング、空手。試合だけなら散打も。⑦全部。試合や選手に対してはともかく、原稿への思い入れに優先順位なんかつけられますか？　しいて言えば、一番最近に書いたもの。⑧武田幸三VSブアカーオ・ポー．プラムック。他のカードに比べて動きが少ない試合だったのに、「再延長に入ります」のアナウンスに大歓声が上がって驚いた。倒し合いだけじゃない、ああいう緊張感が一般の人にわかってもらえるのはうれしい。⑨オランダのバドル・ハリ。まだ動いているところを見たことはないが、とにかくすごいという噂ばかり入ってくる。ボンヤスキーなどの現役キックボクサーたちも褒めているらしいから、たぶん本物なのだろう。しかも、まだ19歳らしい。⑩読者の方を向いていない編集者やライターが多い。⑪たまに威圧的な人がいること。なんとなく時間にルーズな気がすること。でも、全体的には他の業界と比べると意外に健全かもしれないとも思う。⑫盛り沢山ですね。あれを定期化できたらすごい。⑬『格闘技通信』をどうぞよろしく。

ゴン格系　格通系　その他

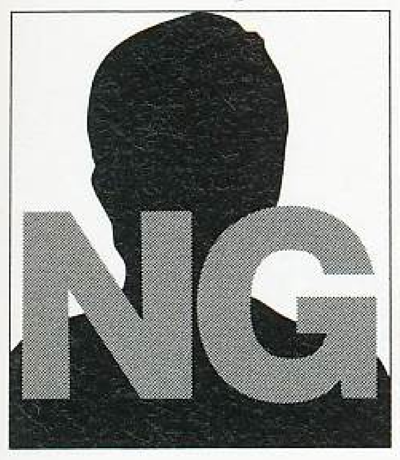


MASA FUKUI

Masa Fukui
（係長）

①Sherdog.com　②アメリカの(主に西部)中堅選手の話題かな？ 最近頭のなかのデータが古くなりつつある。③Sherdogオーナーに「一本書いとく？」って言われたから。④アメリカにいる時に日本の専門誌でデビュー。⑤Jeff Sherwood：大小問わず、取材する大会全て同行させてもらい、アメリカの格闘技業界のイロハを教わった。また、カルフォルニアで家を追い出されて、車で寝ていた僕をご飯付きで家に住ませてくれた恩人でもある。Gregg Savage：団体にも、選手にも媚びず、過激な書き方が凄い。またコラム内の表現がコミカル且つ分かり易い。⑥空手少々（東海岸サバキチャレンジ２位)、柔術少々（第3回ティト・オーティズ・インビテーショナル160ポンドBクラス2位)。⑦書いた記事のほとんどは英文だけど、英語が得意じゃない為時間がかかる(ちなみに英語の成績は中高通して全て2か、良くて3)。従って、全てもの凄く魂を込めて書いています。⑧脳がないと言われるかもしれないが、クイントン VS ヴァンダレイ　⑨ジョー・スティーブンソン：もとKOTCの軽量級チャンピオン。15、6歳で金網デビュー。昔はレスリング選手にありがちなG,nPタイプだったけど、最近はきちっとフィニッシュする試合が多い。軽量級でありながらKOパンチャーでもあり、KOパンチャーでありながら、寝技技術もグッド!　⑩僕は立ち読みでは済ませません。⑪試合会場でしてはいけない事、行っては行けない所等が多くて、帰国した時はかなり戸惑いました。関係者に強面の人が多い。⑫文字が多くて時間をかけて読める。グッドです。僕の家ではトイレに一冊、非難用リュックに一冊あります。⑬自分が書くSherdogの英語記事はなるべく英語が母国語ではない世界中の格闘技ファンが読めるように書いているつもりです。試合会場の舞台裏の話などをメインで書いているので、会場の雰囲気などを感じたい人は是非読んで下さい。ただ、あまりたいした事は書いていません。ははは。

ゴン格系　格通系　その他



MASAHIRO YUUKI

結城昌弘
（ライター）

①「ゴング格闘技」で修斗関係の記事。格闘系ゲームのコラム「リセットボタン千本突き　電脳オクタゴン」を連載中。時々ムック本やウェブでも。②総合格闘技。今は主に修斗がメイン。③ある日突然、熊久保さんからメールが来て、誌面刷新に併せて新しいライターを入れるということで仕事を頂くようになりました。その頃はウェブでよく書いていて、プロフィールに「格闘技好き」と載せていたのを見て、メールして頂いたみたいです。④ハッキリ憶えているのはPRIDE23。吉田秀彦VSドン・フライ戦。それ以前にも、専門誌以外で無記名の小さな記事を書いていました。⑤まずは熊久保英幸さん。それからゴング格闘技編集部スタッフ、ライターの方々。⑥無しです。⑦03年8月10日、修斗の松根良太VS大石真丈。自分と同じ世代の人間が階段を駆け上がる過程を見続けて、遂に王座に輝いた瞬間を至近距離で目撃できた、その原稿を自分が書けたということが非常に感慨深かったです。⑧セルゲイ・ハリトーノフVSセーム・シュルト。技術的に云々という以前に、とにかくゴツゴツした、グルーヴというよりも重低音のみといったような試合で、インパクト大でした。⑨修斗だったりＺＳＴだったりＤＥＥＰだったり、そういった団体や興行がもっと注目されれば。⑩格闘技界だけではなくて、業界横断的な企画がもっとできればなと。コンテンツの幅、選択肢（最小公倍数の掘り下げと最大公約数の広がり）がさらに充実していけばいいなと思います。⑪今のところ、そこまで嫌な思いをしたという経験がないので何とも。⑫未見です。-ライター、カメラマン、ウェブデザイナー等が寄り集まるトンチキ集団、アウダス・プロジェクト（http://www.audus-p.com）というのをやっています。あと、格闘技雑誌以外でも書いていますんで（太田出版「コンティニュー」、扶桑社「週刊ＳＰＡ！」等)、もし書店等で見かけたら読んでみてください！

ゴン格系　格通系　その他



YUKIYO MATSUMOTO

松本幸代
（フリーライター）

①格闘技通信、週刊プロレスEXTRA！など。ディレクターとしては女子格闘技、女子プロレス関係のDVD制作。②女子格闘技、女子プロレス、キックボクシング。③96年頃にサムライTVのディレクターとして業界に入り、ライターとの兼業でシフトチェンジしつつ、03年から布施鋼治さんの事務所「FUSE（フューズ）」にお世話になる形でライター中心の生活となる。④８、９年前に『格闘技通信』の読者投稿コーナー「ゴリラとヘラクレス」でシュートボクシング女子大会について投稿した。謝礼が出たので、あれが初原稿ということになるのだろうか。⑤仕事に対する姿勢を見習いたい布施鋼治さん。サムライTV時代から格闘技とプロレスのイロハを教えて下さった株式会社ブロンコスの関巧さん。スポーツライティングの師匠と私が勝手に思い込んでいる朝日新聞の西村欣也さん。⑥大学時代の４年間、アイスホッケーを。氷上の格闘技ということで。⑦今年書いたもの全部。⑧男子では５・３修斗のパーリングvs高谷裕之。女子では８・５スマックガールの辻結花vsモントーヤ、8・11女子ムエタイの渡邊久江vsソムサターン、９・18女子ボクシングのライカvsフィオレンティーノ。１つに絞れないほど、どれもよかった。⑨女子ボクシングWIBA世界ミニフライ級王者の袖岡裕子（SPEED）。ライカに続く世界王者だが、38歳の戴冠は日々の地道な鍛錬なくしてはありえなかった。尊敬に値する。⑩発売日をズラして、読者が週に１度は新しい雑誌を読めたらいいのにと思う。⑪噂話が深く静かにあっという間に広まること。⑫P42～45「ところでプロってなによ!?」の対談の字が読みにくい。それから、そこに出てくる高島学氏の写真の表情が暗い。気になって今でも時々写真をしげしげと見てしまいます。⑬日記の更新がメインとなってしまった「FUSE」のHP＝http://homepage3.nifty.com/wb-fuse/

質問内容…①主に活躍している媒体②得意分野または専門分野は？③格闘技（系）ライターになったきっかけは？④初めて格闘技の原稿を書いたのはいつか、その内容は？⑤この業界におけるあなたの師匠または恩人は？⑥格闘技の経験の有無、有りならどんな競技か？⑦最近（2004年）もっとも思い入れのある自分の原稿は？⑧最近（2004年）見たベストマッチは？⑨あまり注目されていないが自分が評価している選手(複数可)とその理由は？⑩いまの専門誌に思うこと。⑪格闘技業界の嫌なところは？⑫（もし読んでいれば）『ガチ！マガジン』第1号の感想を。⑬あなたの出版物やHPなど何か宣伝があれば（特になければ結構です）。

ゴン格系 格通系 その他



HARUNARI RI

李 春成

（ジャーナリスト）

①『格闘技通信』創刊号の立ち上げなど、クラスマガジンを主戦場としていたのが80年代中盤から終盤。だが特定層への情報発信だけでは、業界のパイはいつまでたっても大きくならない。そこで90年代以降は、当時一冊しかなかった総合スポーツ誌『ナンバー』をはじめ、不特定層リーダーを抱える媒体での執筆を優先してきた。②プロレス＆格闘技、そしてサッカー。これらをひとくくりにして「蹴りモノ」と呼んでいる。ただしターゲットがエンターテインメントであれば、基本的にジャンルを問わずに活動してきた。かつては映画、舞台、ミュージシャン、芸人などの取材も精力的にこなしており、「いつ何時、誰とでも闘う」という姿勢は今も変わらない。③すべてのきっかけは、84年のロサンゼルス五輪に集約される。レスリングで金メダルを獲った富山英明の自伝をゴーストとして執筆する機会に恵まれた。旧ＵＷＦが旗揚げされた年でもあり、『週プロ』のＵＷＦ番となる。④編集者時代の「ロス五輪ガイド」。フリースタイル52kg級の高田裕司を取り上げた。⑤編集者時代の編集長。もうひとりは、74年の創刊当時から『ポパイ』で活躍していたフリーライター。⑥シューティング。⑦３月に発刊した『不器用な王者たち』（ぴあ）。⑧11・３ナビスコ杯決勝（ＦＣ東京vs浦和レッズ）。⑨03年の「プライドＧＰ」準決勝で敗れ、一気に価値を落としたチャック・リデル。彼の実力はあんなものではないという疑念をもたされた。秒殺パンチだけでなく、追い詰められてからの逆転劇もアイスマンの魅力のひとつだ。⑩外国人ファイターの素顔をおろそかにしすぎ。観る者が想いを乗せられるような紹介記事が少ない。⑪選手のプロデュース方法に問題が多い。作り手側の集金意図が見えすぎたり、選手を消耗品として扱っているとしか思えないケースも目立つ。⑫年末の「男祭り」プレビューをフジＴＶのＨＰで執筆。

ゴン格系 格通系 その他



AYA YOKOMORI

横森 綾

（フリーライター）

①「Number」「ゴング格闘技」②レスリング。海外選手の幅が広く、どれだけ調べても、試合を見ても、汲めどもつきません。ちょっと前までは、女子格闘技も取り扱っていました。③友人がポータルサイトのスタッフで、そこのスタッフに誘われたこと。④99年に前田日明と対戦するカレリンの紹介。⑤取材をさせてくれた選手やコーチなど、すべての皆さん。今も色々にわたってお世話になっている岩上安身さん。格闘技に限って言えば、BoutReviewの井田英登さんが最初のきっかけをつくってくれました。⑥経験はありません。⑦初めての単行本『アテネでつかむ金メダル』（近代映画社）。準備が短くてしんどかったけれど、中女三人娘の魅力が伝わったのでは、と思ってます。⑧アテネ五輪フリースタイル55kg級決勝トーナメント一回戦。マンスロフ（ウズベキスタン）対バティロフ（ロシア）。ここ数年、日本代表の田南部（アテネ五輪銅メダル）がどうしても勝てず、難攻不落の王者に見えていたマンスロフがスタンドで苦戦する姿を初めて見た。バティロフが勝利し、金メダルを獲得。⑨上記のバティロフと、グレコローマン96kg級アテネ五輪金のイブラヒム。防御のセオリーを無視した豪快な投げ技が信条。必ず研究されて防がれるようになるが、その新しい対策を上回ることができるのか今後が楽しみ。⑩雑誌というのは、手に持って見返せるのがよいところ。それぞれの号のテーマを設定して作ってもらえると、数年経って見ても楽しいのでは、とよく思う。その当時、何が問題になっていたのかも思い出せるし。⑪話し合いを適当にしておくために、意図がよくわからないことが多いこと。⑫すみません。読んでいません。⑬『アテネでつかむ金メダル　中京女子大レスリング部からアテネ五輪へ飛ぶ三人』（近代映画社）が発売中です。中京女子大学所属の三人の五輪メダリスト、伊調千春、伊調馨、吉田沙保里の幼少期からアテネ五輪代表の座をつかむまでの物語です。レスリングだけでなく、恋の話もあります。

ゴン格系 格通系 その他



KOICHI WARA

和良コウイチ

（ライター：時折“サブミッションライター”）

①ゴング格闘技、Number、Sportiva、インフォレスト社始め格闘技ムックなど。格闘技以外の執筆・編集も。②総合や柔術など。寝技の技術に強い関心あり。③94年夏にゴン格に「ライター募集」の告知があり、小論を書いて応募したところ、ライターのはずがなぜかアルバイトとして採用になり、まもなく社員に。6年間勤めて辞めてからこのPNに。④94年10月に行われた初の女子キック興行。10行程度の試合レポートを書いた。⑤宮地克二氏、熊久保英幸氏、舟木昭太郎氏。⑥ブラジリアン柔術紫帯、柔道三段、サンボ全日本ジュニア２位など。⑦Numberで６月にロシアで取材したサンボの記事。大学でペレストロイカ時代の社会主義経済を学んだ懐かしさも含めて、この原稿が書けるのは自分以外にはいないと思ったのと、編集者と夜中に激しい口論を続けたのが思い入れかも（笑）。⑧今年９月のサンボ世界選手権68ｋｇ級決勝。コビャック（ロシア）が朽木倒し連発でいきなり大差つけるも途中でガス欠。相手のベラルーシ人に追い上げられ、試合後に胃液をはき続けていた姿が印象的でSportivaに少し書いた。あとはコパリバーサルの青木真也×弘中邦佳。あの飛び十字はすごすぎる。骨折しても戦おうとする弘中にも震えた。⑨高瀬大樹：寝技の実力は世界トップクラス。精神的に吹っ切れてほしい。今成正和：予想のつかない寝技の入り方をする。ブラジリアン柔術黒帯が寝技の攻防をしたがらない日本人はこの人ぐらい。北岡悟：「もっと俺を評価してくれ」というオーラがいつも気になって見てしまう。でも着実に上がってきている。渡辺孝：我が道を行く姿勢。群れない人が好みなので。川尻達也：実力を正当に評価すべき一人。⑩見巧者が買いたい雑誌がない。⑪戦っている選手をあまりリスペクトしていない人を多く感じる。⑫編集・ライターで関わった側としては誤字など至らないところ多し。⑬『ガチ！マガジン』買ってね。

ゴン格系 格通系 その他



YUKO YONEYAMA

米山祐子

（スポーツライター）

①格闘技通信やパンフレットなどで書いています。②主にキックボクシングが中心です。海外選手の通訳や海外ものの翻訳もたまにやっています。③友達の手伝いで行ったK-1ラスベガス大会で松井さんに出会いました。日本に帰国後、オファーをいただきライターをやることになりました。④03年2月、格闘技通信で高田道場の大会のリポートをしました。初めて使う一眼レフで写真も撮りながらでした。とてもキンチョーして行ったのを覚えています。原稿は日本語が変だったのをようやく直してもらいました。短かったのに。⑤松井孝夫、本島燈家。格闘技のことを何も分からない私を雇ってくれて、ライターとしてだけでなく、いろいろ勉強させてもらっています。人生相談などにものってもらったり。⑥ありません。太極拳ならあるのですが…。⑦今年2月、初めての海外取材でアメリカに行きました。初めて生ＵＦＣを見たり、アメリカン・トップ・チームに行ったり、エリオ・グレイシーさんに会ったり…。途中からは一人で取材だったので、その時の原稿に思い入れがあります。原稿はまだまだなのですが…、また行きたいです。⑧新日本キックボクシング協会の4月大会で行われた石井宏樹VS朴龍の試合。タイトルマッチで石井選手がドロー防衛した試合です。石井選手は得意としているものすごいスピードといろいろな技で攻撃し、朴龍選手も折れずに立ち向かい続け、最終ラウンドまで打ち合い、蹴り合いの真っ向勝負でした。⑨みんなすごいです。強い男はかっこいいですよ。絶対！⑩もっとファッション誌みたいなかっこよさがあってもいいと思います。電車の中で女の子が広げて読めるような。会場にはいっぱい女の子のファンがいるのに、電車の中で格闘技雑誌を広げている女の子を見たことがないので。パンフレットは手にしているようですが。⑪いろいろと難しいみたいですね。⑫海外ものが充実していました。

INOKI BOM-BA-YE

03年猪木祭・泥沼の顛末記

年末格闘技興行戦争の結末は…

アントニオ猪木が10月3日、ニューヨークの自宅に帰宅前の成田空港での記者会見で、正式に大晦日の『イノキボンバイエ』開催断念の事実を認めた。

すでに昨年末大会の視聴率惨敗がはっきりした時点で、裏切ったフジテレビ&PRIDE陣営に戻れるはずもなく、こうなることは内部関係者間には明白であった。10月になってからは、さすがにどういう形で断念発表するのかだけが記者にとっての関心事になっていた。ここであらためて今までの流れを、他誌に出ていない情報を含めて振り返ってみたいと思う。

過去最大の格闘技大会開催に向けて

5月20日、大晦日テレビ格闘技戦争の主役でもあった『イノキボンバイエ』のプロモーターである㈱ケイコンフィデンスの記者会見が開かれた。代表の川又誠矢氏の姿はなかったが、2名の弁護士が①アントニオ猪木を冠にして3年間大晦日に興行を開催する基本契約を一方的に解除通知されたこと。②03年の契約金に関して2億円が勝手に減額され未払いのままであること。③さらには日テレ側の収支決算報告がパートナーであるケイコンに開示されてないことを提訴理由にして、放送局の企画制作会社に対する優位的地位を利用した横暴行為を糾弾するという主旨であった。

"猪木祭"の予算総額が、噂通りに8億円であったということが最大の衝撃だったかもしれない。通常見込みの1.5倍くらいの見積もりを出して局から予算を引き出すのが常套手段とはいえ、当初"芸能界のドン"こと川村龍夫ケイダッシュ社長が仲介していたにせよ、一晩のイベントにしては異常な高額である。猪木の取り分、川村氏の取り分が膨大なのはともかく、噂通り3回総額24億円の桁外れ外注であったわけだ。

日テレが『過去最高の格闘技大会をやってもらう』という前提でプロジェクトが始まっているとケイコン側弁護士は強調したが、それだけ出せば約束の"最高の内容"が可能だと思っていたのだろうか。ある興行関係者は、「確かに経費は各方面へのギャラだから、金さえ出せばベストのものが出来るという発想は間違ってませんが、通常は宣伝費を含めて1億円あれば立派なメジャー興行が打てます。他局の看板番組を引き抜いてくる上層部の指令が発端ですから、昨年のTBSから関係者を鞍替えさせるための軍資金を考えても3〜4億円というのが相場。残りはどこに消えたのでしょうか?」と不思議がる。

そもそも昨年までの"猪木祭"は、石井和義元館長の仕切りでDSEが運営するという役割分担で開催されてきた。ところが館長の逮捕後、業界のパワーバランスが崩れた。日テレ側は猪木さえ囲えば、セットでDSEもついてくると安易に考えていたフシがある。しかしK-1とPRIDEは仲たがいを始め、川又氏は独立してしまった。

日テレからは最高の大会のために「強引な引き抜きをせよ」という指示があったと、はっきり弁護士が記者会見で証言した点は注目を集めた。昨年8月27日に会社登記をしたばかりの、なんの実績もないイベント企画会社に、いきなり8億円(放映権料4億5000万円、興行権料3億5000万円)を約束する日テレ側に問題はなかったのか? 川又氏は石井館長の右腕格として、K-1の東海地区興行を手伝ってきたとはいえ、それは裏方の仕事内容である。日テレはケイコンに丸投げする予算だけでなく、若乃花らをTV実況に起用したにもかかわらず、大金がドブに捨てられたとされている。

ケイコンは選手のギャラだけでなくすべての会場費用を払っている。しかし摩訶不思議な藤波辰爾の引退セレモニーでは、ブラジル風カーニバル・ダンサーたちの出演と猪木の豪華な衣装代に1億(実際は200万円の衣装)、異種格闘技戦を行う藤田和之への贈呈ベルト制作費1億、天然芝を傷めない特殊ビニールシート敷設1億(実際は2300万円)などと、素人でも首をかしげるネタ額が意味ありげに各種のメディアで活字にされていた。

一方、キョードー東京を使ったチケット販売やグッズ、パチンコの"平和"以下スポンサーからのCM収入にスカパーでの放送料など、収入は日テレが管理していた。イベント収支決算の書類開示に日テレが当初慎重になったのは無理もない。

失敗の原因は? ミルコ不在か、番組制作か

日本テレビ側は矢永啓助・広報部長名で「まったく不当な提訴だ。そもそもケイコンはミルコ・クロコップを参戦させるなどとしていたが実現せず、その他の対戦カードも直前まで二転三転して決められないなど、大混乱を招いた責任者」と同日に発表。「裁判ではケイコンのずさんなイベント準備・運営についての詳細を明らかにするとともに徹底的に戦う」と反論している。果たしてどちらの言い分が正当なのだろうか。

某スポーツ誌デスクによると、「論点のひとつが目玉であるミルコの不参加であることは間違いありません。03年の契約にはミルコの名前だけ明記されていて、ダメな場合は同等かそれ以上の選手でないと減額という条項が存在したことも明かされてます。通常この種の契約で、選手の名前まで明記するのは異例でしょう」と指摘する。

しかしケイコンの言い分は「PRIDEヘビー級王者であるエメリヤーエンコ・ヒョードルを、日テレとも十分に相談の上で参加させた」というもの。しかも秒殺されたとはいえ、相手は新日本プロレスのエース永田裕志であった。また「パンクラス無差別級タイトルマッチを実現させるなど、質の高い試合を提供した」とケイコンは主張する。

格闘技マニアには警官ミルコの知名度のほうが、"ロシア最後の皇帝"の持つチャンピオン・ベルトの実績よりも高いという理屈が成立しても、お茶の間相手のテレビ戦争である場合は話が別なのだ。世間的な知名度のあるプロレスラーが多数参戦した『イノキボンバイエ』が、決して劣っていたわけではない事実がある。実際、視聴率ピークは"借金王"安田忠夫の完敗試合であった。

「常連さんには吉田秀彦対ホイス・グレイシー以下、PRIDEのカードを喜ぶことはわかってました。でも視聴率ならTBSの曙対ボブ・サップが瞬間43%で圧勝だったように、フジの出場選手が大衆向きだったわけではないんです」(同デスク)

むしろ日テレの番組作りを批判するのは某プロレス記者だ。

「フジは5時間半もやったんですよ。お茶の間を惹きつけるのは大変なことです。でも格闘技番組の老舗フジは、飽きさせない構成だったのに対して、過去K-1からもノアの中継の構成からもへたくそだと烙印を押されたことのあるNディレクターの演出は大幅に見劣りしました」

「カードが悪かったのではなくて、番組作りの責任のほうが視聴率に関しては大きいと思われます。ミルコ戦が実現していても結果は同じでしょう」

もっともTBSだって最初は格闘技番組の作り方がわからなかったし、フジはK-1で10年やっている蓄積がある。日テレが慣れてないのは仕方がない。むしろガチンコ大会である以上、ケガして試合に出られないこともある。PRIDEがミルコの出場を止めさせたとの怪情報があるが、クロアチアの国会議員先生が公式発表した理由は、まさにその「ケガ」だった。条項にある「ミルコと同等の選手」が誰を指すのかを判断するのは裁判官になるが、これは専門家に聞いてもヒョードルかアントニオ・ホドリゴ・ノゲイラに落ち着いてしまう。

「どうやらケイコン側が提訴に踏み切った切り札は、日テレの宮本修二プロデューサーという人質です。カード変更など常に現場にはいて、承認も得て行動していた以上、一方的な契約解除や減額は受けられないという論旨のようです。PRIDEを運営するDSE(ドリームステージエンターテインメント)側との12月21日の手打ちに、宮本氏が同席していた事実を武器に使っている可能性があります」(猪木祭実行委員会内部関係者)という証言もある。宮本氏は、02年8月にガラガラの東京ドームから中継し

た『UFOレジェンド』大会でも中身で失敗した過去がある。「Dynamite!!」に邪魔された」と谷川プロデューサーに詰めより激怒したと言われる。



互いに言い分は平行線をたどる

減額と契約解除が協議を経て承認された結論かどうかについて、両者は平行線を辿っている。1月3日には平均視聴率が5・1％の惨敗であったことを踏まえて、すでに減額に関しては話し合いが始まっていた。6日には日テレの弁護士から内容証明が10日の期限で届いている。しかしケイコン側は休みの多い1月だったことを理由に、反撃に転じたのは27日付配達証明からだという。

対する日テレは「最高の大会を約束」しながら、①視聴率と内容は失敗であったこと、②大会後の対応の不誠実（回答期限内に行動せず）、③ミルコの不参加を理由に、2月13日には3年間の基本契約の解除通知もしている。

ただし、なにを根拠に「失敗」なのかの定義は難しい。興行は間違いなく成功の部類だった。どこも苦しい興行事情のマット界で、発表はともかく、実券でも神戸に1万2千人が集まった。しかも会場客は藤波と猪木の余興に満足して帰路に着いている。さらに集客について言うなら、大阪ドームは翌日にイベントが入っており、舞台の撤収が無理ということで、神戸ウイングスタジアムを選んだのは日テレである。

「平均視聴率が何％以下なら失敗」などの条項は他のイベント例でもないし、ケイコン側が強調していたのは、三つ巴戦争でも瞬間最高では13・6％を記録した点だった。

ある実行委員会のメンバーはこう証言する。

「ミルコが出ないこと、ヒョードルが出ることは一週間前にはわかってました。よしんば正式発表時期を鑑みても、3日前には日テレ首脳陣も知っていたことです。それなのに事前に減額を告知するならともかく、あとになって視聴率が悪かったから払わない、では現場はやってられません。百歩譲って、今回信頼関係が築けなかったから来年は白紙にしようという提案ならわかりますが、今回のも払わないというのは酷すぎます」と、本人のギャラがまだなのにも関わらず、やはり日テレの態度に憤懣やるかたない。

「招待券のばら撒きは日テレが嫌がったんです。ポスター貼りや宣伝カーも日テレの管轄だったので、何もやらないから地元のプロモーターから随分文句を言われました。PRIDEと比べてカードが見劣ってない自信もあります」

「ゴングが用意できてなかったエピソードが週刊誌に書かれましたが、それでも結局は間に合ったんです。ドクターも手配できました。ケガ人もありません。猪木が出なかったとか、ミルコと同等の選手が確保できなかったというなら話は別です。でも、最後は無事にやれたんですよ。あとはテレビ製作チームの手腕でしょ？　それなのに視聴率を理由に減額はおかしいですよ」

日テレとの裁判は長期戦になりそうだ。本件は、「ミルコ選手が出ようが出まいが減額」という条項が存在したか否かの解釈の問題に移りつつある。日テレ側はミルコ選手の相場価値を算出して、減額を証明していく模様。対するケイコン側は、「相当する代替選手」の解釈などを主張していくことになる。



そして、もう一方の裁判が行われる

札束をドブに捨てた日テレ、もろもろの和解金を出費し逃亡生活を続ける川又氏以外にも被害者はいる。協力した業者への支払いが、このナンバー1民放局とイベント屋のせいでストップしたままなのだ。

ケイコンが原告で日テレが被告の公判は7月15日の第1回から東京地裁で継続中。新日本プロレスと猪木事務所は合計700万円の未払いがあるとされ、このうち新日が原告でケイコンを訴える公判は11月15

3者に別れて争われた昨年の格闘技大晦日興行戦争は、
日テレ～猪木祭の一人負けという結果に終わったが、
それはそのことだけでは収まらず、その後にいくつかの訴訟を生むことになった。
公判などを傍聴し追いかけてきた筆者が、この経緯をディープにレポートする。

タダシ★タナカ=文
text by Tadashi Tanaka

日にあり、永田が2300万円、安田が1000万円のギャラであることが明かされた。ただしケイコン側欠席という異常事態になっている。ホテル神戸オークラと飛行機の手配をした近畿日本ツーリストには2000万円、ミルコと闘うはずだったが試合が流れて実況席に座った高山には150万円、パンクラスには550万円など、これらの金額の信憑性はともかく、裁判もあって情報がどんどん確定していく段階にはある。猪木事務所とケイコンの間には契約書すら存在しない。それに対して「この業界では契約書を作らないのが常識」と平然と答えたとされる。よって猪木事務所は訴訟を起こしていない。

東京在住のスポーツ・エージェントであるミロ・ミヤトビッチ氏が、裁判で仮に日テレ側がケイコンになにがしかの金銭を支払う判決が出た場合、そこからミヤトビッチ氏の会社であるアイビスキューブ・ジャパン・リミテッドが優先的に請求金額を確保する法的な確認も提出されている。こちらの公判は11月24日から始まった。

ミヤトビッチ氏はエメリヤーエンコ・ヒョードルらを擁するロシアのレッドデビル・チームのエージェントとしても知られている。本人がクロアチア出身オーストラリア国籍であることから、水泳五輪金メダルのイアン・ソープ選手の日本での営業活動の権利も所有していることで有名だ。ラブホテルファンドの設立でも名を売った。

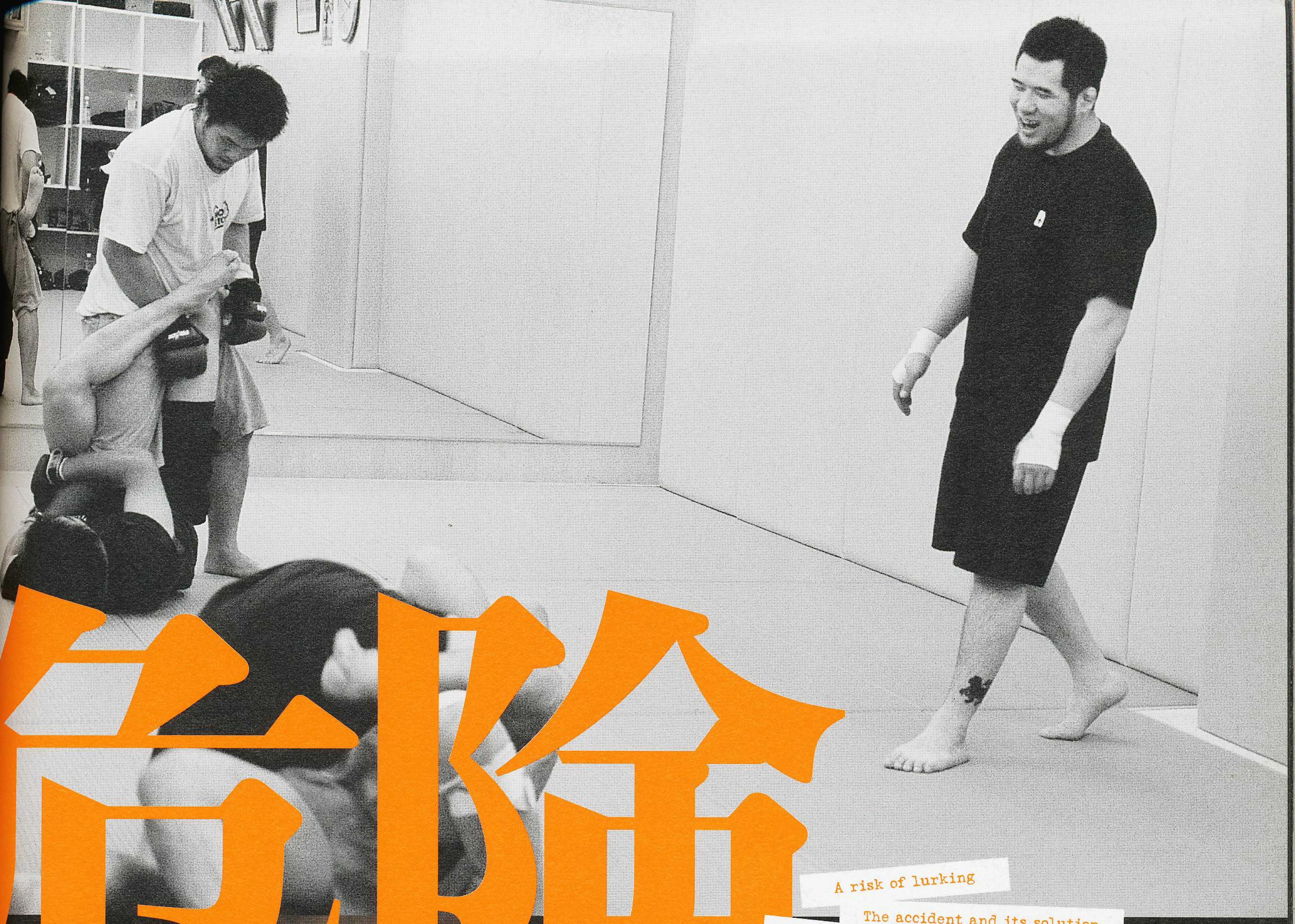
今回、オランダのゴールデン・グローリー所属選手であるステファン・レコ、セーム・シュルト、アリスター・オーフレイムをもイノキボンバイエにブッキングしており、今後の代理人活動の信用問題に関わるとして一端全額を立て替えて支払い、ゴールデン・グローリーのバス・ブーン代表との共同名義でその経緯をインターネット上で発表していた。日テレによる2億円の減額がもし無効（もしくは一部無効）と判断されても、その支払いはケイコンではなくアイビスキューブに対して行われるものとなる。

新日本プロレスからの訴訟は契約書の文面もはっきりしているからなのか、ケイ・コンフィデンス側は弁護士も頼まず欠席していたが、本件はミルコ・クロコップの参戦を巡って争う論点があるためか、日テレへの訴訟と同じ弁護団が登場し、「契約は成立していない」と主張する幕開けとなった。

原告側であるミロ・ミヤトビッチ代表、ハワイの「ランブル・オン・ザ・ロック」大会に姿を見せ、舞台裏で様々な憶測を呼んでいた川又聖矢代表の両当事者はこの法定には姿を見せず、双方とも弁護士のみの出席で準備書面の確認などが行われている。

公判では「イノキボンバイエ2003」における利益の10％がアイビスキューブ社に行く契約であった事実関係が公になっている。また、契約書は英語のものしか存在しないことも明かされていた。2月15日には前述のとおりインターネット上でミヤトビッチ代表とバス・ブーン氏が選手のギャラを一端立て替えた旨が発表されていたが、ケイ・コンフィデンス側は「一部は支払っているし、米国の元ボクシング王者イマム・メイフィールドや、パンクラス王者ジョシュ・バーネットなど、関係ない選手報酬の10％まで請求されており、肝心のミルコが確保されていると言うからパートナーを組んだのに、それが履行されなかったペナルティーも含めて争う」「利益は出なかったわけだし、経費明細を明かす必要もない」とやり返した。

本件の裁判長は別件である日本テレビとの訴訟に関して、「ミルコを呼ばなかったこと」との関連を尋ねていたが、ケイ・コンフィデンス側は「大企業が弱小会社を搾取しているもので、イベント3年契約を破棄されたことなどを争っている」と説明。案件は別々に処理されていく模様。年末は弁護士が他案件で忙しくなるため被告側が追加主張の書面を準備する期限が「1月11日までに」と決定。これを受けた原告が1月中に論旨を固めるため、次回公判は2月4日に設定された。ただし、日本テレビがからむため公開されている先行訴訟と違い、弁護士同士のやりとりになる民事の場合の二回目以降の通例で、一般傍聴はできない。関連訴訟は3つになったが、行方不明が伝えられる川又氏本人はいずれにも姿を見せてはいない。



危険

A risk of lurking
The accident and its solution
under practice

～練習中の事故とその対処方法～

格闘技に危険は付き物だ。それだけに「安全性の確保」はこのジャンルの生命線。これまで事故防止のためにルールや選手の健康管理など様々な工夫がなされてきた。しかし、見落とされがちなのが「練習中の事故」である。密室で起こるため、練習中の事故は闇から闇に葬られるケースが多いと聞く。総合の練習にはどんな危険が潜み、どんな事故があるのか。またその際にどう対処すればいいのかを探った。

茂田浩司＝取材・文
text by Koji Shigeta

テレビの影響力は絶大だ。K-1MAXでブアカーオが優勝すればジムでは前蹴りが流行し、PRIDEでノゲイラがスピニングチョークを披露すれば、翌日からあちこちの道場で必殺技習得に励む人の姿を見かけた。

だが、そうした流行の技も中には危険を伴うものがある。野呂田秀夫氏が近頃危惧するのは「投げ技」の流行だ。ランデルマンがヒョードルを投げたジャーマンや、ジャクソンがアローナに見舞ったバスターをきっかけに注目を浴びる投げ技だが、思わぬ危険が潜んでいる。

「先日シュートボクシングの試合で、ボディスラムを試みた選手がバランスを崩して自分の頭をマットに強打してKO負けになりました。あれはまさに『練習中に起きる事故』の典型なんですよ。技を掛けられた方は衝撃を予測して筋肉を緊張させて『受ける』の体勢になるけど、掛けた方は頭を打つと予測してないから不意をつかれて失神した。投げ技は頭から落ちる危険があるし、特に『気の緩んだ瞬間』は危ないです。練習で投げ技をやる時は、十分に集中してやることが必要だと思いますよ」

野呂田氏はUWFの時に長井満也の練習中の怪我を経験している。練習中に飛行機投げが崩れ、頸椎を脱臼骨折。長期間の懸命のリハビリを経て復帰できたが、この時から野呂田氏は試合中の安全対策や危機管理だけでなく、練習でも事故対策が必要なことを事あるごとに訴えてきた。

野呂田氏は、練習で使用する「グローブ」にも注意を促す。スパーリング用の16オンスのグローブや、オープンフィンガーグローブにはそれぞれ危険が潜んでいる。

「ボクシングジムで練習を見たり、トレーナーにも話を聞きましたけど、選手が練習で付ける大きなグローブはパンチを貰うと脳が揺れるし、ダメージが蓄積するんです。総合の小さなグローブは脳が揺れる危険は低いですが、衝撃が大きくて、練習でも擦過傷（こすって出来る傷）や眼窩底骨折が起こるケースがある。どちらを使うにも細心の注意が必要ですよ」

練習で危険なケースに遭遇したこともある。強いパンチを食ってフラついた選手を見てトレーナーが練習を中止。そこまでは適切だったが、選手をしばらく休ませるとトレーナーは「大丈夫か？」と声を掛け、練習に復帰させたという。

野呂田氏が語気を強めた。

「危ないですよ。頭にダメージを負った選手に『大丈夫か？』ですよ。頭のコンピューターが一時的に壊れた選手に正しい判断ができますか？　試合でもそうですけど、選手にできるかと聞けば選手は必ず『できます』と言います。周りが冷静にダメージを判断して練習を切り上げなければ。脳のダメージは『自覚できない』という普通の怪我と違う怖さがあるんですよ」

体の痛みや違和感は脳が指令を出して「自覚」ができる。だが、その指令を出す部分に狂いが生じたらどうなるか。

頭の場合CTやMRIの検査で異常がな

総合格闘技に潜む

気を緩めた時に事故は起こる 投げ技や打撃の練習は特に集中してやるべきです

いから100%大丈夫、とも言い切れない。「脳外科の専門医によるとCTに映りにくい部分もあるそうです。第一、CTやMRIに異常が映った時点でその選手には引退勧告ですよ。だから、事故が起こる前に周りが『打たれ弱くなった』、あるいは『最近性格が変わった、怒りっぽくなった』などの『兆候』を感じ取ってほしい」

練習中の事故や怪我を防ぐにはどうしたらいいのか。野呂田氏は4項目を挙げる。

1. 基礎体力を付ける。特に、首を中心とした筋肉は念入りに鍛える。
2. ストレッチで体の柔軟性を高め、怪我のしにくい体を作る。
3. 必ず受け身や打撃の基本を身につける。
4. 歯形に合ったマウスピースを常に付ける。脳しんとうの予防のため。

「今の子供は全体的に運動不足で骨や筋肉が発達してないですから、ジムでは怪我をさせないカリキュラムを組んで『導く』ことが必要でしょう。昔のような根性、根性の練習をさせたら事故に繋がりますよ」

最後に、野呂田氏は「総合」に対してこんな疑問を投げかける。

「総合には相撲の四股やテッポウのような『基本』はあるの？　以前、キック出身の外国人選手が『寝技は経験ないから怖い』と話してたけど、彼は投げられても受け身なんて取れないよ。総合をやるには最低限これとこれが必要で、試合に出る選手は必ずそれを身につける、という『基本』を作って普及させたらどうでしょう。練習や試合での事故防止に繋がると思いますよ」

「総合の選手の指導は難しいです」

そう語るのはクロスポイント吉祥寺とスクランブル渋谷の2つのジムで指導をする山口元気氏だ。現役引退後は総合の選手に打撃を指導することもあるが、総合選手の「気質」に戸惑うことが多いという。

「総合の子はすぐ打撃のスパーリングをやりたがるんですよ。スパーリングから練習を始める組み技の習慣なんでしょうけど」

山口氏は選手にこう説明する。ボクシングでもスパーリングで壊れて、打たれ弱くなることが多い。だから貰わないようにすることが大事で、まずシャドーやサンドバッグの基本から始めた方がいい、と。

「考え方の違いですかね？　基本を積み重ねることを嫌がる人が多い。レスリングでいうタックルの打ち込みと同じなのに」

基本を習得しない姿勢がどんな結果を招くか。ある時、山口氏が統括マネージャーを務める打撃格闘技「R.I.S.E」のアマチュア大会に「柔道経験10年」の者が出場を申し込んできたことがあった。打撃経験がないにも関わらず、出場希望は「Aクラス」。山口氏は危険だから「Cクラス」に変更するよう説得し、本人も了承してCクラスに出たが結果は完敗。まるで打撃が出来なかったという。もしAクラスに出ていたら…。

こうしたケースは総合特有だろう、と山口氏は指摘する。彼ら組み技経験者は、大きな『ギャップ』を抱えているのだ。

「レスリングや柔道をやってた人の基礎体力って物凄いです。でも、打撃では基礎体力だけでは勝てないし、打撃ありの総合でもそうじゃないですか」

プロキックボクサーの山口氏を驚嘆させるほどの基礎体力の持ち主だから『やらなくてもなんとかなる』と考えてしまうのか。

ここは、異分野から短期間の練習で総合のリングに上げてしまうプロ格闘技の悪影響なのかもしれない。

また、山口氏によればスパーで試合並みのパウンドやバスターを繰り出し、怪我人を出しているジムもあるという。

「キックボクシングには『ここまでやったら危ない、怪我をする』というデータがありますけど、総合はまだデータがない。サークル的なジムが多いし、多少無茶なこともやっちゃうんじゃないですか。練習で事故が起こる可能性は高いと思うし、すごく



野呂田秀夫
のろた・ひでお
1944年、秋田県出身。理学療法士。元東京警察病院リハビリテーション科室長。88年新生UWFより「メディカルアドバイザー」として医療面からのサポートを始める。リングス、K-1（初期）、PRIDE（KRS時代）、現在はSB、ZST、U-FILECAMPなどにメディカルアドバイザーとして関わり、格闘技界の医療サポート態勢の基礎を作った。10月末に東京警察病院を退職。11月からは非常勤顧問として同病院に勤務する傍ら「メディカル・クロッシング・トータルオフィス」（東京・駒込）を設立。各種リハビリテーションの指導、マッサージなどのケアを行なっている。

格闘メディカル協会
04年9月に設立。野呂田氏が代表を務め、格闘家やプロレスラー、リングドクターなどがメンバーに名を連ねる。格闘技の安全対策や医療面のサポート、さらに格闘技の正しい技術の指導、普及などに取り組んでいる。
公式HP（準備中。告知用 http://www.inaniwamengayu.com/kakucom/20041022.html ）

格闘技外傷マニュアル

「参考資料：格闘技外傷マニュアル」（格闘メディカル協会作成）

A、頭部に強い打撃、頭部外傷を受けた場合

① 意識のない状態が続いている→救急車で救急病院へ（脳神経外科、救急センターの受診）
② 意識のない状態が数秒で回復した→経過後、試合後に救急または脳外科を受診する。
③ 意識がある→しばらく様子を見る。頭痛、吐き気、意識がなくなる、ろれつが回らない、普段の性格と異なる、忘れっぽい、などの変化が見られた場合はすぐに救急、脳外科を受診する。

「気をつけること」
1　最低でも5〜6時間は選手から目を離さず、一人にしない。
（仲間や家族が時々話しかけて、その反応が正確か否かを確認する）
2　飲酒、入浴は控える。
3　練習への復帰は専門医、指導員とよく相談して、慎重に。

B、打撲、骨折、脱臼、靭帯損傷（疑いも含む）などの場合

①緊急性がある場合
（出血が止まらない、ショック症状（手足が冷たい、呼吸が浅い、震えがある、など）が見られる、骨折部や脱臼部から皮膚が飛び出している、外見上変形が明らか、自分で歩けない、など）
→救急病院へ（生命の危険がある場合、まったく歩けない場合、出血がひどい、ショック症状が見られる、首が折れている可能性がある場合は救急車で。それ以外は車かタクシーで）
② 緊急性はないが、病院での診察を要する場合
→RICE（下記参照）で様子を見て、次の日に受診する
③ 軽症の場合
→RICEで様子を見る

「気をつけること」
1、RICEをしっかり行なう。軽症の場合はこれで治ってしまう。
2、受傷直後は問題なくても、腫れてくる、痛みが強くなってくる、皮膚の色が悪くなってくる、感覚がなくなってくる、そのほか、悪化してくるようなら、救急もしくは整形をすぐ受診する。
3、飲酒、入浴は控える。
4、練習への本格復帰の前にリハビリを兼ねたトレーニングを行なって下さい。

R：Rest（安静）	受傷部を休めます。
I：Ice（冷却）	20分冷やす、40分休むを48時間行なう。
C：Compression（圧迫）	患部を軽く圧迫し、腫れを防ぐ。
E：Elevation（挙上）	患部をなるべく高く保つ。睡眠時は枕、クッションなどの上に置く。

C、内臓損傷（金的を含む）が疑われる場合

・耐え難い痛み　・嘔吐、吐き気　・腹部の痙攣や硬直
・ショック症状（手足が冷たい、呼吸が浅い、震えがあるなど）
・激しい血便　・変形（金的）　・尿の変色（血尿や混濁尿など）
以上のサインが3分以上続く時はすぐに救急病院にかかりましょう。
それ以外の場合は、両膝を曲げて深呼吸し、お腹を休めて様子を見ます。
金的の場合は、変形等がないか本人に確認させ、ただちにアイシングを行ないます。

「気をつけること」
1、食べ物や飲み物は決して摂らない。
2、女性の場合、婦人的外傷（子宮や卵巣）にも注意する。
3、あとから症状が悪化した場合は迷わず病院へ。

D、裂傷（出血を伴う）の場合

① 傷が汚れている場合は水で洗い流します。
② 5〜10分間、清潔なガーゼで圧迫止血します。
③ 消毒液で消毒し、ガーゼ、テープで保護します。
→出血が止まらない場合、傷が深くてくっつきにくい場合は病院へ

「気をつけること」
1、傷が細菌に感染すると危険！　必ず消毒をしっかり行い、清潔なガーゼを使用してください。
2、市販のスプレータイプの傷処置剤は使用しない方が、後々傷の治りがいいようです。

E、その他の場合

ドクターの指示に従ってください。
→途中で悪化、急変のサインが見つかった場合、ためらわずに病院を受診しましょう。

「気をつけること」
連絡先リストを準備し、ジムに常備する（最寄の救急病院とその電話番号を控えておくこと）。
● 平日の日中→脳神経外科外来
● 夜間及び休日→救急センターの受診をすすめます。
（格闘メディカル協会作成「格闘技外傷マニュアル」。—①、②より転載）



は衝撃を予測して筋肉を緊張させて『受け

頭の場合CTやMRIの検査で異常がな

怖い分野だな、と思いますよ」

ちなみに、山口氏のジムでは試合直前の選手以外は打撃のスパーリングは禁止。スパーをやる際も必ず指導者が立ち会うのが規則だ。また、集中力が低下した時に怪我が多くなることから、練習前は必ず全員で黙想をし、集中力を高める。

「規則はしっかりと守って貰いますよ。スパーリングをやりたがる子もいますけど、それは『ダメだよ』と突っぱねます。こっちの管理の問題ですからね。ジムはサークルじゃないんですから」

取材をしていても、総合では特に友達感覚の、サークル的なジムが多いように感じる。同年代の若い指導者のいるジムは、若い会員も入りやすく、明るく、楽しい雰囲気になるのかもしれない。しかし、格闘技は常に危険と隣合わせだ。それだけに練習であっても指導者に「管理する」の意識は欠かせない。総合のジムの若い指導者にその意識はあるだろうか。

医療面から野呂田氏、打撃系指導者から山口氏の意見を聞いた。では総合の指導者は「総合の練習（ジム）」の問題点をどう考えているのか。中井祐樹氏に聞いた。

「総合は良い指導者を育てなくてはいけないと思いますよ。総合は、甘いところがあるんだと思います。多文化を受け入れる土壌なので『これ』という体系が作れていないんでしょうね。もちろんジム単位では『ウチはあります』というところはあるでしょうけど、ジャンルとして、例えば柔道のようにはなっていない。覚えることが膨大なだけにおろそかになりがちな部分もあって、そこに危険性がある、と言えるかもしれないですね」

もちろん、しっかり運営されているジムも多い、と中井氏。例えば「基礎体力」。「修斗のジムの中には体力ごとに『級』を設けて、ある級以上の人でないとスパーリングはさせない、というところがあります。体力のある人の方が回復力がありますし、基礎体力作りは積極的な意味で危険防止に有効でしょうね」

バスターは現在、柔術やアマチュア修斗では禁止技だ。この「バスター」、実は中井氏の造語だという。

「柔術で使って、そこから修斗系のライターの方が使い始めたんだと思います。正式には『スラム』。でもバスターが流行って責任を感じてるところもあるんです。ただ、例えばアローナはジャクソンに持ち上げられましたけど、持ち上げられない技術もあるんですよ。VTは技術ですから」

投げ技の事故は、10月の修斗グラップリングでも起きている。投げを打った際に相手に足を掛けられ、投げた側が頚椎脱臼骨折の怪我を負った。幸い、リハビリによって回復できるものだったという。

「無理な体勢から投げた時、相手がバックを取ろうと足を掛けてきて頭からマットに落ちたんです。柔道では頭からマットに倒れ込んで投げたら投げた方が反則です。柔道も受け身を取り損ねての事故は多いと聞きますから投げの反則は細かいです。投げ技は練習していないと危ないですけど、今回投げたのはパレストラの選手で、彼は柔道二段です。でもあの時は投げるタイミングではなくて、判断を誤った」

本来投げのスペシャリストである選手も思わぬ形で怪我をする。投げ技の危険を認識し、練習する際は細心の注意を払う必要があるだろう。

全体として、総合の練習（ジム）の問題点は「指導者の問題」だと中井氏は言う。

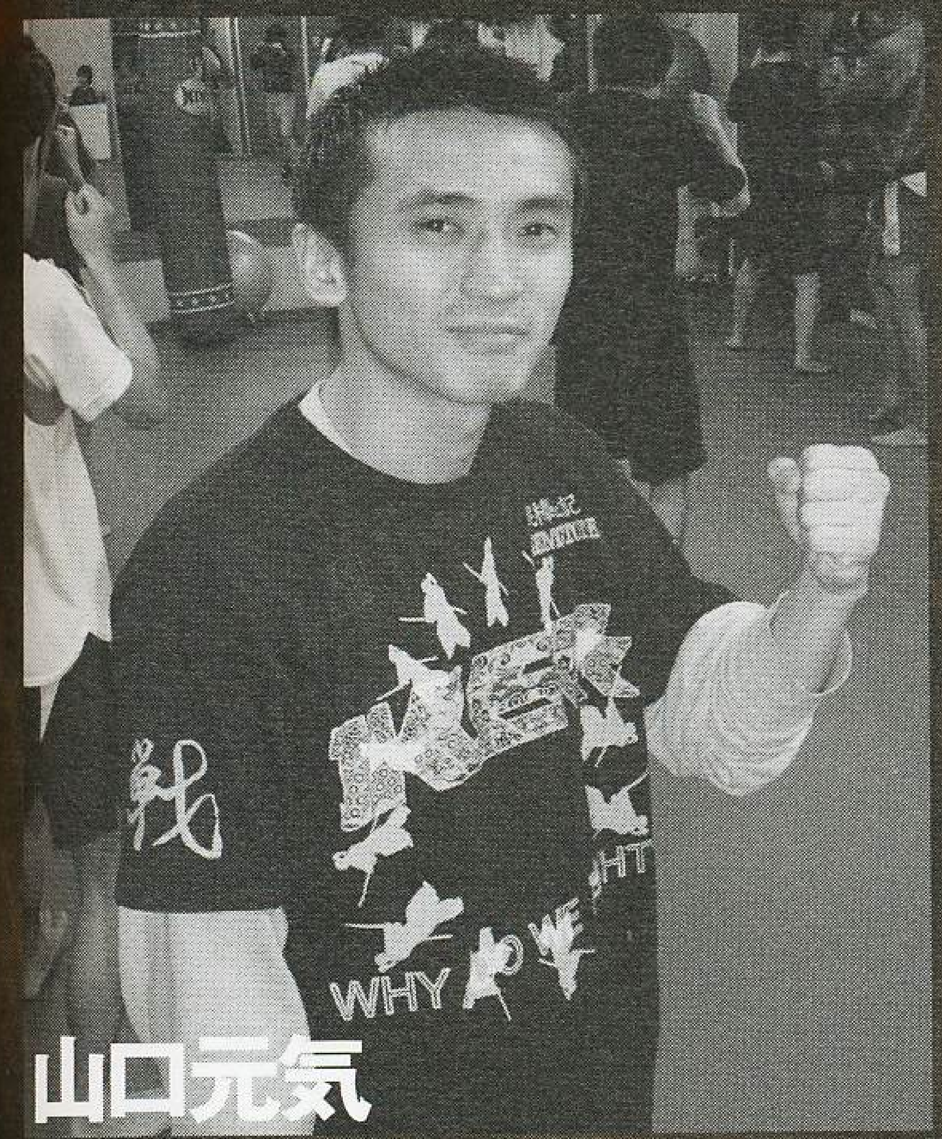
「鍛えた人間でも事故は起こりますから、鍛えていなければ本当に危ないですよ。実際、打撃はできないけどレスリングができるから、と試合をして選手が怪我する例は結構あります。そこは選手本人もそうですけど、指導者の問題だと思います」

これから、現役を終えた選手たちがジムを開き、総合のジムはますます増えることだろう。その時に生き残れるかどうかは、指導者の腕に掛かっている、と中井氏。

「よく技を知らないと指導者にはなれないですよ。これからは『この技を食らうと肩から落ちて怪我をするから、この時は右手をつきなさい』というような細かいことをキッチリと教えてくれる道場に人が集まって、強い人だけを教える道場は持たなくなるかもしれませんよ」

全国に30以上の支部を持つパレストラ。中井氏の言葉には重みがあった。格闘技が普及すれば「自分でもやってみたい」とジムの門を叩く人も多くなる。その時、その人の体力や技術のレベルに合った練習プログラムを提供できれば、練習中の怪我や事故も少なくなり、ジムに人は集まる。「安全」の追求がジムの繁栄に繋がる。それは決して奇麗事ではなく、厳然たる事実だ。

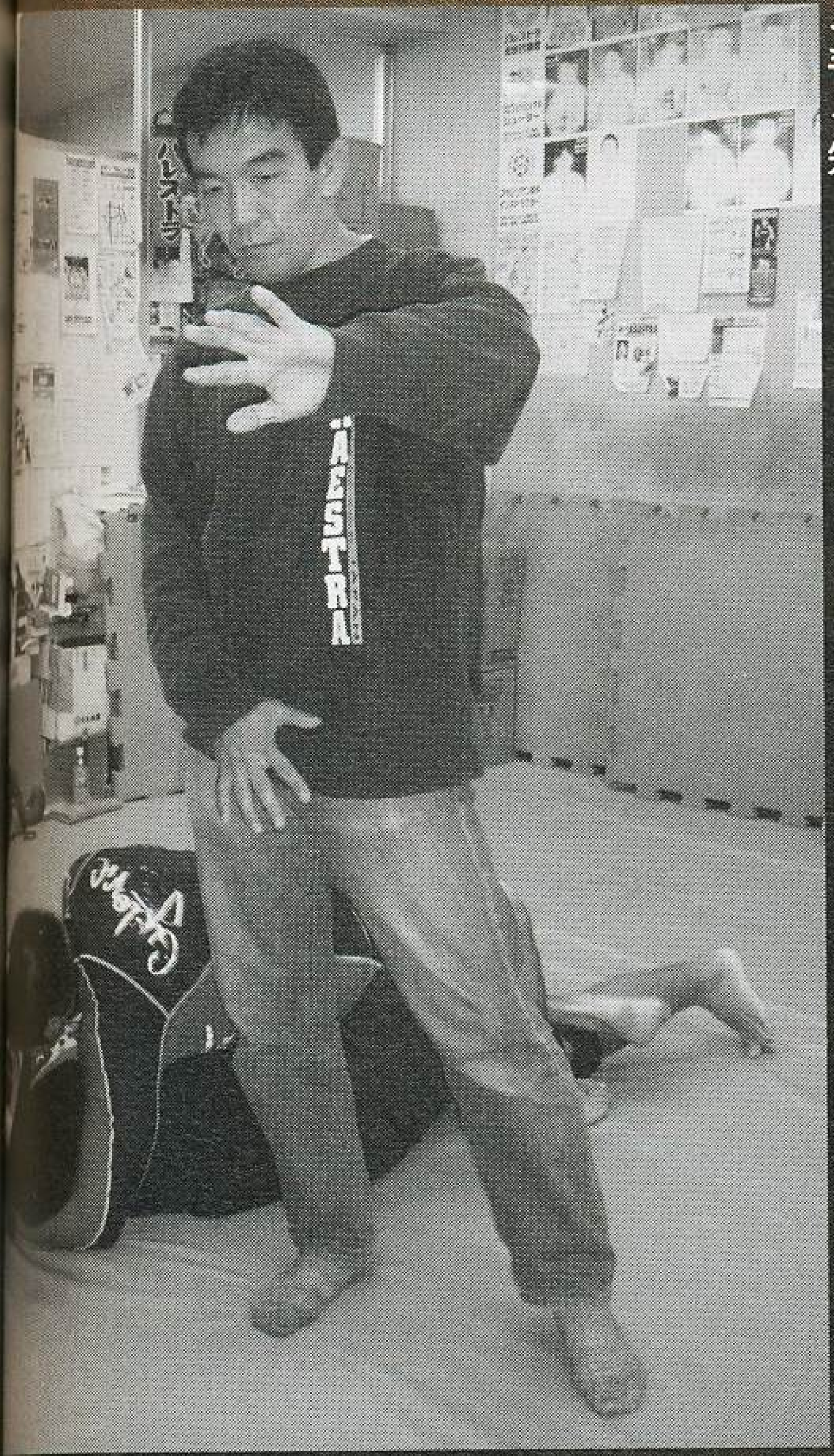
総合には怪我のデータがまだない サークル的なジムが多いし 危険でもやっちゃうから怖い



山口元気

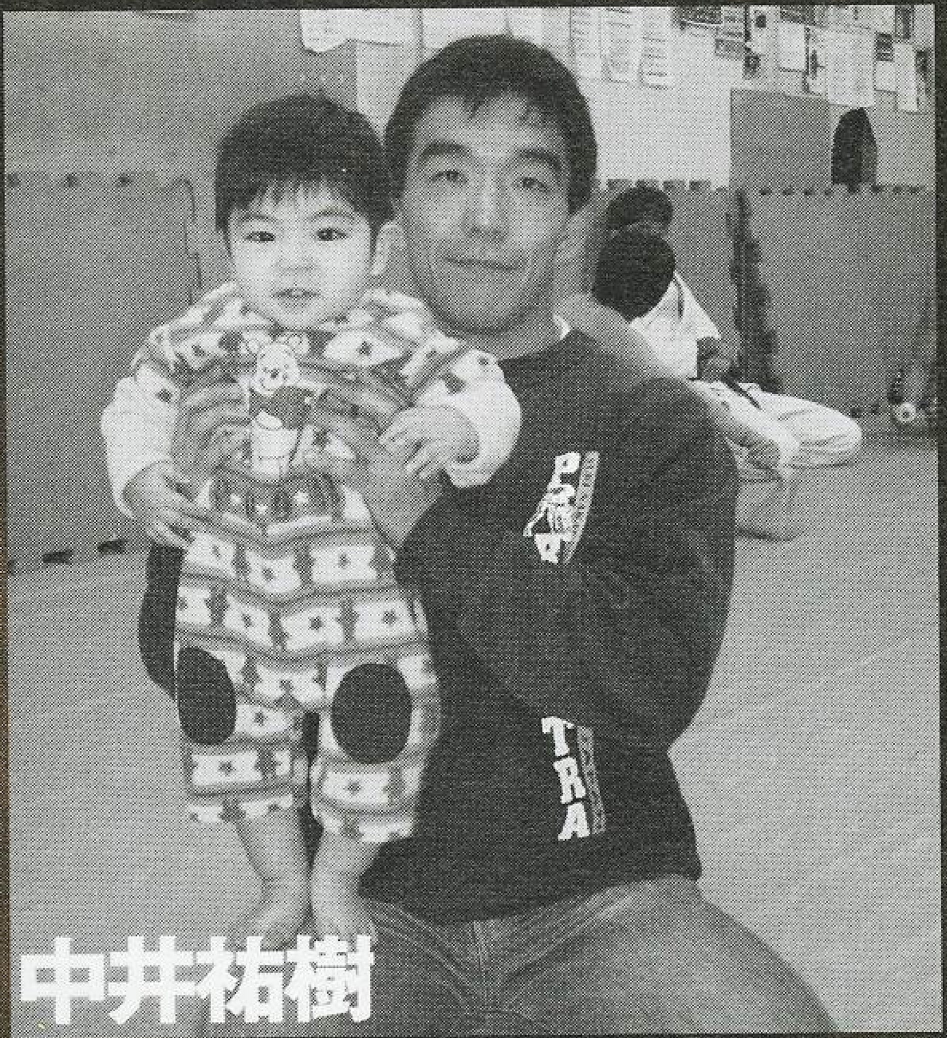
やまぐち・げんき
本名・山口哲央。1970年4月25日、神奈川県出身。88年9月、ＭＡキックでデビュー。95年、ＭＡ日本フライ級王座獲得。98年、ＭＡ日本フェザー級王座獲得。
00年コンバット2000を最後に、対日本人負けなしのまま引退。クロスポイント吉祥寺を設立し、後進の指導にあたりながら、伊藤隆とともに新打撃格闘技「R.I.S.E」を設立。統括プロデューサーとして立ち技格闘技界にニューウェイブを巻き起こしながらも、今秋、突如現役復帰を表明。11月のIKUSA にて4年ぶりに現役復帰を果たす。戦績40戦23勝15敗 2 分。

クロスポイント吉祥寺
03年設立。打撃も総合もレスリングも学べるジム。04年に「スクランブル渋谷」がオープン。20代の会員と若い指導者の下、活気のあるジム。
公式HP●http://www.shibukichi.com/



スパー中、間に入る時の姿勢。右手で金的を守り、左手で飛んでくる足をブロック。こうした基本を知らない人も多いのでは？

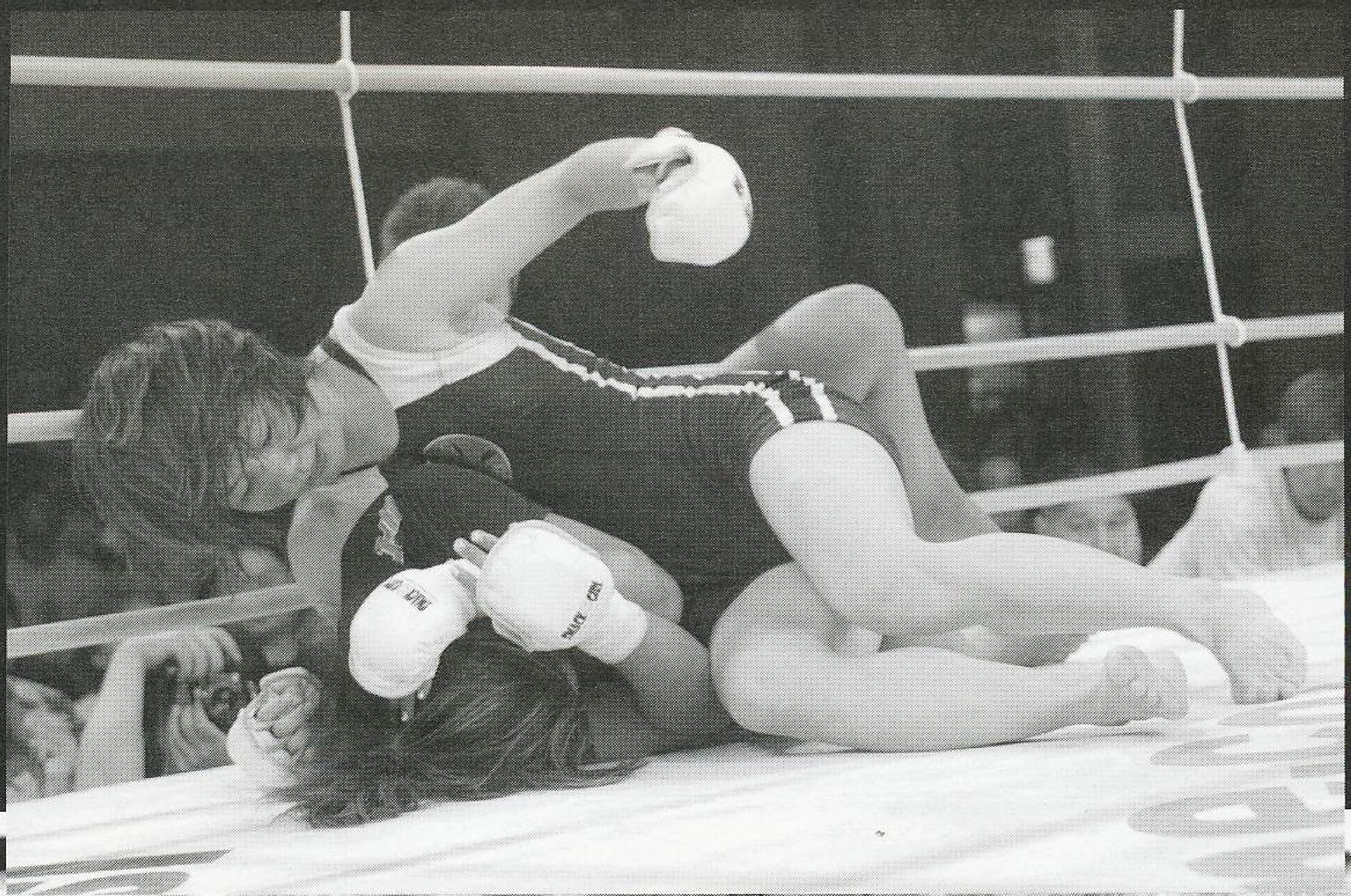
総合は良い指導者を育てないと これからは細かい技術をキッチリ 教える道場に人が集まると思う



中井祐樹

なかい・ゆうき（左は三男・重昭君）
1970年8月18日、北海道出身。高校時代はレスリング、北大では高専柔道の流れを汲む七帝柔道で活躍。93年、プロ修斗デビュー。95年、第3代プロ修斗ウェルター級王座獲得。同年のバーリ・トゥード・ジャパン・オープン95では決勝でヒクソン・グレイシーに敗れて準優勝。同大会で右目を失明し、修斗を引退。96年、ブラジリアン柔術に転身。98年パンアメリカン選手権アダルト茶帯ペナ級優勝、99年ブラジレイロアダルト黒帯ペナ級3位。現在は日本ブラジリアン柔術連盟会長を務めながら、選手として「ムンジアル（世界選手権）優勝」に向けて研鑽を積む。

パレストラ東京
97年開設。会長・中井祐樹、番頭・若林太郎。日本柔術界のベースキャンプ。昼間の「昼柔術」から夜間のクラスまで活気に満ちている。
公式HP●http://www.paraestra.com/
（「SHOOT　NEWS」とアマ修斗、柔術大会に追われる若林氏の多忙すぎる日常は必見）



Gachinko Column
[総合格闘技の現在を考える]

ガチコラ! vol.2

ファイターズ・ハイvsライターズ・ハイ

「松本さんは、どうしてそんなに女子格闘技が好きなんですか」

関係者や選手からよく聞かれる。彼らの想像による「松本さんがジョシカクを好きな理由（わけ）」ナンバー1は、「レズだから」だそうだ。

残念ながらレズではない。長い人生の間には、そういう経験も必要なのだろうか。そのほうが人間の幅が広がるのだろうか。時々考えたり、またごく稀に想像してみたりもするが、私のつたない想像力では限界があるようで、リアルな映像が思い浮かばない。多分、同性愛の素養はそんなにないと思う。

ではなぜ私は女子格闘技を見続けてしまうのか。自分でもよく分からなかったのだが、先日ある女子格闘家と話をしていて「なるほど、そういうことかもしれない」と思い至ることがあったので、その話をしてみたい。

ある女子格闘家とは、初代女子ボクシングフライ級王者の八島有美。ボクシングと平行して、打撃あり寝技ありの格闘空手・大道塾にも籍を置いているので、このコラムで取り上げてもいいだろう。

今年5月に行われたフライ級王座初防衛戦で2分10Rを闘い抜いた末に判定で敗れた八島は、試合後に控え室で意識を失い、病院に運ばれた。診断の結果は「急性硬膜下血腫」。緊急開頭手術により一命を取りとめ、その後驚異的な回復力で以前と変わらぬ生活を送れるようになった。だが、脳に関わる負傷だけにボクシングの試合はもうできない。

八島は激しく落ち込んだ。手術でお世話になった人や迷惑をかけた人に、すぐにでもあいさつに行かなければならなかったが、「ボクシングが駄目だったら、次はどうするの？」と聞かれるのが苦痛で、どうしても周囲に連絡を取ることができなかった。「24時間ボクシングのことしか考えてこなかった」八島に、次の選択肢など考えられるはずもなかった。

私のところに連絡が来たのも、手術から4ヵ月が経った頃だった。

「それにしても、ボクシングのどこにそんなにまで惹かれるの？」

「次の人生」についての話題を避けるために、私は何気なくそんな質問をしてみた。すると八島は、答える代わりに、1本のＤＶＤを私に貸してくれた。『ピンポン』という映画だった。

「この中で、卓球の試合中に『真っ白』になる場面があるんです。そこを見てほしいんです」

八島のいう『真っ白』の場面は、映画のクライマックスにあった。窪塚洋介演じる主人公のペコと、中村獅童演じるドラゴンが、卓球のインターハイで壮絶な打ち合いを演じるシーン。自分が打ち上げた球をドラゴンが呆然と見上げた瞬間、ペコとドラゴンと卓球台と打ち上げられた球以外、すべての風景が消える。無色無音の世界。すべての雑念が消え、闘いに集中する2人の、浄化された魂だけが浮遊していた。真っ白な中に佇みながら、ドラゴンがしみじみと言う。「楽しかった。ここは、いい―」

この場面を見ながら、私にも似たような経験があることを思い出した。原稿を書いているうちに周りの雑音が消え、考えるより先に勝手にペンが動いていく。頭が完全にイっちゃってしまい、強烈な快楽で全身がシビレる。いわゆる「ライターズ・ハイ」の状態だ。

あの感覚を毎日味わえるなら、私は悪魔に善良な魂を今すぐ売るし、余命5年、いや3年と神に宣告されても、迷わず書くことの方を選ぶだろう。あれに勝る快楽などないからだ。だが残念なことに、私は今まであの感覚を3回しか味わったことがなく、しかも一度目は小学生、二度目は高校生の時で、ライターになってからは一度しかない。

「無心になる」ことの快楽を一度でも味わったら、ほかに欲しいものなんて何もなくなる。ましてや大好きなボクシングで、何度となく「ファイターズ・ハイ」の真っ白な境地に達している八島にとって、その道を突然断たれることは、もしかしたら死ぬよりも辛いことなのかもしれない。『ピンポン』の真っ白なシーンを何度もリピートしながら、今さらながら私は、八島の現在の苦痛を理解したのだった。

そしてもう一つ理解できたことは、私が女子格闘技を見続ける理由だ。それは「彼女たちの『無心』を見たい、感じたい」ということに尽きる。スマックガール8月大会のエリカ・モントーヤ戦で、辻結花は怒とうのパウンド攻撃を見せた。あとで聞いてみると「別にパウンドをやろうとしたわけじゃなくて、勝手に体が反応してしまった」という。女子格闘技史上屈指の名勝負といわれたあの一戦で、辻も『真っ白』の感覚を楽しんでいたのだろう。

私は女子格闘技が好きなのではない。同性で「無心になる」ことを存分に味わっている彼女らがうらやましく妬ましく、いつか自分も味わってやると気合いを入れ直すためにも、見続けることが必要なのだ。

いつか彼女たちの『無心』の情景を、彼女たち以上の『無心』で書き切れたら最高だろうなあ。そう思いながら、いつもいつもただ、見ているのである。

松本幸代　1967年神奈川県横須賀市出身。映像ディレクターを長らく経験し、03年より本格的にライターに転身。所属するFUSEのHPで、くだらない日常コラム「眉間にシワ」を連載中。

今成正和

Masakazu Imanari

足関十段の正体

地を駈けるようなスライディングから、まるで蛇のように相手の足に絡みつき、瞬時にして足関節を極めてしまう男。職人を思わせる風貌と鋭い眼光を持ち、他者を寄せ付けない雰囲気を持っているが、話し始めると意外にも気さくな一面が…。

熊久保英幸＝取材・文
text by Hideyuki Kumakubo

佐藤　朗＝撮影
Photo by Akira Sato



「足関にはそれほど、こだわりはないっス」

坊主頭に顎髭を蓄え、切れ長の目には鋭い眼光が宿る。もし、知り合いでなければ話しかけるのをためらってしまうタイプかもしれない。実際、見た目と話した感じがだいぶ違うとよく言われるらしい。

おまけに無口だ。今回の取材前、今成は12・18DEEP参戦発表の記者会見に出席した。会見後、記者が囲んでの取材を受けたが、「何でもいいです」「興味ないです」「たぶん」…彼が口にしたのは、その程度のコメントである。かと言って、無愛想なわけではない。ひとこと答え、沈黙が生まれる度にニンマリと笑って〝何でも答えますよ。どんどん聞いて下さい〟という風に記者たちを見回すのである。

会見終了後、チームメイト兼マネージャー的役割の鬼木貴典は「今日は頑張ったなぁ。よく喋った」と今成を褒めた。本人もそれを聞いてニンマリ。「いつもこんな調子ですよ」と鬼木は説明してくれた。

今成は高校を中退している。理由は「勉強が出来なかったから。ペンを持っていると手が痛くなる」からだ。煙草は吸っていたが、不良だったというわけでもなかったらしい。ひとことで言うと「だらしなかった」のだという。

学校を中退してからも、別に何をやるわけでもなかった。家で寝てるか、ゴロゴロしたりする、無駄に時間を過ごす毎日。唯一、125ccのバイクを手に入れて160kmのスピードで飛ばしている時には気持ちよさを感じたが、それも特にムシャクシャするなどの理由のある行為ではなかった。

「やりたい事が見つからないと言うより、何にもしたくねぇと思ってました。とにかく無気力。将来どうすんのかなって思うこともあったけど、まあなんとかなるだろうって。未来に希望が見えない感じでした」

それは今も変わらないけど、と今成は笑う。現在でも趣味はない。夢中になれるのは練習と試合だけ。無気力状態を救ったのは、まさにその格闘技だった。

「兄さんが好きで、一緒になって見てたんですよ。雑誌とかも兄さんが買ってきたのを読んだりしてた。それで、二人でプロレスごっこをしたりしてましたね」

Agglutination game ?

A guard position is considered.

好きだった選手はヒクソン・グレイシーだ。試合には魅力を感じなかったが、佇まいが好きだったという。それほど大きくない身体で、デカイ相手を倒すのが気に入っていた。だからと言って、それが格闘家を目指す動機だったわけでもない。

「結局、今もプロレスごっこの延長ですよ。やっている内に、勘違いが始まったんです。俺も同じくらい強いんじゃん、俺もまあまあイケルんじゃないのって思い始めた。昔から、根拠のない自信だけはあったから」

気分だけはヒクソン・グレイシー。じゃあ、やってみるかという事で、当時話題になり始めていた修斗のジムに行った。

「打撃は痛そうだったんで、組み技ならプロレスごっこと見た目が変わんないから俺にも出来るだろう、と。あとバリジャパ（バーリトゥード・ジャパンオープン）とか見に行って、〝シューティングってスゲェじゃん〟って思ってたから。それでジムへ見学に行ったんだけど、なんか感じ悪くて（笑）。やっぱりやめた」

どうしようかと思っていた時に、父親の知り合いに紹介してもらったのが元プロレスラーのユセフ・トルコ。それからさらに、UFO旗揚げを前にした佐山聡を紹介してもらった。今成が20歳を迎えた頃である。目黒に出来たばかりのUFO事務所へ行き、総合格闘技をやりたい旨を伝えると、佐山は後日また連絡をくれると言う。言われたとおり電話すると、今度はキックボクシングの藤原ジムへ来てくれという事になった。

いよいよ入門テストか。今成は気合いを入れてジムへ向かった。基礎体力の運動をたっぷりとやらされ、キックミットを構えて佐山のソバット（後ろ蹴り）を何発も受ける。まるで交通事故に遭った様な衝撃が走り、全身に痛みが残った。一通り終わったところで「じゃあ入会金は幾らだからって言われて、〝あ、そうすか〟ってとりあえずお金を払った（笑）。疑問には思ったん

ですけど、そういうもんなんだなってジムの会員になって通い続けました」と、まるで冗談のような格闘技人生のスタートを切る事に。

何かおかしいなと思いながらも、ミットを蹴ったりシャドーをしたりと、やりたい事と全然違う事を続ける毎日。しかし、ここでも"まあ、しょうがねぇか。なるようになるだろう"と思っていた。UFOはまだ旗揚げ前だったので、格闘技をやるのかプロレスをやるのかも分からなかったし、佐山が一時期提唱していた新格闘技大会『アルファ＆オメガ』に出場できるものだと信じていたのである。ところが、いざUFOが旗揚げ戦を行うと、"これは違うぞ"という事にやっと気づく。

そんなある日、藤原ジムで入江秀忠と出会った。あいつは総合をやってるらしいよ、とジムの先輩から聞いていたので、さっそくスパーリングを申し入れる。スパーを終えると、総合の練習に来ないかと誘われた。行くことにした最大の決め手は、入会金も月謝も払わなくていい事であった。

99年8月10日、入江が旗揚げしたキングダム・エルガイツでデビュー。アマチュアルール2戦を経て、翌年6月にアマ部門のミドル級トーナメント優勝。

このまま総合インディー団体で埋もれてしまえば、今の彼はなかったかもしれない。しかし、"組み技の試合をやりてぇな"という気持ちが、コンバット・レスリングへの出場を決意させた。00年3月の大会に初出場し、69kg級で阿部和也に敗れて準優勝。"やっぱり俺って強ぇえ"と思い、翌01年3月には76kg級で決勝まで勝ち上がり、あの佐藤ルミナと対戦する。2分33秒、チョークスリーパーで敗れたが、ルミナをして「強い、本当に強い」と、当時はアマに毛が生えた程度の存在でしかなかった今成が言わしめた。これで今成正和の名は、格闘技界に知れ渡る事になった。

この頃からである。"足関十段"の異名で呼ばれるようになったのは。ヒールホールド、アンクルホールド、アキレス腱固め…足関節技で一本勝ちを奪いまくる彼に、そのニックネームを名付けたのは同じキングダムの稲野岳だった。練習でも足関ばかりやっていたからだ。

「足関十段、いいじゃないですか。覚えてもらいやすいしね」と言う今成だが、なぜそれほど足関に拘るのかと聞くと、意外な答えが返ってきた。

「好きは好きですけど、そんなに拘ってないっス。拘りはないですね。何でやってるのかといえば、一番簡単だから。ポジションいらないじゃないですか。みんな頑張ると、なかなかポジションを取らせてくれない。そうなると足関しかないんですよ」

たったそれだけ？　今成はうーんとしばし考えて、一つの答えを導き出した。

「プロレスごっこの時から、足関ばかりやってましたね。何でかというと、やっぱりシューティングを見ていたから。佐藤ルミナ選手に影響を受けたからかな。ヒールホールドっていうイメージがあるじゃないですか。凄いなと思ってましたよ。うーん、そうですね、ルミナ選手は好きでした」

人生で他人に影響を受けたのは、2度目。パンテラというバンドのボーカリストが坊主だったので、それをカッコイイと思い自分も坊主にした15歳の時以来だった。

01年8月、名付け親の稲野をアンクルホールドで破って今度はプロのミドル級トーナメント優勝。同年11月にはバレット・ヨシダとグラップリングルールで対戦し、チョークスリーパーで敗れる。この試合を最後に、世界の広さを知った今成はキングダムを離脱、コンテンダーズ、ブラジリアン柔術、パンクラス、そしてZSTへと闘いの場を移して行く。

足関十段——その名を知らない者は、もはや格闘技業界には存在しない。それだけに、対戦相手は皆、足関を警戒して来る。それでも狙い続けるのはなぜだろう。

「いくら警戒していても、取れる時は取れるもんですよ。それに、足関が来ると分かっていても、取れるぐらいにならないとダメなんじゃないかなって思う。それが本当の必殺技でしょう。別に足関を極（きわ）めたいと思ってるわけでもないけど」

今成の答えは正直だ。足関ばかりがクローズアップされるが、彼のグラップリング技術で素晴らしいのはなにも足関ばかりではない。下からの腕十字、三角絞めなどは足関に勝るとも劣らないスピード、切れ味がある。『PRIDE武士道』で、トリッキーな足関が極まらないと見るや、今成は下からの腕十字を仕掛けた。ルイス・ブスカペが、以後は全く寝技に行かなくなったという事実を見ても、彼の足関以外の技術もブラジリアン柔術の強豪をたじろがせるに充分なレベルにあることが分かる。

「その時々で、得意技が変わっていくんですよ。だから自分では"足関が得意"っていう意識はない。だって、練習でも足関の巧い人とやると、極められたら痛いし自分がタップしますもん（笑）。十字でも三角でも、1回取れるとそればっかりやってしまうんですよねぇ。今は"飛び付き三角"と"飛び付きオモプラッタ"にハマってますね。成功すると気持ちいいんですよ」

飛び付き系の派手な技を練習しているのは、プロとして面白い試合を見せるためかと思えば、そうでもないらしい。つまらない試合をやってでも勝とうとまでは思わないが、試合の目的はあくまでも"気持ちよさ"。そう、バイクで時速160kmで走り回っていた、あの時のように。

「正直言って、お客さんの事は意識しないですね。自分さえ気持ちよければいい。でも、気持ちよくなるためには一本で極めないといけないから、結果的に一本を取れば面白くなるんじゃないですか？　そのためには動き回らなければいけないし。自分にプロ意識はないと思いますよ、多分」

とにかく組み技が好き、と言う今成にとって、避けては通れないのがブラジリアン柔術の存在だ。03年には単身ブラジルへ渡り、マルコス・バルボーザの道場で1ヵ月間練習を続けた。この時、茶帯・黒帯の道場生たちを次々と極めまくった伝説は有名である。最終日にはバルボーザに「帯をちょうだい」とおねだりすると、帯を作る工場へ連れて行ってくれて、その場でいきなり茶帯を手渡された。

「尊敬する人はバルボーザ。強いのに、えばらないところがいいですね。現役でムンジアル3位になったやつとかよりも、全然強い。スパーしても何にもさせてもらえないんですよ。強さの意味が分からない。あれこそ達人ですよ。意味が理解できないって事は、俺がその地点にまで到達していないっていう事ですからね。ブラジルは楽しいですよ、出来る事なら移住したい」

柔術は好きだけれども、引っ繰り返すためやポジションを取るためにやっているのではない、と今成は言う。あくまでも自分は、極めるためにやっているのだと。つまり、自分が気持ちよくなるためにだ。だから柔術の試合に出ても、1分1秒でも早く極める事しか考えないので、普段の練習ではやっているポジショニングをする間も惜しみ、極めに行くのが今成の柔術である。

気持ちよかったな、またあの気持ちを味わいたいなと思い試合をする。その繰り返しが彼を動かす原動力。無気力だった少年は、格闘技に出会って目標となるものを見つけたのだ。そしてもうひとつ、現在の目標がある。それは「超人」になる事。デカイやつにも極めて勝つ、そんな男になりたいのだと今成はニンマリと笑った。

軽くてもデカイやつを極めてしまう、そんな「超人」になりたいと思っている。



Masakazu Imanari
いまなり・まさかず
1976年2月10日、神奈川県出身。
身長165cm、体重67kg。キングダム初代ミドル級王者。
TEAM ROKEN所属。







ガチ!MAGAZINE vol.1 ¥980

コンテンツ:ミルコ・クロコップ、エメリヤーエンコ・ヒョードル、アントニオ・ノゲイラ、ヴァンダレイ・シウバ、近藤有己、BJペン、ジョシュ・バーネット、クリス・ドールマン、佐藤ルミナ等インタビュー。また、谷川貞治インタビュー、ブラジルVT黎明期、ここが変だよ日本格闘技界など、異色企画満載。

お詫び
一部広告において、桜庭和志選手、ディック・フライ選手、ウラジミール・パコージン氏等の記事が予告されていましたが、スケジュールの不都合により取材ができませんでした。ここに深くお詫びします。

ガチンコ★LOVE

PRODUCER
Ken Sawada

EDITOR
Ken Sawada
Shotaro Suzuki

WRITER
Koichi Warag
Manabu Takashima
Arnold"Sushiboy"Lim
Aya Yokomori
Eitetsu Hasegawa
Harunari Lee
Hidetoshi Matsuura
Hideyuki Kumakubo
Hinerin
Ikuo Higuchi
Koji Shigeta
Marcelo Alonso
Mika Anezaki
Shuji Tanaka
Tadashi Tanaka
Yukiyo Matsumoto

DESIGNER
Zapp!
Masayuki Shirogane
Yukinori Hidaka
Hideyuki Kaise
Ryu Sakai
Ryo Ohi
Ken Suzuki
Hiroyuki Yamagata

Special Thanx to Nippon Sports Publishing

発行人:豊島誠志
編集人:沢田建
発行・発売:インフォレスト株式会社
〒162-0825
東京都新宿区神楽坂6-59
tel:03-5229-4616(営業)
03-5229-5726(編集)
03-5229-4351(広告)



柔術王　¥1260

コンテンツ:アントニオ・ノゲイラ柔術愛を語る、ヴァンダレイ・シウバ黒帯昇格記念、ブラジリアン柔術黎明期、中井祐樹、ノヴァウニオン、エディ・ブラボー、JJマチャド、フェルナンド・テレレ、マルセーロ・ガウッシア、ヒカルド・デラヒーバ等。テクニックも満載。

[BACK NUMBERのお知らせ]

「ガチ!MAGAZINE vol.1」「柔術王」をお求めの方は、お近くの書店で御注文いただくか、amazon.co.jp などインターネットでご購入ください。

[スタッフ募集]

当編集部ではスタッフを募集しています。興味のある方は下記メールでお問い合わせ下さい。経験者、未経験者、ともにお待ちしております。件名は「スタッフ募集」として下さい。
gachi@infor.co.jp

①リオデジャネイロ、フラメンゴ地区にあるノヴァウニオン本部アカデミーを背景に、今現在リオで練習している精鋭が、勢ぞろい。左からセルジオ・ジャバ、マルローン、ジョゼ・アルド、マルコ・ロウロ、レオ・サントス、アンドレ・ペデネイラス、ビトー・シャオリン・ヒベイロ、ダニーロ・シェアマン、ルイス・フェルナンド・ピンポーリョ、ペテウソン・メーロ、ハファエル・カリーノ。②03年7月に辻結花を下しているアンナ・ミッシェル・ダンテス。ＣＢＪＪＯ系最強の女子柔術家。③ＢＪ・ペン。ＵＦＣウェルター級王座獲得も、Ｋ－１ROMANEＸ出場によりタイトル剥奪。自らのファミリーが仕切るランブル・オン・ザ・ロックもＫ－１ネットワーク入り。今後は日本でのファイトも増えそうな、ＭＭＡ界のパウンド・フォー・パウンド。④修斗ウェルター級世界王者シャオリン。総合戦績は10戦10勝。通の間では世界最強の70kgと称されている。⑤柔術界のパウンド・フォー・パウンド＝レオ・サントス。ブラックベルトＧＰ70kgのチャンピオンベルトが、道衣に新鮮。⑥アリソン・キキ・メーロ。マナウス出身、リオグランデドノルチ州ナタウ在住のガロ級世界最強の男。04年3月に生まれ故郷で待望のＶＴデビューを果たした。


②

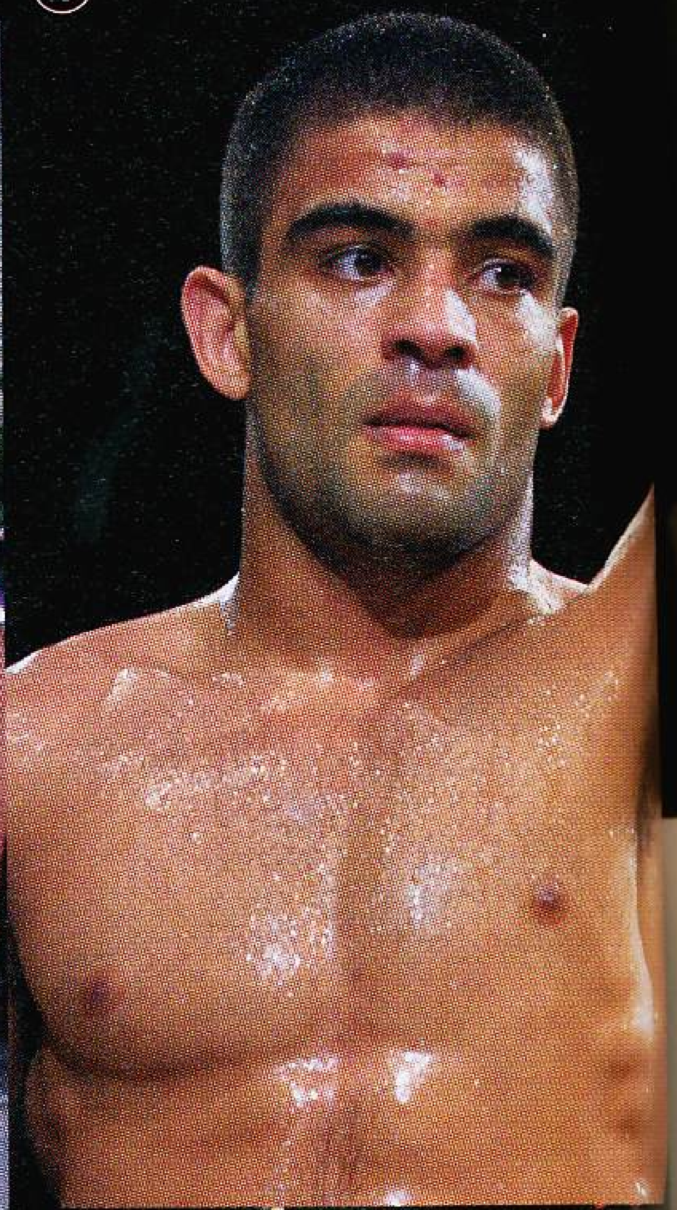

③

The way to choose

It stands on crossroads.

An original way is progressed.


①


④


⑤

ノヴァウニオン、その強さの秘密

柔術、総合格闘技、世界最強を自認する最強集団の陰に智将アンドレ・ペデネイラスあり。


⑥

56kgから77kgに掛けて、ノヴァウニオンは柔術、そして総合格闘技を完全に支配している。BJ、シャオリン、ホビーニョ、レオ・サントス、シャルートを生み出したその強さの秘密とは？なぜ、柔術の強さをそのまま総合に持ち込むことができたのか？その成り立ちを振り返りながら、ノヴァの総帥アンデレ・ペデネイラスに疑問をぶつけた

text by Koichi Wara, photo by Marcelo Alonso, Manabu Takashima & Tyrone
Special thanx to Mr. Joao Carlos Kuraoka





世界に広がるノヴァウニオン。ハワイに一大拠点を作り上げたヘナート・シャルート・ベリーシモ(左)。UFCウェルター級トップコンテンダーの座を掴んだが、今後の目標はやはり日本上陸になりそう。
デンマークのコペンハーゲンにあるミケンタ・ジム内で柔術クラスを受け持つイラン・マスカレンニャス。スカンジナビアの柔術大会でも優勝するなど、現地に馴染んできた。

ノヴァウニオン――。PRIDEファンにはまったく知られていない（かもしれない）し、専門誌にも大きく取り上げられる機会は少ない。未だに『ノヴァユニオン』と誤って書かれたりもする。だが、軽・中量級に関しては、世界の頂点に立つ柔術家&バーリトゥーダーを揃えた最強軍団であることは疑いない。

まずは簡単に現在のノヴァの柔術、総合（VT）の概況から説明しよう。

柔術においては、カーロス・グレイシーJr会長の国際柔術連盟（CBJJ）から、02年に独立。CBJJOを旗揚げしたノヴァは、96年から続く世界選手権（ムンジアル）の向こうを張り、もう一つの世界選手権（コパドムンド＝ワールドカップ）を毎年開催している。

柔術側のエースは、レオ・サントス。長い手足から繰り出される芸術的なスイープは見る者を魅了してやまない。04年6月、CBJJを代表する強豪アカデミー＝グレイシー・バッハのマーシオ・フェイトーザ&フレジソン・パイシャオン、BTT所属ムンジアル&コパドムンド2年連続統一王者マリオ・ヘイスらが出場した70kg世界一決定戦と謳われたプロ柔術「ブラックベルトGP」で、サントスは並み居る強豪を相手に、1ポイントも献上することなく見事に表彰台の頂点に立っている。

あのBJ・ペンも、ノヴァが輩出した事実を忘れてはならない。ノヴァウニオン・ハワイのヘナート・シャルート・ベリーシモに学び、その後ブラジルの本部道場で修行を続けたペンは、00年、非ブラジル人として初めてムンジアルの黒帯世界王者になり、総合格闘技へ転進したのだ。

総合においては、修斗世界ウェルター級王者ビトー・”シャオリン“・ヒベイロが、磐石の安定感を示している。五味隆典からタイトルを奪ったヨアキム・ハンセンを相手に、03年暮れに肩固めで完勝。その圧倒的なグラウンド技術は他を寄せ付けない。多くの柔術家が不得手とする立ち技でも、打撃の間合いを殺してのテイクダウンに長けるシャオリンは、70kgではプロモーションの枠を超えて世界最強の選手だろう。

その他にも、ジョン・ホーキ、”ホビーニョ“（ホビソン・モウラ）、マルコ・ロウロといった修斗を主戦場にしている彼らは、いますぐにでも各階級でタイトルを奪える位置につけている。

にもかかわらず、彼らを正当に評価しないのは日本のメディアだけではないらしい。

「ブラジル国内のメディアは、あまり軽量級を扱わないのです。彼らはブラジリアン・トップチームとシュートボクセしかないと思っています。世界的に見てもランキングに入っているアカデミーはノヴァなのに。『グレイシー・マガジン』のランキングなんて、ブスカペのほうがシャオリンよりも上なんですから…」

――それは、日本でも重量級のほうが注目を集めるし、ビッグビジネスですから…。

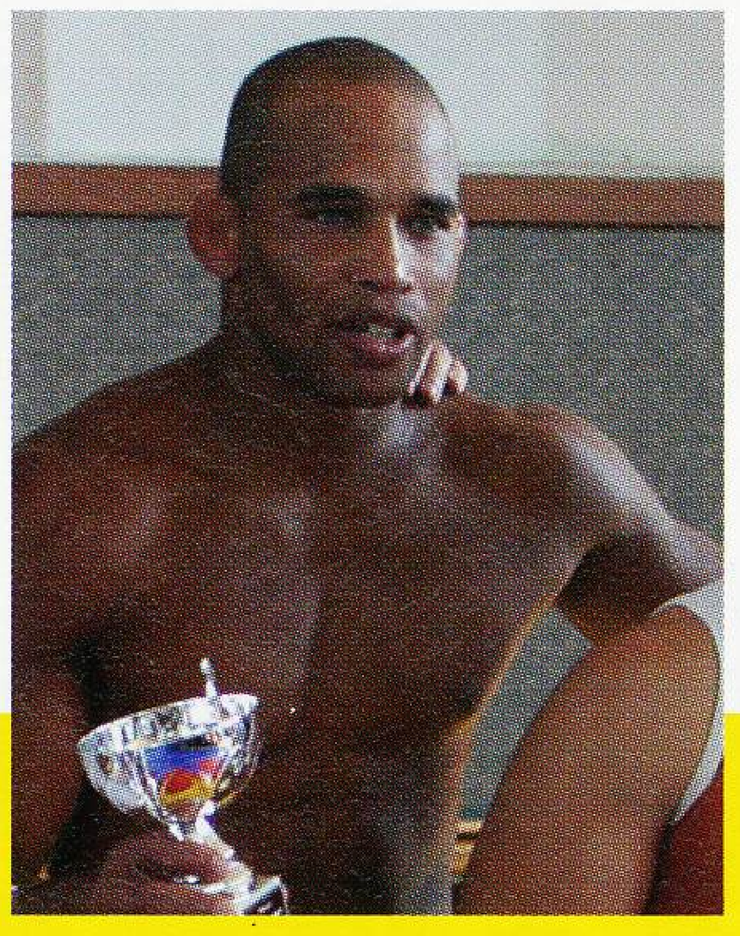
「でも、例えばシュートボクセにはシウバ以外に誰がいますか？」

――ニンジャ、ショーグン…。

「でも、アブダビコンバットやMMAウィークリーの世界ランキングには、どちらも入っていない。ノヴァなら70kgはシャオリン、77kgはBJ・ペン。シャルートも世界ランキングに入っていますね。ジョン・ホーキは世界ランキングでは4位、ロウロも入っている。ホビーニョの階級（56kg以下）にはランキングはないけど、でも実質1位じゃないですか」

取材中、ノヴァの創始者である”デデ“ことアンドレ・ペデネイラスは、何度もアカデミーに対する不当な扱いを嘆いていた。

カーウソン道場から独立 95年にノヴァを旗揚げ



ノヴァウニオン・イタリーを司るファブリシオ・ナシメントは、欧州総合シーンで8勝1敗の戦績を誇るホドリゴ・フェイジャォンの教え子

現在、ブラジル国内に50の支部を持ち、米国、カナダ、豪州、イタリア、ポルトガル、デンマーク、日本と海外支部も「15、16ぐらい」あるという。

その世界的な規模に比して、リオのフラメンゴ地区にある本部道場は、どうにも垢抜けしない。もともとブラジルでは柔術というスポーツは中産階級以上の間で行われていたが（道衣も多くの者にとっては高価だ）、その中でノヴァはどちらかといえば経済的に恵まれない者が集まっていた。また、月謝を払えなくても、情熱のある者には支払いを強制してこなかった。

その現場責任者が、デデだ。日本人が彼を初めて知ったのは、96年7月のバーリトゥードジャパン（以下VTJ）。『ルイス&ペデネイラス柔術』が来日したことによってだった。当時、連勝街道中のルミナはルイスにボコられ、他の外国人に朝日昇やエンセン井上も完敗。”日本最弱“とマスコミに書かれるなど、この年のVTJは格闘技ファンに強い衝撃を与えた大会だった。

デデ自身も選手として参戦を果たした98年10月のVTJでは、いきなりルミナにTKO勝ち。翌99年に同じくVTJで宇野薫とドロー。その後は、船木×ヒクソン戦が行われたコロシアム2000において、須藤元気に引き分けた。この3試合が、デデの日本における全戦績だ。

もう少し、ファイターとしての源流を辿ってみよう。柔術家としては、98年のワンマッチを最後に引退したデデだが、彼がもっとも活躍していたのは、少し時代を遡る柔術創成期。ブラジレイロ＝ブラジル選手権もムンジアルも始まる前、まだもっとも大きな大会が『カンパニー』（柔術系ブランドが主催する大会）だった頃だ。このカンパニーでデデは青→茶→黒と帯の色を変えながら3度優勝したという。

「当時の私はプルーマ級（61kg未満）でしたが、その階級の中では力が強かったほうだと思いますね」

デデの最初の師は、ヒクソンの弟子であるホドリゴ・ヴィエイラだった。ホドリゴはリオのカーウソン・グレイシー道場の空き時間を借りてクラスを設けていたが、やがて事情によりリオを離れることになる。

「そのとき私は茶帯で、大会でも活躍していたので、『そのままウチで練習しなさい』

とカーウソンから言われたんです」

それが86年頃のこと。リオのコパカバーナに一つしかなかったカーウソン道場で、ペデネイラスは指導も始めた。その後、『アンドレ・ペデネイラス柔術』として独立。選手の貸し借りをする仲であったヴェンデル・アレッシャンドリとの交流が盛んになり、ノヴァウニオン（新連合）を旗揚げすることになった。

「当時はカーウソンやバッハといった20年以上前に結成された大きなチームしかありませんでした。単独のチームでは対等に戦えなかったけれど、お互いの選手が足りないときに貸し借りしてチームを合わせると、いい結果を出すことができたのです」

95年1月のことだ。ペデネイラスのところにはホーキやシャオリンがいた。ホビーニョとサントスが、ヴェンデルの下からやってきた。現在も柔術と総合でトップに立つ面子が、ここで出揃うこととなった。

練習方法に「団結力」早くからVTに取り組む

恐らく、ノヴァの中からもっともメジャーになっていった存在は、UFCで頂点に立ったBJ・ペンである。デデは彼と初めて出会ったときのことを覚えていた。

「初めてBJを見たのは青帯のとき。大会の決勝でウチの生徒と当たって、彼は敗れたのです。BJは米国でハウフ・グレイシー柔術に所属していたのですが、ハワイのシャルートともちょくちょく練習していた関係で、シャルートに連れられてウチの道場に来るようになりました」

——彼は柔術歴3年で黒帯になったというのは本当ですか？

「それは本当です」

——BJはノヴァではシャオリンとほとんどスパーをやらなかったというのは？

「それは嘘です。一緒によく練習していましたよ」

——ではBJが2000年にムンジアルで優勝する辺りは、シャオリンとのスパーリングはどんな感じでした？

「私のアカデミーでは幾つかルールがあります。その一つが練習で起こったことは、絶対に外へ漏らさないということ。もし私がここでシャオリンの方が上だったと言えばB・Jが悲しむだろうし、その反対もあります。ノヴァに団結力があるのはそのルールがあって、ライバル意識を持つのではなく、お互いに上達しようとする気持ちが強いからです」

彼の口から何度も出てきた「団結力」という言葉が、ノヴァの強さの秘密を表すキーワードなのだろう。いまブラジルでは外部から強い選手を引っ張り、VTチームを強化しているアカデミーが増えているが、ノヴァはほとんど自前で育てている。ここに他とノヴァの違いが表れている。



1996年に行われたパンアメリカ選手権で、大活躍した若きノヴァウニオン勢。後列右のシャオリンは、茶帯ペナ級で優勝。中段右端のサントスは、青帯プルーマ級で同じノヴァのアンドレ・モタに勝利を譲り2位。前列右端は黒帯ペナ級優勝のジョン・ホーキ。中央は茶帯プルーマ級で優勝したホビソン・モウラ。左端は当時はノヴァ所属だった現ATTのマーカス・アウレリオ。ペナ級でホーキに優勝を譲った。

——こと寝技になると、柔術の強い道場でも総合ではあまり柔術の技術を使っていない、あるいは使えないように思えます。でも、なぜノヴァの選手は柔術の動きがVTでもできるのでしょうか。

「その違いは、練習方法にあります。さっきも言いましたが、私たちのアカデミーはできるだけ仲間内でライバル心を持つことなく、アカデミーの外、自分の仲間以外に持つようにしています。仲間内で激しい練習はやらないし、激しい練習をやっても怪我をさせないようにします。お互いに上達できるようトレーニングするのです」

——でも、それだけですか？

「私はそうだと信じています。負けん気を出して戦えば、怪我をしてしまう。練習仲間が怪我をしてしまったら、自分の練習相手がいなくなってしまう。試合という目標に向かって練習しているのに、それでは意味がありません」

スパーリング中心、しかも実戦形式のかなりハードなものをやることで知られるシュートボクセを連想した。片や柔術ベース、片やムエタイベースと異なるが、かなり対極にある練習法、いや"練習哲学"である。

さらに、なぜノヴァは強いのかと畳みかければ、「まずどこよりも早くからVTに取り組んできました。柔術というベースがあり、96年くらいから打撃やレスリングを取り入れたからじゃないですか」という答えをデデは用意した。

確かに柔術界に限れば、それは当てはまるかもしれない。ヒクソンやホイスの戦い方を見ても分かる通り、柔術家はVTでも寝技にいかに持ち込むかということに努め、柔術の技術だけでVTを戦ってきた。

だがノヴァが早くから打撃やレスリングを重視していたことは、早い時期から日本で戦った彼らを思い起こせば分かる。

打撃、レスリング、それらを包含したVTの技術。打撃出身のルイス以外にも、デデガルミナをKOしたのは猪木・アリ状態からの顔面へのサッカーボール・キックであり、ホーキはテイクダウンが強い上、さらに池田久雄戦で腕十字の体勢のまま踵で顔面に落とし続けるという、えげつない攻撃を涼しい顔でこなしていた。

VT向きのメンタルは喧嘩っ早さより冷静さ

柔術とVTがほぼ同義で捉えられていた時代もあったが、「スポーツの柔術とVTは全く別ものです」とデデは断言する。

「柔術の試合なら打撃はないので、落ち着いてガードポジションでいられます。しかし柔術だけ練習してVTに出たら、一発顔面を殴られると焦ってしまって、自分の動きができなくなる」

例えば、ホイラー・グレイシーやバレット・ヨシダはキモノを脱いでもベストのグラップラーだが、ベストなバーリトゥーダーではない。打撃をもらって負けてしまうパターンが多いのだ。

「よく柔術の選手は、どうにか倒して寝技で仕留めようと考えます。しかしそれだけを考えるならば、リングに上がる前から負けてしまっています。たとえ相手を倒せなくても冷静な判断が取れないといけません。だから、打撃の練習をいっぱい積む必要があるのです」

——アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラは「BTTの技術はカーウソンから来たものだし、ノヴァもカーウソンの流れだからBTTとノヴァは似ている」と話していました。あなたも似ていると思いますか？

「間違いなく、同じような技術を持っていますね。私たちは上でも下でも戦うことができるように集中的に練習します。どちらかしか得意でないというのは、喩えると手足が欠けているようなものです。特にVTでは下になったほうが、不利な状況になりますね。自分から引き込む選手はいないし、

逆に倒されて下になることが多いでしょう。私は修斗の選手から色々学ぶことがあります。修斗は投げも打撃も寝技も、すべてできないと戦えませんから、立ち技も含めて完璧に近い選手を育成しています」

技術だけではない。VTの戦いにおいては、メンタル面での適性というのもある。この見極め方が、また如何にもノヴァ、いやデデらしい。

——気が強い選手は、VT向きですか。

「他の道場では、ストリートファイトをたくさんやっているからVTに向いていると判断することも多いが、ノヴァの場合はまったくそんなことはありません。例えばシャオリンにしてもホビーニョにしてもサントスにしても、喧嘩の経験はありません。人を殴ったことすらありません」

——でもペンは、いっぱい殴っていると思います（笑）。

「彼は私が最初から育てたわけじゃない（笑）。生徒の性格というものは、先生の一部をもらって形成されるものです。私のアカデミーの雰囲気というのは、人を傷付けようとか殴ろうとかいう者を出さないようにしています」

『生徒の性格というのは、先生の一部をもらって形成されるもの』——まるで親子関係に通じるものがある。ノヴァの団結力というのは、『家族』で比喩されるのがもっとも適当なものだろう。デデは『父親』であり、子供を枠にはめずにやさしく見守る力強い存在である。

——ではVTではどういったフィジカル、メンタルが重要ですか。

「いまは階級がしっかり分けられているので、身体能力はそれほど重視していません。それよりメンタルな部分が重要ですね。練習では気が強いが試合ではしぼんでしまう、そういう例をいっぱい見てきました。だから私は普段から、冷静な者を好んでVTをやらせます」

他の道場にも頼られるセコンドの手腕

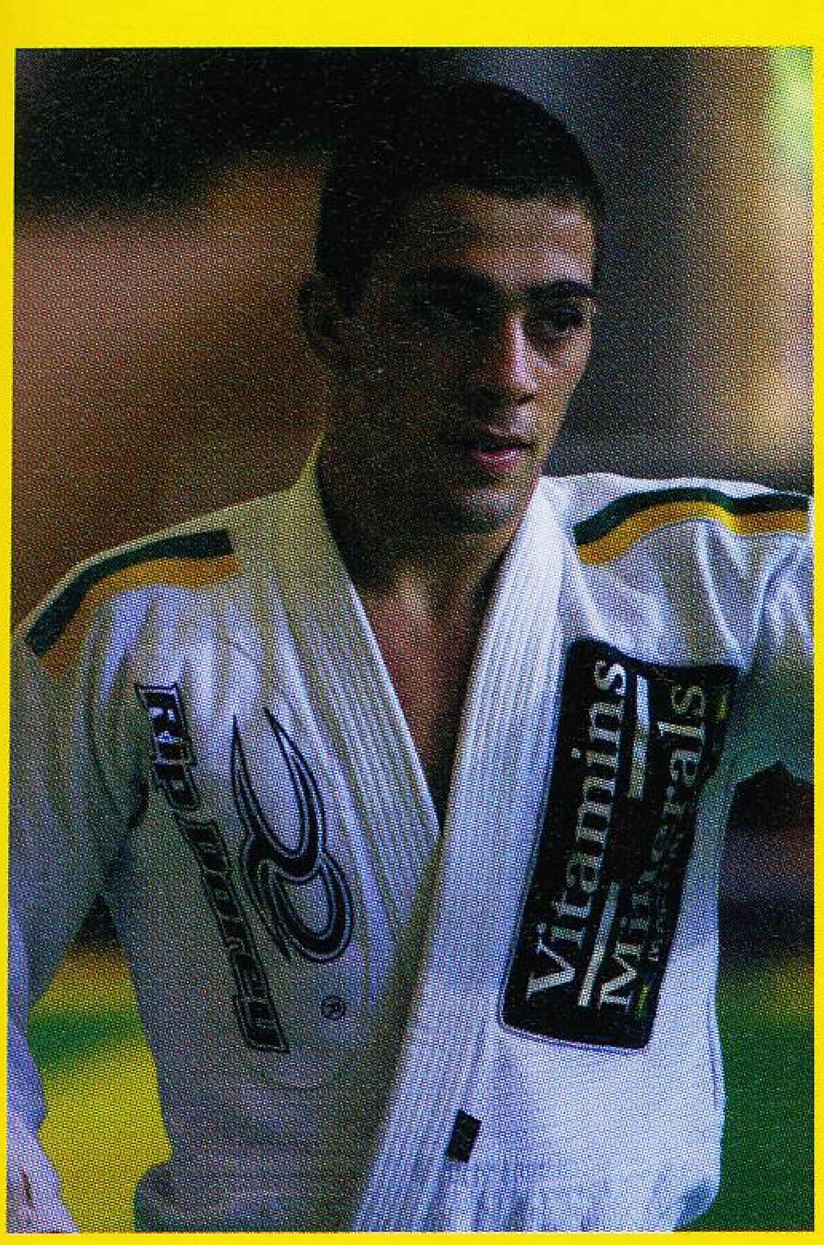
ホビーニョから、面白い話を聞かされたことがある。試合前にデデは相手を想定した細かい作戦を教えないで、ただ練習の流れで必要な動きだけ指摘する。それでいて試合のために飛行機に乗ったとき、初めて具体的な戦略を伝えるというものだ。

「実際に試合が組まれたら、練習は相手を想定したものをやらせますが、あまり相手のイメージを大きくさせないようにします。イメージを大きくさせると焦りが出てしまうので、飛行機に乗ってから戦略を細かく教えるのです」

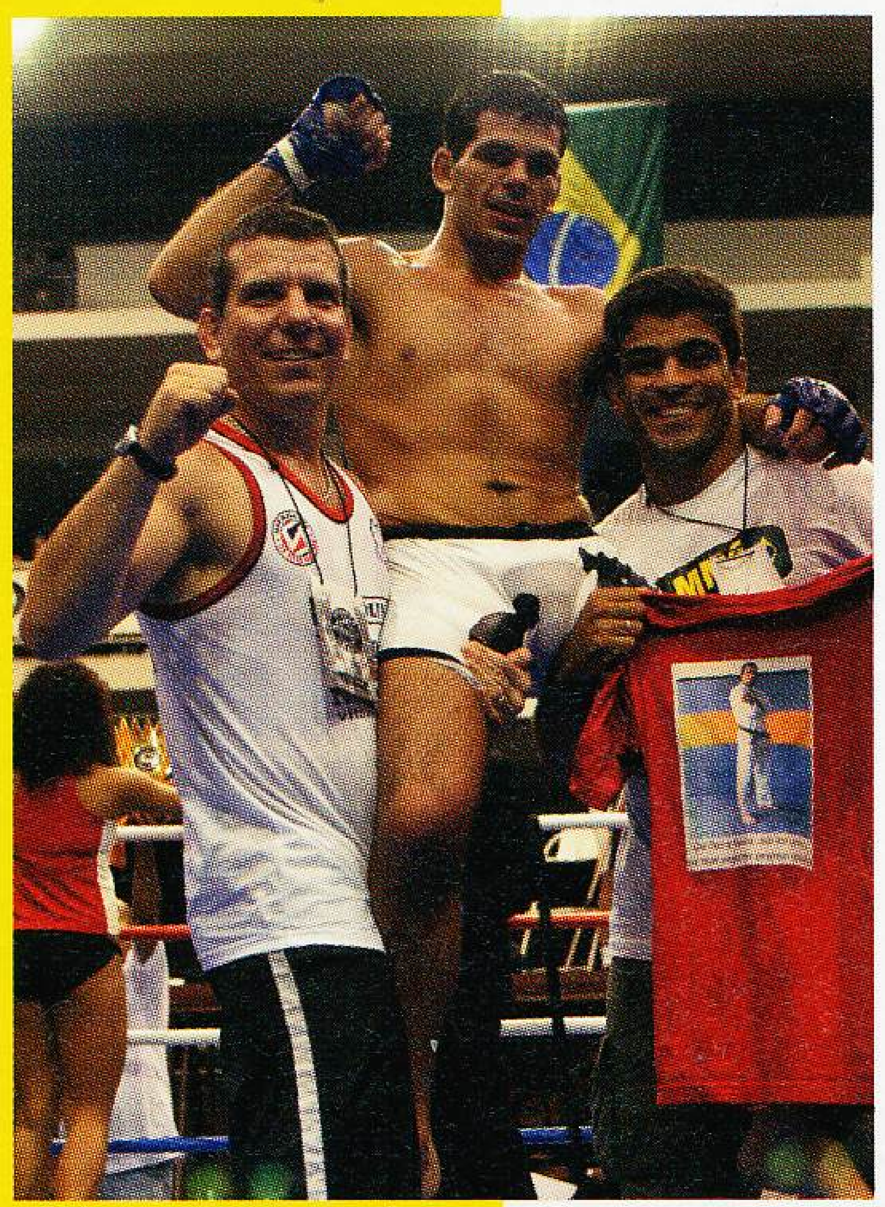
——練習のときから具体的に相手のイメージを与えて『このときはこうする』と、細かく対策を授ける指導者は多いですが。

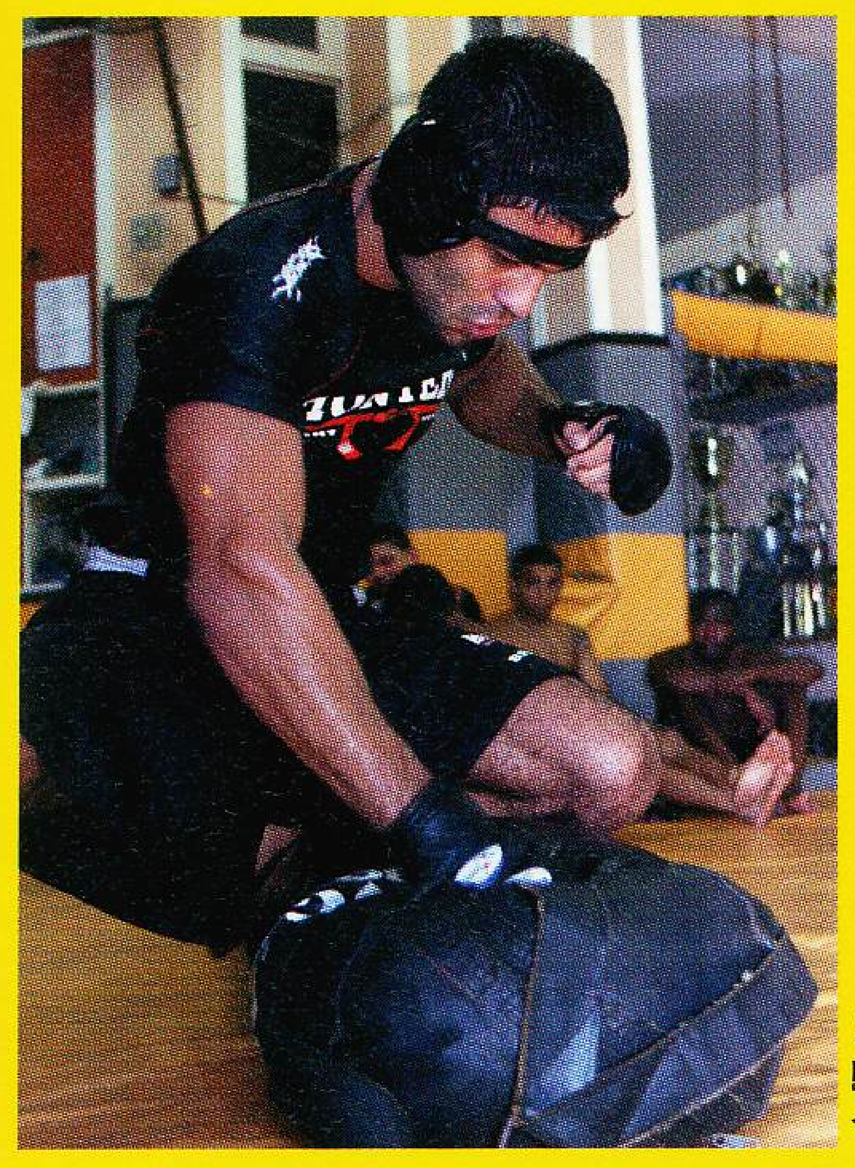
「選手と二人でビデオを見て研究はしますが、『相手はこれが得意だからこれをしちゃいけない』などと細かくやると、実際戦うときに『相手はパンチが強いからすぐタックルに入ろう』と必要以上に焦りが出てくるんですよね」

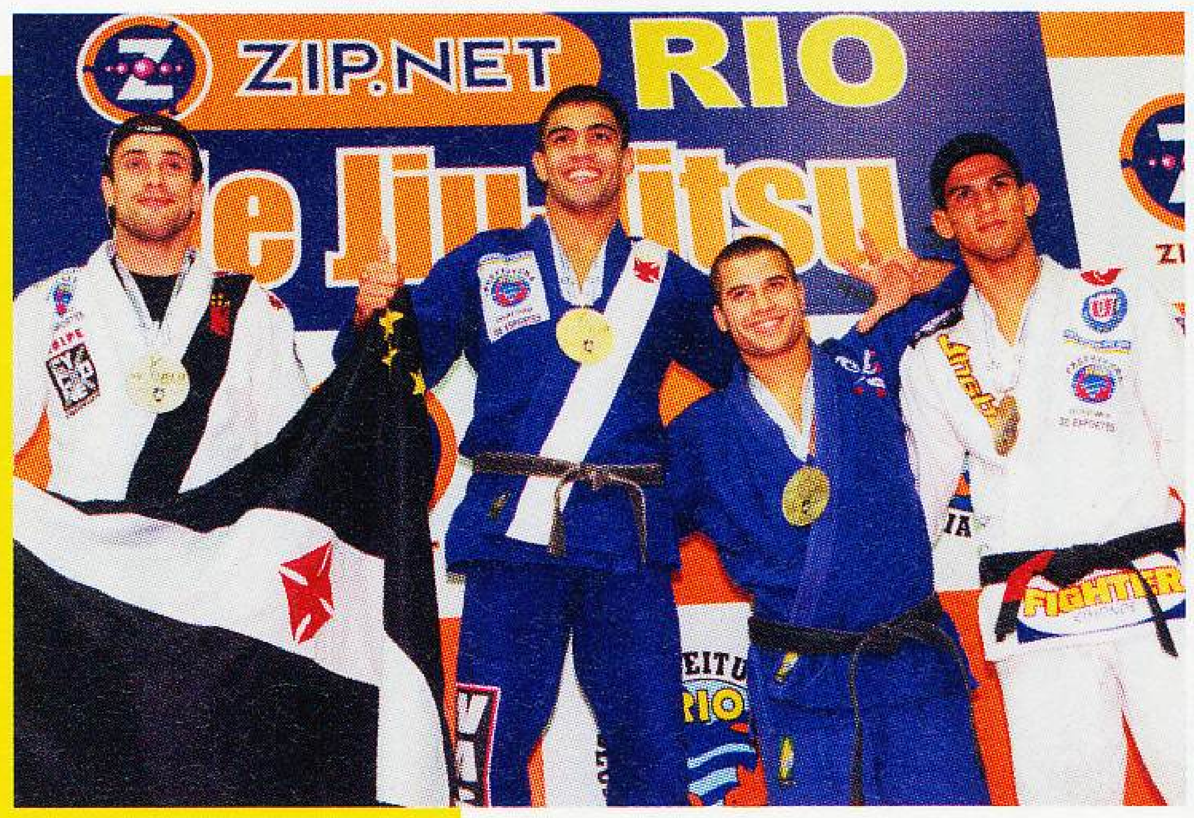
ファイターの心理をよく分かっている。



レオ・サントスの後を継ぐ逸材といわれているのが、エドゥアウド・ペッソア。紫～茶帯と順調にコパドムンドを制しているCBJJO代表ルイジーニョことルイス・エリミオの愛息子。

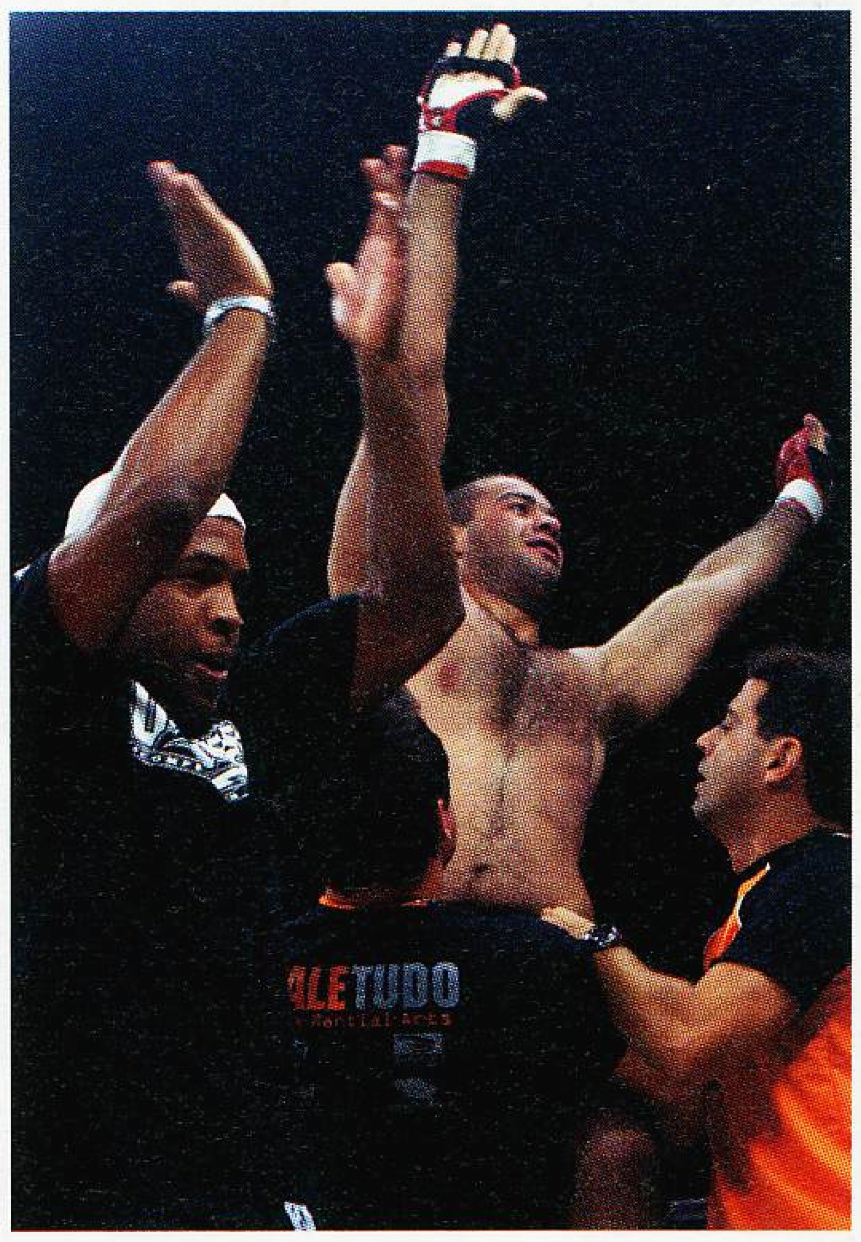

デデとシャオリンに肩車されているのは、ダニーロ・シェアマン。こちらはMMA最強シャオリンの後継者。といってもシャアマンは21歳で、シャオリンもまだ26歳間近という若さを誇る。


ストリートファイトの経験がないシャオリンも、今ではパウンド上手。



CBJJO独立以前、最後の統一ムンジアル。黄金のレーヴィ級と呼ばれた強豪揃いの階級で、優勝したのはシャオリン。サントスは天才レオナルド・ヴィエイラと並んで3位。準優勝はマーシオ・フェイトーザだった

ベロオリゾンチで指導するフェイジャォン（左）。サントスと並ぶレーヴィ級の強豪はこのところ、教え子がブラジルＶＴ戦線で勢いづいており第２のデデの道を歩みだしたか。



実際、選手に直接「なぜノヴァは強いのか？」と聞けば、皆が口を揃えて言う。「デデがコーナーにいてくれるから」。

セコンドの重要性を示すあるエピソードがある。自分が普段見ている教え子以外にも、的確な指示で勝利をもたらした例だ。"ペケーニョ"ことアレッシャンドリ・フランカ・ノゲイラが、プロ修斗のリングで一度はKO負けを喫した阿部裕幸を仕留めたとき、「デデの声が聞こえ、その通りに動いて勝つことができた」と言っている。

「自分の教え子でない場合は、試合の流れを見ながら判断します。ペケーニョの場合は前に一度アベにKOされた怒りの気持ちが完全に出ていて、試合が始まったときからテイクダウンの後は殴ってばかりでした。そこで彼に言ったのは、『とりあえず落ち着きなさい。勝つことが目的だから体力を使わないで、チャンスを待って極めよう』と。フィニッシュは『足で踏むフリをしろ！』とアドバイスして、アベがフェイントにかかって後ろを向いたので、チョークに入ることができました」

最近では、柔術の強豪でシュートボクセ入りしたジョルジ・パチーユ・マカコに対し、メッカVTでアドバイスしたひと言が勝利を招いたというエピソードもある。

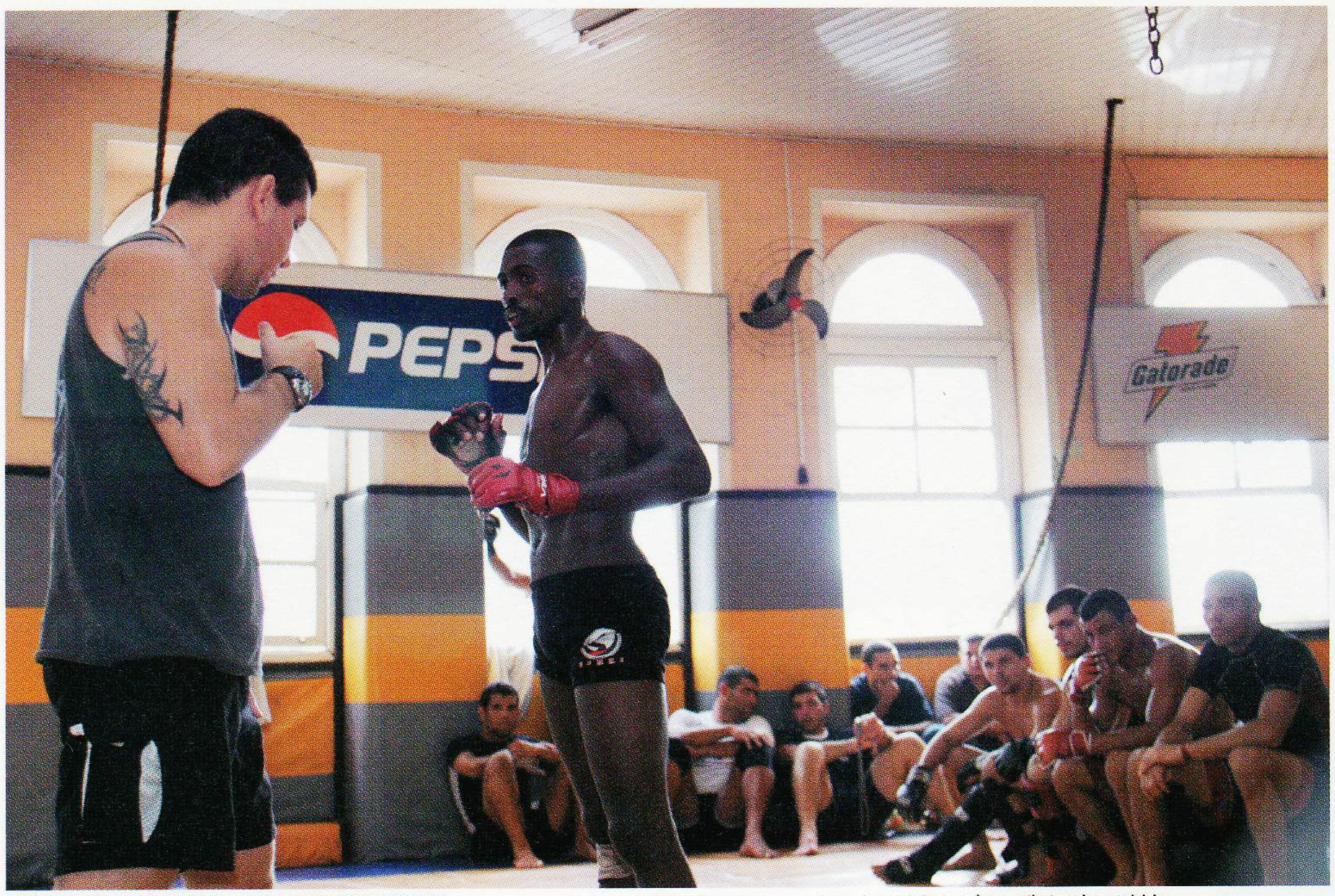
「とにかくセコンドが『殴れ！』の一点張りだったのです。サブミッションを取れる体勢があっても、その指示は変わらなかったのでちょっと我慢できなくなり、インターバルのときリング下まで行きました。『相手は隙がたくさんあるし、何回も肩固めのチャンスがあったじゃないか!? とにかく肩固めを狙うんだ』と」

ペデネイラスの指示通り、結局マカコは肩固めで勝つことができた。他の道場の選手からも、彼は頼られ、受け入れられている存在であることが分かるエピソードだ。

「たとえウザがられても、多くの選手がアドバイスを求めてくるのは、私が認められている道場のリーダーであるからでしょう。それに、私には経験があるし、試合の流れも読めるという自負もあります」

その手立ては、ときには精神分析医のようにも感じる。その場で自分の選手が何を

デデの一言のアドバイスで、教え子たちの動きはグッと良くなる。



考え、どういった問題に直面しているのか。もちろん、試合ではカウンセリングを行う時間などない。セコンドは勝利という目標に向かって、その瞬間、瞬間にもっともよい手法を示すことができる名医でなければならない。

デデからは、セコンドが勝負を左右する例として、こんな面白い例も挙げてくれた。

「私の生徒の中に、とても太った子がいました。健康のために柔術を始めたような子が、いきなり大会に出たいと言い出して。実力的には相手が上でしたがセコンドがいなかった。私が生徒に言ったのは、『私の言うことに絶対従うんだよ』ということ。試合が始まって私の言う通りにした生徒は、少しずつアドバンテージを重ねていき、私は時計を見てラスト1分のところで、「ラスト3分!」と言ったんです。終了の笛が鳴ったとき、相手は何が起きたのか分からないといった感じでした。セコンドというのは、試合中の選手が見えないところも、見える視野があるのですよ」

指導者、経営者ファイターの三つの顔

ペデネイラスは修斗の全階級を制覇すると宣言している。現在、シャオリンはウェルター級の王者であり、バンタム級はホビーニョ、フェザー級がロウロ、ライト級はホーキにベルトを巻かせようとしている。

「ライトヘビー級（83kg以下）では、ターリス・レイチェという、いまハワイでBJの練習を手伝っている選手がいます。ミドル級（76kg以下）にはチバウ、ペテウソン・メーロ、“ピンポーリョ”・ルイス・フェルナンドがいます」

軽・中量級が興行の中心となる修斗とノヴァはピッタリのカップリングだが、ミドル級以上ともなれば他団体でも活躍の場があるだろう。

「私のところにはグッドファイターが多すぎて、一つのイベントでは全員を出し切れません。いま出しているのはほんの5名ほど。でも50名ほどいい選手がまだ残っているので…。ところでゴミの体重は？」

——いま75kgぐらいですかね。もっと増やしたいようですが。

「ゴミに勝てるすごい選手がいます。トニー・デソーザ。メッカVTやジャングルファイトで活躍しているペルー出身の選手ですが、彼をゴミと戦わせたいですね。あとパンクラスのマエダにも勝てる相手がいます。ノヴァは軽量級に強い選手がいっぱいいますから。確かにマエダはトップ柔術家を倒していますが、彼らはVTでの経験がほとんどないような選手たちですよ」

だが、無名の実力者ほど、対戦相手にとって嫌なものはない。勝って当然、負けて地位を失うのだから。弟子を思ってリングを探すデデの気持ちは分かるが、彼らビッグネームとの対戦実現はそう容易ではない。

最後に。一つ気になっていたことがある。実は2年前、デデはファイターとしてジェンス・パルバーと戦いたいと言っていた。弟子のルイス、ホーキ、そしてペンを破った相手に、落とし前をつけたかったのだろう。ただ、それから私たちは彼のファイターとしての姿を見ていない。

「理由はいくつかあります。私はあれから体重が増えてしまったので、いまパルバーが戦っている65kgまでは体重を下げられません。それに私はフィットネス・ジムをブラジルで3つ構えており、その経営に忙しい。また、自分の弟子たちのトレーニングを見ないといけないので、自分の練習する時間が取れない状況にあります」

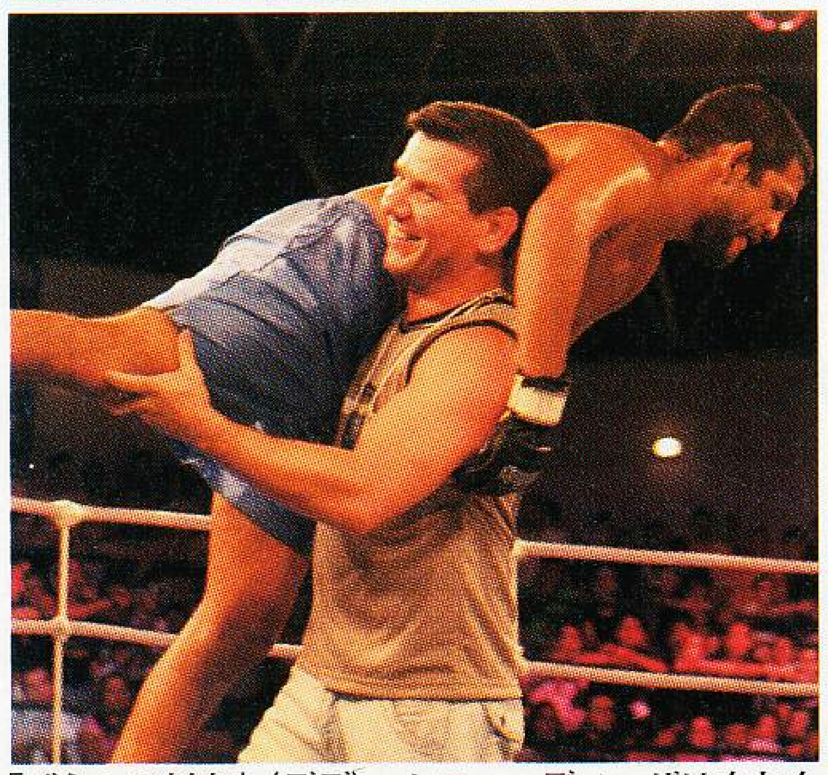
現在37歳のデデだが、このままいくと、4年前の須藤元気戦がラストファイトになる可能性が高い。

それでも、彼はきっと後悔しないだろう。次の質問を終えて、そう感じた。

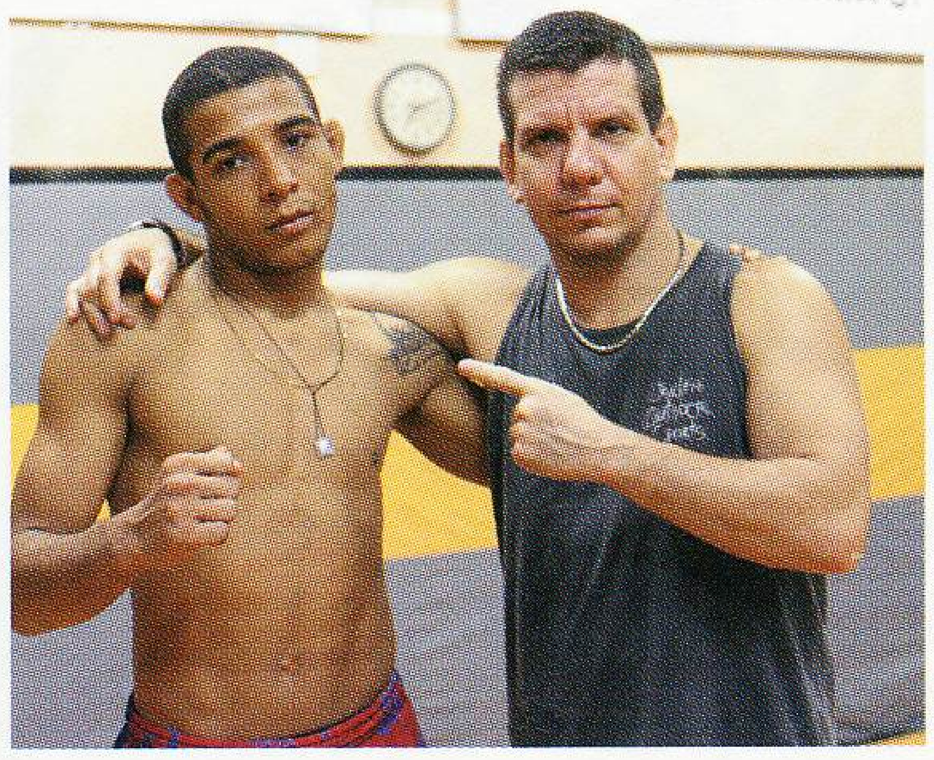
——指導者、経営者、ファイターのうち、一番どれに才能あると思いますか？

「指導者です」

即答だった。ノヴァウニオンの強さとは何か。ここまで来たら、我々の出す結論は一つしかない。アンドレ・ペデネイラスの存在が、ノヴァウニオンの強さである。



「ゴミへの刺客」（デデ）、トニー・デソーザはもともとはラスベガスのルイス＆ペデネイラスに所属していたペルー人レスラー。母国に帰国後、たびたびリオを訪れ、完成度を大幅に増しており、今や期待値ナンバーワンのファイターだ。



デソーザが五味への刺客なら、ジョゼ・アルドはパンクラス前田吉朗の首を狙う60kgの新鋭。

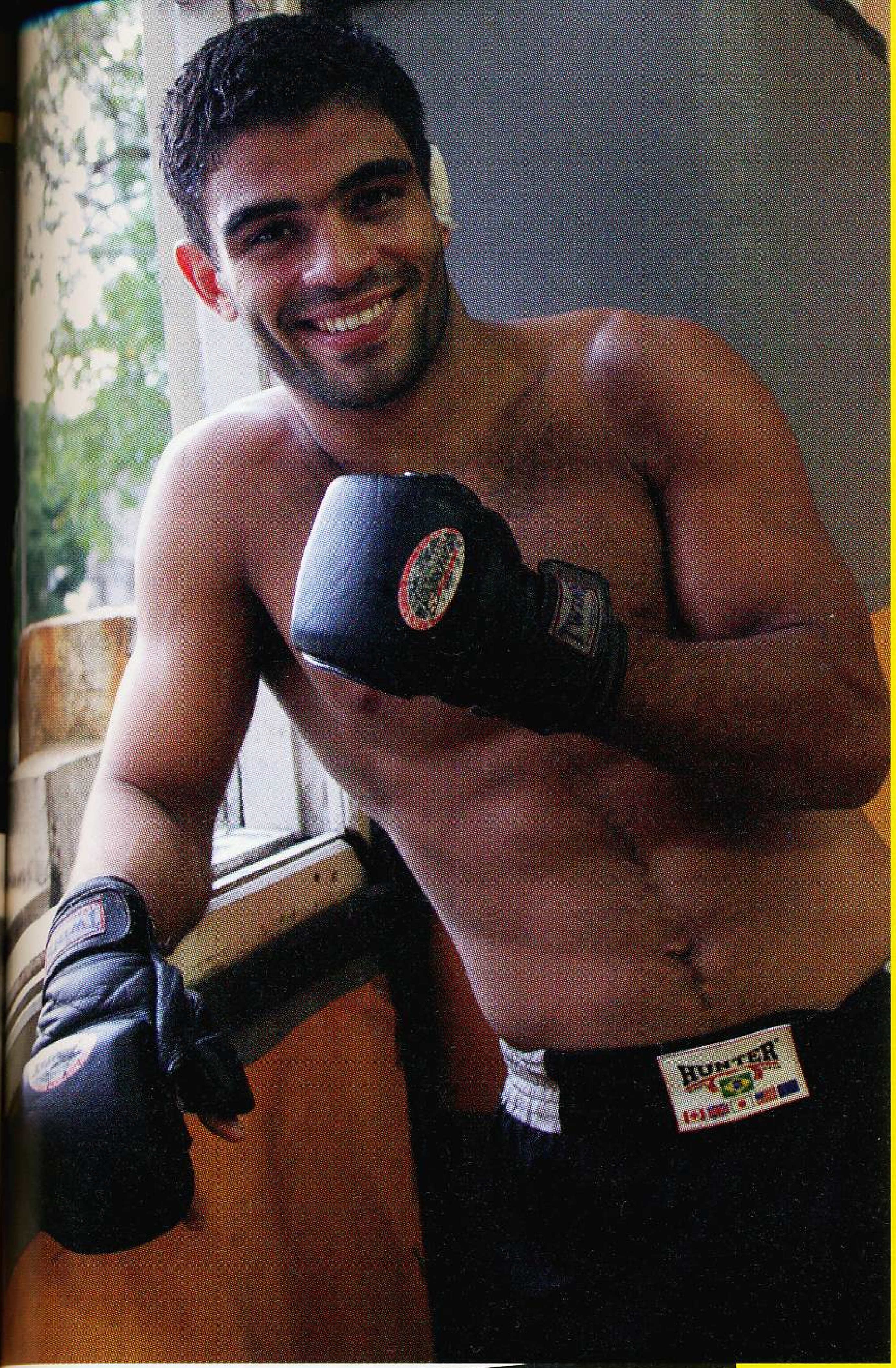
現時点でデデにとって、最後のファイトとなったコロシアム2000での須藤元気戦。ちなみに3つの才能のうち、一番は「指導者」と即答したデデだが、「ファイター、そして経営者としての力も十分にある」という台詞を忘れなかった。



Andre Pederneiras
アンドレ・ペデネイラス

1967年3月3日　ブラジル・リオデジャネイロ州生まれ
身長174cm体重70kg　ノヴァウニオン総帥。
柔術、総合格闘技界で最強軍団を作り上げた名伯楽。自らもVTJで佐藤ルミナにTKO勝ち、宇野薫とはドロー。コロシアム2000では須藤元気と引き分けている。

ことがある。試合前にデデは相手を想定し



——シャオリン、君はノヴァウニオンにやってきて、たったの2カ月でイエローベルトを手にしたらしいね。

「僕がノヴァウニオンに通うようになったのは、14歳のときだったんだけど、学校に通う以外にやることがなかったから、午後と夜の練習に顔を出すようになったんだ。周りは17歳とか20歳以上で体も大きい人ばかりだったけど、そんな彼らと練習することを誇りに思っていたし、みんなが僕を夜の街へ連れて行ってくれたり、道場に足を運ぶことが楽しくてしょうがなかった。ただ、練習は大変だったよ。でも、必死に歯を食いしばって練習していると、デデが僕の可能性を見出してくれて、よく掛かりっきりになって指導を受けることができたんだ。で、2カ月後には黄帯を巻くことを許されたんだ。デデも当時は、まだ26歳だったんだけど、僕からすれば完全な大人だったからね。あれから、もう11年が過ぎたけど、アッという間だったね」

——ノヴァウニオンと、他のアカデミーの違いはどこにあると思うかい？

「強いアカデミーになるには、道場生の協調性と、リーダーの度量に掛かってくると僕は信じている。そして、その二つの点でノヴァウニオンは完全に他のアカデミーを凌駕している。僕らはデデのことを凄く尊敬しているし、彼の言うことに全く疑いを

14歳から11年、ノヴァに格闘人生を育まれてきたビトー・シャオリン・ヒベイロ

「ノヴァには強いリーダーシップと、協調性がある。だから強いんだ!」

It can realize
having become strong
if it practices for two months

教え子を平等に扱うデデは、そうは言わないだろうが、誰もがデデの一番弟子として認めるシャオリン。11年という長い間、デデの下で強くなり、柔術、修斗の世界王者となった彼に、ノヴァの強さの要因を尋ねた。

text & photo by Marcelo Alonso

持つことはない。そして、彼もそんな僕らを信用してくれて、公平な目で見てくれる。彼は僕らにとって、大切なリーダー、指導者というだけでなく、最も大切な友人でもある。そんな彼だから、素晴らしいリーダーシップを発揮できるんだよ。そして、アカデミーに通う者の絆も太い。誰かの活躍を妬んだり、羨む人間なんてここには一人も居ないんだ。例えば、アカデミーの中の誰かが一人だけ、ずば抜けたファイトマネーを貰ったとしても、僻んだりせず、「次は僕の番だ」って、それを励みにより一層練習に精を出すことができる。そんなポジティブな気持ちを植えつけてくれるのも、実はデデの度量の大きさからなんだ」

——何がそんなに特別なんだろうか？

「う～ん、言葉でいい表すことはチョット難しいかな。本当に協調性、互いの思いやる気持ち、そしてデデのリーダーシップに尽きるよ。デデは僕らの意見に何でも耳を傾けてくれる。凄く、理想的な民主主義だと言えるよ。彼はリーダーだけど、決して専制政治や抑圧的な態度はとらない。まず、僕らがハッピーになれるよう考えてくれる。そんな彼を傍で見て、育ってきたから、僕らも彼の影響を強く受け、人格者たらんと努めるようになった」

——ただ、軽量級では最強の座に君臨するノヴァウニオンだけど、重量級の層の薄さは否定しようがないね。

「とにかくノヴァウニオンの歴史が始まった時点で、軽量級に優れた柔術家が多かった。だから、自然と可能性のある体の小さな選手が集まるようになったんじゃないかな。柔術に限らず、レスリングでもムエタイの選手でも軽量級の選手が、ノヴァにはよく集まってくるね。まぁ、これだけ軽量級のトップ選手が集まれば、技術の交流も進むし、ほんの2カ月間ほどの練習を我慢できれば、その選手は物凄く力をつけることができる。それが、ノヴァの軽量級の層を厚くしている要因だろうね。だからって、重量級の選手が弱いなんてことは決して言えないよ。僕らにはUFCにも出場したハファエル・カリーノがいる。活きのいいシュートボクセの2選手から、勝ち星を収めているマルセーロ・パトは要注目の選手だよ。フェルナンド・ボイ、アンドレ・マローラだっているし、中量級になれば既に柔術、バーリトゥードの試合で、その実力を十分に発揮しているターレス・レイチだっているよ。だから、ノヴァは決して、軽量級だけのアカデミーじゃないんだよ」

——今、ノヴァウニオンはブラジル全土に勢力を拡大し、そのためリオを離れて指導するトップ選手も少なくないよね。今は誰と練習を？ その練習は、以前と比べてレベルダウンしているってことはないかい？

「レベルが下がるなんてことは絶対にない。ダニーロ・シェアマン、ジョゼ・アルド、マルコ・ロウロ、ターレス、彼ら自身も試合に備えて調子を上げている最中だし、そんな彼らと練習していれば、僕も万全のコンディションを整えることができる」

——純血主義と見られたノヴァに、ペテウソン・メーロというアカデミア・ボクセタイの選手が姿を見せるようになったね。

「でも、ペテウソンと僕はもうずっと以前から友人同士なんだよ。デデは柔術のアカデミーで最も早くレスリング、そしてムエタイの重要性に気づき、それらの練習を取り入れてきた人物なんだからね。デデも僕も、ずっと総合で戦うことを視野に入れてきたから、ルイス・アウベス（アカデミア・ボクセタイの指導者兼オーナー）とはBTTよりも、ずっと先に練習していたんだよ、実はね。だから、ボクセタイの選手がバーリトゥードに挑戦するなら、僕らのところで組み技の練習をすることは当然じゃないか。僕らは互いの得意分野を交互に指導し合っているような関係なんだからね。凄く真剣に練習に取り組むけど、とても開放的な雰囲気があるのは、ノヴァウニオンだけだと思うよ。そして、この家族的な雰囲気は、僕が14歳でここにやってきて、練習後に瞑想している姿を見た皆が『シャオリン』と呼ぶようになった頃から、何も変わっていないんだ」

2カ月練習すれば、強くなったと自覚できる



Gachinko Column

[総合格闘技の現在を考える]

ガチコラ! Vol.3

総合格闘技史上、最初の名勝負に痺れた。

佐山聡が大好きだった。初代タイガーマスクの出現と共に本格的なプロレスファンとなり、スーパータイガーとしてUWFにカムバックした時は狂喜した。ちょうどその頃だろうか、『スコラ』に佐山聡の特集記事が載ったのは。そこには、「これがタイガーマスクの新格闘術だ!!」と題して、佐山聡が創始したという"シューティング"の技術が載っていた。

まだ、プロレスは総合格闘技だなどと言われていた時代である。誌面には「打・投・極」に分類されたいくつかの技術分解写真が掲載され、なぜかプロレス技も混ざっていたのだが、見た事もない関節技やプロレスではあり得ない蹴り技を、佐山が山崎一夫やダイナマイト・キッドを相手に披露していた。

佐山はインタビューの中で、「真の格闘は打撃に始まり、投げて、最終的には極めるもの」と語っていた。格闘技といえばプロレス、キックボクシング、空手、柔道、レスリング、ボクシングくらいしかなかったこの時代、佐山の提案したシューティングなる格闘技は、まさに夢の格闘技のように見えた。影響されやすい十代の小僧だった僕は、ノートの表紙に佐山の言葉を書き、勝手に理想とする総合格闘技のルールを書いたりしたものだった。

時は少しだけ流れ、僕は格闘技記者となった。新米といえども、当時の『ゴング格闘技』にはフリー記者は一人もおらず、編集部員も僕と近藤さんだけだったので、否応無しに担当が増えていった。その中の一つに、憧れのシューティングがあったのだ。「シューティングの大会に行って来い」そう言われた時は嬉しかった。ついに、あの佐山が創始した総合格闘技を観戦する事が出来るのだ。いや、それよりも、佐山にコメントを取る事が楽しみでしょうがなかったミーハー新米記者であった。

場所は後楽園ホール。余談ではあるが、この黎明期のシューティングを語る際によく「客席もまばらな」とか「ガラガラだった」という言葉が使われるが、当時の格闘技会場など、どこへ行っても同じような客入りだった。シューティングが特別に客入りが悪いなどという事はなく、もっと観客が入っていない大会もあったほどだ。むしろ、初代タイガーマスク・佐山聡を見たいがためのファンが、多く駆けつけていたというのが本当のところである。

まあ、それはいいとして、初めて見たシューティングは…面白くなかった。なにしろ、「真剣勝負はつまらないもの」などと、佐山本人が口にしていた時代である。八角形のリング（というかマットの上にロープを張ったもの）で展開される試合は、一本やKOがほとんどなく、鮮やかな技が決まるわけでもなく淡々と進んでいったのである。

しかし、ここで事件は起こった。当時のシューティングは目をガードするマスクを付けていたのだが、佐山が突然、「次の試合からはマスクを外します。選手がそれを望んでいます」と宣言したのだ。それまでの試合でマスクがずれるため、度々試合が中断された事に業を煮やしたのであろう。ところが、この効果は絶大。試合は途端に面白くなり、スリリングな闘いへと変化していったのである。

黎明期ならではというか、シューティングの試合ではこのような突発的な出来事が、何度も起こった。そしてその度に、この総合格闘技という未知の分野は成長を遂げていったように思う。

最も忘れられない一戦がある。1990年7月7日に行われた、「ライト級チャンピオン認定戦」田中健一VS坂本一弘戦だ。この試合は戦績が優秀だった坂本が勝った場合のみ、ライト級王者に認定されるという変則的なタイトルマッチだった。坂本は"佐山の秘蔵っ子"と言われ、最も佐山に可愛がられ王座に近い位置にいると聞いていた。なるほど、カッコもいいし、スター性のある選手だ。一方の田中は、いかにも無骨で地味だった。真っ黒のロングスパッツがさらに地味さを際立てていた。唯一、そのスパッツに赤い糸で小さく刺繍された"真剣勝負"という文字だけが自己主張しているようにも見えた。

試合は予想通り、坂本が優勢に進めていた。ところが、一発の腕十字で田中が一本勝ちしてしまったのだ。田中は涙を流し、「やった、やった…」と呟いていた。予想外の出来事に、佐山は次回大会での再戦を王座決定戦にする事を即座に発表した。控室で田中は、「自分は雑草ですから。エリートにだけは死んでも負けたくなかった」とコメント。このセリフに痺れた。これが真剣勝負なのだ。噛ませ犬だって追い詰められれば一矢報いる事ができる。それを教えてくれたのが、田中健一だった。田中VS坂本は、日本の総合格闘技史の中で、その背景やドラマも含めて最初の名勝負ではなかっただろうか。少なくとも、格闘技記者歴16年の僕はそう思う。

シューティングはやがて修斗となり、ブラジリアン柔術などのテクニックも摂り入れて、より完成度を高めていった。しかし、ある日、田中はこう言ったのである。「これが俺たちのシューティングですか？　打・投・極はどこに行ったんですかね？」。

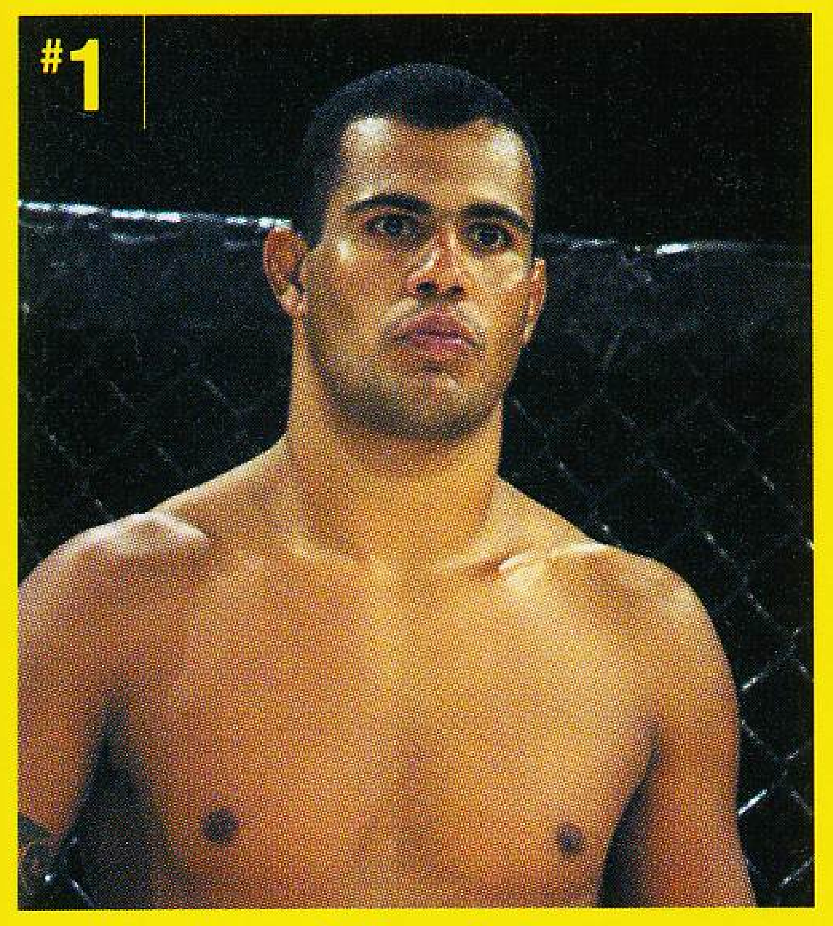
それからまた年月が経ち、総合格闘技はより打・投・極に近づいてきたように思える。夢の格闘技は、本当はまだ黎明期を脱していないのかもしれない。

3 熊久保英幸
くまくぼ・ひでゆき。89年1月に日本スポーツ出版社『ゴング格闘技』誌編集部に入社。94年より6年間にわたり編集長を務める。2002年に退社し、フリーに。
現在は格闘技WEBマガジン「GBR」、ジム・道場検索サイト「はじめーる」のプロデュース他、「ゴン格」「ヤングジャンプ」などに執筆中。
また、格闘技コメンテーターとして「ファイティングTVサムライ」「スカイパーフェクTV」にも出演中。

ガチマガジン認定 オンリー・ブラジリアン トップ10ランキング!

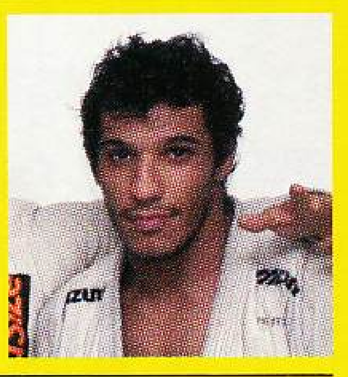
アンドレ・ペデネイラスの要望に応え、ブラジル人だけのVTランキング

Up to 77kg 77kg以下

#1

ヘナート・ベリーシモ (ノヴァウニオン)
Renato Charuto (Nova Uniao)

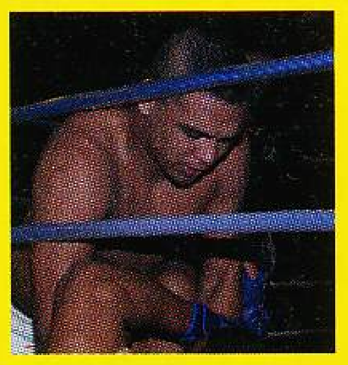
#2

ミウトン・ヴィエイラ
(BTT)
Milton Vieira (BTT)

#3

ルイス・アゼレド
(シュートボクセ)
Luis Azeredo(Chute Boxe)

#4

グレジソン・チバウ
(ノヴァウニオン)
Gleidson Tibau (Nova Uniao)

#5

ルイス・ベソウロ
(RFT)
Luis Besouro (RFT)

#6 **アレッシャンドリ・バロス** (GBCT)
Alexandre Barros (GBCT)

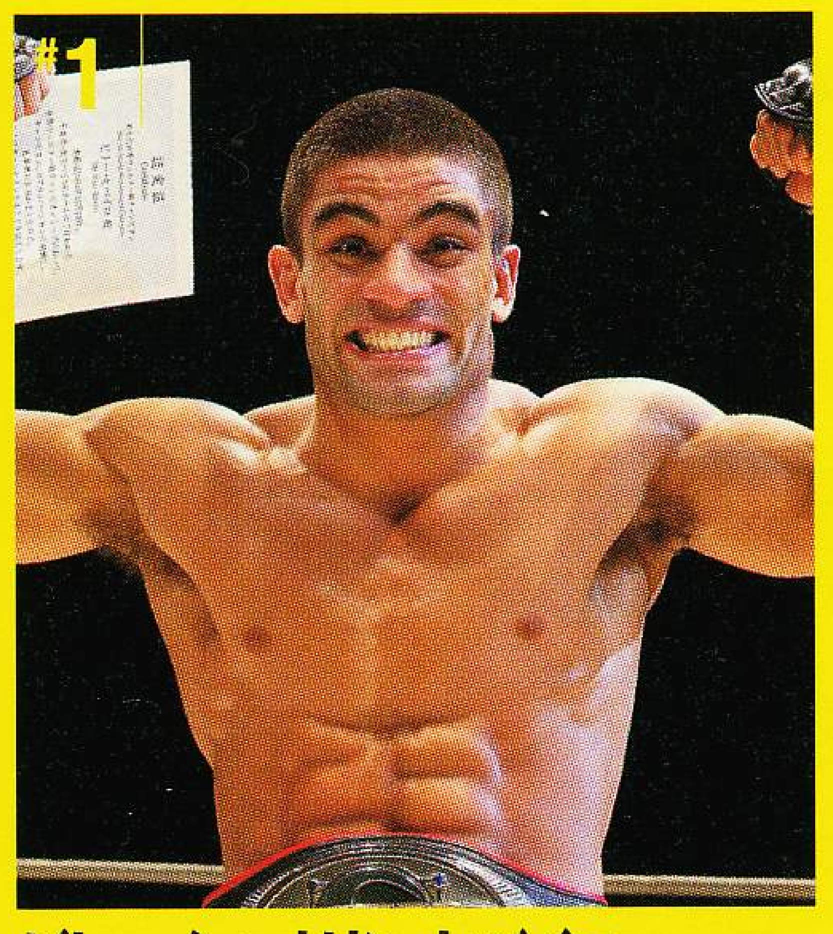
#7 **ヘジクラウジオ・ケサーダ** (ギジッシ)
Regiclaudio Kexada (Guidicci)

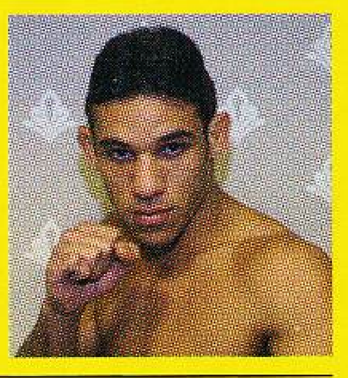
#8 **チアゴ・ピッチブル** (ATT)
Tiago Pitbull (ATT)

#9 **ニーノ・シェンブリ** (シュートボクセ)
Nino Schembri (Chute Boxe)

#10 **サンドロ・ヘニ** (ペレ・チーム)
Sandoro Reny (Pele Team)

Up to 70kg 70kg以下

#1

ビトー・シャオリン・ヒベイロ (ノヴァウニオン)
Vitor Shaolin Ribeiro (Nova Uniao)

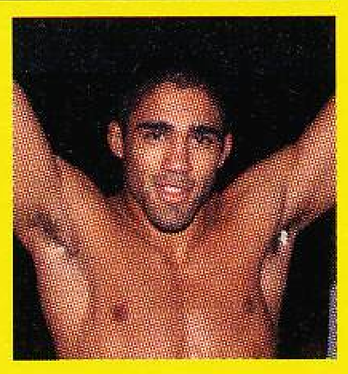
#2

ルイス・ブスカペ
(BTT)
Junior Buscape (BTT)

#3

エルミス・フランカ
(BTT)
Hermes Franca (BTT)

#4

マーカス・アウレリオ
(ATT)
Marcos Aurelio (ATT)

#5

ジェシアス・カバウカンチ
(ATT)
Gesias Cavalcante (ATT)

#6 **ダニーロ・シェアマン** (ノヴァウニオン)
Danilo Cherman (Nova Uniao)

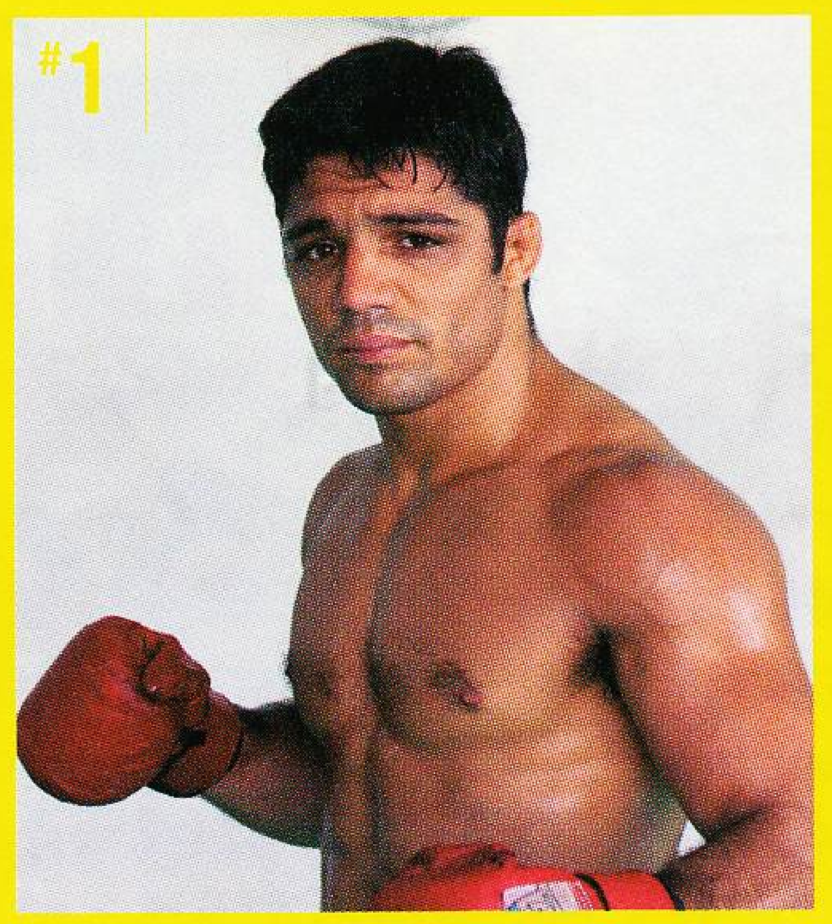
#7 **ジャドソン・コスタ** (シュートボクセ)
Jadyson Costa (Chute Boxe)

#8 **ホドリゴ・ダン** (アリアンシ)
Rodrigo Damm (Alliance)

#9 **マリオン・マチアス** (シュートボクセ)
Marion Matias (Chute Boxe)

#10 **マルセーロ・ギジッシ** (ギジッシ)
Marcelo Giudicci (Giudicci)

Up to 65kg 65kg以下

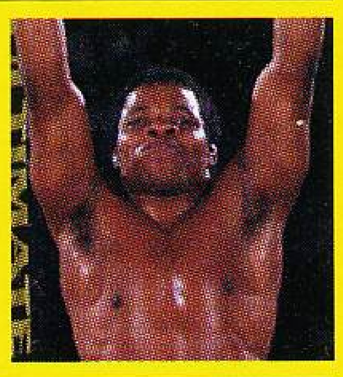
#1

アレッシャンドリ・フランカ・ノゲイラ (WFC)
Alexandre Pequeno (WFC)

#2

ジョン・ホーキ
(ノヴァウニオン)
Joao Roque (Nova Uniao)

#3

ホイラー・グレイシー
(グレイシー・ウマイタ)
Royler Gracie (Gracie Umaita)

#4

マルセーロ・ボカォン
(BTT)
Marcelo Bocao (BTT)

#5

パウロ・ゲレイロ
(エヴィラジオ・フェイトーザ)
Paulo Guerreiro (Evilazio Feitosa)

#6 **フレジソン・パイシャオン** (GBCT)
Fredson Paixao (GBCT)

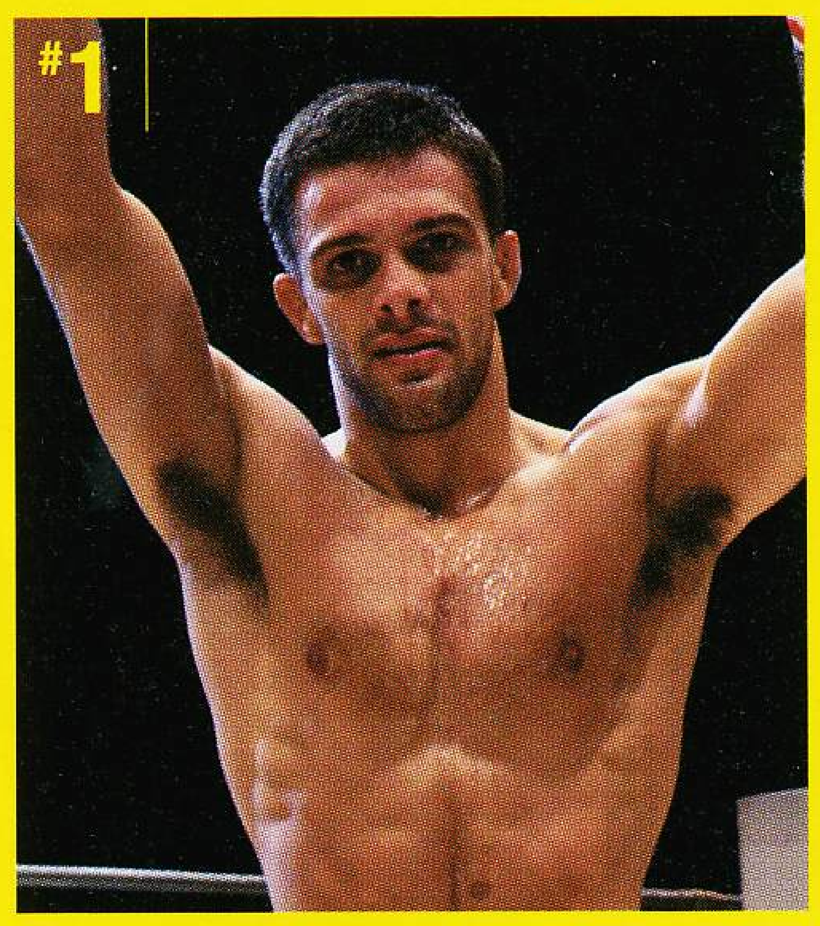
#7 **ファービオ・メーロ** (BTT)
Fabio Mello (BTT)

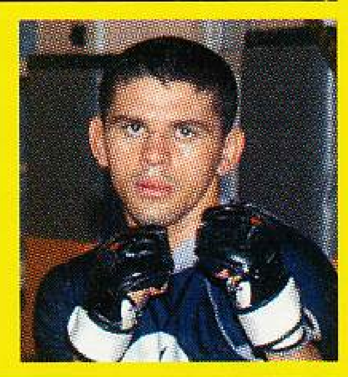
#8 **ルシアーノ・アゼレド** (RFT)
Luciano Azevedo (RFT)

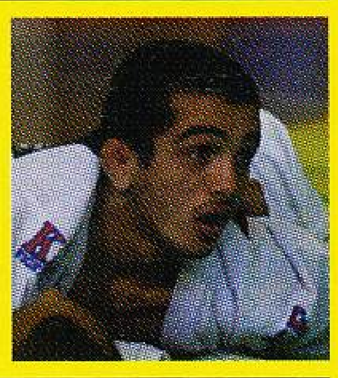
#9 **ハニ・ヤヒーラ** (アタイジ)
Rany Yahira (Athayde)

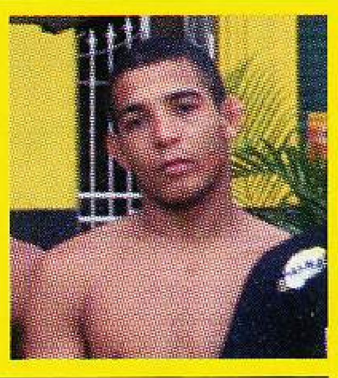
#10 **ホジェウソン・BA** (シュートボクセ)
Rogelson BA (Chute Boxe)

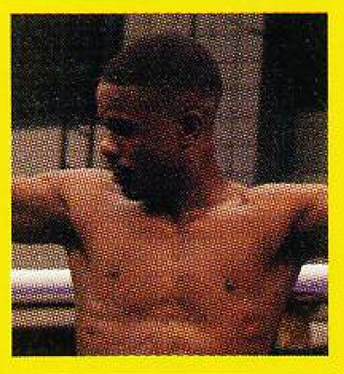
Up to 60kg 60kg以下

#1

ホビソン・モウラ (ノヴァウニオン)
Robson Moura (Nova Uniao)

#2

マルコ・ロウロ
(ノヴァウニオン)
Marcos Louro (Nova Uniao)

#3

アリソン・キキ・メーロ
(ノヴァウニオン)
Arlisson Kiki Mello (Nova Uniao)

#4

ジョゼ・アルド
(ノヴァウニオン)
Jose Aldo (Nova Uniao)

#5

ウドソン・ホシャ
(BTT)
Hudson Rocha (BTT)

#6 **ビビアーノ・フェルナンデス** (GBCT)
Bibiano Fernandes (GBCT)

#7 **アンドリ・キックボクサー** (GBCT)
Andre Roubert (GBCT)

#8 **ウィリアム・パルジーニョ** (GTT)
William Parrudinho (BTT)

#9 **ウェリントン・ディアス**
Wellington Dias

#10 **デニエル・オテウ** (ファブリシオJJ)
Daniel Otelo (Fabricio JJ)

「世間じゃブラジリアン・トップチームだ。シュートボクセだというが、
世界一のVTアカデミーは我がノヴァウニオン」と憤慨やるかたないデデ。
果たして、彼の言葉通りノヴァはブラジル国内最強のアカデミーなのだろうか……ということで、
ブラジル人記者二名とガチ編集部の合作ランキングを作成した結果は、この通り。
人選には絶対の自信を持ってお届けしますが、あくまでもしゃれっ気の延長なので、各プロモーション及び
こわ～い選手招聘係の方々、どうか目くじらをたてずに眺めてやってください……。

Photo Marcelo Alonso,Manabu Takashima,Sports navi,Nippon Sports Publisher

というわけで、ブラジル人記者2名＋ガチ・マガジン編集部が選定したランキングは右の通りになったわけだけど、満場一致のトップ選手は、65kgのアレッシャンドリ・ペケーニョと、84kgのアンデウソン・シウバ、93kgのヴァンダレイ・シウバに、最重量級のミノタウロの4名。

ブラジル人のうちの一人が70kgでシャオリンでなく、ブスカペを支持していたのが、意外といえば意外なデスィジョンでした。まぁ、F1のポイントシステムで計算してるんだから、ムチャといえばムチャだけど。あくまでも目安のランキングだから。

アカデミー別では、BTTとノヴァがシュートボクセをやや引き離すという結果が出たのも、ご愛嬌。世間の注目度でいえば、やっぱ93kgとオーバー93kgのわけだから、いくらデデが頑張ろうが、「世界一」と胸を張るには重量級の育成に励むしかない。

オートバイ・レースの最高峰も排気量でクラスが分けられていて、どうしてもエンジンパワーの強いモトGPが世界最速レースと捉えられるのと一緒で、MMA界は重いクラスが断然目立っていて、本当ならポイント的にも重い2階級は3倍増しで計算しても良いぐらい。

シュートボクセの潜在能力の高さは、ここ1年半ほどの離脱劇がなければ、アンデウソン&アスエリオ、ペレが挙げた17Pが加算されていたってことで証明されている。なんて言っても、新加入のアカーシオ、サイボーグ、アゼレドで16Pも稼いじゃってるんだけどね。

それを言えば、BTTのブスカペ、エルミス・フランカ、パルジーニョ、ジュカォン&ボカォン(ややこしい)のお友達コンビも、今はなきウニベルソ・アトレティコやマニマウ柔術からの移籍組みだし、GBCTに至っては全員がファスVTか、マナウスからスカウトしてきた選手ばかり。生粋のバッハ育ちなんて一人もいない。
メッカVTが有名になるまでカーリーニョス総帥が、VT反対派だったんだから、仕方がない話なんだけど。

ノヴァの凄いところは、ランキング入りしている選手にホビーニョ、キキ、シャオリン、ホーキと黒帯の柔術世界王者が4人含まれていること。残りの選手も、ナタウのキムラ・アカデミーからやってきたチバウ以外は、きちんと柔術で結果を残す衣有りでも強い選手ばかり。

同じ世界王者経験者のパイシャオン、ビビアーノのランクが中段にあるのと比べても、「ノヴァは柔術の技術をVTに完全に活かすことができる」という理論の裏づけになっているね。
「ノヴァやいうても、生粋のリオ本部育ちは、シャオリンとホーキ、シェアマンとシャルートぐらいで、残りの選手はナタウやマナウス、ベロオリゾンチで育った奴らやないか、ワレェ」って、文句を言われそうだけど、でも、キムラもカンポスも、みんなノヴァの支部だから。やっぱ、移籍組みとは言えないわな。

でもって、このランキングを見た、全員が全員に個々の意見があって、怒り心頭になる人だって出てくるだろう。

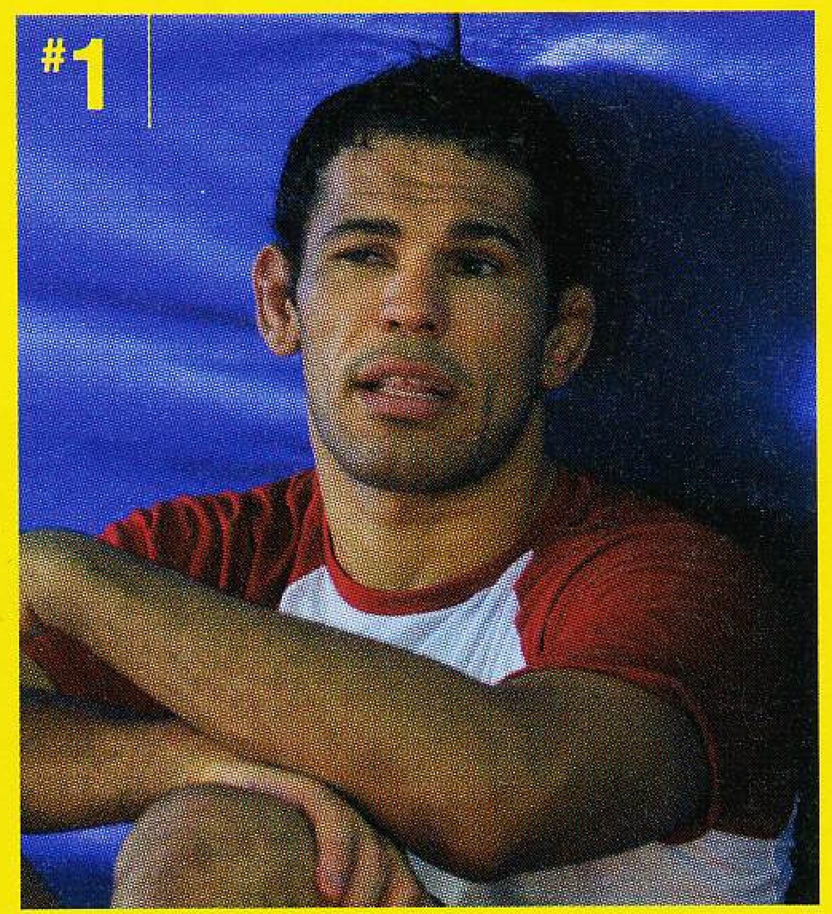
僕らだって、自分で作ったランキング持って、ブラジルのアカデミーを訪れる勇気は、当然ない。

だからさぁ、これは一つの余興なんだから目くじらたてるんだったら、「リングの上で戦え」ってこと。そんでもって、口や政治力じゃなくて、その強さ、万人に見せてくださいと言うことで、この項を締めさせて(逃げさせて?)いただきます。

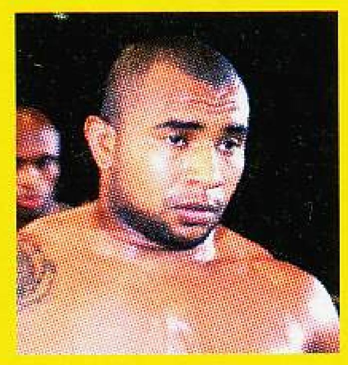
アカデミー別順位トップ5

#1	ブラジリアン・トップチーム	(=74P)
#2	ノヴァウニオン	(=67P)
#3	シュートボクセ・アカデミー	(=33P)
#4	グレイシー・バッハ・コンバットチーム	(=19P)
#5	ムエタイ・ドリームチーム	(=16P)
次点	ファス・バーリトゥード	(=13P)

Over 93kg 93kg以上

#1

アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ(BTT)
Rodrigo Minoturo (BTT)

#2 **ペドロ・ヒーゾ**
(ファス・バーリトゥード)
Pedro Rizzo(Ruas Vale Tudo)


#3 **アスエリオ・シウバ**
(MTDT)
Assuerio Silva (MTDT)


#4 **アントイン・ジャウジ**
(ファス・バーリトゥード)
Antoine Jaoude (Ruas Vale Tudo)


#5 **ジェファーン・タンキ**
(VBチーム)
Jefferson Tnak (VB Team)


#6 **ファブリシオ・ベウドゥム**(チーム・クロコップ)
Fabricio Werdum(Team Cro-Cop)

#7 **マルセーロ・パト**(ノヴァウニオン)
Marcelo Pato (Nova Uniao)

#8 **グラジドール・コサン**(BIT)
Ney Gladiador (BIT)

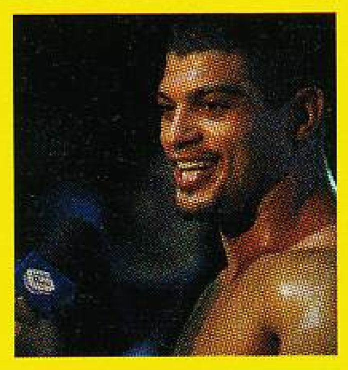
#9 **カーロス・バヘット**(BTT)
Carlao Barreto (BTT)

#10 **ガブリエル・ナパォン**(マカコ・ゴールド)
Gabriel Napao (Macaco Gold)

Up to 93kg 93kg以下

#1

ヴァンダレイ・シウバ(シュートボクセ)
Wanderlei Silva (Chute Boxe)

#2 **ヒカルド・アローナ**
(BTT)
Ricardo Arona (BTT)


#3 **ビトー・ベウフォート**
(BTT)
Vitor Belfort (BTT)


#4 **ヘナート・ババル**
(GBCT)
Renato Babalu (GBCT)


#5 **マウリシオ・ショーグン**
(シュートボクセ)
Mauricio Shogun (Chute Boxe)


#6 **パウロ・フィリョ**(BTT)
Paulao Filho (BTT)

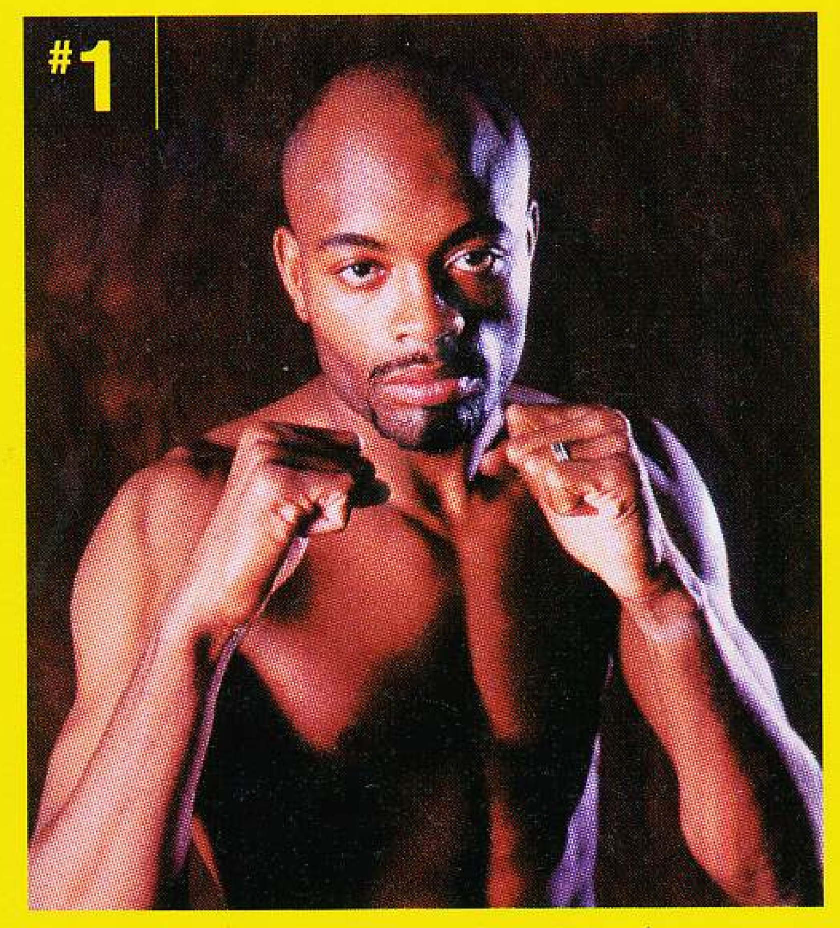
#7 **ホジェリオ・ノゲイラ**(BTT)
Rogerio Minotouro (BTT)

#8 **ムリーロ・ニンジャ**(シュートボクセ)
Murilo Ninja (Chute Boxe)

#9 **エベンゼール・ブラガ**(ボクセタイ)
Ebenezer Braga (Boxe Thai)

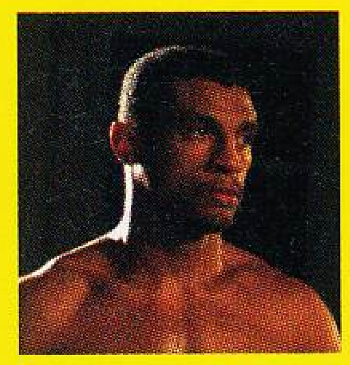
#10 **マリオ・スペーヒー**(BTT)
Mario Sperry (BTT)

Up to 84kg 84kg以下

#1

アンデウソン・シウバ(MTDT)
Andrson Silva (MTDT)

#2 **ダニエル・アカーシオ**
(シュートボクセ)
Daniel Acacio (Chute Boxe)


#3 **ムリーロ・ブスタマンチ**
(BTT)
Murilo Busutamante (BTT)


#4 **ホアン・ジュカォン**
(BTT)
Roan Jucao (BTT)


#5 **ホドリゴ・グレイシー**
(ヘンゾ・グレイシー)
Rodorigo Gracie (Renzo Gracie)


#6 **グスタボ・シム**(GBCT)
Gustavo Ximu (GBCT)

#7 **エヴァンゲリスタ・サイボーグ**(シュートボクセ)
Evangelista Cyborg (Chute Boxe)

#8 **ジョゼ・ペレ・ランジ**(ペレ・チーム)
Jose Pele Landy (Pele Team)

#9 **ジョルジ・マカコ**(シュートボクセ)
Jorge Macaco (Chute Boxe)

#10 **ターレス・レイチ**(ノヴァウニオン)
Thales Leite (Nova Uniao)

Up to 7
#1


ランキング制定方法は、ブラジルから参加のマルセーロ・ピレス・アロンソ、アレッシャンドリ・ロボ、ガチ編集部がそれぞれ個別にランキングを作成。
バラつきが見られた場合は、平均を取り、数が少ない者が上位に。また、複数の支持を得られていない選手に関しては、知識とキャリアを顧みてアロンソ、ロボ、編集部の順に上位に位置づけられる。
アカデミー別ポイントには、1位から8位まで各10～8～6～5～4～3～2～1というF1GPにならった点数が与えられる

バーリトゥード、ポルトガル語で「何



フ
ン。

ライクな雰囲気など、これっぽっちも感じ

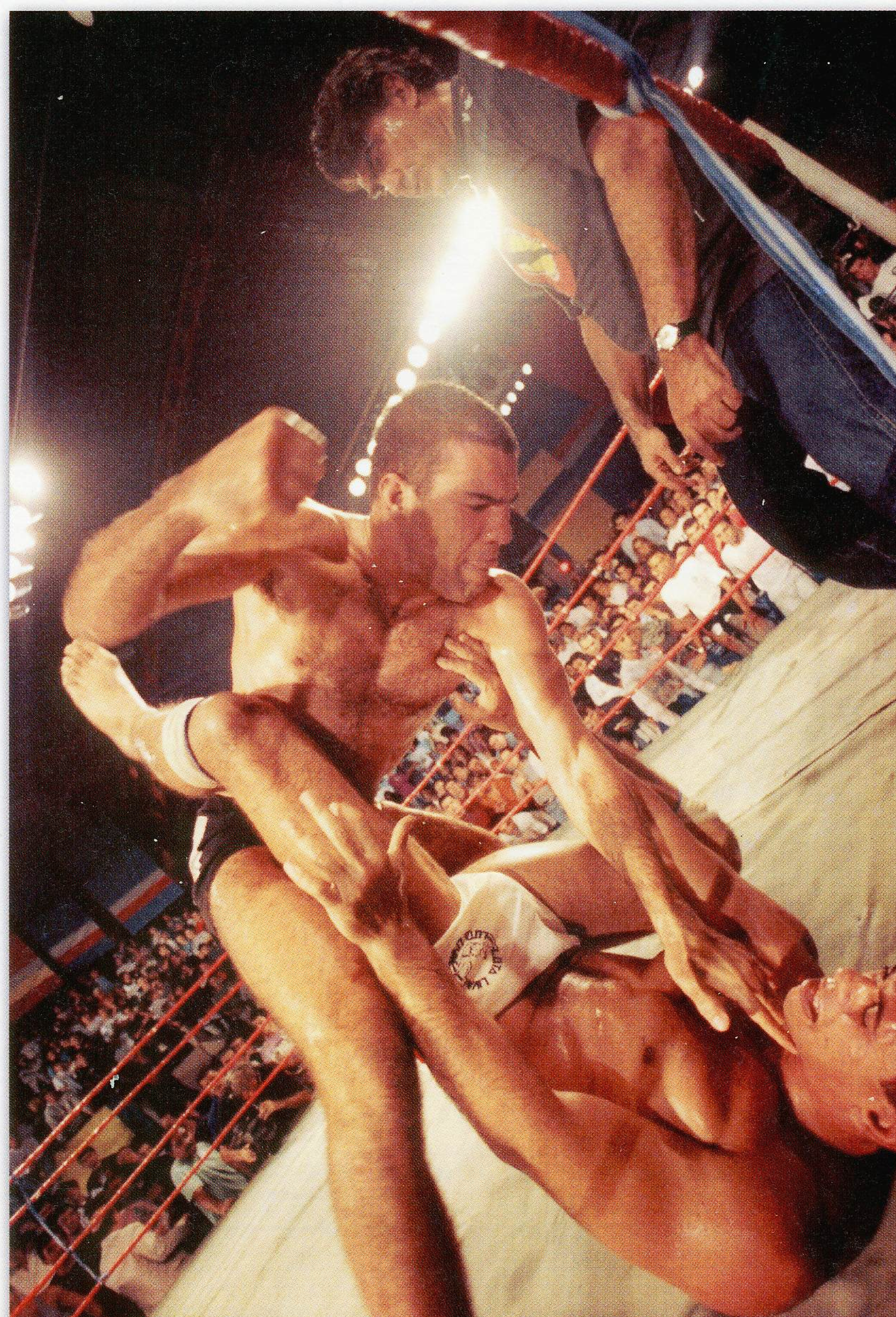
ブラジリアン柔術 VS ルタリーブリ

今から13年ほど昔、
ブラジルではルールや、競技VS競技の優位性などという謳い文句もなく、
戦う者が人間として根っこの部分にある大切なモノを賭けて戦う『何でも有り』——、バーリトゥードが行われていた。
それは「バーリトゥード」という言葉を聞く者にも、何かしらの覚悟を要求するような響きのある戦いであった。

text by Marcelo Alonso and Manabu Takashima　　photo by Robert Price and Alcyr Cavalcante AJB

名誉と尊厳、強さに憧れる欲を満たすためだけのバーリトゥード

最後のバーリトゥード、1991年8月31日。



バーリトゥード、ポルトガル語で「何でも有り」を意味する言葉――、ということをわざわざ説明する必要がなくなって久しい。小雪が舞うデンバーで、初めてUFCが行われてから、もう11年もの歳月が過ぎ去った。

ホイス・グレイシーの名を、初めて耳にしてから、11年が経ったのである。

PRIDEブーム、K-1の総合進出、大晦日のテレビ局を巻き込んだ（主体の？）興行戦争が恒例となった日本で、グレイシーという名は、曙と並んで、一般層に理解されている。

チーム・ヨコヅナ所属の曙と、総合ルールで戦うホイス・グレイシー。

この総合ルールとバーリトゥードは同義語と捉えて良いのだろうか。

かつてバーリトゥード、「何でも有り」と呼ばれた試合は、今、巷ではPRIDEルール、ネヴァダ州ルール、パンクラス・ルール、修斗ルール、DEEPルールに形を変え、格闘技界に氾濫している。

厳密にいうと、ヒジ打ち、踏み潰し、頭突き、髪の毛を引っ張る行為の一つでも禁止され、さらに膠着ブレイクがある2004年の「何でも有り」は、もう決して何でも有りではない。

ルールに捉われようが捉われまいが、今、我々の目の前で行われている総合格闘技は、あの11年に前に知った語感の響きをもう持つことはない。

パウンドやパスガード、リバーサルという用語を誰も知らなかった時代。

寝技の状態で相手の顔面を殴る。

腕を折っても戦意がなくなるとは限らないからチョークで眠らせる。

そんなグレイシー柔術の使い手の戦いは、ホイスの「グレイシー柔術のために死ねる」という言葉とともに、総合夜明け前夜の格闘技マスコミを虜にし、一方で「バーリトゥード」という言葉には、その単語を聴く者、戦いを目にするだけの者にも、何か覚悟のようなものを突きつける、深い響きがあった。

後がない者の戦い。

制限時間、ルールや、競技VS競技の優位性などという謳い文句は関係ない。戦う者の人間として根っこの部分にある大切なモノを賭けて戦う場。それこそが、11年前に感じられた「何でも有り」――、バーリトゥードの本質だった。

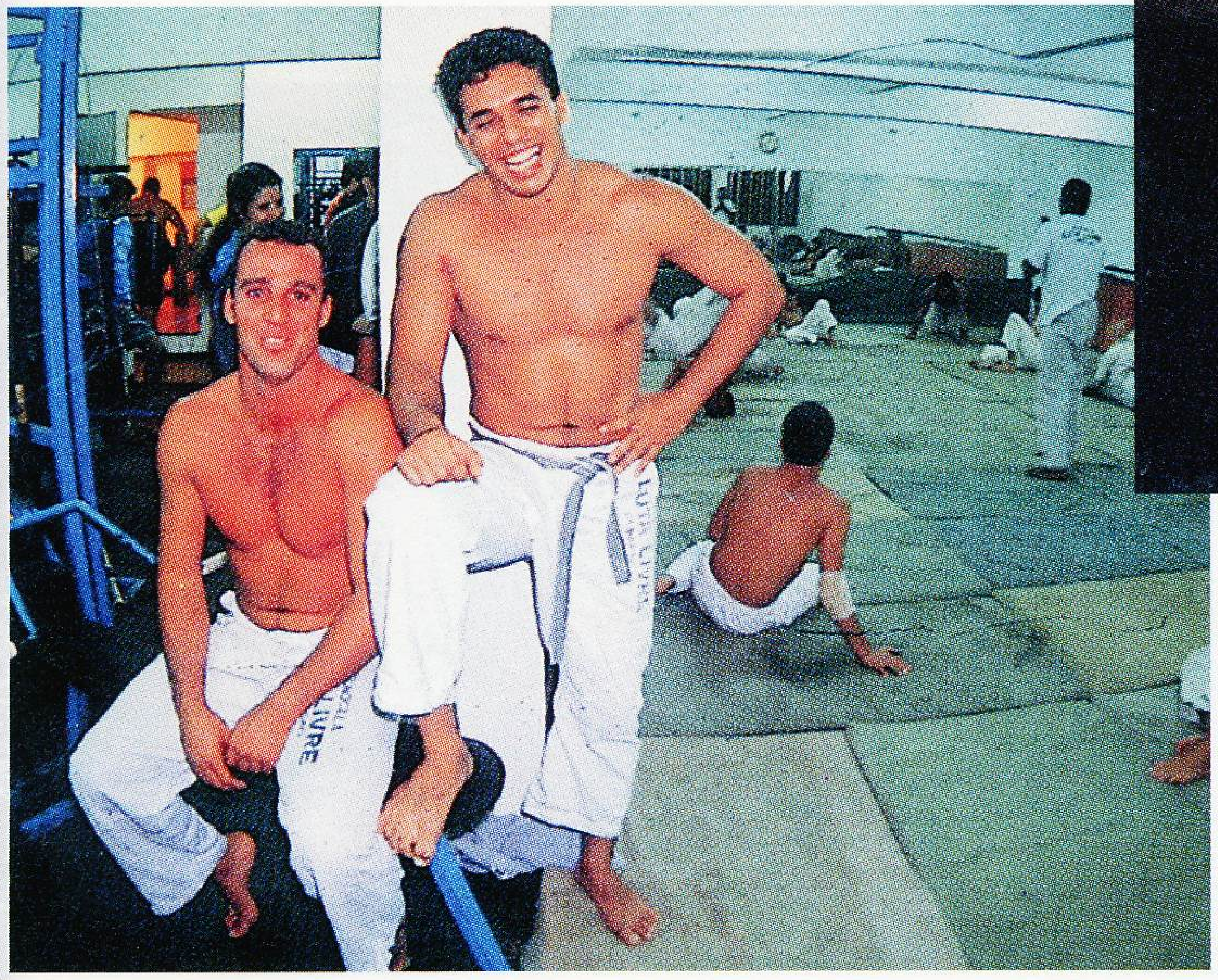


カーウソン・グレイシーが開いた合同キャンプ。前列左から対抗戦に出場したヴァリッジ・イズマイウ、ファービオ・グージェウ、ムリーロ・ブスタマンチ。後列右端はマリオ・スペーヒー、その左がカーウソン。二人挟んで、アラン・ゴエス。

バーリトゥードは柔術を守る戦い

もちろん、当時日本のマスコミは、バーリトゥードが、グレイシー一族の威信をかけた戦いであると同時に、その名を上げるためのビジネスという側面を持っていたことを知らなかった。

いや、たとえ誰かに聞かされたとしても、そんな無粋なことは、誰も受け入れなかったに違いない。UFCが始まった当時、ブラジルに残ったグレイシー一族や、米国進出を睨むブラジリアン柔術家たちが、会場を訪れていたが、彼らからそんなビジネスライクな雰囲気など、これっぽっちも感じられなかった。



決戦前のウゴ・デュアルチとデニウソン・マイア。当時、ルタリーブリは道衣の下だけを着用していた。

バーリトゥードという言葉は、彼らの切羽詰まったような、焦りにも似た緊迫間が、言葉尻に詰め込まれ、記者陣だけでなく読者の耳、そして胸の中に伝播した。

UFCの会場で見たブラジリアン柔術家たちから、余裕が感じられなかったのは、当然のことだ。ブラジルで、一度はグレイシーの優位性を崩されかかった時代を、あの場にいた柔術家の多くが経験している。

エリオやその弟子の時代に、グレイシーの名、柔術の優位性をアピールするため行われていたバーリトゥードだが、その戦いはいつの間にか、グレイシーの名、柔術の優位性を守るための戦いに、意味合いを変えていたのだ。

ヒクソン・グレイシーVSズールの2連戦に続き、1984年11月30日にリオデジャネイロのマラカジーニョで実現した柔術VSムエタイ&ルタリーブリ連合の対抗戦。1勝1敗1分という痛み分けに終わったものの、黒帯柔術家ヘナン・ピタンギを破ったエウジェニオ・タデウ、カーウソンの一番弟子フェルナンド・ピンドゥーカとドローを演じたマルコ・ファスの名が、一躍、ブラジル格闘技界に響き渡り、柔術家たちは、いよいよ追い詰められていった。

この大会後、ムエタイ&ルタリーブリ連合では、寝技ができないムエタイ選手が第一線を退き、組み技もこなせるファスらが、ルタリーブリと合体、柔術に対する挑発行為が本格的になっていく。

裕福な階層を中心に1万人以上の道場生を持つ柔術に対し、わずか3つのアカデミーに、400人の練習生を数えるだけのルタリーブリ。彼らは飢えた野獣のごとく、その名を上げるために夜の繁華街や、休日のビーチで柔術家を見つけては、小競り合いを起こしていた。

ルタリーブリの狙いは、強い柔術の象徴ヒクソン・グレイシーのみ。

この頃、エリオ・グレイシーが一人でコパカバーナのマリオ・ファスのアカデミーを訪れ、ヒクソンVSファス戦の実現の交渉を行ったが不発に終わり、1998年にバ

ッハのペペビーチで柔術VSルタリーブリの大乱闘、さらにウゴ＆エウジェニオによるグレイシー・アカデミー急襲と、まさに私闘と呼ぶに相応しい、バーリトゥードが、2つのグループの間で続いていた。

そして、ウゴがヒクソンに敗れ、エウジェニオがホイラーと50分に渡る痛み分けのプライベート・バーリトゥードを終えた夜、ヒクソンはリオデジャネイロを後にし、米国カリフォルニアに旅立っていった。

ペペビーチの乱闘はともかくとして、アカデミーでのバーリトゥードで、ウゴは完全にヒクソンに遅れをとった。にも関わらず柔術VSルタリーブリのパワーゲームが、混迷を深めることになったのは、ヒクソンがリオを去ったことが最大の要因となっている。

その頃、まだ茶帯を巻いていたファービオ・グージェウは、「いかにも人間ドラマっていう感じだったよ。柔術はヒクソンという支柱を失い浮き足だち、ウゴが負けたばかりのルタリーブリが、反対に勢いづいてしまったんだから」と、当時を振り返る。

強い柔術を守るために、グージェウと同世代のムリーロ・ブスタマンチ、アマウリ・ビテッチ、ヴァリッジ・イズマイウらが、ヒクソンの愛弟子マルセーロ・ベーリンギとともに立ち上がる時がやってきた。

よく言えば己の信念を貫くために、悪く言えば「己の強さを誇示する欲求のために」、全てを賭けた戦いに挑む。

ヒクソンが米国へ去ってから、1年8カ月——。ルールや、競技VS競技の優位性などという謳い文句でなく、戦う者の人間として根っこの部分にある大切なモノを賭けて戦う時、1991年がやってきた。

カーウソンの指揮で団結した新世代

1月、新世代の一人ヴァリッジ・イズマイウが、リオの地方紙『オ・ジア』の取材で「柔術は無敵のアートだ。もし、それを疑う者がいるなら、誰の挑戦でも受ける」と、ルタリーブリ勢を挑発した。

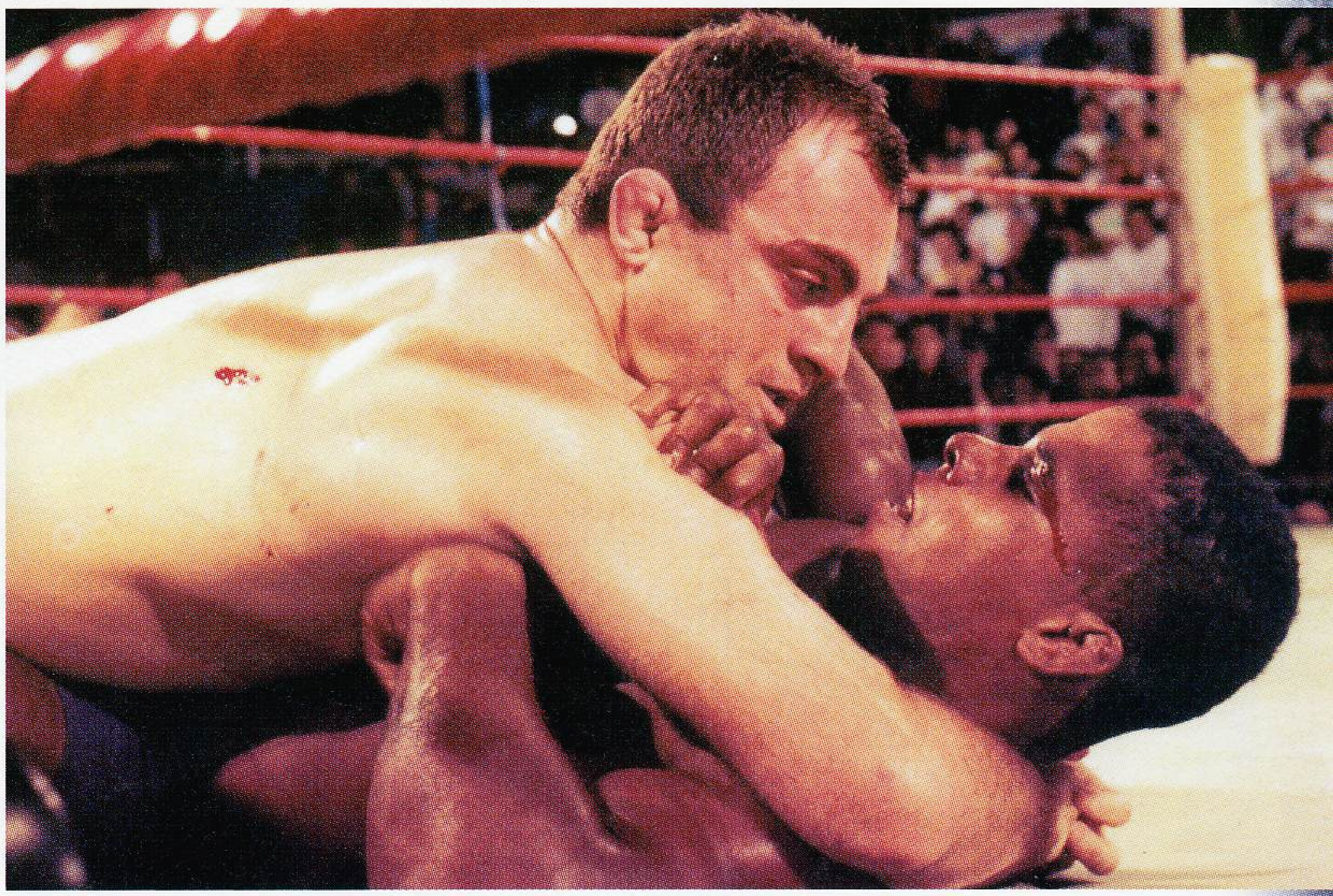
しばらくして、柔術トーナメント「コパ・ノストラ」の会場に、マルセーロ・メンジス、デニウソン・マイア、マルコ・ファス、エウジェニオ・タデウ、ウゴ・デュアルチのルタリーブリ版オールスターキャストが、姿を見せた。

メンジスは言う。「エウジェニオとホイラーの戦いで、僕らは凄く自信をつけていたんだ。今なら、柔術に勝てるってね。『この場で、柔術の代表5人に出てきてもらって、プライベート・バーリトゥードで決着をつけよう』なんて、鼻息も荒くカーウソンに詰め寄ったんだ」

トーナメントを中断し、カーウソンがムリーロ・ブスタマンチ、マルセーロ・ベーリンギとともに、体育館の一部屋に姿を消した。数分後、再びルタリーブリ勢の前に姿を現したカーウソンは、日を改めて、きちんとプロフェッショナルの試合とし、双方5人の代表が戦うことを提案。ルタリーブリ側から、この要求に異論を唱える者はいなかった。



ヴァリッジ・イズマイウ【2Ｒ7分20秒戦意喪失】エウジェニオ・タデウ。



カーウソンの教え子がブラジル最大手テレビ局『ヘジ・グローボ』に勤めており、その人物を介してディレクターに話が通り、柔術VSルタリーブリは、全国中継されることが決まった。

決戦の場所はカラジャウ・テニス・クルービ、日取りも（当初の予定では7月開催だったが諸事情で）8月31日に決定した。

カーウソンは、柔術の歴史でも例を見ないアカデミーの垣根を越えたバーリトゥード合同トレーニングを4カ月に渡り開き、その中から5名の柔術代表を選出することを明らかにした。

「本当に多くの柔術家から対抗戦に出場させて欲しいという要望が届いた。ただ、私には柔術の名誉を守るために最高の5人を選ぶ必要があったんだ。もちろん、私の教え子だけでも、その5人を編成することはできた。だが、あの戦いはくどいようだが、柔術の名誉を守るためのバーリトゥードだった。柔術界がルタリーブリを倒さなければならない。だから、ホメロ・カバウカンチの教え子ファービオと、ヒクソンの黒帯だったマルセーロ・ベーリンギ、そして私のところから、ヴァリッジとムリーロ、アマウリを抜擢した」

カーウソンが、5人の代表選手を選択したことによって、対戦カードが左のように固まった。

ヴァリッジ・イズマイウVSエウジェニオ・タデウ。

ファービオ・グージェウVSデニウソン・マイア。

マルセーロ・ベーリンギVSウゴ・デュアルチ。

アマウリ・ビテッチVSマルコ・ファス。

ムリーロ・ブスタマンチVSマルセーロ・メンジス。

対戦カードが決まり、柔術側の合同トレーニングは熱がより一層高まった。

「あの4カ月間のトレーニングは、私の人

生のなかで、最も他人から色んなことを教わった時間になったよ。グレイシーのトップ選手がいない戦いだから、柔術を守るために誰も必死になっていた。結果的に、その後の柔術の発展にも大きな役割を果たした4カ月だったと思う」（グージェウ）

合同トレーニングは1日2度のルーティンワークで進んでいった。

午前中にはまず、ボクサーを相手に、パンチを捌いてテイクダウンの練習を繰り返す。そして週に3日は寝技のスパーリング、残りの3日は打撃とウェイト。

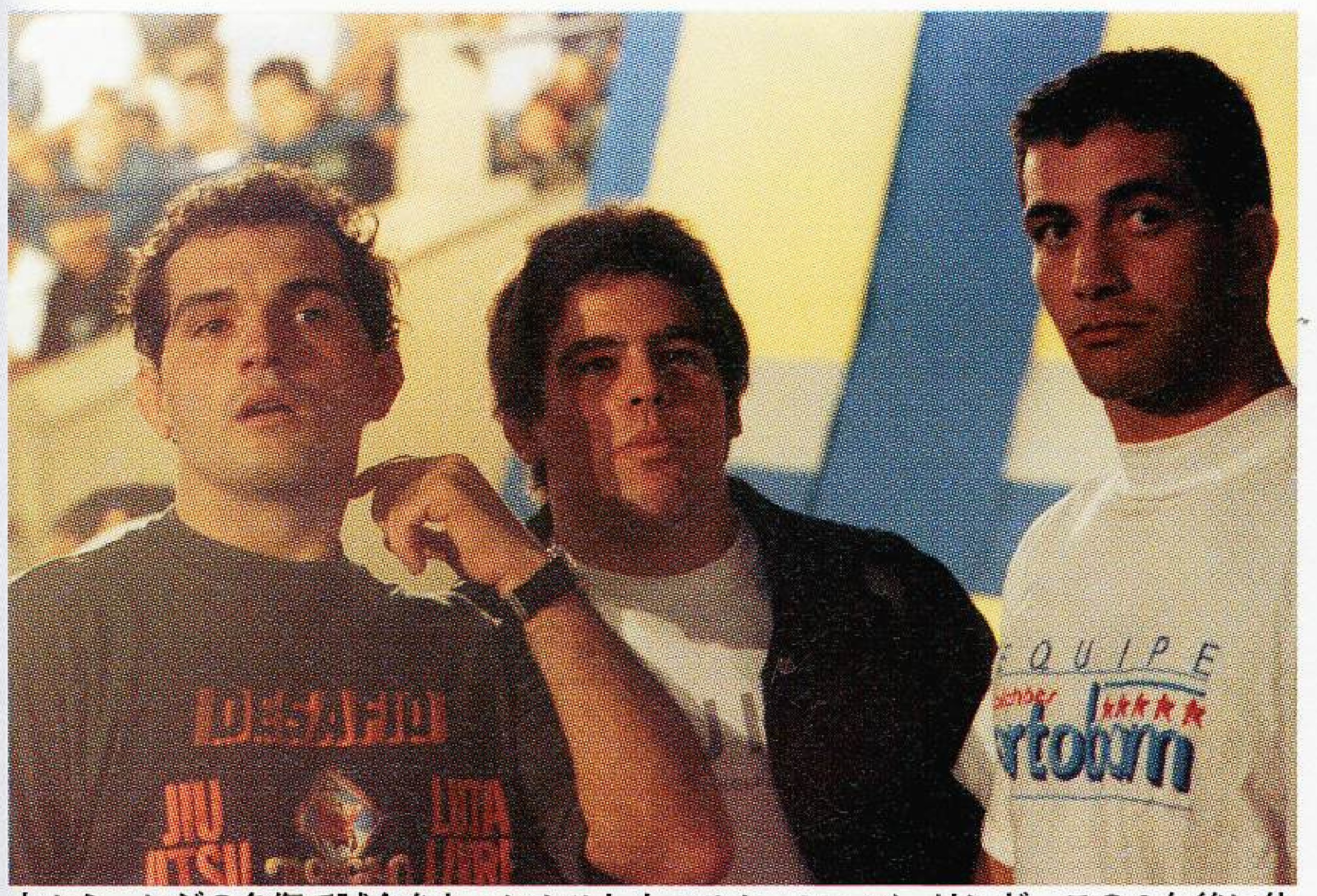
夜の部の練習は、テクニックの練り直しが主なメニューだった。次世代の中心選手として選抜された選手たちだが、実は道衣を脱ぎ、打撃を取り入れたトレーニングは、この時が始めてだった。

「それでも才能ある連中ばかりだ。すぐにコツを掴んで、柔術の技を裸で、打撃有りでもすぐに使えるようになった」とカーウソン。

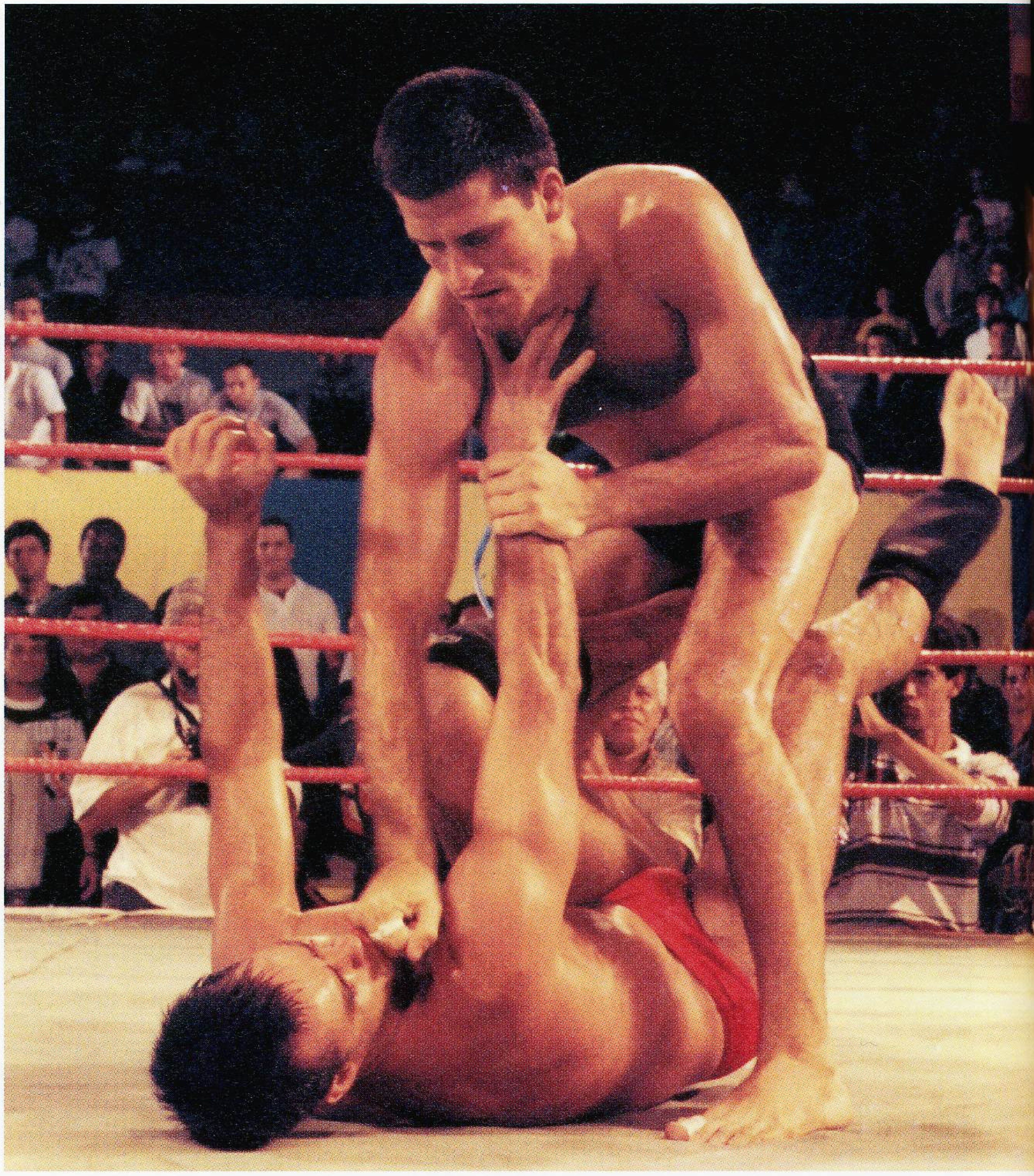
この間、アマウリ・ビテッチがわき腹を負傷し、対抗戦出場が不可能に。ただ、このアクシデントは、対戦相手のファスが「同時期にマナウスでバーリトゥードの大会があり、ファイトマネーが2倍だった」という理由で、対抗戦出場をキャンセルし、大きな問題にはならなかった。

それにしても、ヒクソンのいない間に、柔術制圧を企てていたルタリーブリ側だが、彼らにはファスのキャンセルに代表されるように、一丸となって戦うという意思の統一は見られなかった。

「返す返すも、もったいないことをしたと思う」。こう話を切り出したのは、ルタリーブリ史上最高のテクニシャンと呼ばれていたデニウソン・マイアだ。「あの前年に、僕らの師カルロス・ブルノシーラは、ルタリーブリを創設した父ファウストを亡くして、20年も続けていた指導をやめていたんだ。ルタリーブリには、カーウソンのような纏め役はいなかったし、合同練習なんて一度も行われなかった。僕らは、自分自身の練習をいつもと同じように繰り返していたんだ。今からすれば、団結力の差こそ、柔術に遅れをとった原因なんだろうね」



左から、ヒジの負傷で試合をキャンセルしたマルセーロ・ベーリンギ。この3年後に他界。アマウリ・ビテッチ。マリオ・スペーヒー。


ムリーロ・ブスタマンチ【1R4分23秒戦意喪失】マルセーロ・メンジス。

運命の柔術VSルタリーブリ対抗戦。この大会に向けて、ルールディレクターと最後の2試合のレフェリーを務めた往年のバーリトゥード・ファイター＝ジョアォン・アルベルト・バヘットは、自ら相手の腕を折り、VT番組が打ち切りになった過去を思い浮かべ、一つの提案を選手側にしていた。

「この大会は、プロフェッショナルの戦いとして、ブラジル全土に放送される。バーリトゥードが危険だというイメージを人々に与えてはいけない。パンチに頼らず、クリーンな試合をしてほしい。よって、拳を握ることは反則にして、打撃はオープンハンドのみにしたい」と。

VTの何たるかを知っているからこそのバヘットの進言。しかし、これを聞き入れる選手は、一人もいなかった。

「何にも知らないイベント屋に、ホビソン・グレイシーまでが『戦いはそれほどヴァイオレンスにはならない』なんて、説明してやがった。俺たちが柔術の名誉を賭けて戦うというのに」とイズマイウは、現場の雰囲気を思い出すと、今も怒気を含んだ声になってしまう。

ヘジ・グローボという巨大メディアがついたことで、エリオの弟子世代の人間は、往時の華やかな柔術天下を思い起こしていたのかもしれないが、この戦いに挑む柔術家も、ルタリーブリ側のファイターも、誰一人として、これから行われる戦いが、そんな綺麗ごとで済むとは思っていなかった。

なんせ彼らがこれまで歩んできた格闘人生、これから生きていくための格闘家としての誇りを賭けて戦うのだ。テレビ中継されるからといって、自分たちの生き残りを賭けた戦いを平穏に済ませる気など起こりようがない。

ルールは、1ラウンドが15分間の2R制。拳を握ることはもちろんのこと、ヒジ打ち、頭突きも最終的に許されることになった。出場選手の気迫に運営陣が、気圧される形で決着がついたのである。

1991年8月31日、第1試合に出場するヴァリッジ・イズマイウと、エウジェニオ・タデウがリングに上がった——。

人間として、絶対に譲ることができない、引くことが許されない何でも有りの戦い——、バーリトゥードがついに始まった。

前評判では茶帯のイズマイウを、ホイラーと互角の戦いをやってのけたタデウが圧倒していた。しかし、試合開始直後のパンチの打ち合いで攻め込まれたイズマイウが、ここでテイクダウンに成功した。

すぐにガードから腕がらみを仕掛けたタデウ。イズマイウは慌てず、腕を引き抜くと、ここで頭突きを見舞っていく。早くもタデウの目尻から、鮮血が流れ落ちる。

リングサイドを埋め尽くした柔術勢が、「ヴァリッジ」コールを高々と叫び始めた。

3分後、タデウの体がエプロンに出てしま

ったので、リング中央でスタンドの状態から試合は再開された。ヘンゾ、ハイアン、ヒカルド・リボーリオ、アラン・ゴエス、アマウリ・ビテッチ、2週間前にヒジを負傷し、この日の不戦敗が決まっていたベーリンギ、柔術勢が津波のように押し寄せるリングサイドで、マルコ・ファスが「ここからだ。しっかり、パンチを狙え」とタデウに指示を送る。

ルタリーブリ側で、リングサイドにいるのは、ファスと不戦勝を得たウゴ・デュアルチだけだった。

相変わらず打撃の攻防では、タデウがイズマイウをリードするが、やや時間を要したものの、ここでもイズマイウが試合を寝技に持ち込む。インサイドガードから、頭突きとパンチ、今でいうパウンドを見舞うイズマイウにも、試合を裁くレフェリーにも、ラウンド終了の合図が聞こえず、30秒も余分にタデウは拳を顔面に受けてしまう。

2R、3度テイクダウンを奪われたタデウを、イズマイウの拳が襲い続ける。両者がエプロンに出たところで、レフェリーが試合を止める。この直後のスタンドの展開が、タデウにとって一番の好機となった。

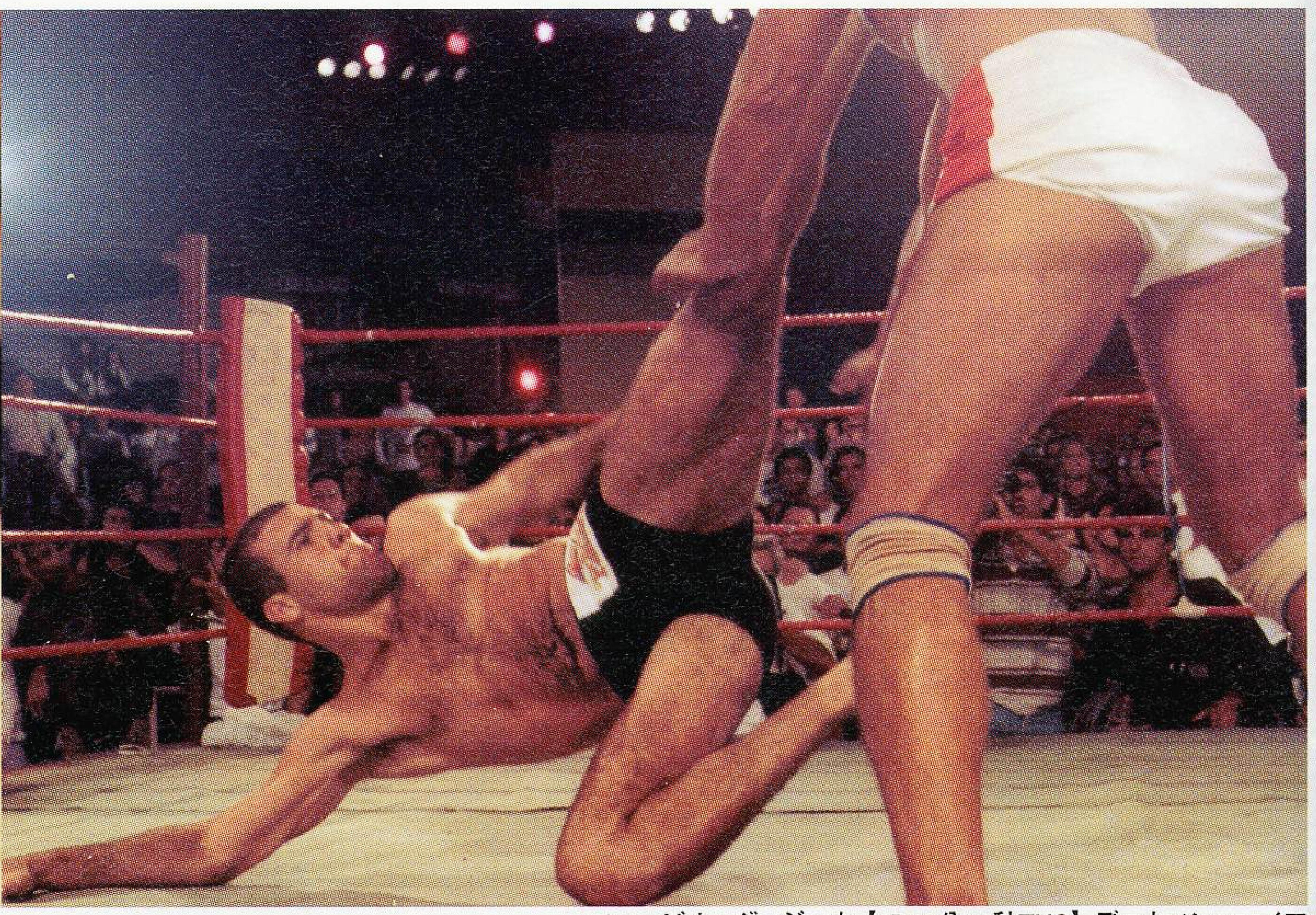
ようやくパンチの連打をヒットさせたタデウだが、結局はテイクダウンを奪われる。成す術もなくパンチを受けるが、ここで両者が同体でリング下に転落。柔術勢の声援をバックにいち早くリングに戻ったイズマイウに対し、精根尽き果てたタデウはリングになかなか戻ってこない。

レフェリーはカウントを数え始め、10カウント後にイズマイウの勝利を宣言した。

「ホイラーと痛み分けだったタデウに勝てて、本当に嬉しかった。正直言って、あれは番狂わせだったからムリーロもファービオも気が楽になったと思う」（イズマイウ）

タデウの敗戦に関して、メインに出場したデニウソン・マイアは、「ヴァリッジの言うことは正しいよ。あの瞬間から、悪いことばかり頭に浮かぶようになった」と、対抗戦の流れが柔術に傾いたこと認めるコメントを、13年後に述べている。





ファービオ・グージェウ【1R10分14秒TKO】デニウソン・マイア

何とか、流れをルタリーブリ側に戻そうと、第2試合の不戦勝をリング上でコールされたウゴは、ここで「誰でもいいから、ここに上がって来い」と柔術側を挑発した。だが、返答は「ヒクソンならお前を極める」という大合唱だった。

「あの日、俺は最高のコンディションだったんだ。あそこで俺がベーリンギをコテンパンにしておけば、メンジスもマイアも違った気持ちでリングに上がれていたのに。全ては俺たちにとって悪い方向へ、悪い方向へ向かって行ったんだ。俺は今もベーリンギがケガをしていたなんて信じていないし、どっちにしても柔術側が誰も代役を用意しなかったことが信じられない。本当に悔しいよ」（ウゴ）

運命の闘いは柔術の圧勝に

「マルセーロは当時、最強の柔術家だったんだ。僕は一緒に病院へ行ったが、彼は戦える状況になかった。1週間も薬を飲み続けて、彼は戦うつもりだったけど無理だったんだ。もし、彼がヒジをケガしていなければ？　当然、苦もなくウゴから一本を奪っているよ」。事実上の第2試合に出場したブスタマンチは、ウゴの言葉をクールに否定し、今は亡きマルセーロ・ベーリンギに最大の賛辞を贈る。

今も昔も変わらず非常に冷静なブスタマンチは、この運命のバーリトゥードさえ、気負いを見せることなく、苦もなく勝利する。最初こそメンジスにテイクダウンを奪われたものの、寝技に持ち込まず、ローキックを繰り出すメンジスに対して、レフェリーがブレイクをかける。

ちなみに当時のブレイクは、観客のための膠着ブレイクではなく、しっかりと正面から選手を戦わせるための手段だった。

ここから戦いはブスタマンチの独壇場に。バックをとってテイクダウンし、マウント。メンジスがエプロンに逃げたため、またもや試合はスタンドから仕切りなおしとなったが、かまわずブスタマンチは、パンチの連打をメンジスに見舞っていく。

打撃戦でもイニシアチブを握ることができないメンジスが、苦し紛れのタックルへ。そこにブスタマンチのヒザがヒット。再度バックを取ると、メンジスは場外に逃げ出し、二度とリングに戻ってこなかった。

ブスタマンチの勝利で、敗北がなくなった柔術勢が、場外で「ジ・ウ・ジッツ！」の大コールを巻き起こす。今ではごく普通にどこの会場でも聞かれるようになった、このコール。このとき、初めて自然発生的に起こったものだという。

敵前逃亡のメンジスは、緊張のあまりマウスピースを忘れてリングに上がり、あの時点で既に歯が2本折れていたらしい。

完全に浮き足だっていたルタリーブリ勢だが、全敗だけはどうしても避けたい。最終試合、リングに上がったデニウソン・マイアは、いきなり両足タックルでファービオ・グージェウからテイクダウンを奪う。

期せずして起こる「デニウソン」コール。しかし、ルタリーブリ・サポーターの必死の叫び声も、30秒と続かなかった。グージェウが、ガードポジションの体勢から、足を振り上げマイアの顔面を蹴り飛ばす。

「デニウソンにダメージはなかったと思う。でも、あれで完全に気持ちが切れたのが分かった。あの一発の蹴りが、試合の趨勢を決定づけたんだ」（グージェウ）

動きの止まったマイアは、ブレイクによる再開後にテイクダウンを許すと、懸命にしがみつくだけで、有効な反撃は何一つ見せることはなかった。その後、ガードからのパンチで、鼻血を流したマイアに対し、パスガードの名手グージェウは、一気にパスからマウントを奪取。ここから約2分間、パンチを落とした続けたグージェウが、レフェリーの試合ストップにより、TKO勝利をモノにした。

ウゴ・デュアルチは「ジ・ウ・ジッツ！」コールの雨の中、立ち上がれないマイアを背負い、無言でリングを下りた。

7年間の遺恨の決着は、呆気ないほど一方的な展開で、柔術側に勝利の女神は微笑んだ。前述したデニウソン・マイアの言葉ではないが、この対抗戦に向けた前段階で、柔術側の勝利はほぼ決まっていただろう。

絶対に負けられないという逃げ道のない

怖さ、全てを失うリスキーさをより真剣に受け止めていた柔術勢が、技や体力、政治力でなく、人間力でルタリーブリ勢を打ち破った戦いであった。

なお、この3試合を放映したヘジ・グローボは、あまりにも凄惨な場面の連続に、バーリトゥード中継の禁止を決定。

そのヘジ・グローボの中継をクリチーバで見ていた同地のムエタイ・ジムのオーナーは「初めてバーリトゥードを見て、これは真剣に寝技を取り入れないといけないと思うようになった」という。シュートボクセ・アカデミーのフジマール・フェディリコ会長、その人である。

柔術への信頼、ルタリーブリの野望が賭けて戦われたバーリトゥードが、後に最強の総合格闘技チームをつくる人物に、競技バーリトゥードで強くなるヒントを与えていたとは、柔術を守るために戦ったムリーロ・ブスタマンチも、想像できなかったに違いない。

柔術VSルタリーブリのバーリトゥード決戦は、総合格闘技完成の第一歩という役割も果たしていたのである——。

名誉と尊厳を賭けたバーリトゥードの終焉

柔術の大勝で終わったバーリトゥード開催から、2年9ヵ月に第1回UFCが行われ、バーリトゥードは本格的にビジネスとリンクしていく。

（お金を稼ぐために）柔術を守る時代に入っても、柔術とルタの確執は続き、97年9月のペンタゴン・コンバッチでは、ヘンゾ・グレイシーとエウジェニオ・タデウの試合で、ついに警官隊が出場する300人以上の大乱闘劇が起きてしまった。

ペンタゴン・コンバッチの乱闘劇から、1年10ヵ月後、PRIDE4のリングでマーク・ケアーと対戦したウゴ・デュアルチのコーナーには、カーウソン・グレイシーの姿が見られた。

「ケアーのような強豪と戦うのに、ウゴのセコンドはたった一人だった。それを見て、体が勝手に動いていたんだ」

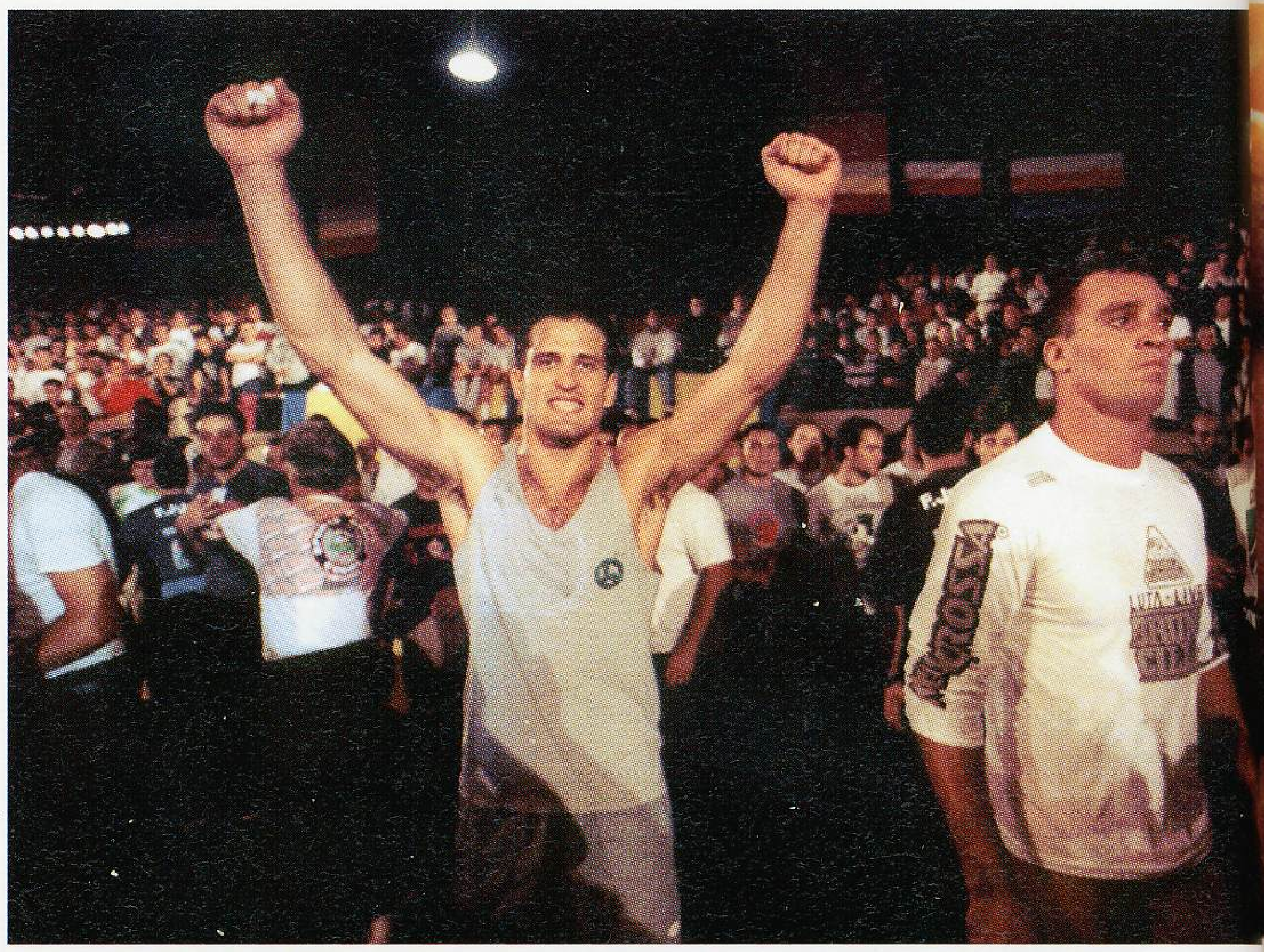
もう、柔術だ、ルタリーブリだと騒ぎたててもしょうがない時代、総合格闘技時代が到来していた。

1991年8月31日にリングに上がった人間で、今も現役としてグッドシェイプを保っているのは、ムリーロ・ブスタマンチ一人になった。

柔術もルタリーブリも、完全に世代交代を果たし、今となっては憎しみ合っていた時代が嘘のように感じられるほど、双方に壁はない。

柔術は柔術、ルタリーブリはルタリーブリ、そして総合格闘技は総合格闘技。試合場を下りれば、遺恨など残りようもないスポーツに発展した。当時では考えられないようなファイトマネーも、選手の手に入るようになった。

ファイトマネーは二の次、勝ったからといって、次の試合が約束されるわけでもなんでもない、名誉と尊厳、強さに憧れる欲を満たすためだけに、ビーチやアカデミー、そしてリング上で戦う時代はもう、完全に過去の話になってしまったのだ。



グージェウの勝利に両手を挙げるムリーロ。となりのウゴと、完全な勝者と敗者のコントラストが浮かび上がっている。



リング上を占拠する柔術軍団。今もブラジルのバーリトゥードでは、これに似たシーンを目にするが、やはり習慣としてお約束事でやるのと、心のそこの衝動を抑えられないで上がるのでは、雰囲気は全く違う。

ガチ! MAGAZINE プレ

Gachi! Magazine Present



1 山本"KID"徳郁ポスター
5名様　提供：(株) FEG



2 山本"KID"徳郁ステッカー
5名様　提供：(株) FEG



3 山本"KID"徳郁ポストカード
5名様　提供：(株) FEG



4 "Max Speed"メッシュキャップ
5名様　提供：(株) FEG



5 K-1 "TRIBAL" Tシャツ
5名様　提供：(株) FEG



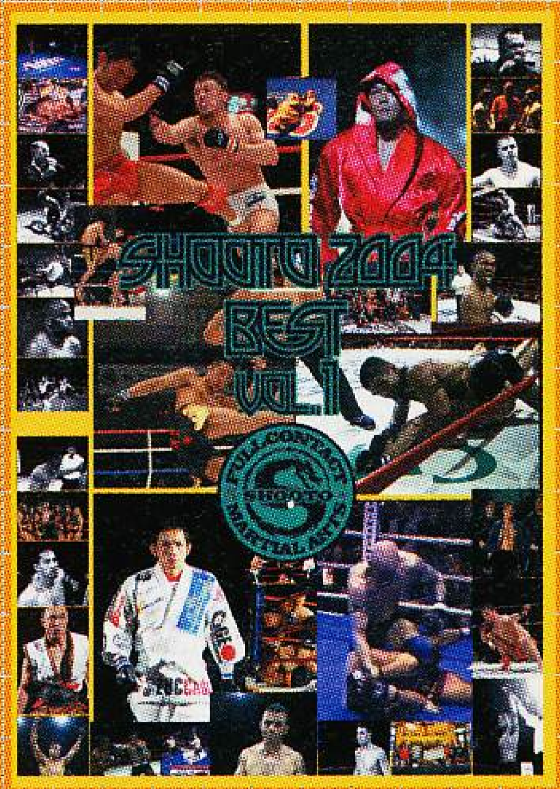
6 WGPフェイスタオル 1993
5名様　提供：(株) FEG



7 伊藤崇文
サイン入りポラ　4名様



8 絶賛発売中! SMACK GIRL 聖地凱旋　2004.8.5
後楽園ホール　3名様　提供：(株) クエスト



9 絶賛発売中! 修斗 2004 BEST vol.1
3名様　提供：(株) クエスト

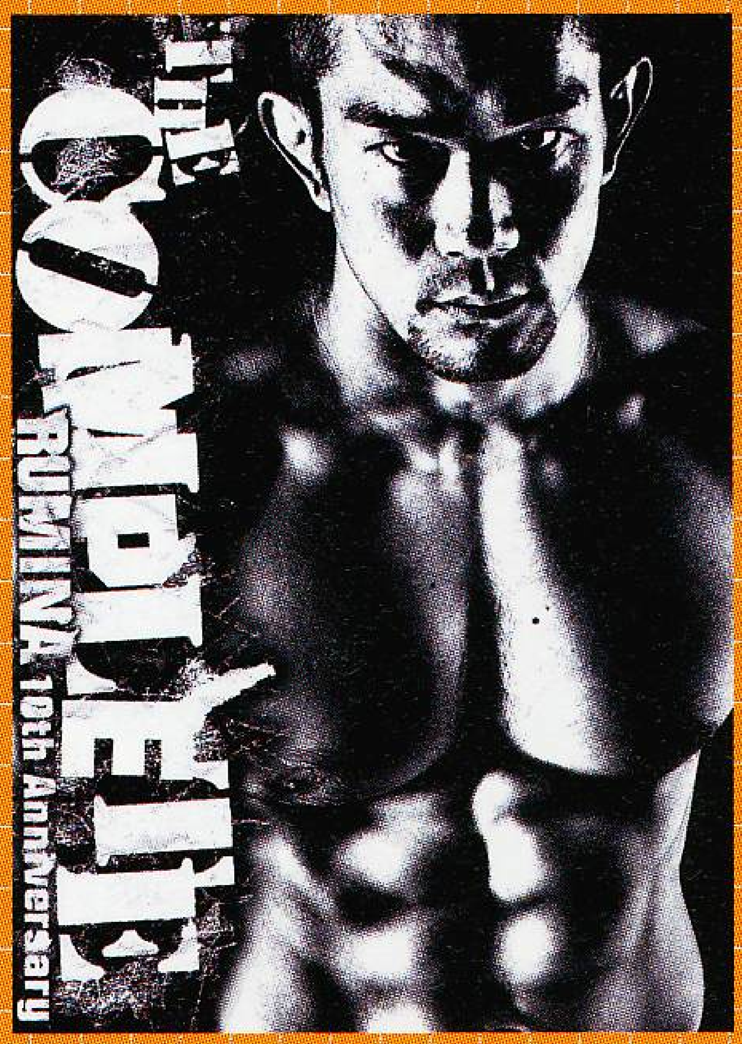
■応募方法
ハガキに、住所、氏名、年齢、職業、
電話番号、希望プレゼントを明記の上、
下記のアンケートを記入してご応募ください。

① ガチ!MAGAZINE vol.2の良かったところ3つ
② ガチ!MAGAZINE vol.2の悪かったところ1つ
③ 次に期待すること。やってほしい企画。
④ 好きな格闘家
⑤ 興味のある格闘家、ジム、国等

■宛先
〒162-0825 東京都新宿区神楽坂6-59
インフォレスト(株)
ガチマガジンプレゼント係

■締め切り
平成17年2月末消印有効

また、PC、携帯電話でご応募も出来ます。
http://www.infor.co.jp/bjj



10 12月18日発売 THE COMPLETE RUMINA~
10th Anniversary 1名様　提供：(株) クエスト



11 THE COMPLETE RUMINA
特製ステッカー　10名様　提供：(株) クエスト

QUEST 新作情報

※ご注文の際は、品番もしくは、DVDかVHSかを忘れずに明記して下さい。

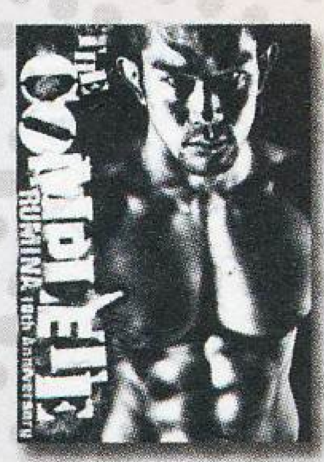
告知

●2005年1月20日発売予定新作DVD
- プロフェッショナル柔術　Gi-04/05　￥5,880
- 御舘透ジークンドー・トラッピングアートvol.2　￥5,040
- 初見良昭13 大光明祭2002十方折衝の術(仮)　￥5,880
- 小坂光之介 高専柔道～寝技の伝承～　￥5,880
- 天龍源一郎　怒の章　￥5,880

QUEST-DVD買うならココ！

— NEW —
- 千葉　タイムショック
千葉県柏市柏3-4-1石井ビル※柏駅東口すぐ

— 常備店 —
- 静岡　ブックセンターよむよむ浜松プラザフレスポ店
静岡県浜松市上西町1020-1浜松プラザフレスポ棟2F
053-411-6946　静岡地区初！
- 千葉　巴屋書店ショッピングセンターノア店
千葉県野田市中根新田鹿島原36-1ノア3F
047-125-8428(武神館シリーズ常備店)



12.18発売 THE COMPLETE RUMINA 10th Anniversary

[DVD]カラー240分／税込￥5,880／品番SPD-2315

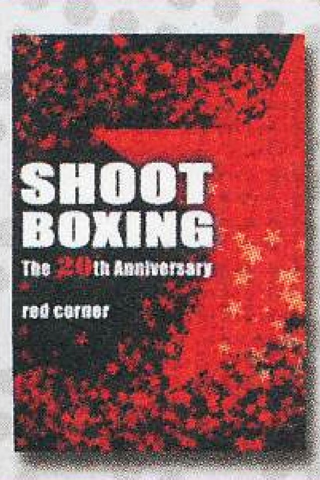
修斗のカリスマ・佐藤ルミナデビュー10周年記念作品。他の格闘競技をバックボーンに持たず、修斗のファイターとして純粋培養された彼は、将来を嘱望されたデビューから、瞬く間にトップランカーへと登り詰めた。数々の名勝負とともに、佐藤ルミナの歩みはそのまま修斗の歴史となる。貪欲に一本を狙うスタイルを貫き通し、彼はLiving Legend 生ける伝説として戦い続けている。プロデビュー戦となったマイケル・マコラフ戦から、2004年7月にバオ・クァーチ戦まで全31試合を収録。コンバット・レスリングや、デビュー前のアマチュア時代などの特典映像付き。



12.18発売 DESAFIO-2　2004.7.28ブラジル・サンパウロ

[DVD]カラー78分／税込￥5,880／品番SPD-2508

早川光由、中井祐樹、渡辺孝、福住慎祐、佐藤愛香、日本を代表する柔術家5人が、本場ブラジルのトップスターに挑んだ日本対ブラジル5対5マッチが実現。さらに、世界王者同士の激突ベジシュンボ対マカコ、ヘビー級4戦士によって争われたトーナメントなど、サンパウロを熱くさせた熱闘全10試合を収録。[収録試合]レオ・ヴィエイラvs福住慎祐、マリオ・ヘイスvs中井祐樹、ルシアーノ・ヌッチvs早川光由、ビビアーノ・フェルナンデスvs渡辺孝、レティシア・ヒベイロvs佐藤愛香、マカコvsベジシュンボ、ゴドイvsトッシィ、ゴドイvs上西など。



12.18発売 SHOOTBOXING The 20th Anniversary～RED CORNER～

[DVD]カラー240分／税込￥5,880／品番SPD-5303

シュートボクシングの設立20周年を記念した総集編の第2弾。吉鷹弘の引退から、緒方健一、土井広之らの台頭、そしてアンディ・サワーが連覇を果たした2004年S-CUPまで、20年間の闘いの中から、選び抜かれた名勝負を多数収録。シーザー武志会長をはじめ、土井、緒形、森谷、宍戸各選手への特別インタビュー、SBチャンピオン列伝、珍プレイ集など、おまけ映像もたっぷり。[収録試合]村濱vsチャモアペット、中村vs藤山、パリンヤーvs若宮、緒方vsバレンティーニ、吉鷹vsデッカー、森谷vs貝沼、土井vsドーソン、前田vs及川、サワーvs緒方、サワーvs土井、土井vs後藤、パルバーvs代、クラウスvsチャンプアック、カテウvs宍戸、宍戸vsサワーなど全21試合。



12.18発売 島田道男　太気拳

[DVD]カラー56分／税込￥5,880／品番SPD-6504

幻の太気の達人と呼ばれる島田道男。拳聖と呼ばれた故・澤井健一が生涯で唯一人、道場を出すことを許した弟子でありながら、あらゆる取材やメディアに背を向け、ひたすら修行の道に邁進してきた男が、初めてカメラの前に立った。武術としての実戦中国拳法。その真の姿、強さが、今、ここに明かされる。[収録内容]立禅・反応、爆発、這、揺、錬一錬の実践例、自由組手、崩拳、歩法、探手



12.18発売 大光明祭'98　神伝不動流八方秘剣

[DVD]カラー180分／税込￥5,880／品番SPD-7012

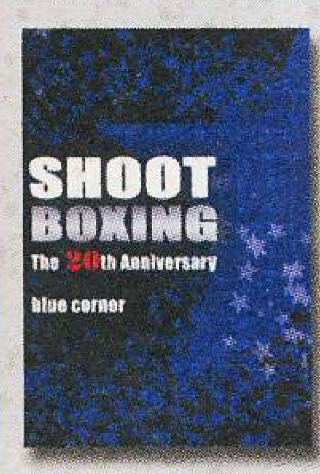
初見良昭宗家の誕生日にちなんで、一年の終わりに開催されるセミナー大光明祭。1998年のテーマは神伝不動流八方秘剣。剣の技術だけではなく、剣を使った体術、剣に対する体術など、神伝不動流の様々な技術を紹介。世界中から集まった高弟たちに対し、初見宗家は「最高の悟りを求めない。自然に対して逆らわない。ゆとりを求めよ。」「勝ち負けではなく、生きることが大事である。」と語り、奥義到達への道を示した。



SMACK GIRL 聖地凱旋　2004.8.5後楽園ホール

[DVD]カラー120分／税込￥3,990+送料￥500／品番SPD-2211

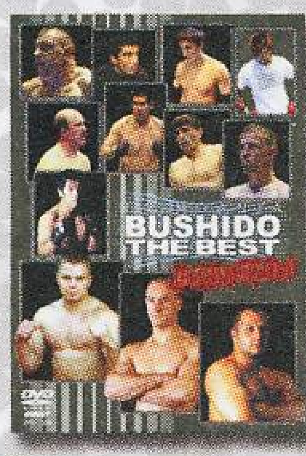
スマックガールが3年8カ月ぶりに聖地・後楽園ホールに帰ってきた。女王・辻結花が念願のグラウンド顔面パンチ有りルールで、エリカ・モントーヤと激突。女子格闘技史上に残る名勝負を繰り広げた。藤井恵は総合ルールに初挑戦で松本裕美と対戦。底力を見せつけた。記念すべきSMACK凱旋興行の全試合を収録。
[収録試合]ロイヤルスマック2004、ＡＫＩＮＯvsたま☆ちゃん、高橋洋子vs唯我、藤井恵vs松本裕美、辻　結花vsエリカ・モントーヤ、大室奈緒子＆内藤晶子vs羽柴まゆみ＆川江礼子、藪下めぐみ＆せり＆忍田なほみvs虎島尚子＆真武和恵＆端貴代、舞 vs 川畑千秋



SHOOTBOXING The 20th Anniversary Blue Corner

[DVD]カラー240分／￥5,880／品番SPD-5302

立ち技バーリトゥードの異名で知られるシュートボクシングの設立20周年を記念した総集編。シーザー武志によって作られたシュートボクシングは、その歴史の中で、大江慎、平直行、吉鷹弘、村濱武洋ら、歴史に残る名選手を次々と輩出してきた。20年間の闘いの中から、選び抜かれた名勝負を多数収録。[収録試合]シーザー武志vsパスン、大村vs大津、ロミサンvs平、三宅vs前田、シーザーvsマンソン、岩下vs西、クックvs平、鈴木vs大池、吉鷹vs阿部健一、岡本vs村濱、吉鷹vs大江、ボーウィーvsシムソン、吉鷹vs ロニー、村濱vsベラーニ、石本vs前川、龍己vs土井、吉鷹vsレーンボー、緒形vsデニー、シムソンvsオワリなど全30試合。



リトアニアBUSHIDO THE BEST

[DVD]カラー167分／税込￥5,880／品番SPD-1106

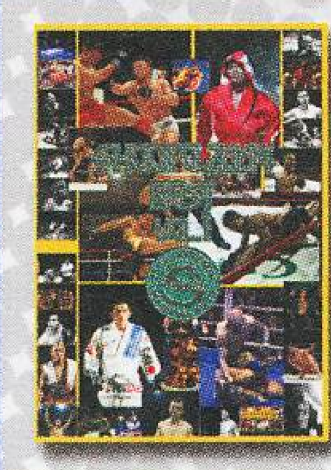
旗揚げから5周年を迎え、ロシア、ベラルーシ、ポーランド、スカンジナビア、そしてデンマーク、オランダへと、目覚ましい勢いで活動の拠点を広げているリトアニアのブシドー協会。日本にも、PRIDE、ZST、修斗のマットへ選手を次々と送り込み、その実力は驚異的成長を見せている。5年間にわたる活動の中から、ドナータス代表自らが選んだベストバウト、全23試合を収録。[主な収録試合]ジュスカヴィチュスvsアターエフ、ゴルボフスキスvsミーシャ、ヴァラヴィーチェスvsコピィロフ、ザザvsハン、横井宏孝vsスミルノヴァス、ミンダウガスvs小谷直之、ヴァラヴィーチェスvsヒョードル、所vsペトライティス、スミルノヴァスvsコマス等。



白蓮会館　柔法篇　～逆技の極意～

[DVD]カラー60分／税込￥5,880／品番SPD-1814

打撃でもなく、寝技でもない！少林寺拳法の秘伝をベースに杉原正康が自ら作り上げた逆技。それが白蓮会館の柔法である！
力と力の真正面からの激突を制するのが剛法ならば、柔法とは相手の力の方向をずらす、またはその力を利用して、相手を制するものである。掴み方、力の方向、身体の捌き方、すべてが一体となった時、どんなに力の強い相手でも、軽々と対処することができるようになる。杉原正康館長が工夫をこらして完成させた独自のテクニックを公開。力対力ではなく、技をもって力を制する秘技。



修斗 2004 BEST vol.1

[DVD]2枚組330分／税込￥7,980／品番SPD-2314

2004年修斗の上半期ベストバウト集。厳選されたベストバウト16試合に加え、超豪華特典として海外6カ国の名勝負18試合、さらに7.9ハワイ大会全試合収録の特典ディスク付き。空前絶後の超ボリュームでお腹一杯は確実！これであなたも修斗ジャンキー!?[収録試合]DISC.1 勝田vs石川、ロウロvs勝村、ホーキvs高谷、福本vs石田、菊地vsモーガン　、植松vsパルバー、川尻vs宇野、タクミvs中蔵、外薗vs大沢、戸井田vs風田、ルミナvsペトライティス、今泉vs秋本、マモルvs吉岡、パーリングvs高谷、植松vs門脇、松根vsリマ、他特典映像。DISC.2 クァーチvsルミナ、シャオリンvs石田、パーリングvsパルバー、須田vsデニス、シールズvsクーパー、他4試合。



全日本ライト級最強決定トーナメント2004

[DVD]カラー240分／税込￥5,880／品番SPD-5403

キック界に大きな反響を呼んだライト級トーナメントがさらにスケールアップ。全12名参加のサバイバルマッチに、あのサムゴーも緊急参戦。激戦を勝ち抜くのは誰だ！トーナメント全試合に加え、全日本キックを揺るがせたベストバウト10試合、映像特典として12.7後楽園ホールで行われた藤原&國奥vs宇野&小林戦を収録。[収録試合]白鳥vsサムゴー、サムゴーvsサトル、白鳥vs吉本、大月vsチェ、小林vsサトル、白鳥vs山本真弘、西山vs吉本、増田vs山本真弘、高谷vsサトル、西山vs湟川、凱斗vs吉本、佐藤vsクルーク、加藤vsスカボロスキー、大月vs藤牧、山内vs山本優弥、前田vs山本元気、小林vs吉本、加藤vs山本、花戸vsゴーンピポップ、藤原vs平谷、浜川vs加藤



龍飛雲　酔八仙拳

[DVD]カラー65分／税込￥5,880／品番SPD-6503

酔えば酔うほど強くなる!? 幻の中国拳法酔拳、その全貌に迫る。
酔ったふりをして相手を騙し、虚を突いて一撃必殺の強烈な打撃で倒す酔八仙拳。千鳥足で歩き、時には旋回したり、倒れたりと、まるで本当に酒に酔っているかのようにフラフラしながら敵を捌く。数多い中国拳法の中でも最も変則的でユニークな拳法であるが、その実体は、緩急に富み、剛・柔の両面を備え、足腰の強さとバランス、柔軟性などが要求される拳法である。八仙人すべての型と用法、そして奇抜な動きを生み出すあらゆる身法まで、酔八仙拳のすべてを龍飛雲老師が公開する。

通信販売お申し込み方法

★お求めはお近くの書店、レコード店、ビデオショップか直接当社にて。

1. 代金引換

a) 電話で申し込み(受付時間：平日10:00～18:00)
b) ファクシミリ、郵送で申し込み
c) メールでお申し込み
クエストのホームページ(http://www.queststation.com)に接続し、フォームに従って注文内容を入力。
※代引き手数料として一回につき¥315が商品代金に加算されます。
※注文内容の確認等のため、折り返しこちらからご連絡を差し上げる場合がございますので、連絡先の電話番号は必ずお知らせ下さい。
※勝手ながら、沖縄および離島にお住まいのお客様は、ご利用いただくことができません。ご了承下さい。

2.郵便振替

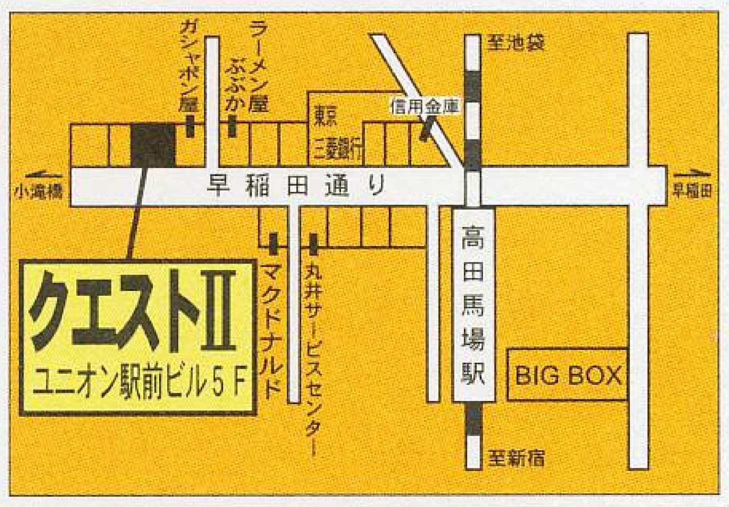
郵便局備え付けの郵便振替用紙にて、郵便局窓口でご送金下さい。 口座振替番号　00190-9-753158

3.現金書留

現金書留用封筒で郵便局よりお送り下さい。

※いずれの場合でも、住所、氏名、電話番号、商品名を必ず明記の上、お送り下さい。

格闘技&武道 VIDEO&DVDショップ **クエストⅡ**



●JR高田馬場駅から歩いて1分
●営業時間　月～金AM10:00～PM6:00
土・日・祭日休み

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場3-3-1 ユニオン駅前ビル5F　TEL.03-3360-3810 FAX.03-3366-7766
QUEST 株式会社クエスト
http://www.queststation.com　E-mail：shop@queststation.com

クエスト総合カタログをご希望の方は切手200円を同封のうえお申し込みください。
通販をお申し込みいただいた方にはもれなく差し上げています。



2005年1月15日発行 発行・発売／インフォレスト株式会社 〒162-0825 東京都新宿区神楽坂6-59 TEL.03-5229-4616（営業） 発行人／豊島誠志 編集人／沢田建

9784902566888

ISBN4-902566-88-5

C9476 ¥933E

1929476009333

定価980円 本体933円
雑誌60212-88